

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

—塩尻市内その2—

吉田川西遺跡

本文編

1989

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター



遺跡全景



SK 128



SK128出土 施釉陶器



SK128出土 八稜鏡



SB32・328



SB118・17



SB94・36



SB120・23



G・18



SD17・62



SB110・11



SB263・28



SD25・16



SK128・18



SD25・17



SK128・24



SB118・18



SK128・21



SX21出土 鞞文様



銅製品



輸入陶磁器



梅瓶（輸入陶磁器）

序

昭和59年度より同60年度にかけて調査を続けました、中央自動車道長野線用地塩尻市内20遺跡の中で、吉田川西遺跡は予想をはるかに越えて遺構・遺物の検出量が多く、整理作業は実に3年の歳月を要しました。

そのために、昭和62年度発刊ずみの他19遺跡とは区分して「塩尻市内その2」として、今回単独発刊することとしました。

吉田川西遺跡の位置を中央自動車道長野線に重ねてみますと、塩嶺トンネルをくぐり抜けた路線が、諏訪盆地と松本平とを分かち高ボッチ山塊西麓の台地にかかると、間もなく塩尻ICになります。ここから路線は松本平の沖積地に向かって下りはじめますが、低地に下り切ったあたりから、北アルプス連峰を車窓正面に見ながら真西に進み、一級河川田川を渡り塩尻北ICに向かう手前が吉田川西遺跡になります。

ところで、吉田川西遺跡につきましては、「現地説明会」や「長野県埋蔵文化財センター年報2」等で、その概要の一端を中間的に御紹介申し上げてまいりましたが、その後、竪穴住居址266軒をはじめとする遺構群や、完形土器約5000点とその他からなる豊富な遺物類の整理作業を通し、8～18世紀にかけてほぼ連続する集落跡であることを確認しました。これらを踏まえ本書を編むに当たり、在地富豪層の成長・在庁官人層の武士化、といった視点を通して、律令体制下における古代村落の解体と中世的秩序化へのあり方を、また、地侍からやがて庄屋クラスとみられる、いわば、中世から近世における村落指導者層のあり方を中心に、農村集落の復元に意を注いでまいりました。本書の編集にあたり記載記録すべきものは殆んどを録し終えたと判断しておりますが、今後のために大方の御意見、御指導を賜りますれば幸甚に存ずる次第であります。

おわりにあたり、発掘作業から本書発刊に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた、日本道路公団名古屋建設局、同松本工事事務所、長野県高速道局、同松本高速道事務所、地元塩尻市、地区用地被買収組合(者)等関係機関及び地元協力者並びに発掘・整理作業に従事協力された多くの方々、そして、この発掘調査を受託し適切な指導をされた長野県教育委員会文化課と、幾多の難問を乗り切り今日を迎えた当埋蔵文化財センター職員の労を犒い、感謝を申し上げる次第であります。

平成元年3月31日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 樋口太郎

例 言

- 1 本書は、中央自動車道長野線建設工事に関わる塩尻市内の遺跡のうちの、吉田川西遺跡の発掘報告書である。調査は長野県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局と委託契約後、(財)長野県埋蔵文化財センター(以下埋文センター)に県教委が再委託し実施したものである。調査の契約については、昭和62年度埋文センター刊行の「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」の中で詳しくふれてあるので参照されたい。
- 2 本書は本文編と図版編の2冊より構成されており、それぞれに目次が付く。
- 3 発掘調査は昭和59・60年度に実施し、整理作業は61～63年度まで行なった。その経過と体制については、第1章に記してある。
- 4 調査時及び、本書を作成するうえでの指導、助言者については第1章に記してある。また本文中では、多くの先学諸氏の研究の引用を行ってある。なおそれらの場合、敬称を略させていただいた。御了承願いたい。
- 5 発掘調査の記録、および出土遺物は、埋文センターが保管している。その際に用いる遺跡の略号は、「EKN」である。
- 6 本書の作成に関わる図面・遺物の整理は、埋文センター調査研究員および、その指導のもとに整理補助員があたった。
- 7 図版編に掲載の図の表現方法については、それに関連する本文編の項へ説明を付した。
- 8 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図(1:1000)、塩尻市発行の都市計画図(1:10000)をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の2万5千分の1および5万分の1地形図を使用した。
- 9 本遺跡調査によって得られた資料がきわめて多量であったことから、他の塩尻市内関係19遺跡報告とは分離し、本書を編んだ。そのため、埋文センターが今までに刊行した「岡谷市内」「塩尻市内その1」とは異なる編集となっている。
- 10 本書の作成は、調査研究員の異動、および発掘調査との兼ね合いなどから、十分な検討と調整の時間が取れず、記述の方針や方法に一貫していない部分が生まれた。その点について御了承願いたい。
- 11 本書の執筆分担は巻末に一括掲載した。
- 12 註、引用文献、参考文献は、各章あるいは節の末に一括掲載した。
- 13 本遺跡の概要および出土遺物については、機会を得て何回かの仮報告をしてきた。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本書をもって最終的な報告とする。
- 14 本文中で用いる古代の時期区分(1～14期)は、土器の変化に基づいている。土器の年代については、第7章第2節で詳述してあり、第337図に示してある。また土器の年代と時期区分の対比は、第107表に示した。

本文編目次

巻頭図版

序

例言

本文編目次

第1章 序説	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査と整理	
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 周辺の古代・中世遺跡	10
第3節 文献からみた周辺地域	15
第3章 層序	22
第4章 古代以前	24
第5章 古代	
第1節 遺構	
1 概観	
2 各説	
(1) 建物址	
ア 竪穴住居址 (SB)	25
イ 掘立柱建物址 (ST)	84
(2) 墓 (SK128、SM01)	89
(3) 溝址 (SD)	92
(4) その他の遺構 (SK、SH、SF、SX)	98
第2節 遺物	
1 概観	
2 各説	
(1) 土器	114
(2) 金属製品 (銭貨を含む)	168
(3) 鍛冶関係資料	190
(4) 文字関係資料	196
(5) 土製品	223
(6) その他	223

第3節 小結	
1 堅穴住居址	224
2 SK128をめぐる	233
3 SB32をめぐる	240
4 遺構の時期区分	244
第6章 中・近世	
第1節 遺構・遺物の概観	246
1 概観	
2 遺構と遺物の調査	
第2節 遺構	247
1 分類	
2 各説	
(1) 建物址 (ST、SB)	247
(2) 柵址 (SA)	257
(3) 溝址 (SD、NR)	257
(4) 火葬関係遺構 (SM、SK)	260
(5) 井戸址 (SE)	261
(6) その他の遺構 (SK)	261
第3節 遺物	269
1 概観	
2 各説	273
(1) 焼物	
(2) 石製品	
第4節 小結	284
1 中世以降の焼物	
2 中世以降の建物	
3 中世以降の集落景観	
第7章 成果と課題	
第1節 古代集落景観の変遷	292
第2節 吉田川西遺跡にみられる食器の変容	300
第3節 金属製品と鍛冶資料	336
第4節 墨書土器	370
第5節 平安時代末期から鎌倉時代の土器皿	396
第8章 吉田川西遺跡の歴史的特質	400
第9章 結語	410

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|------------------------|------|-----------------|
| 第1図 | 大地区設定及びグリッド設定図 | 第43図 | SB58 |
| 第2図 | トレンチ配置図および土層模式図 | 第44図 | SB63 |
| 第3図 | 松本盆地南部の地形区分(約1:240000) | 第45図 | SB64 |
| 第4図 | 塩尻市東部の地質図 | 第46図 | SB66カマド |
| 第5図 | 古代・中世遺跡分布図(1:50000) | 第47図 | SB66 P 1 遺物出土状態 |
| 第6図 | 倭名類聚鈔記載の郷の分布予想 | 第48図 | SB69分布 |
| 第7図 | 鎌倉時代の公領、荘園の分布 | 第49図 | SB69 |
| 第8図 | 中山道三宿助郷村分布図 | 第50図 | SB72カマド |
| 第9図 | 層序模式図 | 第51図 | SB73 |
| 第10図 | 土層分布図(1:2000) | 第52図 | SB74 |
| 第11図 | 石器分布図 | 第53図 | SB74カマド |
| 第12図 | SB02 | 第54図 | SB78カマド |
| 第13図 | SB04 | 第55図 | SB80 |
| 第14図 | SB05土器集中区遺物分布 | 第56図 | SB81 |
| 第15図 | SB06 | 第57図 | SB81カマド |
| 第16図 | SB13 | 第58図 | SB84 |
| 第17図 | SB14 | 第59図 | SB86 |
| 第18図 | SB15床下土壌 | 第60図 | SB86カマド |
| 第19図 | SB16遺物出土状態 | 第61図 | SB88 |
| 第20図 | SB19 | 第62図 | SB94 |
| 第21図 | SB22カマド | 第63図 | SB94床下土壌 |
| 第22図 | SB27カマド | 第64図 | SB95 |
| 第23図 | SB28カマド | 第65図 | SB99 |
| 第24図 | SB28 | 第66図 | SB101 |
| 第25図 | SB29遺物分布及び覆土中炭化物分布 | 第67図 | SB102遺物集中区 |
| 第26図 | SB30カマド | 第68図 | SB103 |
| 第27図 | SB30 P 2 | 第69図 | SB108 |
| 第28図 | SB32石組(1:40) | 第70図 | SB110遺物出土状態 |
| 第29図 | SB36炭化材分布 | 第71図 | SB111 |
| 第30図 | SB36南壁直立炭化材 | 第72図 | SB114 |
| 第31図 | SB37カマド | 第73図 | SB115 |
| 第32図 | SB37 | 第74図 | SB116カマド |
| 第33図 | SB43 | 第75図 | SB116 |
| 第34図 | SB43カマド | 第76図 | SB118 |
| 第35図 | SB43焼土充填ピット | 第77図 | SB122カマド |
| 第36図 | SB45 | 第78図 | SB128カマド |
| 第37図 | SB45カマド | 第79図 | SB129カマド周辺遺物分布 |
| 第38図 | SB48 | 第80図 | SB130カマド |
| 第39図 | SB49 | 第81図 | SB132カマド |
| 第40図 | SB50カマド | 第82図 | SB133 |
| 第41図 | SB51カマド | 第83図 | SB137カマド |
| 第42図 | SB52カマド | 第84図 | SB139カマド |

- 第85図 SB140カマド
 第86図 SB141カマド周辺出土遺物分布
 第87図 SB142
 第88図 SB144カマド周辺遺物分布
 第89図 SB150
 第90図 SB156カマド及びカマド出土土器拡大
 第91図 SB159カマド
 第92図 SB160
 第93図 SB160カマド
 第94図 SB164
 第95図 SB166
 第96図 SB167
 第97図 SB168カマド
 第98図 SB172
 第99図 SB175カマド
 第100図 SB178
 第101図 SB183
 第102図 SB184
 第103図 SB187
 第104図 SB187カマド
 第105図 SB188カマド
 第106図 SB189
 第107図 SB191カマド
 第108図 SB193カマド周辺遺物分布
 第109図 SB196
 第110図 SB200カマド
 第111図 SB201カマド周辺遺物分布
 第112図 SB202
 第113図 SB204カマド
 第114図 SB209
 第115図 SB210
 第116図 SB213カマド
 第117図 SB214カマド
 第118図 SB215カマド周辺遺物分布
 第119図 SB216
 第120図 SB220カマド
 第121図 SB222
 第122図 SB226カマド
 第123図 SB227カマド
 第124図 SB230カマド
 第125図 SB232
 第126図 SB234カマド及び支脚封鎖状況
 第127図 SB240ピット内土器出土状況(1:40)
 第128図 SB242カマド
 第129図 SB246
 第130図 SB246カマド
 第131図 SB249カマド
 第132図 SB250カマド
 第133図 SB256カマド
 第134図 SB257カマド
 第135図 SB258
 第136図 SB262ピット内出土遺物
 第137図 SB264カマド
 第138図 ST201・202(1:80)
 第139図 ST203(1:80)
 第140図 ST204(1:80)
 第141図 ST205(1:80)
 第142図 ST206(1:80)
 第143図 ST207(1:80)
 第144図 ST208(1:80)
 第145図 S地区柱穴群(1:240)
 第146図 O地区北東部柱穴群(1:240)
 第147図 N地区中部柱穴群(1:240)
 第148図 SK128
 第149図 SK128
 第150図 SM01(1:20)
 第151図 O・N地区溝配置(1:800)
 第152図 SD10・25断面(1:80)
 第153図 SD18断面(1:80)
 第154図 SD23断面(1:80)
 第155図 SD07断面(1:80)
 第156図 SD28断面(1:80)
 第157図 SD06断面(1:80)
 第158図 SD22断面(1:80)
 第159図 SD17断面(1:80)
 第160図 SD08断面(1:80)
 第161図 SD11断面(1:80)
 第162図 O・N地区溝の変遷(1:900)
 第163図 調査区西部溝配置(1:800)
 第164図 SD03断面(1:80)
 第165図 SD14断面(1:80)
 第166図 SD27断面(1:80)
 第167図 SK06(1:40)
 第168図 SK15(1:40)
 第169図 SK21(1:40)
 第170図 SK25(1:40)
 第171図 SK26(1:40)
 第172図 SK34(1:40)
 第173図 SK43(1:40)
 第174図 SK60(1:40)

- 第175図 SK73 (1 : 40)
- 第176図 SK84 (1 : 40)
- 第177図 SK97 (1 : 40)
- 第178図 SK107 (1 : 40)
- 第179図 SK115 (1 : 40)
- 第180図 SK118 (1 : 40)
- 第181図 SK122 (1 : 40)
- 第182図 SK137 (1 : 40)
- 第183図 SK149 (1 : 40)
- 第184図 SK204 (1 : 40)
- 第185図 SK211 (1 : 40)
- 第186図 SK218 (1 : 40)
- 第187図 SK221 (1 : 40)
- 第188図 SK259 (1 : 40)
- 第189図 SK325断面 (1 : 40)
- 第190図 SF02 (1 : 40)
- 第191図 SF03 (1 : 40)
- 第192図 SH01 (1 : 40)
- 第193図 SH02 (1 : 40)
- 第194図 SX20 (1 : 40)
- 第195図 SX21 (1 : 40)
- 第196図 SK 断面模式図
- 第197図 食膳具器種分類 (1 : 4)
- 第198図 煮炊具器種分類 (1 : 4)
- 第199図 SB04土師器杯A法量分布
- 第200図 SB05土師器杯A法量分布
- 第201図 SB13土師器杯A法量分布
- 第202図 SB15土師器杯A法量分布
- 第203図 SB19土師器杯A法量分布
- 第204図 SB28土師器杯A法量分布
- 第205図 SB29土師器杯A法量分布
- 第206図 SB30土師器杯A法量分布
- 第207図 SB31土師器杯A法量分布
- 第208図 SB32土師器杯A法量分布
- 第209図 SB37土師器杯A法量分布
- 第210図 SB43土師器杯A法量分布
- 第211図 SB47土師器杯A法量分布
- 第212図 SB52土師器杯A法量分布
- 第213図 SB58土師器杯A法量分布
- 第214図 SB59土師器杯A法量分布
- 第215図 SB63土師器杯A法量分布
- 第216図 SB66土師器杯A法量分布
- 第217図 SB74土師器杯A法量分布
- 第218図 SB80土師器杯A法量分布
- 第219図 SB81土師器杯A法量分布
- 第220図 SB84土師器杯A法量分布
- 第221図 SB88土師器杯A法量分布
- 第222図 SB94土師器杯A法量分布
- 第223図 SB96土師器杯A法量分布
- 第224図 SB99土師器杯A法量分布
- 第225図 SB102杯A法量分布
- 第226図 SB103杯A法量分布
- 第227図 SB108黒色土器A杯A法量分布
- 第228図 SB109土師器杯A法量分布
- 第229図 SB111杯A法量分布
- 第230図 SB114土師器杯A法量分布
- 第231図 SB115土師器杯A法量分布
- 第232図 SB116土師器杯A法量分布
- 第233図 SB118土師器杯A法量分布
- 第234図 SB120土師器杯A法量分布
- 第235図 SB129土師器杯A法量分布
- 第236図 SB132土師器杯A法量分布
- 第237図 SB141土師器杯A法量分布
- 第238図 SB142土師器杯A法量分布
- 第239図 SB144杯A法量分布
- 第240図 SB159土師器杯A法量分布
- 第241図 SB160土師器法量分布
- 第242図 SB167土師器杯A法量分布
- 第243図 SB184杯A法量分布
- 第244図 SB184土師器杯A法量分布
- 第245図 SB191土師器杯A法量分布
- 第246図 SB196杯A法量分布
- 第247図 SB216土師器杯A法量分布
- 第248図 SB226杯A法量分布
- 第249図 SB232土師器杯A法量分布
- 第250図 SB234杯A法量分布
- 第251図 SB256土師器杯A法量分布
- 第252図 SB258須恵器杯A法量分布
- 第253図 SB263土師器杯A法量分布
- 第254図 SK128土師器杯A法量分布
- 第255図 SD17土師器杯A法量分布
- 第256図 SK122土師器杯A法量分布
- 第257図 SK204杯A法量分布
- 第258図 SK218土師器杯A法量分布
- 第259図 SX21土師器杯A法量分布
- 第260図 金属器凡例
- 第261図 竪穴住居址の形態とその変遷
- 第262図 竪穴住居形態とカマドの位置、時期別軒数変化
- 第263図 床面の構造

- 第264図 貯蔵坑及びそれに類したピットの設置された住居址軒数
- 第265図 テラス（ベッド状遺構）のある住居址軒数
- 第266図 県内出土墓壇
- 第267図 SB32カマド（1：20）
- 第268図 SB32食器列（1：40）
- 第269図 ST2004（1：80）
- 第270図 ST2001（1：80）
- 第271図 ST2002（1：80）
- 第272図 ST02（1：80）
- 第273図 ST05、SB1213（1：80）
- 第274図 ST10（1：80）
- 第275図 ST11・12（1：80）
- 第276図 ST13・14（1：80）
- 第277図 ST15（1：80）
- 第278図 ST16～18（1：80）
- 第279図 ST19（1：80）
- 第280図 ST01（1：80）
- 第281図 ST03（1：80）
- 第282図 柱穴群の分布（1：600）
- 第283図 SD02断面（1：40）
- 第284図 SD21断面（1：40）
- 第285図 SD04断面（1：40）
- 第286図 SD05断面（1：40）
- 第287図 SD15断面（1：40）
- 第288図 SD16断面（1：40）
- 第289図 SD30断面（1：40）
- 第290図 SD32断面（1：40）
- 第291図 NR04断面（1：40）
- 第292図 NR06、SD2015断面（1：40）
- 第293図 SD2016断面（1：40）
- 第294図 火葬関係遺構（1：60）
- 第295図 その他の遺構1（1：60）
- 第296図 その他の遺構2（1：60）
- 第297図 その他の遺構3（1：60）
- 第298図 中世遺物図版凡例
- 第299図 中・近世焼物出土分布1
- 第300図 中・近世焼物出土分布2
- 第301図 中・近世焼物出土分布3
- 第302図 中・近世焼物出土分布4
- 第303図 遺構と遺物の分布1（1：1600）
- 第304図 遺構と遺物の分布2（1：1600）
- 第305図 時期別遺構分布1（1：1600）
- 第306図 時期別遺構分布2（1：1600）
- 第307図 時期別遺構分布3（1：1600）
- 第308図 時期別遺構分布4（1：1600）
- 第309図 時期別遺構分布5（1：1600）
- 第310図 杯Aの土器構成の変化
- 第311図 土師器杯A法量の変遷
- 第312図 杯Aの変遷1（1：4）
- 第313図 杯Aの変遷2（1：4）
- 第314図 椀の変遷（1：4）
- 第315図 椀Cの変遷（1：4）
- 第316図 皿B（1：4）
- 第317図 土師器皿A（1：4）
- 第318図 盤Bの変遷（1：4）
- 第319図 器種消長（1：8）
- 第320図 住居址別食膳具の土器種類別量の変化
- 第321図 長胴甕（1：6）
- 第322図 長胴甕A法量分布
- 第323図 小型甕（1：6）
- 第324図 小型甕法量分布
- 第325図 羽釜・甑（1：6）
- 第326図 羽釜・甑法量分布
- 第327図 灰釉陶器1（1：3）
- 第328図 灰釉陶器2（1：3）
- 第329図 灰釉陶器3・山茶碗（1：3）
- 第330図 灰釉陶器皿出土割合の変遷
- 第331図 緑釉陶器・輸入陶磁器の搬入状況
- 第332図 緑釉陶器1（1：3）
- 第333図 緑釉陶器2（1：3）
- 第334図 自磁碗分類（1：4）
- 第335図 越州窯系青磁碗・白磁鉢（1：3）
- 第336図 白磁皿（1：3）
- 第337図 杯A段階区分の年代
- 第338図 鎌分類（1：3）
- 第339図 時期別の各分類鎌の分布状況
- 第340図 時期別・分類別鎌身部の大きさ
- 第341図 SB10鎌出土状態（1：2）
- 第342図 特殊鎌（1：2）
- 第343図 紡錘車輪部の径と重量の分布
- 第344図 刀子分類図（1：3）
- 第345図 刀子身部長と基部幅の相関
- 第346図 刀子の時期別・分類別出土状況
- 第347図 鉄鏃分類（1：3）
- 第348図 鉄鏃の時期別・分類別出土状況
- 第349図 釘の分類別出土比率
- 第350図 古代遺構出土釘の分類別大きさ
- 第351図 近世遺構出土釘の分類別大きさ
- 第352図 鍔の逆U字状金具の比較（1：4）

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|--|
| 第353図 | 金属製品の出土比率 | 第369図 | 篋書・刻書土器時期別出土数 |
| 第354図 | 時期別金属製品出土軒数 | 第370図 | 長野県内墨書土器出土遺跡分布 |
| 第355図 | 金属器の器種別・時期別出土状況 | 第371図 | 南信地方の墨書土器 |
| 第356図 | 鍛冶関係資料出土状況 | 第372図 | 中信地方の墨書土器 |
| 第357図 | 墨書が施される土器の種類 | 第373図 | 北信地方の墨書土器 |
| 第358図 | 墨書が施される器種 | 第374図 | 東信地方の墨書土器 |
| 第359図 | 墨書が施される部位 | 第375図 | 古代の遺跡分布と遺跡の継続 |
| 第360図 | 墨書の向き | 第376図 | 4期の遺構分布(1:1600) |
| 第361図 | 墨書土器の時期別出土数の変化 | 第377図 | 6期の遺構分布(1:1600) |
| 第362図 | 墨書土器・転用硯出土遺構数 | 第378図 | 7～9期の遺構分布(1:1000) |
| 第363図 | 墨書が施される焼物と器形の推移 | 第379図 | 7～9期の遺構と朱墨パレット・緑釉陶器・
輸入陶磁器の分布(1:1600) |
| 第364図 | 転用硯時期別出土数及び遺構数 | 第380図 | 12期の集落 |
| 第365図 | 4期の遺構と墨書土器(1:1600) | 第381図 | 13期の遺構分布(1:1000) |
| 第366図 | 字句の部位と向き | 第382図 | 白磁碗の分布と13期の遺構分布 |
| 第367図 | 6期の遺構と墨書土器(1:1600) | | |
| 第368図 | 7期の遺構と墨書土器(1:1600) | | |

挿 表 目 次

- | | | | |
|------|-------------|------|-------------|
| 第1表 | 遺跡地名表 | 第22表 | SB44出土土器の構成 |
| 第2表 | 高出組村々の人口と村高 | 第23表 | SB48出土土器の構成 |
| 第3表 | SK一覧表 | 第24表 | SB49出土土器の構成 |
| 第4表 | 器種分類表 | 第25表 | SB52出土土器の構成 |
| 第5表 | SB01出土土器の構成 | 第26表 | SB58出土土器の構成 |
| 第6表 | SB03出土土器の構成 | 第27表 | SB59出土土器の構成 |
| 第7表 | SB04出土土器の構成 | 第28表 | SB63出土土器の構成 |
| 第8表 | SB05出土土器の構成 | 第29表 | SB66出土土器の構成 |
| 第9表 | SB06出土土器の構成 | 第30表 | SB72出土土器の構成 |
| 第10表 | SB13出土土器の構成 | 第31表 | SB73出土土器の構成 |
| 第11表 | SB14出土土器の構成 | 第32表 | SB74出土土器の構成 |
| 第12表 | SB15出土土器の構成 | 第33表 | SB77出土土器の構成 |
| 第13表 | SB19出土土器の構成 | 第34表 | SB80出土土器の構成 |
| 第14表 | SB21出土土器の構成 | 第35表 | SB81出土土器の構成 |
| 第15表 | SB28出土土器の構成 | 第36表 | SB83出土土器の構成 |
| 第16表 | SB29出土土器の構成 | 第37表 | SB84出土土器の構成 |
| 第17表 | SB30出土土器の構成 | 第38表 | SB85出土土器の構成 |
| 第18表 | SB31出土土器の構成 | 第39表 | SB86出土土器の構成 |
| 第19表 | SB32出土土器の構成 | 第40表 | SB87出土土器の構成 |
| 第20表 | SB37出土土器の構成 | 第41表 | SB88出土土器の構成 |
| 第21表 | SB43出土土器の構成 | 第42表 | SB91出土土器の構成 |

第43表	SB93出土土器の構成	第84表	SB248出土土器の構成
第44表	SB94出土土器の構成	第85表	SB249出土土器の構成
第45表	SB95出土土器の構成	第86表	SB256出土土器の構成
第46表	SB96出土土器の構成	第87表	SB258出土土器の構成
第47表	SB99出土土器の構成	第88表	SB259出土土器の構成
第48表	SB102出土土器の構成	第89表	SB263出土土器の構成
第49表	SB103出土土器の構成	第90表	SB264出土土器の構成
第50表	SB108出土土器の構成	第91表	SK204出土土器の構成
第51表	SB109出土土器の構成	第92表	SK218出土土器の構成
第52表	SB111出土土器の構成	第93表	SX21出土土器の構成
第53表	SB114出土土器の構成	第94表	遺構出土の金属器一覧
第54表	SB115出土土器の構成	第95表	II層出土の金属器一覧
第55表	SB116出土土器の構成	第96表	I層出土の金属器一覧
第56表	SB118出土土器の構成	第97表	近世遺構出土の金属器一覧
第57表	SB120出土土器の構成	第98表	銭貨一覧
第58表	SB124出土土器の構成	第99表	遺構出土の羽口一覧
第59表	SB129出土土器の構成	第100表	遺構出土の鉄滓一覧
第60表	SB132出土土器の構成	第101表	砥石一覧
第61表	SB135出土土器の構成	第102表	墨書土器一覧
第62表	SB139出土土器の構成	第103表	刻書土器一覧
第63表	SB140出土土器の構成	第104表	篋書土器一覧
第64表	SB141出土土器の構成	第105表	転用硯一覧
第65表	SB142出土土器の構成	第106表	長野県内の平安時代土壙墓
第66表	SB144出土土器の構成	第107表	遺構時期区分
第67表	SB159出土土器の構成	第108表	中・近世 SK 一覧
第68表	SB160出土土器の構成	第109表	緑釉陶器の分類
第69表	SB164出土土器の構成	第110表	遺構出土の緑釉陶器
第70表	SB167出土土器の構成	第111表	遺構外出土の緑釉陶器
第71表	SB172出土土器の構成	第112表	遺構出土の輸入陶磁器
第72表	SB174出土土器の構成	第113表	遺構外出土の輸入陶磁器
第73表	SB183出土土器の構成	第114表	灰釉陶器・山茶碗編年対比表
第74表	SB184出土土器の構成	第115表	金属器の出土状況
第75表	SB187出土土器の構成	第116表	鎌の分類
第76表	SB189出土土器の構成	第117表	紡錘車出土状況
第77表	SB191出土土器の構成	第118表	頭部形状からみた釘の分類
第78表	SB199出土土器の構成	第119表	調査資料の概要
第79表	SB216出土土器の構成	第120表	鉄素材および鉄器の化学組成
第80表	SB226出土土器の構成	第121表	鉄滓の化学組成(%)と分類
第81表	SB227出土土器の構成	第122表	墨書土器の出土数・保有指数
第82表	SB232出土土器の構成	第123表	長野県内出土の墨書土器
第83表	SB234出土土器の構成	第124表	長野県内出土の刻書・篋書土器



第1章 序 説

第1節 調査に至る経過

中央自動車道長野線は中央自動車道西宮線より岡谷市で分岐し北上し、更埴市で関越自動車道上越線と合流する。用地内の埋蔵文化財包蔵地の調査は、財団法人長野県埋蔵文化財センター(以下埋文センター)が行っており、昭和57年の岡谷市内を皮切りに現在も続けられている。

吉田川西遺跡は従来より知られており、長野県埋蔵文化財包蔵地番号5041(2)で縄文時代中期の土器や、弥生時代の大型蛤刃石斧・石包丁、平安時代の土師器・須恵器の出土があったとされている。また、中央自動車道長野線に伴う圃場整備事業の際にも周辺より遺物が発見された。昭和58年に長野県教育委員会文化課、塩尻市教育委員会、日本道路公団、埋文センターの四者によって現地踏査がなされ、その際に調査範囲が確定され、対象面積は25,100m²となった。

調査は当初、昭和59年4月より行う予定であったが、買収の遅れや耕作の継続等から、予定より遅れ、8月より行うこととなった。6月、7月には調査の概要についての地元での説明会を行ない、諸々の協力を要請した。また、7月に器材準備、作業員の募集を行い、発掘調査実施の運びとなった。

第2節 調査と整理

1 発掘調査

(1) 調査の方法

ア トレンチ調査

はじめに遺物の包含層や遺跡の埋没状況の把握と、遺構の分布を確認するため、座標に沿い巾2mのトレンチを用地内調査対象区域に50m間隔で南北に設定し、人力により掘り下げた。その総延長は1,250mに及んだ。土層の分層は層位学的区分を優先し、大きくはI層(耕土)、II層、III層(基盤砂礫層)と分け、層の面的な広がりをつかんだ。

イ 面的調査

トレンチ調査の成果をもとに、面的調査を行った。表土(現耕土)剥ぎには薄い部分を除き重機を用い、以下は手作業とした。遺構の検出までは主としてジョレンを用い、精査の際には移植ゴテや両刃鎌を用いた。

ウ 遺構の調査

遺構の調査は先行トレンチを入れ土層の状況を確認したのち、面的に掘り下げるという一般的な方法に依っている。遺構の名称については検出時に与えるため、遺構の性格まで考慮した名称を与えるのには無理があり、略号を用いた。略号は岡谷地区で使用したものをを用いたが、一部SM(墓址)、ST(掘立柱建物址)を追加した。

エ 遺物の取り上げ

包含層の出土遺物は、グリット別、層位別に取り上げた。遺構内遺物については、必要なものは出土地点の座標、層位、標高を記録して取り上げ、必要に応じ図化、写真撮影も行った。

オ 測量の方法

基準点は、日本道路公団の工事用杭 STA164+00(第Ⅷ系 X=18218.8184 Y=-48158.0341)を調査用基準杭とし、他の複数の工事用杭 (STA164+60、164+80) の座標値から座標北を算出し、STA16400を NS=0 EW=0 とし、測量を行っている。また、標高も同様に標高値のある工事用杭 STA164+00 (標高639.821m) を基準点として用いた。

さらに、調査の便をはかるため、STA164+00を基準とし基準線を軸に50m 方眼の大地区を設定し、大地区内を2 m 方眼に区切ってグリットとし、大地区名は西北から東南にかけてA・B・C……と命名した。グリットは大地区の西北隅を基点としY軸方向をA~Y、X軸方向を1~25として両者を合わせてグリット名とした(第1図)。測量の基準点の50m メッシュは、昭和59年度は調査研究員が行い、昭和60年度は測量業者に委託した。

遺構の測量と遺物の地点計測は遣り方測量に依った。水糸は4 m メッシュとした。遺物の出土状況図および遺構図の作成は、調査研究員およびその指導のもとに作業員が行い、一部遺構図の作成には航空測量を用いた。測量の縮尺は1/20を原則とし、必要に応じて1/40、1/10の縮尺を用いた。航空測量については、すべて1/20の縮尺である。

カ 写真の方法

撮影にはマミヤRB 6×7、ニコンFM を併用した。ともにモノクロネガとカラースライドを撮影してある。遺構や景観の撮影は調査研究員が行い、航空写真は業者に委託した。

(2) 調査の経過

ア 昭和59年度

調査期間 8月1日~11月29日

体制 事務局長 山崎 昭三

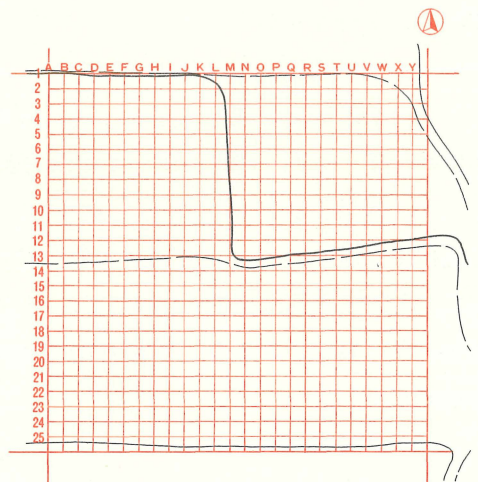
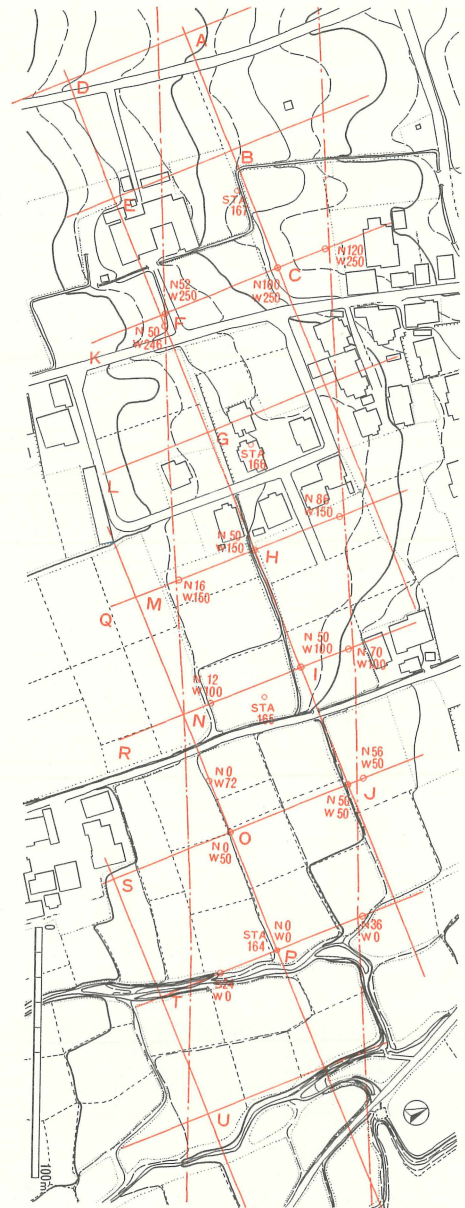
庶務部長 堀内 計人

調査第一部長 河西 清光

調査第二部長 春原 正毅

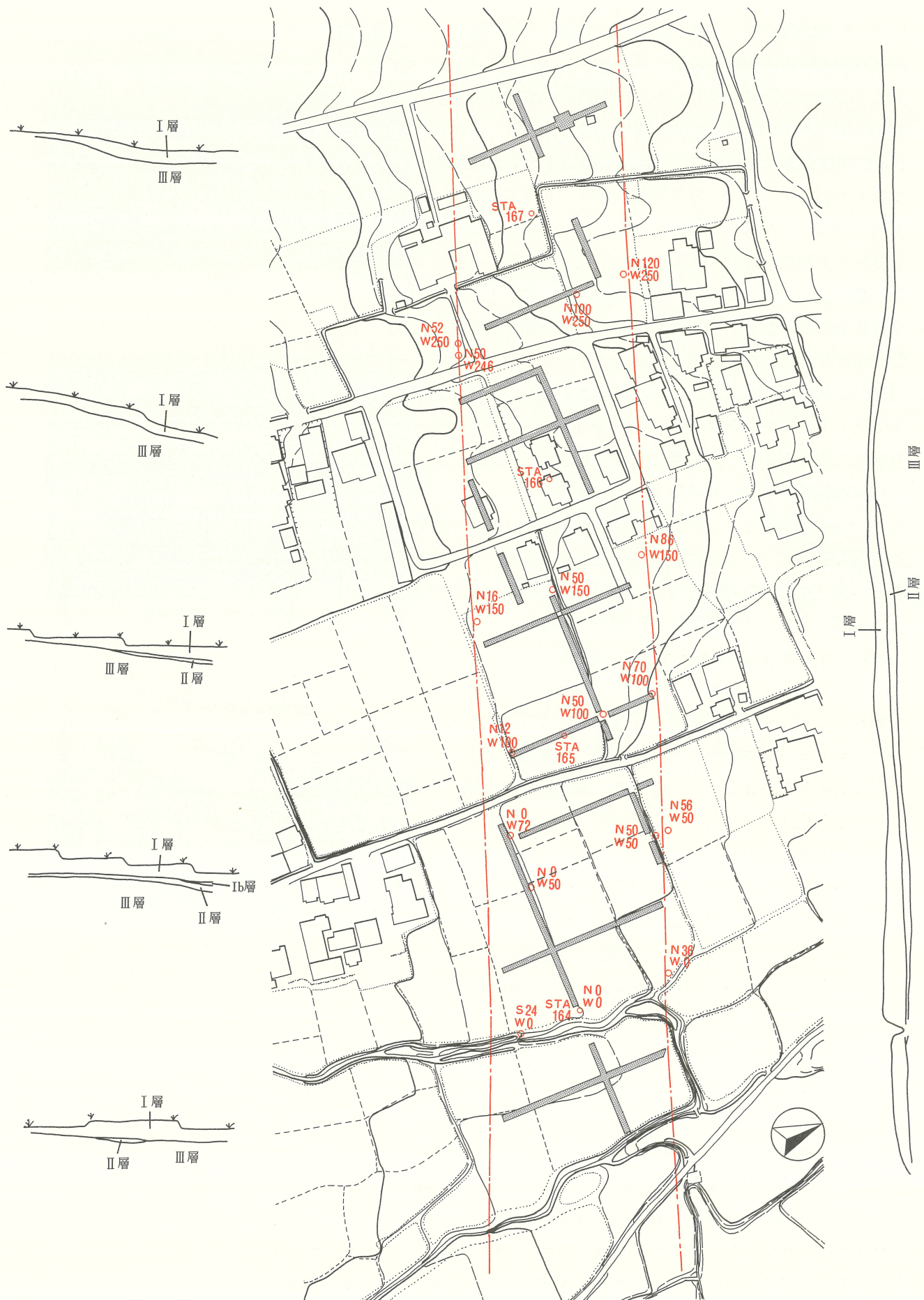
調査研究員 原 明芳、小林 至、
青柳 英利、小松 望、
井口 慶久、田中正治郎

8月1日より調査がはじまり、調査区全体に大地区の標準杭を設定し、8月7日より本格的調査にはいる。トレンチ調査を9月までに行い層位の確認と、遺構の分布を調査する(第2図)。この時点でA・B・D・E地区については包含層、遺構ともに存在しておらず、さらに確認のためトレンチを入れるが、状況は変わらず、この4地区については、面的な調査に移らないことと



例 O地区

第1図 大地区設定及びグリット設定図



第2図 トレンチ配置および土層模式図 (長さ1:2000 深さ1:200)

した。それ以外については、遺構と包含層が存在することから面的な調査に移ることとした。9月よりP地区およびT地区の面的な調査をはじめ。耕土(現水田)を重機により剥いだ後、遺構の検出に移る。遺構の数が少なく、それもP地区西側に集中するため、遺跡の東端はP・T地区であることが確認された。この部分の調査は、9月一杯で終了する。この時点でR・S地区の路線に沿った南端に10m巾で都市下水道の設置がされることになり、塩尻市水道局より早期調査の要請があった。そこで協議の結果、その部分を11月までに調査をすることになった。この部分の調査は重機で表土剥ぎを行った後、遺構検出を行う。途中調査研究員が3名増加し6名となり、遺構の調査を行い、11月30日に終了する。この間にN地区の表土剥ぎも並行して行う。

なお、12月2日(日)に現地説明会を行なうが、関心が高く一般参加者263名であった。

イ 昭和60年度

調査期間 4月22日～12月20日

体制 事務局長 西沢 宣利

総務部長 堀内 計人

調査第一部長 樋口 昇一

調査第二部長 丸山 徹一郎

調査第三部長 春原 正毅

調査研究員 原 明芳、

小松 望、市川 隆之、寺内 隆夫、

金原 正、青柳 英利、北原 正治、

伊藤 隆之、三上 徹也、百瀬 久雄、

関 全寿、福島 厚利、鈴木 道穂、

黒岩 龍也、寺島 俊郎、田中正治郎、

唐木 孝雄、小松 宏昭、遠山 芳彦、

小林 俊一、高野 博正、綿田 弘美



調査風景



吉田小学校六年生見学



吉村知事視察

4月22日より器材の運搬をはじめ、4月30日より調査を開始した。前年度トレンチ調査ができなかった、F・G・K・L地区について行った。この部分は耕土が薄く包含層は存在しないが、遺構が濃密に分布することを確認する。このトレンチ調査の結果、遺跡の西端をおさえることができた。それに平行してN・O地区の重機による表土剥ぎを行い、5月中頃より検出作業にはいる。この時点で、検出面が中世の遺構と古代の遺構とでは異なることがわかり、II層上面で全体を広げ、中世の遺構を検出調査した。それが終了した段階で古代の遺構の検出に移った。古代の遺構は重複が激しく、検出作業が難航し、7月中頃までかかる。その後、遺構の調査にはいる。この部分の調査は12月中頃まで継続した。さらに、都市下水道が西に延長されることになり、用地内の南端部分の調査が急がれることとなった。そのため8月中頃より重機による表土剥ぎ作業を行い、引き続き検出作業に移る。9月になり調査研究員、作業員が増員され、F・G・H・K・L・M地区全体の検出作業にはいる。H地区では当初予想をしていなかった近世の遺構が耕土直下

に発見され、調査を行った。10月下旬に下水道部分の調査が終了し、その部分を引き渡す。11月にはいり、全体にわたり遺構の精査にはいり、途中工事用道路部分の先行調査等があったが、12月20日をもって調査を終了する。

なお、12月15日（日）に現地説明会を行い、吹雪の中250名の参加者を得た。

2 整理

(1) 整理の方法

ア 発掘記録の整理

発掘調査終了後の整理作業は、発掘記録の整理を優先させ、実測図、カード類から遺構別に記録を集め直し、誤りを訂正し、最終所見を加える作業を行った。写真は、発掘調査中からネガフィルムはネガポジアルバムに、スライドはファイルに整理して撮影状況等を記入した。

イ 遺物の整理と記録

遺物の整理は、調査研究員の指導のもとに整理補助員が実施した。注記は遺跡記号、遺構略号、グリット名、取り上げナンバー、層位を記入した。金属器など保存処理の必要なものは、センターにおいて保存処理を施した。遺物の記録は調査研究員の指導の下に整理補助員が主に行った。遺物は観察・分類の上選択し図化した。遺物の撮影は主として調査研究員があたり、カメラはマミヤRB 6×7を用いた。

(2) 整理の経過

ア 昭和59年度

発掘作業終了後、遺構単位に記録を集め、訂正・所見の記入等を行う。遺物は発掘作業終了後、洗浄注記を行う。遺物について指導を何回かうけた。施釉陶器について名古屋大学檜崎彰一氏、斎藤孝正氏、岐阜県陶磁陳列館田口昭二氏より指導をうけた。59年度の概要については「長野県埋蔵文化財センター年報1」に発表した。

イ 昭和60年度

発掘作業終了後、遺構単位に記録を集め、訂正を行い、遺構整理カードに所見等を記入する。遺物は発掘作業と平行しながら洗浄作業を行い、終了後注記を行う。60年度の概要については「長野県埋蔵文化財センター年報2」に発表した。

ウ 昭和61年度

遺物の観察、接合、選別、実測の作業を主に行う。これと平行して中・近世の遺構図面の整理、一部版組みを行う。遺跡の概要について、日本考古学協会総会、長野県考古学会総会、信濃史学会研究会で発表した。輸入陶磁器について九州歴史資料館森田勉氏の指導をうける。

エ 昭和62年度

遺物の実測作業、図版の作成、原稿執筆を行う。遺跡と遺物の概要については日本中世土器研究集会、日本貿易陶磁研究集会で発表する。また、施釉陶器について名古屋大学斎藤孝正氏、全体について国立歴史民俗博物館吉岡康暢氏から指導をうける。

オ 昭和63年度

原稿執筆、図版のトレース、写真図版の作成を行ない、報告書刊行の運びとなる。

(3) 整理体制（昭和59、60年度は調査体制と同じため省略する）

ア 昭和61年度

事務局長 西沢 宣利

総務部長 堀内 計人

調査第一部長 樋口 昇一

調査第二部長 丸山 敏一郎

調査研究員 原 明芳、市川 隆之、小松 望

イ 昭和62年度

松塩筑調査事務所

所長 三村 忠幸

総務部長(兼)庶務部長 堀内 計人

調査部長 宮沢 恒之

調査研究員 原 明芳、小松 望、金原 正、市川隆之、寺内隆夫

ウ 昭和63年度

松塩筑調査事務所

所長(兼)庶務部長 堀内 計人

調査部長 宮沢 恒之

調査研究員 原 明芳

エ 指導者

以下の方々・諸機関に御指導いただいた。なお敬称は略させていただきます。

伊藤 薫、伊野 近富、井原今朝男、宇野 隆夫、小笠原好彦、桐原 健、小林 康男、小森 俊寛、
斎藤 孝正、坂本 美夫、鋤柄 俊夫、田口 昭二、田中 琢、直井 雅尚、仲野 泰裕、檜崎 彰一、
西沢 寿晃、葉賀七三男、橋本 久和、平尾 政幸、藤沢 良祐、前川 要、水野 正好、村田 朋美、
百瀬 正恒、森田 勉、吉岡 康暢、吉村 正親、若尾 正成

奈良国立文化財研究所、東京国立文化財研究所、長野県工業試験場、長野県警察本部特捜部、塩尻市教育
委員会、松本市教育委員会

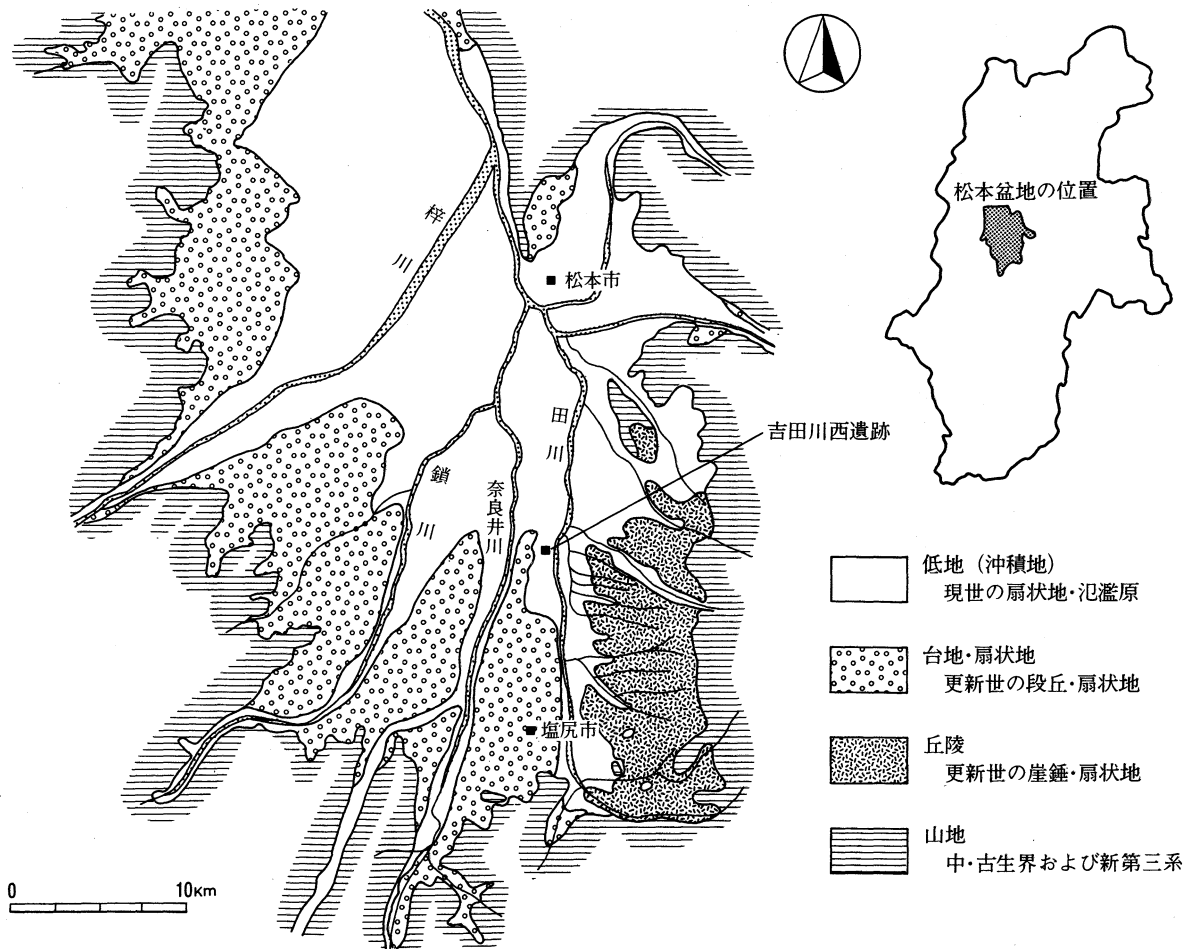
第2章 遺跡と周辺の環境

第1節 位置と地理的環境

遺跡は長野県の中央部で、南北に細長く広がる松本盆地の東南部に位置する。行政区域的にみると塩尻市に入るが、付近の行政境は隣接する松本市と入り込むかたちとなっており、北側500mで両市の境になっている(図版1・2)。今回調査を行ったのは、JR村井駅から東に1 kmほど離れた、広丘吉田地区の中村地籍と、下吉田地籍の間の集落の途切れている部分である。双方は江戸時代まで溯ることのできる古い集落である。今回の調査部分は、最近まで東側部分が水田として、西側部分が畑地あるいは宅地として利用されており、この土地利用の違いは水利と密接に関係している。これまで遺跡の性格は、水田として利用されている部分が多いためか遺物の出土量も少なく、明らかではなかった。

調査範囲の西側は、昭和30年代に国道19号線が通るまでは耕地にならない松林であった。しかし最近になり、この地域が松本市のベッドタウンとなり、国道以西はほとんどが宅地となっている。また東側部分の水田地帯は、中央自動車道長野線の建設に先立って、圃場整備事業が行われた。そのため地形は大きく変化しており、旧地形を知ることはむずかしい。

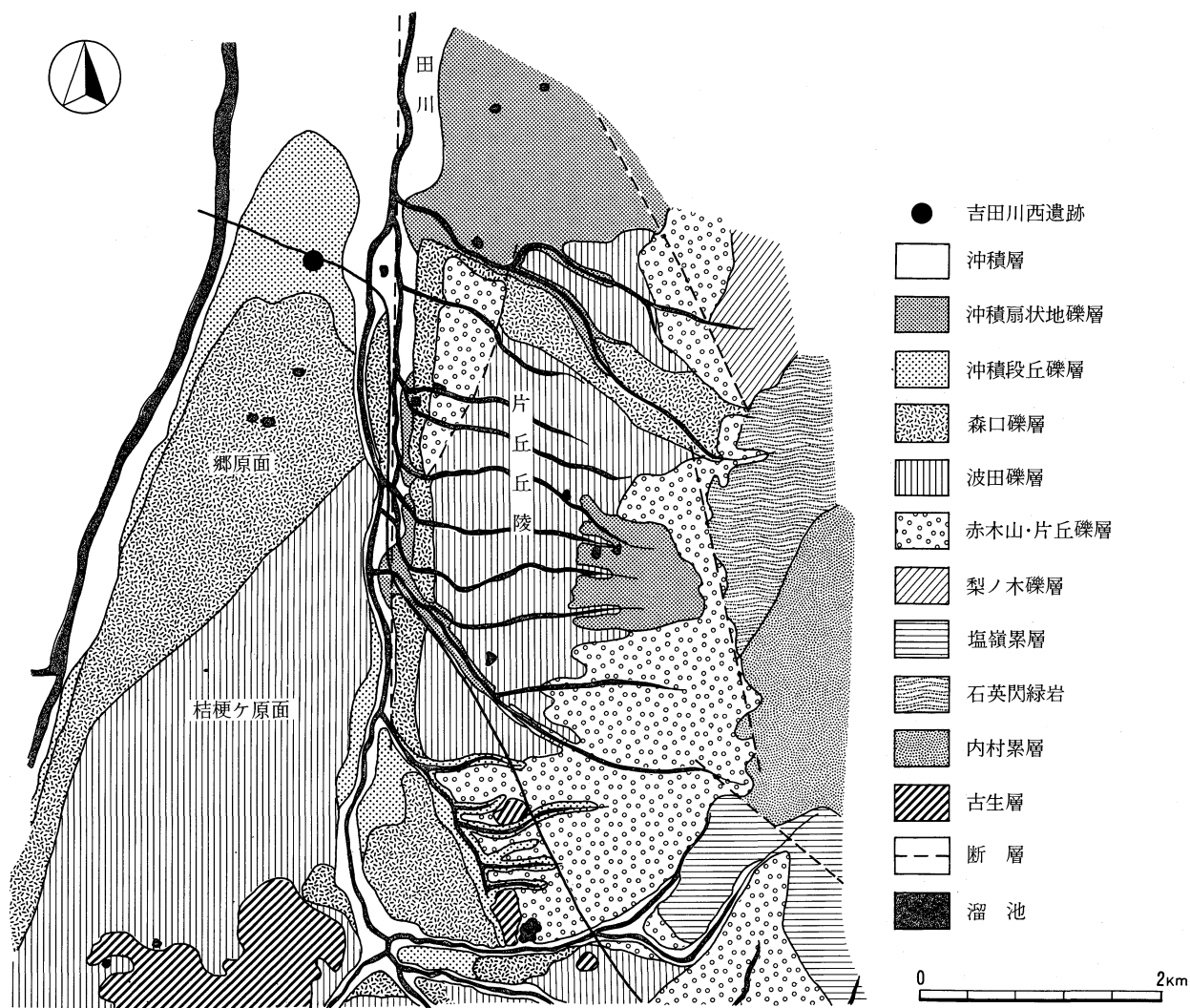
地形的にみると、木曾谷との分水嶺に源を発する奈良井川が形成した松本盆地南部の広大な扇状地上の、



第3図 松本盆地南部の地形区分 (約1:240000)

筑摩山地に源を発する田川と、奈良井川が開析した鋭角三角形の台地上に遺跡はある(第3図)。この扇状地には地盤隆起によって奈良井川の浸食を受けた河岸段丘が形成されている(第4図)。一番高い段丘面は桔梗ヶ原面と呼ばれ厚い波田ロームが覆っている。二番めの面は郷原面と呼ばれている。巨視的にみれば、この面の東側に遺跡はのっている。郷原面は地盤隆起にともなって、桔梗ヶ原面の基底である扇状地礫層が削剝され、波田ロームの終期のものが降下後、ローム層の大部分は削られ、上位に1 mほどの砂礫土が堆積した、北東側に傾く段丘面である。この面は遺跡の北側2 kmほどの松本市村井付近で、田川の氾濫原下に没する(註1)。

さらに細かくみると、遺跡は段丘面の中で小さく南北に伸びる、標高640m前後で東西の巾300mほどの舌状の台地にのる(図版3)。この台地は西側を小さな旧河道と思われる凹地に、東側は田川によって形成された小規模な河岸段丘に限られている(PL 1)。今回の調査はこの台地を東西に横断するかたちで行なわれた。台地の凹地を挟んだ西側は畑地として利用されていたが、砂礫土が露出しており、遺跡は広がっていない。また、東側は田川によって削られており、広がっていない(註2)。このことから遺跡の立地は、この台地の地形によって制約された可能性が強い。田川との関係を見ると、河床との比高差は調査部分とは3 mほどしかない。しかし、現在田川の水量は少なく、また江戸時代以降大きな水害の記録もない。これらのことからみて、付近一帯の地形形成に、田川の及ぼした影響は小さく、その与えた範囲も両側100mほどと思われる。



第4図 塩尻市東部の地質図

今回の調査で、遺跡は舌状の台地に立地していることがわかり、その東西の範囲は確認できた。しかし南北の範囲については不明であり、確認が望まれる。今後このあたり一帯は大規模な開発が行なわれる可能性は少ないが、住宅建設などの小規模な開発が進むと思われ、それに対応していく必要がある。

(註1) 塩尻市の地形・地質については、埋文センター刊行の「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」で詳しくふれられており、参照されたい。今回の地形図もそれと同様のものを用いた。

(註2) 塩尻市教育委員会により、西側部分の調査が区画整理事業に先立って行われた(図版2)。しかし、遺構・遺物の発見はなかった(塩尻市教育委員会1986)。

引用文献

塩尻市教育委員会 1986 『吉田川西遺跡』

第2節 周辺の古代・中世遺跡

吉田川西遺跡の存在する松本盆地南東部は、遺跡の稠密地帯として知られている。筑摩山地山麓および田川流域を中心に存在する多くの遺跡は、旧石器時代から中・近世に至るまで多岐にわたっており、松本盆地の歴史を考える上で貴重な資料を提供しているものが少なくない。このうち、古墳時代以前は『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市その1—』に譲り、ここでは、本遺跡に係わる奈良時代以降のものについて、その概要を記したい。

吉田川西遺跡周辺の古代・中世遺跡の分布は第5図と第1表に示した通りであるが、これらは立地の面から二大別できる。すなわち、筑摩山地西麓の台地上もしくは丘陵上に立地するものと、田川流域の低地に立地するものである。後者は広丘野村地籍を境にして、さらに二つに細分することができる。北側は松本盆地の低平地に続く低位段丘面であり、本遺跡もこれに含まれる。南側は田川左岸に段丘が発達し、その上に遺跡が密集して分布しており、高出遺跡群を形成している。

奈良時代では、本遺跡と田川を挟んで対峙する吉田向井遺跡で3軒の竪穴住居址が検出されており、その南方の君石遺跡、高田遺跡は奈良時代末期に位置づけられる。いずれも小規模な集落である。その他、高出遺跡群の中の高出I地点から円面硯などの出土が伝えられているが、この時期の遺跡は少なく、実態は明らかにされていない。最近、塩尻市片丘南熊井菖蒲沢で窯址と住居址が発見され、瓦塔の出土をみた。

平安時代になると遺跡数が大幅に増加する。この地域の本格的な開発が進められたのは、この時代のことと言えそうである。吉田向井遺跡は、昭和57年度に塩尻市教育委員会によって、昭和60年度には埋文センターによって発掘調査されたが、あわせて91軒の竪穴住居址と5棟の建物址が検出され、該期の大集落であったことが明らかになっている。墨書土器や鉄製品などの出土も多く、本遺跡と時期的に重なるものも多い。本遺跡より1 kmほど南には、やはり平安時代の遺物を得ている野村遺跡がある。ここから南には高出遺跡群が展開するが、中でも丘中学校遺跡では竪穴住居址16軒が、丘中学校南遺跡では竪穴住居址20軒が検出されており、この段丘上に拠点集落の展開があったことを物語っている。このほか、黒崖・北原・上村でも該期の遺構・遺物が確認されている。さらに、高出遺跡群の南に位置する和手遺跡、中挟遺跡でもそれぞれ30軒前後の竪穴住居址が検出されており、やはり該期の拠点集落のひとつとして把握することができる。

一方、筑摩山地西麓斜面およびそこから張り出した台地上には、内田原・舅屋敷・俎原遺跡などが、いずれも標高760m前後の湧水地帯に立地する。内田原遺跡では竪穴住居址18軒が確認され、うち8軒が調査された。墨書土器のほか、緑釉陶器皿・帯金具・佩刀用金具・馬具など、特殊な階層の存在を窺わせる遺物があり、また、炭化した糸・布・編物が出土して注目された遺跡である。舅屋敷遺跡では7軒の、俎原遺跡では19軒の竪穴住居址が検出されており、いずれも丘陵地における集落の展開を示す好資料である。先述の菖蒲沢窯址では、灰釉陶器・土師器とともに鰐口が副葬された墓壇があり、注目されている。このほか、栗木沢・樋口・高山(城跡)などの山間の遺跡にも小規模集落の存在が認められる。

また、偶然の発見ではあるが、奈良井川流域の長者屋敷跡の南側から平安時代の作とされる鉄製護摩炉が出土しており、同じ奈良井川流域の広丘堅石地籍では瑞花双鳥八稜鏡の出土が知られている。

中世では、本遺跡の北側に隣接して、74,700余枚の古銭がまとまって出土した若宮遺跡があり、西へ700 mほど離れた長者屋敷遺跡は居館址として知られている。丘中学校遺跡では、「□□寺」・「□色寺」と判読できる墨書土器のほか、青銅製の花瓶と瓦などが出土しており、平安時代から中世にかけて寺院の存在が予測されている。田川右岸では、吉田向井遺跡で土壙墓群が検出されており、中世には墓域であったと考

えられている。さらに、吉田向井遺跡と小田川を挟んで対峙する松本市小赤遺跡では、鍛冶場跡と考えられる遺跡と青磁・白磁等の資料が得られている。その背後には、全山遺跡ともいえる程濃密な遺跡分布を示す赤木山(719m)があり、赤木山遺跡群と総称されているが、ここでも縄文時代から中世まで長期にわたる遺物の出土をみている。

しかし、中世以降の遺跡については、偶然の発見にかかるものや地表面で確認できるものに限られており、十分に把握されていないのが現状である。それは、現在の居住域と重なる場合が多く、遺跡の認定が困難であることの外、従来、積極的に遺跡確認のための努力がなされていなかったことによるものと思われる。今後詳細な分布調査が望まれる。

吉田川西遺跡は、これら周辺の遺跡と密接な関連性をもって成立、展開したものといえる。吉田川西・吉田向井・高出遺跡群のような低地の大集落と小規模な集落との関係、また、丘陵地や山間部の集落との関連性が問題となつてこよう。また、古代勅旨牧の一つである埴原牧跡(県史跡)が田川を渡った北東約3 kmに位置し、南方約7 kmには、古墳時代から平安時代の集落として著名な平出遺跡(国史跡)がある。西方の松本市笹賀・神林・島立と続く奈良井川左岸地帯には、やはり古墳時代から中世にかけての遺跡が密集している(註1)。本遺跡の検討に当たっては、これらも視野に入れて考える必要があるだろう。

(註1) 埋文センターで調査した神戸・上二子・中二子・下神・南栗・北栗・三の宮・北方の各遺跡については、現在整理中である。

参考文献

- 神沢昌二郎他 1985 「塩尻市広丘吉田若宮出土の備蓄銭」、『平出遺跡考古博物館歴史民俗資料館紀要』第2集
 (助)長野県埋蔵文化財センター 1988 『長野県埋蔵文化財ニュース』No.23
 (助)長野県埋蔵文化財センター 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1—』
 塩尻市教育委員会 1979 『高田遺跡』
 同上 1982 『舅屋敷』
 同上 1983 『丘中学校遺跡』
 同上 1983 『吉田向井』
 同上 1986 『吉田川西遺跡』
 同上 1986 『埴原遺跡』
 原 嘉藤、山田瑞穂 1969 「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」『信濃』21—6
 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上
 松本市教育委員会 1983 『松本市寿小赤遺跡』

番号	遺 跡 名	文 献
1	吉田川西	塩尻市教委 1986「吉田川西遺跡」
2	吉田向井	塩尻市教委 1983「吉田向井」 (財)長野県埋蔵文化財センター 1988「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
3	野 村	
4	高 出	藤沢宗平 他 1966「松本諏訪地区新産業都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告」 塩尻市教委 1983「丘中学校遺跡」
5	花 見	
6	高 田	塩尻市教委 1979「高田遺跡」
7	前田木下	松本市教委 1984「松本市前田木下遺跡」
8	白 神 場	松本市教委 1985「松本市赤木山遺跡群Ⅰ」
9	石 行	松本市教委 1987「松本市赤木山遺跡群Ⅱ」
10	渋 沢	
11	君 石	塩尻市教委 1986「君石遺跡」
12	鍛 冶 屋 敷	
13	久保在家	
14	矢 口	
15	無 量 庵	
16	長 泉 寺	
17	別 当 原	
18	松座屋敷	
19	二 本 木	
20	内 田 原	原嘉藤・山田瑞穂 1969「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」信濃26-1
21	小 丸 山	
22	境 沢	
23	日 向	
24	上 木 戸	(財)長野県埋蔵文化財センター 1988「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
25	今 泉	
26	中 原	(財)長野県埋蔵文化財センター 1988「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
27	俎 原	塩尻市教委 1986「俎原遺跡」
28	菖蒲沢窯跡	
29	竜 神 平	(財)長野県埋蔵文化財センター 1988「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
30	向 陽 台	塩尻市教委 1988「一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
31	和 手	同 上
32	五日市場	
33	中 島	塩尻市教委 1980「中島遺跡」
34	大 門	

35	平 出	平出遺跡調査会 1955「平出」ほか
36	下 西 条	
37	三 獄 西	
38	宗 張	塩尻市教委 1987「田川端・宗張」
39	田 川 端	同 上
40	太 子 山	
41	堂 の 前	塩尻市教委 1985「堂の前・福沢・青木沢」
42	樋 口	(財)長野県埋蔵文化財センター 1988「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
43	ヨ ケ	同 上
44	栗 木 沢	同 上
45	剣 ノ 宮	塩尻市教委 1973「長野県塩尻市峯畑剣宮遺跡緊急発掘調査報告書」
46	峯 畑	同 上
47	八 窪	(財)長野県埋蔵文化財センター 1988「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
48	青 木 沢	同 上
49	長 者 屋 敷	
50	牛 の 川	松本市教委 1980「松本市笹賀牛の川遺跡」
51	神 戸	松本市教委 1981「松本市笹賀神戸遺跡」
52	上 二 子	(財)長野県埋蔵文化財センター 1986「長野県埋蔵文化財センター年報2」
53	中 二 子	同 上
54	小 屋	
55	小 原	
56	村 井	
57	若 宮	
58	小 池	
59	高 畑	松本市教委 1987「松本市高畑遺跡」
60	野 溝	
61	本 郷	
62	百 瀬	
63	向 原	
64	竹 淵	
65	中山古墳群	松本市教委 1988「松本市向畑遺跡Ⅰ」ほか
66	推定信濃牧監庁跡	一志茂樹 他 1964「長野県松本市北埴原推定信濃牧監庁跡調査概報」信濃16-12
67	舅 屋 敷	塩尻市教委 1982「舅屋敷」
68	中 挟	塩尻市教委 1988「一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」

第1表 遺跡地名表 (番号は分布図と対応)



第5図 古代・中世遺跡分布図 (1 : 50000)

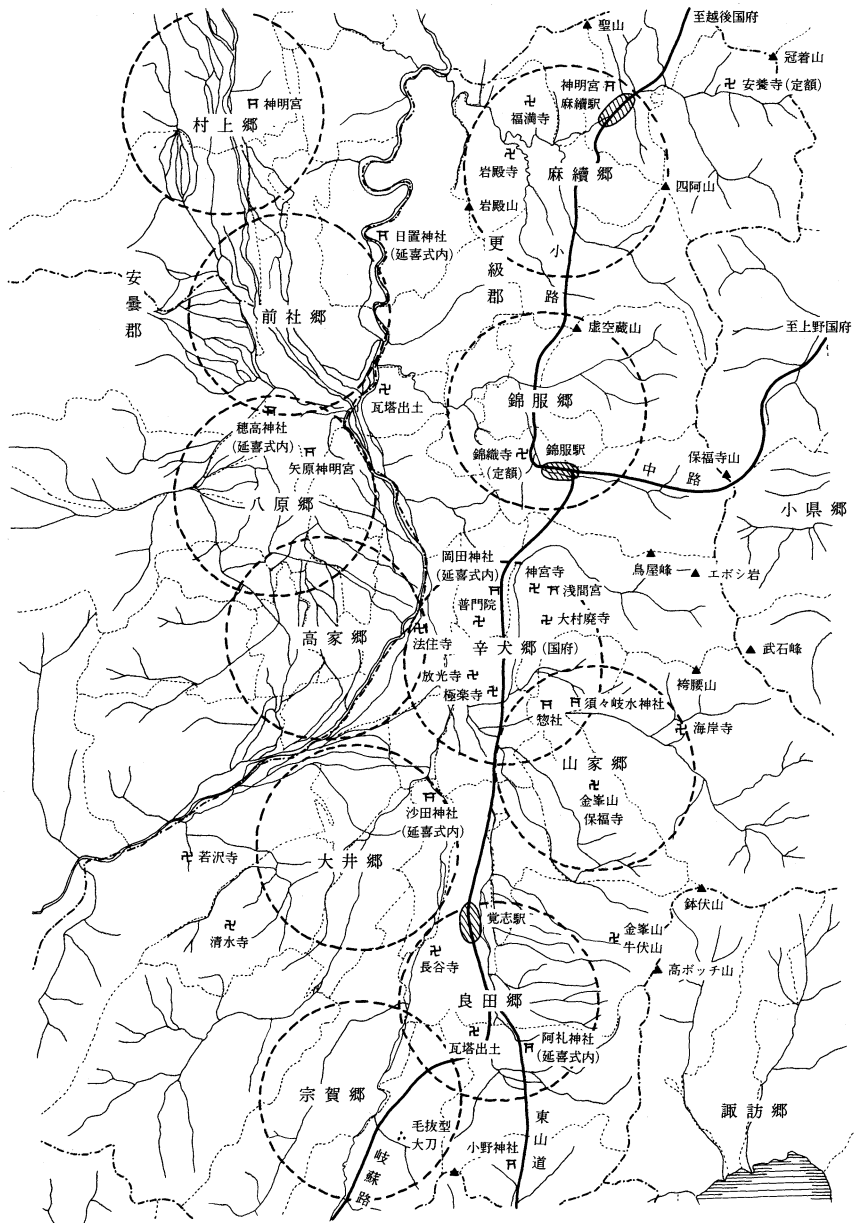
第3節 文献にみる周辺地域

1 古代

塩尻市域は『倭名類聚鈔』（以下『和名抄』）所載の筑摩郡（但し、南部の北小野地区は伊那郡）に含まれる。筑摩郡は信濃国の中央に位置し、東は筑摩山地を隔てて小県郡、諏訪郡と、南は善知鳥峠、鳥居峠を経て伊那郡、美濃国と、西は梓川、高瀬川を隔てて安曇郡と、北は風越峠、花河原峠を境にして更級郡と、それぞれ対している。『和名抄』によれば、この中に「良田」・「崇賀」・「辛犬」・「錦服」・「山家」・「大井」の六郷が存在し（後に更級郡の「麻績郷」が筑摩郡に編入されている）、それぞれの位置については第6図のように推定されている。

なお、古代には木曾谷は美濃国に属していた。『日本三代実録』元慶3年（879）9月条に、美濃国恵那郡と信濃国筑摩郡との国境争いがあり、県坂（鳥居峠）を境に木曾は美濃国と定められたことがみえる。その後、『平家物語』、『吾妻鑑』などには「信濃国木曾」の表現がみられ、中世初期には木曾を信濃とする考えも有力であったことが窺えるが、両者の国境が現在の線に確定したのは近世になってからのことである。また、奈良時代短期間ではあるが「諏方国」が分離独立した時期があり、筑摩郡はいわば国境の郡であった。

「筑摩」（東間）の地名が初めて文献に現れるのは、『日本書紀』天武天皇14年（685）10月条の「壬午、遣輕部朝臣足瀬、高田首新家、荒田尾連麻呂於信濃令造行宮、蓋擬華東間温湯歟」であり、郡内に行宮がつけられたことを示唆している。「東間温湯」については、松本市の浅間温泉もしくは湯の原温泉があてられている。また、正倉院所蔵品の中に、「信濃国筑摩郡山家郷戸主物部東人戸口小長谷部尼麻呂（中略）主當郡司大領外正七位上他田舎



第6図 倭名類聚鈔記載の郷の分布予想
 （「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌第二巻歴史上一別冊原始・古代篇」1974による）

人国麻呂 天平勝宝四年十月」の墨書のある調庸布があり、この頃、信濃国造の流れをくむ他田氏が筑摩郡の大領であったことがわかる。郡衙の所在地は、松本市筑摩に想定されてはいるものの、確定できる資料に乏しく、現在では不明とせざるを得ない。その他、平城京では、「信濃国筑摩郡山家郷火頭椋椅部／逆養錢六百文」と記された本簡が出土している。

官道東山道は伊那郡から北上して筑摩郡に入り、覚志・錦織の駅を経て小県郡に向かっていたが、錦織駅では支路が分岐し、北信濃から越後国へと通じていた。また、当初小県郡に置かれていた信濃国府は、おそらく延暦年間にはこの地に移転しており、平安時代以降、筑摩郡は信濃の交通・政治の中心であった。

国府の所在地については諸説あるが、現在では松本市惣社一帯が有力となっている。鎌倉時代、この国府推定地から塩尻市に至るまで、田川沿いには公領が連続して分布しており、荘園は存在していない。平安時代にあっても、おそらく同様の状況であったと思われる。一方、この地方の初期荘園については、「貞観寺田地目録帳事」（仁和寺文書）中に、貞観9年（867）、右大臣藤原良相が「信濃国庄一処大野地百二町二段熟田十町三段百五十六歩、荒十一町二段五十四歩、未開八十町段百五十歩」を貞観寺に施入したことがみえ、『多武峯略記』には、仁和3年（887）4月、右大臣藤原冬緒が「信濃国筑摩郡蘇我郷草茂庄一処」を大和多武峯の妙楽寺に施入した記事がある。大野荘は波田町方面にあてられ、草茂荘は松本市神林の下神遺跡から「草茂」と記された墨書土器が出土したことにより、ほぼこの地に決定したといつてよい（註2）。平安時代末期には、捧荘・洗馬荘・桐原荘などがあったが、いずれも郡の周辺部に開かれたものである。

筑摩郡には多くの渡来人が定着しており、小県郡について多い。筑摩六郡の内、辛犬・錦服の二郷は渡来人系の人々を中心にして立郷されたものであり、犬甘氏・錦部氏のほか、安坂・須々岐などの諸氏が記録に現れる。また、『続日本紀』延暦8年（789）5月条には、「信濃国筑摩郡人外少初位下後部牛養、無位宗守豊人等、賜姓田河造」とあり、田川沿いの、おそらく良田郷にも渡来人が定着していたことが知られる。錦服郷から良田郷まで官道沿いに定着したこれらの渡来人は、この地域の開発に大きな役割を果たしたに違いない。

おそらく、彼等の技術が導入されたであろう分野に牧畜がある。中部山岳地帯の原野が広がる信濃は、牧場の適地として、各地に牧が設置されていた。『延喜式』によると信濃国には16の御牧がおかれており、筑摩郡では大野牧、埴原牧が知られている。大野牧は現安曇村大野田から波田町下波田付近にあてられ、その一部が大野荘として開かれたことは先にみた通りである。埴原牧は筑摩山地西麓の松本市中山に位置する。延暦16年（797）の太政官符（『類聚三格』）に、「監牧司雖非正職、而離家赴任、有同国司、宣以埴原牧田六町為公廩田、自今以後、永為恒例、但以当土人任者、不在賜限、其新任之年、便以牧田稻給佃料別一百廿束」とあるのがその初見である。監牧（牧監）の公廩田が埴原の牧田で供与されていることから、この他に信濃の御牧を管理する信濃牧監庁が置かれていたと推定されていたが、昭和39年（1964）の調査により、礎石列をもつ間口9間、奥行3間の建物址が確認され、推定信濃牧監庁跡として県の史跡に指定されている。この地は埴原の中心集落とその南の中山丘陵に繋がる鞍部にあつて、北は北埴原から松本の国府を遠望でき、南は良田郷から木曾路の入口が眺められる。長保2年（1000）、牧監に任官した藤原有邦の位階は正六位上であり（『類聚符宣抄』）、当時の牧監の地位を窺わせている。埴原牧は、平安時代末期には衰退したらしく、『吾妻鑑』文治2年（1186）3月12日の条にある信濃28牧にはその名がなく、代って、その南に北内・南内牧が登場してくる。

ここで国司についてふれておくと、11世紀には信濃国司は藤原摂関家の家司によって占められる。この頃、多量の信濃布が摂関家の元に集積されているが、国府の所在地である筑摩郡には、こうした関係を通じて中央の文物が流入したものと考えられる。

上記の筑摩六郡の内、良田郷は筑摩郡の南端に位置し、筑摩山地と奈良井川に挟まれた地域と考えられ

ている。現在の市域でみると、塩尻市宗賀の平出、大門から田川沿いに北上し、松本市寿までを含む。前節で取上げた遺跡のほとんどはこの郷内に含まれるものであり、本遺跡のある吉田地区は良田郷の中心と考えられる地域である。鳥居峠を越えた吉蘇(木曾)路と善知鳥峠を越えた東山道とは郷内で合流し、覚志駅が設置されていた。その位置については、本遺跡のすぐ北、松本市芳川村井辺りが有力とされている。すなわち、良田郷は筑摩郡の入口であり、国府への入口でもあって、特に平安時代には重要な位置を占めていたといえるのである。新任の国司を迎える坂迎えの儀式も、おそらく郷内のいずれかの地で行われたのだろう。この辺りの開発が進められた時期については、文献の上からははっきりと窺うことはできないが、吉蘇路の開通が8世紀の初め、国府の移転が8世紀末と考えられるので、おそらくこの前後から政策的な開発が進められたのではないかと推測される。先記の、後部牛養らが「田河造」を賜姓されたという記事も、この地の開発に関係したものであろう。

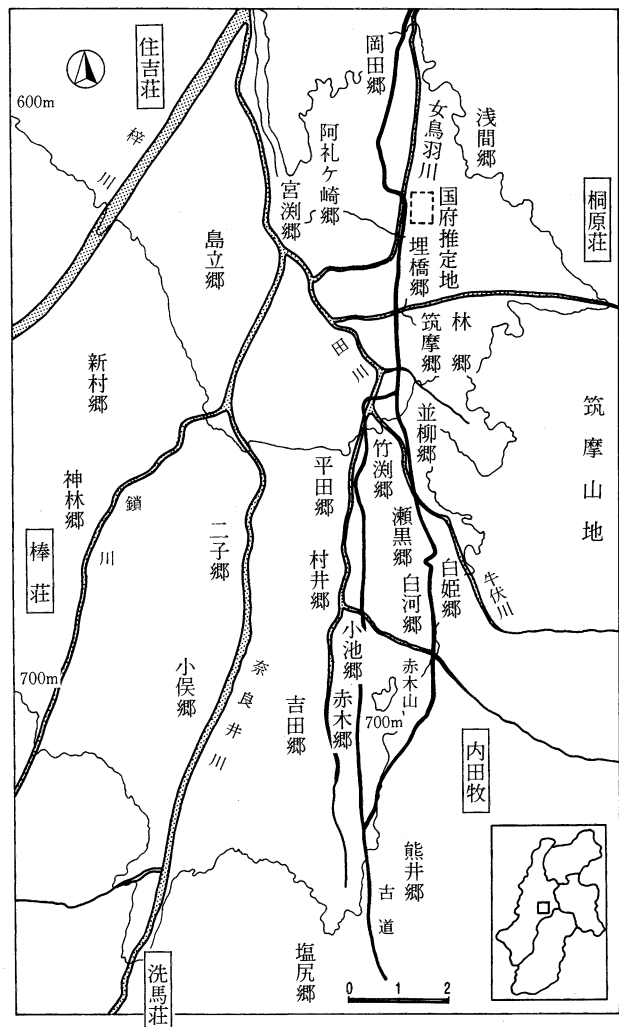
9世紀には信濃の飢饉や災害に関する記事が数多く現れる。とりわけ仁和3年(887)、4年(888)と2年連続で襲った地震と大洪水は信濃に壊滅的な打撃を与えた。良田郷もその例外ではなかったと思われるが、文献の上からはこれ以上のことは明らかでない。しかし、これが、すでに荒廃の進んでいた古代村落秩序の解体を決定的にし、新たな秩序への模索が始められるのである。

2 中世

平安時代後期には、律令制下の郷は郷・保・村などの所領単位に分解していく。鎌倉時代には、かつての良田郷の範囲内に村井郷、吉田郷、小池郷、赤木郷、熊井郷、塩尻郷などをみることができ、いずれも公領である(第7図)。

治承4年(1180)の源義仲の挙兵にあたっては、挙兵直後の行動が不明であり、木曾に隣接し、また国府の所在地でもある筑摩郡がどのような状況におかれたのかは明らかではない。挙兵後の義仲は東信に本拠地をおき、その軍勢は木曾と東北信出身の武士が主体であった。それに先立つ以仁王の令旨は、筑摩郡の岡田冠者親義にももたらされていた(『平家物語』)が、岡田氏が義仲軍の一員として参戦するのは、3年後の倶利伽羅峠の戦の折である。『長野県史』はこの辺りの事情を、木曾で挙兵した義仲はいち早く国府のある筑摩郡を勢力下におき、岡田氏は国府周辺を警備する任にあっていたものと考えている。

義仲が源頼朝に討たれた後、信濃は頼朝の支配下に入り、関東の御家人が数多く入部した。また、信濃の武士たちの御家人化も進んだ。頼朝の没後、鎌倉幕府の実権が北条氏に移ると、信濃守護には北条氏が就任し、執権義時の二男重時の子孫が代々その地位を受継いだ。また、春近領をはじめ



第7図 鎌倉時代の公領、荘園の分布
(□は荘園、他は公領)
(『長野県史』通史編中世1より)

とする公領は北条得宗家の支配下にあり、信濃の武士の多くは北条氏と強い結びつきを持つこととなった。

吉田郷には、白河郷の白河忠兼の子忠家が進出し吉田氏を称した。白河氏は板東平氏の秩父一族であり、近隣の小池郷、赤木郷、白姫郷にも進出して、それぞれ小池氏、赤木氏、白姫氏を称している(「赤木氏系図」)。このうち赤木氏は、承久の乱(1221)の恩賞として備中国川上郡穴田郷の地頭職を与えられ、赤木家忠が備中国に移住したが、備中の赤木氏はその後も「吉田郷の田四段、小池郷の在家二字」を所領としており、嘉元3年(1305)には家忠の三男忠光の子忠澄が相続していた(赤木家文書)。この間、その得分は備中国に送られており、遠隔地輸送の一端をみることができる。その後、吉田郷は赤木郷とともに諏訪氏に移り、元弘2年(1332)諏訪時継は両郷を上社に寄進している(守矢文書)。近隣諸郷では、村井郷は犬飼氏(犬甘氏)の一族である村井氏が地頭であった。小次郎知貞の時、中先代の乱に北条氏に与して所領を没収されたが、後に守護小笠原氏に臣従し、15世紀の後半には「中内田・埴原」を領していた(「諏訪御符礼之古書」)。小池・塩尻郷は春近領であり、熊井郷とともに諏訪下社領であった。

鎌倉幕府の滅亡後、執権北条高時の遺児時行は、北条氏と関係の深い諏訪大祝家のもとで匿われた。北条氏の守護国であった信濃には北条氏の与党が多く、各地で紛争が起きていた。建武2年(1335)7月には、諏訪頼重・大祝時継父子が時行を奉じて兵をあげ、中先代の乱が勃発した。一時は鎌倉を占領するまでの勢いを示したこの乱は翌8月には鎮圧されるが、乱の起点となった信濃では翌年まで動乱が続いた。府中(松本市)でも、2月に有力在庁官人深志介知光が蜂起し、麻績御厨の十日市場で守護小笠原貞宗の軍勢と戦っている(市河文書)。

足利尊氏の離反により建武新政が崩壊し、南北朝対立の時代に入ると、守護小笠原貞宗は北朝方に属した。貞宗は伊那郡伊賀良荘(飯田市)に拠っていたが、貞和3年(1347)尊氏から「信濃国春近領半分塩尻・島立以下」を与えられ(小笠原文書)、筑摩郡に進出して井川館(松本市鎌田)を本拠とした。一方、中先代の乱で敗れた諏訪氏の主力は南朝方に属し、その間に位置する塩尻近辺はしばしば戦場となっている。

応永7年(1400)の大塔合戦によって守護小笠原長秀が失脚した後、応永9年(1402)に信濃は幕府の料国となり、春近領も料所(直轄地)となった。府中(松本市)から塩尻にかけての地域は、鎌倉時代には北条氏の支配下におかれ、室町時代には小笠原氏と諏訪氏の狭間に位置し、一時幕府の料所となるという経緯の中で、有力な国人の成長がみられなかった。応永32年(1425)、小笠原政康が守護に任命され、信濃は再び小笠原氏の守護国となったが、この頃が小笠原氏の支配の最も安定した時期であった。永享12年(1440)の結城合戦には、彼のもとに信濃武士の大半が従っている(『結城陣番帳』)。しかし、政康の死後、相続争いから小笠原氏が府中と飯田とに分裂すると、信濃は再び動乱の時代を迎えることとなる。同じ頃、諏訪社でも上社(諏訪氏)と下社(金刺氏)とが争い、府中小笠原氏の小笠原持長は下社と結んだ。文安5年(1448)8月、上社が下社と小笠原持長の連合軍を塩尻で破っている。以後、両小笠原氏の対立、諏訪上社・下社の対立、府中小笠原氏と山家氏・仁科氏など周辺国人との対立などが、複雑に絡みあって戦乱が続くことになる。

なお、諏訪社は「信濃国一之宮」といわれ、その式年造営の費用は信濃各地の郷村が負担していた。長享2年(1488)の「若宮造営之郷数之次第」には、「堅石・野村・吉田」の名がみえる(『諏訪社下社造営帳』)。

天文年間の初め(1530年代)には、長く続いた小笠原一族の分立抗争も府中の小笠原長棟によって統一され、終止符が打たれた。諏訪社でも、その後上社内で惣領と大祝との内部分裂などもあったが、結局惣領家が諏訪氏を統一し、下社を破って一連の抗争を制した。しかし、小笠原氏の支配は本拠地の府中周辺でも安定したものではなく、周辺国人との間にはしばしば紛争が起こっていた。天文6年(1537)小笠原長棟が山辺の山家氏を攻めた際には、山家氏を支援する諏訪頼重によって、赤木・吉田が焼かれている。

この頃から隣国甲斐の武田氏の信濃侵人が目立つようになるが、天文10年(1541)、晴信(信玄)が家督を継ぐと、本格的な信濃攻略が開始された。翌11年(1542)、諏訪頼重を破り、諏訪郡が武田氏の支配下に帰すと、

小笠原氏との対立が深まり、境を接する本地域は直接の戦場となった。天文14年(1545)、武田晴信は桔梗ヶ原に陣を進め、小笠原氏の支城である熊井城(塩尻市片丘北熊井)を落とした。同年、野村の善立寺が兵火に焼かれている。同17年(1548)、塩尻峠の戦で小笠原長時に大勝した晴信は、村井城(松本市芳川小屋)を築いて府中攻略の前進基地とした。同19年(1550)には長時の抛城林城(松本市里山辺)が落ち、以後武田氏の滅亡まで33年間にわたって、筑摩郡はその支配下に置かれたのである。

3 近世

天正10年(1582)、武田氏の滅亡後、長時の子小笠原貞慶が深志城を奪回し、城名を松本城と改めた。以後、「松本」の地名が広く用いられるようになる。天正18年(1590)、徳川家康の関東移封に伴い下総に移った小笠原氏に代って石川氏が入封し、安曇・筑摩両郡八万石を領した。幕藩体制下、松本藩は、石川・小笠原・戸田(前戸田)・松平・堀田・水野・戸田(後戸田)と領主が変遷し、明治維新に至る。

元和3年(1617)戸田氏が七万石で入封すると、前領主小笠原氏との間に生じた一万石の内、本洗馬・小曾部村など奈良井川左岸の西五千石が高遠藩に、内田・赤木村など田川右岸の東五千石が諏訪高島藩に分知された。この前戸田氏の時、領内の行政区画として郷村を15の「組」に編成し、組を管轄させる「割元役」を旧小領主層から任命した。なお、郷村の代表者は「肝煎」とよばれた。組分け制度はその後も踏襲され、明治維新まで続いた。「割元役」は、松平氏の時には「割元大庄屋」、水野氏の時には「組手代」、後戸田氏の時には「大庄屋」とよばれており、「肝煎」は松平氏以降「庄屋」とよばれるようになった。

吉田村は現在の松本市芳川、同笹賀の一部、片丘・洗馬を除く塩尻市域の諸村とともに塩尻組に組織された。後戸田氏入封の際に塩尻組の南部20か村が幕府領となったため、塩尻組の残り8か村と出川組6か村をあわせて新たに高出組が組織された。安政2年(1855)の「村々明細書上帳」によると、吉田村は戸数

村名	男	女	合計	家数	1軒当の人数	村高	1軒当の石高
出川町村	272	257	529人	105	5.04	842.4370石	8.02石
並柳村	115	113	228	37	6.16	239.5180	6.47
平田村	177	177	354	64	5.53	632.2330	9.88
村井町村	283	308	591	118	5.01	955.6710	8.10
吉田村	387	357	744	90	8.27	951.9630	10.58
野村	247	234	481	85	5.66	721.1273	8.48
高出村	225	195	420	63	6.67	439.7510	6.98
郷原町村	182	154	336	72	4.67	365.7323	5.08
堅石町村	257	269	526	75	7.01	427.5105	5.70
原新田村	63	55	118	26	4.54	37.0400	1.42
小屋村	147	147	294	42	7.00	451.0329	10.74
野溝村	287	281	568	71	8.00	803.3810	11.32
笹部村	146	111	257	35	7.34	276.0988	7.89
新宮新田村	93	100	193	34	5.68	167.8810	4.94

第2表 高出組村々の人口と村高
 (「安政二年 安曇・筑摩両郡村々明細書上帳」『長野県史』近世史料編 第五卷(一)により作成)

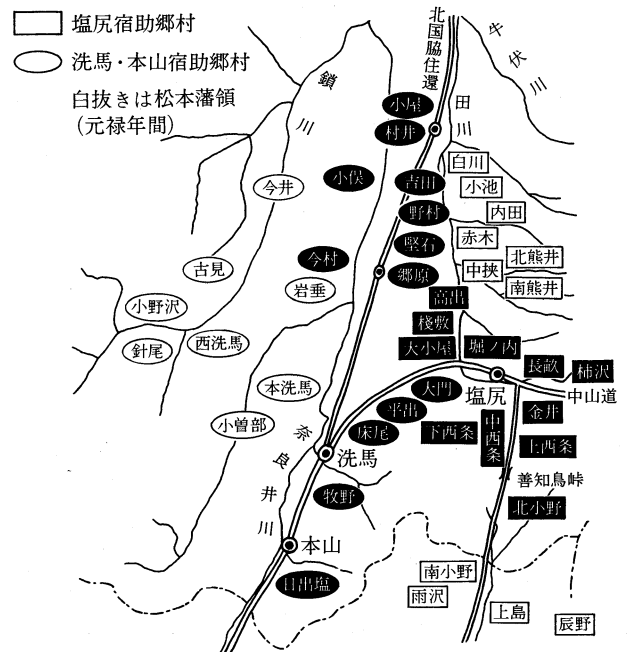
90、人口744名を数え、村人口は高出組最多である。村高は寛永19年(1642)に762.844石(「松本御領分村々高附帳」)、安政2年で929.2002石(「村々明細書上帳」とされており、塩尻組、高出組を通じて村井町村に次ぐ生産高であった。試みに安政2年の資料で一軒当たりの石高を算出してみると、10.58石となる。一軒当たりの石高が10石を越えるのは、高出組14か村のうち野溝・小屋・吉田の3か村のみである。これらの村は一軒当たりの人数も多く、相対的に規模の大きな農家が多かったと言えそうである(第2表)。中には組手代を勤める者もあり、「嘉永二年松本領組手代・大庄屋名前録」(史料-1)には、高出組に吉田村の太田次郎左衛門の名がみえる。村名が記されていない太田清七も、元禄年間の入会地関係の文書にその名が残されており、やはり吉田村の人であったことが知られる。いずれも在任期間は不明だが、享保9年(1724)以降は在任者がはっきりしている、おそらくそれ以前の塩尻組時代のことであると思われる。

組手代	大庄屋名前	備考
同村 中田源次郎	同村 中田源次郎	弘化三丙午年十月被仰付候、文化十四丙寅年三月被仰付、文化十四丙寅年十月被仰付、天保十亥年三月御呼出二而御異見、後九郎左衛門下改名
出川町村 中田源次郎	出川町村 中田源次郎	寛政十年未改名、六郎左衛門
同村 中田六郎左衛門	同村 中田六郎左衛門	天明八申九月廿八日御免、初五俵宛被下置候
同村 中田九郎左衛門	同村 中田九郎左衛門	宝曆十三癸未五月十三日ヨリ、天明八申九月廿八日御免、初十三日弟へ、依願御免、同月
出川町村 大和一郎左衛門	出川町村 大和一郎左衛門	寛延三年二月被仰付、宝曆十三癸未五月依願御免、同月
大和一郎左衛門	大和一郎左衛門	享保九甲辰四月廿二日、寛延三年正月病死
上条与右衛門	上条与右衛門	
太田清七	太田清七	
赤羽太郎右衛門	赤羽太郎右衛門	
上条忠左衛門	上条忠左衛門	
同村 太田次郎左衛門	同村 太田次郎左衛門	
同村 太田次郎左衛門	同村 太田次郎左衛門	
吉田村 太田次郎左衛門	吉田村 太田次郎左衛門	

史料1 高出組 組手代・大庄屋名前録
 (『長野県史』近世史料編第五卷(二)より)

慶長7年(1602)、中山道に伝馬制度が設けられたが、交通量の増加に伴い、元禄7年(1694)近隣の村々が助郷に指定された。吉田村は村井町・野村・堅石・郷原などとともに洗馬・本山両宿付属の助郷村となった(第8図)。このうち村井町・郷原は、洗馬宿から中山道と別れ、松本を経て善光寺町に通ずる北国脇往還の宿でもあったので、その伝馬役と二重の負担となり、しばしば減免の嘆願をしている。また、安永8年(1779)、野村・吉田・村井・小屋村より、助郷難渋につき、上波田・三溝・上新村に対する訴訟が起り、天明元年(1781)には、洗馬・本山両宿より、助郷不参につき助郷村々が訴えられるということもあった。助郷は高100石につき馬2疋・人足2人を出すことになっていたもので、勤高840石とされた(「本山宿明細帳」)吉田村は、馬16疋・人足16人を割当てられたのであろう。北国脇往還の街道筋にあたるこの地域には、中馬稼ぎをする者も多かったようである。明和元年(1764)中馬裁許の際の牛馬頭数をみると、筑摩郡全体で159か村2600疋であり(「筑摩・安曇両郡村々中馬荷物等出入申渡書」)、その数は実際の飼育数とほぼ同じとされる。吉田村の馬数は30疋であった。

江戸時代にはしばしば飢饉や災害に見舞われている。中でも、この近辺で最も大きな被害となったのは、延宝の凶作(1674~75)によるものであった。凶作による大飢饉に加え疫病が流行し、延宝3年(1675)には領内で餓死者2786人、病死者930人と伝えられる。塩尻組では餓死者100人、病死者79人であった(「松本領内餓死・病死者留」)。慶応2年(1866)の凶作・飢饉の際には、村役人・豪商の米買占めの動きに対して、洗馬宿以南、木曾方面の町・農民による米の正常価による売渡し要求が、焼打ちや打ちこわしに発展した木曾騒動が起こった。この



第8図 中山道三宿助郷村分布図
 (『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史下より作図)

時吉田村も襲われており、同年に作られた「木曾騒動ちよぼくれ」には、「吉田村てハ政蔵・藤次郎・善蔵・源太郎・善兵衛、こいつも金持たゝきこわして云々」とある。

当地域の産物としては、文政間に編纂された『松本大畧往来』に、吉田の赤土、野村のねば土があげられている。これを材料として瓦が製作され、江戸時代末期には、民家においても瓦葺の母屋や土蔵の流行を見るに至った。その他、藍の生産が明治20年頃まで行われており、また、綿も栽培されていたが、その作付面積はわずかであった。

信仰の面では、「信濃百番観世音順礼」の中に筑摩郡では28の寺があげられているが、その中に吉田村長谷寺の名がみえ、「今よりも参る吉田のはつせ寺、ちかいをふかくたのむわが身を」の順礼歌が残されている。長谷寺の名は現存していないが、吉田川西遺跡の約400m南にある光明寺がそれであるという。また、村の氏神である建部社は、弘安4年(1281)年以前に滋賀県栗田郡の建部神社から勧請されたとの伝承をもつ古社である。「建部大明神」とよばれ、水野氏の時に編纂された『信府統記』には「当社勧請年暦縁起知れず 当村の産神なり」とある。本殿は寛政6年(1794)年に新築されたものであるという。

参考文献

- 一志茂樹 1950 「官牧考」『信濃』2—4、2—5
 一志茂樹監修 1979 『長野県の地名』 平凡社
 桐原 健 1987 「古代松本平に見られる東西問題」『信濃』39—8
 小林経廣 1984 「ムラの社会的構成の変容と氏神の祭祀—長野県塩尻市広丘吉田を中心に—」『信濃』36—9
 信濃史料刊行会 1954 『信濃史料』第二巻～第五巻(一)～(三)
 信州大学教育学部歴史研究会編 1982 『信州史事典』1 松本藩編 名著出版
 長野県史刊行会 1986 『長野県史』通史編中世1
 同上 1987 『長野県史』通史編中世2
 同上 1987 『長野県史』通史編近世1
 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編集会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上
 同上 1968 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻歴史下
 同上 1975 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第四巻年表・索引
 水野恭一郎 1975 「備中国赤木家文書について」『古文書研究』第七・八合併号

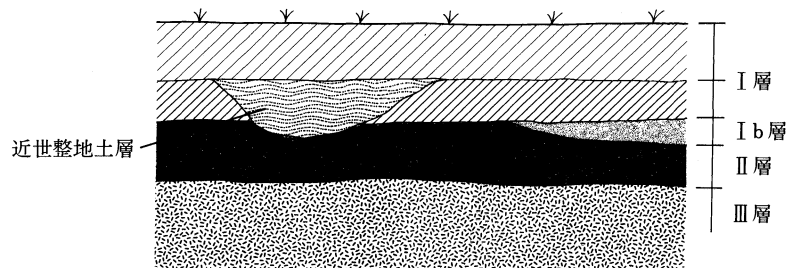
第3章 層序

1 基本層序

面的調査に先立ち、調査地区全域を対象にトレンチ調査を行った。その結果により、第9図のような基本層序を確認した。

このうちⅢ層は、遺跡の立地する台地を形成する砂礫土である。このⅢ層の表面は砂の部分と礫の露出する部分がある。Ⅱ層以上はこのⅢ層が人間の活動や自然の影響によって土壌化し形成されたと考えられる。特にⅠ・Ⅰb層は、耕作と整地などの人間活動の影響を受けて形成された層である。それに対してⅡ層は、遺構の部分を除き人間活動の影響を本来受けていないと考えられる。またⅠb層とⅡ層は、その上面に厚さは一定ではないが土中金属の集積が認められ、この集積層は各層の区分をする上で大きな目安となった。その形成原因は、後者が地下水の影響と考えられるが、前者については判断できなかった。なお、調査区東部のⅠ層中には水田の影響と考えられる数枚の土中金属と溶脱層が、中央部北側には砂礫を多く含む整地土と考えられる層が分布しているが、複雑な分布をしておりⅠ層の中に含めて考えた。

これらの層は第10図に示すように、Ⅰ層は調査区全体に、Ⅱ層は中央東側の低い部分に、Ⅰb層はそのⅡ層が窪み堆積が低い部分に、各々ほぼ水平に分布している。



第9図 層序模式図

2 基本層序と遺構・遺物

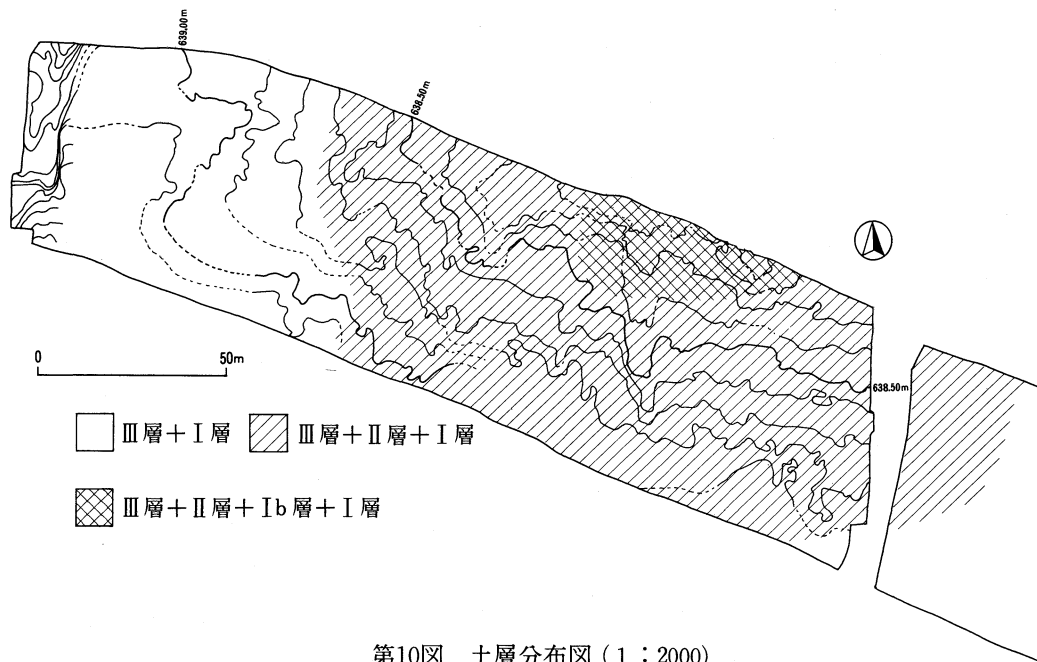
以上の基本層序に従って調査が行われ、それぞれの層序から遺構と遺物が検出された。

まず、層中より出土した遺物についてみてみたい。Ⅰ層からは古代から現代までの遺物が出土した。Ⅰb層からはその分布範囲が狭いため量は少ないが、古代の遺物や中世の内耳土器、中世東海諸窯の焼物や大窯期の陶器、わずかに近世の陶器が出土した。Ⅱ層からは圧倒的な量の古代の遺物と、中世の東海諸窯の焼物、内耳土器、わずかな近世の陶磁器類が出土した。Ⅱ層以上の基本土層は、堆積作用で形成されたと考えられないことから、基本的には混入ということになる。しかし、遺物は概ね古いほどⅡ層に、新しいほどⅠ層にはいる傾向は認められる。しかもその出土が、濃密ではないものの一カ所に集中する傾向も認められる。このことから、ただ混入と考えるには問題が残るようである。

遺構はⅠ層中、Ⅰ層中の整地土上面、Ⅰb層中、Ⅱ層上面で検出された。しかし、層が堆積作用で形成されたと考えられないことから、この検出面がすぐに新旧関係を表すものとは考えられない。次に遺構内遺物を検討してみたい。Ⅲ層上面で検出された遺構からは平安時代末期以前、Ⅱ層上面で検出した遺構からは、非ロクロの土器皿と蓮弁文青磁碗破片を出土したSK1244を最古に、それ以後の遺物が出土している。Ⅰb層上面ではSD21からの内耳土器や大窯から近世初頭の瀬戸・美濃系陶器が、Ⅰ層中の整地土層上面の遺構からは近世後半までの遺物が出土した。

以上の点から、各層を区分し遺構が切り込む土中金属集積層の形成される時期を考えると、Ⅱ層上面は平安時代末期から中世前半、Ⅰb層上面は近世初頭頃となる。各層の年代の上限はこの土中金属集積層の

形成時期と一致する。しかしこれらの層が、堆積作用で形成されていないと考えられるため、多くの問題を残している。また地下水の上昇が、平安時代末期から中世前半にかけてあったと考えることができる。



第10図 土層分布図 (1:2000)

第4章 古代以前

1 縄文時代 (図版76・77 PL54)

遺構は存在せず、少量の土器と石器などの出土が認められた。

土器では、五領ケ台Ⅱ式1点(1)、曾利式後半に伴なう縄文系の土器1点(2)、同じく雨だれ状の列点文を持つもの3個体(3~6)が出土している。

石器類は土器に比べて多く、石鏃11点(7~14)、スクレイパー1点(15)、ピエス・エスキーユ15点(16~30)、打製石斧18点(31~40)、横刃形石器2点(41)を数える。石鏃、ピエス・エスキーユ、石斧類を除くもの大半には稜のつぶれや摩耗痕が認められ、自然の営力による原位置からの移動があったことを示している。土器では、5の断面に若干の摩耗痕が見られる程度である。石鏃・打製石斧の分布は第11図の通りである。

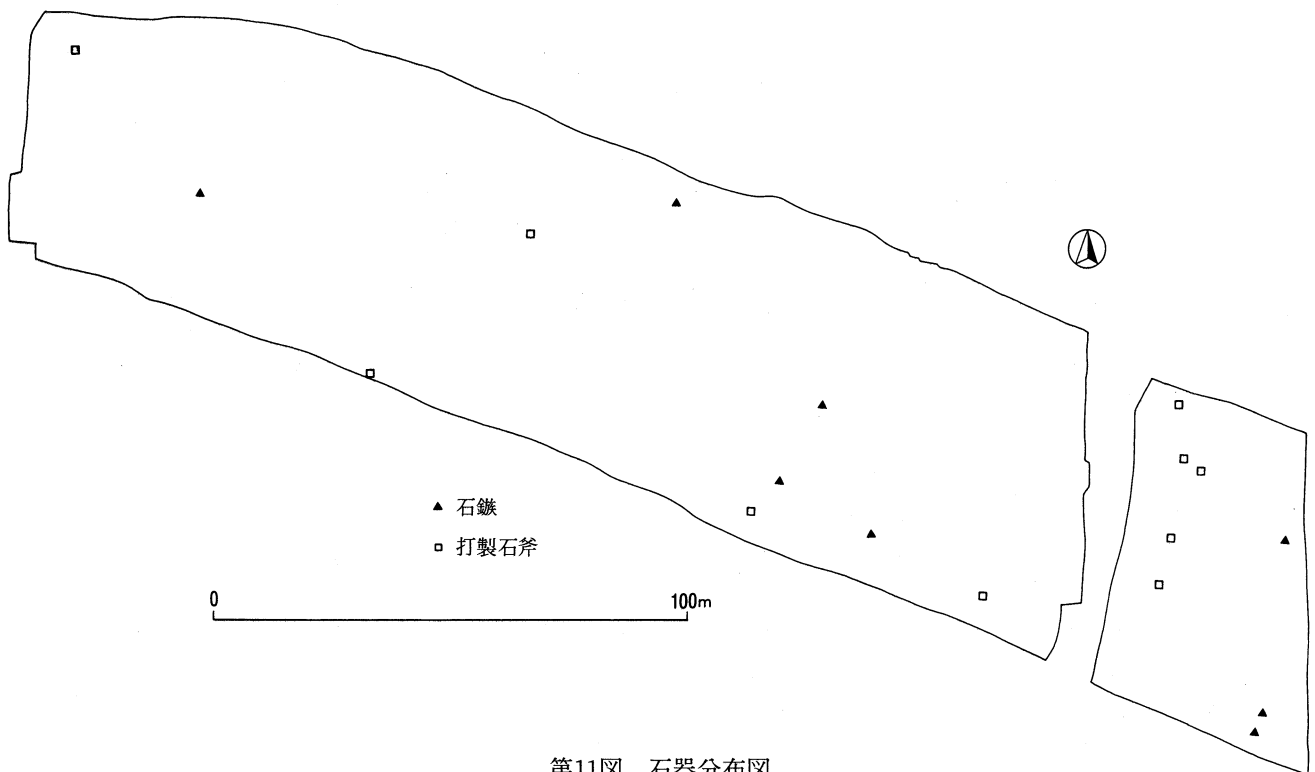
2 弥生・古墳時代 (図版77 PL54)

これらの時期にも遺構は存在しない。

43・44は同一個体で、櫛描文の施された壺形土器である。45は工字文の系譜を引く土器であろう。46はRL縄文をもつ。42はLR縄文の施された小型壺形土器で、底部には木葉痕をもつ。いずれも弥生時代中期のものである。

石器では片刃の磨製石斧(47)と大型打製石斧(48)がこの時期の所産と考えられる。

古墳時代に比定されるものとしては、S字状口縁を持つ甕の胴部破片が1点(RL54 右下)出土しているが、断面の摩耗が激しく、周辺から流入したものと思われる。



第11図 石器分布図

第5章 古代

第1節 遺構

1 遺構の概観

ここでは層序で述べたように、II層中あるいはIII層上面で検出できた遺構を古代(8世紀から12世紀)と認定して扱う。その内容は、建物(竪穴住居址(SB)266軒、掘立柱建物址8棟)、溝(SD)19条、墓(SM、SK)2基と用途不明の遺構(SK、SX、SH、SF)213基である。

最初に、これらに関していくつかの問題点があることを断っておかなければならない。

一つは、それらが単一時期の遺構ではなく、長い間の人間の生活によって作りだされたものであり、それを示すかのように重複関係が複雑である点である。そのため、検出時に誤って新旧関係を認定したものもいくつかあり、調査中に変更した場合もある。また整理の際に遺物より新旧関係を判断したものもある。ここではその最終判断の結果を記していく。

第二は、ここでは大きく古代としてまとめたが、SKとした中にはその検出面がはっきりしないものもあり、新しい時期がまざっている可能性も否定できない。特にIII層直上I層の場合、埋土によって時期区分をしたが判別がつきづらいものもいくつかみられた。

第三は、調査開始時期に遺構記号を付けたが、調査を進める中で記号と異なる性格の遺構になった場合もあるが、記号は変更していない。そのため墓の項にSKが入ったりする場合がある。

2 遺構各説

(1) 建物址

ア 竪穴住居址(SB)

古代の竪穴住居址(SB)は、図版4~48に $S = 1 : 120$ の平面図および断面図を掲載し、住居址番号の横に対応する図版番号とPL番号を示してある。また竪穴住居址内から出土した礫に関しては小結の検討材料とするため、煩雑になるため掲載できなかつたSB51を除く全資料を図版中に書き入れた。

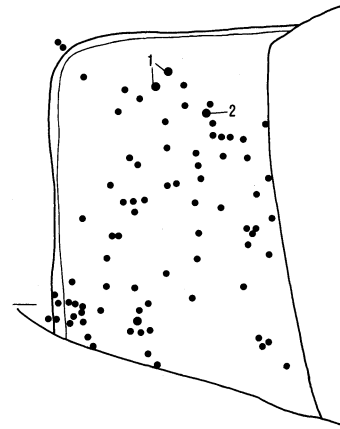
本文は重複関係、主軸、規模(主軸方向、床面最大長×幅×残存壁高の最低値~最高値)、形状、カマドの位置とその状態、その他の施設、覆土と遺物の出土状態の順に記載した。記述はできるだけ簡略化したので、図版・挿図を合わせて見て頂きたい。

本文中の挿図は、遺物の出土状態やカマドをはじめとする諸施設のうち、重要と思われるものを選択して掲載した。縮尺は、住居址全体の遺物分布図が $S = 1 : 80$ 、カマドをはじめとした諸施設は $S = 1 : 40$ を基本としている。図の表現方法は個々の図の凡例を見て頂きたい。

SB01 (図版48)

SK01に切られる。主軸S88°W、規模610×500×5~11cm、長方形を呈する。カマドは西壁中央に設置されており、袖石の一部が壊れた状態を示している。柱穴と思われるピットが2基存在する。

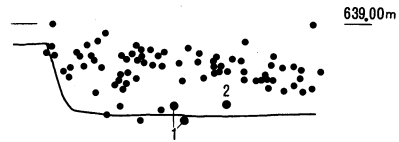
覆土は単層で、礫や土器片が混入している。



SB02 (図版33 第12図)

SB26に切られる。主軸は不明、規模は残存壁で(410)×(255)×33~43cmを測る。付属施設は確認できなかった。

覆土上層では凹地への土器投棄の状況が明瞭に認められる。



第12図 SB02

(遺物番号は図版番号と一致 以下同じ)

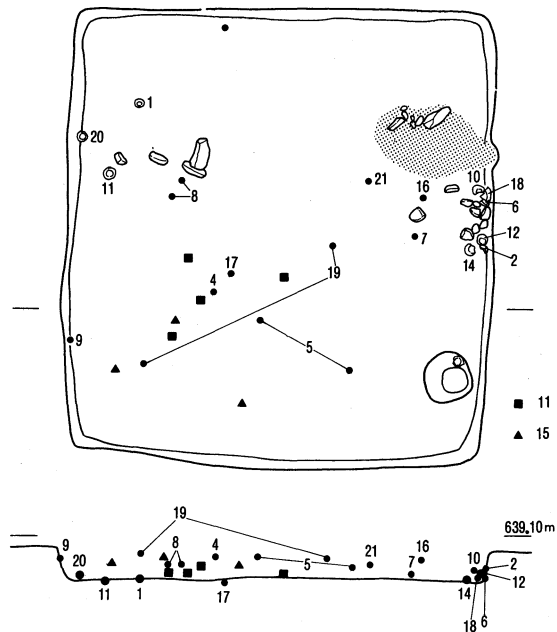
SB03 (図版36)

SB04・05に切られ、SD01と切りあう。主軸N79°E、規模495×455×21~31cm、長方形を呈する。カマドは西壁中央に設置されているが、上面をSB04に切られているため燃焼部の焼土と数点の礫が存在するのみである。

覆土中には礫が散乱し、土器片は北東コーナー近くに散在する。

SB04 (図版36 第13図)

SB03・06→SB04→SB05の重複関係にある。主軸N83°E、規模440×472×7~32cm、南北がやや長い方形を呈する。カマドは、東壁やや北寄りに設置されており、石組みを基礎としているが、右袖は完全に破壊されている。この右袖の南側壁際には礫や土器が集中して出土しており、カマドの破壊との関係で注目される。南東隅にピットがあり、焼土・土器片が混入している。



第13図 SB04

SB05 (図版36 PL16 第14図)

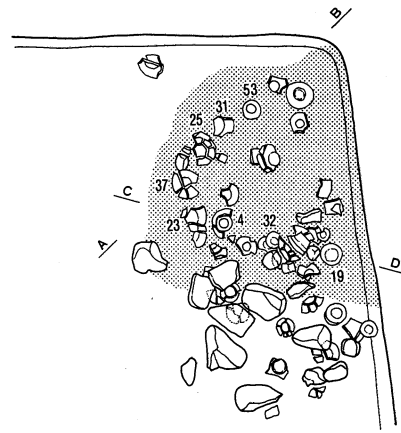
SB03・04・06を切る。主軸S89°W、規模は390×350×19~41cm、東西にやや長い方形を呈する。カマドは西壁やや南よりに設置されている。石組みを基礎としているが、袖の一部が残存するにとどまる。燃焼部上の床面がやや盛り上がり、テラス状になっている。

北東側では、床面が一段高くなっており、その上に炭化物層がひろがり、さらに上面には多量の土器が廃棄されている。また、その南側では大形の礫の投入が認められる。

SB06 (図版36 PL 3 第15図)

SB04・05、NR01に切られる。主軸N80°E、規模は392×(360)×9~30cm、方形を呈する。カマドは明確にし得ないが、東壁中央に焼土・炭化物が分布しており、その可能性を持つ。その両側に浅い落ち込みがあり、遺物の出土が多く認められる。

覆土は2層に分かれ、上層中に礫が散在する。遺物は東側の焼土周辺に比較的多い。



SB07 (図版10)

主軸N88°W、規模403×392×23~36cm、西辺のやや長い方形を呈する。四隅に柱穴を配し、東壁中央直下には入口施設の可能性を持つピットがある。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎とし、その外側を焼土を含む暗褐色土で固めている。破壊状況は不明。

覆土には焼土・炭化物を含み、人頭大の礫や土器片が混在する。遺物は大半が覆土中であり、南東壁際でやや多く出土している。

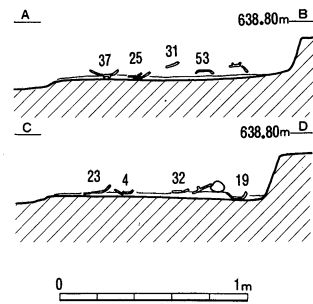
SB09 (図版41・40)

SB10、SK12・15によって切られる。主軸S85°W、規模355×460×18~24cm、南北のやや長い長方形を呈する。西壁中央に位置するカマドはSK15によって南半を削平されている。礫を使用しているが、破壊が激しく全貌は不明である。

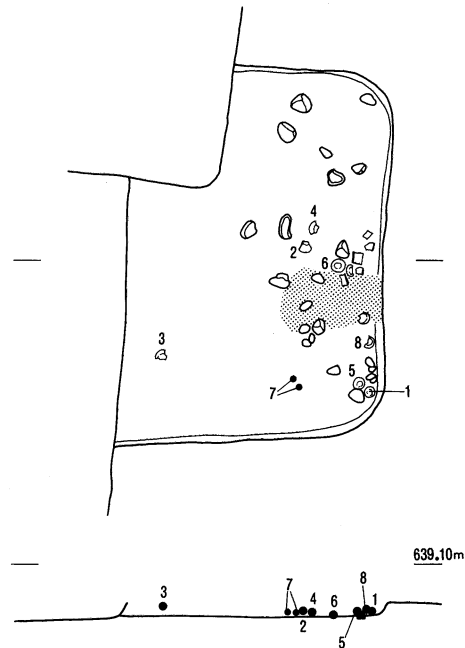
覆土中には多くの礫が認められるが、土器片は少量にとどまる。

SB10 (図版41・40)

SK02、12に切られる。長軸77°W、規模407×320×12~19cm、東西に長い隅丸長方形を呈する。カマドは北西隅に設置され、主軸もコーナーを向け、石組みを基礎としているが、左袖は完全に破壊され燃焼部上に礫・羽釜片が散乱する。



第14図 SB05土器集中区遺物分布



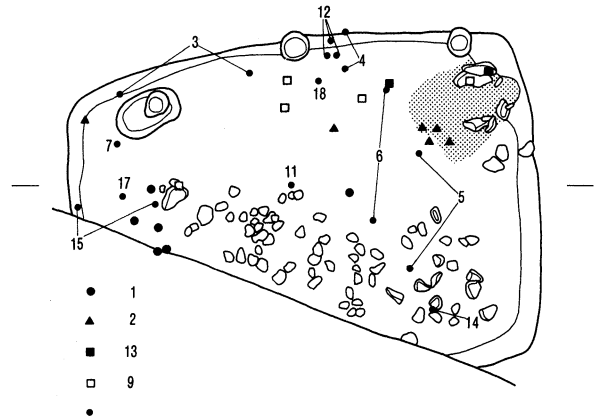
第15図 SB06

覆土は単層で多量の礫が投棄されている。

SB11 (図版41・40)

SB12、25に切られる。主軸N86°E、規模492×(346)×5~25cm、形状不明。検出されたピットは3本である。カマドは東壁に設置され、礫を芯に使い暗褐色土で固めたものである。破壊はさほど顕著ではなく、焚口部に礫や土器片が散乱するにとどまる。

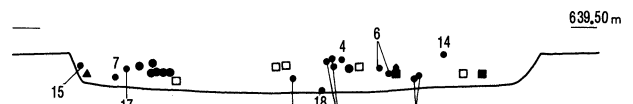
カマド前方から住居中央の床面上には土器の出土が多く、住居中央の覆土中にはまとまった礫の投棄が見られる。



SB12 (図版41・40)

SB11を切る。主軸N79°E、規模400×360×9~16cm、台形を呈する。ピットは柱穴3本、及び性格不明1基である。東壁中央直下に焼土が存在し、礫が散乱することからカマドと考えられる。

覆土中には床面から浮いた状態で礫の散乱が認められ、北東コーナーには焼土の投棄が認められる。

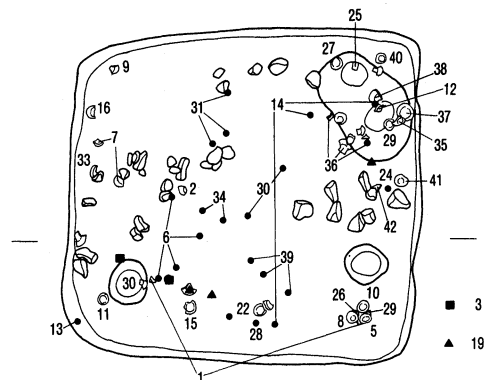


第16図 SB13

SB13 (図版44・45 第16図)

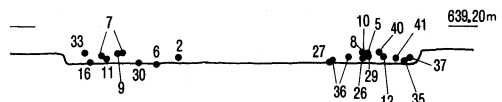
主軸N85°E、規模470×328×13~18cm、東西に長い長方形を呈する。カマドは北東隅に存在し主軸を東壁に向けて設置されている。カマド付近の床面はやや高くなっている。袖の一部は破壊されたらしく燃焼部上層やカマド南側に礫や土器片が散乱している。ピットは3基あり、覆土中に炭化物の混入する北壁上の2基のピットも本址に伴う可能性がある。

覆土中には焼土や炭化物が混在し、礫や土器片が多量に廃棄されている。



SB14 (図版44・45 PL16 第17図)

主軸N81°E、規模355×320×10~20cm、東西にやや長い方形を呈する。確認された柱穴は南寄りに2本認められる。北東のピットは覆土中に炭化物や焼土が混入しており、灰捨て場の可能性を持つ。ここからは土器が数点出土している。東壁中央付近の床面上には焼土と焼成を受けた礫が存在しており、ここにカマドが設置されていたと思われる。



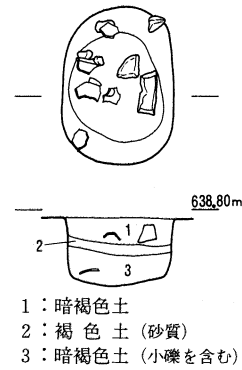
第17図 SB14

覆土中には多量の礫が南西から東北に向かって投棄された状況を示している。遺物はP 1からカマドにかけてと西壁・南壁付近で多く出土している。

SB15 (図版41・40 第18図)

SB17に接近し、SB18を切る。N89°E、345×(285)×15~27cm。カマドは北東隅に設置されている。破壊を受け石組みの礫や土器片が散乱している。床面下より土抗が検出され、その覆土中より土器片の出土が認められる。

覆土中には礫が散乱し、土器片などの遺物はカマドおよび北壁際での出土が目立つ。

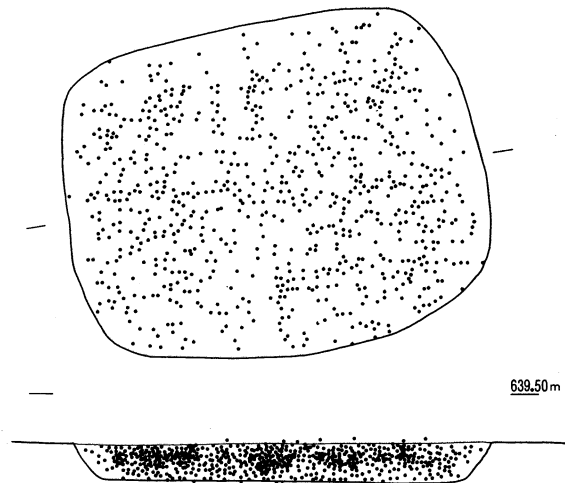


第18図 SB15床下土壌

SB16 (図版44・45 第19図)

SB17・18を切る。主軸N80°E、規模315×395×30~35cm。南北方向が長くカマドのある北東壁が内側に入る。カマドは北東隅に設置されている。破壊が進んでおり、礫や土器が散乱する。焚口の南側に灰捨て穴と考えられる落ち込みが存在する。柱穴は南西隅に1本存在する。

覆土中より土器片などが多量に出土しているが、全て細片である。



第19図 SB16遺物出土状態

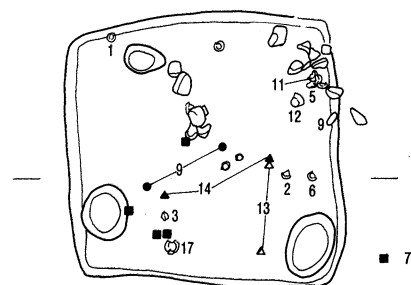
SB17 (図版44・45 PL17)

SB16・18・19に切られる。主軸S82°W、規模335×340×04~26cm、方形を呈する。カマドは西壁にあるが、破壊が激しく、礫や土器片が散乱している。ピットは北壁際に1基検出されている。

覆土中からの礫や遺物の出土は少量にとどまる。

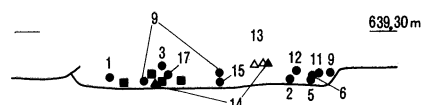
SB18 (図版44・45)

SB17上に貼床し、また、SB15・16、SK14に切られる。長軸N43°E、規模410×380×9~22cm、北東から南西に長い長方形を呈する。カマドなどの施設は不明。北西壁直下の床面上に礫の集中箇所があり、土器片が数点出土している。



SB19 (図版41・40 PL20 第20図)

SB12、SK03に切られ、SB17を切る。長軸N83°E、規模275×265×9~20cm、西辺の短い不整形を呈



第20図 SB19

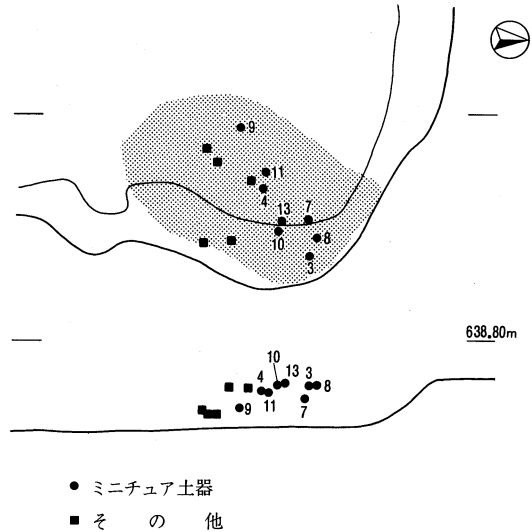
する。カマドは北東隅に存在し、左袖を中心に破壊されている。右袖南側にまとまって土器が出土している。ピットは四隅に3基確認されているが、1基はカマド直下にあり柱穴とは考えられない。

覆土中に礫は少なく、土器片も点在する程度である。

SB20 (図版29・28 PL17)

SP1530・1532に切られる。主軸S89°E、規模433×390×43~53cm。南西壁がやや張り、東西方向にやや長い長方形を呈する。床面には薄い貼床が認められる。カマドは東壁中央に位置し、石組みを基礎としたものである。袖前方部が破壊されており、本来の形状はとどめていない。

覆土には黄褐色土ブロックを多量に含み、カマド前方の床面直上には、多量の礫が積まれたように存在している。遺物はカマド周辺に甕の破片があるものの、覆土からの出土はほとんどない。

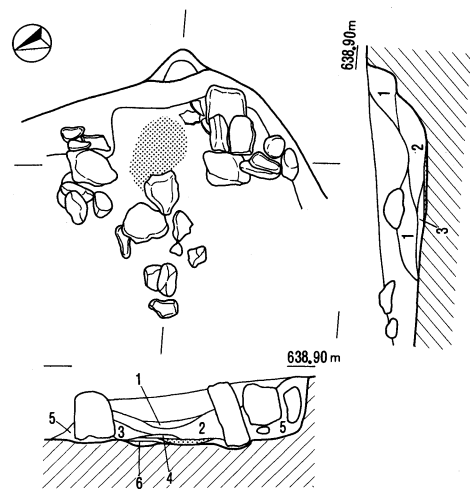


第21図 SB22カマド図

SB21 (図版32・33 PL17)

SB262→SB21→ST08の重複関係にある。主軸87°E、規模425×440×23~36cm、南西コーナーが張り出す不整形方形を呈する。張り出し部の対角コーナーにカマドが設置されている。カマドの袖は東壁を向き、石組みを基礎として構築され土器片などで補強されている。袖前方部は破壊を受けており、礫が燃焼部に向かって散乱している。さらに廃棄時に投入されたとおもわれる土器片が見られる。

覆土は単層で、礫・土器片が散乱している。遺物の出土はカマド周辺、あるいは壁際に多く認められる。



第22図 SB27カマド図

SB22 (図版29・28 PL18 第21図)

SP1512・1513・1514・1515・1516・1519・1523・1524に切られる。主軸S77°E、不整形長方形を呈する。床面は段をなしており、凹凸が甚だしい。下段床の南西・南東コーナーに浅い落ち込みが認められる。カマドはなく、南東隅に焼土を伴なう礫集中が存在する。

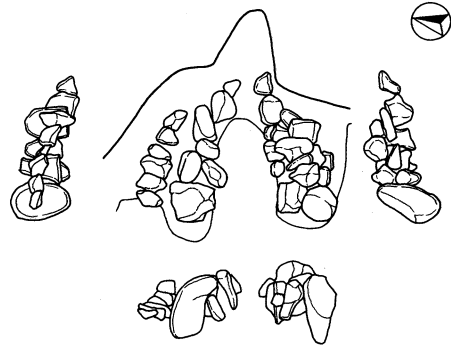
覆土は2層に分れ、下層には多数の黄褐色土ブ

ロックが混入している。また、北東隅には焼土とともに手づくね土器が廃棄されている。カマドがなく、床面も一般的住居と異なっており、廃棄された遺物の様相も考え合わせると、特殊な遺構の可能性を持っている。

SB23 (図版32・33 PL18)

長軸N89°W、規模310×305×31~42cm、隅丸方形を呈する。付属施設はまったく認められない。

覆土は単層で、住居中央やや南よりの床面上に焼土とともに焼礫を含む多量の礫が投棄されている。遺物は覆土中より少量出土している。



第23図 SB28カマド

SB24 (図版44)

大半が調査区域外となるため規模・形状ははっきりとしない。床面直上で土器3点が出土している。

SB25 (図版41・40)

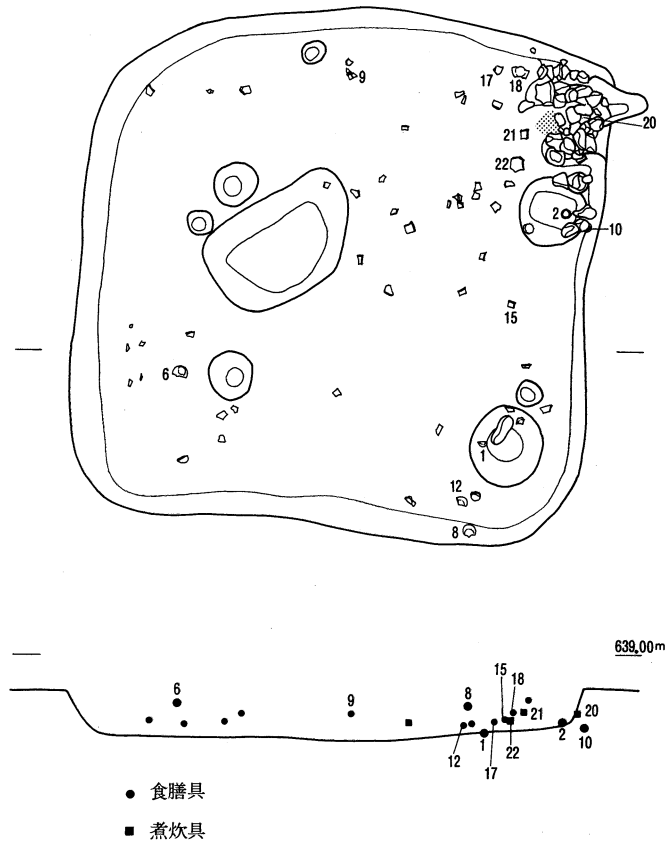
大半が調査区域外となる。東壁下の長楕円形ピットを入口施設と考え、西壁にカマドが来ると想定すると主軸S82°E、規模450×(282)×31~43cm。形状は長方形であろうか。床面中央に炭化物の堆積が認められ、北東壁際では礫と土器片の廃棄が見られる。

SB26 (図版36 PL18)

SB02を切り、SD01に切られる。主軸N76°E、規模370×435×38~50cm。西辺が長く、台形に近い形状を示す。東壁中央に石組みを基礎とするカマドが設置されている。袖・天井の前方部は破壊を受けており、燃焼部から住居中央にかけては礫や土器がまとまって投棄されている。

SB27 (図版38・40 PL 4・19 第22図)

主軸N88°E、規模335×350×25~30cm。ほぼ方形を呈する。カマドは南西コーナーに存在し、主軸を東へ向けて設置されている。石組みを基礎とし、右袖は南壁に接する構造となる。両袖前方部が破壊され、燃焼部からその前方にかけて礫が散乱する。ピットは4個存在する。



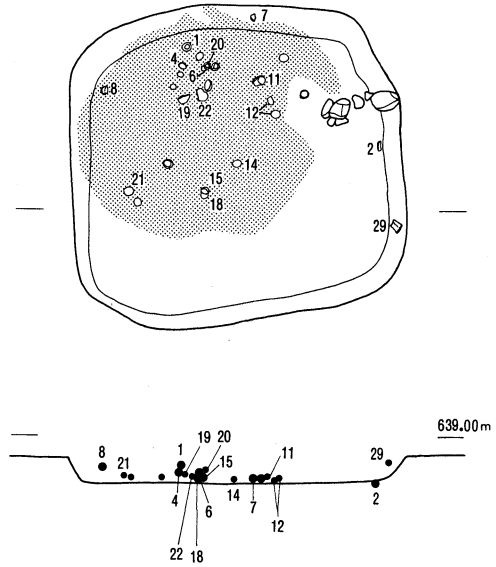
第24図 SB28

覆土には黄褐色土ブロックが混入する。住居中央床面上に炭化物が広がるが礫の集中はない。遺物はカマド前方から燃焼部に羽釜片、住居壁際には完形に近い土師杯などが出土している。

SB28 (図版38・40 PL 4・20 第23・24図)

SB37・87・89、SK136・137を切り、SK1079に切られる。主軸89°E、規模502×505×50cm。変形した隅丸方形を呈する。カマドは北東コーナーに存在し、主軸を東へ向けて設置されている。基礎を石組みとし、左袖は北壁に接する。袖石内面から煙道にかけてよく焼けている。袖前方部・天井は破壊され、燃焼部に礫が甕片とともに落ち込んでいる。ピットは9本検出され、P 1～P 5の5本が柱穴と考えられる。南東コーナーのP 6は埋土中に骨片などを含み、貯蔵穴であった可能性を持つ、住居中央のP 7・8は埋められた痕跡があり、床下土坑とおもわれる。

覆土中から床面にかけて焼土・炭化物がブロック状に入り、土器片・礫は全面に散在し、集中箇所は認められない。

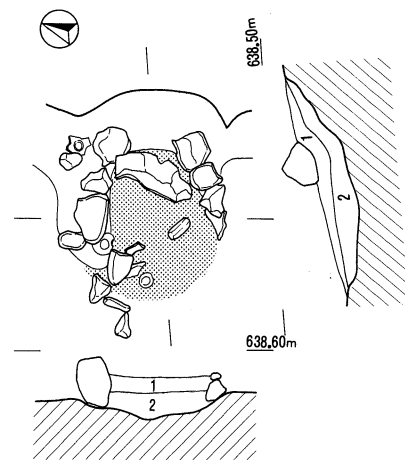


第25図 SB29遺物分布及び
覆土中炭化物分布

SB29 (図版36 PL 4・19 第25図)

主軸N86°E、規模310×290×25cm。東西がやや長い方形を呈する。カマドは東壁中央やや北よりに設置されているが、破壊が著しく左袖の石組みを一部残すのみである。他の施設は認められない。

黄褐色土混じりの第一次埋没土上に多量の炭化物を含む層が北壁際から入り込んでおり、この層の分布と一致して、遺物が含まれている。



1：黒褐色土（焼土粒、炭化物を含む）
2：焼土（炭を多く含む）

第26図 SB30カマド

SB30 (図版38・40 PL 4・20 第26・27図)

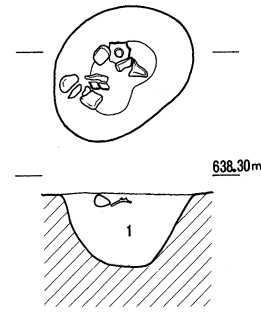
主軸N82°E、規模500×405×15～25cm。カマドのある東壁が張る台形を呈している。カマドは東壁の北よりに設置され、石組みを基礎とし補強に土器片などを使用している。破壊は袖・前方部天井に及び、礫が散乱する。土器片の出土もこの位置に多い。ピットは6本検出されP 2は2段掘り込みで中央には礫が入り、全体に土器片が入る。P 4は灰捨て穴、P 3、6は土器片が混入する。P 1・2・3・6は柱穴であろう。

覆土には焼礫が多く混じり、遺物が検出面から床面にかけて一様に出土している。

SB31 (図版42)

SK25に切られ、SK135を切る。主軸N87°E、東西に長い長方形を呈する。カマドは北東コーナーに設置され、主軸を東壁に向けている。石組みを基礎とし、土師器を補強材としている。支脚石は残存するが、袖・天井前方部が破壊され、付近に礫が散乱する。ピットは不規則な配列で7本確認でき、P 1・2からは遺物が出土している。

覆土中には焼土・炭化物・礫をはじめ骨片・鉄滓・土器片が混入しており、床面直上にも焼土・炭化物が広がっている。また、床面には表面に使用痕の残る工作台と考えられる大礫が据えられており、鉄類の出土が多いことと考えあわせ、ここで何らかの作業が行なわれていたと推察できる。



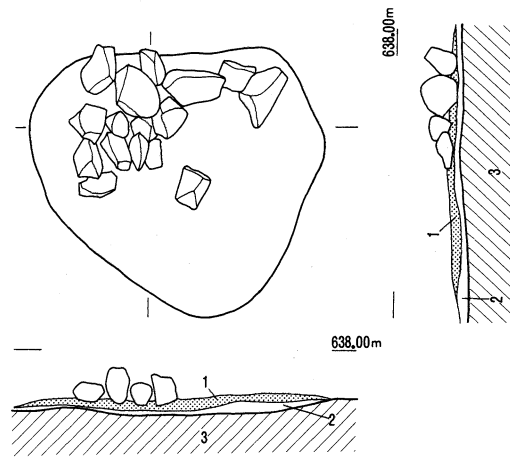
1：黒褐色土（小石を含む）

第27図 SB30 P2

SB32 (図版37・36 PL 4・8・20・21 第28図 第267・268図)

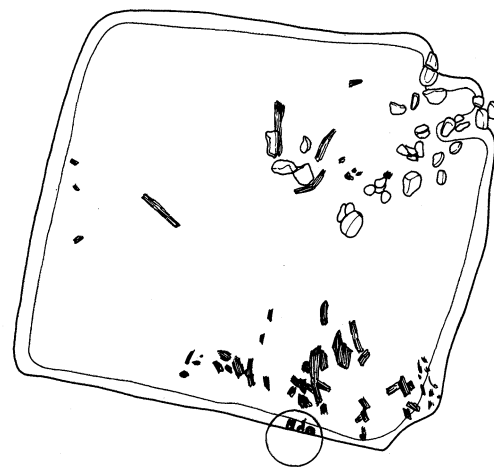
SB126・137、ST206を切り、ST03に切られる。主軸N4°W、規模865×1000×75～85cm。不整な長方形を呈する。カマドは北壁の東寄りに位置する。石組みを基礎としているが、右袖は破壊されており礫が散乱している。カマド前方には灰捨て穴と考えられるピットが2基存在する。柱穴と考えられるピットは4本である。北壁直下の西寄りの部分には焼成を受けた拳大～人頭大の破碎礫を集積した施設が認められ、灰が2～5cmの厚さで堆積している。カマドの構造を示すものではない。また、この施設の西側に4個のピットが検出されている。P12を除く3個には多量の灰と焼土・土器が入り、P 1にも土器が多量に入っている。また、P 1とP 2はその上面を砂利まじりの土によって埋め戻された状況を示している。これらのピットは前述の施設との関連が想定され、火を使う行為がなされたのち、その廃棄物を脇のピットに埋め戻したものと考えられる。

東壁直下には多量の椀・杯・皿・盤が一列に並んだ状態で出土しており、一部では3点が重ねられたままのものも存在している。全て土師器であり、覆土中のものとの接合関係は認められない。



1：焼土
2：暗褐色土（砂、炭化物を含む）
3：Ⅲ層

第28図 SB32石組（1：40）



第29図 SB36炭化材分布

覆土は2層に分層され各々多量の遺物を含んでいるが、層を越えての接合も多く認められる。

SB33 (図版34 PL 4・21)

主軸S78°E、規模410×420×18~24cm。東壁がやや狭い方形を呈する。カマドは北東隅に主軸を東壁に向けて設けられている。石組みを基礎とし、左袖は北壁に接している。破壊が激しく燃焼部より前側には礫が散乱している。これらの礫に混じって土器片が出土している。北西・南東隅に柱穴と思われるピットが配置されている。

覆土は単層で遺物の混在はほとんどない。

SB35 (図版44・45 PL 3)

SB36に切られるが床面は残存している。主軸N76°E、規模450×370×3~26cm、長方形を呈する。カマドは東壁やや南寄りに位置する。上半をSB36に切られ、火床以下が残るのみである。カマド脇の南東隅にピットがあり、炭化物ブロックなどが入っている。

覆土は単層で礫の投棄は認められず、土器片などの遺物もわずかである。

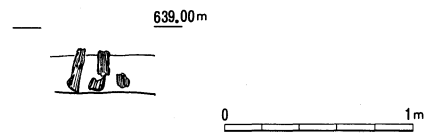
SB36 (図版44・45 PL 3 第29・30図)

SB35を切る。長軸S80°E、規模438×400×25cm、長方形を呈する。カマドは北東隅に設置されている。石組みを基礎としているが、主に左袖を破壊され、礫が散乱している。

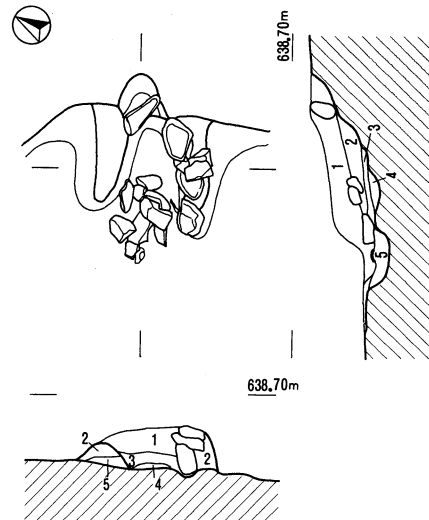
床面には炭化物と焼土が広がり、南壁を中心に炭化材が残存している。炭化材は住居中央に向かって倒れており、一部は南壁際に直立した状態を示している。大半は丸材であり、一部角材らしきものも認められる。

SB37 (図版39・40 第31・32図)

SB226・231→SB37→SB28の重複関係を示す。主軸N85°E、規模(200)×350×25~30cm。不整形方形を呈する。カマドは東壁やや北寄りに設置され、石組みを基礎としたものである。左袖の礫は抜かれ燃焼部に廃棄されている。この燃焼部上からカマド南西

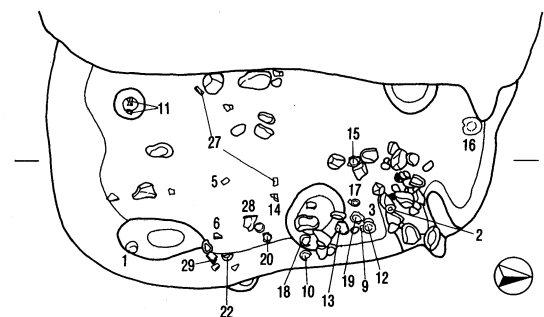


第30図 SB36南壁直立炭化材 (第29図○の拡大)



- 1：暗褐色土（粘性強く）しまり良好、砂、ロームブロックわずかに含む
- 2：暗褐色土（1層より砂粒を多く含む）
- 3：暗褐色土（砂、炭化物、小石を少し含む）
- 4：黒色土 炭粒、焼土粒を多く含む
- 5：暗褐色土 粘性強く、しまり良好、砂、少量、ローム粒ブロック多く含む

第31図 SB37カマド



第32図 SB37

側には焼礫や多数の土器片が廃棄され、特にカマド焚口付近に集中する。ピットは4本確認され、その覆土中には焼礫が混入している。

覆土は単層でブロック状の土が混入する。

SB38 (図版37・36 PL 4)

SB79を切る。主軸N74°E、規模480×450×21~30cm。北東-南西対角線方向にやや長い長方形を呈する。カマドは北東隅に東向きに設置されており、左袖は北壁に接する。煙道は緩傾斜で、屋外へ長くのびるタイプである。その左袖を中心に破壊を受けており礫が散乱する。柱穴はなく、西壁下やや南よりにテラスを持つ。

覆土は単層で、北西隅で礫が集中的に出土している。遺物は少量ながら、住居南西側にやや多い。

SB40 (図版38・40 PL 4・21)

SB41を切る。長軸N81°E、規模390×350×15cm、不整長方形を呈する。中央が一段下がるが、西側の段差は明瞭につかみ切れなかった。造り付けカマドの痕跡がないが、北東コーナー付近の床面に灰層があり、羽釜片や焼礫が散乱していることから、この付近にカマドがあったと推定される。

覆土中に焼土ブロックが点在する。

SB41 (図版41・40)

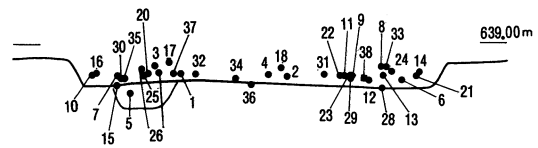
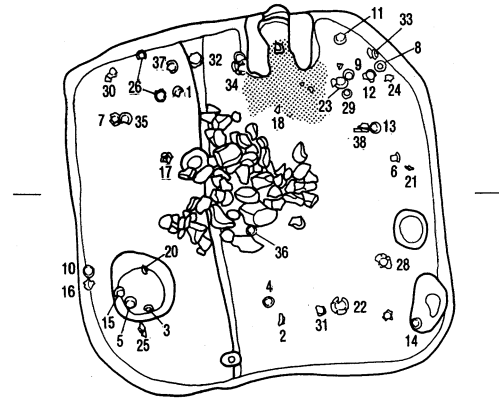
SB40に切られ、SB226を切る。長軸N82°E 規模330×320×23cm、方形を呈する。カマドは東壁に存在したと考えられる。他の附属施設は認められない。

覆土は単層で中央付近には礫が散乱している。

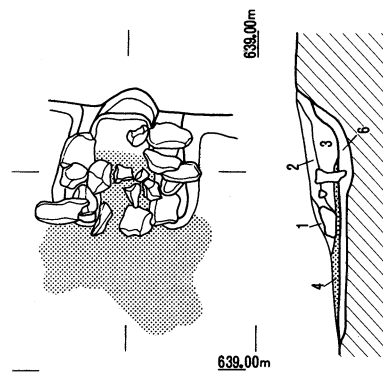
SB42 (図版42・43 PL 3・22)

SB86・229・230、SD19・25を切る。主軸N87°E、規模630×550×35~50cm。隅丸長方形で南壁の西側がやや張る。床面はSD19上に貼床をしており軟弱である。石組みを基礎とするカマドが東壁の北寄りに設置されている。左袖が主に破壊を受けており、カマド前方に礫の散乱が認められる。

覆土中ではカマド南側などで炭化物の集中投棄が見られる。また、北西方向から黄褐色土の埋め戻し



第33図 SB43



- 1: 赤褐色土 (焼土を多く含む)
- 2: 褐色土 (炭化物、多量粒混入)
- 3: 暗褐色土
- 4: 黒褐色土 (炭化物、多量に混入)
- 5: 褐色土 (小砂利混入)
- 6: にぶい黄褐色土 (焼土、炭化物粒子少量含む)

第34図 SB43カマド

土が認められる。床面直上には炭化物の分布があり、P 1には焼土が充填されている。

SB43 (図版47・48 PL 3 第33~35図)

主軸N07°W、規模360×370×16~28cm。北東壁が内側に寄る隅丸方形を呈する。カマドは北壁やや東よりに位置し、石組みを基礎として黄褐色土などで形作られている。前方部天井石がないほか、一部礫の脱落は認められるものの破壊は小規模に留まる。カマド内での遺物の出土は認められない。ピットは4本確認され、うち西側のテラス上にあるP 1は覆土に多量の焼土を含んでいる。

住居中央の床面直上には、多量の礫が山積みになって投棄されており、その大半は焼成を受けていたり、煤の付着が認められたりしている。覆土中には焼土ブロックの混入がある。また、遺物は床面から浮いたものがほとんどで、カマドの東側、及び壁寄りに多く、礫と伴出するものはすくない。

SB44 (図版35・34 PL 4・22)

SK1052、SP1063・1064・1068・1069・1072・1080に切られる。主軸S 80°W、規模295×220×35~45cm。北西一南東方向の長い不整形方形を呈する。カマドは西壁中央に設置されている。破壊が大半に及んでいるが、本来から礫を多く用いない構造のようである。土師器片が少量出土している。

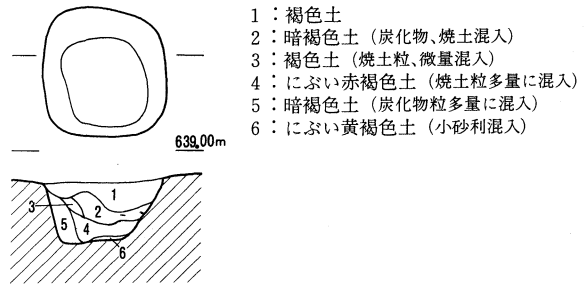
住居中央の床面上には多量の礫(焼礫を含む)が集積され、その北東側床面直上には焼土の堆積が認められる。

SB45 (図版46・48 PL 3・23 第36・37図)

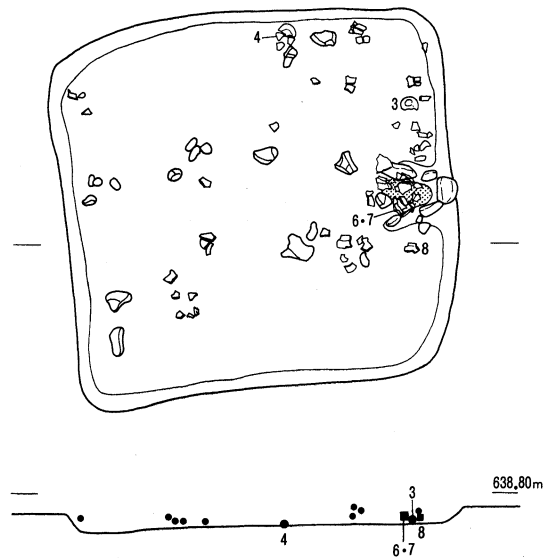
主軸85°W、規模390×370×15cm。方形を呈する。石組みを基礎としたカマドが東壁中央に設置されている。支脚石も残存し、破壊は顕著ではないが、燃焼部上層には多量の土師器甕片が投棄されており、カマドを封鎖している。

礫や土器片の出土は床面よりやや浮いた状態で出土しており、カマド周辺に多い傾向が認められる。

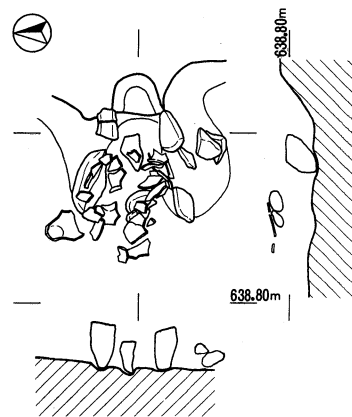
SB46 (図版34 PL 4)



第35図 SB43焼土充填ピット



第36図 SB45



第37図 SB45カマド

SK20に切られる。主軸は真東を向く。規模400×400×3～16cm、方形を呈する。カマドが設置されていたと思われる東壁中央がやや張り出す。カマドは破壊が著しく焼土と礫が散乱する程度である。

覆土中には礫が多量に投入されている。遺物は少ない。

SB47 (図版33 PL 4)

SD01に切られる。主軸N87°E、規模310×310×25～40cm。北東—南西方向に張る不整形方形を呈する。カマドは東壁の北よりに存在し、焼土と土師器が認められるのみで、袖は不明である。

住居中央の覆土中には多量の礫が集積された状態で検出されている。遺物は覆土中より少量出土している。

SB48 (図版44・45 PL 3・22 第38図)

SK76に切られ、SB49を切る。主軸N70°E、規模385×390×12～30cm。東辺が長くなる台形を呈する。石組みを基礎としたカマドは東壁北よりに位置する。原形はとどめず、礫の散乱なども認められない。右袖上と焚口部から杯が出土している。南西壁際に貯蔵穴と思われるピットが1基あり、その底面より馬具が出土している。

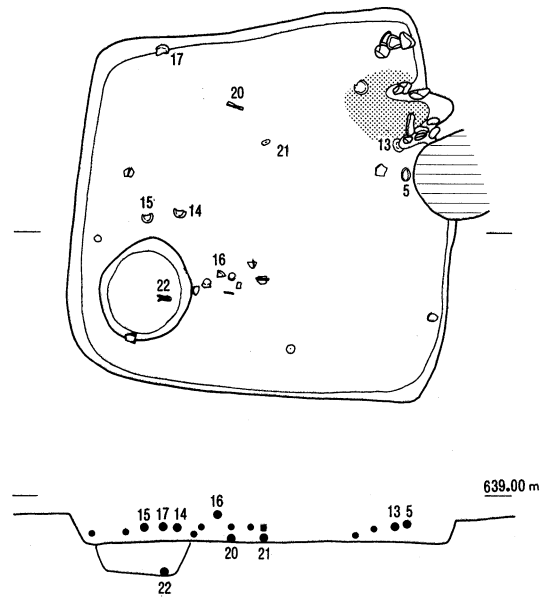
覆土中には炭化物・焼土・礫を多く含み、遺物はカマド付近及び西南側で床面から浮いた状態で出土している。

SB49 (図版44・45 PL 7・23 第39図)

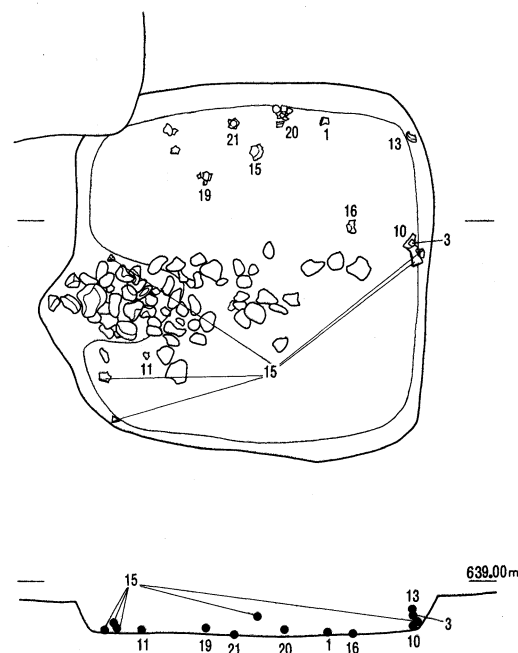
SB48に切られる。主軸S85°W、規模355×350×40cm。西辺がやや短い方形である。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎とし、前方部の袖・天井の一部がくずれている。しかし、この部分から焚口部にかけては多量の礫が投入されておりカマドを封鎖している。

覆土は焼礫を含む単層で、遺物はカマド前方の集積礫の部分、及び北壁・東壁際の覆土中に認められる。

SB50 (図版38・40 PL 4・23 第40図)



第38図 SB48



第39図 SB49

SB83、115を切る。主軸S87°E、規模420×430×25cm、方形を呈する。カマドは東壁の北寄りに位置する。石組みを基礎としたものである。カマド南側には張り出し部を持ち、灰捨て用と思われるピットが存在する。南東コーナーにはやや大きめのピットがあり、その他6基が認められる。

カマド前方部床面付近と住居中央覆土中から遺物が比較的多く出土している。

SB51 (図版43・42 PL 3 第41図)

SB130→SB51→SK115の重複関係にある。主軸N80°E、規模500×570×20~45cm。南北のやや長い方形を呈する。床面にはカマド前方から住居中央あるいは南東ピット周辺に広く炭化物が分布し、点々と焼土が混在している。カマドは北東隅に存在し、主軸を東壁に向けて設置されている。石組みを基礎とし、袖中には土器片の混入がある。燃焼部から煙道にかけて非常によく焼けており、焚口付近での炭化物の堆積も厚い。天井・右袖の一部が破壊を受けている。ピットは3基、P1には炭化物が多量に混入している。

覆土中には礫が多量に混入し、特に検出面直下住居中央にまとまって出土している。南壁際の覆土中より微量の遺物が出土している。

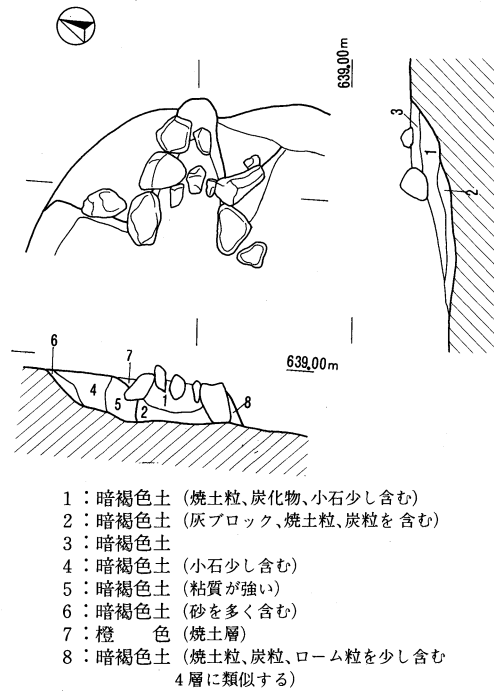
SB52 (図版46・48 PL 3・7 第52図)

主軸N84°E、規模310×340×25~35cm。方形を呈する。カマドは東壁中央に配されている。石組みを基礎としその間隙にも土器が混入されている。袖上部及び天井が壊されており、燃焼部上からは土器片や礫が出土している。北西コーナーに貯蔵穴と思われるピットが存在する。

遺物はカマド周辺に土器が、また住居中央付近から刀子が出土している。

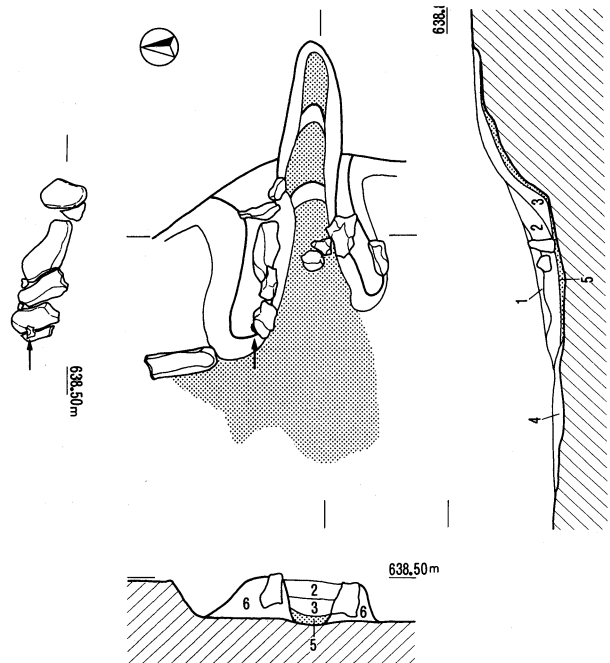
SB53 (図版47・48 PL 3)

主軸N11°W、規模315×315×18~25cm、方形を呈する。カマドは北壁中央やや東寄りに位置する。破壊が著しく原形を留めていない。カマド前方を中心に礫の廃棄が認められる。



第40図 SB50カマド

- 1 : 暗褐色土 (焼土粒、炭化物、小石少し含む)
- 2 : 暗褐色土 (灰ブロック、焼土粒、炭粒を含む)
- 3 : 暗褐色土
- 4 : 暗褐色土 (小石少し含む)
- 5 : 暗褐色土 (粘質が強い)
- 6 : 暗褐色土 (砂を多く含む)
- 7 : 橙 色 (焼土層)
- 8 : 暗褐色土 (焼土粒、炭粒、ローム粒を少し含む
4層に類似する)



第41図 SB51カマド

- 1 : 褐色土
- 2 : 暗褐色土 (焼土粒、炭化物粒混入)
- 3 : 暗赤褐色土 (焼土粒、多量に混入)
- 4 : 黒色土 (炭化物のみ) と褐色土 (焼土粒、地山の黄褐色土混入) の互層をなしている
- 5 : 焼土
- 6 : 褐色土

遺物はカマド周辺に甕片、壁際で杯の出土が見られる。

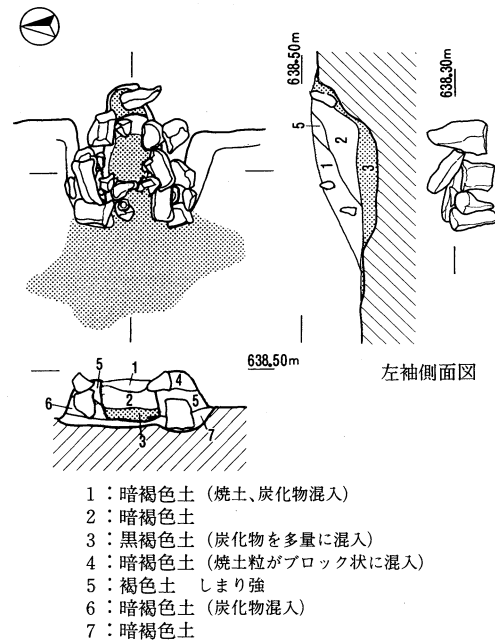
SB54 (図版46)

長軸S81°W、規模240×210×35cm。隅丸方形を呈する。付属施設はなく、遺物も微量である。覆土中に多くの焼礫を混入する。

SB55 (図版46・48 PL 3)

SB56を切る。主軸N84°E、規模375×380×30cm。不整形方を呈する。床面にはSB56上に張り床した部分が認められる。石組みを基礎としたカマドは東壁中央に設置されていたと考えられるが、破壊が著しく礫・土器片が散乱した状態しか認められない。

覆土は単層で、カマド周辺に多量の礫が投棄されている。



第42図 SB52カマド

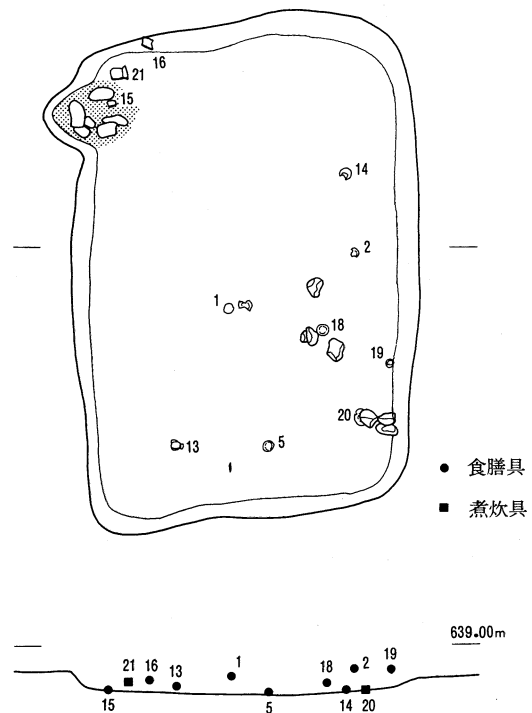
SB56 (図版46・48 PL24)

SB55に切られる。長軸N09°E、規模450×390×20~30cm、長方形を呈する。附属施設は検出されず、遺物もわずかである。覆土中には拳大前後の礫が混入している。

SB57 (図版41・40 PL 4)

SB85、88を切る。主軸S87°E、規模362×225×18~36cm、長方形を呈する。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。破壊が著しく煙道とわずかに焼土が残るのみである。ピットは1基存在する。本址に伴なうものか、SB88に伴なうものか不明である。

北壁際に炭化物が多量に認められた。遺物はこの位置からやや南に広がっている。



第43図 SB58

SB58 (図版46・48 PL 3・24・25 第43図)

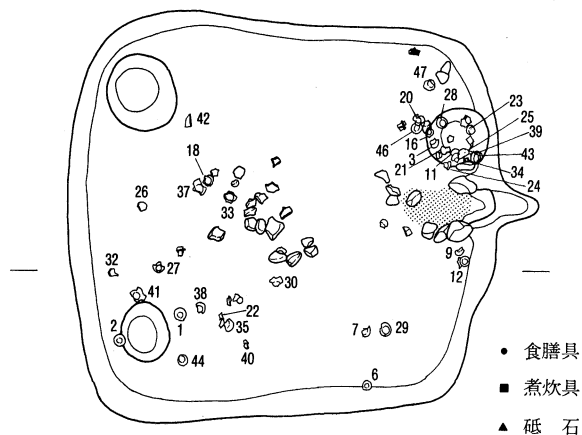
主軸N90°W、規模320×495×20cm。長方形を呈する。カマドは北西隅近くに主軸を西に向けて存在する。石組みを基礎としたもので、右袖を中心に破壊が認められる。

遺物はカマドから離れた覆土中に散乱した状態で出土している。

SB59 (図版43・42 PL 3・24)

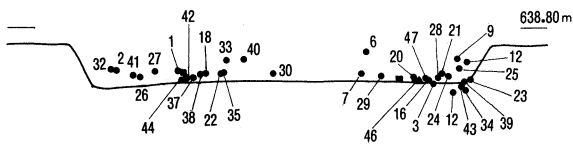
主軸N89°E、規模440×430×18~25cm。北辺のやや長い不整形を呈する。床面には薄く黄褐色土の層が認められ、地山の砂利層上に敷いた可能性もある。北壁と西壁直下には壁溝が存在する。カマドは北東隅に主軸を東に向けて設置されている。石組みを基礎としており、北壁に接していたと考えられる左袖はほとんど破壊されている。

少量の遺物は特に集中することもないが、比較的壁際による覆土中から出土している。



SB60 (図版45 PL 3)

主軸N06°W、規模315×(295)×6~15cm、カマドのある北側の膨らむ不整形を呈する。カマドは残存状況が悪く、礫が散乱している。覆土は単層で床面上に焼土の堆積が認められる。

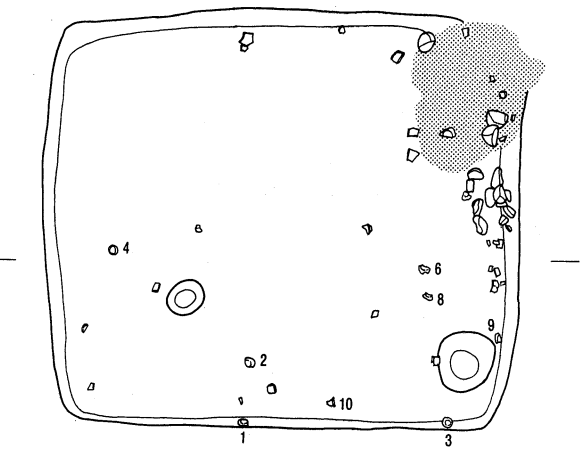


第44図 SB63

SB61 (図版35 PL 4)

北東壁をローマウンドに切られる。主軸N86°E、規模270×283×25cm、カマドのある東壁が短くなる台形を呈する。カマドは焼土と礫の散乱が見られる程度である。

覆土は2層に分かれ、1層中には炭化物・焼土・礫が混入する。土器の出土は壁際で多くなる。



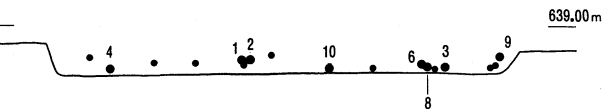
SB62 (図版46・48 PL 3)

SB93・97を切る。長軸はN90°E、規模は395×230×7~15cm。不整形長方形を呈する。住居内施設は特になく、覆土中に礫が少量混入していたにとどまる。遺物もわずかである。

SB63 (図版35・34 PL 4・25 第44図)

SP1075、1120、NR07に切られ、SB177を切る。主軸N83°E、規模410×395×30~40cm、隅丸方形を呈する。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としているが、左袖は破壊されている。南東隅を除く三方にピットが存在する。カマド北側のピット上面付近には多量の土器が廃棄されており、東壁際の焼土・炭化物がピットの覆土へも流れ込んでいる。

住居中央床面上には炭化物が集中し、礫を多く伴



第45図 SB64

なっている。覆土中にも焼土・炭化物の投棄が認められる。遺物は前述したごとくカマド北側に集中するほか住居中央から南西側にかけて散在する。

SB64 (図版36 PL 4 第45図)

SK70に切られ、SB84を切る。主軸N87°E、規模465×420×25cm、東西のやや長い長方形を呈する。カマドは北東コーナーに位置する。石組みを基礎としていたと考えられるが、破壊が甚だしく礫が散在している。南東コーナーに貯蔵穴の可能性を持つピット1基、この他に1基ピットがある。

カマド南側壁際に礫の集中がある。土器片などの遺物は東～南にかけて多く出土している。

SB65 (図版37 PL 4)

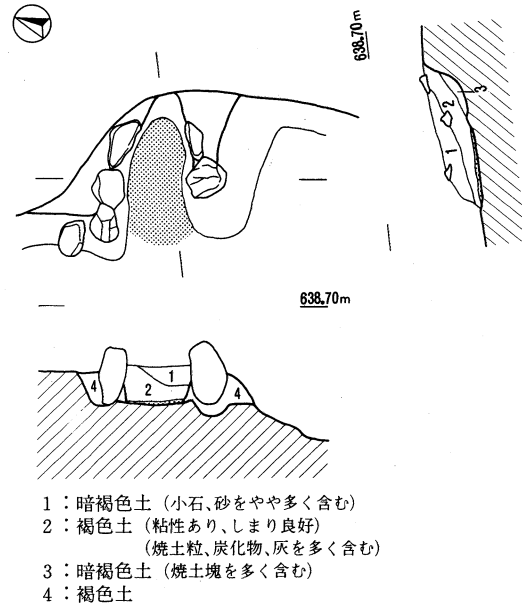
SB199を切り、SB155と重複する。主軸はS77°E、規模462×480×12~18cm。不整形を呈する。カマドは北西隅に位置し、主軸を西壁へ向けて設置されている。石組みを基礎にしているが、左袖は完全に破壊されている。

遺物は土器細片がほとんどである。礫の投棄も認められない。

SB66 (図版43・42 PL 3・25 第46・47図)

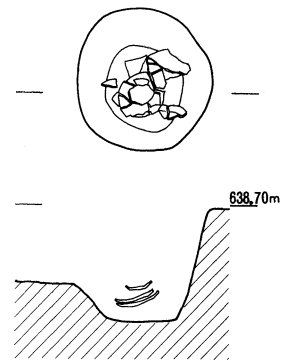
ピット4本に切られる。主軸N73°E、規模465×430×20~30cm。カマドの位置で屈曲する不整形を呈する。床面は一部が焼けている。南壁・西壁から北壁中央にかけて、壁溝がめぐる。カマドは石組みを基礎として東壁北寄りに設けられてるが、左袖は住居の形状を屈曲させて地山を利用している。袖前方部は破壊を受けている。P 2、P 4は柱穴。P 2、3は貯蔵穴であろうか、両者からは土器の出土があり特にP 1には黒色土器A碗が重なって出土している。

覆土中には焼土の集中や礫の投棄は認められない。遺物の出土状態は大きく2グループに分かれる。1つはカマドの南側で床面より出土しており炭化材や焼土ブロックを伴っている。2つめは住居西側から北側にかけて、床面より浮いた状態で出土している。前者には完形土器に近いものも多く、後者は



- 1：暗褐色土 (小石、砂をやや多く含む)
- 2：褐色土 (粘性あり、しまり良好)
(焼土粒、炭化物、灰を多く含む)
- 3：暗褐色土 (焼土塊を多く含む)
- 4：褐色土

第46図 SB66カマド

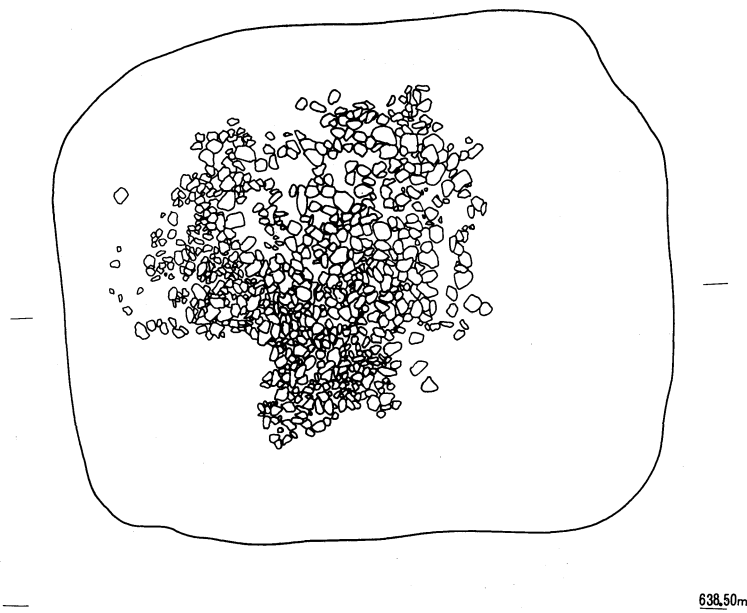


第47図 SB66 P1
遺物出土状態

破片がほとんどである。

SB67 (図版42)

SB117・131を切る。主軸は真東を向く、規模225×292×30~32cm。隅丸方形を呈する。カマドは東壁中央に焼土と甕破片が残存する程度である。焚口部から住居中央にかけては、床面に大形の礫が積まれるように廃棄されており、その北側と西側には炭化物の集中が見られる。カマドの破壊から住居廃絶にかかわるものであろう。遺物は覆土上層からの出土が多い。



SB68 (図版43・42 PL 3)

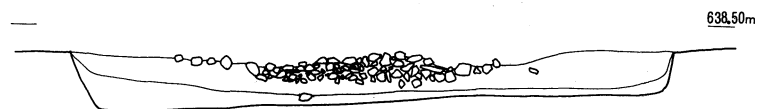
SB93上に貼床し、またSD11に切られる。主軸N84°E、規模450×433×12~25cm。方形を呈する。カマドは東壁中央直下の焼土・炭化物が集中する箇所と考えられる。ピットが4基認められるが、柱穴か否かは不明である。

床面上には東側から中央にかけて礫の集積が認められ、3か所で焼土の集中が見られる。また、覆土上層にも厚い焼土の堆積が認められる。

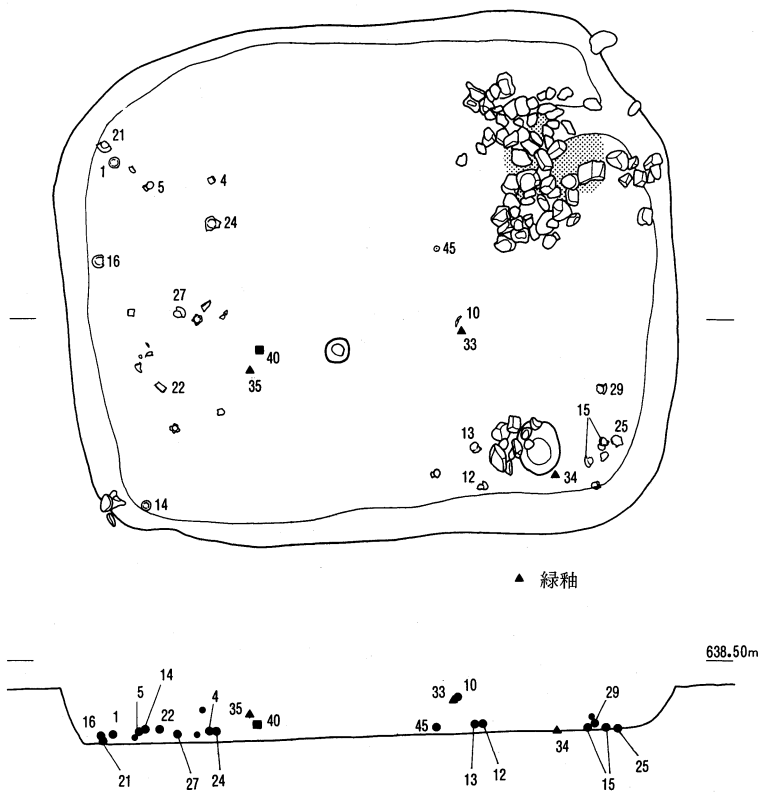
SB69 (図版42 PL 7・26 第48・49図)

SB154・184・199・204・223を切り、SD06に切られる。主軸85°E、規模610×495×36~55cm。東西に長い隅丸長方形を呈する。カマドは北東隅に主軸を東壁に向けて設置されている。石組みを基礎としているが、左袖は完全に破壊されており、さらに燃焼部から焚口前方にかけて多量の礫が投入され、カマドを廃絶している。ピットは4箇所確認され、うちP1には炭化物が混入しており、灰捨て穴と考えられる。

覆土は大きく2層に分かれ、下層には炭化物や焼土がブロック状に投棄さ



第48図 SB69礫分布



第49図 SB69

れている。また南東壁付近に礫と土器片などが、西壁際から住居中央に向かっては土器片などが、それぞれ投棄されている。上層においては、住居中央の凹地となっていた部分へ礫の多量投棄が見られる。

SB70 (図版24 PL 5・6・26)

SK75に切られる。主軸N89°E、規模385×360×15~20cm。不整形を呈する。カマドは北東隅に位置し、主軸を東壁へ向けて設置されている。石組みを基礎としており、左袖は北壁に接する。ピットは東壁際で2基、カマド焚口部の貼床下より1基検出されている。

覆土は単層で遺物・礫の混入はほとんどない。

SB71 (図版24 PL 5・6・26)

SB139を切る。長軸N88°E、規模375×325×25~35cm。カマドを北東隅に設置するため北壁が張り出した不整形を呈する。カマドは石組みを基礎としたものであるが、左袖は破壊され、礫の残存はない。燃焼部及びその周辺に床面から浮いた状態で土器が出土している。

覆土は単層で、住居中央の床面からやや上層にかけて礫が、北西壁近くに礫や紡錘車などが集中して出土している。

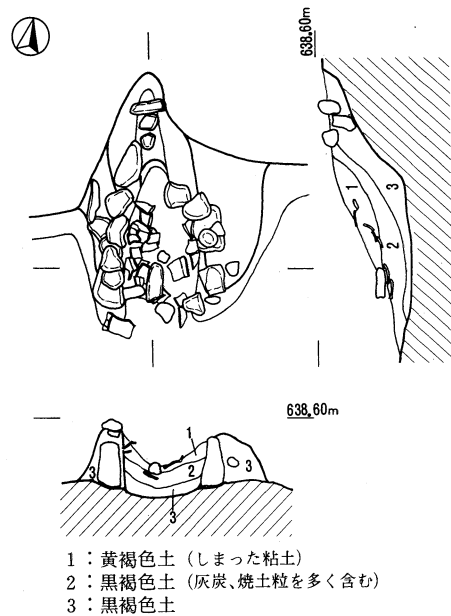
SB72 (図版46・48 PL 3 第50図)

SB93、97を切る。主軸N77°E、規模320×366×22~34cm、隅丸長方形を呈する。カマドは東壁中央に設置されている。石組みを基礎としたもので、天井石が抜かれている程度で破壊は顕著ではない。燃焼部上層より礫や土師器が出土している。柱穴は3基存在する。

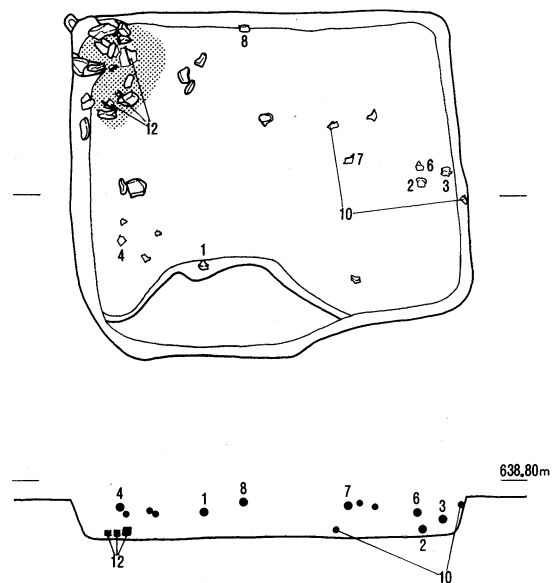
覆土は単層で、カマドの南西側に多量の礫が投棄されている。

SB73 (図版43・42 PL 3・27 第51図)

SK64を切る。長軸S86°W、規模388×340×31~40cm。西南部に張り出しを持つ不整形長方形を呈する。張り出し部直下にはテラスが設けられている。カマドは北西隅に設置され、主軸も同方向である。石組



第50図 SB72カマド



第51図 SB73

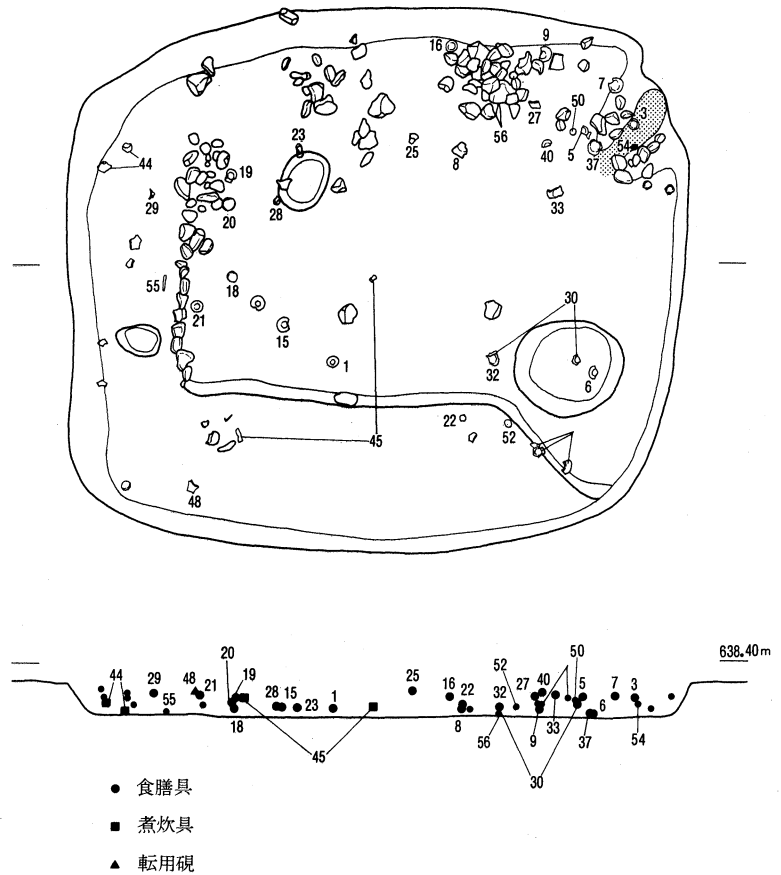
みを基礎としている。破壊を受けているものの燃焼部や支脚石は残存している。焚口周辺の床面に礫や羽釜片が散乱している。

覆土中には少量の遺物が散在する。

SB74 (図版42 PL 8・27 第52・53図)

SB197、219を切り、SD06に切られる。主軸 N83°E、規模630×500×25~40cm。東西方向に長い不整長方形を呈する。西壁から南壁直下に「L」字形にテラスが存在し、テラスと下段の床面との境には礫を一行並べている。カマドは東壁北寄りに、主軸を北東へ向けて設置されている。石組みを基礎としており、破壊は顕著ではない。ピットは掘り込みの浅いものが3個存在する。

覆土中には、北壁付近に礫が集中して投棄された場所が2箇所あり、西よりのものには焼土と炭化物が伴なう。土器などの遺物は住居中央を除いてまんべんなく出土している。また、南壁際からは炭化した枅の実が多量に出土している。



第52図 SB74

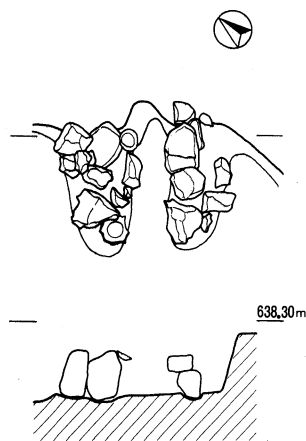
SB75 (図版36)

SB82を切る。主軸 S81°W、規模(300)×280×14~22cm、北東コーナーの突出する不整形を呈する。カマドは西壁中央に位置し、石組みを基礎としたものである。左袖が破壊されている。

覆土中には住居中央付近に多量の礫が集積されている。

SB76 (図版24 PL 5・6・27)

SB111を切る。主軸 S85°E、規模370×385×23~30cm。不整形を呈する。石組みを基礎としたカマドは東壁北寄りに設置されている。破壊のため原形が崩れ燃焼部上層に礫や土器の混入が見られる。



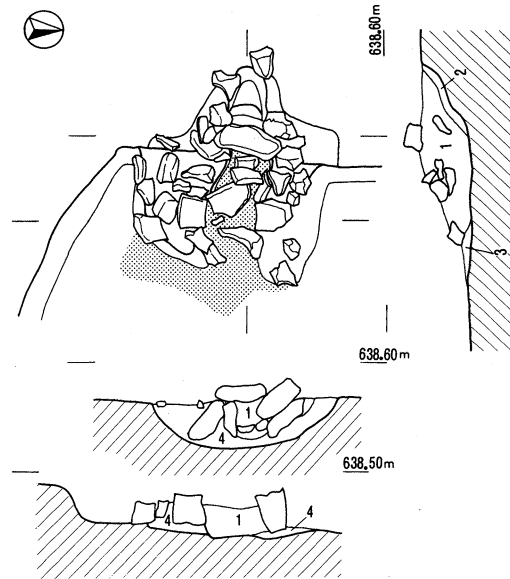
第53図 SB74カマド

覆土は単層で、遺物はカマドのある東壁側に多く見られる。礫の投棄は微量である。

SB77 (図版46・48 PL 3)

主軸N78°E、規模570×560×17~23cm。方形を呈する。ピットは1基のみである。カマドは東壁中央に位置し、焚口部の焼土・炭化物の堆積はひじょうに厚い。石組みを基礎としているが、左袖は破壊され、礫や砂質粘土が付近に散乱している。燃焼部覆土中に土器片が混入している。ピットは1基のみである。

住居中央の床面上に認められる黄褐色土主体の堆積が特徴的である。覆土中の遺物は少量にとどまる。



- 1 : 黒褐色土 (焼土粒混入)
- 2 : 極暗赤褐色土 (焼土粒を少量混入)
- 3 : 黒色土 (炭化物を多量に混入)
- 4 : 褐色土

第54図 SB77カマド

SB78 (図版38・40 第54図)

SB80・123・169を切る。主軸N88°E、規模430×360×25~35cm。東西に長い不整長方形を呈する。住居中央に床下土坑が存在し、比較的厚い貼床で構築している。カマドは北東隅に主軸を東壁へ向けて設置されている。石組みを基礎としたものであるが、左袖石には崩れが見られる。また、燃焼部上層には礫の投棄が見られる。

覆土中に礫の混入は少なく、土器などの遺物は全体に散在している。

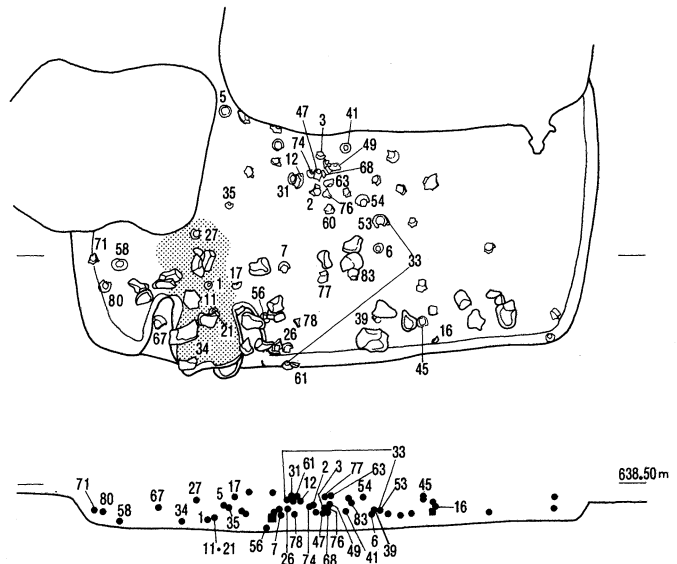
SB79 (図版37・36)

SB38・120に切られる。残存部規模385×(90)×20~30cm。形状は不明。カマドは北西隅に位置し石組みを基礎としたもので大半が破壊されている。

SB80 (図版39・40 第55図)

SB78・169、SK132に切られる。主軸N89°E、規模(285)×510×14~28cm。形状は不明。カマドは東壁南寄りに位置する。石組みを基礎としているが、破壊を受け、礫は原位置を保っていない。

覆土中には多量の土器が投棄されており、礫は東壁際に集中する傾向を示す。

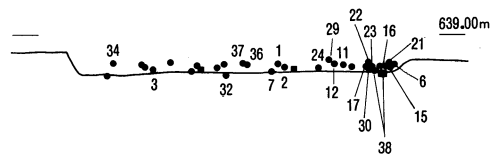
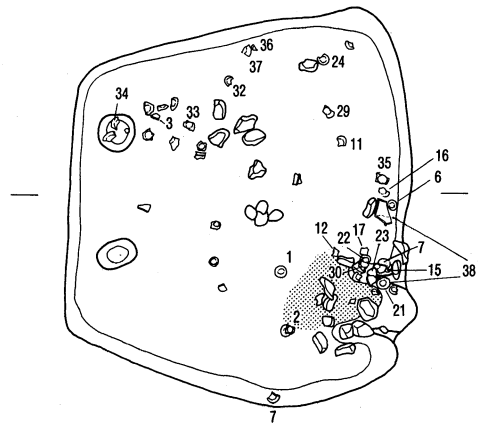


第55図 SB80

SB81 (図版44・45 PL28 第56・57図)

SB83を切る。主軸N77°E、規模340×380×14~23cm、不整形を呈する。西壁下に柱穴が2基存在し、ほかに炭化物を多量に混入するピットが1基存在する(P1)。カマドは東壁の南寄りに位置する。石組みを基礎としているが、破壊によって袖前方部・天井は失われている。

覆土は単層で、遺物はカマドの北側に集中しており、そこより北西方向にかけて出土が目立つ。



第56図 SB81

SB82 (図版36)

SB75に切られる。残存部長軸N26°E、規模275×(180)×20cm、不整形を呈する。北西壁に2基のピットが存在している。

西側コーナーに礫が集中する。

SB83 (図版43・42 PL11・25)

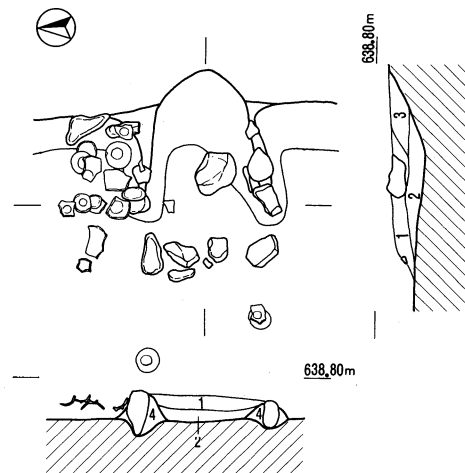
SB81・1157切られ、SB242を切る。主軸S80°W、規模360×(350)×20cm、不整形を呈する。西壁ほぼ中央に石組みを基礎としたカマドが存在する。支脚・天井石が残っており、破壊行為は認められない。ただし、甕を中心とする多量の土器片が燃焼部内へ投棄されている。

覆土への礫の投入はない。

SB84 (図版36 第58図)

SB46・64に切られる。主軸S88°E、規模445×442×11~22cm。不整形を呈する。カマドは北東隅に主軸を東壁へ向けて設置されている。袖は破壊されているものの、本来は左袖が北壁に接していたものと思われる。右袖は若干残存し、地山を掘り残して芯とし、内側に礫を配している。柱穴の可能性を持つピットが3基検出されている。

覆土は単層。遺物は東壁側に多く、床面から確認面にかけてまんべんなく出土している。



- 1 : 暗褐色土 (焼土粒、炭化物を多く含む)
- 2 : 暗褐色土 (礫と砂を少し含む)
- 3 : にぶい黄褐色土
- 4 : 褐色土 (少量の焼土粒、炭化物が混入する)

第57図 SB81カマド

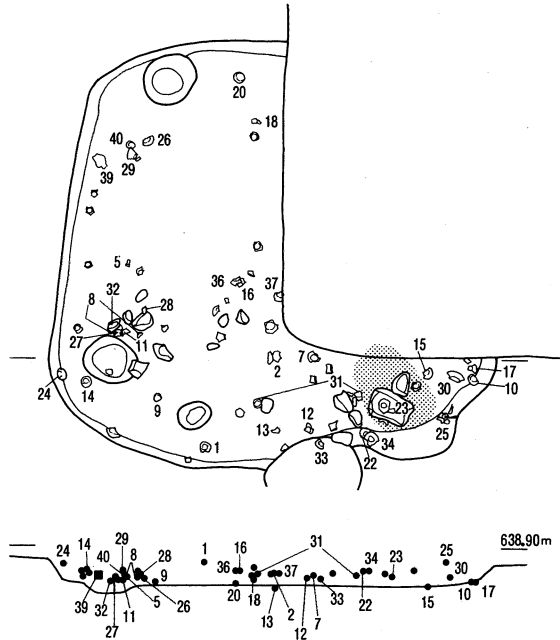
SB85 (図版41・40 PL 8・28)

SB88に切られ、SB175・176を切る。主軸N82°E、規模440×430×40cm、方形を呈する。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としたものである。

SB86 (図版43・42 PL 7・28 第59・60図)

SB230、SD19・25を切り、SB42と中世のピットに切られる。長軸N82°E、規模(420)×360×40~50cm。東西に長い隅丸長方形を呈する。カマドは北東隅に設置され、主軸も同方向である。石組みを基礎としており、土器が埋め込まれている。破壊はほとんどなく天井石も残存している。カマド内に若干の礫・土器が混入している。ピットは2基である。カマド左脇のピットには覆土から炭化した栃の実の流入が見られるが、底面までは達していない。東南隅のものは覆土に炭化物を含んでおり貯蔵穴の可能性をもつ。

覆土は2層に分かれ、全般に焼土・炭化物が混入する。土器などの遺物はまばらで礫もほとんどない。



第58図 SB84

SB87 (図版38・40)

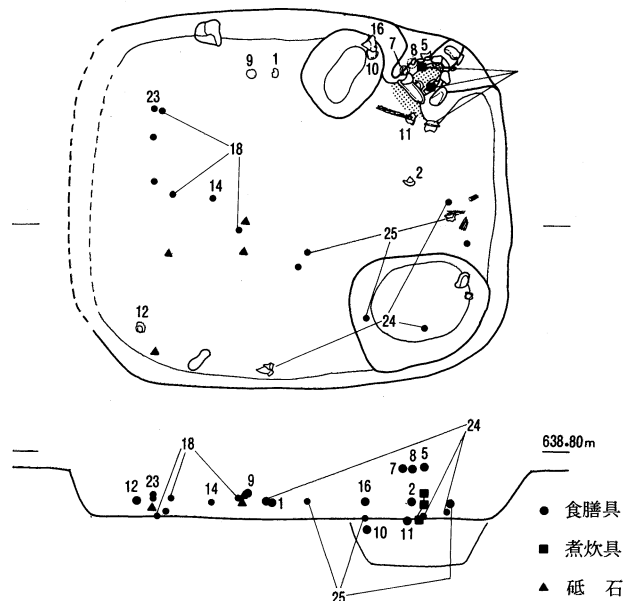
SB28に切られ、SB89を切る。主軸S88°W、規模370×420×40cm、台形に近い不整形を呈する。カマドは西壁中央に設置されている。袖部を住居壁線より外へ出して地山を利用するタイプで、袖の内側に礫を使用している。破壊を受けており、土器片が投棄されている。北壁に近い所で焼土を充填したピットが1基ある。

覆土は単層でカマドに礫や遺物が偏って出土している。

SB88 (図版41・40 第61図)

SB57に切られ、SB85・92・176を切る。主軸81°E、規模300×305×23~32cm、方形を呈する。カマドは東壁中央やや北寄りに位置する。礫が散乱した形で検出されており、原形は留めていない。

カマド付近の床直遺物とは間層を挟み、礫・土器片が覆土中に多量に混入している。



第59図 SB86

SB89 (図版39・40)

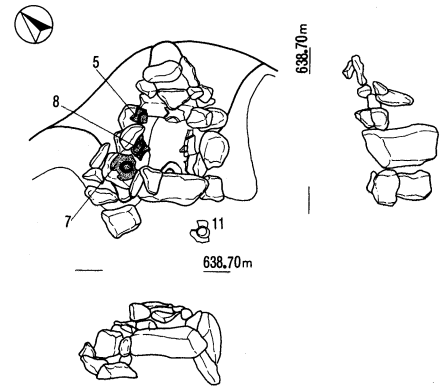
SB28・87に切られ、SB231を切る。主軸S89°W、規模(350)×(305)×42~49cm、方形を基調としたプランであろう。カマドは西壁中央に位置するが著しく破壊されており、火床が残るのみである。ピットは2基検出されている。

覆土は3層に分かれ、カマド前方の第3層には礫と土器片が集中して廃棄されている。

SB90 (図版18 PL 5)

南側は調査区域外となる。主軸 S 88° E、規模 360×300×28~43cm、不整形を呈する。カマドは東壁中央に位置し、石組みを基礎としたものである。前寄りの天井石が失われており、燃焼部上に礫が投棄されている。

覆土は単層でカマド前方に礫の集積が認められる。遺物の多くはカマド前方から南側にかけて散布している。



第60図 SB86カマド

SB91 (図版18 PL 5)

SB125を切る。主軸 N 88° W、規模 395×350×18~23cm。西辺の短い不整形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。破壊を受けており、礫や土器片が散乱している。

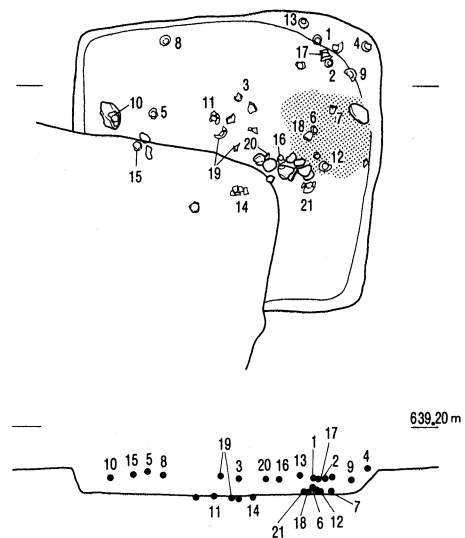
SB92 (図版41・40)

SB88に切られる。長軸 N 90° W、規模 280×260×4~16cm。南辺の長い台形を呈する。付属施設はなく、遺物もひじょうに少ない。

SB93 (図版46・48)

SB97を切り、SB62・68・72に切られる。主軸 N 79° E、規模 480×455×25~35cm。方形を呈する。ピットが3本存在する。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としているが、袖前方部は破壊されている。

覆土には拳大の礫が多く混入している。



第61図 SB88

SB94 (図版18 PL 5 第62・63図)

SB96・109を切る。主軸 S 89° E、規模 665×600×20~42cm。東西にやや長い長方形を呈する。カマドは北東隅に位置し、主軸を東壁に向けて設置されている。大がかりな掘り方を持つのが特徴的である。石組みを基礎としたものと考えられるが破壊を受け袖土がくずれ、礫・土器片が散乱している。ピットは床面で2基、床下で6基確認され、そのうち床下

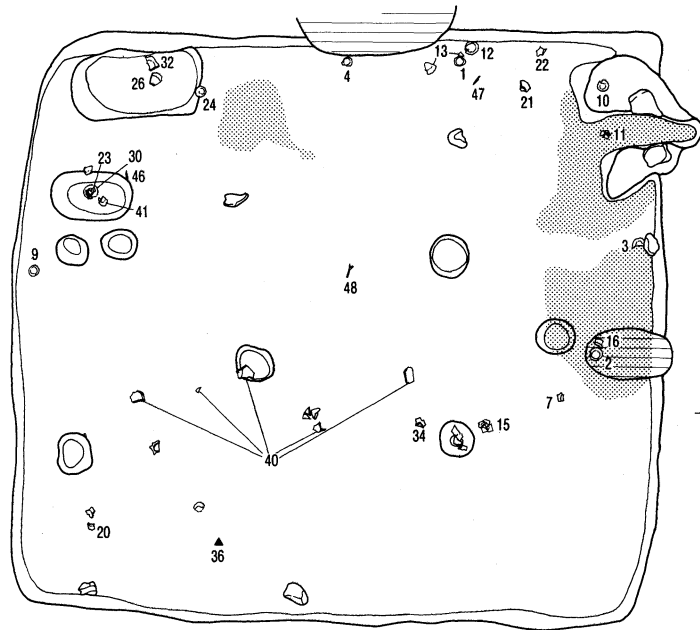
のピットは底面に土器が重ねられた状態で出土している。また、床面には2箇所炭化物を含んだ浅い落ち込みが存在している。

覆土は2層に分かれ、遺物の大半は上層から出土している。

SB95 (図版38・40 PL 8・29 第64図)

SB175を切る。主軸N82°E、規模290×300×26~36cm、不整形方を呈する。カマドは東壁中央やや北寄りに位置する。石組みを基礎としており、前方部天井と支脚が除去されている以外は残りがよい。

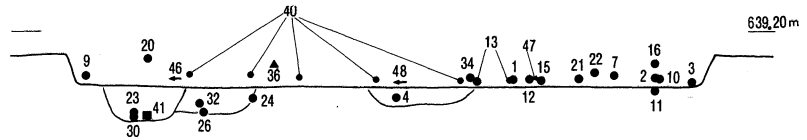
遺物はカマド周辺に多く存在する。



- 食膳具
- 煮炊具
- ▲ 緑釉陶器
- 鉄

SB96 (図版18 PL 5)

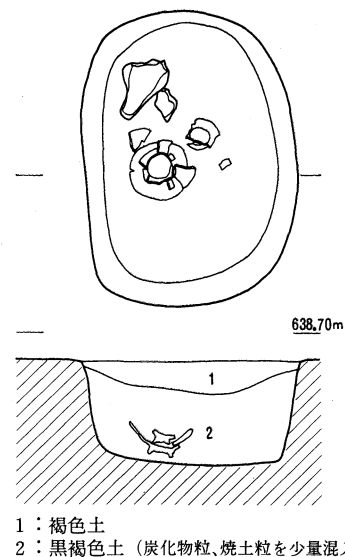
SB94に切られる。主軸N80°E、規模410×447×19~30cm。東壁がやや広い不整形方を呈する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎とし煙道裏に大がかりな掘り方を持つ。袖にくずれが見られるが支脚石は残存している。住居中央に大形の焼礫が集中して廃棄されている。北西部に貯蔵穴と思われるピットがあり、覆土中に焼礫や土器片が多量に投棄されている。



第62図 SB94

SB97 (図版46・48)

SB62・72・93、SK198に切られる。主軸はほぼ真東を向く、規模435×422×8~34cm。東南壁側の張る不整形方を呈する。石組みを基礎としたカマドは東壁中央に位置する。袖・天井前方部が破壊されており残存状況は悪い。住居中央ややカマドよりの床面上に2ブロックの礫集積が見られる。覆土は単層で遺物は少ない。



- 1 : 褐色土
- 2 : 黒褐色土 (炭化物粒、焼土粒を少量混入)

第63図 SB94床下土坑 (1:40)

SB98 (図版27 PL 5・29)

SK147を切る。主軸S89°E、規模495×515×

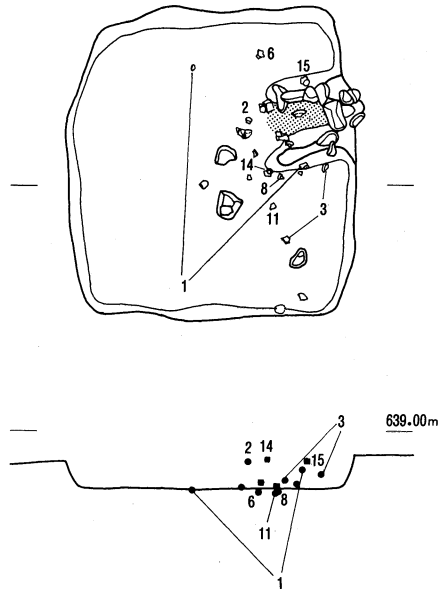
21~30cm。南東側に張る不整形を呈する。カマドは東壁の北よりに設置されているが、右袖の礫や煙道部が残存するのみである。南側にテラスを有し、その南西壁際にピットが1基存在する。テラス外では北西部にピットが集中して存在する。

覆土は単層で、炭化物の混入が北西部で顕著に認められる。

SB99 (図版37・36 PL 8・30 第65図)

SD02及び円形の土坑に切られる。主軸N89°W、規模335×(265)×45cm。方形を基調としている。カマドは西壁に設置されている。カマドでの礫使用は少なく袖土のくずれも著しい。カマド燃焼部上層から焚口部にかけて土器片を主体に出土し、住居南側で礫の集積が床面直上に見られる。

住居がある程度埋まったのち、その凹地に土坑が掘られ、多量の土器が投棄されている。上層には焼土と羽口も認められた。

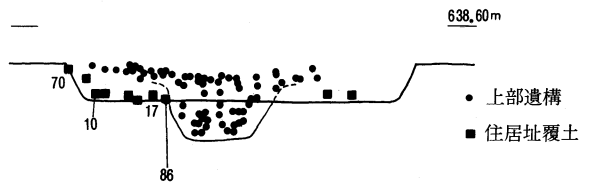
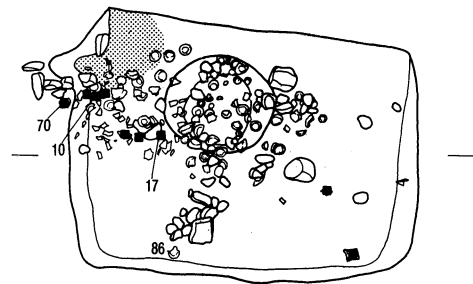


第64図 SB95

SB100 (図版27 PL30)

SK85、SD05、SP1428に切られる。主軸N03°W、規模330×345×18~27cm、南側の張り出す不整形を呈する。カマドは北壁中央に設置されたと考えられるが、袖・天井などは破壊され、周辺に礫が散乱しているにとどまる。南東コーナーにピットが1基存在する。

覆土は単層で、礫がカマド付近を中心として広がるように出土している。土器片などは全体に散在する。



第65図 SB99

SB101 (図版14 第66図)

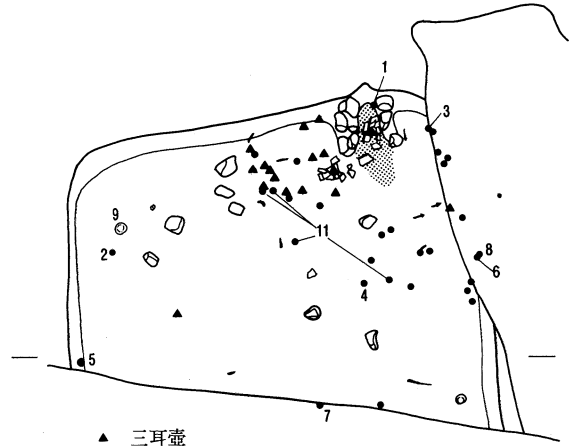
SB121を切る。南側は調査区外、東側は攪乱を受けている。主軸N01°W、規模365×(400)×20~30cm。カマドは北壁東寄りに位置する。石組みを行ない、黄灰色細砂と暗褐色土で被覆している。袖前方部はくずれており、燃焼部から焚口周辺部には土器片、鉄製品、礫が散乱している。

遺物は覆土中より出土し、鉄製品が比較的多く見られる。

SB102 (図版21 PL31 第67図)

SK71・1125に切られ、SB110・113を切る。主軸N 90°E、規模736×635×25~35cm。長方形を呈する。東南壁下の床面がやや高くテラス状となる。カマドは東壁中央に位置し、石組みを基礎としており、比較的ゆるやかに立ちあがる煙道を有する。前方部天井石と支脚石がないものの破壊は顕著ではない。ピットは全て床下で確認されている。住居中央やや西よりに焼土址がある。

覆土は単層である。礫の廃棄は少なく、土器などの遺物は壁際で床面から若干浮いた状態で出土している。



SB103 (図版13・12 PL 5 第68図)

SB136・215を切る。主軸N85°E、規模405×370×20~26cm。西南隅の張る不整長方形を呈する。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としたものであるが、袖前方部は破壊を受けている。

覆土は単層で、礫が散在する。土器は床面及び床面から若干浮いた状況で、壁際に4箇所のまとまりを持って出土しており、住居中央部にも存在する。

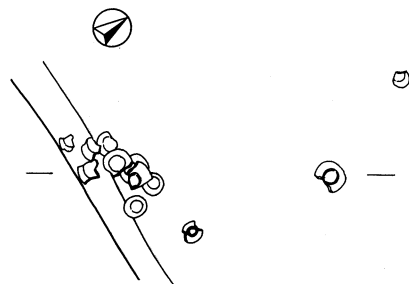


第66図 SB101

SB104 (図版37・36)

SB194を切る。北側は調査区外である。主軸不明。規模500×(190)×15~20cm。床面の一部はSB194上に貼床をしており、軟弱となっている。ピットは2基検出され、P 1からは灰釉陶器、P 2から須恵器が出土している。

覆土は単層で炭化物・焼土や黄褐色土がブロック状に入る。



SB105 (図版27)

SP1554・1558に切られ、SB108を切る。長軸S 89°E、規模215×237×18~29cm。不整方形を呈する。北東隅の焼土の部分がかまどの痕跡と考えられる。

覆土は単層で、北東壁際の覆土上層に礫の集積が認められる。



第67図 SB102遺物集中区

SB106 (図版35・34)

SK1011、SD19・25に切られ、SB174を切る。主軸

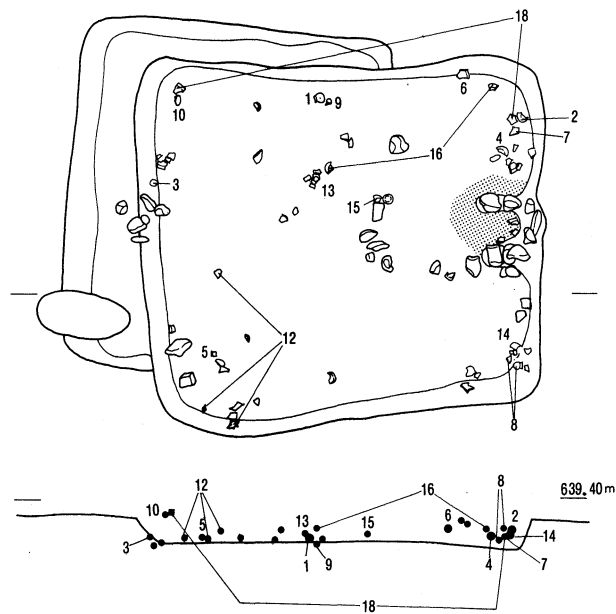
S89°W、規模470×390×25～35cm、長方形を呈する。東壁のやや北寄り部分に焼土が存在するが、カマドか否かは不明である。

覆土中には大量の礫が投棄されており、敷きつめたような状態が見られる。遺物は礫の少ない壁際に多く認められる。

SB107 (図版21 PL 5)

攪乱とSK82に切られる。主軸N88°W、規模(294)×365×23～31cm。方形を基調としている。カマドは西壁中央に位置する。礫をほとんど使用しておらず、黄褐色土を固めて袖としている。

住居中央付近に、床面より浮いた状態で礫や土器片が比較的まとまって出土している。

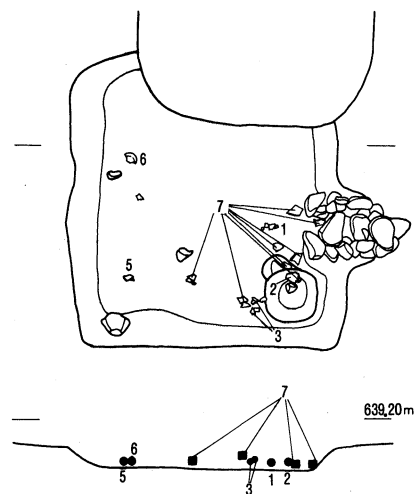


第68図 SB103

SB108 (図版27 PL31 第69図)

SB105、SP1558～1567に切られる。主軸N89°E、規模236×255×27～31cm。南北にやや長い方形を呈する。カマドは東壁中央やや南よりに位置しており、石組みを基礎とし堅固に構築されている。天井石も残存し、破壊はほとんど受けていない。燃焼部上層より甕破片が出土している。東南隅にピットがあり、その底面には、平らな石が敷かれてあるような状態で出土している。

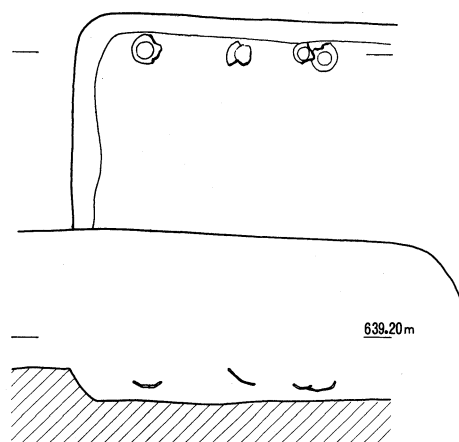
覆土は単層で礫の大量投棄などは認められない。カマド焚口部から南壁際の覆土中より土器が比較的多く出土している。



第69図 SB108

SB109 (図版18)

SB94、SK84に切れ、大半を失っている。主軸不明。規模(435)×(138)×27～43cm。床面・壁ともに凹凸が甚だしく、実際に住居として機能していたのか疑問が残る。床面中央に焼土と炭化物が広がる。



第70図 SB110

SB110 (図版21 第70図)

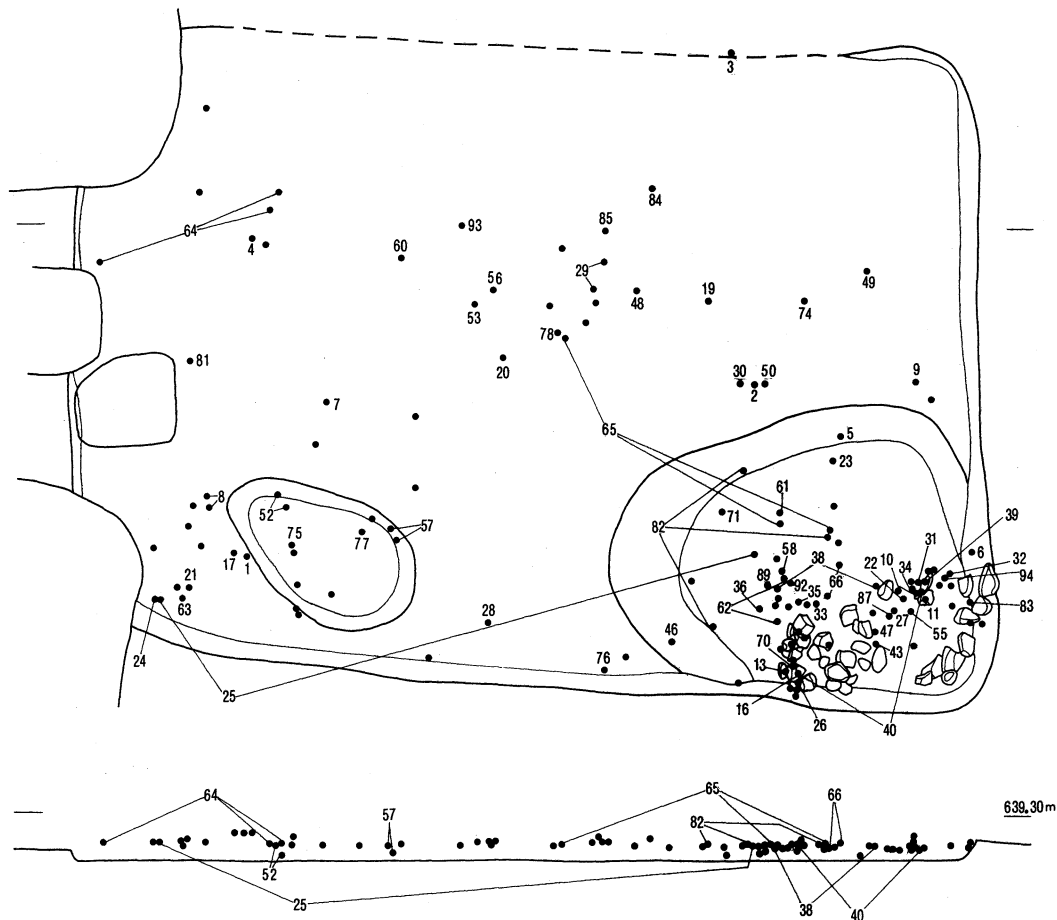
SB102に切れ SB119を切る。長軸N89°W、規模403×294×16～30cm。長方形を呈する。カマドなど付属施設は検出されていない。

覆土は単層で、遺物は壁際に床面から浮いた状態ではあるが、北西壁際に並ぶように出土している。

SB111 (図版24 PL 5 第71図)

SB71・76・161、SK1248・1249・1250に切られ、SB168、SK139を切る。主軸S85°E、規模947×668×03~13cm。南東部の張る不整長方形を呈する。床面は軟弱でカマド付近は一段低くなっている。カマドは東南隅の礫集中箇所と考えられる。焼土などがまったく見られないが、カマドとすれば破壊が甚だしい。ピットが4基、浅い土坑状の落ち込みが2基存在する。

遺物は床面より浮いた状態で多数出土している。カマドから東南隅にかけて多く、ほかに2ブロック以上の集中箇所がある。



第71図 SB111

SB112 (図版28 PL29)

SB254、SD21、SX2020に切られる。主軸S89°E、規模530×(548)×35~51cm。不整形を呈すると思われる。南壁直下に周溝が存在する。カマドは、東壁中央に石組みを基礎として構築されている。前方部袖と天井は破壊されており、燃焼部上面に杯片が投棄されている。

覆土は単層で、礫は混入していないものの、黄褐色土ブロックが比較的多く含まれている。

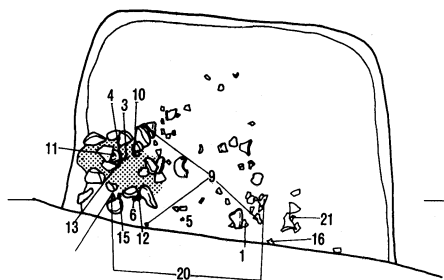
SB113 (図版21)

SB102によって大半を失っている。主軸N88°W、規模303×(114)×2~4cm。形状は方形を基調としたものと推定される。ピットが1基あり、カマドは西壁やや南よりに存在する。石組みを基礎としているが、破壊を受け燃焼部から焚口にかけて礫が散乱している。燃焼部直上から甕が出土している。

SB114 (図版14 第72図)

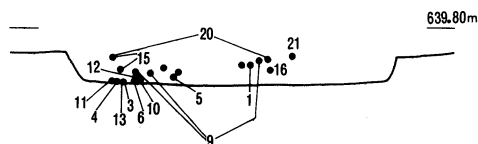
南側が調査区域外となる。主軸N80°W、規模322×(225)×14~31cm。西壁中央付近に石組みを基礎としたカマドが設置されている。破壊されたのち、礫や土器が燃焼部の上層に投棄されている。

覆土は2層に分かれ、第一次の埋め戻し完了後土器片・礫・炭化物などを多量に混入する層が形成されている。



SB115 (図版43・42 PL 6・31 第73図)

SB83・165・242を切り、SB50に切られる。主軸S78°W、規模430×425×34~45cm。隅丸方形を呈する。カマドは西壁北よりに位置する。石組みを基礎としたものであるが、右袖が残存するのみである。壁際にピットが4基存在するが、全体に南によっており、柱穴か否かは判然としない。



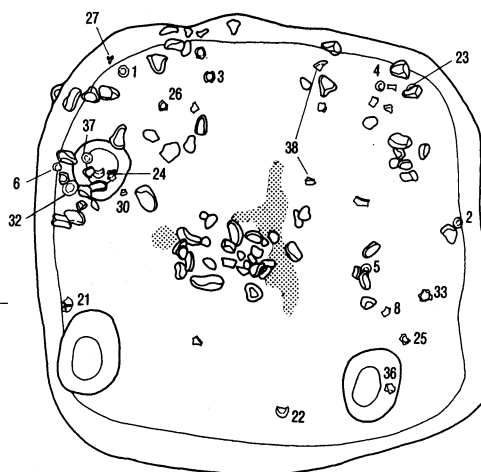
第72図 SB114

遺物や礫の投入は大きく4ブロックに分かれる。1つはカマド周辺の礫と完形土器など、2つには住居中央の焼土と礫が主体となる所、3つには東壁側に散在する礫と土器、4つには、遺物のほとんどない南~南西側の空間である。いずれも床面からは浮いている。

SB116 (図版16・17 PL 9・10 第74・75図)

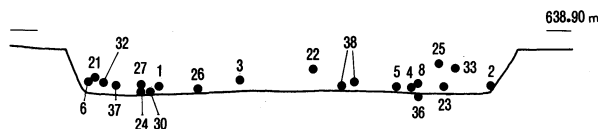
攪乱坑によって切られる。主軸N02°E、規模425×390×13~25cm。南北にやや長い方形を呈する。カマドは北壁やや東よりに設置されており、袖にはほとんど礫を使用していない。破壊の有無は不明だが、燃焼部の上層に2個体の甕(土師器と須恵器)破片を敷きつめるようにしてカマドを封鎖している。

覆土中への礫の混入は少なく、土器片などの遺物は、カマドを囲むような位置から出土している。



SB117 (図版42)

SB67、SK104・105・109によって切られ、SB131を切っている。不整形のため主軸不明、規模は(330)×344×10~29cm。付属施設はなく遺物の出土もひじょうに少ない。



第73図 SB115

SB118 (図版20・21 PL 9・32 第76図)

SB205を切る。主軸 S85°E、規模592×450×20~23cm。東西に長い長方形を呈する。石組みを基礎としたカマドは東壁中央に位置する。天井石は欠けるものの、破壊の度合いは少ない。ピットが5基あるが、不規則であり柱穴と断定はできない。遺物は覆土中に散在する。

SB119 (図版21)

SB110に切られる。主軸 N87°W、規模380×(390)×10~20cm、主軸方向がやや短い不整形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。天井石は失われているが、両袖石の一部は残存している。燃焼部中より、甕片が多量に出土している。

床面直上で、土器片や礫の出土が認められる。

SB120 (図版37・36 PL12)

SB79、ST03、SF1119に切られ、SB249、SK242を切っている。規模420×(390)×35~40cm、不整形を呈する。附属施設はなく、床面に凹凸がある上、壁の立ちあがりもゆるやかで、住居址以外の遺構である可能性もある。覆土中には多量の礫が散在し、土器片も混在している。

SB121 (図版14)

SB101に切られ、また南側は調査区外のため東壁の一部が確認されたにとどまる。

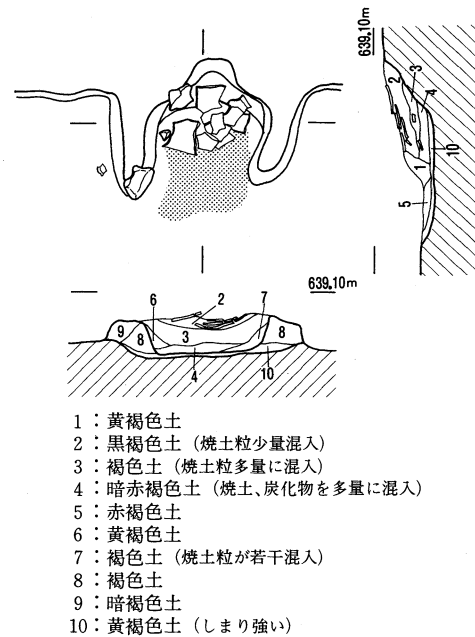
SB122 (図版20・21 第77図)

SB127を切り、SK1141・1144・1145に切られる。主軸は真東を向く、規模530×540×19~27cm。北東隅、南西隅の張る不整形を呈する。カマドは東壁やや北よりに設置されている。石組みを基礎とし袖中には土器片も混入している。左袖・天井が破壊されており、焚口前方の床面上に礫が散乱している。ピットは南西隅に1基存在する。

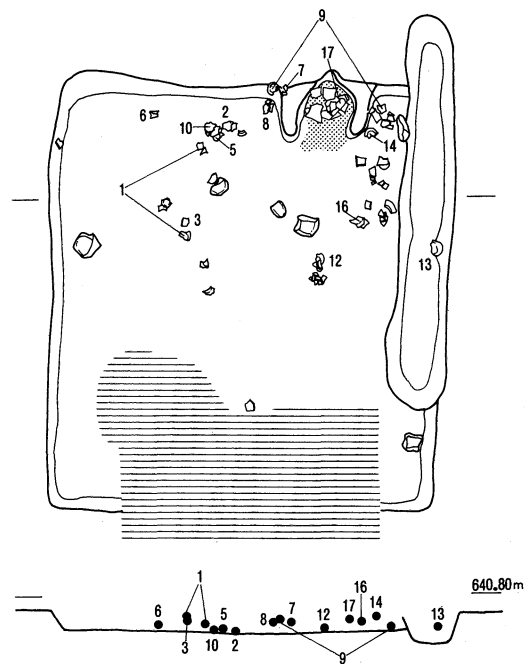
覆土は単層で、カマド南側の覆土中で礫の集中が2箇所認められる。遺物は少量である。

SB123 (図版38・40)

SB78・169、SK51、SD17に切られ、床面の一部が



第74図 SB116カマド



第75図 SB116

確認されたにとどまる。床面には凹凸があり、住居として機能していない可能性もある。

SB124 (図版23・24)

SK1193、SK1201に切られ、SK77を切る。主軸N02°E、規模415×400×17~33cm、方形を呈する。カマドは北東コーナーに位置し、軸を北壁に向けている。SK1201に切られるほか、破壊が著しく原形を留めていない。南西壁近くに、貯蔵穴の可能性を持つピットが1基存在する。

1層中には礫が中央付近に散乱している。

SB125 (図版18)

SB91に切られ、さらに攪乱が入っている。西壁中央付近に焼土と焼礫があり、ここをカマドと推定されれば、主軸N85°Wとなる。規模243×310×13~20cm。不整形を呈する。住居中央付近、床面直上に礫の集積が認められる。

遺物は北西・南東の両コーナー付近とカマド前方から出土しており、全て床面から浮いたものである。

SB126 (図版37)

SB32、SK129に切られる。不整形のため主軸ははっきりしない。規模430×420×3~19cmの不整形を呈する。南東コーナーに焼土を持つピットが1基存在する。カマドか否かについては決定的な要素がない。

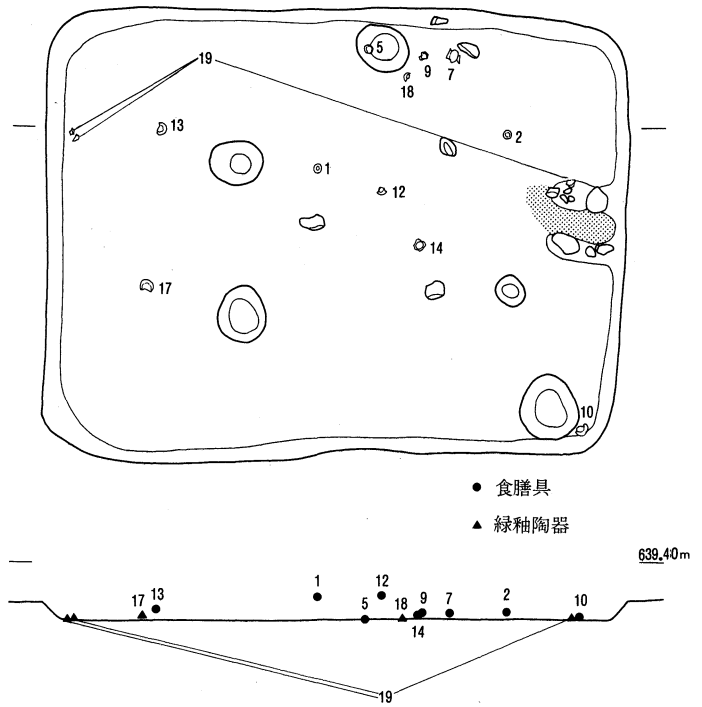
覆土は単層で礫が散在する。

SB127 (図版20・21)

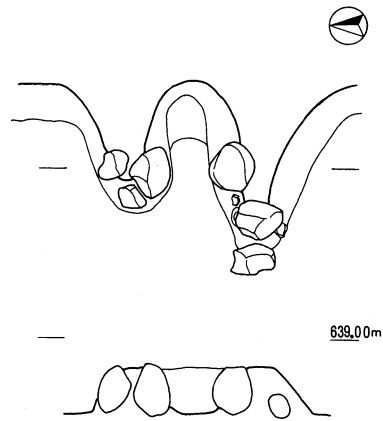
SB122に切られる。主軸は真東を向く、規模312×252×8~25cm。東西に長い長方形を呈する。カマドは北東隅に設置され主軸は東壁に向いている。石組みを基礎としているが、右袖は完全に破壊されている。燃焼部上層から土器が出土している。

覆土は単層で礫の混入はまったくない。

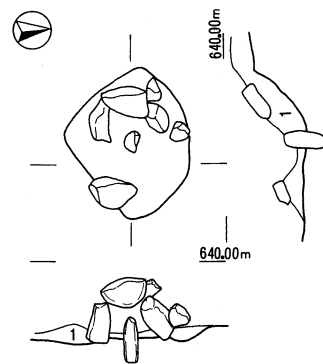
SB128 (図版12 PL10・32 第78図)



第76図 SB118



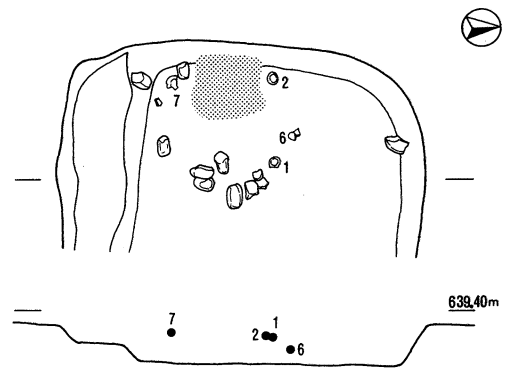
第77図 SB122カマド



1: 褐色土 (焼土、炭化物を含む)

第78図 SB128カマド

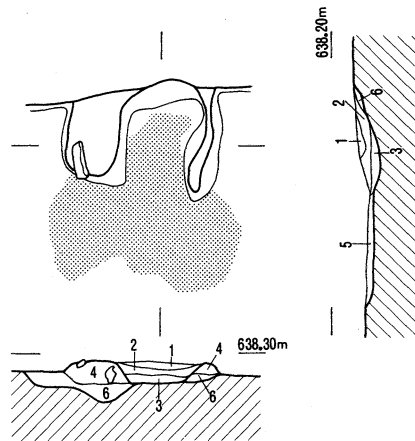
主軸S89°W、規模260×265×23~40cm、東辺の短い台形状を呈する。カマドは西壁中央に位置し石組みを基礎として構築されている。前方部両袖・天井部は破壊されている。カマド付近に礫や土器片が集中して出土している。



第79図 SB129カマド周辺遺物分布

SB129 (図版13・12 PL10・32 第79図)

主軸N89°W、規模340×345×400cm。南東部に張り出しを持つ不整形である。南壁下から東壁下にかけてベッド状のテラスが存在する。カマドは、西壁中央に位置していたらしく、火床と見られる焼土が残る。袖などは破壊されており、原形をとどめていない。焚口付近に礫が散乱しているが、床面からは浮いているため、積極的にカマドに関連付けることはできない。遺物の出土もカマド付近に多い。



- 1 : 明赤褐色土 (焼土を多量に含む)
- 2 : 黄褐色土 (灰を混入)
- 3 : 黒褐色土 (炭化物を多量に混入)
- 4 : 褐色土
- 5 : 暗褐色土 (炭化物粒子を若干混入)
- 6 : 褐色土 (小砂利、炭化物粒子を少量混合)

第80図 SB130カマド

SB130 (図版43・42 第80図)

SB51の床面下から検出されたため、覆土の大半を失っている。主軸N09°W、規模330×310×2~14cm。方形を呈する。ピットは西壁やや北よりに1基存在する。カマドは北壁中央に設置されている。礫をほとんど使用しないタイプである。遺物はひじょうに少ない。

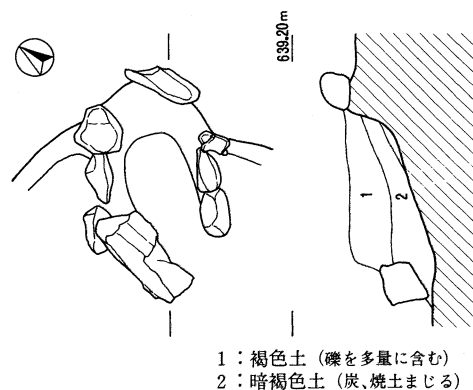
SB131 (図版42)

SB97・117・214に切られる。主軸N87°E、規模(260)×325×8~34cm。方形を基調としたものである。残存部に痕跡がないため東カマドの可能性が高い。

SB132 (図版32・33 第82図)

SB270を切る。主軸N86°E、規模500×410×22~41cm。カマドのある北東隅の張る不整形を呈する。ピットが1基存在する。カマドは主軸を北東コーナーに向けており、北側に若干の空間を持たせるためか壁に張り出しが認められる。石組みを基礎としたもので、くずれが見られるものの破壊の有無は不明である。また、住居中央に焼土の広がりが見られる。

住居中央付近の床面直上から、遺物の出土が認められる。

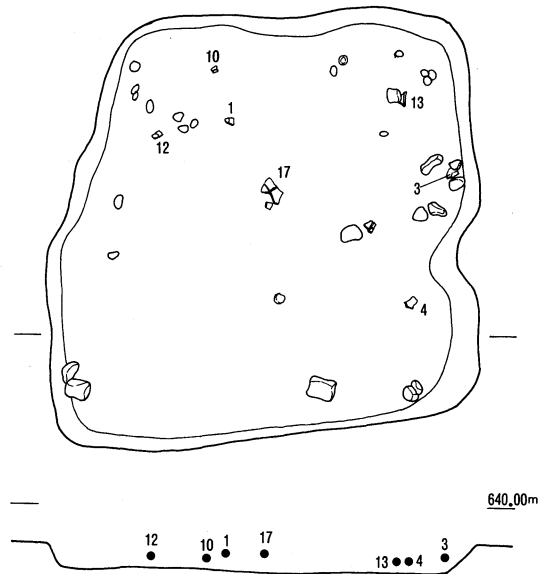


- 1 : 褐色土 (礫を多量に含む)
- 2 : 暗褐色土 (炭、焼土まじる)

第81図 SB132カマド

SB133 (図版23・24 第82図)

SD16に切られ、SB172を切る。主軸N89°E、規模400×430×30~45cm、南西コーナーの張る不整形を呈する。カマドは東壁中央に位置する礫付近と想定されるが、破壊が甚だしく判然としない。



第82図 SB133

SB134 (図版23・24 PL 9・14)

SB172、SD16に切られる。主軸S89°E、規模340×405×25~40cm、長方形を呈する。カマドは東壁にあったらしく、SB172に切られたものと思われる。

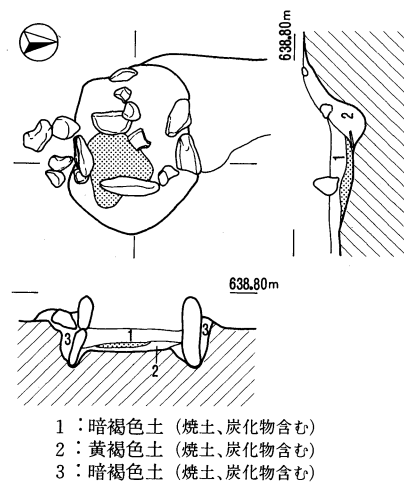
SB135 (図版42)

SB31、SD18に切られる。主軸N80°E、規模(120)×310×30cm、形状は方形を基調としたものと思われる。カマドは東壁中央付近に存在したらしく、SD18に大半を破壊されており、かろうじて火床面のみが残存している。覆土は単層で、礫・遺物の混入はほとんど認められない。

SB136 (図版13・12 PL10)

SB103、SK107に切られる。主軸N85°W、規模(295)×340×17~31cm。西壁やや南よりに床面の焼けた痕跡があり、カマドの可能性はある。

遺物は西壁際で多量に出土し、北壁際ではほとんどない



第83図 SB137カマド

SB137 (図版37・36 第83図)

SB32、SD17に切られる。主軸N81°W、規模205×405×18~46cm。石組みを基礎としたカマドは西壁中央に位置しており、上部はSD17によって破壊されている。

覆土中には多量の焼土が混入している。また、北壁際で礫が多量に出土している。

SB139 (図版30 PL 6・33 第84図)

多数のピットに切られる。主軸S89°W、規模390×365×46~57cm。西北壁の張る不整形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎とし、袖土中には土器片が混入している。天井石はないが支脚石は残っており、顕著な破壊行為は認められない。

燃焼部上層で土器片が出土している。ピットは、浅い掘り込みのものが壁際に不規則に配置されている。

覆土中には炭化物の集中が認められるが、遺物・礫の出土は少ない。

SB140 (図版27・30 PL 6 第85図)

SP1427に切られ、SB141を切る。南側は調査区外となる。主軸N03°W、規模790×(595)×30~42cm、東西に長い長方形を呈する。南壁直下やや東よりに粗砂・焼礫まじりの黄褐色土を盛り、テラス状の施設を作り出している。カマドは北壁の東隅近くに位置する。石組みを基礎としているが、左袖は破壊を受けており、燃焼部付近に礫や土器片が散乱している。ピットは6基あり、P 1は貯蔵穴、P 3~P 6は柱穴の可能性を持つ。

覆土は2層に分かれ、下層には黄褐色土を点在させており、短期間に埋め戻された可能性を持つ。

SB141 (図版30 PL 6 第86図)

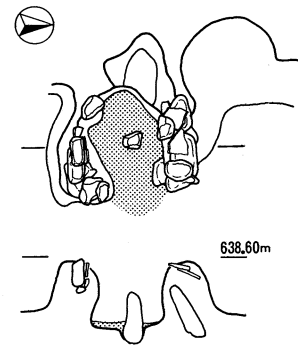
SK1126、1127、SB140に切られ、SK146などを切る。主軸N86°E、規模(310)×460×23~40cm。カマドを設置するため、北東隅を内側に寄せた不整形を呈する。カマドは石組みを基礎としたものらしいが、破壊を受け左袖は原形を留めていない。ピットは4基あり、柱穴もこのなかに含まれているものと考えられる。

遺物は、焚口前方から北壁際の床面直上に比較的多く出土している。

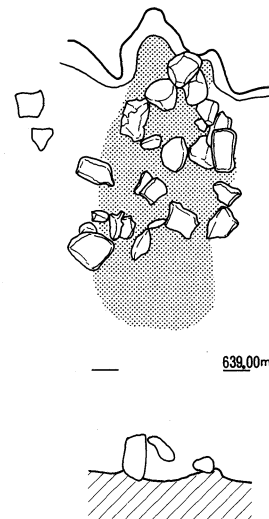
SB142 (図版30 PL 6・34 第87図)

主軸S88°E、規模437×375×22~33cm。西辺が短く不整形に近い形態を示す。北東部床面がテラス状に高まり、ピットが1基存在する。カマドは東壁やや北よりに設置されている。石組みを基礎としているが、袖の大半は失われている。燃焼部直上から甕片が出土している。

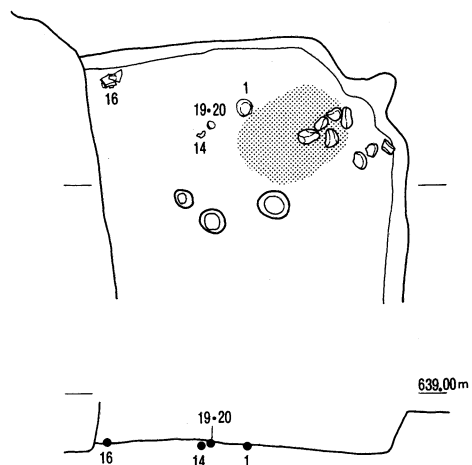
覆土は単層で、住居中央付近に礫が集中して出土している。



第84図 SB139カマド



第85図 SB140カマド



第86図 SB141カマド周辺出土遺物分布

SB143 (図版33)

2基のピットに切られ、南側の大半は調査区域外となっている。長軸N88°E、規模(385)×(150)×10~16cm。不整形を呈する。付属施設は特に確認されていない。北西隅の覆土中から床面にかけて焼土ブロックが認められる。

SB144 (図版30 PL 6・35 第88図)

SB145・146を切る。主軸S85°W、規模420×456×35~49cm。方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎としたもので、天井石がないものの破壊はあまり認められない。カマドの両脇に浅いピットが存在する。

覆土は単層で、遺物はカマド周辺に多い。カマド南側の床面には完形土器が重なって出土しており、遺棄された可能性を持つ。

SB145 (図版30 PL 6)

SB144に切られる。主軸S89°W、規模347×363×23~33cm。隅丸方形を呈する。南東隅に浅い落ち込みが存在する。カマドはSB144によって失われている。覆土は単層で、完形に近い遺物は壁際に点在する。また、東よりの床面直上に礫の集積が認められる。

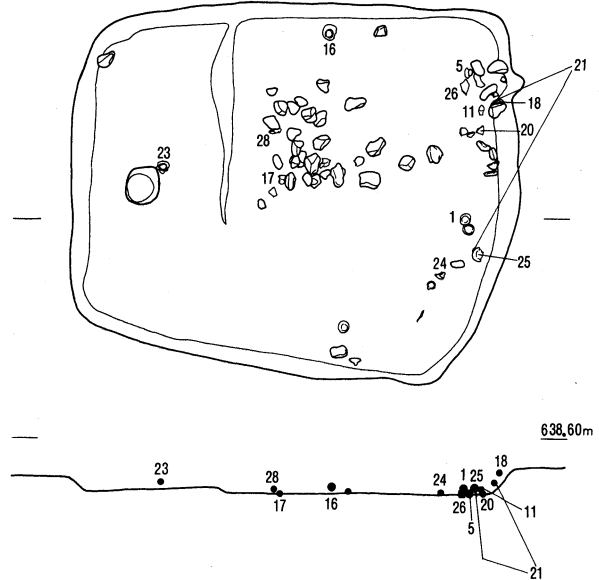
SB146 (図版30)

SB144に切られる。主軸S89°E、規模343×380×9~31cm。不整形を呈する。カマドは東壁南寄りに位置する。石組みを基礎とするが袖の大半は失われている。右袖脇に焼土の充填したピットが存在し、また住居中央にピットが1基認められる。

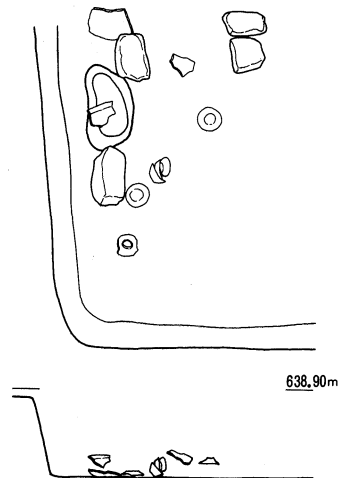
覆土は単層で、床面に密着した焼土が住居中央に見られる。遺物は少なく、礫の投棄も認められない。

SB147 (図版23)

SK164・1130~1132・1140、SP1460に切られ、SB148を切る。長軸N25°E、規模325×285×15cm、長方形を呈する。カマドはSK1131によって失われたものと思われる。南東壁にピットが1基あり、本址に伴なう可能性がある。出土した遺物はごくわず



第87図 SB142

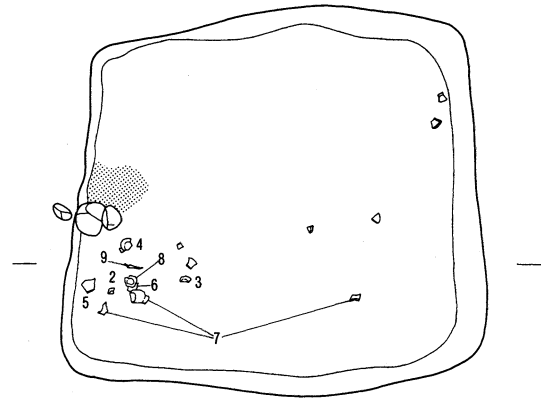


第88図 SB144カマド周辺遺物分布

かである。

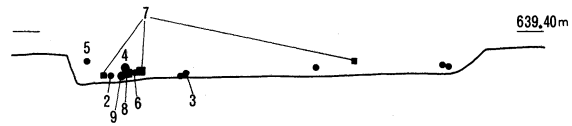
SB148 (図版23)

SB147、SK1136~1138・1147・1157・1246、SP1480に切られる。また、床面下層にはSK225が存在する。長軸N01°W、規模450×400×5~10cm、隅丸長方形を呈する。附属施設はなく遺物の出土もわずかである。



SB149 (図版27)

SP1384~1389に切られる。主軸N82°E、規模320×300×9~23cm。南西コーナーの張り出す不整形方形を呈する。ピットが3基認められ、カマドと思われる掘り込みが東壁中央に存在する。



SB150 (図版13・12 PL10 第89図)

主軸N89°W、規模405×370×25~32cm。北辺の短い台形状を呈する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎としたものであるが、破壊が進み袖の大半を失っている。

第89図 SB150

遺物は、カマド付近に集中する傾向がある。

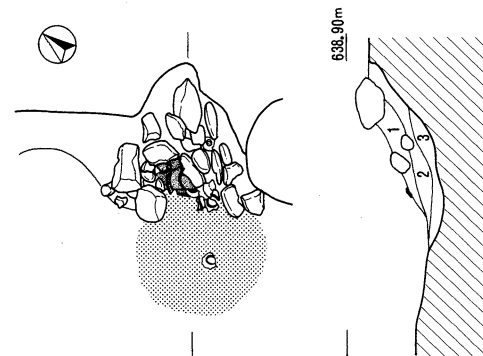
SB154 (図版42)

SB69、SD06に大半を切られ、SB184・199を切っている。主軸不明、規模445×(80)×50cm、方形を基調としたものと考えられる。附属施設は認められないが、礫と土器片は比較的多く出土している。

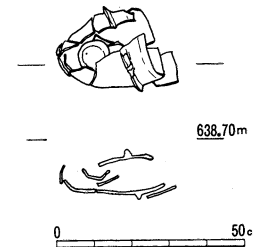
SB155 (図版42)

SB199を切り、SB65とも切りあう。長軸N04°W、規模440×400×6~26cm。隅丸方形を呈する。カマドなどの施設は確認されず、遺物も少ない。

覆土下層は黄褐色土が多量に入り、埋め戻しの可能性がある。



- 1: 暗褐色土 (焼土を多量に含む)
- 2: 褐色砂質土 (焼土を含む)
- 3: 褐色砂質土



第90図 SB156カマド及びカマド出土器拡大

SB156 (図版23, 24 PL34 第90図)

SB157を切り、SB1208、SK187、1150、1160に切られる。主軸N84°E、規模(455)×445×20cm、カマド設置のため、北東コーナーが一辺を形成する不整形五角形を呈する。カマドは石組みを基礎としたもの

である。破壊を受けており、火床を若干埋めたのち、礫や土器片が投棄されている。完形の羽釜内には土師器杯が入り込んだまま出土している。

SB157 (図版23・24)

SB156・1160、SK1163に切られる。主軸S88°E、規模375×(235)×28cm、隅丸方形を呈する。カマドは西壁中央に位置するが、破壊が甚だしく、原形を留めていない。火床より若干浮いたレベルに、甕片を主体とした土器が散在している。

SB158 (図版33)

SB164を切る。南側は調査区域外となる。主軸はほぼ真東を向く。規模395×270×25cm。隅丸方形であろう。カマドは東壁やや北寄りに設置されている。石組みを基礎としているがくずれが激しい。カマドの両脇の床面上に礫が散乱している。

SB159 (図版16・17 第91図)

SD04に切れ、SB215を切る。また、SK126・151・167と重複する。主軸S89°E、規模470×(485)×21~42cm、方形を呈していたものと考えられる。南西側に一部テラスを有する。石組みを基礎としたカマドは東壁中央に位置する。前方部の天井・袖は破壊されているが、煙道部の天井は残存している。

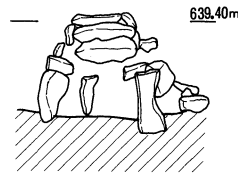
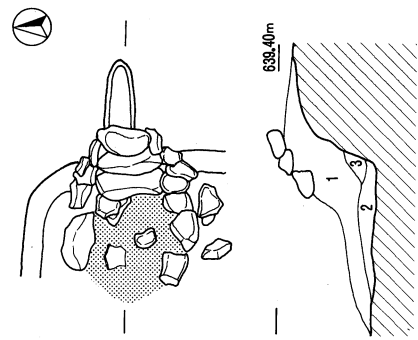
遺物は、南東部で比較的多く出土している。

SB160 (図版16・17 PL10・34 第92・93図)

主軸N07°E、規模340×305×30cm、長方形を呈する。カマドは北壁東寄りに位置する。石組みを基礎としたものである。残存状況は比較的よく、前方の天井石が除去された程度である。ただし、甕などの土器片によって、支脚石上や燃焼部を封鎖している。礫・遺物はカマド前方から南東側にかけて多く出土している。

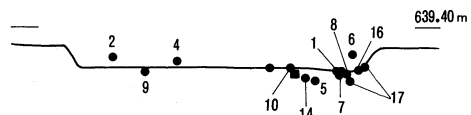
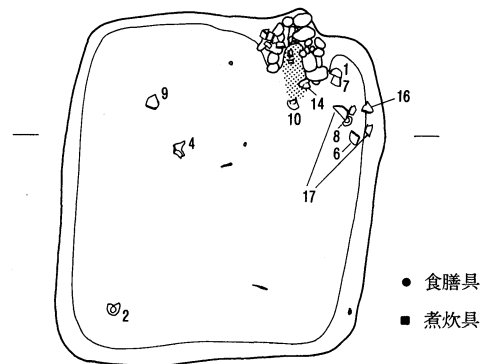
SB161 (図版23・24)

SB111、168を切り、SK1134、1167、1170に切られる。主軸S87°E、規模320×340×19~27cm、隅丸方形を呈する。カマドは北東隅に、主軸を東へ向けて

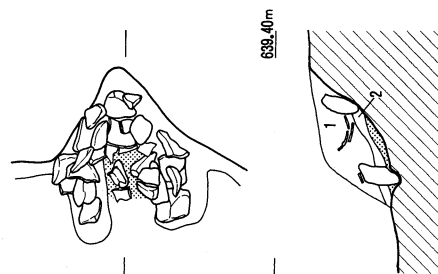


- 1: 褐色土 (炭化物、焼土粒を含む) 粘性あり
- 2: 褐色土 (灰のブロック含む)
- 3: 暗褐色土 (焼土を含む)

第91図 SB159カマド



第92図 SB160



- 1: 褐色土 (小礫を多量に含む)
- 2: 赤褐色土 (炭化物、焼土を多量に含む)

第93図 SB160カマド

設置されている。石組みを基礎としたものであるが、その大半は破壊されている。

カマド前方の床面上には、積まれるように礫の集中が認められる。

SB162 (図版45 PL 7・35)

SD23に切られる。主軸N80°E、規模470×460×32cm、方形を呈する。石組みを基礎としたカマドが東壁中央に位置する。破壊を受けており燃焼部にも礫が投棄されている。ピットが4基存在する。

カマド前方の南西側に、多量の礫と遺物が集中して出土している。

SB163 (図版33)

SB164を切り、NR03に切られる。主軸N85°E、規模485×360×15~26cm。西辺の短い隅丸長方形を呈する。カマドは流路に切られた北東壁付近に存在していたと考えられる。若干焼土が分布する。

SB164 (図版33 第94図)

SB158・163、NR03に切られる。主軸S78°W、規模315×(185)×13~24cm。方形を基調としている。カマドは原形を留めていないが、西壁中央付近の床面が焼成を受けており、焼礫が1個存在することからカマドであった可能性が高い。

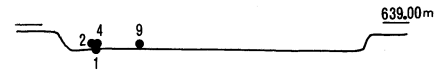
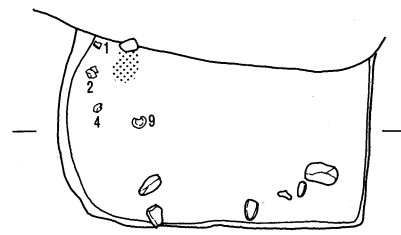
遺物は西壁焼土付近に多く、大形の礫は南壁側に多く出土している。いずれも床面から浮いたものである。

SB165 (図版43・42 PL12)

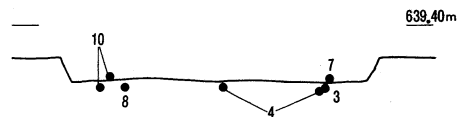
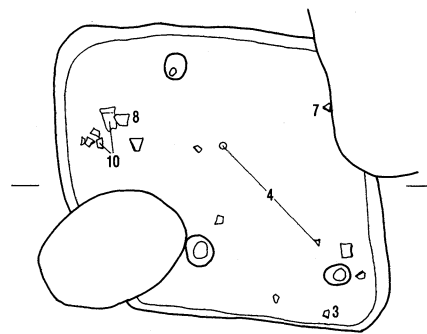
SB115に切られ、SD28を切る。主軸N88°W、規模455×450×40~45cm、不整形方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。左袖と燃焼部はSB115に切られ、火床の一部がSB115の床下で確認されている。礫の使用は少量に留まる。覆土への礫・遺物の投棄はわずかである。

SB166 (図版12 PL10 第95図)

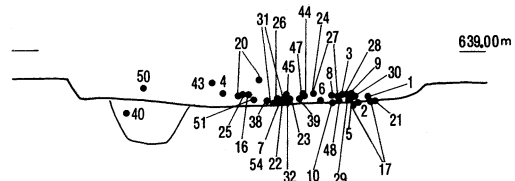
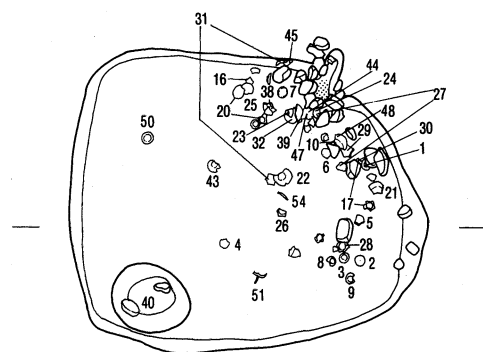
SK155に切られる。また、北東部は攪乱によって破壊されている。長軸S80°E、規模315×295×15~25



第94図 SB164



第95図 SB166



第96図 SB167

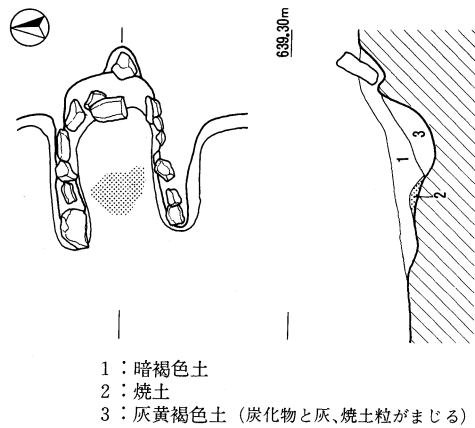
cm、南東部の張る不整形を呈する。カマドは攪乱によって壊されたものと思われる。また、ピットが3基存在する。

覆土中への礫の投棄はほとんどなく、遺物は全面に散乱している。

SB167 (図版35・34 PL36 第96図)

SK41、SP1062・1065・1067に切られる。長軸N81°E、規模340×290×6~23cm、南東隅の張る隅丸台形を呈する。カマドは北東隅に位置する。石組みを基礎としたものであるが、左袖は前方部が破壊されている。南西隅にピットが存在し、炭化物を多量に含んでいる。

覆土中には炭化物・焼土が混入する。遺物は、カマド周辺を中心に住居東半分に偏って出土している。



第97図 SB168カマド

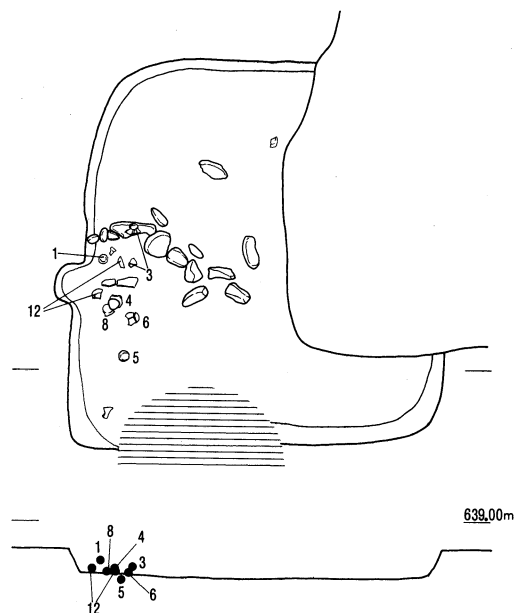
SB168 (図版23・24 PL36 第97図)

SB111・161、SK1134に切られる。主軸S88°E、規模375×335×6~25cm、不整長方形を呈する。カマドは東壁中央に位置し、石組みを基礎としたものである。燃焼部内には甕の破片が散在している。南東隅に炭化物・焼土の混入したピットが1基存在する。

SB169 (図版38)

SB78、SK132、SD17に切られ、SB80を切る。長軸N79°W、規模(365)×(147)×30cm。方形を基調としていると考えられる。付属施設は検出されていない。

覆土中に焼土・炭化物が比較的多く混在し、遺物は、床面より浮いた状態で住居中央付近から出土している。



第98図 SB172

SB170 (図版34 PL 8・36)

主軸S81°E、規模330×365×40~50cm。隅丸方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。破壊されており礫が散乱した状態となり、原形を留めない。

覆土は2層に分かれ、上層には炭化物を含む。遺物は、カマド周辺から多く出土している。

SB171 (図版32)

主軸 $89^{\circ}W$ 、規模 $295 \times 226 \times 15 \sim 20$ cm。西に長く東辺の短い台形状を呈する。カマドは存在しない。北東コーナーに近い床面上に焼土・炭化物がブロック状に散っている。

礫は皆無で遺物も少ない。南西コーナーで炭化物が出土している。

SB172 (図版23・24 第98図)

SB133、SK1158に切られ、SB134を切る。主軸 $N89^{\circ}W$ 、規模 $370 \times 385 \times 19 \sim 34$ cm、方形を基調としたものである。カマドは西壁中央に位置する。石組みを持つものと思われるが、破壊を受けており、礫が散乱している。遺物は、カマド周辺に集中して出土している。

SB173 (図版23・24)

SB1161、SK1158に切られる。主軸 $S89^{\circ}W$ 、規模 $275 \times 275 \times 18 \sim 27$ cm、方形を呈する。カマドは西壁中央に位置するが、破壊が甚だしく袖などは残存しない。覆土中への礫の投棄はわずかで遺物も少ない。

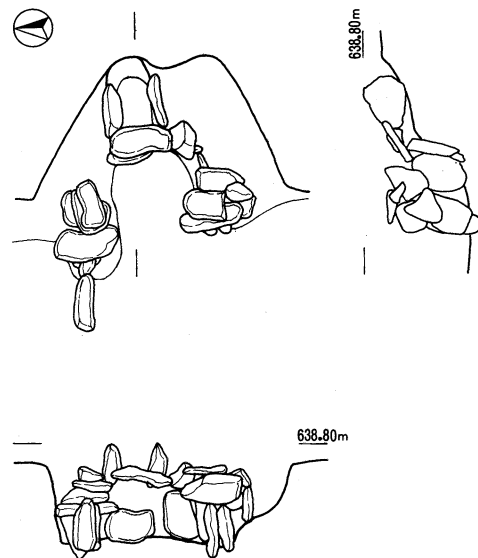
SB174 (図版35・34 PL 8)

SB106、SD19・25、SK1023・1026、SP 多数に切られる。主軸 $S87^{\circ}E$ 、規模 $700 \times 733 \times 22 \sim 30$ cm、南西コーナーの張る不整形方形を呈する。カマドは、西壁中央に設置されている。石組みはなく、地山掘り残しの袖の一部が残存する。4本の支柱穴と12本の壁柱穴が認められる。覆土中には多量の礫が投棄されており、特に南西コーナーや中央北寄りの地点に集中する。

SB175 (図版39・40 第99図)

SB95に切られる。主軸 $N80^{\circ}E$ 、規模 $367 \times 415 \times 35 \sim 39$ cm。長方形を呈する。カマドは東壁中央に位置する。燃烧部が壁ライン上にあるタイプである。石組みを基礎としており、袖土中には土師器片が入っている。右袖などで破壊を受けている。

遺物は、カマドの北側で出土している。



第99図 SB175カマド

SB176 (図版41・40)

SB85・88・92に切られる。主軸 $N82^{\circ}E$ 、残存部規模は少なく、方形を基調としたものであろう。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としているが、右袖は破壊を受け礫が散乱している。

土器片などが、カマド燃烧部から前方にかけて出土している。

SB177 (図版35・34)

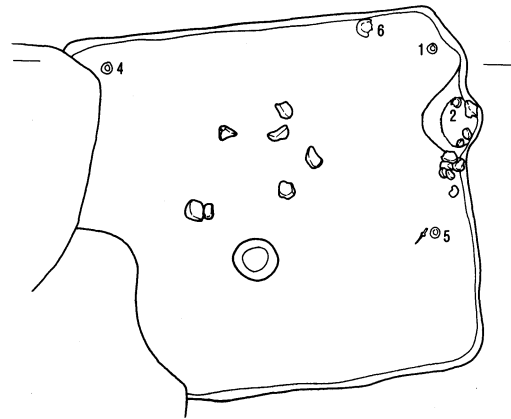
SB63、SK41・161、SD08、SP 多数、NR07に切られる。主軸 $N88^{\circ}E$ 、規模 $505 \times (475) \times 5 \sim 13$ cm、隅丸方形を呈すると考えられる。東南隅近くに焼土と

羽釜が存在し、カマドの可能性を持つ。西壁近くに2基のピットが存在し、P 1は貼床下から検出されている。

住居中央付近と床面直上に、焼土と炭化物が厚く堆積している。

SB178 (図版30 第100図)

SK1168・1171に切られる。主軸N83°E、規模(410)×380×6~13cm、長方形を呈する。カマドは東壁中央やや北寄りに位置する。石を使ったものと思われるが、破壊が甚しく原形を留めていない。また、ピットが1基存在する。



第100図 SB178

SB179 (図版32・33)

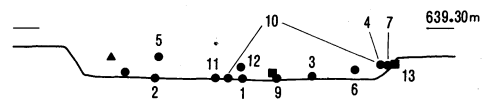
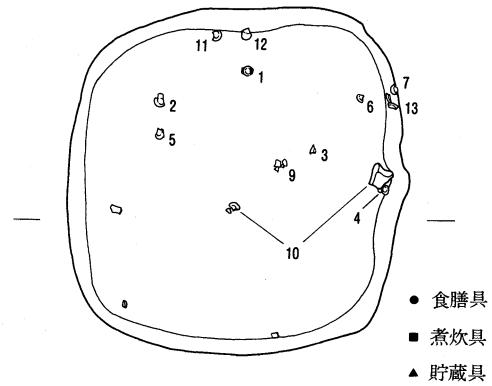
西半を流路によって切られ、SB180を切る。主軸N01°W、規模300×(180)×40cm、不整形方を呈する。カマドは北壁に位置するが、破壊を受けており、残存は火床と散乱した礫のみである。遺物はカマドの周辺に比較的まとまっている。

SB180 (図版32・33)

流路とSB179によって大半を失っている。主軸不明、規模(130)×(150)×40cm、方形を基調としている。附属施設はなく、南東コーナーに焼土が存在する程度である。覆土中より馬の歯が出土している。

SB181 (図版15・14)

攪乱によって大半を失っている。残存部長軸N81°W、規模(392)×412×18~26cm。方形を基調としたものであろう。付属施設はなく、覆土中に少量の礫と土器片が点在するのみである。



第101図 SB183

SB182 (図版20・21)

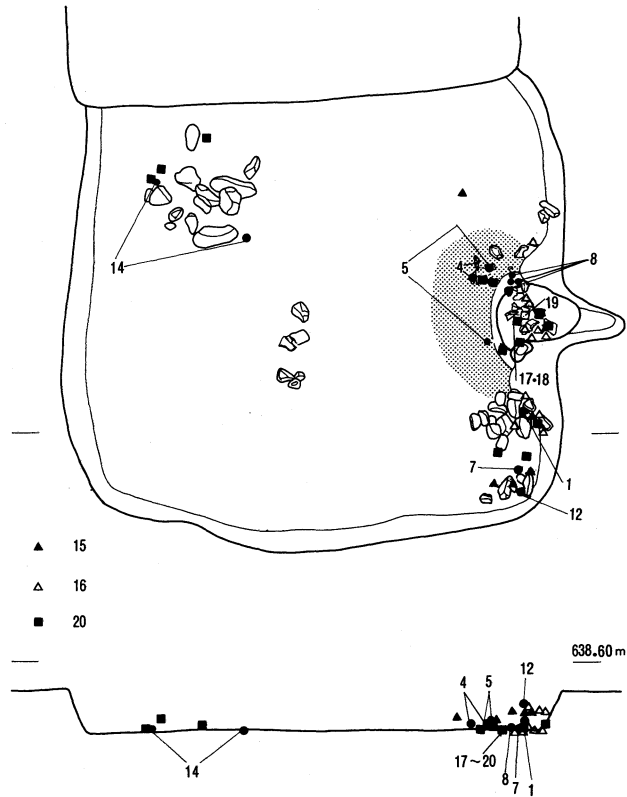
SK158 (173)に切られる。長軸N89°E、規模320×305×4~15cm。南辺の広がる隅丸台形を呈する。南東隅にピットが1基存在し、覆土中から羽口が出土している。他の付属施設は確認されていない。

覆土は単層で、遺物は床面より浮いて出土している。

SB183 (図版19 PL15 第101図)

主軸N88°E、規模310×310×25cm。東側で床面の広がる隅丸方形を呈する。カマドは東壁中央に位置するが、原位置を保った袖石が1点しかなく、破壊された状況にある。カマド北側などで、礫の散乱が認められる。

覆土は単層であり、遺物は覆土中に散乱している。



第102図 SB184

SB184 (図版42 PL12 第102図)

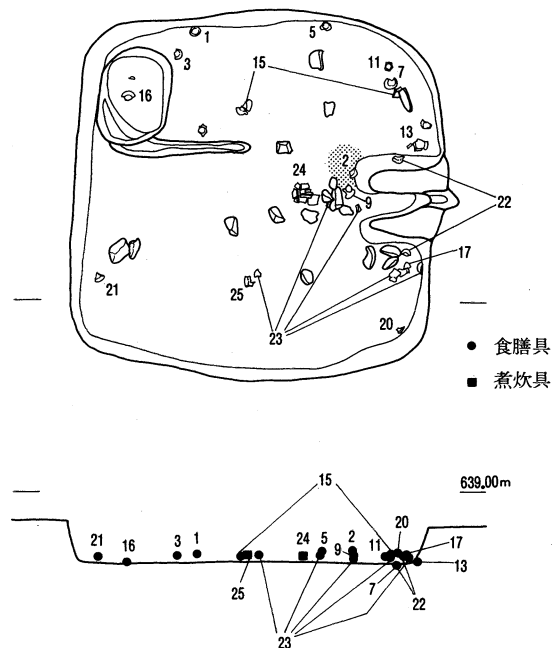
SB69・154、SD06に切られ、SB199を切る。主軸N83°E、規模495×450×28~43cm。東西に長い長方形を呈する。南壁中央が張り出し、その壁下に狭い範囲ではあるがテラスが認められる。この位置が入口部であろうか。カマドは東壁中央に位置する。支脚の取りのぞかれた掘り方があり、袖石の残存もほとんどない。カマド南側に、礫や土器片が床面から若干浮いた状態で集積されており、カマド破壊との関連性がうかがえる。燃焼部から焚口北側にかけて、土師器甕片などが床面及び床面より若干浮いた所から多量に出土している。

覆土は3層に分かれ、最下層には焼土・炭化物・黄褐色土ブロックが混入する。住居址西北部の床面上に、焼土を伴って礫の集積が認められる。土器の接合関係から、これらもカマド破壊と何らかの関係がありそうである。

SB185 (図版20・21)

SD16に切られる。主軸S88°E、規模255×(250)×9~12cm。隅丸方形を呈する。カマドの火床と思われる焼土と炭化物の広がり、東壁中央直下に存在する。

遺物は東南部に比較的多く、床面より浮いた状態で出土している。



第103図 SB187遺物分布図

SB186 (図版22・24)

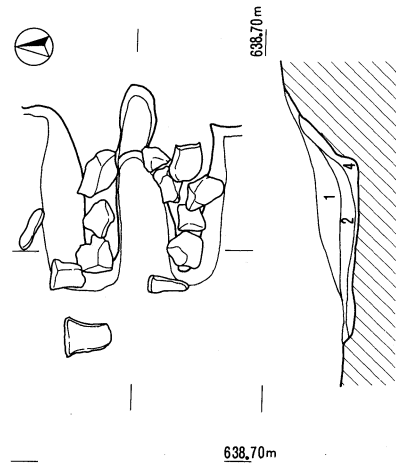
主軸S04°W、規模370×420×20~30cm。カマドは西壁中央に位置する。袖はすでに破壊されており、多量の礫が焚口前方に散乱している。これらの礫は床面より若干浮いている。

遺物は、カマドのある西側に多い。

SB187 (図版25 PL14・37 第103・104図)

主軸S89°E、規模365×370×30~37cm。隅丸方形を呈する。カマドは東壁中央に位置する。カマドは石組みを基礎としており、天井石はないものの破壊は少ない。中央やや北寄りに東西方向の間仕切り溝が走り、ピットはその北側に集まる。P1は貯蔵穴であろう。P2、3は貼床下から検出されたものである。P3の西壁側の床面に焼けた箇所がある。

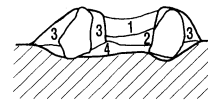
覆土は2層に分かれる。遺物は、第一次埋没土(埋め戻し)の形成前~途上に廃棄されたものがカマド周辺に多く、上層からは散在する程度である。



SB188 (図版25 PL37 第105図)

SB250、NR04によって一部破壊を受ける。主軸S79°W、規模295×(330)×40~45cm。北壁は段状になっている。また南西コーナーのピットによって壁が張り出し、いびつな形状を呈している。カマドは西壁中央に位置する。礫は袖の内側に配されるがその量は少ない。煙道は比較的長いタイプである。支脚石は残存するが、右袖の礫及び天井は抜かれている。

遺物は、カマド脇及び南壁下覆土中から完形に近い土器が出土している。



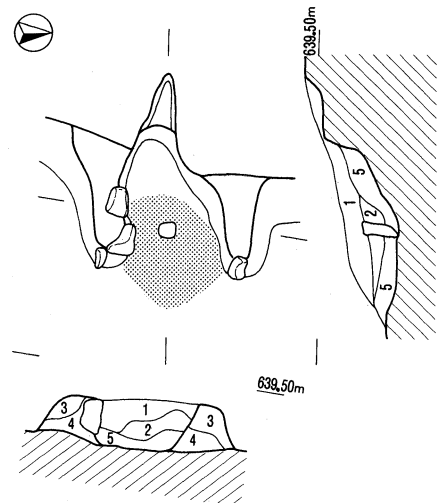
- 1 : 暗褐色土
- 2 : 褐色土 (焼土粒、炭化物混入)
- 3 : 褐色土 (砂粒を多く含む)
- 4 : 暗褐色土 (砂質土)

第104図 SB187カマド

SB189 (図版29・28 PL13 第106図)

SD21、NR06に切られる。主軸N82°E、規模(330)×345×26~60cm。方形を呈する。本遺跡ではめずらしくしっかりとした貼床を持っており、南壁際には焼土と礫の混入した床下土坑が存在する。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としているが、破壊を受けており、礫・遺物が散乱している。ピットは壁際に7本存在する。また、中央のピット上面は焼土で覆われている。

覆土は2層に分かれ、埋め戻しと考えられる。下層の壁際に完形に近い土器が出土している。



- 1 : 住居址埋土
- 2 : 黒褐色土 (多量の焼土)
- 3 : 黒褐色土
- 4 : 黄褐色土 (地山にちかい)
- 5 : 黒褐色土 (地山のブロック、焼土粒を含む)

第105図 SB188カマド

SB190 (図版20・21)

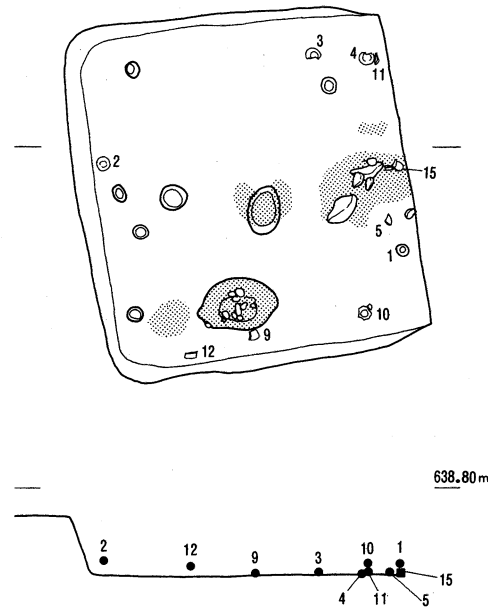
長軸は磁北を向く。規模315×(335)×0~08cm。方形を呈する。住居中央にピットが1基ある。カマドは存在しない。遺物は少なく礫の投棄も認められな

い。

SB191 (図版16・17 第107図)

SB217、SK202、203を切る。主軸 N02°W、規模 430×450×19~36cm。不整形を呈する。カマドは北壁中央付近に位置する。石組みを基礎としたもので、袖土中に土器片が混入している。燃焼部には天井石と思われる礫が落下している。住居中央に方形の落ち込みがある。貼り床はされず、住居の覆土と同一の土で埋まっている。

覆土は単層で、礫の投棄はない。土器片は少ないが、注目されるものとして床面より銅製鈴が出土している。

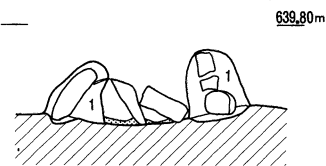
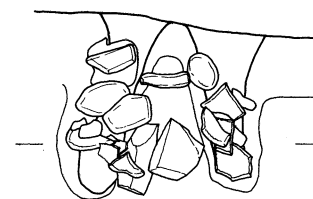


第106図 SB189

SB192 (図版16・17 PL15)

SB244を切る。主軸 N87°W、規模410×415×15~29cm。隅丸方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎としているが、右袖を中心に破壊が及んでいる。燃焼部の奥から土器片が出土している。

覆土は単層で、壁際には数ブロックに分かれて礫の投棄が認められる。これらは全て床面から浮いている。



第107図 SB191カマド

SB193 (図版20 第108図)

攪乱によって大半を失っている。主軸 N87°E、規模355×310×7~11cm。石組みを基礎としたカマドが東壁中央に位置する。破壊を受けており、火床上面からは礫や土器片が出土している。

覆土は単層で、遺物はカマド周辺に床面よりやや浮いた状態で出土している。



第108図 SB193カマド周辺遺物分布

SB194 (図版36・37)

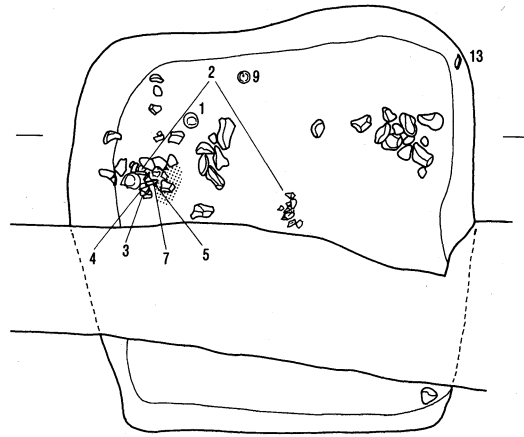
SB104、SD02によって覆土の大半を失い、また北半は調査区外である。主軸 N89°W、規模370×(250)×25cm。方形を基調としている。カマドは西壁に存在するが、上面をSB104に切られ、火床と僅かな土器片・礫が検出されたにとどまる。

覆土は単層で、カマド周辺の西壁際床面直上からその上層にかけて土器が多く出土している。

SB195 (図版16・17)

主軸N87°E、規模340×390×24~35cm。隅丸方形を呈するが、攪乱が激しく本来の形状を留めていない可能性もある。本遺跡の一般的な住居と異なり、床面の堅固な範囲が南半部に寄る特徴を示す。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としたと考えられるが、左袖は完全に破壊されている。

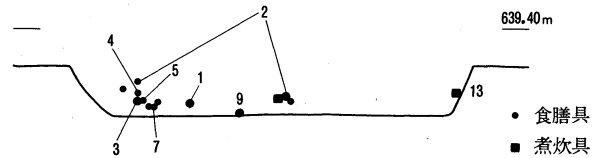
覆土は単層で、壁際などに礫があり、土器はカマド付近に集まる。全て床面からは浮いている。



SB196 (図版31 第109図)

SB228を切り、SD02に切られる。主軸S87°W、規模360×400×42~59cm。隅丸方形を呈する。西壁中央に石組みを基礎としたカマドが存在する。左袖がSD02に削平されている。右袖前方に礫が散乱し、燃焼部覆土中には土器片が多く廃棄されている。

覆土中では、東壁よりに礫の集中が見られる。



第109図 SB196

SB197 (図版42)

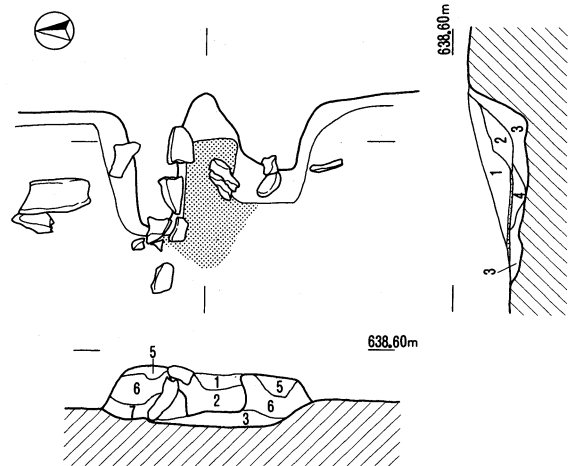
SB74、SD06に切られ、SB213、214、223、240を切る。主軸S88°E、規模(210)×370×14~24cm。方形を呈すると考えられる。カマドが東壁中央に位置する。石組みを基礎としているが、右袖は破壊され、南側床面上に礫が投棄されている。

SB198 (図版42)

SB213、SK179を切る。北側が調査区外である。主軸S88°E、規模255×(250)×8~17cm。隅丸方形を呈すると思われる。東南部東壁に向かって礫の集積があり、カマドの可能性を持つが、焼土などが僅かしかなく断定はできない。

SB199 (図版42 PL11)

SB65・69・154・155・184、SD06に切られる。主軸N88°E、規模550×547×47~56cm。方形を呈する。南壁の西側には階段状の張り出し部が存在する。カマドは東壁中央に位置する。火床と袖石が若干残るのみで、大半はSB69によって削平されている。カマド前方床面に礫が散乱している。

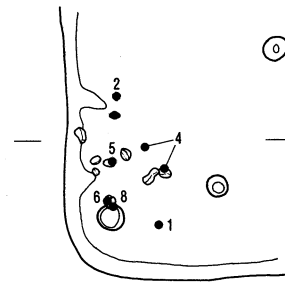


- 1: 暗褐色土 (焼土粒混入)
- 2: 暗褐色土 (黄褐色砂質土粒混入)
- 3: 赤褐色土 (焼土粒を多量に混入)
- 4: オリーブ褐色土 (焼土粒、暗褐色土粒が混入)
- 5: 暗褐色土
- 6: 褐色土 (黄褐色土粒多量に混入)
- 7: 黄褐色土

第110図 SB200カマド

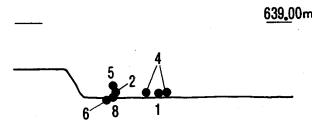
SB200 (図版25 PL14・38 第110図)

主軸S88°E、規模360×380×19~35cm。西辺の短い台形状を呈する。カマドは東壁中央に位置する。礫の使用は少なく袖の内側に並ぶ程度である。右袖を主に破壊しており礫が散乱する。



SB201 (図版29・28 PL13 第111図)

主軸S89°W、規模363×345×22~36cm、方形を呈する。カマドは西壁中央やや南よりに位置する。破壊されており、原形をとどめていない。火床上面から礫・土器片が出土している。ピットは8基確認されている。



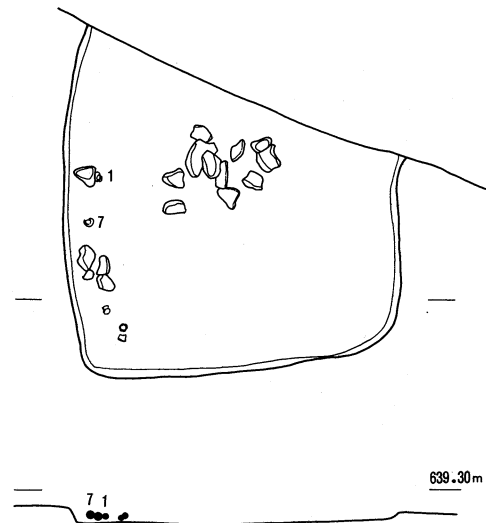
第111図 SB201カマド周辺遺物分布

東側で床面に礫が散乱している。

SB202 (図版45 第112図)

SB203を切り、その上に貼床をほどこしている。北側は調査区外である。長軸N02°E、規模(355)×350×1~11cm。不整形を呈する。調査区内では付属施設は確認されなかった。

床面には炭化物の集中箇所があり、住居中央には礫が集中して出土している。



第112図 SB202

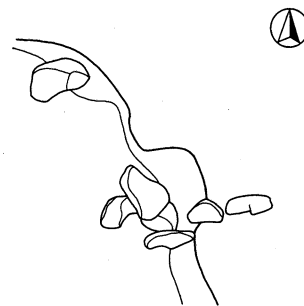
SB203 (図版45)

SB202に切られ、SB224を切る。隅丸の台形に近い形状を示すため、主軸は正確に出し得ないが、N07°W、規模440×415×24~35cm。北壁中央付近と東壁中央付近に焼土と礫の集中があり、いずれもカマドの可能性を持つ。北壁のものにはハケ甕を伴っており、主軸はこちらをとった。

覆土中には、炭化物や焼土の集中箇所が見られ、礫の投棄も認められる。南西部の炭化物と礫の集中箇所には、羽口が伴っており、鍛冶関係の廃棄物と考えられる。

SB204 (図版42 第113図)

SB69・223に切られ大半を失っている。またSB214、240を切る。主軸N11°E、規模(75)×(435)×13~43cm。形状は不明である。カマドは東壁の北よりに位置する。片袖の礫のみが残存している。



第113図 SB204カマド

SB205 (図版20・21)

SB118・206に切られる。主軸S89°W、規模310×(275)×7~18cm。方形を呈する。北壁に若干の張り出しが認められる。ピットは東壁中央付近に1基。カマドは西壁南よりに位置する。袖石が少数残存している。

SB206 (図版21)

SK1182に切られ、SB205を切る。長軸N87°E、規模235×232×28~33cm。方形を呈する。付属施設は確認されていない。

SB207 (図版31 PL13)

SB252を切り、SB2005・2014・2022、SK1172・1173、SA02に切られる。北東部は調査区域外となる。主軸N88°E、規模570×480×32~41cm。東西に長い隅丸長方形を呈する。南壁東よりの床面がベッド状に高まりを見せる。カマドは東壁中央やや北よりに位置する。調査区域外に出るため、全体の形状は不明である。石組みを基礎としたものの破壊を受けているため、燃焼部上に礫がつまっている。

覆土は単層で炭化物の混入がある。床面上の一箇所で礫の集積が見られる。土器などの出土はカマドを除くと、西壁近くに比較的多く見られる。

SB208 (図版19)

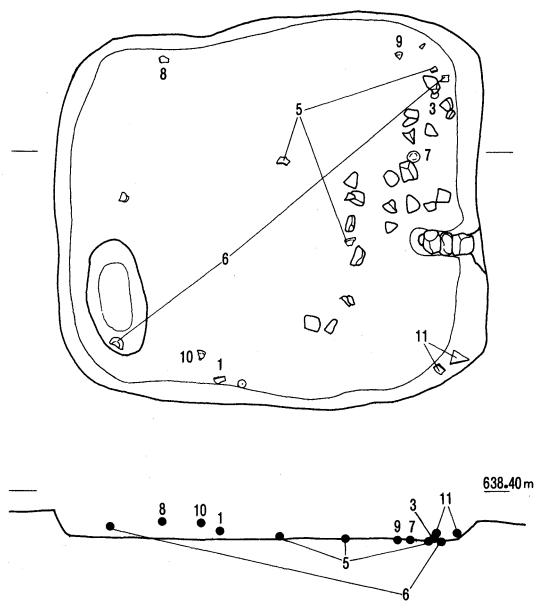
大半を攪乱によって失っている。残存部長軸N3°E、規模(315)×(415)×10cm、形状不明。付属施設は残存せず、遺物もごくわずかである。

SB209 (図版16・17 PL15・38 第114図)

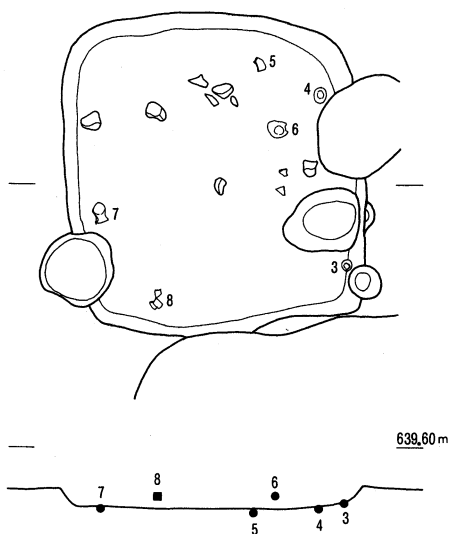
SB210を切る。主軸N85°E、規模415×390×15~25cm。西辺の短い不整な隅丸長方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。礫を使用したものと考えられるが、破壊を受けており、礫や土器が散乱している。南西部に浅い落ち込みが1箇所存在する。

カマド周辺以外では、壁際から多くの遺物が出土している。

SB210 (図版16・17 PL15・38 第115図)



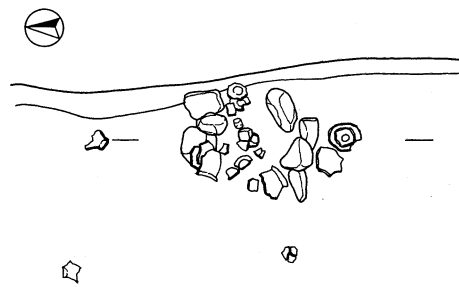
第114図 SB209



第115図 SB210

SB209、SK218～220に切られる。主軸N87°E、規模295×310×20cm。方形を呈する。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。破壊が激しく、わずかに火床の掘り込みと煙道が残るのみである。

覆土中には、礫や土器が散在している。



SB211 (図版25)

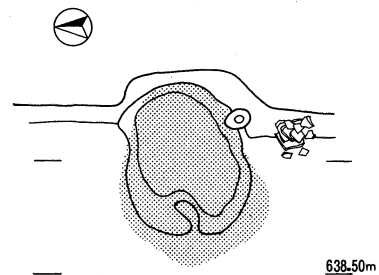
攪乱によって東・南壁の一部を切られる。長軸N1°E、規模215×200×6～18cm。西辺の短い台形を呈する。カマド施設は認められないが、北壁の東よりで厚い焼土の堆積が認められる。遺物は北壁際から数点出土している。



第116図 SB213カマド

SB212 (図版25 PL14)

北側部分は調査区域外となる。主軸は磁北を向く。規模330×295×8～10cm。北西コーナーにカマドの可能性を持つ石組みが存在する。しかし、焼土などは認められず断定はできない。



第117図 SB214カマド

SB213 (図版42 PL39 第116図)

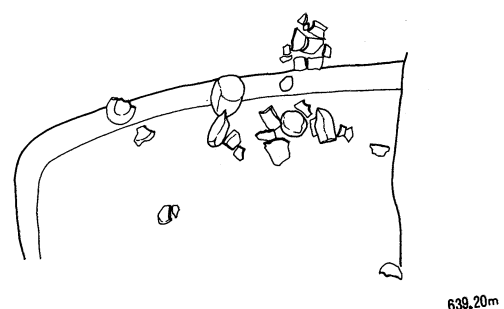
SB197・198、SD06に切られ、SB214・240を切る。主軸N88°E、規模377×370×9～35cm。方形を呈する。カマドは東壁中央に位置する。袖石・支脚石は残存し、燃焼部をある程度埋めたのちに、土器片の投棄が行われている。

遺物はカマド周辺に集中的に見られ、1・2は床面に重ねられた状態で出土している。

SB214 (図版42 第117図)

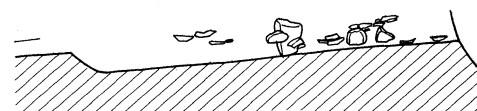
SB69・197・204・213・223に切られ、SB240を切る。主軸S89°E、規模(160)×545×16～28cm。方形を基調としている。カマドは東壁中央やや南よりに位置する。礫は存在せず、袖はほとんど痕跡を留めていない。浅い凹み状のピットが5基存在する。

覆土は単層で、遺物は東壁側に床面から浮いた状態で多く出土している。



SB215 (図版16・17 第118図)

SB103、SK151・159・167・235に切られる。主軸N06°W、規模330×(280)×10～15cm。カマドは北壁



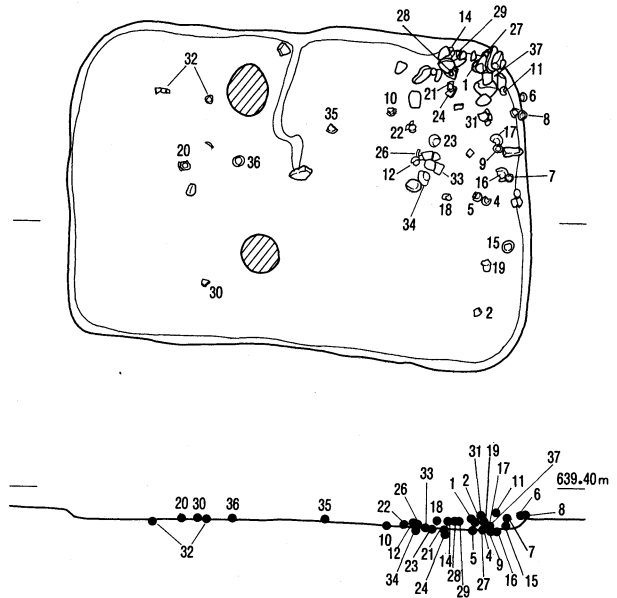
第118図 SB215カマド周辺遺物分布

中央付近に位置する石組みを基礎としたものと思われるが、破壊を受けており、燃焼部付近に礫と土器片が散乱する。

SB216 (図版32・33 第119図)

ST208と重複する。主軸S89°E、規模475×325×3~22cm。長方形を呈する。住居中央北側に段差があり、カマドのある北東部が低くなる。南側ではゆるやかに変化するため、段差はできていない。カマドは北東コーナーに位置するが、軸は北壁に向く。左袖は破壊を受け礫が散乱し、燃焼部上に土器が投棄されている。

遺物は、カマド周辺から多量に出土しており、その他では北西側に散在する。



第119図 SB216

SB217 (図版16・17)

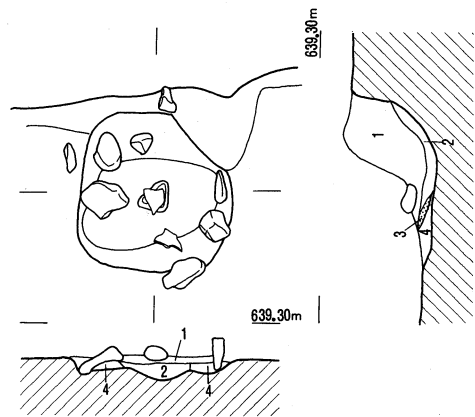
SB191、SK202・210・211に切られる。規模(250)×(255)×17cmである。付属施設はなく、遺物の出土も微量である。

SB218 (図版28)

SB251とSX2021に大半を切られる。残存部の長軸N77°E、規模(150)×(140)×25cm。付属施設は確認されず、遺物の出土もわずかである。

SB219 (図版37 PL11)

ST208を切り、SB74に切られる。主軸N89°E、規模360×435×4~46cm。長方形を呈する。北東コーナーに本址に伴うSK230が存在する。カマドは東壁中央に位置するが、SB74に削平され火床しか残っていない。礫の投棄はなく、遺物も少ない。



- 1 : 暗褐色土
- 2 : 暗褐色土 (多量の焼土、炭を含む)
- 3 : 焼土
- 4 : 暗褐色土 (少量の焼土を含む)

第120図 SB220カマド

SB220 (図版23・24 第120図)

SB272、SK1191に切られる。主軸S88°W、規模(330)×370×24~31cm、方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎としたものと考えられるが、破壊を受けており、礫が散乱している。

南壁際に礫の投棄が認められる。遺物の出土は少量にとどまる。

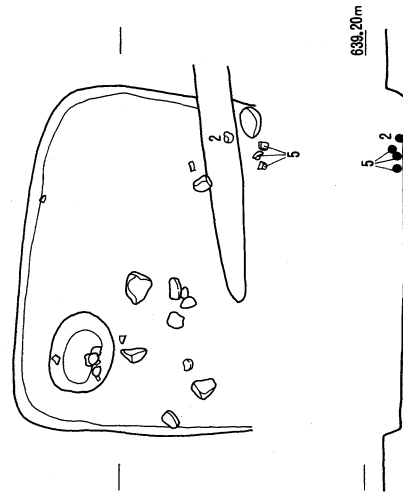
SB221 (図版16・17)

SK204・205・1190に切られる。残存部長軸N88°E、規模(305)×(225)×12~21cm。付属施設は確認されず、遺物も微量である。

SB222 (図版20・21 PL15 第121図)

SD26及び攪乱のため切られている。主軸S86°E、規模(240)×345×18cm。方形を基調としている。カマドは東壁にあったものと考えられる。南西部にはピットが1基存在する。

覆土中には礫が散在している。



第121図 SB222

SB223 (図版42)

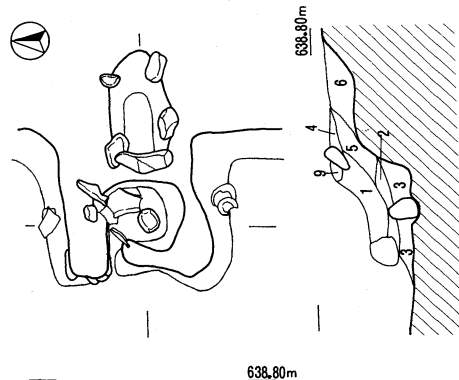
SB69・197、SD06に切れ、SB204・214・240を切っている。主軸N87°E、規模450×(155)×30~40cm。方形を基調とする。付属施設は確認されていない。

SB224 (図版45)

SB202・203に大半を切られている。残存部長軸N88°E、規模270×(65)×22~30cm。覆土は単層で、遺物はほとんど出土していない。

SB225

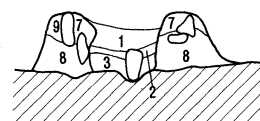
59年度調査終了ののち、都市下水道工事の掘削中に、SB02の南調査区域境の壁中で発見する。そのため、SB02との前後関係・プランなどは不明、大部分は調査区域外にかかると思われる。



SB226 (図版38, 40 PL33 第122図)

SB37・41に切られる。主軸N80°E、規模(290)×420×28~36cm。方形を基調としたものであろう。カマドは東壁中央に位置する。石組みを基礎としたもので、支脚・天井・袖石は整然と残存している。ピットが3基存在している。

覆土中には礫が集中した状態で出土している。



- 1 : 暗褐色土 (炭粒をわずかに含む)
- 2 : 暗褐色土 (灰、焼土粒、砂粒を少し含む)
- 3 : 黒褐色土 (灰、焼土粒、砂粒を多く含む)
- 4 : 暗褐色土 (焼土粒、砂粒を少し含む)
- 5 : 暗褐色土 (焼土粒多く含む)
- 6 : 暗褐色土 (砂、炭粒を少し含む)
- 7 : 黄褐色土 (砂のブロックを多く、焼土粒を少し含む)
- 8 : 暗褐色土 (粘性が強い)
- 9 : 暗褐色土

第122図 SB226カマド

SB227 (図版39・40 PL11・12・39 第123図)

SB42・226、SD19・25・SK1028・1051に切られる。主軸S88°W、規模940×960×60cm、方形を呈する。

カマドは西壁中央に位置する。左袖が破壊されて礫が抜かれているが、煙道部の残存は良好である。カマドと対する東壁中央に、入口と考えられるスロープが壁外に突出して施設されている。支柱穴は4基。カマド両脇に3基、その他7基のピットが存在する。壁際には拳大～人頭大の礫がならべられ、その外側に、壁溝の巡る部分が北と東で認められる。

住居中央付近の覆土中には、多量の礫が投棄されており、カマドの南東側には、土器片が多く出土している。

SB228 (図版31)

SB196、SD02に切られる。残存部長軸N02°W、規模295×265×40～50cm。台形状を呈すると思われる。付属施設はない。

覆土は2層に分かれ、下層は埋め戻しと考えられ、上層では炭化物が多くなる。南西コーナー床面直上で、焼土・炭化物の集中が認められる。遺物の出土は僅かである。

SB229 (図版43・42)

SB42、SK229、SD19に切られる。長軸N88°E、規模(380)×(170)×55cm、形状は不整形である。北壁際に3基のピットが存在する。

SB230 (図版43・42 PL37 第124図)

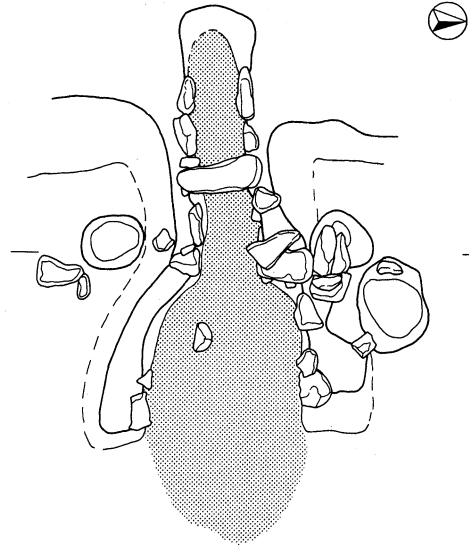
SB42・86、SD06に切られ、SD19を切る。主軸S83°W、規模550×530×8～40cm。方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎とし、煙道が壁外にややのびる形態を示す。天井石がないものの支脚石は残っており、破壊行為は顕著でない。

覆土には、住居中央を中心に礫が大量に投棄されている。ここでは土器の混入が少なく、土器と礫が混在する場合は南西側、及び南東側のブロックである。

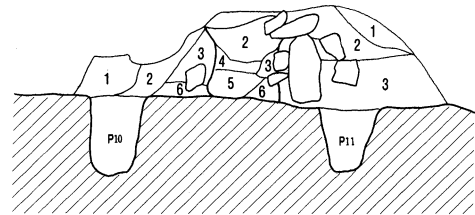
SB231 (図版39)

SB28・37・89にその大半を切られる。規模(325)×(65)×10cm。付属施設はなく、遺物もわずかである。

SB232 (図版28 PL13・39・40 第125図)



639.20m



- 1 : 暗褐色土 (焼土を含む)
- 2 : 暗褐色土 (焼土、地山のブロックを含む)
- 3 : 黄褐色土 (地山にちかい)
- 4 : 赤褐色土 (多量の焼土ブロック)
- 5 : 暗褐色土 (地山のブロックを含む)
- 6 : 黄褐色土 (焼土粒を含む)

第123図 SB227カマド

近世のSK2008、SB2012、SM1205に切られ、SD03を切る。主軸S88°E、規模395×440×15~29cm。不整な隅丸方形を呈する。ピットは2基存在する。カマドは東壁やや北よりに位置し、カマド設置のため壁が若干張り出している。石組みを基礎としている。破壊は前方部袖・天井に限られ、燃焼部覆土中には土器・礫が投棄されている。

住居中央覆土中には、焼土ブロックの投棄が認められる。遺物は、カマド周辺に集中するほか、全体に礫が散在している。

SB233 (図版19)

SD26と攪乱によって切られる。残存部長軸N9°E、規模350×(250)×12cm。付属施設は認められなかった。覆土は単層で遺物も僅かである。

SB234 (図版29・28 PL40 第126図)

SB261、267を切る。主軸S88°W、規模415×420×35~43cm。北西コーナーが内よりになる不整方形を呈する。ピットが3基存在する。カマドは西壁中央に位置する。石組みを基礎としており、支脚石が残存している。支脚石は土器片で囲まれており、さらに燃焼部全体が支脚よりも上部で土器片によって封鎖された状態を示している。

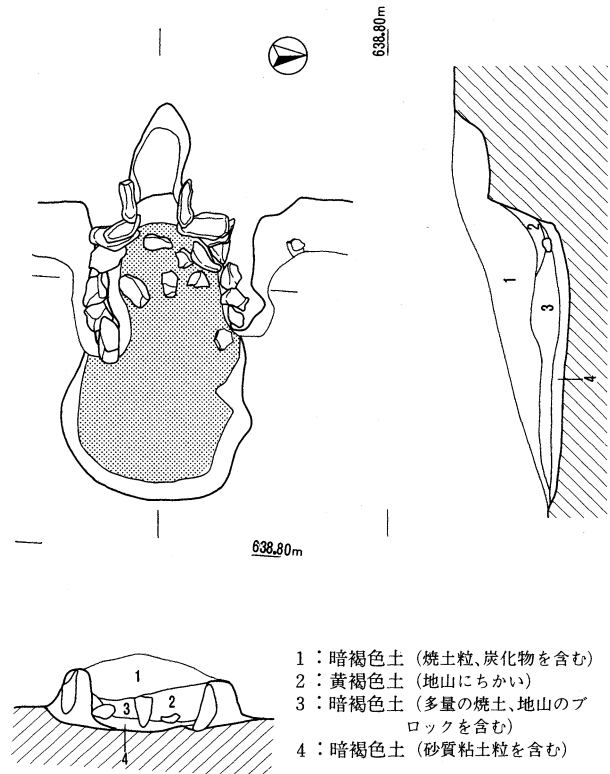
遺物はカマドに集中し、他からはほとんど出土していない。

SB235 (図版42)

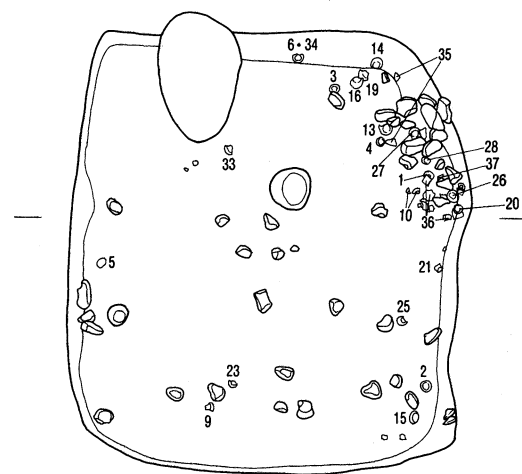
SD06に切られ、北側は調査区域外となる。SB237・238・239を切る。残存部長軸N88°E、規模405×335×29~40cm。方形を基調としている。付属施設は確認されなかった。覆土は単層で、焼土・炭化物ブロックが混入している。遺物は、床面から浮いた状態で散在している。

SB236 (図版12)

SK111に切られ、SD14を切る。規模250×(200)×15~30cm、五角形を呈する。床面の凹凸が著しく、付属施設もない。住居として使用された可能性は低いと考えられる。



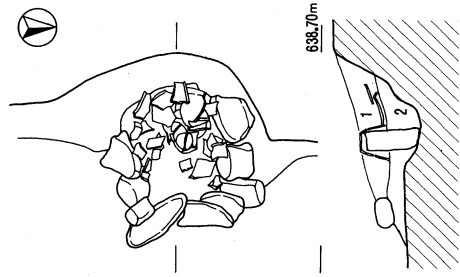
第124図 SB230カマド



第125図 SB232

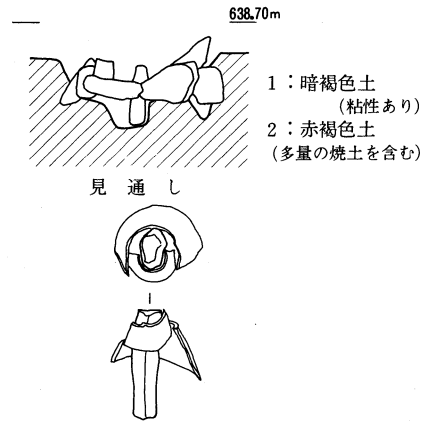
SB237 (図版42)

SD06、SB235・238に大半を切られている。規模(230)×(50)×20cm。ピットが1基存在する。



SB238 (図版42)

SD06とSB235・237に切られ、SB237・239を切る。残存部主軸N87°W、規模285×(100)×27cm。付属施設は検出されていない。



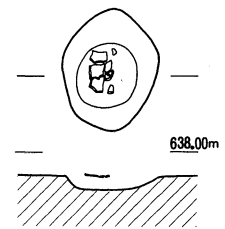
SB239 (図版42)

SD06、SB235・237・238に切られる。北側は調査区域外である。残存部長軸N4°W、規模(255)×(140)×25cm。本住居に付属すると考えられるピットが1基存在する。

SB240 (図版42 第127図)

SB197・204・213・214・223に切られる。主軸S89°E、規模(490)×495×25cm。方形を基調としたものと考えられる。カマドは東壁中央に存在するが、SB214に切られる掘り方を確認したのみである。遺物は、このカマド周辺から出土している。ピットは7基存在し、P 1、P 2、からは土器が出土している。

第126図 SB234カマド



第127図 SB240ピット内土器出土状況 (1:40)

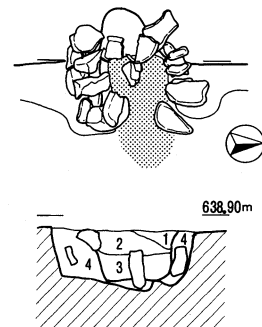
SB241 (図版39・40)

SD19・25に大半を切られる。長軸N79°E、規模320×(55)×20cm、方形を基調としたものと考えられる。カマドは、南東壁近くで袖石の一部と思われる礫が残されており、その可能性が高い。しかし、方向などは判然としない。

南東コーナーに、礫と遺物が置かれたような状況で出土している。

SB242 (図版43 PL41 第128図)

SB83、115に大半を切られる。規模・形状の推定は不可能である。西壁に設置されたカマドと、SB83のカマド下層の落ち込みが本址に伴うものである。カマドは石組みを基礎としている。右袖は破壊されているが、支脚は残存している。廃絶に伴って甕の破片が残されている。



- 1: 褐色土 (砂を少し含む)
- 2: 暗褐色土 (炭化物、焼土粒を含む)
- 3: 暗赤褐色土 (焼土粒、炭化物を多く含む)
- 4: 暗褐色土

第128図 SB242カマド

SB243 (図版28)

北側は調査区域外となる。主軸N85°E、規模380×(360)×42cm、方形を呈するものと考えられる。カマドは東壁中央に位置する。礫の使用は少なく、白色粘土で袖を構築している。左袖は破壊されて欠落している。

覆土中には、少量の礫が認められる程度で、遺物も微量である。

SB244 (図版16・17)

SB192に切られ、SB245を切る。主軸は真東と思われる。規模は $415 \times (255) \times 8 \sim 18\text{cm}$ 。方形を基調としていたと思われる。北壁際にゆるやかな傾斜の落ち込みが存在する。付属施設は確認されていない。

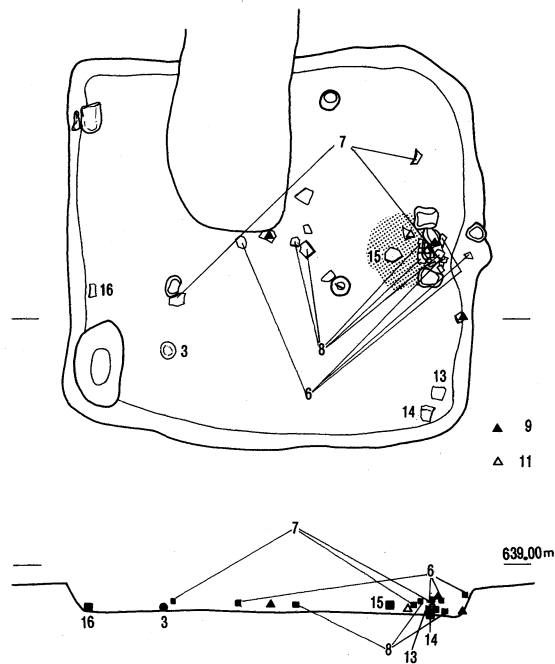
覆土は単層で、住居中央付近の床面直上に礫の集中が認められる。遺物は少ない。

SB245 (図版16・17 PL15)

SB244、SD04、攪乱に切られる。主軸 $N89^\circ E$ 、規模 $435 \times 455 \times 6 \sim 23\text{cm}$ 。隅丸方形を呈する。カマドは東壁中央やや南よりに位置する。石組みを基本としたもので、左袖の礫は原位置をとどめているが、右袖は破壊を受けている。遺物がほとんどない。

SB246 (図版26・27 PL13 第129・130図)

SK1122に切られる。主軸 $N82^\circ E$ 、規模 $415 \times 380 \times 24 \sim 31\text{cm}$ 。東西のやや長い方形を呈する。カマドは東壁中央に設置されている。石組みを基礎としたものと思われるが、袖石は3個しか残存していない。火床上層から土器が多く出土している。北壁近くにピットが1基認められ、南西コーナーには浅い凹みが存在する。



第129図 SB246

SB247 (図版31)

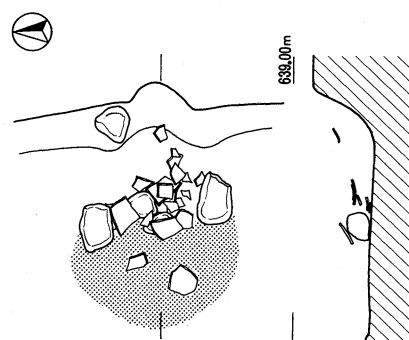
流路とSB2011に切られ、SB257を切る。主軸 $N10^\circ W$ 、規模 $360 \times (355) \times 6 \sim 20\text{cm}$ 。台形に近い形となる。カマドは北壁の西寄りに設置されている。石組みを基礎としているが、破壊を受けており、礫が崩れている。

中央付近に礫が投棄されている。土器片などの遺物は、カマド周辺に多い。

SB248 (図版42・43)

SD19、SK238、SK258によって切られる。主軸 $N85^\circ E$ 、規模 $400 \times 470 \times 60\text{cm}$ 、長方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。大半をSD19に切られているが、右袖の状況では、礫の使用の少ないタイプと考えられる。

遺物は、西壁側に偏って出土している。



第130図 SB246カマド

SB249 (図版36・37 第131図)

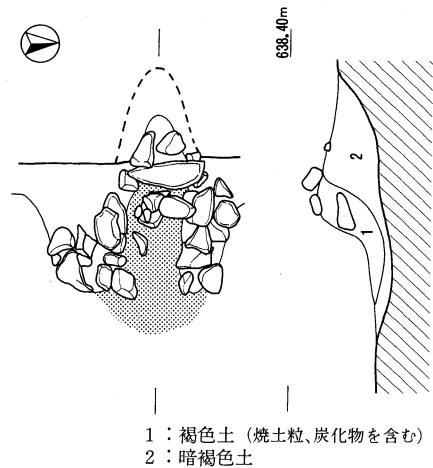
ST03、SB120、SF1638に切られる。主軸 $S89^\circ W$ 、

規模275×300×20cm。隅丸方形を呈する。西壁中央に石組みを基礎としたカマドが設置されている。袖前方部が破壊を受け礫が散乱している。それらの礫とともに、土師器甕片が出土している。

SB250 (図版25 PL14・41 第132図)

ST05、SB1213、SK1188、及び多数のピットに切られる。主軸N86°E、規模365×430×30~40cm。南北にやや長い長方形を呈する。カマドは東壁中央に位置する。礫をさほど多く使用していない。

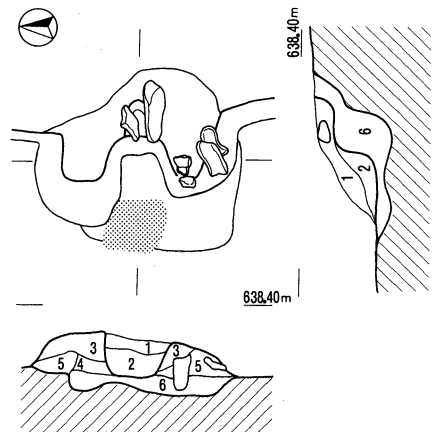
遺物は少量にとどまる。



第131図 SB249カマド

SB251 (図版28)

近世の井戸(SE01)、溝に切られ、SB218を切る。主軸N70°E、規模320×(315)×30cm。不整形を呈する。カマドは、北東コーナーに位置するが、土器が散在する程度で、原形をとどめない。



第132図 SB250カマド

SB252 (図版31)

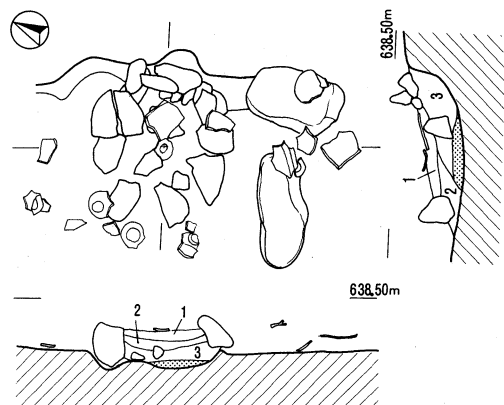
SB207・2022に切られる。長軸N01°E、規模325×285×37~48cm。付属施設は確認できず、遺物は、覆土中より土器細片が出土したにとどまる。

SB253 (図版22・24 PL14)

SD15に切られる。主軸N12°W、規模405×365×10~17cm。カマドは北壁中央に位置する。礫をまったく使用していない。袖土はくずれており、明確な袖の形をとどめていない。遺物は、覆土中より微量出土している。

SB254 (図版28)

SX2020に大半を切られ、SB112を切る。長軸N70°E、推定規模410×355×25cm。長方形を呈すると思われる。南西コーナー直下の床面上に、焼土が集中して認められた。



第133図 SB256カマド

SB256 (図版32 第133図)

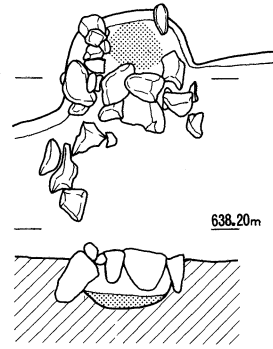
SD21に切られる。主軸S88°E、規模330×(180)×35cm。不整形を呈する。カマドは東壁北よりに位置する。石組みを基礎としたものであるが、前方部袖

石は破壊を受け、焚口部上層に礫が散乱する。燃焼部上層には土器片が多く出土している。遺物は、カマド周辺を中心に出土している。

SB257 (図版31 PL13 第134図)

SB247、2011、SD02に切られる。主軸N16°W、不整形長方形を呈する。カマドは北壁やや東寄りに位置する。火床を北壁ラインより外側へ出すタイプで、石組みによって袖を構築している。破壊を受けており、燃焼部には礫と土器片が散乱する。

南西コーナーに浅い落い込みが存在する。中央付近にピットが2基存在するが、本址に伴うものかSB247に伴うものかは不明である。

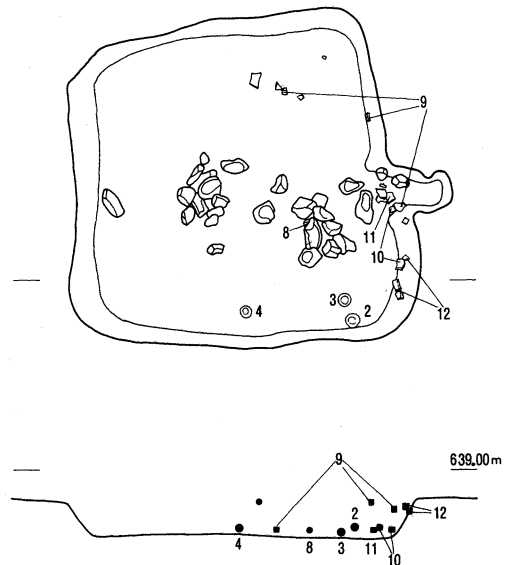


第134図 SB257カマド

SB258 (図版26・27 PL13・41 第135図)

SD30に一部を切られる。主軸S88°E、規模320×320×34cm。西辺の短い台形を呈する。カマドは東壁ほぼ中央に位置する。燃焼部が東壁ライン上に位置するタイプである。袖の内側には礫を使用している。焚口部床面上から甕片が出土している。

カマド前方床面上に礫の集積があり、やや西よりは床面から浮いた位置での集積がある。遺物は、南西壁際に比較的多い。



第135図 SB258

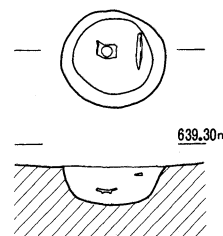
SB259 (図版26・27 PL14・42)

SK1121・1210・1222、SP1480・1487に切られる。主軸N89°E、規模370×400×22~36cm。北西コーナーがクランク状に狭くなる不整形を呈する。カマドは西壁中央に位置するが、SK1210によって破壊され、左袖の石組みや火床だけが残存する。

カマド前方には、多量の礫や土器が床面から上層にかけて出土している。

SB260 (図版25)

SB188掘り下げ途中、その覆土中に貼床を確認した。そのため、床面の半分近くを破壊してしまった。SB2001、NR04に切られる。長袖N81°E、推定規模(260)×(255)×25cm、方形を基調としたものである。附属施設は確認できなかった。



埋土：暗褐色砂質土、ローム混入

第136図 SB262ピット内出土遺物

SB261 (図版28・29)

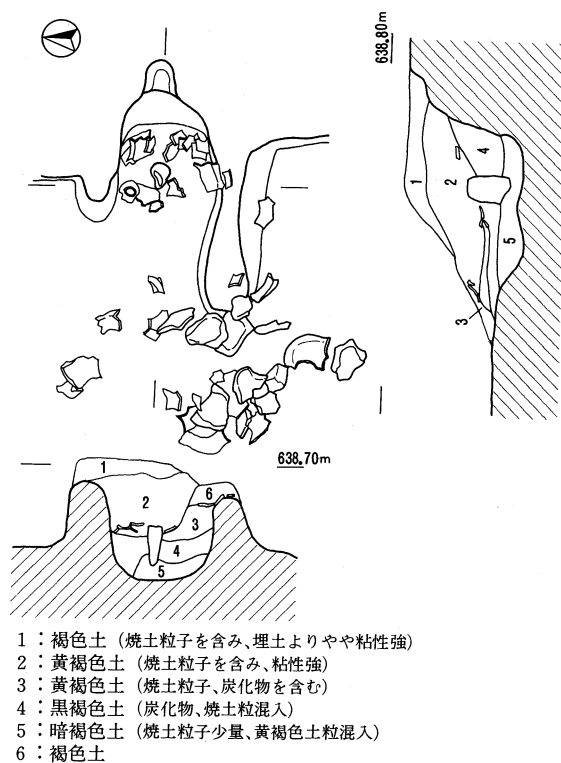
SB234にその大半を切られている。主軸N88°E、SB234の床下で確認できる床の範囲は(330)×450×26~44cm、方形を基調としたものであろう。カマドは東壁中央に位置するが、そのほとんどをSB234によって破壊されており、若干の焼土と礫がのこる。

SB262 (図版32・33 第136図)

SB21に切られその大半を失っている。長軸N81°E、規模450×420×14~30cm。西辺の短い台形と考えられる。北東隅にピットが1基確認され、炭化物を含む覆土中より、刀子と土器片が出土している。

SB263 (図版28・29)

SK1240に切られ、SB264を切る。主軸4°E、規模488×493×45~56cm。方形を呈する。カマドは北壁やや東よりに位置する。礫を用いたものと考えられるが、破壊のため礫が散乱している。覆土は単層である。



第137図 SB264カマド

SB264 (図版28・29 PL42 第137図)

SB253に一部を切られSB265を切る。主軸S88°W、規模315×345×42~51cm。不整形を呈する。カマドは西壁中央やや南よりに位置する。袖は壁近くでは地山をそのまま利用し、礫の使用は認められない。支脚石は残存するが、左袖は破壊されている。燃焼部をある程度埋めたのちに、土器などを入れ封鎖している。カマド前方の床面よりやや浮いた位置から、礫と須恵器甕が集中して出土している。

SB265 (図版28・29)

SB264に切られ、SB273を切る。覆土上層に多量の焼土の投棄が見られ、SK325とする。主軸N88°W、規模300×325×42~47cm方形を呈する。南西隅にピットが1基存在する。カマドは、西壁中央やや南よりに位置する。左袖は破壊され、右袖が若干残る。

覆土中には黄褐色土が混入し、埋め戻しの可能性が強い。

SB266 (図版30 PL42)

SK1244に切られる。主軸N88°W、規模332×332×33~40cm。南西コーナーと東壁中央の張り出す不整形を呈する。東壁中央の張り出し部は壁面が階段状になっており、入口部の可能性を持つ。カマドは西壁中央やや南よりに位置する。袖の基部は地山をそのまま利用し、少量の礫も使っている。覆土中には、黄褐色土のブロックが多量に入っており、埋め戻しの可能性が強い。

SB267 (図版28・9)

SB234・261に切られ大半を失っている。残存部長軸S82°W、規模400×(70)×30cm、附属施設は確認さ

れない。遺物は、南西部床面上で2点の土師器が出土している。

SB268 (図版28)

SB112、SD21に切られる。規模(430)×(240)×30cm。SB112の床面下で確認されたもので、残存度はひじょうに悪い。東壁近くで、ピットが2基とカマド掘り方が確認されている。

SB269 (図版33)

長軸N5°E、規模325×(275)×0~13cm。不整形を呈する。北壁中央で焼土が認められ、礫の散乱もあることから、カマドがこの位置にあったことも考えられる。しかし、確認面が床面近くであったため明確にはできていない。南東隅にピットが1基存在する。

SB270 (図版32・33)

SB132に切られる。長軸N88°W、規模250×(100)×8cm。方形を基調としていたと考えられる。西壁際に礫が存在し、カマドがあったかも知れない。

SB271 (図版23)

SB1048・1179、SP1449・1450・1451に切られ、SB272を切る。残存部長軸N87°E、規模300×(225)×12~26cm。方形を基調としたプランと考えられる。カマドは残存せず、北壁際に2基のピットが認められるが、本址に伴うものかSB272に伴うものかは不明。北東部で、礫が集中して出土している。

SB272 (図版23)

SB220を切り、SB271・1148、SK1191、SP1449に切られる。ほとんど原形を留めていない。残存部長軸N83°E、規模355×(150)×25cm、形状その他は不明である。

SB273 (図版28・29)

SB265にほとんどを切られている。規模300×285×15cm。不整形である。施設は確認されず、遺物も微量である。

イ 掘立柱建物址 (ST)

ST201・202 (図版33 PL43 第138図)

N地区に位置し、SD01とSB47に切られる。そのため全体は不明。ST201と202は建て替えと考えられ、その切り合い関係からST201が新しい。

ST201は南北2間(375cm)、東西2間(382cm)の総柱建物と推定され、主軸はほぼ南北である。柱間寸法は南北・東西方向ともに195cmと一定である。掘り方の平面形は長方形にちかく、P5のみに柱痕がみられ、その径は18cmである。掘り方はIII層の砂礫土を掘りこみ、埋土はIII層をベースにした暗褐色の小礫を含む砂礫土である。

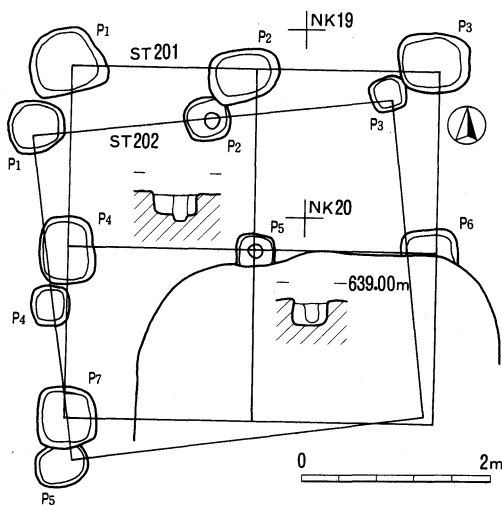
ST202は南北2間(345cm)、東西2間(372cm)の方形の建物と推定され、軸は西へ7°ふれる。柱間寸法は東西、南北方向ともに170cmほどの等間で、掘り方の平面形は隅丸方形である。P2のみ柱痕がみられ、直径16cmの円形である。埋土はIII層をベースにした黒褐色の砂質土で小礫を含まない。

ST203 (図版20 第139図)

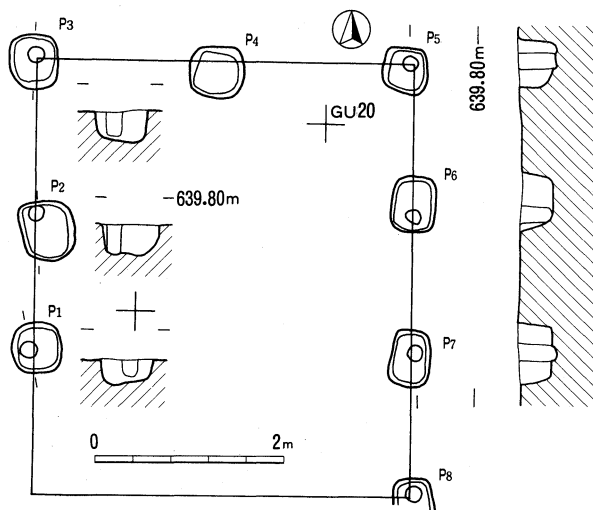
G地区に位置し、現建物の基礎によりこわされているため全体はわからない。南北3間(460cm)、東西2間(395cm)の長方形の南北棟の建物であり、軸はほぼ南北である。柱間寸法は東西方向は一定で、190cm、南北方向は140~165cmと不規則である。柱穴の掘り方は一辺40cm~60cmの方形あるいは長方形で、深さ40cm程度と一定である。柱痕はP4をのぞいてみられ、その径は17cm前後である。III層の砂礫層を掘りこみ、埋土はIII層をベースとした黒褐色の砂質土である。遺物は、P2より完形の土師器小型甕B(ST203・1)が埋設されるように正位で出土した。

ST204 (図版45・46 PL43 第140図)

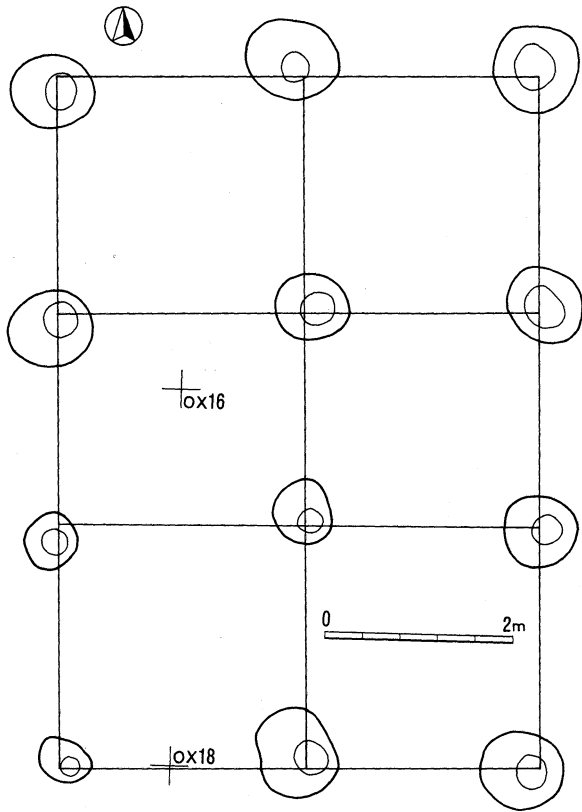
O地区の東端に位置し、SB56に切られている。南北3間(734cm)、東西方向(512cm)で長方形の南北棟の総柱建物である。軸は西へ5°ふれている。柱間寸法は東西方向は260cmとほぼ一定で、南北方向は226~252cmと不規則である。掘り方は径55~102cmの円形あるいは楕円形で、深さは30~42cmである。柱痕はみとめられない。III層の砂礫層を掘りこみ、埋土はIII層をベースとした黒褐色の礫を多く含む砂質土である。



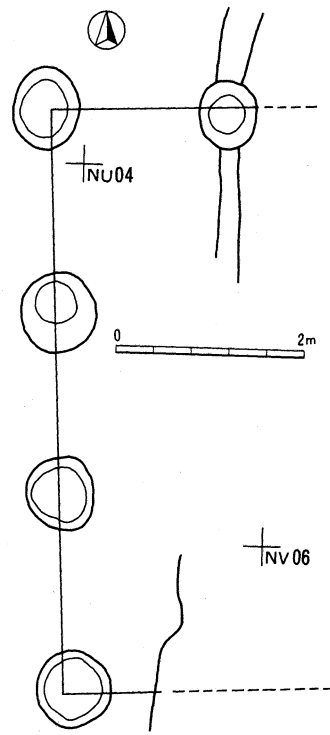
第138図 ST201・202 (1:80)



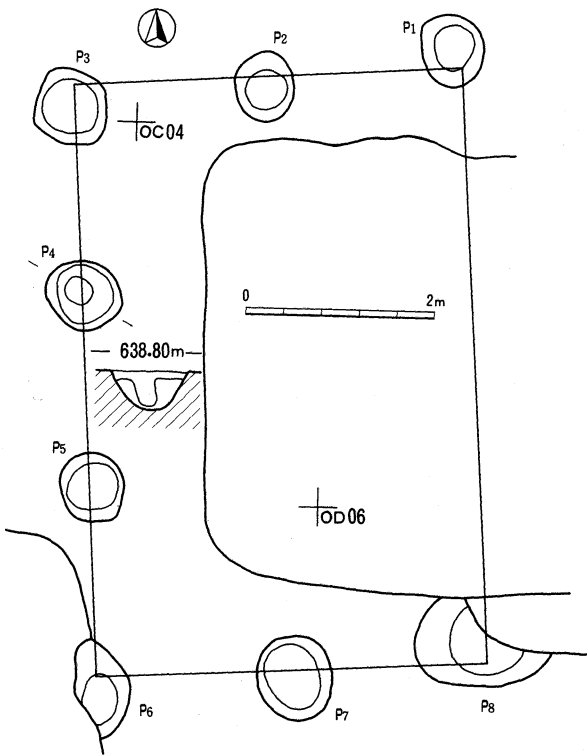
第139図 ST203 (1:80)



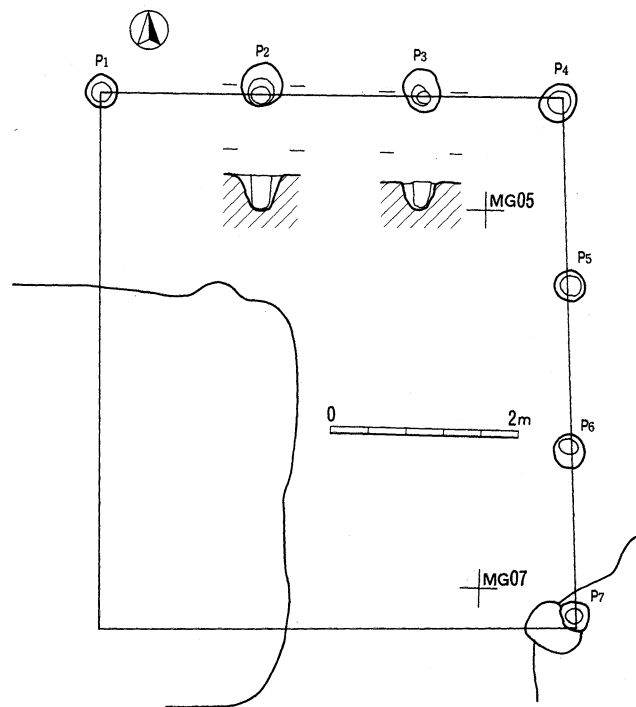
第140図 ST204 (1 : 80)



第141図 ST205 (1 : 80)



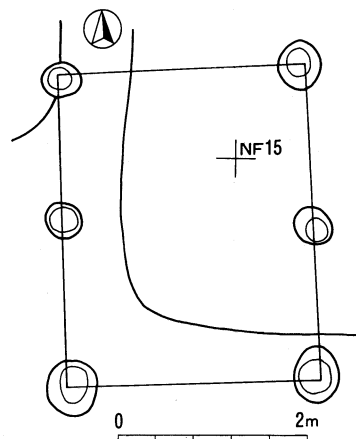
第142図 ST206 (1 : 80)



第143図 ST207 (1 : 80)

ST205 (図版37 PL44 第141図)

N地区に位置し、東西をSB32・120・249、SD17によって切られるため、全体は不明である。推定で南北3間(616cm)、東西2間の南北棟の建物と考えられるが、総柱かどうかは不明である。軸は西へ6°ふれる。柱間寸法は南北方向で208cmほどで一定している。掘り方の平面形はほぼ円形で深さ30cmほどである。III層の砂礫層を掘りこみ、埋土は小石を多く含む暗褐色の砂礫土である。



第144図 ST208 (1:80)

ST206 (図版37 PL43 第142図)

O地区に位置し、SB32とSB219によって大部分を切られるため全体はわからない。南北3間(632cm)、東西2間(413cm)の南北棟の建物であり、総柱かどうかは不明であり、軸は西へ6°ふれる。柱間寸法は104cmとほぼ一定である。掘り方は径60~80cmのほぼ円形で、深さは45cmほどである。柱痕はP4にみられ、径17cmほどで斜めにはいる。III層の砂礫土を掘りこみ、埋土は黒褐色の礫を含む砂礫土である。

ST207 (第143図)

M地区に位置し、SB124に切れSB259を切る。南北3間(550cm)、東西3間(492cm)の側柱建物であり、軸は西へ6°ふれる。柱間寸法は東西方向は158~171cm、南北方向は172~196cmと一定していない。掘り方は径40cm前後の円形で、深さは40cm程度で一定である。柱痕はP2、P3、P4、P5にみられ、径15cmほどで円形である。III層の砂質土を掘りこみ、埋土はIII層をベースとした黒褐色の砂質土である。

ST208 (図版32 PL43 第144図)

N地区に位置し、SB21とSB216に切られる、南北2間(330cm)、東西1間(264cm)の南北棟の建物である。軸は西へ5°ふれる。柱間寸法は南北方向150~175cmと一定ではない。掘り方は円形で、深さ30cmほどであり、柱痕は認められない。III層の砂礫土を掘りこみ、埋土はIII層をベースとした暗褐色の砂礫土である。

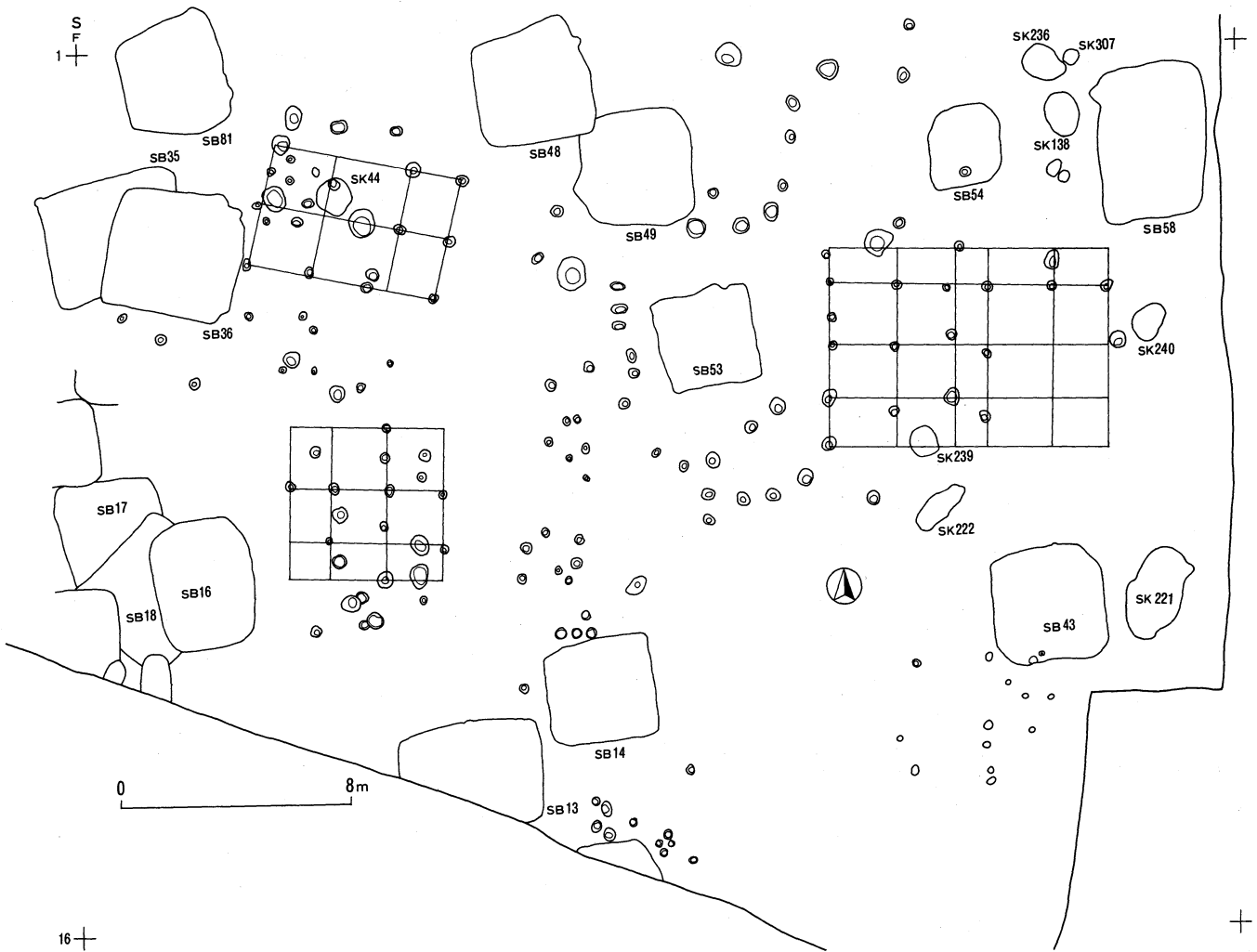
S地区柱穴群 (図版44~47 第145図)

S地区に多数の柱穴が発見された。中には柱痕がみられるものもあり、建物址の可能性を考えて調査を行った。柱穴はいずれもST201から206にみられるような大きな掘り方をもたず、わずかに認められる柱痕も10~15cmと細い。しかし、それらはIII層の砂礫土を検出面としたが、調査時の削平のためいずれも浅く、検出の際に失われた柱穴もいくつかあると思われる。調査時には建物址としてグルーピングできず、整理時に再検討を行い、第145図のような三棟の建物址の存在を想定した。いずれも、東西棟の総柱建物で、柱間は一定ではなく、柱の通りも良好ではない。東側と南側の建物はほぼ南北に軸を一致させるが、西側の建物はやや東へ軸がふれる。

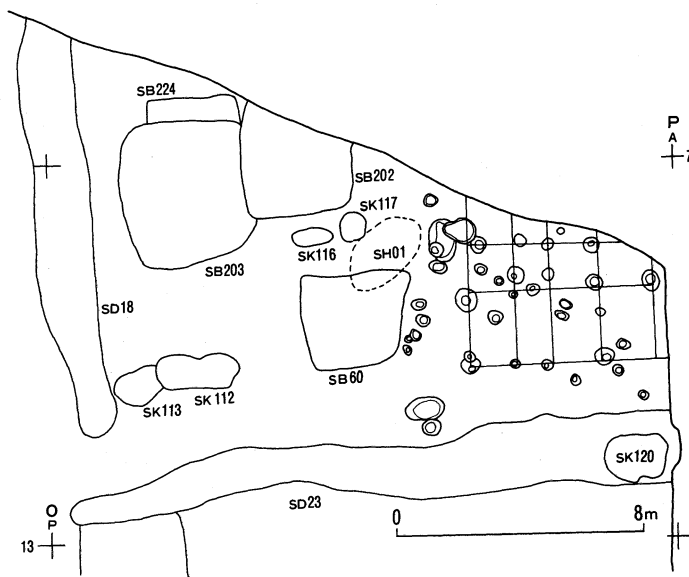
時期的には、すべての堅穴住居址を切っており、白磁IV・V類碗の分布と重なることから、一番新しい建物と推定される。この他グルーピングのできない柱穴が数多くあり、問題を残した。

O地区北東部柱穴群 (図版45 PL44 第146図)

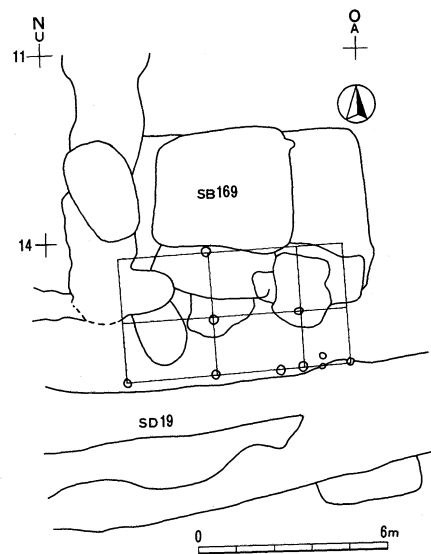
SD23とSD18に囲まれた区画の中に、柱穴が数多く発見された。調査時にグルーピングができず、整理の際に第146図のような、調査区域外に広がる建物を想定した。柱間寸法は一定ではないが、軸方向がほぼ



第145図 S地区柱穴群 (1:240)



第146図 O地区北東部柱穴群 (1:240)



第147図 N地区中部柱穴群 (1:240)

南北の総柱建物と思われる。柱穴はST201からST206にみられる大きな掘り方ではない。性格については、SD23・SD18で囲む区画の中に存在しており、それとの関連が考えられる。

N地区中部柱穴群（図版38 第147図）

SD19、SK122、SK169、SK132を切るかたちで柱穴がいくつか発見された。いずれも径10cm前後と小型であり、柱痕はみつからない。調査時にグルーピングできず、整理の際に第147図のような建物址を想定した。2間3間の柱間の一定しない東西棟の軸を、やや西へふる総柱建物である。他にも柱穴がいくつかあり、規模等が大きくなる可能性ももっている。重複関係から最も新しいと考えられ、白磁碗の分布とも重なることから、その時期の可能性はある。

(2) 墓

本遺跡では数多くの土坑が検出されたが、後述のように〔本節(4)参照〕その多くは、性格を決するには至らないものであった。その中には、墓であったものが含まれている可能性もあるが、遺物の出土状況などから確実に墓と認定できたのは、SK128のみである。また、これとは別に、蔵骨器が埋納された火葬墓が1基検出されている(SM01)。ここではその2基について述べたい。他のSKについては、(4)を参照されたい。

SK128 (図版15 巻頭図版1 PL45 第148・149図)

G地区北西隅のⅢ層上面で、褐色土の落込みとして検出された。東側にSK197が、西側にSK212が、それぞれ接している。当初これらとの重複関係がはっきりせず、その確認のために先行トレンチを設定したが、その際に緑釉陶器・土師器の検出をみた。先行トレンチによる埋土の堆積状況を参考に、プランを再確認したところ、主軸を真北にとり、長軸220cm、短軸119cmの長楕円形プランをもつことが認められた。Ⅲ層の砂礫層を掘りこんでおり、検出面からの深さは最大30cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層は砂礫を含む褐色土、下層は砂礫の少ない暗褐色土である。壙底は平坦で壁は緩やかに立上がる。

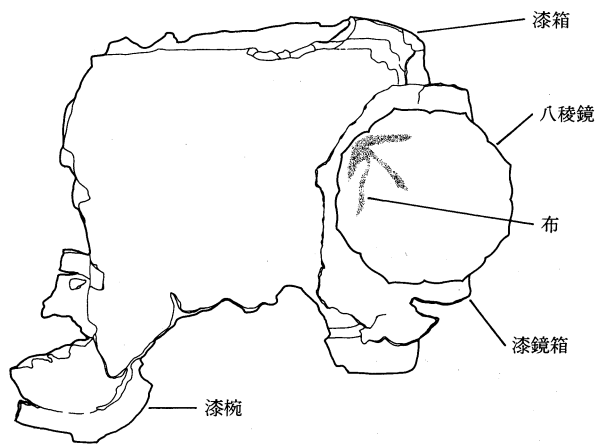
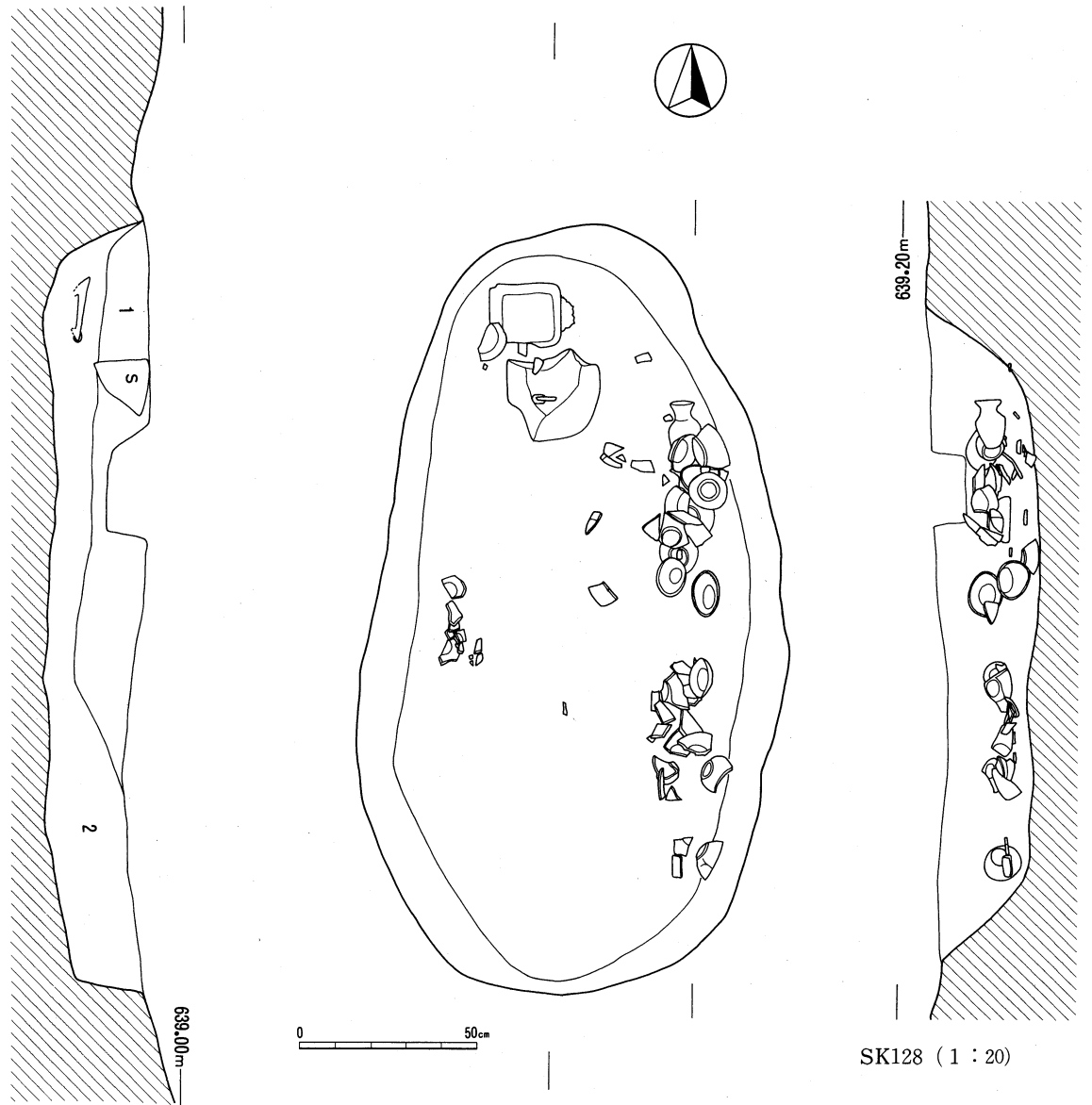
出土遺物が多い。まず、北壁近くの壙底上10cmに漆塗りの椀と乾漆の方形小箱が、さらにその下に、乾漆の容器(八角形?)に入って瑞花双鳥八稜鏡が出土した。これらは重ねられていたものと思われる。椀は半分を欠失しており、木質部はすでになく、漆のみが残存している状態であったが、そのあり方は正位で、方形小箱の上にのせられていたものとみられる。推定の域を出ないが、外容器に入れられていたのかもしれない。方形小箱は麻布でつくられた乾漆製品である。内容物は残存していなかった。八稜鏡の容器は、土壙を半割した際に半分を欠損してしまい、鏡は鏡面を上に分が露出した状態で検出された。鏡面及び背面には、これを包んでいたと思われる平織りの絹布が付着しており、鈕孔には紐の一部が残存していた。さらに、このすぐ南側からは、僅かな漆片とともに箸状の木片が出土しており、これらは一括して埋納されたものと推定される。なお、これらが置かれていた側に頭部があったと思われ、上部には人頭大の石が置かれていた。

東壁沿いでは、焼物類が列状に検出された。北より灰釉陶器の広口瓶(SK128・25)、緑釉陶器の椀2個体(18・19)、皿4個体(20~23)、耳皿(24)と土師器の杯3個体が折り重なるようにあり、さらに南側に若干離れて、土師器の椀・杯が12個体やはりまとまって出土した。西壁中央部でも土師器の杯が2個体出土している。これらの遺物は、その向きや配置が雑然としており、意識的に配列した様子はみられない。個々の詳細については別項(第2節)に譲るが、時期的には9期、すなわち10世紀後半にあてられるものである。

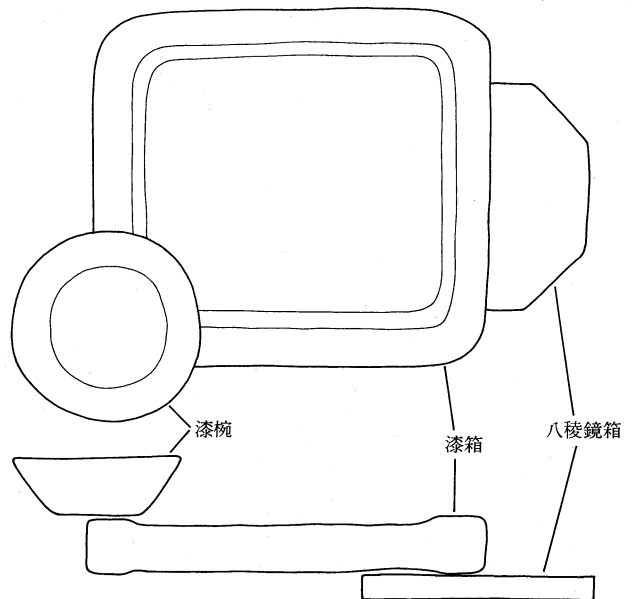
東壁沿いの遺物がほぼ一直線上に並び、土壙中央部に空間ができることから、木棺が置かれていたことが想定される。釘が出土していないので、組合せ式のものだったのだろう。その出土状況から判断して、漆製品と八稜鏡は棺内もしくは棺上に置かれたものと考えられるが、壙底から浮いた位置にあることから、棺上であった可能性が高い。土器類は、土壙内に棺を置いた後の空隙部に入れられたのであろう。推定される棺の規模は約180×40cmである。

SM01 (図版13 PL45 第150図)

調査区南西部のK地区で、地表下20cmから須恵器の長頸壺(図版162)がピット内に据えられた状態で検出された。Ⅲ層上面で検出したが、地表から浅いために上半部は攪乱が著しかった。従ってピットの掘りこみ面および上半部の状況は不明である。検出面でのピットの規模は、34×26cmの楕円形プランをもち、深さは11cmである。埋土は小石混じりの暗褐色土である。長頸壺はこのピットのほぼ中央部に、正位で置か

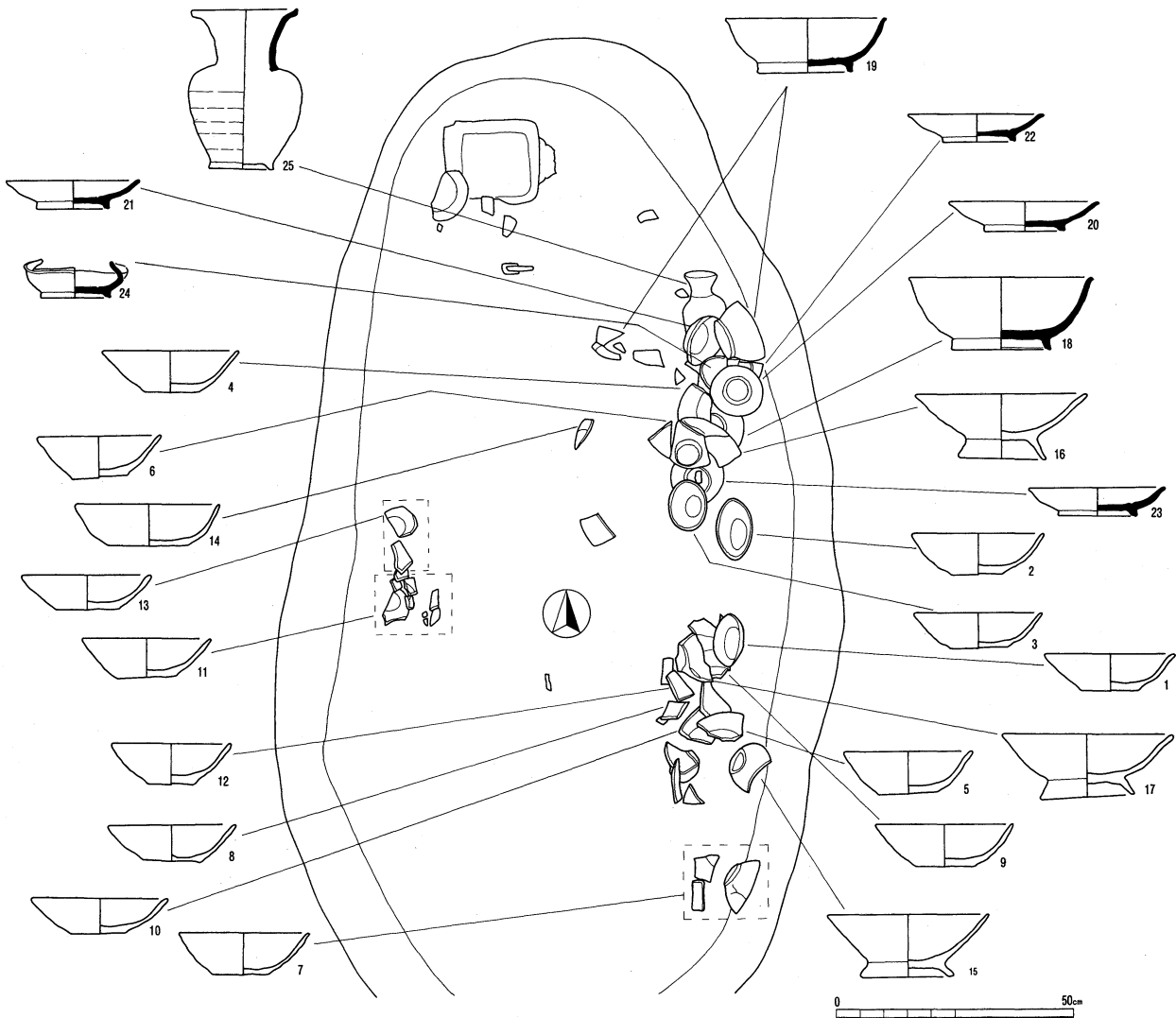


漆製品出土状況(裏面より) (1:4)



漆製品配置模式図

第148図 SK128



第149図 SK128 (遺物番号は図版162の番号に対応する)

れていた。中には下半部に火葬骨片が詰まっており、蔵骨器であることが確認された。骨は人骨で、後頭骨、大腿骨、脛骨、足根骨の細片と認められた(註1)。上半部にはI層の土が入りこんでいたが、これは後の流入であろう。長頸壺などの日常容器が蔵骨器として用いられる場合、口頸を打ち欠いたり底部に穿孔するなどして、仮器化することが一般的であるとされているが(桐原 健 1984)、本例の場合その可能性は少ない。副葬品はなく、蔵骨器を覆う外容器の存在も認められなかった。蓋の存在も予想されるが、いずれにせよ、ピットに蔵骨器を納めただけのものであったと思われる。当然、別に火葬所があったはずであるが、今回の調査では検出されなかった。

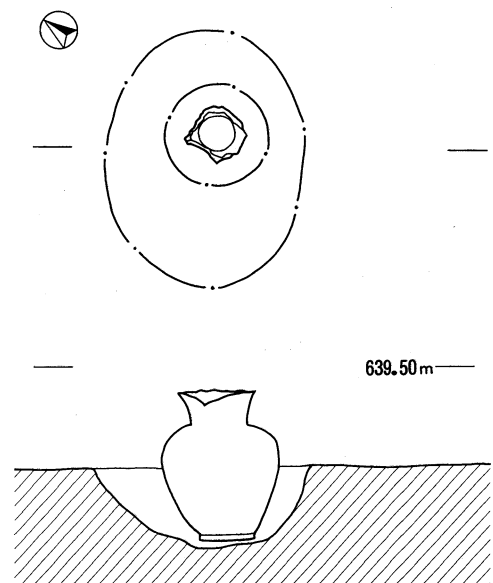
蔵骨器に用いられた須恵器の長頸壺から、10~11世紀のものと考えられる(註2)。

(註1) 信州大学医学部西村寿晃の鑑定による。

(註2) 名古屋大学文学部斎藤孝正の御教示による。

参考文献

桐原 健 1984 「北信濃における古代末仏教の受容層」『須高』19



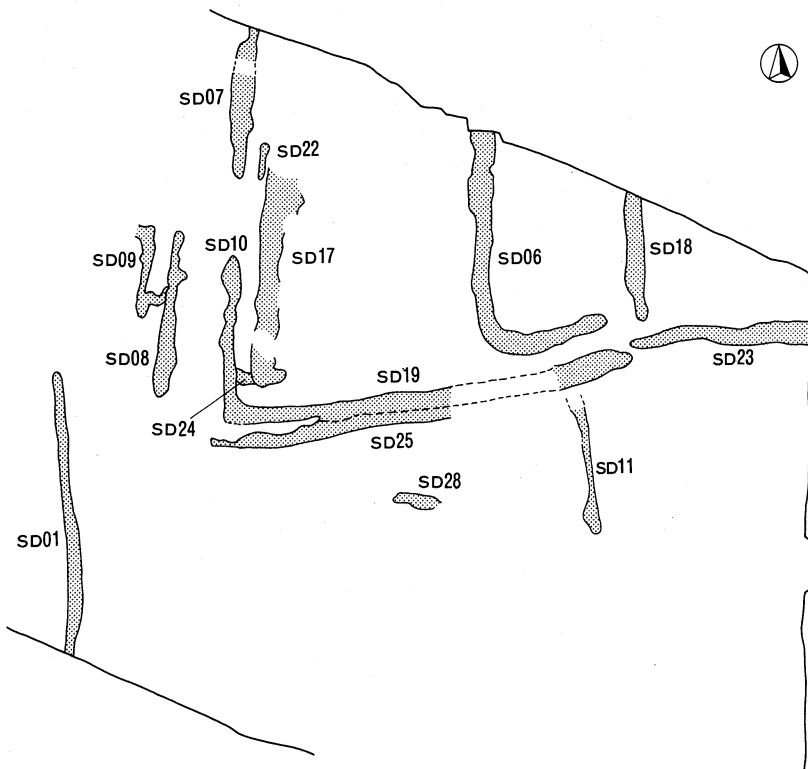
第150図 SM01 (1:20)

(3) 溝址 (SD)

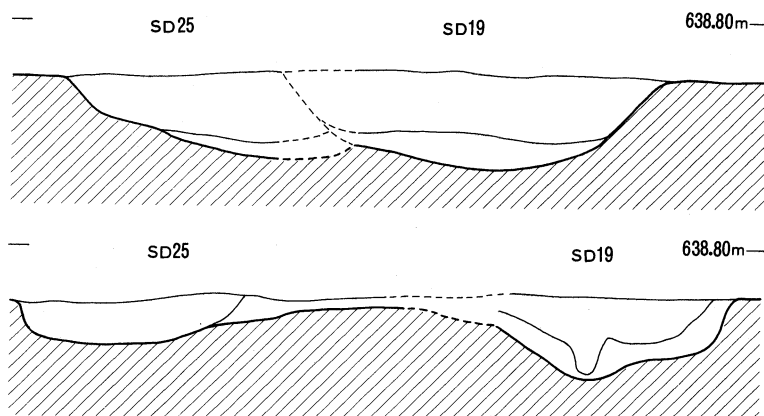
ア O・N地区の溝 (第151図)

SD10・19 (図版35・38・43 PL45 第152図)

当初、南北にのびるSD10と、東西にのびるSD19の2本の溝として調査をし、その交差する部分がSB174によって切られているとした。しかし、SB174の調査時に、その埋土の礫がL字状に抜かれており、2本の溝はSB174を切ってつながる1本の溝と判断した。切り合い関係は複雑で、並行するSD25、SB106、SB162・174、SB227を切り、SB42、SB86によって切られている。しかし、SB42の床面の下に溝の痕跡は残っている。東はSD23の途切れる部分から掘り込まれて西へむかい、NT16付近で直角に曲がり北へむかう。幅は188cmから96cmと一定しないが、東西方向(SD19)が広く、南北方向(SD10)は狭い。深さは検出面より28cmから42cmで、底面は平坦面がなくところどころに凹凸があり、ゆるやかに立ち上がる。III層の砂礫層を掘りこんでおり、埋土は二つに分ける。ともにIII層をベースとした暗褐色の砂質土で、下層ほど礫と砂のブロックを多く含むことから区分した。遺物は土師器、灰釉陶器が散在して出土した。



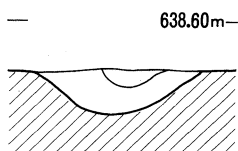
第151図 O・N地区溝配置 (1:800)



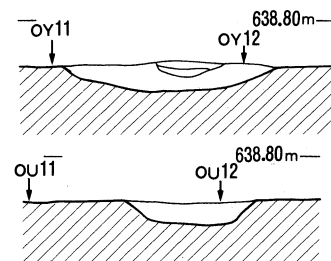
第152図 SD10・25断面 (1:80)

SD18 (図版45 第153図)

O地区の南北方向にのびる溝でSB135を切っている。ほぼ直線的で、幅は183cmから112cmを測り、南へいくほど狭くなる。深さは28cmから47cmと一定せず、南へいく



第153図 SD18断面 (1:80)



第154図 SD23断面 (1:80)

ほど深くなる。底面は平坦面がなく、ゆるやかに立ち上がり、ところどころに凹凸がある。III層の砂礫層を掘りこみ、埋土は二区分できる。上層は全体にわたって存在しないが、黄褐色の砂質土でレンズ状にはいる。下層は拳大の礫を含む暗褐色の砂礫土である。遺物は下層中より土師器、灰釉陶器などが出土している。

SD23 (図版45 第154図)

O地区を東西方向にのびる溝で、SK120に切られる。直線的ではなく幅も172cmから81cmと一定しない。深さは25cmから35cmである。底面は平坦面がなくゆるやかに立ち上がり、ところどころ凹凸がある。II層中よりIII層の砂礫土まで掘りこみ、埋土はIII層をベースとした暗褐色土である。遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器が出土されている。

SD25 (図版35・38 PL45 第152図)

SD10(19)と接し、東側でSB42に切られ、東西に28mの長さをもつ。西端でSB106を切っている。幅は160cmから120cmと一定していない。埋土は二区分でき、ともにIII層の砂礫土をベースとした暗褐色土で、下層ほど黄褐色の砂質土のブロックを多く含む。断面形は底に平坦面をもたず、ところどころに凹凸がみられ、ゆるやかに立ち上がる。遺物は埋土中より、土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器が散在して出土した。

SD07 (図版34 第155図)

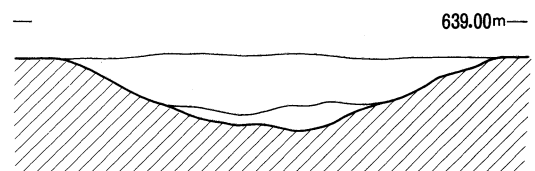
南北にのびる溝で、SD02(中世)によって切られる。南側はSD10とは7mほどの間隔をおいてはじまり、北は調査範囲外にのびる。方向はSD10と同じである。幅は102cmから218cmと一定しておらず、断面形は底に平坦面をもたず、ゆるやかに立ち上がる。埋土はIII層をベースとした暗褐色土で、二区分できる。下層のほうが黄褐色の砂質土のブロックを多く含む。遺物は土師器、灰釉陶器が埋土中より散在して出土している。

SD28 (図版38 第156図)

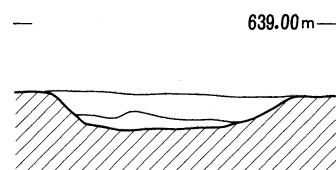
SB165によって切られて、東西にのびる溝である。III層の砂礫層を掘りこみ、埋土はIII層をベースとした暗褐色の砂礫土である。二区分でき、下層が黄褐色の砂質土のブロックを多く含む。幅は88cmから129cmと一定ではない。断面形はゆるやかに弧を描いて立ち上がり、深さは一定ではなく15cmから27cmである。埋土中より須恵器、土師器が散在して出土している。

SD06 (図版42・43 第157図)

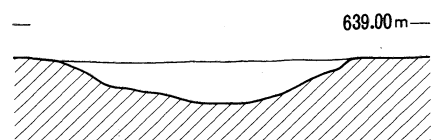
発掘範囲外より南北にのび、OI13付近で大きく弧を描き東へ方向をかえる。重複関係にあるすべての遺構の上面にのることから、一番新しいと考えられる。幅は148cmから256cmと一定しておらず、比較的浅い。断面形は弧を描くようで、底に平坦面をもたない。II層中よりIII層の砂礫土まで



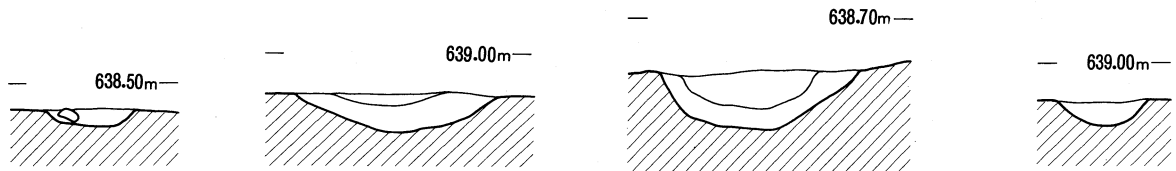
第155図 SD07断面 (1:80)



第156図 SD28断面 (1:80)



第157図 SD06断面 (1:80)



第158図 SD22断面
(1:80)

第159図 SD17断面
(1:80)

第160図 SD08断面
(1:80)

第161図 SD11断面
(1:80)

掘りこみ、埋土はⅢ層をベースにした礫を多く含む暗褐色の砂礫土である。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土する。上面を削平されたため、本来はもっと深いものと考えられ、東は徐々に立ち上がるため、さらに続いていた可能性が高い。

SD22 (図版37 第158図)

SD07の東側に1 mほど離れ、ほぼ平行に走る365cmの短い溝である。幅は39cmから48cmと狭く、深さは15cmと浅い。Ⅲ層の砂礫土を掘りこみ、埋土は、Ⅲ層をベースとした人頭大の石を含む暗褐色の砂質土である。断面形は弧を描くようで、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は埋土中より土師器と須恵器が少量出土した。

SD17 (図版37・38 第159図)

SB32、SB37、SB120、SK51に切られ、SB123、SB137、SD24を切る、東西方向の長さ20cmほどの溝である。北端は不明瞭で、Y字状に開くようにもみえる。幅は75cmから131cmと一定ではない。断面形は底に平坦面をもたず、壁はゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂礫土を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースにした砂礫土で下層ほど礫を多く含み二区分できる。遺物は土師器、灰釉陶器、須恵器、緑釉陶器の破片が出土した。

SD08 (図版35 第160図)

SD10より5 mほど西に離れて、SD09を切って南北17mほどの溝である。幅は68cmから205cmと一定せず、深さは最大で35cmほどである。Ⅱ層とⅢ層の砂礫土を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースとし、礫を含む量により二つに区分できる。上層は礫をあまり含まず、下層ほど礫を含む。断面形は底に平坦面をもたず、ゆるやかに立ち上がる。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器などが散在して出土した。

SD11 (図版43 第161図)

SB72を切り、SB68によって切られる、南北にのびる長さ7mほどの溝である。幅は60cm程度と狭く、深さも20cmと浅い。断面形は弧を描くようで、底に平坦面がない。Ⅲ層を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースとした暗褐色の砂礫土である。遺物も土師器が少量出土したのみである。

SD24 (図版35)

SD10に切られ、SD17と重複するが新旧関係ははっきりしない。連結する可能性が高い。埋土はSD17と同様であり、遺物も少量出土している。

SD09 (図版35)

SD08に切られ、形態および掘りこみのはっきりしない溝状の遺構である。幅は51cmから102cmと一定せず、方向もはっきりしない。Ⅲ層の砂礫土を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースにした暗褐色の砂質土である。

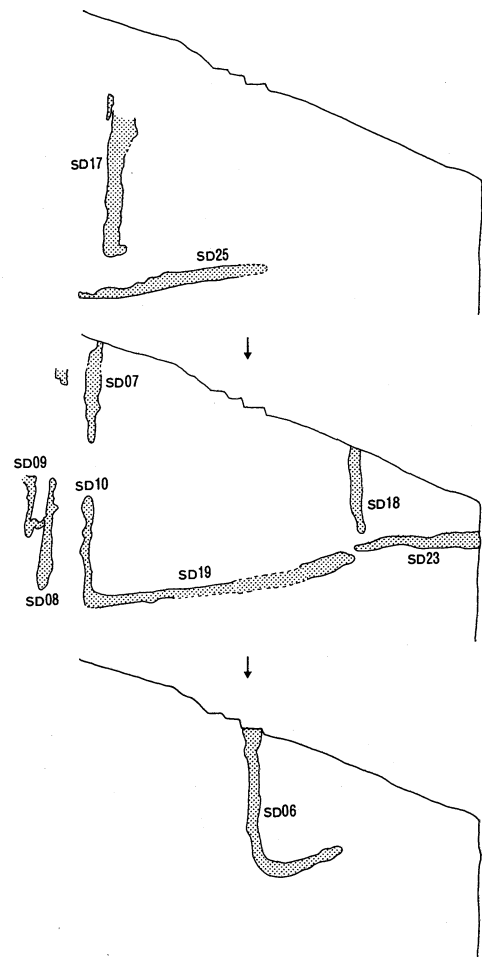
遺物の出土は少量である。

SD01 (図版35・36)

調査区中央部を南北に走る溝で、方向はSD08・10と異なりやや西へふれる。ST201、SB47・03・26と重複するが、いずれよりも新しい。南は調査区外にのび、北はゆるやかに立ち上がり消えていることと、当時の地表面の高さを考えあわせれば、さらに北へ続く可能性がある。幅は71cmから107cmと一定しておらず、掘りこみも浅く5～10cmほどで断面形はゆるやかに弧を描くようである。遺物は土師器と須恵器が少量出土している。

溝の変遷

この部分の溝の配置を、遺物および重複関係、方向より時期毎にわけると第162図のようになる。最も特徴的なのはSB32段階で、SD07・10(19)、SD23・18によって方形に区画されるような配置である。これらの溝は、当時の地表面の高さとその掘り上げ土を盛り上げることによって、土壘状になるとすれば、「濠」としての性格を考えてもよいと思われる。なお、いずれの溝も水の流れた痕跡はみられない。また、この区画の規模であるが、形態を正方形とすれば、一辺45mほどになる。またSD07・10との間、SD18・23・10の交点の空間は通路と考えてよい。次にSD08との関係であるが、SD10(19)と平行であることから方形区画との関連が考えられる。SD08を側溝とすれば、この間を南北にのびる道があった可能性を想定することができる。次に、SD17・25は、その位置より、SD10(19)に先行し、一帯を区画するための溝であり、また、SD06、SD11は、方形の溝の区画がなくなった後につくられたと考えることができる。遺物よりみて、SD28とSB227は同時期で、関連した遺構と思われる。

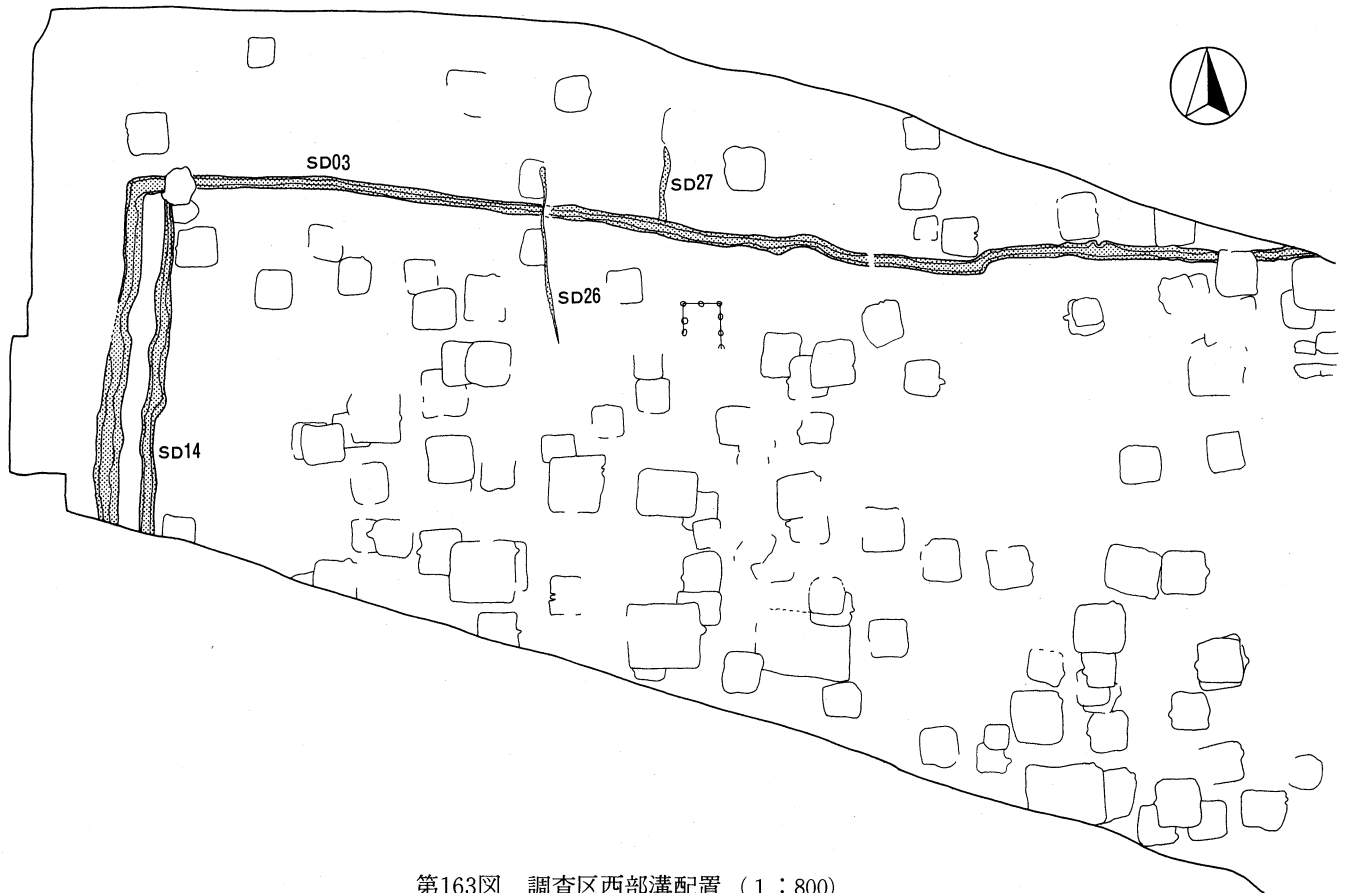


第162図 O・N地区溝の変遷 (1:900)

イ 西部地区の溝 (第163図)

SD03 (図版10・11・12・15・19・22・25・28 第164図)

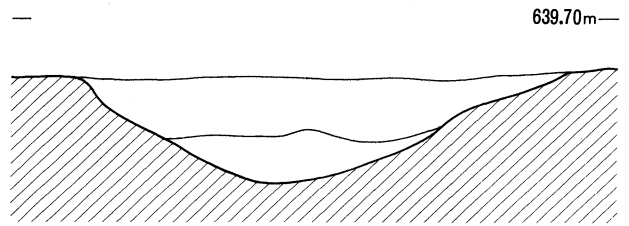
調査区西側に展開する長大な溝である。東部分は調査区外により西に走り、ところどころで曲がりながら、FP12付近ではほぼ直角に折れ、南へむきをかえ調査区外へ出る。重複関係はSB232、SD26、SK111によって切られ、SD27との新旧関係ははっきりしない。東西部分は幅が213cmから143cmと一定しておらず、深さ40～56cmほどである。南北部分は、自然地形が西へ大きく傾斜する部分の変換点につくられており、一部削平されている。幅145cmから251cmほどで、深さは30～40cmほどである。断面はU字形で、壁はゆるやかに立ち上がる。III層の砂礫土、砂質土を掘りこみ、埋土はIII層をベースにしており、ところどころで二区分できる。上層は暗褐色の砂礫土で、下層は黄褐色の砂質土のブロックを多く含む暗褐色の砂礫土である。配置を考えると、南北方向は、この溝以西に住居址などの遺構はみられず、集落の西側部分を画する溝と考えることができる。東西方向をみると、SB188の部分でそれぞれを意識するように曲げられており、これとの関連が考えられる。遺物は土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、須恵器が埋土中に散在して出土した。



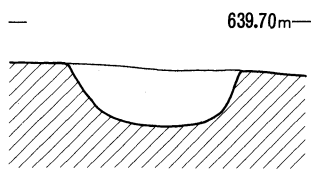
第163図 調査区西部溝配置 (1:800)

SD14 (図版12・13 第165図)

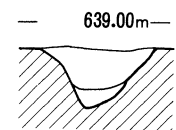
SD03と平行して南北に走る溝である。SD03との交点をSK111によって切られるため、新旧関係ははっきりしない。幅は104~145cmで、深さは20~30cmである。断面形はU字状で底に平坦面をもつ。III層の砂礫土を掘りこみ、埋土はIII層をベースとした小礫を含む暗褐色の砂礫土である。遺物は土師器の小片が埋土より散在して出土する。配置からSD03の掘り直し、あるいはSD14が掘り直しとも考えられるが、併行して存在していた可能性もある。



第164図 SD03断面 (1:80)



第165図 SD14断面 (1:80)



第166図 SD27断面 (1:80)

SD27 (図版19 第166図)

SB183とSB208の間を南北に走り、SD03に合流する溝である。SD03との新旧関係ははっきりしないが、SD03より新しい可能性はない。III層の砂礫土を掘りこんでおり、埋土は二区分でき、上層は暗褐色の砂質土で砂を含まず、下層は黄褐色砂質土のブロックと小礫を含む。遺物は埋土中より黒色土器と須恵器が出土した。

SD26 (図版19・20)

SB222・223、SD03を切り、南北にやや蛇行して走る溝である。幅は45～66cmと一定しておらず、断面はU字形をしており深さは10～15cmと浅く、掘りこみがはっきりしない部分もある。遺物はほとんど出土していない。

NR01 (図版36・41)

R地区とS地区の境からN地区にかけて蛇行してはしる自然流路である。切り合い関係は、SX08(中世)によってきられ、SB06をきっている。なお北側のSB174からSD08、SD10の上面のII層中に、礫が認められるが、これも自然流路の河床と考えられ、NR01は大きく南へ広がっていた可能性がある。掘りこみは不明確で、拳大の礫と砂の分布を範囲としてとらえた。幅は蛇行しているため一定しておらず、広い部分で6 m 前後、狭い部分で2 m 前後である。遺物の出土はない。

この流路は、遺跡内の地形的に最も低い部分を南から北へはしっており、その埋土のあり方からは長時間にわたる流水は考えられない。

(4) その他の遺構

ここでは、前項(1)から(3)に該当しない性格不明の遺構を扱う。それらに対して調査の際には、次のように分類して記号をつけた。その分類は地面を掘り凹め(1)から(3)に該当しない遺構(SK)、焼土を伴った遺構(SF)、石を伴った遺構(SH)、それ以外(SX)である。記述の方法は、SKの大部分は一覧表(第3表)としてまとめ、SKの特徴的なものとSF・SH・SXについては個々に行った。SKの一覧表の中の断面形A～Cの分類は第196図に示してある。

SK06 (図版36 第167図)

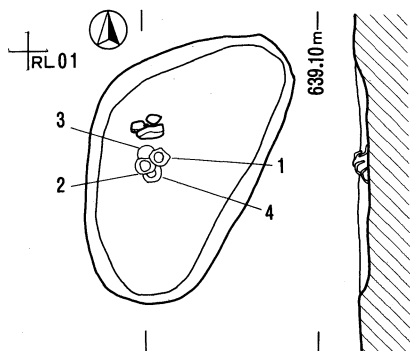
R地区で検出され、不整楕円形で立ち上がりのはっきりしない土坑である。規模は長軸168cm、短軸92cmを測り、検出面からの深さは5cmほどである。III層の砂層の部分に掘りこみ、埋土はIII層をベースにした黒色土である。遺物は土師器の杯A IIIが1点のみ正位で、他の3点は逆位で重ねられるように出土した。その横に礫がためられている。すでに調査の際に上面が削平されてしまっているが、本来は深いと推定されることから、墓としての可能性があり、土師器杯A IIIは副葬品とも考えられる。

SK15 (図版41 第168図)

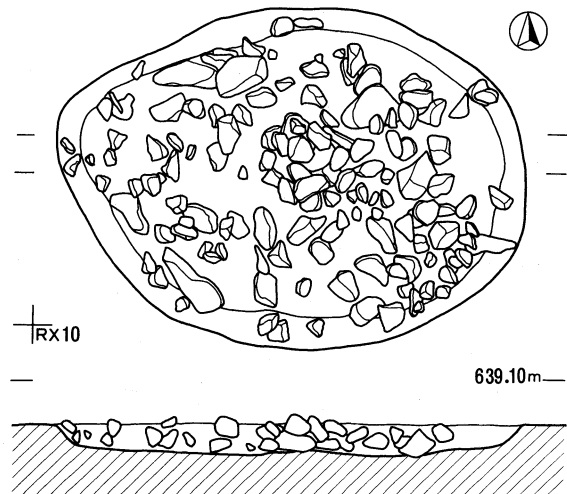
形態は楕円形で、平坦な底面をもち、ゆるやかに立ち上がりをもつ土坑である。規模は長軸247cm、短軸181cm、深さ18cmを測り、SB09を切っている。III層の砂の部分に掘りこみ、埋土はIII層をベースとした暗褐色土である。埋土中に投げこまれたような状態で多量の人頭大から拳大の礫がはいっており、特徴としてあげることができる。遺物は灰釉陶器の皿、碗、土師器の杯A IIなどがあるが、礫とともに投入されたと考えられる。

SK21 (図版35 PL46 第169図)

長径172cm、短径141cm、深さ31cmを測る。楕円形の土坑である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。II層中より掘りこまれ、底面はII層の砂礫土に達する。埋土はIII層をベースにした暗褐色の微量の焼土粒を含む砂質土である。埋土中には拳大から人頭大の礫が投げこまれており、その中に火熱を受けた花崗岩も含まれている。遺物の出土はない。



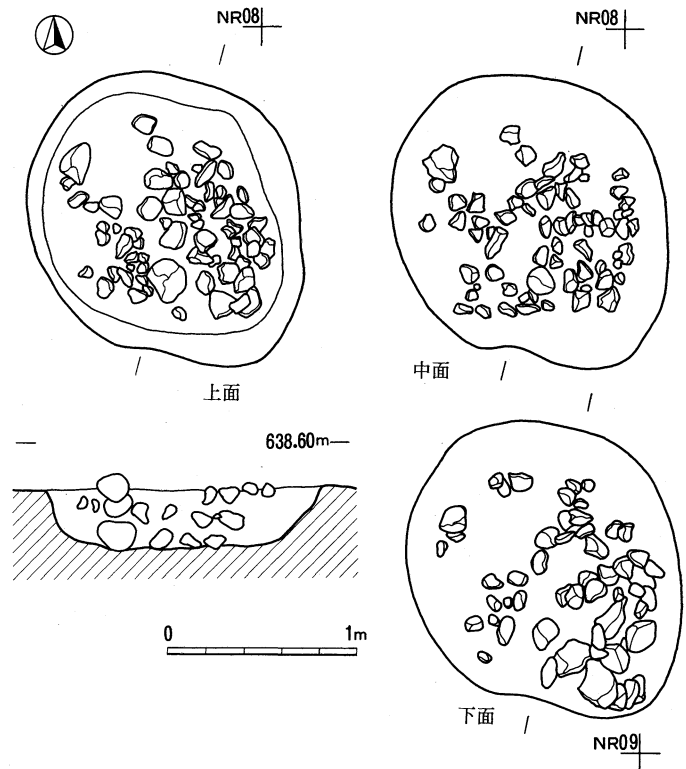
第167図 SK06 (1:40)
(遺物番号は図版番号に同じ、以下同じ)



第168図 SK15 (1:40)

SK25 (図版42 第170図)

SB31の北壁を切り、長軸171cm、短軸115cm、検出面よりの深さ20cmの楕円形にちかい形態で、立ち上がりのはっきりしない土坑である。II層中で検出されIII層の砂礫層まで掘りこんでいる。底面に人頭大から拳大までの礫が敷きつめたようにおかれる。埋土はIII層をベースにした黒褐色土で、多量の焼土と炭が混じる。しかし、壁や石は焼けてはいない。遺物は完形の鉄鎌が底面におかれるようにあり、その他土師器や灰釉陶器が埋土にまじって少量出土した。



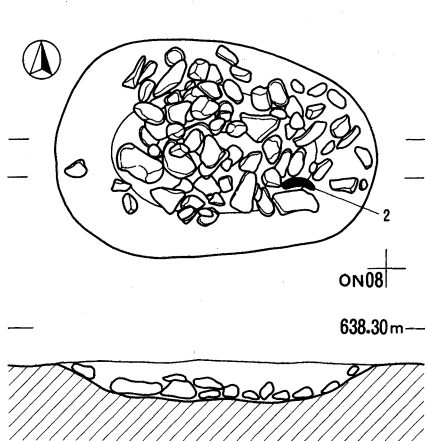
第169図 SK21 (1:40)

SK26 (図版34 第171図)

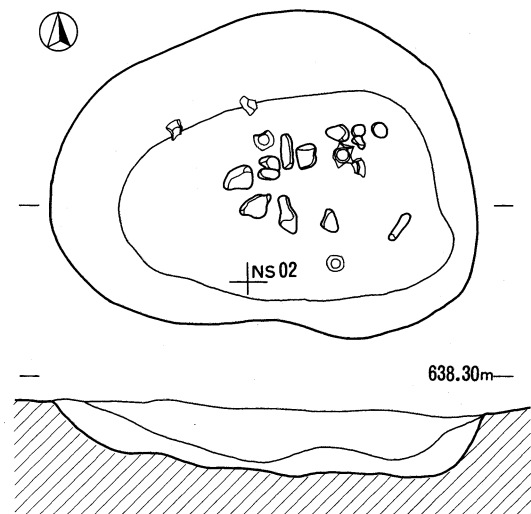
長径224cm、短径160cm、深さ34cmを測る、楕円形にちかいプランをもつ土坑である。底面は小さな凹凸のある平坦面をもち、西壁はゆるやかに、東壁は急に立ちあがる。III層の砂礫土を掘りこんでおり、埋土はIII層をベースにしており、2区分できる。上層は黒褐色の礫を比較的多く含む土で、下層は黄褐色の砂質土である。遺物や石、木炭片は上層より投げこまれた状態で出土しており、下層よりは出土していない。遺物としては、土師器杯AⅢ、足釜、灰釉陶器の碗・皿がある。

SK34 (図版34 第172図)

長径147cm、短径128cm、深さ29cmを測る、楕円形の土坑である。底面はやや斜めで、南壁は急傾斜で北壁はゆるやかに立ち上がる。III層の砂礫土を掘りこみ、埋土はIII層をベースとし、ほとんど礫を含まない暗褐色の砂質土である。遺物は底面より灰釉陶器広口瓶の破片が出土しているが、埋設された状況ではない。



第170図 SK25 (1:40)



第171図 SK26 (1:40)

SK43 (図版43 第173図)

長軸223cm、短軸161cm、検出面からの深さ52cmを測る。長方形にちかい土坑である。底面には凹凸があり平坦ではないが、立ち上がりの部分は明確に境をつくり、壁の傾斜は急である。Ⅲ層の砂礫土を掘り込み、埋土はⅢ層をベースとした黒褐色土である。底面には灰層が厚さ10cmほどで全面に広がり、焼土のかたまりがところどころにはいる。灰層の上には人頭大から拳大の石がのるが火は受けていない。また、壁や底面も火は受けていない。遺物は一部欠損した羽口が灰層の中より出土しており、釘と鉄滓も出土している。その他、土師器や灰釉陶器が出土するが埋納された状態ではない。

性格としては、羽口や鉄滓が出土していることから鍛冶遺構とも考えられるが、壁など火を受けていないことから可能性は薄く、鍛冶に関係した廃棄坑などの性格が推定される。

SK64 (図版43 第174図)

SB73によって切られる土坑で、全体は不明であるが長楕円形になると思われる。残在部分で短径108cm、深さ33cmを測る。底面は丸く凹み、壁はゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂礫土を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースとした暗褐色砂質土である。遺物は土師器杯AⅢ、灰釉陶器碗が西側にまとめられたように出土する。とくに3枚が重ねられた部分がある。性格としては、遺物の組合せから墓の可能性はある。

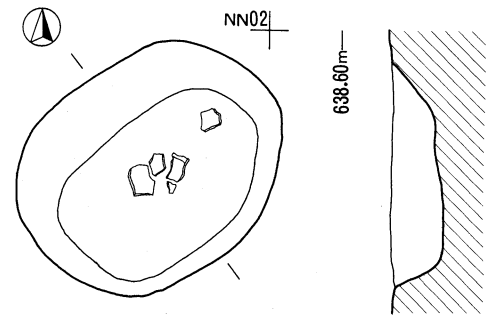
SK73 (図版37 PL46 第175図)

長軸102cm、短軸97cm、検出面よりの深さ26cmを測るほぼ円形の土坑である。底面は平坦ではなく西側が深くなり、壁はゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂礫層に掘りこみ、埋土はⅢ層をベースにした黒褐色土で、Ⅲ層の黄褐色の砂がブロック状に多くはいるほか、炭・焼土粒も多く含まれる。壁や底面はともに火を受けていない。遺物はほぼ完形の羽口が2点横になり、1点は床面よりやや浮き、1点は底面におかれたような状態で出土し、この他小さな鉄滓が30点ほど埋土の中からみつまっている。他に土師器が少量出土している。

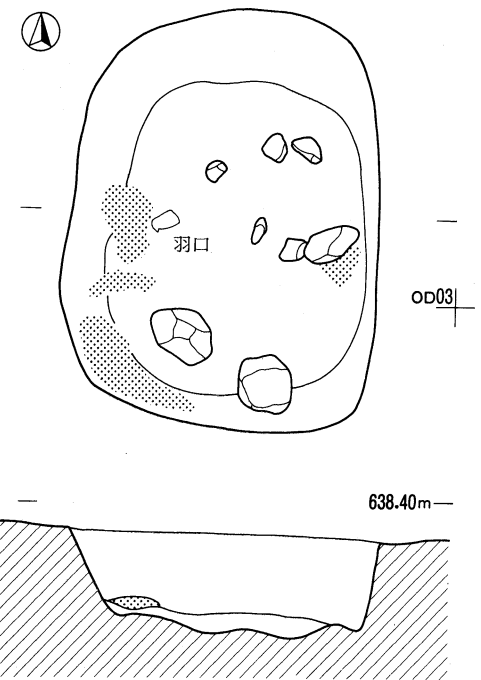
性格としてはSK42同様に、鍛冶に関係した廃棄坑のような遺構と考えられる。

SK84 (図版18 PL46 第176図)

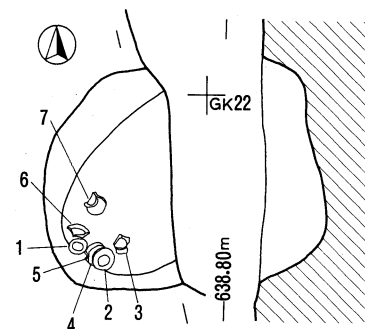
長軸248cm、短軸180cm、深さ116cmを測る不整形な長楕円形の土坑である。SB94に切られ、SB109との新旧は確認できない。



第172図 SK34 (1:40)



第173図 SK43 (1:40)

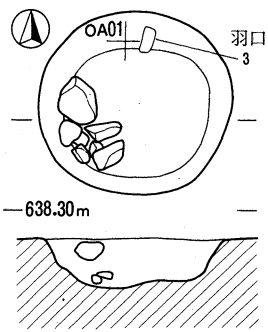


第174図 SK64 (1:40)

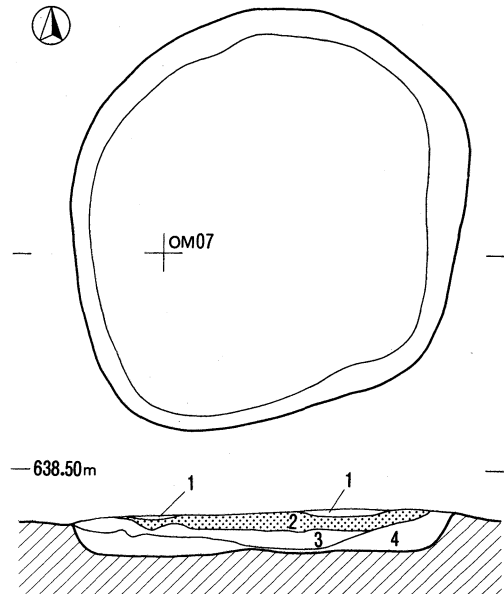
底面はⅢ層の礫の部分まで掘りこんでいるため、礫が露出しゴツゴツしている。壁の立ち上がりは急である。埋土は二層に分けられ、上層がⅢ層をベースとした暗褐色で焼土の粒子が混っており、SB109の埋土と見分けが難しい。下層はⅢ層の砂礫土にちかい黄褐色砂質土である。遺物は土師器、黒色土器、灰釉陶器の椀が壁ぎわに並べられるように出土した。しかし、完形のものは少く底部のみが多い。

SK97 (図版42 第177図)

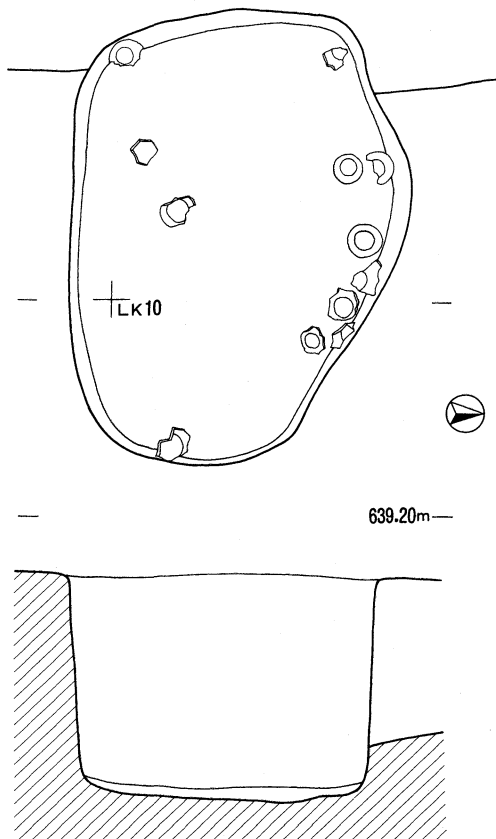
長軸221cm、短軸207cm、深さ21cmを測る、ややくずれた円形の土坑である。底面は平坦で立ち上がりは急である。Ⅲ層の砂礫土に掘りこみ、埋土は四区分ができ1～3層は4層の上にレンズ状にのっている。2層は焼土・炭を多く含み、1層は床面のように堅くしまっている。遺物は土師器、須恵器の小片が出土しているのみである。



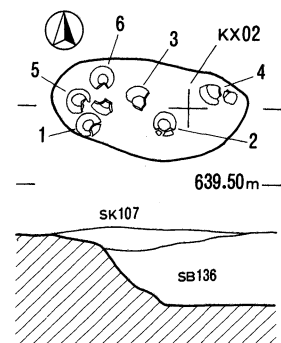
第175図 SK73 (1:40)



第177図 SK97実測図 (1:40)



第176図 SK84 (1:40)



第178図 SK107 (1:40)

SK107 (図版13 第178図)

SB136を検出中、南西コーナーを切るかたちで発見された。長径105cm、短径51cmの長楕円形の土坑で、深さは10cmと浅く、凹み状で壁はゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂礫土とSB136の埋土を掘りこみ、埋土はⅢ層の砂層をベースとしたあまり礫を含まない暗褐色土である。本来は上面より掘りこまれていた可能性が強く、今回調査した部分は底の部分と考えられる。遺物はほぼ完形の土師器と黒色土器杯A IIが、底面におかれるように出土している。

SK115 (図版43 第179図)

SB51の北壁にのるかたちで焼土が検出され、当初はSB51のカマドに関連する遺構と思われた。しかし、調査をすすめる中でSB51の埋土と北壁を切っており、焼土も浮いているため、SB51と別の遺構と考えた。長軸241cm、短軸最大138cm、深さ27cmを測る、東西に長い不整形の土坑で、底面に凹凸がある。壁は西側と北側がゆるやかに立ち上がり、東側と南側は垂直に立ち上がる。埋土は上面に焼土が厚さ10cmほどで広がり、その下にⅢ層をベースとした砂礫を含む暗褐色土がはいる。遺物は土師器が少量出土している。

SK118 (図版21 第180図)

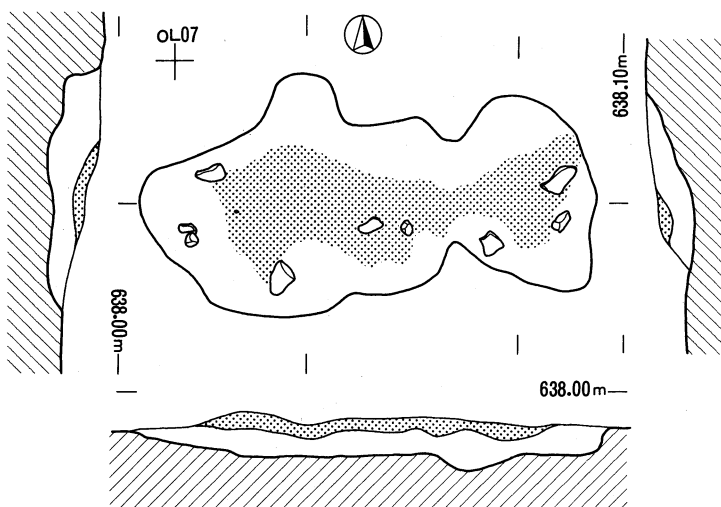
長軸174cm、短軸137cm、深さ26cmを測る長方形にちかい土坑である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂質土を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースとした黒褐色の砂質土である。底面ちかくには焼土と灰のブロックがみられ、人頭大の石が床より浮いて2個出土した。遺物は土師器杯A II・椀、黒色土器A杯A・椀・鉢、灰釉陶器椀・皿が出土しているが、いずれも破片である。

性格としては、壁が焼けておらず火を焚いた場所とは考えられず、焼土・灰・土器などを捨てた投棄坑と考えることができる。

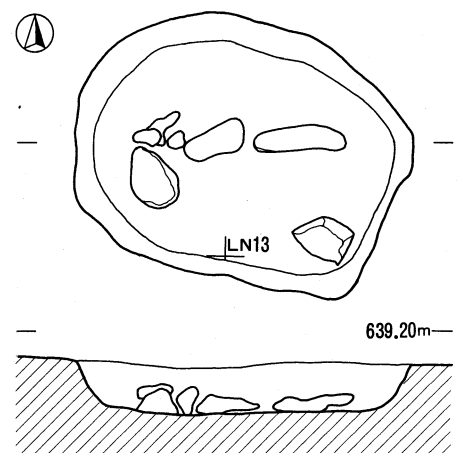
SK122 (図版38 第181図)

当初、SB169に切られる3つの土坑として掘りはじめた。しかし、プランがともに不明瞭であること、底面が連続すること、遺物の分布も連続することから、一つの土坑とした。

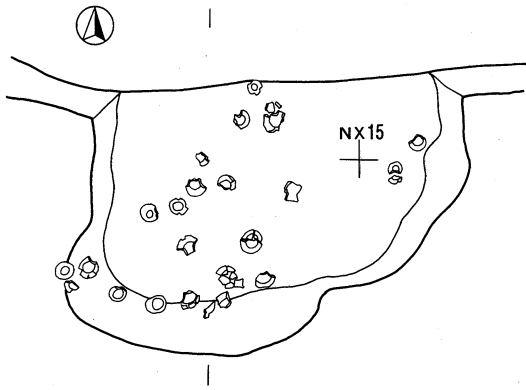
形態は不整形で、底面の凹凸がはげしく、壁は底部ちかくで弧を描き急に立ち上がる。Ⅲ層の砂層を掘りこみ、埋土は複雑である。上面にはⅢ層をベースとした黒褐色土(1・2・6)と褐色土(3)がのり、下部



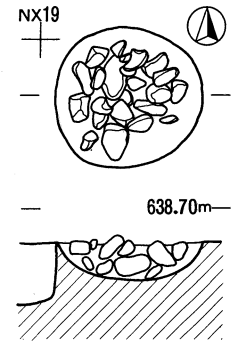
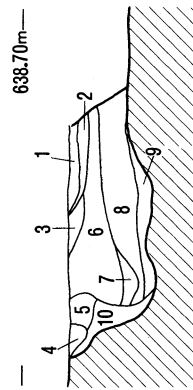
第179図 SK115 (1:40)



第180図 SK118 (1:40)



第181図 SK122 (1:40)



第182図 SK137 (1:40)

と壁際にはⅢ層の砂質土にちかい砂質の褐色土がはいり、Ⅲ層と見分けがつきにくい。いわゆるローママウンド状である。遺物は土師器杯A・椀・盤B、灰釉陶器皿Cが、褐色土の中におかれるように出土した。

SK137 (図版39 第182図)

長軸78cm、短軸72cm、深さ20cmを測る、ほぼ円形の土坑である。底面はゆるやかに弧を描くように立ち上がり、下端ははっきりしない。Ⅲ層を掘りこみ、埋土はⅢ層の砂礫土をベースにした暗褐色土で、拳大の石が多量に投げこまれたようにはいり、木炭片や焼土粒を多く含む。遺物は土師器の小片が出土したのみである。

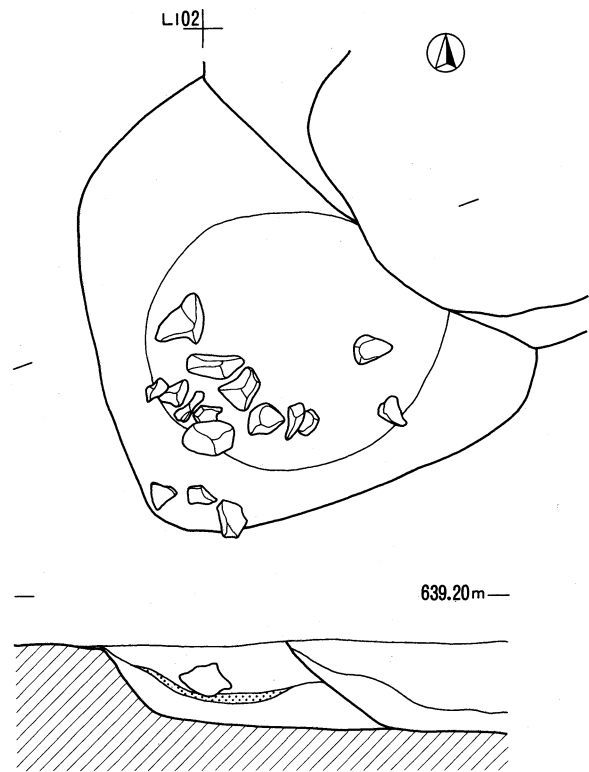
SK149 (図版20 第184図)

長軸93cm、短軸90cm、深さ21cmを測る方形にちかい土坑である。底面は南西側が深く凹み、ゆるやかに立ち上がり、床面のように堅くたたきしめられている。Ⅲ層を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースとした黒褐色の砂質土である。遺物としては鉄滓が4点、埋土中より出土している。

性格としては、SK42、73と同様に鍛冶に関係した遺構の可能性はある。

SK204 (図版16 第183図)

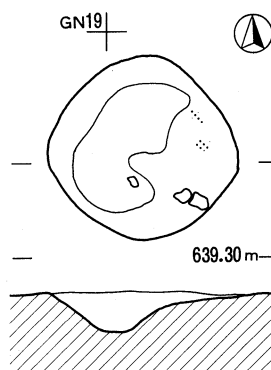
SK1190(近世)に切られ、SB221を切っている。一辺2mほどの方形の土坑であったと考えられる。底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂質土を掘りこみ、埋土は二区分できる。上層はⅢ層をベースにした多量の木炭片を含む黒色土で、拳大から人頭大の石と黒色土器A杯A・椀、土師器杯A、灰釉陶器皿Bなどの遺物が投げこまれたような状況で出土している。下層はⅢ層をベースにした暗褐色土で木炭片をほとんど含まず、サラサラしており、遺物の出土もない。この二つの層の間に2~5cmの厚い焼土が帯状にはいつている。壁は焼けておらず投棄坑と考えられる。



第183図 SK204 (1:40)

SK211 (図版16 第185図)

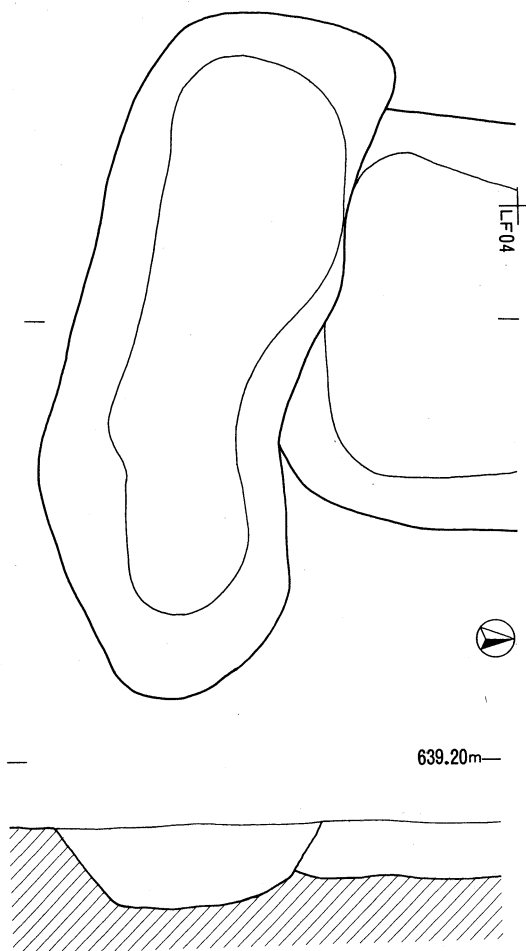
SK202に切られ、SB217を切っている。東面に長く長軸362cm、短軸118cm、深さ20cmを測る、長楕円形の土坑である。底面は平坦ではなく弧を描くようであり、斜めに立ち上がる。Ⅲ層の砂質土を掘りこみ、埋土は木炭片や焼土粒を多量に含んでいる。遺物は黒色土器A杯A・碗、灰釉陶器壺などが多数はいっている。いずれも破片で、炭が付着しているが火は受けていない。壁や底面は火を受けておらず、火をたいた遺構といいより、投棄坑の可能性が強い。



第184図 SK149 (1:40)

SK218 (図版16 PL46 第186図)

SB211を切っている、長径125cm、短径92cm、深さ32cmほどの楕円形の土坑である。底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂質土を掘りこみ、埋土は暗褐色のⅢ層をベースとした砂質土である。遺物は土師器杯A IIと碗、黒色土器A碗が底面におかれるような状態で出土した。とくに南側は正位で重なった状態で出土している。墓壇の可能性も考えられるが、骨片などの出土はなかった。



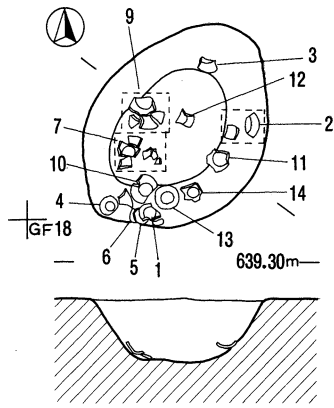
第185図 SK211 (1:40)

SK221 (図版47 第187図)

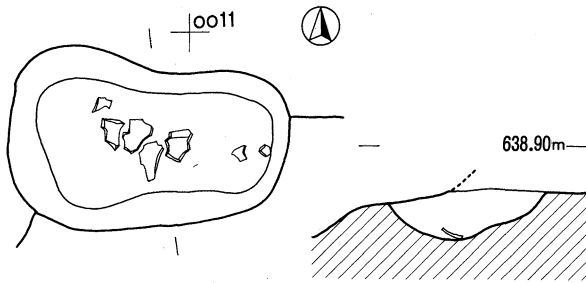
長軸329cm、短軸165cm、深さ29cmを測る、長楕円形の土坑である。底面は凹凸があり、ゆるやかに立ち上がる。Ⅲ層の砂礫土を掘りこみ、埋土は二区分できる。上層は焼土粒や木炭片が多数混入する暗赤褐色土で、投げこまれた状態で火熱の影響を受けた拳大から人頭大の石が多数はいる。これらの石は南半分では下層の上面におかれているようである。下層はⅢ層をベースにした暗褐色土で、焼土や木炭片は含まれていない。遺物は須恵器杯B・蓋・甕の破片が、石と同様に投げこまれたような状況で出土した。

SK259 (図版43 第188図)

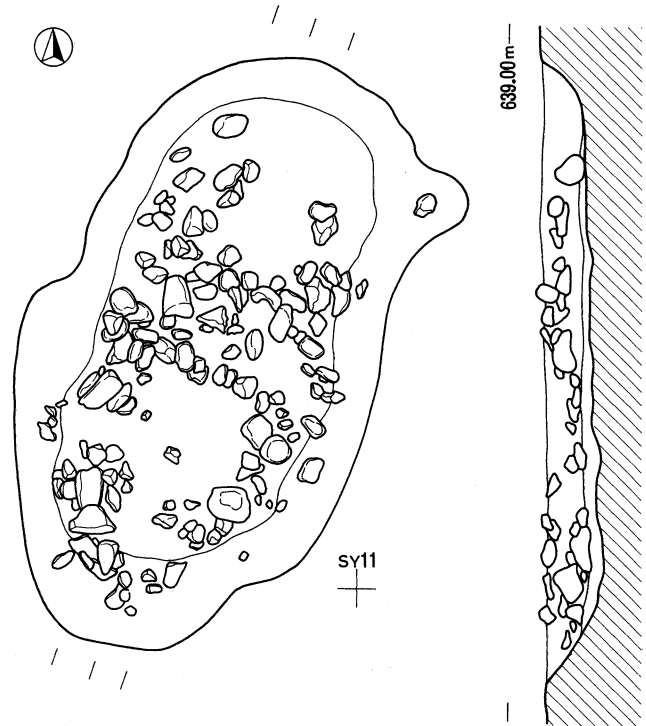
SD06によって上面の一部を削平されている。長軸149cm、短軸62cm、深さ30cmを測る長方形の土坑である。底面は平坦面がなくゆるやかな弧を描いており、壁もなだらかに立ち上がる。Ⅲ層の砂礫土を掘りこみ、埋土はⅢ層をベースとした暗褐色土である。遺物は、灰釉陶器の短頸壺の破片ほぼ一全体分が底面に散乱していた。性格としては、短頸壺を蔵骨器として考えたいが、その出土状況が埋没されたことを示していないことや、骨片の出土がないことから、墓の可能性は薄いと思われる。



第186図 SK218 (1:40)



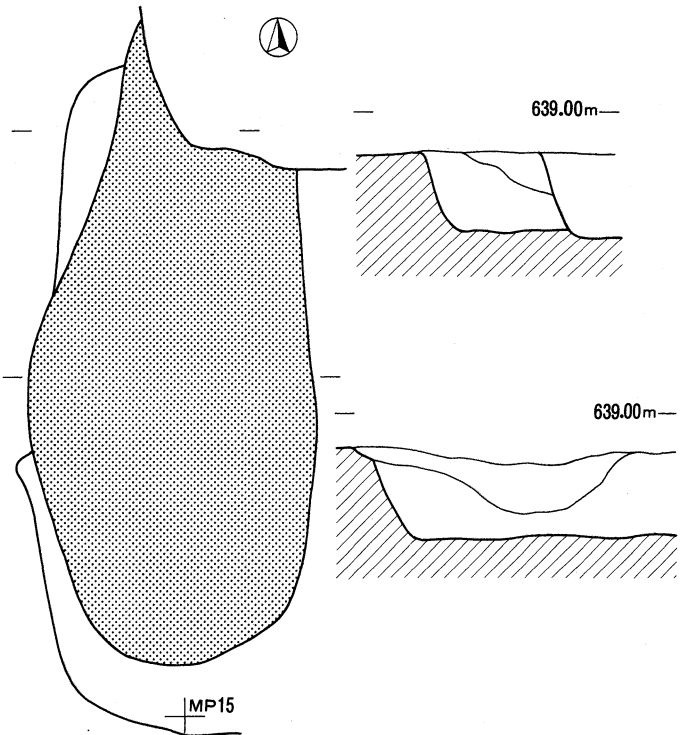
第188図 SK259 (1:40)



第187図 SK221 (1:40)

SK325 (図版29 第189図)

SB264によって切られ、SB265の上層にかぶるようなかたちで焼土が検出された。当初は、SB264の埋没中にはいったものと考えられた。しかし、プランを精査する中で、SB265の西壁を切っていることがわかり、焼土の範囲を別な遺構とした。焼土の分布範囲は南北に長く、残存部分は南北332cm、東西148cmを測る。掘り込みは28cmほどで、埋土は若干の木炭片やIII層の黄褐色砂質土の小さなブロックを含む焼土である。



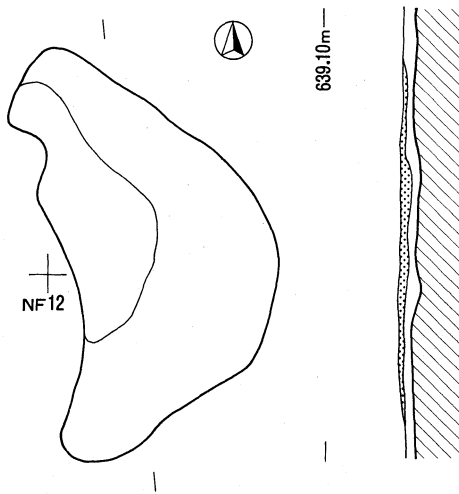
第189図 SK325 (1:40)

SF02 (図版43 第190図)

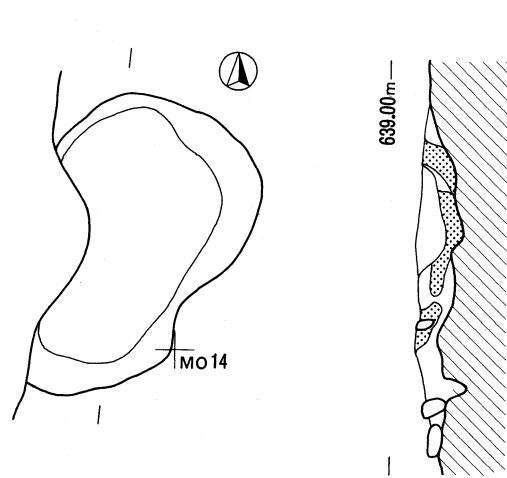
焼土の広がる範囲を遺構と認める。厚く焼土のみが詰まる部分と、暗褐色の小礫を含む砂礫土の中に、焼土粒が多くはいる部分に分けることができる。焼土は厚いところで6cmほどである。

SF03 (図版27 第191図)

SB149に切られ、やや凹んだところに焼土塊がブロック状にはいる遺構である。ブロックの間には、黄褐色砂質土がはいる。凹みは南北164cm、東西112cmを測る。



第190図 SF02 (1:40)



第191図 SF03 (1:40)

SH01 (図版45 第192図)

SB60を切って存在する、焼土と石の広がり部分を遺構と認める。焼土は厚さ10cm、範囲は南北91cm、東西142cmである。わずかに掘りこまれており、焼土の中に木炭がまじる。石は人頭大から拳大の大きさで焼土を中心に分布する。

SH02 (図版45 第193図)

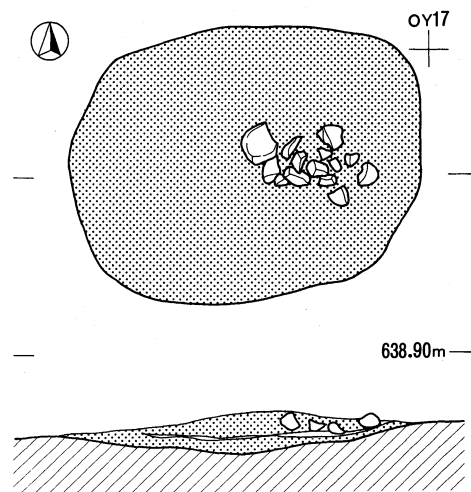
やや凹みをもち焼土のつまった遺構である。範囲は東西187cm、南北146cmほどで、焼土は厚いところで20cmほどである。焼土は上下二層に分かれ、間にIII層の黄褐色の砂質土が帯状にはいり、上層には拳大の礫がはいる。



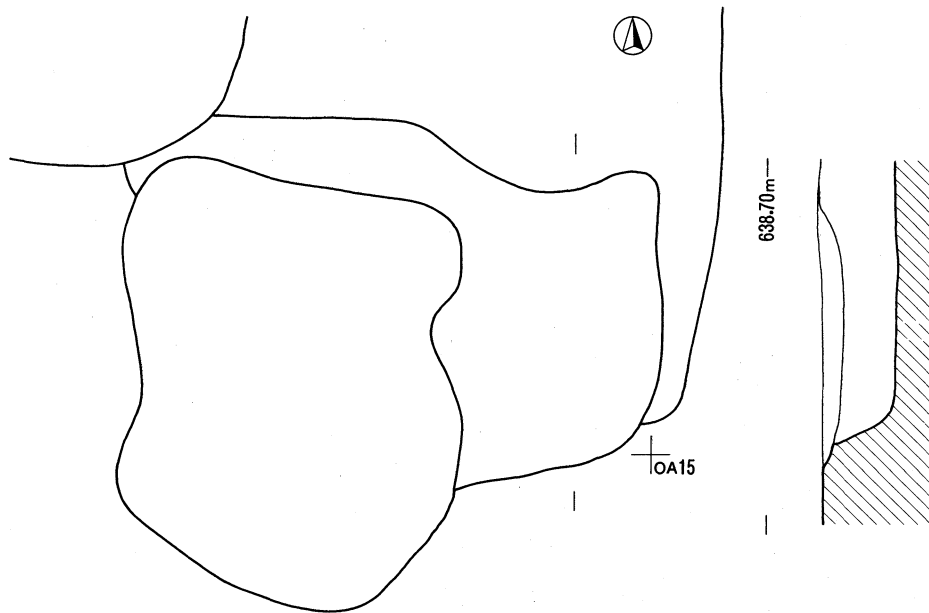
第192図 SH01 (1:40)

SX20 (図版38 第194図)

SB80の上面で、土器が多量に出土した。当初 SB80の埋土と考えたが、III層の砂質土を築き固めた面が認められ、別の遺構とした。遺物は砂質土の中より出土。



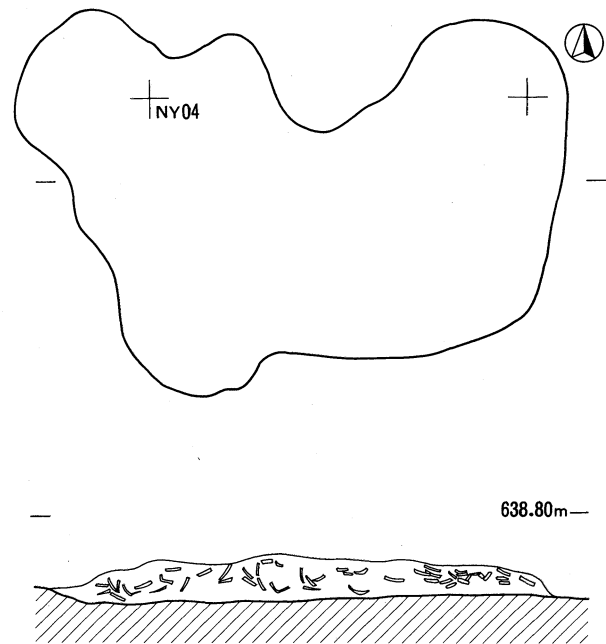
第193図 SH02 (1:40)



第194図 SX20 (1:40)

SX21 (図版37 PL46 第195図)

SB249の東側のII層中に、SK154にのるかたちで土器片が多数集中して出土した。掘りこみははっきりせず、土器の集中範囲を遺構と認定した。その範囲は東西260cm、南北186cmほどで、形態ははっきりしない。土器の間にはいる土はII層と区別がつかず、厚さは30cmほどである。しかし上面は調査中に削平しており、本来はもう少し厚いと思われる。遺物は多量の土師器杯、盤B、碗などがありその総量は重量で27,205kgとなる。いずれも置かれた状態ではなく、投棄されたような状態で出土した。それらの土師器の破片の中より、灰釉陶器皿Bの朱墨のパレット、魚子紋をもつ銅製の鞍しおでが出土している。この遺構の性格としては、当時の地表面が高かったことを考えれば、掘りこみがあった可能性が強く、土器捨て場として利用されたと考えられる。



第195図 SX21 (1:40)



第196図 SK断面模式図

第3表 SK一覧表 (*については本文中に記述がある)

SK 番号	図版	形態 (平面)	形態 (断面)	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	遺 物		備 考
					図版	内 容	
01	48	長楕円形	A	215×74×14	156	第5章第2節2を参照	SB01にきられる
02	41	不整円形	A	224×198×23	156	土師器杯A II(1 SB52段階)	埋土中に拳大の礫
03	44	不整円形	A	196×190×18	—	—————	—————
05	44	不整円形	A	218×190×15	—	—————	—————
* 06	36	—	—	—	156	土師器杯A III(1~3)、杯A II(4)	—————
07	41	長楕円形	B	137×72×24	—	—————	壁が不安定
08	41	長楕円形	A	190×81×10	—	—————	—————
11	41	長楕円形	A	138×72×5	—	—————	内部にビット(55cm×48cm)
12	41	長方形	A	189×95×22	156	灰釉陶器碗(1)	—————
14	44	?	?	—×98×25	—	—————	—————
* 15	41	—	—	—	—	—————	—————
20	34	不整形	A	198×194×21	156	土師器杯A II(1)、灰釉陶器碗(2、3)	SB46をきる
* 21	35	不整円形	A	150×147×28	—	—————	埋土中に拳大の礫 PL46
22	35	不整形	C	102×94×42	—	—————	柱穴の可能性あり
23	35	不整長方形	C	245×94×55	—	—————	—————
24	35	長方形	A	184×110×14	—	須恵器	—————
* 25	42	—	—	—	156 181	灰釉陶器碗(1) 鎌	—————
* 26	34	不整楕円形	A	197×141×38	156	第5章第2節2を参照	—————
27	34	不整形	—	237×184×28	156	土師器杯A III(1 SB94段階)、灰釉陶器碗(2)	中央にビット
28	34	—	—	—	—	土師器杯A、甕、灰釉陶器瓶	—————
29	34	楕円形	B	107×72×20	—	須恵器甕	柱穴の可能性あり
30	34	不整形	—	—×141×26	—	土師器羽釜	SD02にきられる
31	34	不整形	B	143×71×32	—	—————	中央にビット
32	34	円形	B	71×60×22	—	土師器小型甕B	柱穴の可能性あり
33	34	楕円形	B	139×91×46	—	—————	—————
* 34	34	楕円形	C	145×125×48	156	灰釉陶器広口瓶(1)	—————
35	34	不整円形	A	108×103×24	—	須恵器杯A	—————
36	34	円形	B	76×70×21	—	—————	柱穴の可能性あり
38	34	円形	A	72×68×38	—	—————	柱穴の可能性あり
39	34	—	A	262×36×15	—	—————	溝の痕跡か
40	34	—	A	294×49×13	—	—————	溝の痕跡か
41	35	長方形	A	305×146×54	—	—————	SB177をきる
42	37	—	—	—	156 181	土師器杯A III(1 SB32段階)、盤B II(2)、 灰釉陶器碗(3)、羽口、釘	————— PL46
* 43	43	方形	A	153×153×10	156	第5章第2節2を参照	—————

	44	不整円形	A	120×122×20	— 須恵器、土師器杯A	—————
	45	円形	A	88×85×42	— —————	—————
	46	方形	B	98×70×41	— —————	SB84をきる
	47	不整楕円形	B	461×304×26	156 土師器杯AⅢ(1 SB84段階)	—————
	48	不整円形	B	93×90×43	— 土師器杯AⅡ	柱穴の可能性あり
	49	楕円形	B	93×67×30	157 土師器杯	柱穴の可能性あり
	50	不整形	A	138×105×21	— —————	—————
	51	長楕円形	A	321×200×18	157 土師器杯AⅢ(1~3 SB32段階)、杯AⅡ(4)、碗(5) 181 盤BⅠ(6)、鉄鏝	SB123をきる
	59	不整形	B	248×231×29	— 灰釉陶器碗、須恵器、土師器	—————
	60	不整円形	A	92×86×17	— 須恵器甕、土師器杯A	—————
	61	不整円形	B	82×68×14	— —————	—————
	62	長方形	A	112×95×31	— —————	—————
※	64	—	A	—×—×35	157 土師器杯AⅢ(1~5 SB84段階)、灰釉陶器碗(6、7)	SB73にきられる
	66	不整円形	A	225×192×10	157 土師器杯A、黒色土器A鉢	—————
	67	不整楕円形	B	185×144×31	157 黒色土器A 碗(1)	底面に焼土
	68	不整形	B	186×183×17	157 土師器鉢(1)、灰釉陶器皿C(2、3)	—————
	70	長方形	B	205×143×8	— 土師器杯A、黒色土器A碗	多量の炭、焼土を含む
	71	長方形	A	279×190×29	— 須恵器杯A、甕、土師器、灰釉陶器瓶	SB102をきる
※	73	円形	B	101×95×38	157 土師器碗(1)、須恵器甕、羽口、鉄滓 190	————— PL46
	75	不整長方形	B	218×135×23	— —————	—————
	77	円形	A	—×37×24	— —————	SB124をきる柱穴?
	82	円形	B	77×74×29	— —————	SB107をきる
	83	円形	A	82×76×24	— —————	—————
※	84	—	—	—	157 土師器杯AⅡ(1、2)、碗(3)、黒色土器A杯AⅡ(4)	————— PL46
	85	不整円形	C	81×68×28	157 灰釉陶器碗(1)	SB100をきる
	87	不整円形	A	135×128×14	157 灰釉陶器碗(1)、須恵器杯AⅡ、甕	—————
	88	不整形	A	182×130×45	157 須恵器杯AⅡ(1)、土師器甕	—————
	90	楕円形?	A	—×—×34	157 灰釉陶器碗(1)、土師器杯AⅡ、碗	SD02にきられる
	91	円形	A	91×88×27	157 土師器杯AⅢ(1~3 SB32段階)、碗、盤BⅡ	—————
※	97	円形	A	242×208×18	157 灰釉陶器皿B	焼土層をもつ
	98	不整形	A	—×90×22	— 須恵器甕、土師器長胴甕、小型甕B	SK97にきられる
	99	楕円形	B	138×91×23	— —————	—————
	100	楕円形	A	226×195×24	157 黒色土器A碗(1)、灰釉陶器皿C(2)	—————
	101	長楕円形	A	235×132×20	157 土師器杯AⅡ(1~3 SB114段階)、灰釉陶器碗、羽口	—————

	102	13	?	A	—×—×22	157	第5章第2節2を参照	SD04にきられる
	103	13	不整形	A	—×—×17	158	第5章第2節2を参照	SD04にきられる
	104	42	?	C	—×—×30	158	甲斐型杯(1)	SK105にきられる
	105	42	楕円形	C	101×90×62	—	須恵器甕、土師器小型甕B	SB17をきる、柱穴?
※	107	13	長楕円形	B	104×46×8	158	第5章第2節2を参照	—————
	109	42	?	C	—×—×27	—	須恵器甕、壺	SB117をきる
	111	12	不整形	B	351×305×35	—	土師器杯A、長胴甕A、灰釉陶器皿B	—————
	112	45	長楕円形	A	273×97×29	158	土師器碗(1、2)、須恵器杯A、甕	—————
	113	45	?	B	—×102×17	—	土師器杯、碗、長胴甕、灰釉陶器	SB112にきられる
※	115	43	不整形	B	242×113×19	158	土師器杯A II(1 SB32段階)、須恵器杯A	焼土がはいる
	116	45	長楕円形	B	128×52×16	—	土師器碗、長胴甕	—————
	117	45	楕円形	B	98×80×22	158	土師器杯A(1)、皿A II	—————
※	118	21	長方形	A	116×90×25	158	第5章第2節2を参照、鉄滓	底面に焼土
	119	45	長楕円形	B	133×82×14	—	—————	—————
	120	45	不整形	B	197×128×10	158 181	土師器杯A III(1)、皿A II(2)、盤B II(3)、灰釉陶器碗(4)、鉄滓、紡錘車	SD23をきる
※	122	38	—	—	—	158	第5章第2節2を参照	—————
	126	16	長楕円形	B	238×118×31	159	第5章第2節2を参照、鉄滓	—————
	129	37	長楕円形	A	—×—×37	159 181	土師器杯A II(1、2)、碗(3)、須恵器杯B II(4)、灰釉陶器碗(5)、皿C(6)、鉄滓、紡錘車	SB32にきられる
	132	38	不整形	A	231×158×50	159	—————	SB80をきる
	136	39	?	B	—×—×35	—	—————	SB28にきられる
※	137	39	不整形	B	78×74×25	—	—————	埋土に焼土と礫
	138	46	楕円形	B	154×117×35	—	—————	—————
	139	24	楕円形?	A	—×—×37	181	紡錘車	—————
	140	24	円形	A	160×155×18	—	—————	—————
	141	24	不整形	A	184×161×33	159	黒色土器A碗(1)、須恵器甕	埋土に拳大の石
	142	24	楕円形	A	103×77×22	—	緑釉陶器碗、土師器杯A	—————
	143	24	楕円形	B	131×99×19	—	土師器杯A II、黒色土器A杯II、須恵器杯B	—————
	144	24	?	B	—×—×8	—	黒色土器A	SK140、143にきられる
	145	24	円形	A	74×67×16	—	—————	—————
	146	30	不整形	A	148×—×21	159	土師器杯A III(1 SB32段階)、灰釉陶器瓶	—————
	147	27	?	B	—×—×27	—	須恵器甕	SB98にきられる
	148	37	不整形	B	107×98×27	159	土師器杯A III(1・2 SB32段階)、杯A II、碗	—————
※	149	20	円形	B	105×100×23	181	鉄鏃、鉄滓	—————
	151	16	不整形	B	160×145×44	159	土師器杯A II(1・2 SB114段階)、黒色土器A碗	—————

152	37	?	?	—×—×30	—	土師器長胴甕C	SB32にきられる
154	37	円形	B	71×59×53	159	土師器杯A III(1 SB32段階) 灰釉陶器碗(2)	柱穴?
155	13	不整円形	B	144×98×41	159	第5章第2節2を参照	—————
158	20	不整円形	B	132×111×19	160 190	灰釉陶器皿B(1)、羽口	SB182をきる
161	35	不整楕円形	A	156×90×49	—	—————	SB177をきる
162	35	?	B	—×—×25	—	—————	SK166にきられる
163	35	不整円形	A	92×89×38	—	—————	柱穴?
165	38	長楕円形	A	—×158×38	—	—————	SD17にきられる
166	22	長楕円形	A	189×129×33	—	—————	—————
167	16	不整円形	B	135×132×41	160	土師器碗(1)、黒色土器杯A II(2)、須恵器壺	—————
168	32	不整形	B	184×153×18	181	釘、鉄滓	拳大の礫がはいる
169	25	不整楕円形	B	192×154×24	—	土師器長胴甕A	—————
173	20	不整円形	A	154×149×18	—	—————	SB182をきる
175	22	長楕円形	A	168×114×21	—	—————	拳大の礫はいる
178	42	?	A	—×—×20	160	土師器杯A II(1・2 SB32段階)、 杯A III(3)、碗C、 盤B I、灰釉陶器皿B	用地外へ
179	42	不整形	A	—×—×15	—	—————	SB198にきられる
180	42	不整形	A	—×—×60	—	—————	SB182、SD18にきられる
181	42	長楕円形	A	104×62×23	—	—————	—————
182	42	?	?	—×—×—	160	土師器杯A II(1 SB32段階)、 碗(2)、須恵器杯B 土師器長胴甕C	—————
183	22	楕円形	B	87×63×20	—	—————	—————
184	22	長楕円形	B	218×104×38	—	—————	—————
186	22	不整方形	A	175×141×34	181	鑿	—————
187	23	不整楕円形	B	97×68×16	160	土師器杯A III(1 SB84段階)、 碗	SB156をきる
188	42	?	A	—×—×10	160	土師器杯A III(1)、盤B II、 甕、須恵器杯B、甕	用地外へ
190	16	長楕円形	A	230×135×28	—	—————	—————
192	19	長楕円形	A	134×90×26	—	—————	—————
193	19	不整形	C	253×84×41	—	—————	—————
194	15	方形	B	385×252×32	—	土師器杯A III、黒色土器A、 灰釉陶器碗	—————
195	15	不整楕円形	B	372×246×22	—	土師器碗、長胴甕、須恵器甕、 灰釉陶器碗	—————
196	15	不整楕円形	B	246×212×17	—	—————	—————
197	15	不整形	B	—×178×26	—	土師器杯A、黒色土器A碗	礫がはいる
198	46	方形	A	100×93×50	—	—————	SB97をきる
199	25	?	A	—×—×26	160	須恵器杯B(1)	用地外へ
202	16	長方形	A	—×—×17	160	—————	SB219をきる S B 191に きられる

	203	16	?	?	—×—×—	160 181	第5章第2節2を参照 鍍金具	SB191にきられる
※	204	16	円形?	B	—×—×41	160	第5章第2節2を参照	SK1190にきられるSB201 をきる
	205	16	円形	B	—×—×19	—	—————	SK1190にきられる、SB201 をきる
	209	12	不整形	B	376×147×38	160	土師器杯A II(1 SB94段 階)、椀(2) 黒色土器A椀(3)、灰釉陶器 椀(4)	—————
	210	16	長楕円形	A	212×109×25	—	—————	—————
※	211	16	長楕円形	B	338×126×32	160	第5章第2節2を参照	埋土に炭、焼土を含む
	213	42	楕円形	A	115×86×27	—	—————	中央にピット
	215	22	楕円形	A	175×139×18	—	土師器杯A II、須恵器甕、黒 色土器杯A	—————
	216	22	円形	A	125×118×17	161	土師器杯A II(1)、灰釉陶器 椀(2)	—————
	217	22	円形	A	94×91×21	—	須恵器杯A II、甕、灰釉陶器 椀	—————
※	218	16	楕円形	A	294×88×54	161	第5章第2節2を参照	PL46
	219	16	?	A	—×—×18	161	黒色土器A椀(1)	—————
	220	16	?	A	—×—×31	161	土師器杯A II(1 SB114段 階)	—————
※	221	47	長楕円形	B	314×171×24	161	土師器盤B II(1)	埋土に礫、底面に焼土
	222	47	長楕円形	B	204×82×28	161	土師器杯A III(1、2)	—————
	223	22	楕円形	A	123×81×12	—	—————	—————
	224	22	方形	B	227×225×15	—	—————	—————
	228	31	?	B	—×—×11	—	—————	用地外
	230	37	楕円形	A	100×77×18	161	灰釉陶器椀(1)、土師器盤B I	埋土に拳大の石
	233	22	不整形	A	114×95×18	—	—————	—————
	234	22	長楕円形	B	138×95×21	—	—————	—————
	236	46	不整形楕円形	B	150×113×30	—	—————	上面に炭
	238	43	不整形	B	220×215×32	161 181	土師器杯A II(1 SB32段 階)、須恵器甕、紡錘車	SB48をきる
	239	47	方形	A	102×100×32	—	—————	—————
	240	47	不整形楕円形	B	134×95×30	—	—————	—————
	241	46	円形	B	112×105×28	—	—————	—————
	242	37	方形?	A	—×—×20	161	土師器盤B II(1)、須恵器杯 B	—————
	243	25	不整形	A	102×93×48	—	—————	—————
	244	37	不整形	A	96×75×20	161	土師器杯A II(1)、灰釉陶器 椀(2)	柱穴?
	246	22	?	A	—×—×16	—	—————	SK234にきられる
	247	46	楕円形	B	135×101×21	—	—————	—————
	248	46	楕円形	A	86×60×18	—	—————	—————
	249	46	不整形楕円形	B	82×70×31	—	—————	—————
	250	46	不整形	B	65×60×30	161	黒色土器杯A II(1)	—————

	251	20	不整楕円形	B	90×45×15	161	土師器杯A II(1・2 SB114 段階)	凹み状
	257	42	長方形	B	104×86×32	161	土師器杯A II(1)	—————
	258	43	円形	B	151×150×16	—	須恵器杯B、甕、土師器長胴甕	—————
※	259	43	長方形	B	150×78×15	161	—————	SD06にきられる
	260	37	円形	A	137×131×10	—	須恵器甕、土師器長胴甕	—————
	261	37	楕円形	A	92×75×10	—	須恵器甕	—————
	262	37	不整形	A	75×56×28	—	—————	—————
	277	16	不整楕円形	B	104×73×14	181	土師器杯A、釘	—————
	281	37	?	B	—×—×37	—	土師器碗、長胴甕、灰釉陶器 碗	SB32にきられる
	282	37	?	B	—×—×32	—	土師器杯A II、碗	SB32にきられる
	286	37	不整楕円形	B	129×120×31	—	—————	SK286にきられる
	293	42	円形	A	64×62×22	—	—————	—————
	296	46	楕円形	A	80×61×25	—	—————	—————
	297	46	不整楕円形	A	96×56×22	—	—————	—————
	299	45	楕円形	A	74×48×11	—	—————	—————
	300	37	不整楕円形	A	186×142×34	—	須恵器甕、黒色土器A	—————
	304	45	不整形	B	189×140×40	—	—————	—————
	305	46	円形	B	137×132×56	—	—————	—————
	306	35	不整楕円形	A	125×89×20	161	須恵器杯A II(1)、土師器長 胴甕	—————
	307	46	円形	B	57×55×13	—	—————	—————
	310	41	円形	B	46×42×35	—	—————	—————
	316	43	楕円形	A	251×182×28	161	土師器杯A III(1 SB32段 階)、碗、灰釉陶器	—————
	317	43	?	A	—×—×36	—	—————	SB229とSK351にきられる
※	325	29	不整形	—	—————	—	—————	—————
	327	37	円形	A	65×58×26	—	—————	柱穴?
	328	23 37	?	A	—×—×41	—	—————	—————
	330	42	長楕円形	A	146×75×16	—	—————	—————
	331	42	?	A	—×—×39	—	—————	礫がはいる
	332	42	楕円形	A	128×92×38	—	—————	SB31にきられる
	335	29	——	—	66×61×31	—	—————	—————
	336	29	——	—	—————	161	須恵器杯A II(1)、灰釉陶器 碗	—————
	342	28	不整円形	B	75×63×42	—	—————	—————
	343	28	円形?	B	—×68×43	—	須恵器杯A II、土師器長胴甕	—————
	344	28	方形	B	65×61×31	—	黒色土器A碗	—————
	350	46	不整円形	B	98×95×36	—	—————	SB52にきられる
	351	43	楕円形	A	86×62×22	—	—————	—————
	352	43	不整楕円形	B	113×75×34	—	—————	礫がはいる

第2節 遺物

1 遺物の概観

第1節では古代の遺構についてその内容を記した。ここでは古代の遺物についてふれることにする。遺物は材質により大きく区分しているが、いくつかその原則を崩している。各節は次のように分けて記述している。

- (1)土器 硯については(4)で、また転用硯については、容器としては(1)で扱い、硯としては(4)で扱う。土製紡錘車についてはその用途上、(2)で扱う。また容器以外や用途不明品については(5)で扱う。
- (2)金属製品 金属でつくられたものはすべてここで扱う。なおI層およびII層の出土品の中には古代に時期を限定できないものも多く、近世までの金属器を一括して扱う。
- (3)鍛冶関係資料 鍛冶に関係する羽口、鉄滓などを中心に、砥石もここで扱う。
- (4)文字関係資料 いろいろな方法で記された文字、およびそれを記すための筆や硯などの道具も扱う。
- (5)土製品 (1)~(4)までに含まれない土製品を取り上げる。
- (6)その他 (1)~(5)で扱わない材質の、漆器や木製品を取り上げる。

記述は原則にのっとりた方法と原則をくずした方法で行っているため、統一性に欠けている。この点については反省すべき点である。

遺物は各遺構毎に土器から文字関係資料、金属製品、鍛冶関係資料の順に通し番号をふってある。そのため土器と文字関係資料が同じ番号である場合、それは同一個体である。また金属製品と鍛冶関係資料を除き、その他の遺構外遺物については大地区毎に通し番号をふってある。例えば「M・9」はM地区のNo.9ということになる。金属製品と鍛冶関係資料については層毎に番号をふっている。I・12はI層出土金属器No.12になる。

2 遺物各説

(1) 土器

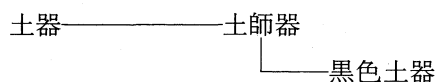
ア 概観

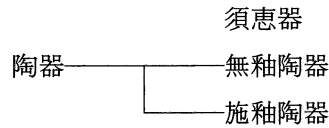
遺物の中で最も多く占めるのは土器であり、堅穴住居址を中心に発掘区全域より多量に出土した。ここでは堅穴住居址(SB)、掘立柱建物址(ST)、溝(SD)、墓(SM・SK)、土坑(SK)、不明(SX)の順に、原則として遺構単位に記述を行う。遺構外より出土した土器については、大地区単位にまとめて記述する。それらの中で良好な一括資料については重点的に取り上げる。

土器の説明に先立ち、記述の煩雑さを避けるために次の点について概括しておくことにする。

(ア) 時期区分については、出土した7世紀末から12世紀前半までを、主に杯Aを土器の種類の変遷と法量の変化より14段階に区分して、それぞれについて標準とした資料の出土遺構の名称で呼ぶことにした。各遺構の出土資料の中の杯Aには極力この大別の段階を記す。この大別については第7章第2節で詳しくふれる。

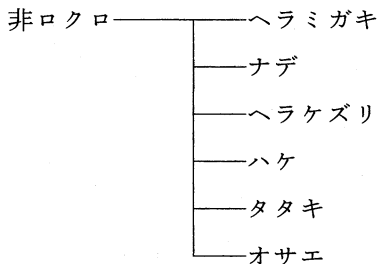
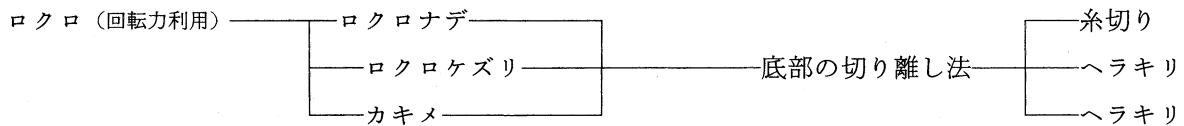
(イ) 土器は次のように分類する(註1)。





磁器

(ウ) 調整の分類は以下のようにする。



(エ) (イ)(ウ)の分類から、土器については調整と産地などの組合せより、次のように分類し、これを便宜的にここでは「土器の種類」とした。

- 土師器……………ロクロの回転力を利用し調整した土師器
- 黒色土器A……ロクロの回転力を利用した土師器の内面をヘラミガキし、黒色処理したもの
- 黒色土器B……黒色土器Aと、内外面両面をヘラミガキし黒色処理する点異なる
- 非ロクロ土師器……………ロクロの回転力を利用しないで調整したもの
- 須恵器……………広義の在産の須恵器
- 搬入須恵器……………在産以外で、美濃須衛窯と猿投窯の製品が識別できる。
- 灰釉陶器……………灰釉を意図的に掛けた陶器(註2)
- 山茶碗……………灰釉陶器と同じ焼成ながら、釉を意図的に掛けない陶器
- 緑釉陶器……………鉛釉を掛けた陶器
- 輸入陶磁器……………中国などから輸入された陶磁器(青磁、青白磁、白磁)

(オ) 土器で作られた製品は、広義の食器の他にも、硯、紡錘車、瓦塔、用途不明のものがある。この他副次的な資料としては、そこにかかれた文字資料(墨書土器など)がある。ここでは主に食器を扱い、硯と文字資料は文字関係資料の項で、紡錘車はその性格上金属製品の紡錘車の項で扱う。

食器はさらに用途から次のように分けることにする(註3)。

- 食膳具……食膳に供する器。仏前などの祭祀関係に使われるものも儀式用の食膳具とする。
- 煮炊具……食料を加熱加工する道具
- 貯蔵具……食料を保存貯蔵しておく道具

この他本来の用途とは別に二次的な目的で使われた場合もある。その場合本来の器について説明したのち、二次的使用にもふれる。

器種分類については第4表と第197・198図を参照されたい。

(カ) 本文中では、重点的に出土資料を取り上げる遺構について、用途別に出土土器構成表をのせてある。その項目は次のようで、各々にはいれてない。なお、表が載る場合、その中に図版番号も示したため一つ一つにはふれていない。

この中に示してある個体数の計測は、食膳具のみ行った。器種が明確に認定できたものの口縁部の1/16

以上残存していたものを数えた。そのため底部の大型破片などは含まれないことになる。重量は原則として5g単位に計測している。

		図版中の番号		個 体 数				
土器の種類	食膳具	須恵器	杯AⅡ	1~3	12	130	1610	96%
			杯B	4~12	23	800		
			杯蓋	16~19	15	680		
	器 種	土師器	杯AⅡ	21	1	70	70	4%
		貯蔵具						
用途別の分類	須恵器	甕	22・24・25			4965	5030	100%
		壺蓋	23			65		
	土師器	煮炊具	長胴甕A	26			6200	6700
	土師器	小型甕B				500	土器の種類別重量(g)	

(イ) 実測図は原則として1/4に縮尺し、大型品については縮尺を採用し、その場合のみ1/8のように記述する。実測図では材質を断面で表現し、広義の土師器（黒色土器を含む）は断面を白抜きとし、須恵器と施釉陶器と輸入陶磁器は断面を黒くつぶしてある。調整の内ヨコナデ（ロクロの回転を利用するものも含めて）、ヘラミガキは表現しない。ただ暗文風のヘラミガキについては、平面図を載せたものもある。手持ちのヘラケズリはその範囲をいれ、砂粒の動きを表現してある。ロクロケズリはその開始を——その単位を——で表現してある。施釉ラインも——で表現してあるが、明確でないものは表現してない。

(ク) 底部の切り離し方法は、杯Aの場合、特に断わらない限り糸切りである。

(ケ) 図版の中の遺物番号の下にアンダーラインのあるものは、PLに掲載されているものである。

(註1) ここで使用する「土器」の意味は、土器・陶器・磁器などを総称した焼物の意味である。その分類は「原色陶器大辞典」に従った（加藤唐九郎編1982）。

(註2) 灰釉陶器のほとんどは東濃産で施釉方法は漬け掛けであり、それらについては特に記さない。それ以外の産地や施釉方法の場合のみ記述する。

(註3) 食器および器種の分類は、従来の分類に従った（原1987,1988）。

引用文献

加藤唐九郎編 1982 『原色陶器大辞典』淡光社

原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食膳具」『信濃』39-4

1988 「第19節吉田向井遺跡 5 成果と課題 (1)古代末期の焼物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書2』(助長野県埋蔵文化財センター)

食膳具(第197図)

器種	特徴	法量による分類		焼物の種類				
				土師器	黒色土器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗
杯 A	高台をもたないもの 法量より三種にわけられる	A I	口径15~18cm、器高4~7cm	—	13			
		A II	口径11~15cm、器高3~5cm	2	12	21~23		
		A III	口径11cm以下、器高3cm以下	1				
杯 B	高台を有し、体部にはっきりした稜がつけられる	B I	口径13~17cm、器高6cm以上			24		
		B II	口径15cm以上、器高4cm前後			25		
		B III	口径12~14cm、器高4cm前後			26		
		B IV	口径10~12cm、器高4cm前後			27		
		B V	口径10cm以下、器高4cm前後			—		
杯蓋	杯Bに対応するつまみのついた蓋、杯Bの口径に対応する					28・29		
椀*	高台を有し、体部にはっきりした稜がつけられない 口径12~17cm 器高4~7cm			3・4	14・15		30・31	38
椀 C	高台を有する小さな椀、口径11cm以下、器高5cm以下			6	16・17		32	
皿 A	高台をつけないもの	A I	口径10cm前後、器高2cm前後	6・7				
		A II	口径16cm前後、器高3cm前後	8				
皿 B	高台がつく、口径10~17cm、器高2~3.5cm				18・19		33・34	
皿 C	内面に明瞭な段がつけられる、口径10~15cm、器高2~3cm						35・36	
皿 D	口径端部をおりまげる、いわゆる折縁皿						37	
盤 B	長く外傾する高台がつき、上部は皿状	B I	口径13~16cm、器高4~6cm	10				
		B II	口径10~12cm、器高3cm前後	9				
鉢	大型のもの、高台がつくものつかないもの形態はいくつかある			12	21	—	—	

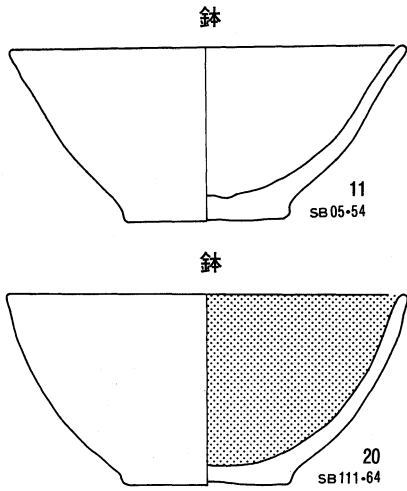
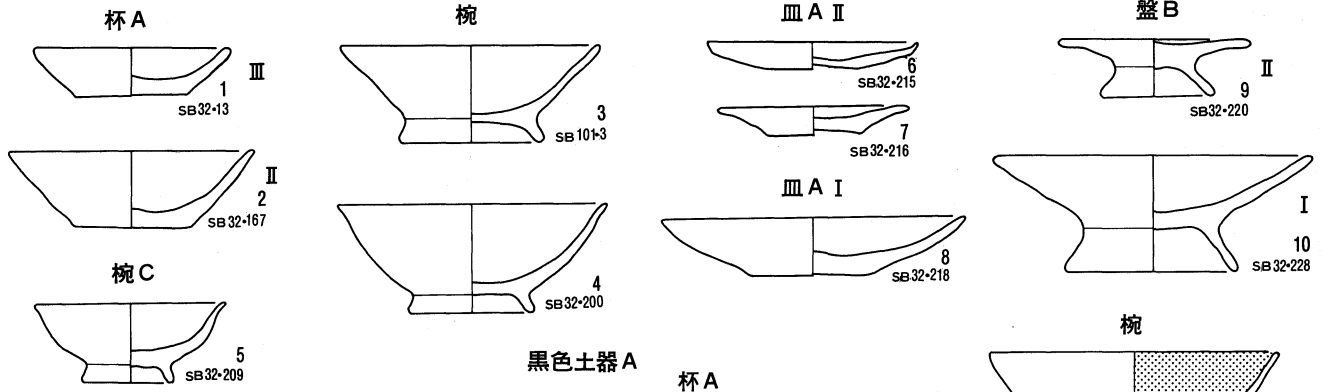
* 椀は以前「椀A」と「椀B」に分類したが、ここでは椀としてまとめ、第7章第2節で分類する。

煮炊具(第198図)

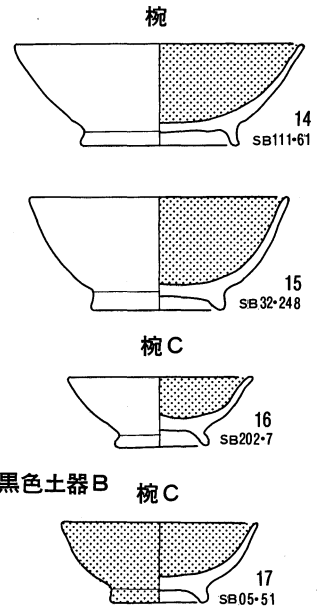
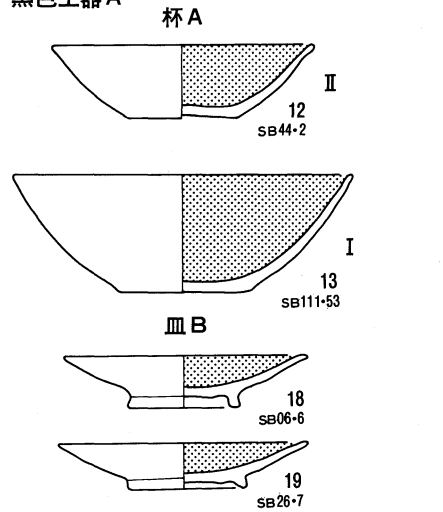
器種	特徴	特 徴		番 号
長胴甕	胴の長い甕 右記の他、不明をXとする	A	ハケ調整に全体を仕上げる	39
		B	体部外面をヘラケズリで仕上げる、いわゆる武蔵甕	40
		C	全体をロクロ調整で仕上げる、体部下半をヘラケズリするものもある	41
小型甕	長胴甕より小型の甕	A	全体をハケ調整で仕上げる	42
		B	全体をロクロ調整で仕上げる	43・44
		C	全体をナデで仕上げる	45
羽釜	ツバのつく釜 丸底・平底あり	A	鏝が全周する	46
		B	鏝がとぎれ把手状になる	47
甑	鏝のつけられるいわゆる「羽釜型の甑」この他ハケ調整したものもある			48
足釜	獣脚状の足がつく、上部は羽釜状			—

第4表 器種分類表

土師器

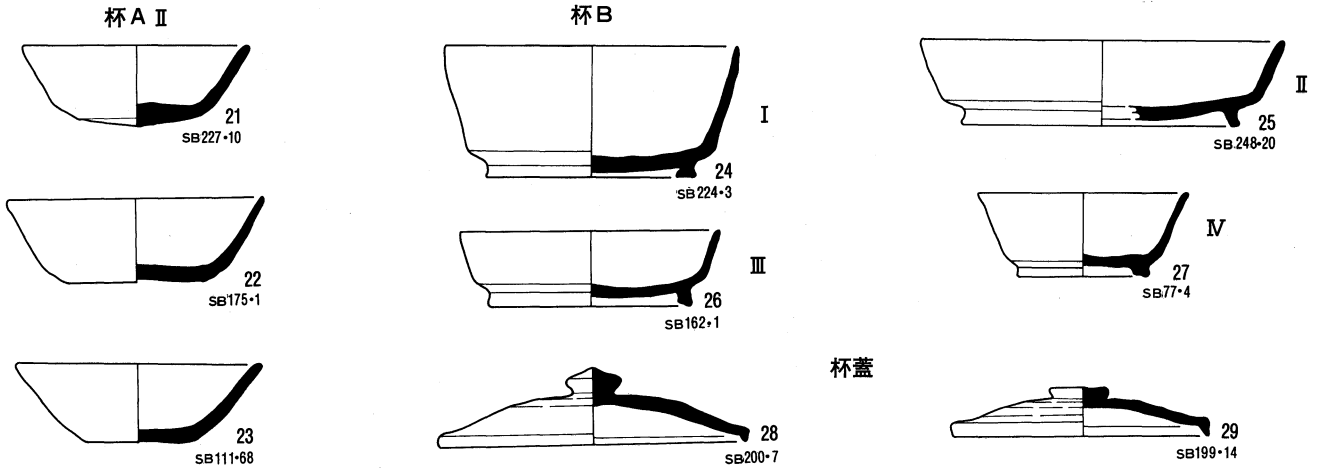


黑色土器 A

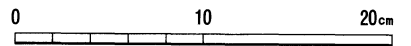
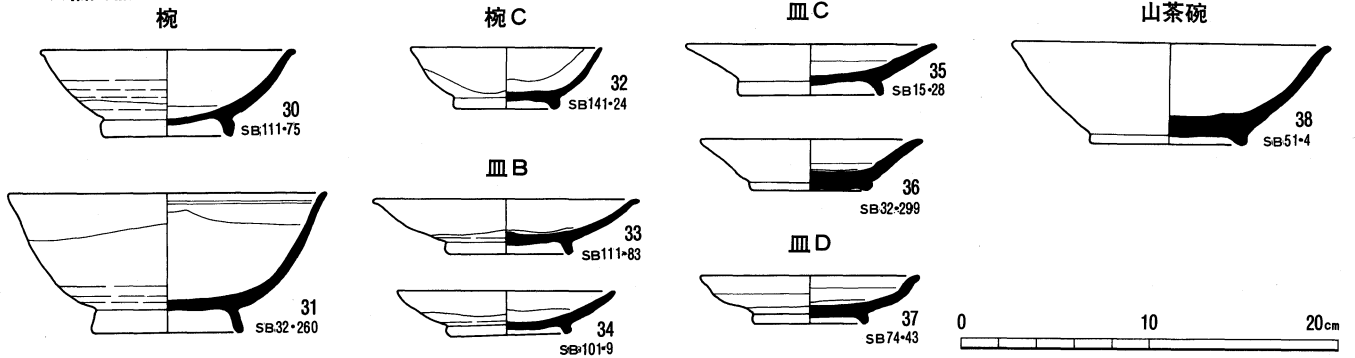


黑色土器 B

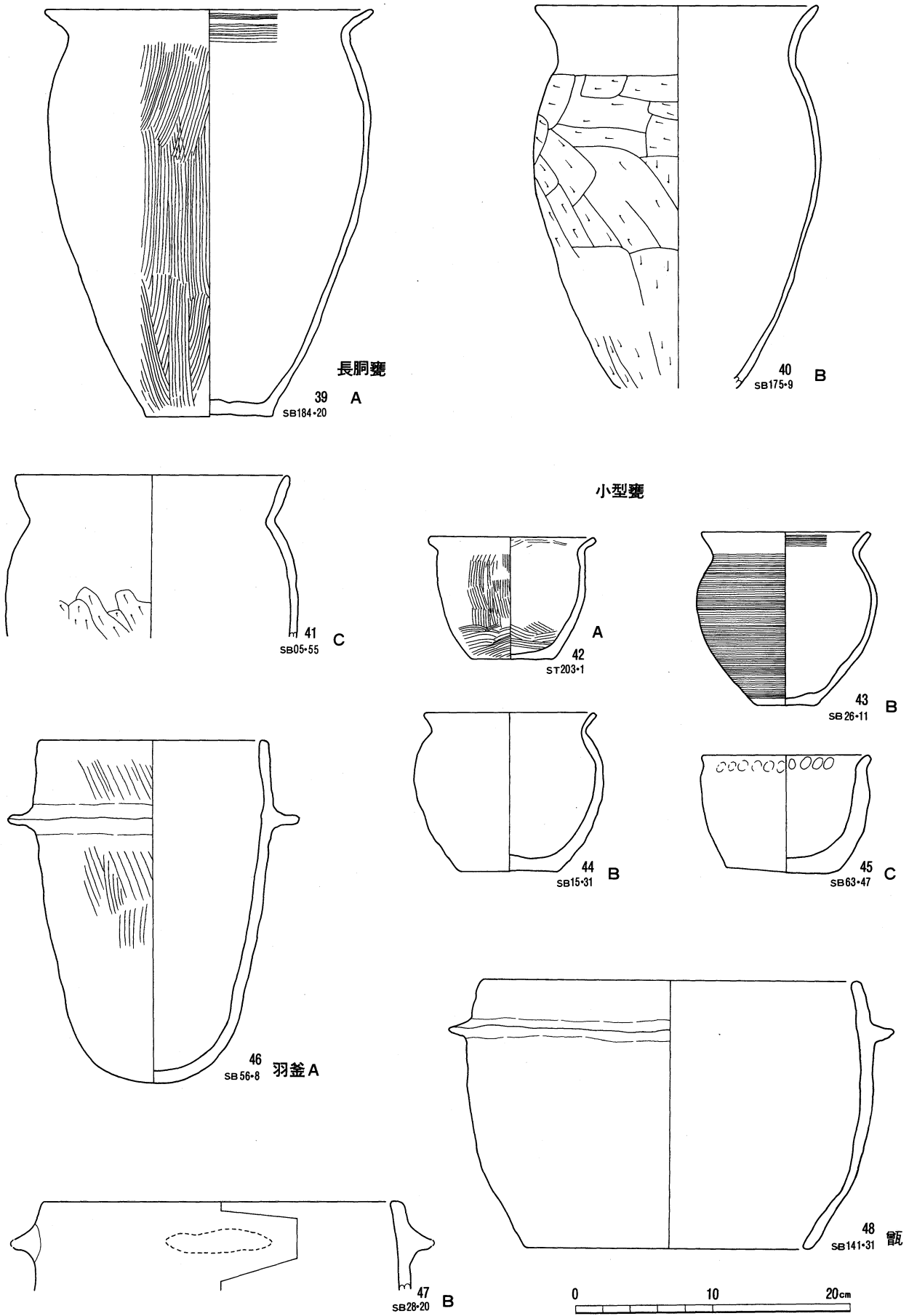
須恵器



灰釉陶器



第197図 食膳具器種分類図 (1:4)



第198図 煮炊具器種分類図 (1:4)

イ 竪穴住居址

SB01 (図版78 P L55 第5表)

杯A IIはSB01段階を設定した資料である。2・3はへら切り、1は糸切り後周囲を手持ちへラケズリしている。杯Bは法量より、さらにB II(8~12)、B IIより大型(4~7)、B III(13)、BV(14・15)に分けられる。この中でB IIより大型のものはほとんどが美濃須衛窯産である。

SB02 (図版78)

1~3は須恵器杯A II、4は杯Bである。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。

SB03 (図版78 PL55 第6表)

杯Aの構成よりSB184段階である。

SB04 (図版79 PL55 第7表 第199図)

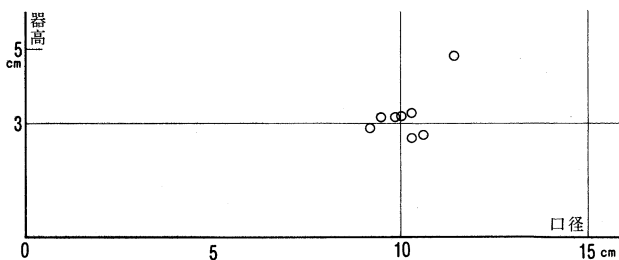
土師器杯A IIはその法量よりSB52段階である。21はいわゆる甲斐型の甕で、口縁端部を面取りし、へラケズリで仕上げ、その他をハケ調整で仕上げている。

SB05 (図版79・80 PL55・56 第8表 第200図)

土師器の食膳具が多いことを特徴としてあげることができる。土師器杯A IIIはSB32段階である。14は焼成前に底部中央に径5mmほどの穴があげられている。55の長胴甕Cは、体部下半を縦方向のへラケズリで仕上げている。

SB06 (図版80 PL56 第9表)

杯Aはその構成により、SB144段階である。6の皿は高台がつけられていない。8の須恵器は軟質で、



第199図 SB04土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II	1~3	12	130	1610	96%
	杯B	4~12	23	800		
	杯蓋	16~19	15	680		
土師器	杯A II	21	1	70	70	4%

貯蔵具

須恵器	甕	22・24・25		4965	5030	100%
	壺蓋	23		65		

煮炊具

土師器	長胴甕A	26		6200	6700	
	小型甕B			500		

第5表 SB01出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A	1~3	8	360	780	81%
	杯B	4	4	200		
	杯B蓋	5・6	4	210		
	高杯		1	10		
黒色土器A	杯A II	7	2	40	165	17%
	碗	8	1	105		
	不明			20		
土師器	杯A		1	15	15	2%

貯蔵具

須恵器	甕			210	305	100%
	壺			95		

煮炊具

土師器	長胴甕A			255	260	
	小型甕B			15		

第6表 SB03出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		3	90	205	3%
	杯B		2	60		
	杯B蓋		4	55		
黒色土器A	杯A		5	200	750	11%
	碗		4	310		
	不明			240		
土師器	杯A II	1~10	28	1520	4770	72%
	碗	11・12	8	780		
	碗C	13	5	270		
	盤B I		4	180		
	〃B II	14	2	400		
	不明			1620		
灰釉陶器	碗	15~18	6	690	880	13%
	皿B	19・20	3	190		
緑釉陶器	皿B		1	10	10	1%

貯蔵具

須恵器	甕			600	720	100%
	壺			120		

煮炊具

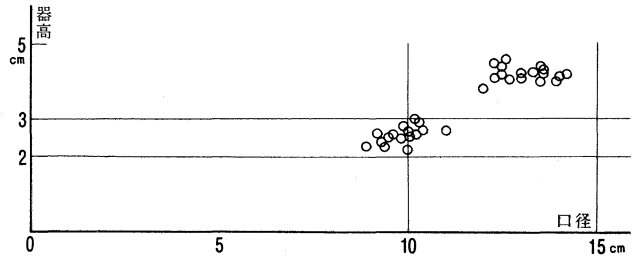
土師器	長胴甕A			850	1350	
	〃 X	21		110		
	羽釜A			370		
	小型甕B			20		

第7表 SB04出土土器構成表

中央に大きな黒斑がみられる。

SB07 (図版80 PL56)

1～4は黒色土器杯A II、5～9は碗である。10～12は灰白色軟質の土師器にちかい須恵器杯A IIで、黒斑をもつものもみられる。また土師器杯A IIも図示しないがみられる。杯Aはこのような構成より、SB111段階である。13はハケ塗りの灰釉陶器皿Bである。



第200図 SB05土師器杯A法量分布

SB09 (図版81)

1・2は須恵器杯A II、3は杯B II、4は鉢である。杯Aには糸切り(2)とヘラ切り(1)の二者があり、SB01段階である。5・6は小型甕Aである。

SB10 (図版81 PL56)

1～5は土師器杯A III、6は杯A II、7は盤B I、8は碗である。土師器杯A IIIはその法量により、SB32段階である。9は灰釉陶器皿Cである。10は土師器羽釜Aで、11は甑である。10は丸底になると思われ、11は内面があれている。

SB11 (図版81 PL56・57)

1～4は須恵器杯A II、5は杯蓋、6は鉢である。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。7は土師器小型甕B、8は口縁が短かく外反する長胴甕Aである。

SB12 (図版82)

遺物の量が少ない。1は土師器杯A III、その法量はSB74段階である。

SB13 (図版82 PL56 第10表 第201図)

土師器の食膳具の量が圧倒的である。杯A IIはその量より、SB52段階である。碗は体部を直線的に立ち上げるのを特徴とする。15の黒色土器A碗Cは内面のヘラミガキが暗文状となる。

SB14 (図版82・83 PL57 第11表)

土師器の食膳具の量が圧倒的である。土師器杯A

食膳具						
須恵器	杯A		4	70	150	1%
	杯B		1	30		
	杯B蓋		5	50		
黒色土器A	碗	50	5	350	550	4%
	不明			200		
黒色土器B	碗C	51	1	100	100	1%
土師器	杯A III	1~18	33	1880	10945	89%
	杯A II	10~36	22	2680		
	碗	37~41	14	1820		
	碗C	42・43	4	310		
	盤B I	44~49	13	2075		
	〃B II		4	40		
	鉢	54	1	710		
不明			1430			
灰釉陶器	碗	52	6	490	675	5%
	皿C	53	2	135		
	不明			50		

貯蔵具						
須恵器	甕			130	160	62%
	壺			30		
灰釉陶器	瓶			100	100	38%

煮炊具						
土師器	長胴甕A			860	3110	
	長胴甕C	55		520		
	小型甕B			40		
	羽釜A	56・57		1550		
	不明			140		

第8表 SB05出土土器構成表

食膳具						
須恵器	杯A	8	3	110	160	14%
	杯B		1	30		
	杯B蓋		2	20		
黒色土器A	杯A	1・2	9	350	940	85%
	碗	3	2	150		
	皿B	4・7	4	275		
	無台皿	6	1	135		
	不明			30		
土師器	杯A II		1	10	10	1%
貯蔵具						
須恵器	甕			225	225	100%
煮炊具						
土師器	長胴甕A			1060	1070	
	〃C			10		

第9表 SB06出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯B		1	10	10	0.2%
黒色土器A	杯AII		1	20	160	3.8%
	椀	15	2	110		
	不明			30		
土師器	杯AII	1~7	22	960	3660	87%
	椀	8~13	10	940		
	椀C	10・14	4	280		
	盤BII	11	1	100		
	不明			1380		
灰釉陶器	椀		3	100	390	9%
	皿B	17・18	4	220		
	皿C	16	2	70		

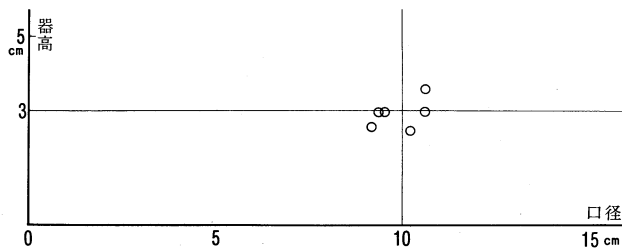
貯蔵具

須恵器	甕			30	30	100%
-----	---	--	--	----	----	------

煮炊具

土師器	羽釜A			580	595	
	小型甕B			15		

第10表 SB13出土土器構成表



第201図 SB13土師器杯A法量分布

IIIはその法量より、SB32段階である。

SB15 (図版83 PL57 第12表 第202図)

土師器の食膳具の量が圧倒的である。土師器杯A IIIはその法量より、SB84段階である。21は大型の椀である。29は杯A IIIをそのまま折り曲げたような耳皿である。

SB16 (図版84 PL56・57)

1~8は土師器杯A III、9は杯A II、10は椀Cである。杯A IIIはその法量より SB32段階である。11は灰釉陶器椀、12は皿Bである。

SB17 (図版84 PL57・58)

1~4は黒色土器A杯A II、5・6は須恵器杯A IIである。杯Aの構成より、SB144段階である。7~9は土師器長胴甕Aで、口縁を長く強く外反させるのを特徴とする。

食膳具

須恵器	杯B		1	2	17	0.2%	
	杯B蓋		2	15			
黒色土器A	椀		2	280	280	3.8%	
土師器	杯AII	14~24	18	1610	6590	90%	
	杯AIII	1~13	17	1235			
	椀	25・26	11	1060			
	椀C	27~30	6	210			
	盤B I	35~37	5	550			
	盤B II	32~34	6	525			
	鉢	38	1	540			
	不明			860			
灰釉陶器	椀		39	2	60	440	6%
	皿B	40・41	5	380			

貯蔵具

須恵器	甕			55	55	100%
-----	---	--	--	----	----	------

煮炊具

土師器	長胴甕A			35	550	
	小型甕B			165		
	羽釜A	42		350		

第11表 SB14出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯蓋B		1	15	15	0.3%
黒色土器A	杯A		2	150	320	5.7%
	鉢	30	1	130		
	不明			40		
	不明					
土師器	杯AII	14~19	19	1020	4800	85%
	杯AIII	1~13	24	1110		
	椀	20・21・23	5	540		
	〃C		2	100		
	盤B I	22	3	450		
	〃B II	24	1	80		
	耳皿	29	1	90		
	鉢		1	250		
	不明			1160		
	灰釉陶器	椀	25・26	4		
皿B			1	20		
皿C		27・28	2	190		
不明				60		

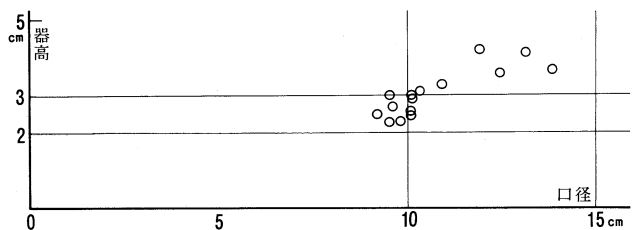
貯蔵具

須恵器	甕			25	65	45%
	壺			40		
灰釉陶器	瓶			80	80	55%

煮炊具

土師器	長胴甕A			700	3070	
	小型甕B	31		460		
	羽釜A	32・33		1910		

第12表 SB15出土土器構成表



第202図 SB15土師器杯A法量分布

SB18 (図版84 PL57・58)

1は土師器杯A II、2は盤B I、3は鉢である。
4は黒色土器A碗、5は土師器小型甕B、6は灰釉陶器小瓶である。

SB19 (図版84・85 PL58 第13表 第203図)

土師器の食膳具の量が多い。杯A IIはその法量により、SB52段階である。16の黒色土器A碗Cは内面のヘラミガキは暗文状である。

SB20 (図版85)

1は黒色土器A杯A I、2・3は杯A II、4は碗である。5は須恵器皿Bである。杯A IIはそのほとんどが黒色土器Aであり、SB144段階である。

SB21 (図版85 PL58 第14表)

杯A IIIはその法量により、SB74段階である。土師器碗および碗Cは体部を直線的に立ち上げる。19の羽釜Bは把手を欠損している。

SB22 (図版85 PL58・59)

1は須恵器杯B I、2は杯蓋である。3～13は手づくね土器である。杯Aは、図示しないがほとんど須恵器であり、SB258段階である。

SB23 (図版85)

遺物の出土量が少ない。1は灰釉陶器碗、2は土師器碗である。

SB24 (図版85 PL58・59)

1・2は土師器杯A III、3・4は杯A IIである。杯A IIIはその法量よりSB32段階である。

SB25 (図版86 PL59)

1・2は黒色土器A杯A II、3は土師器長胴甕Aである。杯Aはそのほとんどが黒色土器Aであり、SB144段階である。

SB26 (図版86 PL59)

1～4は黒色土器A杯A II、5・6は碗、7は皿

食膳具

須恵器	杯A II		2	10	30	0.9%
	杯B		1	10		
	杯蓋B		1	10		
黒色土器A	碗		2	110	245	7%
	碗C	16	2	55		
	不明			80		
土師器	杯A II	1~10	18	1505	2825	84%
	碗	11~14	12	815		
	碗C	15	2	120		
	不明			385		
灰釉陶器	碗	17	2	260	260	7.7%
緑釉陶器	碗		1	10	15	0.4%
	皿		1	5		

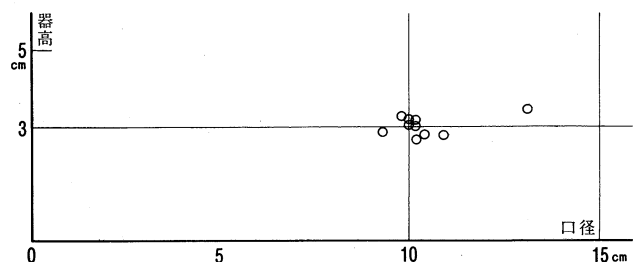
貯蔵具

須恵器	甕			45	45	90%
灰釉陶器	瓶			5	5	10%

煮炊具

土師器	長胴甕A			380	500	
	" C			120		

第13表 SB19出土土器構成表



第203図 SB19土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		1	30	40	1%
	杯B蓋		1	10		
黒色土器A	碗A		4	180	180	4%
黒色土器B	碗C	15	1	25	25	1%
土師器	杯A II	6	6	330	2975	73%
	杯A III	1~5	14	610		
	碗	7・8	4	240		
	碗C	9	2	80		
	皿A I	14	3	280		
	皿A II	10~13	8	350		
	盤B I		2	325		
			760			
灰釉陶器	碗	16~18	11	765	870	21%
	皿C		3	105		

貯蔵具

須恵器	甕			500	500	100%
-----	---	--	--	-----	-----	------

煮炊具

土師器	長胴甕A			180	1720	
	小型甕B			20		
	羽釜B	19		1250		
	甕	20		270		

第14表 SB21出土土器構成表

Bである。杯Aはそのほとんどが黒色土器Aであり、SB144段階である。9～11は土師器小型甕B、8は長胴甕Aである。12は須恵器短頸壺である。

SB27 (図版86)

1・2は土師器杯A III、3は杯A II、4は碗である。土師器杯A IIIはその法量より、SB31段階である。5は灰釉陶器碗である。6は羽釜B、7は口縁が内傾することから足釜の可能性はある。

SB28 (図版86・87 第15表 第204図)

土師器杯A IIIのうち、2～5はその法量によりSB31段階である。形態には口縁を内湾させるもの(2～4)と、外反させるもの(5)の二種がある。8は焼成前に底部中央に径5mmほどの穴があげられている。19は白磁II類碗である。

SB29 (図版87 PL59 第16表 第205図)

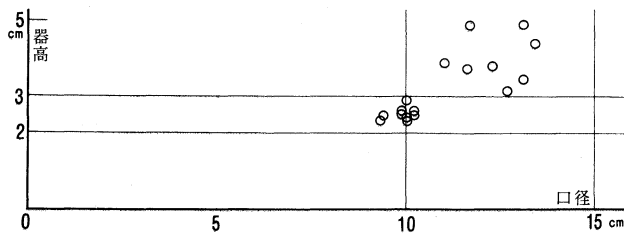
食膳具の中に占める土師器の量が多い。杯A IIIはその法量より、SB32段階である。

SB30 (図版87・88 PL59 第17表 第206図)

食膳具では土師器の出土が極端に多い。しかしその量に比べて、細片が多いため復元できた個体数は少ない。杯A IIIはその法量よりSB32段階である。器種の中では杯Aが圧倒的である。46は鉢に分類したが、口縁を内側に折り返し、体部をヘラケズリで仕上げる。53・54の緑釉陶器はC類に分類でき、53は口縁に三角形に刻んだ輪花がつけられる。

SB31 (図版88 PL59 第18表 第207図)

土師器杯A IIIはSB31段階を設定した基準資料である。15の碗Cは体部を直線的に立ち上げる。19・



第205図 SB29土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A		4	290	785	15%
	杯B		4	120		
	杯B蓋	13	7	375		
黒色土器A	杯A		8	370	800	15.5%
	碗		4	100		
	不明			330		
黒色土器B	碗C		1	5	5	0.1%
土師器	杯A II	9・10	9	900	2620	50.8%
	杯A III	1～8	22	1010		
	碗		2	40		
	碗C		4	120		
	盤B I	11	8	390		
	〃 B II	12	3	100		
	鉢		2	60		
灰釉陶器	碗	14・15	4	315	965	18.6%
	皿B	17・18	4	230		
	皿C	16	5	270		
	不明			150		
緑釉陶器	不明				2	0.04%

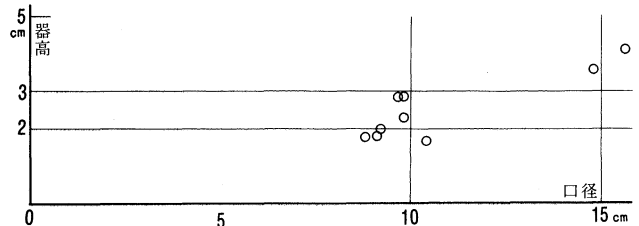
貯蔵具

須恵器	甕			2510	2660	98%
	壺			130		
	罌			20		
灰釉陶器	壺			55	55	2%

煮炊具

土師器	長胴甕A			3070	5490	
	〃 C			100		
	羽釜B	20・21		2320		
	甕	22				

第15表 SB28出土土器構成表



第204図 SB28土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯B蓋		1	5	5	0.1%
黒色土器A	碗	27	3	200	200	3.4%
土師器	杯A II	11～18	19	2120	5500	94%
	杯A III	1～10	28	810		
	碗	19～21	13	950		
	盤B I	22～24	4	205		
	盤B II	25	2	90		
	鉢	26	1	145		
灰釉陶器	碗		4	75	125	2.5%
	皿C	28	2	50		

貯蔵具

須恵器	甕			170	170	37%
灰釉陶器	瓶	29		295	295	63%

煮炊具

土師器	長胴甕A			135	625	
	羽釜			490		

第16表 SB29出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		4	70	155	0.4%
	杯B		3	60		
	杯蓋B		4	25		
黒色土器A	碗		3	260	385	1%
	碗C		1	20		
	杯A II		4	105		
黒色土器B	碗C		2	10	10	0.03%
土師器	杯A II	26~29	57	9510	36365	95%
	杯A III	1~25	242	11340		
	碗	30~31	22	1570		
	碗C	32~36	43	2010		
	皿A I	41~45	16	1510		
	皿A II	38~40	6	150		
	盤B I		12	980		
	盤B II	37	1	25		
	鉢	46	1	290		
不明			2980			
灰釉陶器	碗	47~48	10	520	1370	3.5%
	皿B		4	130		
	皿C	49~52	11	450		
				270		
緑釉陶器	碗C	54	2	30	45	0.1%
	稜皿	53	1	15		

貯蔵具

須恵器	甕			680	740	58%
	壺			60		
灰釉陶器	瓶			530	530	42%

煮炊具

土師器	小型甕B			410	40	
-----	------	--	--	-----	----	--

第17表 SB30出土土器構成表

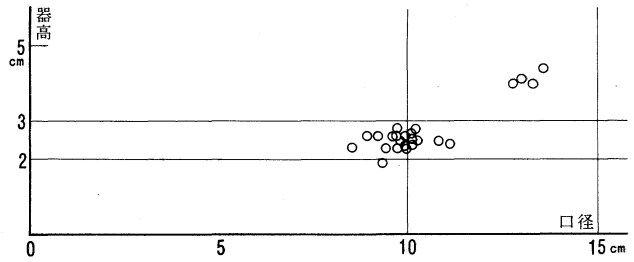
20の緑釉陶器はともにc類に分類でき、19は釉がとんでいる。21は青白磁皿、20は白磁V類碗である。24の羽釜は、鉢状の体部に欠落してはいるが把手がつけられている。

SB32 (図版88~93 PL60 第19表 第208図)

土師器杯A IIIはSB32段階を設定した基準資料である。膨大な食膳具が出土しており、その中でも土師器、杯Aが圧倒的である。杯A IIIは口縁を面取りするものとしらないものの二種がある。248の黒色土器A碗の内面のヘラミガキは暗文状である。また273の灰釉陶器碗は故意に底部を打ち欠き穴をあけており、315の鉢は端部が面取りされ片口がつく。緑釉陶器も数多く出土しているが、316・317・320・324・326・331はe類、318・319・321・322・323はc類に、327~330・332はd類に分類できる。

SB33 (図版93 PL60)

遺物の出土量が少ない。1は羽釜Bである。



第206図 SB30土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		4	180	485	8%
	杯B		6	260		
	杯B蓋		4	15		
	盤A	23	2	30		
黒色土器A	碗		3	45	200	3%
	杯A		4	115		
	鉢		1	40		
土師器	杯A II		9	480	3725	62%
	杯A III	1~10	37	1360		
	碗		1	10		
	碗C	15	11	510		
	皿A I	13	3	190		
	皿A II	11・12	5	35		
	盤B II	14	5	360		
	鉢		2	100		
				680		
灰釉陶器	碗	16~18	13	880	1460	25%
	皿B		4	120		
	皿C		3	30		
	皿D		1	10		
				420		
緑釉陶器	皿B	19・20	3	60	60	1%
輸入陶磁器	碗	22	4	60	60	1%
	皿	21				

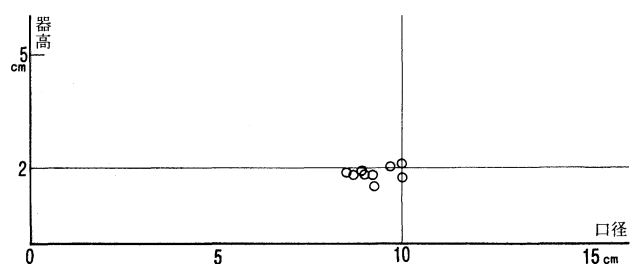
貯蔵具

須恵器	甕			2180	2710	73%
	壺			530		
灰釉陶器	瓶			980	980	27%

煮炊具

土師器	長胴甕A			660	1645	
	長胴甕B			40		
	小型甕B			15		
	羽釜	24		930		

第18表 SB31出土土器構成表



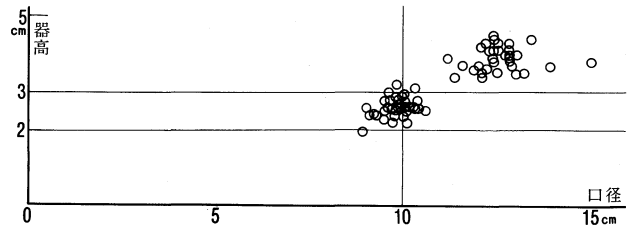
第207図 SB31土師器杯A法量分布

食膳具						
須恵器	杯A II		28	530	1005	0.5%
	杯B		9	170		
	杯B蓋		15	305		
黒色土器A	碗	248~253	19	1250	2200	1.2%
	碗C		4	45		
	杯A		7	95		
	不明			810		
黒色土器B	碗C	254~258	9	180	220	0.1%
	不明			40		
土師器	杯A II	161~197	621	30250	171485	91%
	杯A III	1~160	652	24965		
	碗	198~204	344	11105		
	碗C	205~214	117	3780		
	皿A I	215~216	8	660		
	皿A II	217~219	5	245		
	盤B I	227~241	106	13735		
	盤B II	220~226	30	2365		
	耳皿	247	1	70		
	鉢	242~246	19	3160		
	不明			81150		
灰釉陶器	碗	259~275	126	7740	13475	7%
	碗C	276~281	10	1150		
	皿B	282~289	25	1230		
	皿C	290~311	44	2075		
	皿D	312~314	3	35		
	耳皿		1	5		
	鉢	315	4	50		
	不明			1190		
緑釉陶器	碗	321~324	6	110	415	0.2%
	碗C	316~320	10	50		
	皿B	326~327 329~330	11	80		
	皿C	328~331	3	60		
	稜皿	325	2	25		
	合子	332	2	20		
	不明			70		

貯蔵具						
須恵器	甕			10015	10065	70%
	壺			50		
灰釉陶器	瓶	333~334		4400	4400	30%

煮炊具						
土師器	長胴甕A			1780	4330	
	小型甕B			15		
	羽釜			1650		
	足釜	335~341		885		

第19表 SB32出土土器構成表



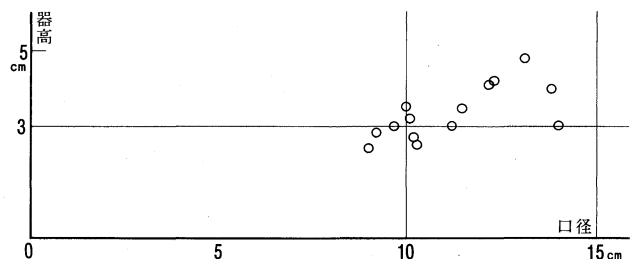
第208図 SB32土師器杯A法量分布

食膳具						
須恵器	杯A II		4	65	145	3%
	杯B		2	45		
	杯B蓋		3	35		
黒色土器A	碗		21	3	200	4.2%
土師器	杯A II	10~14	21	730	4060	84.5%
	杯A III	1~9	27	950		
	碗	15~19	10	1100		
	盤B I	20	6	800		
	不明			480		
灰釉陶器	碗	22・23	4	230	395	8.2%
	皿C	24・25	4	90		
	皿D	26	1	25		
	不明			50		
緑釉陶器	不明			5	5	0.1%

貯蔵具						
須恵器	甕			170	170	39%
灰釉陶器	瓶			270	270	61%

煮炊具						
土師器	長胴甕A			290	1490	
	羽釜	27・28		970		
	甗	29		230		

第20表 SB37出土土器構成表



第209図 SB37土師器杯A法量分布

SB35 (図版93 PL61)

1は須恵器杯A II、2は杯B、3は土師器小型甕Aである。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。

SB36 (図版93)

遺物の出土量が少ない。1~3は灰釉陶器碗、4は皿Cである。5は土師器小型甕Bである。

SB37 (図版93・94 PL61 第20表 第209図)

土師器杯A IIIはその法量より、SB32段階である。29の甗は底部端部が内側に折れ曲がり、内面は器面の

剥落が著しい。

SB38 (図版94 PL61)

1～5は土師器杯A IIIで、そのうち3・5は法量よりSB31段階である。6・7は灰釉陶器碗、8は鉢である。この他、白磁II類碗がある。

SB39 (図版94)

ほとんど遺物は出土していない。1は灰釉陶器碗である。

SB40 (図版94)

遺物の出土量が少ない。1は土師器杯A III、2は杯A IIである。杯A IIIはその法量によりSB31段階である。3は灰釉陶器皿Cである。

SB41 (図版94)

遺物の出土量が少ない。1は須恵器杯A II、2・3は杯蓋である。

SB42 (図版94 PL61)

1・2は土師器杯A III、3は碗である。杯A IIIはその法量より、SB31段階である。4・6は灰釉陶器碗、6は皿Cである。7は山茶碗である。8は白磁II類碗である。

SB43 (図版94・95 PL61 第21表 第210図)

杯A IIIはその法量によりSB32段階である。量的には土師器の食膳具、その内でも杯Aが圧倒的に多い。杯A IIIは口縁を面取りするもの(17・18)と、しないものの二種がある。

SB44 (図版95 PL61 第22表)

杯Aは黒色土器Aの量が多く、SB144段階である。黒色土器A杯Aはさらに法量より、A I (9・10)とA IIに分けられる。

SB45 (図版95・96 PL61・62)

1・2は黒色土器A杯A II、3・4は碗、5は鉢である。杯Aは黒色土器Aが圧倒的であり、SB144段階である。6・7は土師器長胴甕A、8は小型甕Bである。

食膳具

須恵器	杯A II		3	40	85	1.6%
	杯蓋B		1	45		
黒色土器A	碗		1	20	20	0.4%
土師器	杯A II	22~27	12	1190	4875	83%
	杯A III	1~21	45	1810		
	碗	28	6	470		
	碗C	29	4	205		
	盤B I	31	1	120		
	盤B II	30	1	120		
	不明			960		
灰釉陶器	碗	32	3	305	870	15%
	皿B	37	2	105		
	皿C	33~36	8	430		
	不明			30		

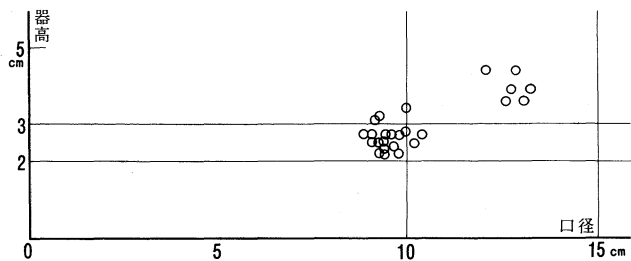
貯蔵具

須恵器	壺			310	310	100%
-----	---	--	--	-----	-----	------

煮炊具

土師器	羽釜A	38		330	330	
-----	-----	----	--	-----	-----	--

第21表 SB43出土土器構成表



第210図 SB43土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		4	160	195	13%
	杯B		1	15		
	杯B蓋		2	20		
黒色土器A	杯A	1~13	22	840	1345	87%
	碗	14・15	5	175		
	皿B	17・18	4	130		
	不明			200		

貯蔵具

須恵器	甕			565	645	100%
	壺			80		

煮炊具

土師器	長胴甕A	20・21		1700	2390	
	" B	22		210		
	" C			250		
	小型甕B	23		220		

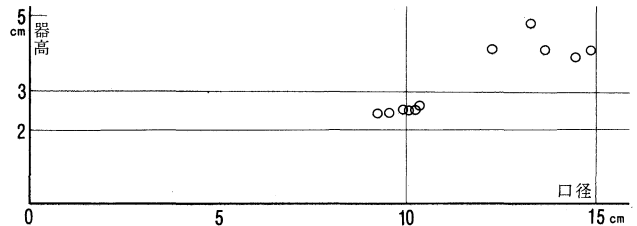
第22表 SB44出土土器構成表

SB46 (図版96)

遺物の出土量が少ない。1は黒色土器A杯A IIであり、杯Aはそのほとんどが黒色土器Aであり、SB144段階である。

SB47 (図版96 PL62 第211図)

1～6は土師器杯A III、7～11は杯A II、12は盤B I、13は碗である。杯A IIIはその法量より、SB32段階である。14は黒色土器A碗Cである。15～18は灰釉陶器皿C、19は鉢である。



第211図 SB47土師器杯A法量分布

SB48 (図版96 PL62 第23表)

土師器杯A IIは、その法量より SB52段階である。全体をみると土師器の割合は、黒色土器Aや灰釉陶器に比べて低いのが特徴である。黒色土器Aの内面のヘラミガキは全体にわたって丁寧に行なわれず、暗文状になるものが多い。

SB49 (図版97 PL62・63 第24表)

杯Aはその構成より、SB144段階である。黒色土器A杯Aはさらに法量より、A I(9～12)とA IIに分けられる。15はタタキの方向が肩部で変えられており、16は長頸壺である。

SB50 (図版97 PL63)

1～5は土師器杯A III、6は盤B IIである。杯A IIIはその法量より SB31段階である。7は灰釉陶器碗、8は土師器羽釜Bである。

SB51 (図版98 PL63)

全体に土師器の量が少ない。1は土師器碗C、2・3は灰釉陶器碗、4は山茶碗である。5はC類に分類できる緑釉陶器碗Cである。6は白磁皿、7・8は白磁II類碗である。

SB52 (図版98 PL63 第25表 第212図)

土師器杯A IIは SB52段階を設定した基準資料である。杯A IIはいずれも硬質で薄手である。22の黒色土器A碗は内面のヘラミガキが粗雑で、間にクロナデの痕が観察できる。26の緑釉陶器はC類に分類できる。

食膳具

須恵器	杯A II		2	25	25	0.8%
黒色土器A	碗	3～8	10	1130	1290	41%
	不明			160		
土師器	杯A II		5	150	490	15.6%
	杯A III	1	2	30		
	碗	2	5	240		
	不明			70		
灰釉陶器	碗	9・10	6	490	1340	42.6%
	皿B	11～13	4	360		
	皿C	14～17	6	450		
	不明			40		

貯蔵具

須恵器	甕			180	180	18%
灰釉陶器	壺	19		810	810	82%

煮炊具

土師器	長胴甕A			20	400	
	〃 C			60		
	小型甕B			60		
	羽釜A	18		260		

第23表 SB48出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II	14	5	10	100	7%
	杯B		2	50		
	杯B蓋		3	40		
黒色土器A	杯A	1～12	21	1120	1355	92%
	碗		2	30		
	皿B	13	1	70		
	不明			135		
土師器	杯A II		1	20	20	1%

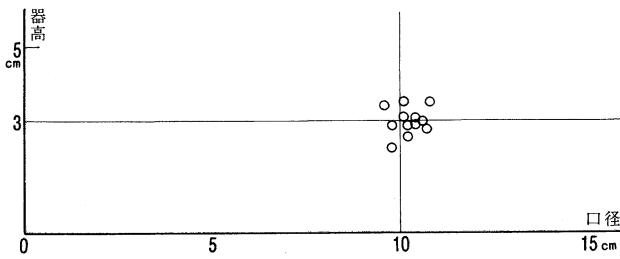
貯蔵具

須恵器	甕	15		485	1515	100%
	壺	16・17		1030		

煮炊具

土師器	長胴甕A	18		3790	4625	
	〃 C	19		435		
	小型甕B	20・21		400		

第24表 SB49出土土器構成表



第212図 SB52土師器杯A 法量分布

SB53 (図版98)

1は黒色土器A杯A II、2・3は須恵器杯A II、4・5は須恵器杯Bである。杯Aはその構成よりSB184段階である。6は土師器長胴甕Aである。

SB54

ほとんど遺物は出土していない。

SB55 (図版98・99 PL63)

1～3は黒色土器A杯A II、4・5は碗、6・7は皿Bである。杯Aはほとんどが黒色土器Aであり、SB144段階である。8はハケ塗りの灰釉陶器碗で尾北窯の製品である。9～12は土師器長胴甕A、13は小型甕Bである。

SB56 (図版99)

1～6は須恵器杯蓋である。杯Aは図示しなかったが、須恵器がほとんどであり、SB258段階である。

SB57 (図版99)

1は土師器杯A III、2は碗C、3は杯A II、4は碗である。杯A IIIはその法量より、SB31段階である。5は白磁II類碗である。

SB58 (図版99 PL63 第26表 第213図)

土師器杯A IIはその法量により、SB52段階である。黒色土器Aの内面のヘラミガキは粗雑で、暗文状になっているものが多い。

SB59 (図版99・100 PL63・64 第27表 第214図)

土師器杯A IIIはその法量により、SB31段階である。さらに口縁の形態には内湾するもの(1・3)と外反するもの(2)の二種がある。4・5は杯A IIに分類したが、形態は大きく異なる。6はいわゆる柱状高台の皿である。10～12は輸入陶磁器で、10は白磁II類碗、11は白磁皿、12は白磁V類碗である。

食膳具

須恵器	杯A II		2	25	45	1.3%
	杯B蓋		1	20		
黒色土器A	碗	20・22	5	430	605	17.8%
	鉢		1	35		
	不明			140		
土師器	杯A II	1～13	26	1020	2530	74.4%
	碗	14～19	11	870		
	不明			640		
灰釉陶器	碗	23・24	6	190	215	6.4%
	皿B	25	3	25		
緑釉陶器	碗	26	1	5	5	0.1%

貯蔵具

須恵器	甕			235	245	100%
	壺			10		

煮炊具

土師器	長胴甕A			120	380	
	小型甕B			10		
	羽釜			250		

第25表 SB52出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II	15・16	4	185	215	9%
	杯B		1	15		
	杯B蓋		1	15		
黒色土器A	碗	11～14	8	560	840	33%
	杯A		3	130		
	不明			150		
土師器	杯A II	1～8	18	510	1110	44%
	碗	9・10	6	360		
	不明			240		
灰釉陶器	碗		1	5	360	14%
	皿B	17～19	4	340		
	皿C		1	15		

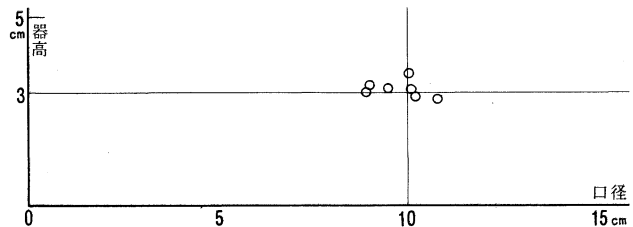
貯蔵具

須恵器	甕			60	90	75%
	壺			30		
灰釉陶器	瓶			20	30	25%
	水注			10		

煮炊具

土師器	長胴甕A			15	640	
	小型甕B	20・21		625		

第26表 SB58出土土器構成表



第213図 SB58土師器杯A 法量分布

SB60 (図版100)

ほとんど遺物は出土していない。1は灰釉陶器である。

SB61 (図版100 PL64)

土師器の出土は少なく、灰釉陶器が多い。1・2は土師器杯A III、3は皿A II、4は盤B IIである。杯A IIIはその法量より、SB32段階である。5は黒色土器A碗である。6~10は灰釉陶器碗、11・12は皿C、13は托状の皿Bである。

SB62

遺物の量が少ない。須恵器、土師器がある。

SB63 (図版100 PL64 第28表 第215図)

杯A IIIはその法量より、SB32段階である。47の小型甕Cは厚手で口縁に指頭痕が残る。

SB64 (図版101 PL64)

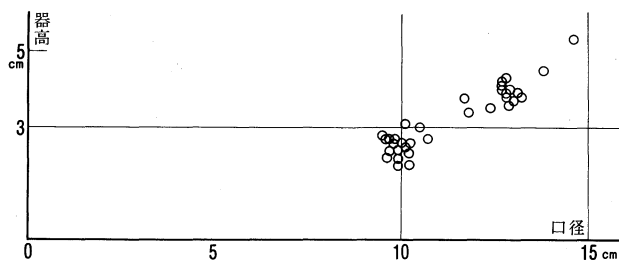
1~4は土師器杯A III、5は碗である。杯A IIIの法量にバラツキがみられ、4はSB31段階である。6は黒色土器A碗である。7は灰釉陶器碗、8は皿C、9は皿Bである。10はc類に分類できる緑釉陶器皿Bで、釉を失っている。遺構自体SB84と切り合っており、遺物に混入がみられる。

SB65 (図版101)

1は土師器杯A III、その法量によりSB74段階である。2・3は灰釉陶器皿Cである。

SB66 (図版101・102 PL64・65・91 第29表 第216図)

土師器杯A IIIは、その法量よりSB32段階である。25と26の内面のヘラミガキは暗文状で、特に26は円



第215図 SB63土師器杯A 法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		4	65	70	3%
	杯B蓋		1	5		
土師器	杯A II	4・5	5	405	1495	74%
	杯A III	1~3	9	375		
	柱状高台皿	6	1	165		
	不明			550		
灰釉陶器	碗		3	65	185	9%
	碗C	7	3	30		
	皿B	8	1	50		
	皿C		1	10		
	不明			30		
山茶碗	碗	9	2	230	230	11%
輸入陶磁器	碗	10・12	3	50	65	3%
	皿	11	1	15		

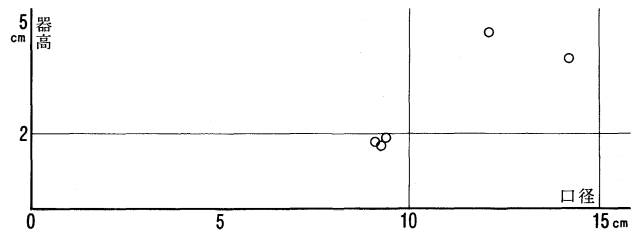
貯蔵具

須恵器	甕			465	500	76%
	壺			35		
灰釉陶器	瓶			160	160	24%

煮炊具

土師器	小型甕B			120	1710	
	羽釜B	13		1590		

第27表 SB59出土土器構成表



第214図 SB59土師器杯A 法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		1	5	10	0.1%
	杯B蓋		1	5		
黒色土器A	碗	39	3	280	450	5.4%
	不明			170		
土師器	杯A II	20~35	41	3030	7005	83.2%
	杯A III	1~19	49	1120		
	碗	36	11	550		
	盤B I	37・38	8	1040		
	鉢		2	205		
	不明			1060		
灰釉陶器	碗	40~42	5	510	955	11.3%
	碗C	43	2	90		
	皿C	44~46	6	280		
	不明			75		

貯蔵具

須恵器	甕			450	500	81%
	壺			50		
灰釉陶器	瓶			120	120	19%

煮炊具

土師器	長胴甕A			60	2160	
	小型甕B			80		
	小型甕C	47		580		
	羽釜B			1440		

第28表 SB63出土土器構成表

を中心に周囲に5弁の花文を描いている。

SB67 (図版102)

遺物の出土量は少ない。1は土師器杯A III、その法量よりSB32段階である。2は小型甕Bである。

SB68 (図版102)

1～3は土師器杯A III、1・2はその法量よりSB31段階である。4・5は灰釉陶器、5・7は山茶碗である。8は白磁II類碗である。

SB69 (図版102 PL65)

遺構自体複雑に切り合っているため遺物に混入がみられる。1～11は土師器杯A II、12・13・16は碗、14・15は盤B IIである。17～19は須恵器杯A II、20は甲斐型杯である。21～25は灰釉陶器碗、26～29は皿C、30・31は皿Dである。32は山茶碗である。33～35は緑釉陶器で、33はa類に分類できる碗、34はc類に分類できる碗、35はe類に分類できる水注の一部である。36は白磁IV類碗、37・38は白磁皿、39はII類碗に良く似た釉が掛かる小壺の栓状の蓋である。40は土師器足釜の体部と脚部の接合部分である。杯Aは大きくみると、SB52段階と、SB31段階つ二つに分けることができる。

SB70 (図版103)

1～3は土師器杯A IIIで、その法量よりSB74段階である。4は灰釉陶器碗、5は碗Cである。

SB71 (図版103 PL65)

1～3は土師器杯A III、4は土師器碗C、5は杯A IIである。杯A IIIはその法量によりSB74段階である。6は灰釉陶器碗、7は小型甕Bをそのまま小型にした土師器壺である。

SB72 (図版103 PL65 第30表)

杯Aの構成により、SB144段階である。また黒色土器A杯Aは法量によりA I (5)とA II (1～4)に分けられる。なお、須恵器杯A IIは軟質灰白色である。11の長胴甕Aは、外面肩部まで横方向のナデが入る。

食膳具

須恵器	杯A II		5	110	175	2%
	杯B蓋		3	25		
	不明			40		
黒色土器A	碗	22～27	14	960	1210	12%
	碗C	28～29	6	155		
	不明			95		
黒色土器B	碗C		1	10	20	0.2%
	皿A	30	1	10		
土師器	杯A II	9・10	16	1060	7490	73%
	杯A III	1～8	25	1350		
	碗	11・12	5	680		
	碗C	13～15	8	400		
	皿A I	17	3	300		
	皿A II	16	3	80		
	盤B I	18～21	13	1660		
	鉢		1	120		
	不明			1840		
灰釉陶器	碗	31～36	14	1210	1320	12.8%
	皿B		2	10		
	皿C	37	3	100		

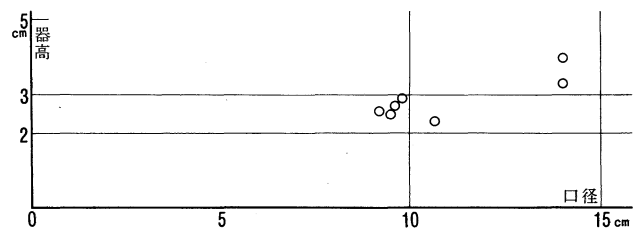
貯蔵具

須恵器	甕			780	870	71%
	壺			90		
灰釉陶器	瓶	38～40		2090	2090	29%

煮炊具

土師器	長胴甕A			685	800	
	羽釜A			115		

第29表 SB66出土土器構成表



第216図 SB66土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II	9・10	5	200	285	15.3%
	杯B		2	45		
	杯B蓋		1	10		
	不明			30		
黒色土器A	碗	6・8	8	380	1565	83.9%
	杯A	1～5	15	845		
	皿B	7	2	135		
	不明			205		
土師器	甲斐型		1	10	10	0.5%
灰釉陶器	碗		1	5	5	0.3%

貯蔵具

須恵器	甕			1390	1910	100%
	壺			520		

煮炊具

土師器	長胴甕A	11・12		3290	3540	
	小型甕B	13		250		

第30表 SB72出土土器構成表

食膳具						
須恵器	杯A II		3	60	90	3%
	杯B		2	20		
	杯B蓋		1	10		
黒色土器A	碗		3	120	195	5.5%
	碗C	6	1	75		
土師器	杯A II		9	380	2345	65%
	杯A III	1~4	18	815		
	碗	5		190		
	不明			860		
灰釉陶器	碗	7~9	6	410	575	16%
	碗C	10	2	115		
	皿B		1	5		
	皿C		1	5		
不明				40		
山茶碗	碗	11	1	365	365	10%
緑釉陶器	皿B		2	15	15	0.5%
貯蔵具						
須恵器	甕			455	585	94%
	壺			130		
灰釉陶器	瓶			35	35	6%
煮炊具						
土師器	長胴甕A			130	1630	
	羽釜A	12		1500		

第31表 SB73出土土器構成表

SB73 (図版103 PL66 第31表)

1~4は土師器杯A III、5は碗である。杯A IIIのうち1~3の法量はSB31段階である。6は黒色土器A碗Cである。7~9は灰釉陶器碗、10は碗Cである。11は山茶碗である。12は土師器羽釜Aである。

SB74 (図版104 PL66・91 第32表 第217図)

土師器杯A IIIはSB74段階を設定した基準資料である。皿Bは底が厚く、端部を面取りしたもの(15~22)としないもの(23・65)がある。碗の特徴は、土師器と黒色土器Aより、灰釉陶器が多い点である。

SB75 (図版104 PL66)

1・2は黒色土器A杯A II、3・4は土師器小型甕Bである。杯Aの構成よりSB144段階である。

SB76 (図版105 PL66・67)

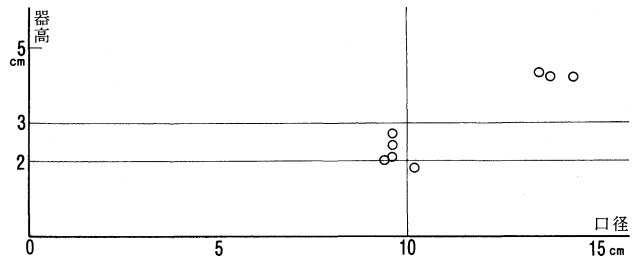
1・2は土師器杯A IIで、その法量よりSB52段階である。3は黒色土器A碗である。4~8は灰釉陶器碗、9は皿Cである。10・11は土師器羽釜Aである。

SB77 (図版105 PL67 第33表)

杯Aの構成よりSB258段階である。杯Bはさらに法量より、B I (7)、B III (5・6)、B IV (4)に分けることができる。杯蓋も同様である。

食膳具							
須恵器	杯A II			5	265	540	3.4%
	杯B			3	105		
	杯B蓋			2	110		
	不明				60		
黒色土器A	碗	26・29		4	225	410	2.6%
	碗C	28		4	60		
	杯A II	27		5	45		
	不明				80		
黒色土器B	碗C			2	125	125	0.8%
土師器	杯A II	7~10		18	2230	12095	76%
	杯A III	1~6		21	1830		
	碗	11		4	210		
	碗C			15	850		
	皿A I	24		3	160		
	皿A II	15~23・25		21	1010		
	盤B I	13		9	380		
	盤B II	12・14		5	115		
	不明				4900		
灰釉陶器	碗	30~39		49	1910	2720	17%
	碗C	40		3	105		
	皿B			6	60		
	皿C	41・42		10	105		
	皿D	43		1	70		
	耳皿			1	25		
	鉢			1	10		
	不明				435		
	緑釉陶器	碗			1		
貯蔵具							
須恵器	甕				2950	3360	83%
	壺				410		
灰釉陶器	瓶				710	710	17%
煮炊具							
土師器	長胴甕A				260	1050	
	小型甕B	44			285		
	羽釜B				125		
	足釜	45~47			380		

第32表 SB74出土土器構成表



第217図 SB74土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II	1~3	6	290	1420	98%
	杯B	4~7	13	435		
	杯B蓋	8~10	10	560		
	不明			135		
黒色土器A	杯A		2	25	35	2%
	不明			10		

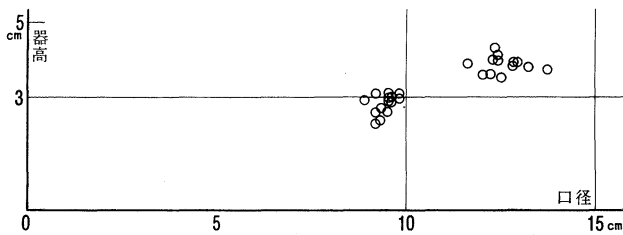
貯蔵具

須恵器	甕			250	320	100%
	壺			40		
	壺蓋	11		30		

煮炊具

土師器	長胴甕A			250	350	
	長胴甕B			75		
	小型甕B			35		

第33表 SB77出土土器構成表



第218図 SB80土師器杯A法量分布

SB78 (図版105 PL67)

SB123との切り合いがはっきりせず、遺物に混乱がみられる。1~6は土師器杯A III、7・8は杯A IIである。杯A IIIはその法量により、SB74段階である。9・10は灰釉陶器碗、11は皿B、12は皿C、13は耳皿である。14はe類に分類できる緑釉陶器皿Bである。

SB79 (図版105 PL67)

遺物の出土量は少ない。1は黒色土器A碗、2は須恵器杯A IIである。杯Aは図示しないが黒色土器Aの量が多く、SB144段階である。

SB80 (図版106・107 PL67 第34表 第218図)

多量の土師器が出土している。土師器杯A IIIはその法量よりSB32段階である。杯A IIIは口縁の形態に面取りするものしないものの二種がある。74は口縁の内外にススが付着しており、燈明皿として利用されたと思われる。

SB81 (図版107 PL68 第35表 第219図)

土師器杯A IIIはその法量によりSB84段階であ

食膳具

須恵器	杯A II			2	25	70	0.2%
	杯B			3	40		
	杯B蓋			1	5		
黒色土器A	杯A			3	80	220	0.7%
	碗C	74		2	110		
	不明				30		
黒色土器B	碗C			1	5	45	0.1%
	耳皿	75		1	40		
土師器	杯A II	46~59		66	4880	28610	95%
	杯A III	1~45		199	12210		
	碗	60~62		60	4690		
	碗C	63		15	600		
	皿A I	72		1	40		
	皿A II	73		1	60		
	盤B I	67~71		30	2595		
	盤B II	64~66		11	580		
	鉢			3	675		
	不明				2860		
	灰釉陶器	碗	76~78		8		
碗C				1	5		
皿B		79		4	125		
皿C		80~83		7	390		
不明					35		
緑釉陶器	皿				5	5	0.02%

貯蔵具

須恵器	甕			950	1030	75%
	壺			80		
灰釉陶器	瓶			335	335	25%

煮炊具

土師器	長胴甕A			250	1345	
	長胴甕B			90		
	小型甕B			10		
	羽釜A			995		

第34表 SB80出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II			6	40	60	0.6%
	不明				20		
黒色土器A	碗	31~33		7	340	540	5.5%
	杯A II			4	130		
	不明				70		
土師器	杯A II	21~23		48	2580	8780	90%
	杯A III	1~20		54	1790		
	碗	24~28・30		12	840		
	碗C			1	20		
	盤B I	29		14	1255		
	不明				2295		
灰釉陶器	碗	34・35		4	185	385	3.9%
	碗C			2	65		
	皿B	36・37		6	85		
	皿C			2	10		
	不明				40		

貯蔵具

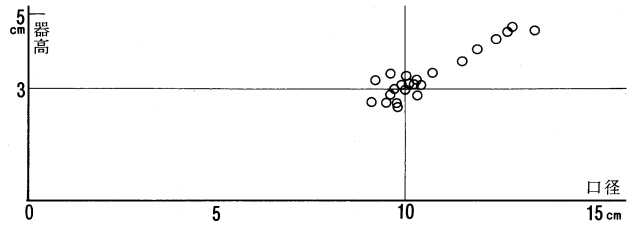
須恵器	甕			550	560	100%
	壺			10		

煮炊具

土師器	長胴甕A			440	2880	
	長胴甕B			540		
	小型甕B			15		
	羽釜A	38		1885		

第35表 SB81出土土器構成表

る。形態的には10のように端部を面取りしているものがみられる。碗の高台は黒色土器A、土師器ともに高い。33は線状のヘラミガキがなされる。



第220図 SB84土師器杯A 法量分布

SB82

遺物の出土はない。

SB83 (図版109・108 PL68 第36表)

杯Aの構成よりSB144段階である。杯Aはさらにその法量より、A I(5)とA II(1~4)に分けられる。11の須恵器は灰白色軟質である。12は短頸壺、13は長頸壺である。

食膳具						
須恵器	杯A II	11	3	145	200	9%
	杯B		2	35		
	不明			20		
黒色土器A	杯A	1~5	14	980	1975	91%
	碗	6~8	5	590		
	皿B	9・10	3	185		
	不明			220		

SB84 (図版108 PL68・69 第37表 第220図)

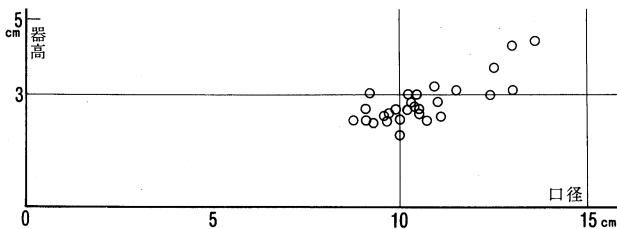
土師器杯A IIIはSB84段階を設定した基準資料である。32は細かいヘラミガキが線状に施こされる。39はロクロ調整によって仕上げられた土師器の壺で、体部に意図的に外から穴をあけている。

貯蔵具						
須恵器	甕			125	2015	100%
	壺	12・13		1890		
煮炊具						
土師器	長胴甕A	14		2810	3380	
	長胴甕B			60		
	小型甕B	15・16		510		

第36表 SB83出土土器構成表

SB85 (図版109 PL69 第38表)

杯Aの構成より、SB258段階である。須恵器の杯A IIの底部は糸切り(1・3・5)、糸切り後周囲を手持ちヘラケズリ(4)、全面を手持ちヘラケズリ(2)の三種がみ



第219図 SB81土師器杯A 法量分布

食膳具						
須恵器	杯A II	1~5	9	360	1500	96%
	杯B	6・7	8	370		
	杯B蓋	8~14	9	600		
	不明			170		
黒色土器A	杯A II		1	10	55	4%
	不明			45		

貯蔵具						
須恵器	甕			1865	1865	100%

煮炊具						
土師器	長胴甕A	15		2815		
	長胴甕B	16		870		
	小型甕B			40		

第38表 SB85出土土器構成表

食膳具						
須恵器	杯A II		2	20	50	0.5%
	杯B		1	20		
	杯B蓋		1	10		
黒色土器A	杯A II	33	4	120	410	4%
	碗	32	3	200		
	不明			90		
	不明					
土師器	杯A II	19~23	21	1240	9075	88.1%
	杯A III	1~18	40	1815		
	碗	24~27	9	1100		
	碗C	28	4	300		
	盤B I	29~31	8	1860		
	鉢		2	390		
	不明			2370		
灰釉陶器	碗	34~36	9	410	700	7%
	皿B	37	4	180		
	皿C	38	2	30		
	不明			80		
緑釉陶器	碗		1	10	40	0.4%
	皿B		1	30		

貯蔵具						
須恵器	甕			380	380	40%
灰釉陶器	瓶			110	110	12%
土師器	壺	39		450	450	48%

煮炊具						
土師器	長胴甕A			105	1705	
	小型甕B	40		240		
	羽釜B			1360		

第37表 SB84出土土器構成表

られる。杯Bは法量よりBⅢとBⅣに分けられる。15の長胴甕Aは全体をタタキによって一度成形した後、ハケ調整で仕上げるため、ハケの間にタタキ目が観察できる。

SB86 (図版109 PL69 第39表)

土師器杯AⅢはその法量より、SB74段階である。11の黒色土器Aは線状のヘラミガキを施すのみである。24・25は灰釉陶器長頸瓶である。

SB87 (図版109・110 PL69 第40表)

1～4は黒色土器A杯AⅡ、5・6は碗、7は皿Bである。杯Aの構成よりSB144段階である。9・10は土師器小型甕Bである。

SB88 (図版110 PL69 第41表 第221図)

土師器杯AⅢはその法量より、SB32段階である。14の土師器皿AⅡは薄く丁寧な作りである。

SB89 (図版110)

遺物の出土量が少ない。1は須恵器杯BⅢ、2は美濃須衛窯産の杯蓋である。杯Aは図示できないが須恵器がほとんどでSB258段階である。

食膳具						
須恵器	杯AⅡ		2	20	130	3.2%
	杯B		3	20		
	杯B蓋		4	90		
黒色土器A	碗	21	2	240	270	6.6%
	不明			30		
土師器	杯AⅡ	6~10	15	920	3660	89.5%
	杯AⅢ	1~5	13	570		
	碗	11	3	260		
	碗C	12・13	4	225		
	皿AⅡ	14	1	50		
	盤BⅠ	17~20	8	795		
	盤BⅡ	15・16	5	210		
不明			630			
灰釉陶器	皿B		1	15	30	0.7%
	皿C	22	1	15		
貯蔵具						
須恵器	甕			520	520	100%
煮炊具						
土師器	長胴甕A			310	560	
	長胴甕B			30		
	小型甕B			20		
	羽釜A			200		

第41表 SB88出土土器構成表

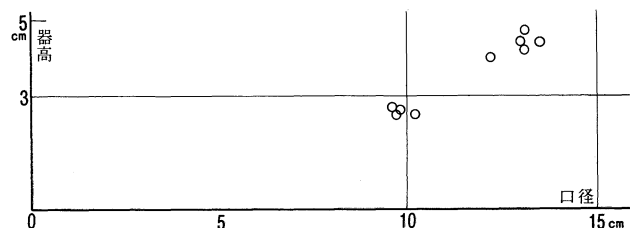
食膳具						
須恵器	杯AⅡ		4	55	95	2.2%
	杯B		2	25		
	杯B蓋		3	15		
黒色土器A	杯A		6	80	845	19.4%
	碗	11~15	6	710		
	不明			55		
黒色土器B	碗C		2	25	25	0.6%
土師器	杯AⅡ	5・6	11	395	2625	60.3%
	杯AⅢ	1~4	10	250		
	碗	7・8	10	740		
	碗C	9	5	280		
	皿AⅡ	10	2	75		
	盤BⅠ		2	130		
	鉢	16・17	2	585		
不明			170			
灰釉陶器	碗	18	10	390	765	17.5%
	皿B		3	25		
	皿C	19~23	7	325		
	不明			25		

貯蔵具						
須恵器	甕			360	375	25%
	壺			15		
灰釉陶器	瓶	24・25		1135	1135	75%
煮炊具						
土師器	長胴甕A			315	1295	
	羽釜A			980		

第39表 SB86出土土器構成表

食膳具						
須恵器	杯AⅡ		6	160	495	26%
	杯B	8	6	190		
	杯B蓋		5	145		
黒色土器A	杯A	1~4	15	650	1385	74%
	碗	5・6	10	610		
	皿B	7	4	55		
	不明			70		
貯蔵具						
須恵器	甕			1500	1620	81%
	壺			120		
移入須恵器	甕			370	370	9%
煮炊具						
土師器	長胴甕A			6300	7430	
	長胴甕B			710		
	小型甕B	9・10		420		

第40表 SB87出土土器構成表



第221図 SB88土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		8	110	110	6%
黒色土器A	杯A II	7~13	17	445	1025	57%
	碗	14~18	13	350		
	皿B	19	1	25		
	不明			205		
土師器	杯A II	1~6	10	220	275	15%
	碗		1	10		
	不明			45		
灰釉陶器	碗	20~22	8	205	395	22%
	碗C	23	1	35		
	皿B	24	6	115		
	皿C		1	10		
	耳皿		2	10		
	不明			20		

貯蔵具

須恵器	甕			1110	1110	2%
灰釉陶器	瓶			25	25	98%

煮炊具

土師器	長胴甕A			305	890	
	長胴甕B	25		120		
	小型甕B	26~29		465		

第42表 SB91出土土器構成表

SB90 (図版110)

1は土師器杯A II、2・3は黒色土器A杯A II、4は碗である。5は灰白色軟質で黒斑をもつ須恵器杯A IIである。

SB91 (図版110・111 PL70 第42表)

杯Aの構成より、SB111段階である。土師器は硬質薄手で、須恵器は灰白色軟質である。なお土師器と須恵器の区別がつかない焼成もある。

SB92

遺物の出土がない。

SB93 (図版111 PL70 第43表)

杯Aの構成よりSB184段階である。黒色土器A杯AはさらにA I (1)とA II (2)の二法量に分けることができる。須恵器の内7は糸切り後周囲を手持ちヘラケズリをしている。

SB94 (図版111・112 PL70 第44表 第222図)

杯A IIはSB94段階を設定した基準資料である。緑釉陶器が多く出土している。36はa類に分類できる皿Cで内面に印刻花文が施こされる。37はf類に分類できる碗で、縦長の輪花がつけられる。38はb

食膳具

須恵器	杯A II	3~10	18	630	1545	79%
	杯B		4	105		
	杯B蓋		8	810		
移入須恵器	杯B		2	35	50	2%
	杯B蓋		2	15		
黒色土器A	杯A	1・2	9	310	370	19%
	不明			60		

貯蔵具

須恵器	甕			180	180	92%
移入須恵器	壺蓋	13		15	15	8%

煮炊具

土師器	長胴甕A			230	230	
-----	------	--	--	-----	-----	--

第43表 SB93出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		4	55	55	0.7%
黒色土器A	杯A II	26	6	120	490	6.0%
	碗	27・28	4	100		
	不明			270		
黒色土器B	碗		1	45	45	0.6%
土師器	杯A II	1~19	49	3340	5755	70.8%
	碗	20・21・23・24	13	940		
	盤B I	22・25	4	340		
	鉢		1	95		
	不明			1040		
灰釉陶器	碗	29~33	16	910	1670	20.5%
	皿B	34	8	185		
	皿C	35	2	35		
	耳皿		1	10		
	鉢		1	220		
	不明			310		
緑釉陶器	碗	37	2	35	117	1.4%
	皿C	36	1	25		
	耳皿	38	1	42		
	双耳壺	39		5		
	不明			10		

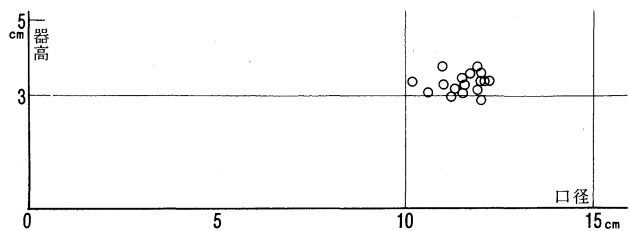
貯蔵具

須恵器	甕			2580	2685	75%
	壺			105		
灰釉陶器	瓶	40		895	895	25%

煮炊具

土師器	長胴甕A			860	1885	
	長胴甕B			110		
	長胴甕C			730		
	小型甕C	41		185		

第44表 SB94出土土器構成表



第222図 SB94土師器杯A法量分布

類に分類できる耳皿である。39はa類に分類できる双耳壺である。

SB95 (図版112 PL70 第45表)

杯Aの構成より、SB184の段階である。黒色土器A杯AはA Iに分類できる。9の双耳碗は、杯BIVに把手をつけた形態をしている。15は長胴甕Bであるが、ハケ調整を多用している。

SB96 (図版113 PL70 第46表 第223図)

杯Aはそのほとんどが土師器で、その法量はSB114段階である。15の土師器鉢は口縁端部を面取りしている。

SB97 (図版113 PL70)

1～3は須恵器杯A II、4・5は杯B、6は杯蓋である。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。7は土師器小型甕Bで体部下半をヘラケズリしている。8は長胴甕Aである。

SB98 (図版113 PL70)

1は土師器杯A III、2が杯A II、3が碗、4・5は皿A IIである。杯A IIIはその法量により、SB74段階である。6・7は灰釉陶器碗である。8は白磁四耳壺の口縁部で、折り返しの部分が接合しない。

SB99 (図版113・114 PL70・71 第47表 第224図)

遺構のところで述べたように、単独の竪穴住居址ではなく、中央に別の掘り込みがあった可能性がある。しかし、遺物はそれを区別することができず一括して扱うことにする。特徴としては、食膳具のなかで土師器が圧倒的であることがあげられる。杯A IIIはその法量より、SB32段階である。器種構成の特徴としては、盤B IIが多い点があげられる。94の緑釉陶器はc類に分類できる。

SB100 (図版115)

1～4は須恵器杯A II、5は杯B、6は鉄鉢型の鉢である。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。7は土師器長胴甕Aである。

食膳具

須恵器	杯A II	4~7	12	640	1285	74.5%	
	杯B		8	5			330
	杯B蓋	10~12	5	150			
	双耳碗	9	1	30			
	鉢	13	1	30			
	不明			105			
黒色土器A	杯A II	1.2	5	280	440	25.5%	
	不明			160			

貯蔵具

須恵器	甕			600	705	100%
	壺			105		

煮炊具

土師器	長胴甕A	14		1065	1525	
	長胴甕B	15		430		
	小型甕B			30		

第45表 SB95出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯B		1	10	10	0.4%
黒色土器A	杯A		5	115	650	23.4%
	碗	14	4	280		
	鉢		2	175		
	不明			80		
土師器	杯A II	1~10	23	1325	1875	67.7%
	碗	11~13	4	175		
	鉢	15	1	35		
	不明			340		
灰釉陶器	碗	16	4	110	230	8.3%
	皿B	17・18	4	100		
	不明			20		
緑釉陶器	不明		1	5	5	0.2%

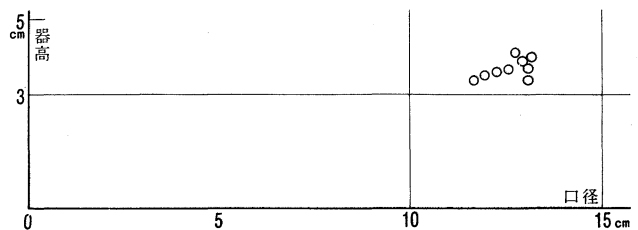
貯蔵具

須恵器	甕			165	165	82.5%
灰釉陶器	瓶			35	35	17.5%

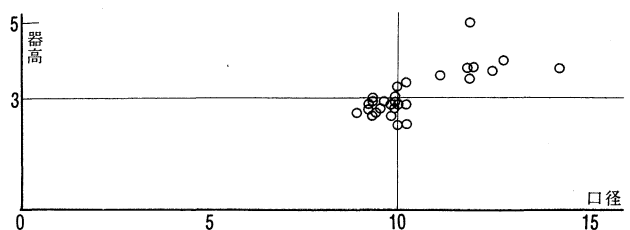
煮炊具

土師器	長胴甕C			130	200	
	小型甕B			15		
	羽釜A			55		

第46表 SB96出土土器構成表



第223図 SB96土師器杯A法量分布



第224図 SB99土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A		4	30	140	0.8%
	杯B		3	35		
	杯B蓋		6	75		
黒色土器A	杯A II	86・90	7	310	550	3.0%
	碗	87・88	1	50		
	碗C	91・92		190		
黒色土器B	碗		1	5	240	1.3%
	碗C		3	160		
	皿B	89	1	75		
土師器	杯A II	46~52	18	1080	16955	93.6%
	杯A III	1~45	102	5155		
	碗	53・54	11	605		
	碗C	55~64	26	1705		
	皿A I		2	60		
	皿A II		1	5		
	盤B I	82~85	34	2900		
	盤B II	65~81	21	2245		
	不明			3200		
	灰釉陶器	碗	93	7		
皿B			2	10		
皿C			2	10		
緑釉陶器	碗	94	1	5	10	0.1%
	皿B		1	5		

貯蔵具

須恵器	甕			1290	1375	92%
	壺			85		
灰釉陶器	瓶			115	115	8%

煮炊具

土師器	長胴甕A			990	1050
	小型甕B			60	

第47表 SB99出土土器構成表

SB101 (図版115 PL71)

1・2は土師器杯A II、3・4は碗である。杯A IIはその法量によりSB94段階である。5・6は黒色土器A碗、8は鉢である。9・10は灰釉陶器皿B、11は土師器羽釜Aである。12は須恵器のいわゆる凸帯付四耳壺であるが、つまみは3箇所にししか付けられない。

SB102 (図版115・116 PL71 第48表 第225図)

杯Aの構成より、SB111段階である。皿Bをみた場合、黒色土器は少量で灰釉陶器の割合が高い。土師器の鉢(19・20)はいずれも大きく開き端部を面取りしており、透かしのはいる高台が付くものと思われる。須恵器の杯A IIはいずれも灰白色軟質で黒斑をもつ。灰釉陶器はいずれもハケ塗りである。緑釉陶器は、35はb類に分類でき、36・37はa類に分類できる。後者は内外面に印刻花文をもった稜碗である。

SB103 (図版116 PL72 第49表 第226図)

杯A IIはその法量により、SB114段階である。6・7の成形技法は非ロクロである。しかし、色調や焼成はロクロ調整の土師器とほとんど変わらない。灰釉陶器は14がハケ塗りの他は漬け掛けである。

食膳具

須恵器	杯A II	21・22	11	410	480	7%
	杯B		2	40		
	不明			30		
黒色土器A	杯A II	2~15	38	2210	3410	49%
	碗	16・17	11	730		
	皿B	18	6	120		
	不明			350		
土師器	杯A II	1	12	475	1265	18%
	碗		3	100		
	鉢	19・20	3	490		
	不明			200		
灰釉陶器	碗	23~25	7	320	1800	25%
	皿B	26~34	15	1460		
	耳皿		1	20		
緑釉陶器	碗	35~37	3	40	50	1%
	不明			10		

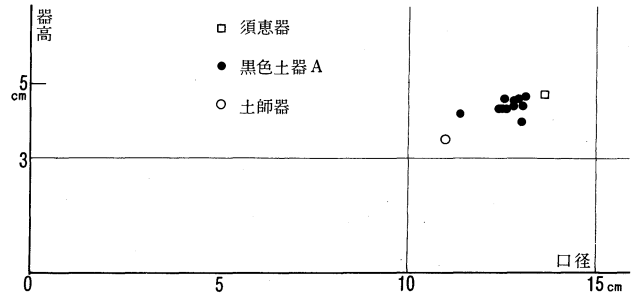
貯蔵具

須恵器	甕			2280	2350	97%
	壺			70		
灰釉陶器	瓶			70	70	3%

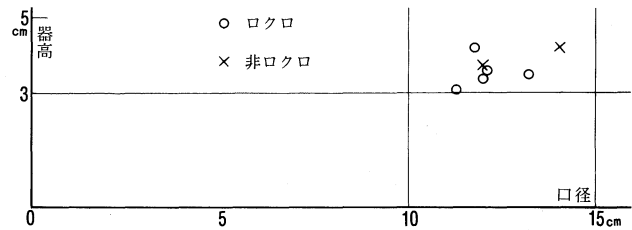
煮炊具

土師器	長胴甕A			1880	1960
	小型甕B			80	

第48表 SB102出土土器構成表



第225図 SB102杯A法量分布



第226図 SB103杯A法量分布

SB104 (図版116)

遺物の出土量が少ない。須恵器と黒色土器Aが多いが、重複して下部に存在するSB194の遺物が混入したためと思われる。1は土師器杯A II、2は灰釉陶器碗である。

SB105 (図版116 PL72)

遺物の出土量が少ない。1は須恵器杯B III、2は杯蓋、3は高杯の脚部である。杯A IIは須恵器がほとんどであり、SB258段階と思われる。

SB106 (図版116)

遺物の出土が少なく。1は全面を丁寧にヘラミガキし黒色処理する筒状の器である。2は土師器羽釜Aである。

SB107 (図版117 PL72)

1・2は黒色土器A杯A II、3は須恵器杯B、4・5は土師器長胴甕Bである。杯Aはそのほとんどが黒色土器Aであり、SB144段階である。

SB108 (図版117 PL72 第50表 第227図)

杯Aの構成よりSB184段階である。7の長胴甕Aは口縁を長く強く外反させる。

SB109 (図版117 PL72 第51表 第228図)

土師器杯A IIはその法量より、SB114段階である。灰釉陶器は9のみハケ塗りで、他は漬け掛けである。12の長胴甕Aは、口縁端部を面取りしており、内面のハケ調整は失われ、外面のハケ調整も粗い。

SB110 (図版117 PL72)

杯Aの構成より、SB111段階である。1～3は土師器杯A II、4・5は黒色土器A杯A II、7・8は灰白色軟質の須恵器杯A IIである。6は黒色土器A碗、9はハケ塗りの灰釉陶器碗、11はb類に分類できる緑釉陶器碗である。10は灰釉陶器小瓶である。

SB111 (図版118・119 PL73 第52表 第229図)

埋土中より多量の土器類が出土している。杯Aは

食膳具

須恵器	杯A II		2	60	60	2%
黒色土器A	杯A	11	4	120	435	11%
	碗		7	220		
	不明			95		
土師器	杯A II	1~7	16	1015	2540	64%
	碗	8~10	9	735		
	鉢		3	410		
	不明			380		
灰釉陶器	碗	12・13	4	520	920	23%
	皿B	14~16	6	280		
	不明			120		

貯蔵具

須恵器	甕			1820	2270	98.5%
	壺			450		
灰釉陶器	瓶			35	35	1.5%

煮炊具

土師器	長胴甕A			1200	1750	
	長胴甕C	18		300		
	小型甕B	17		250		

第49表 SB103出土土器構成表

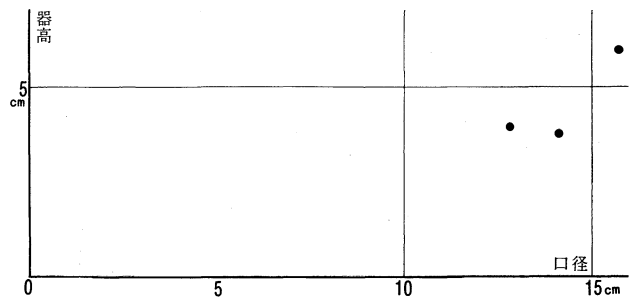
食膳具

須恵器	杯A II	4・5	6	260	405	52%
	杯B蓋	6	3	145		
黒色土器A	杯A	1~3	6	360	380	48%
	不明			20		

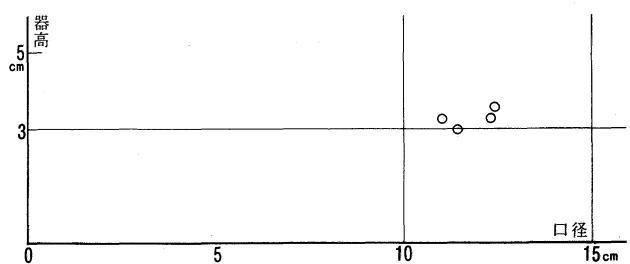
煮炊具

土師器	長胴甕A	7		1150	1200	
	長胴甕B			45		
	小型甕B			5		

第50表 SB108出土土器構成表

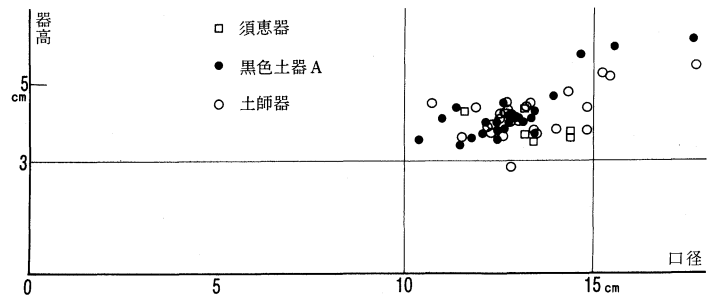


第227図 SB108黒色土器A杯A法量分布



第228図 SB109土師器杯A法量分布

SB111段階を設定した基準資料である。須恵器は灰白色軟質で黒斑をもつもののみられ、土師器の中には須恵器と見分けがつかないものも存在する。65の黒色土器A鉢には片口がつけられる。灰釉陶器はいずれもハケ塗りで、84のみ尾北窯産である。なお、灰釉陶器の碗には大(78)・中(76)・小(75)が認められる。86の緑釉陶器碗はb類に分類できる。皿Bは黒色土器Aがなく、灰釉陶器がほとんどである。



第229図 SB111杯A法量分布

SB112 (図版119)

1は須恵器杯A II、2は杯B、3・4は杯蓋である。5は非常に薄く仕上げられた長胴甕Aである。杯Aは須恵器がほとんどであり、SB258段階である。

SB113 (図版119)

遺物の出土量が少ない。1は黒色土器A杯A II、2は須恵器杯A II、3は口縁を短く強く外反させる長

食膳具						
黒色土器A	碗	6	2	45	65	3.7%
	不明			20		
土師器	杯A II	1~4	22	835	1340	75.7%
	碗	5	6	185		
	不明			320		
灰釉陶器	碗	7~10	13	330	360	20.3%
	碗C	11	1	10		
	皿B		3	20		
緑釉陶器	碗		1	5	5	0.3%

貯蔵具						
須恵器	甕			225	225	90%
灰釉陶器	瓶			25	25	10%

煮炊具						
土師器	長胴甕A			75	315	
	長胴甕C	12		170		
	小型甕B			70		

第51表 SB109出土土器構成表

食膳具						
須恵器	杯A II		3	20	20	1.0%
黒色土器A	杯A		2	40	90	4.2%
	碗	10	2	50		
土師器	杯A II	1~6	18	415	1000	46.7%
	碗	7~9	6	220		
	鉢		2	160		
	不明			205		
灰釉陶器	碗	11~19	16	900	1020	47.6%
	不明			120		
緑釉陶器	皿		1	10	10	0.5%

貯蔵具						
須恵器	壺	20~22		3285	3285	92%
灰釉陶器	瓶	23		275	275	8%

煮炊具						
土師器	長胴甕A			35	100	
	小型甕B			65		

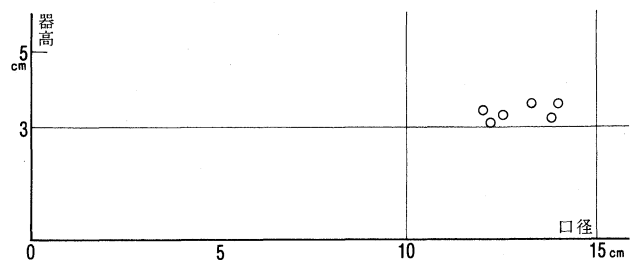
第53表 SB114出土土器構成表

食膳具						
須恵器	杯A II	66~74	30	1260	1460	9%
	杯B		3	60		
	不明			140		
黒色土器A	杯A	29~53	128	3865	8265	50.4%
	碗	54~63	87	2440		
	鉢	64・65	11	920		
	不明			1040		
土師器	杯A	1~28	91	4120	4820	29.4%
	碗		5	210		
	不明			490		
灰釉陶器	碗	75~78	8	620	1755	10.7%
	皿B	79~85	14	815		
	不明			320		
緑釉陶器	碗	86	2	88	88	0.5%

貯蔵具						
須恵器	甕			1750	1800	98%
	壺			50		
灰釉陶器	瓶			30	30	2%

煮炊具						
土師器	長胴甕A			640	840	
	長胴甕B			30		
	長胴甕C			115		
	小型甕B			55		

第52表 SB111出土土器構成表



第230図 SB114土師器杯A法量分布

胴甕Aである。

SB114 (図版120 PL72・73 第53表 第230図)

土師器杯A IIはSB114段階を設定した基準資料である。土師器はいずれも硬質薄手である。灰釉陶器は13が尾北窯産である。貯蔵具は、21が環状把手をもつ長頸壺、22はいわゆる凸帯付四耳壺である。

SB115 (図版120・121 PL73・74 第54表 第231図)

食膳具のなかでは土師器の量が多い。土師器杯Aはその法量より、SB84段階である。

SB116 (図版121 PL73・74 第55表 第232図)

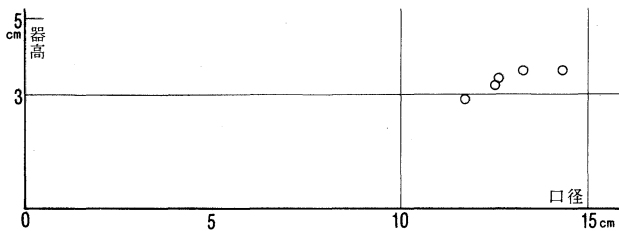
杯Aはその法量より、SB114段階である。土師器は全体に硬質薄手である。灰釉陶器は11・12がハケ塗りの他は漬け掛けである。17の長胴甕Aは、口縁が肥大し端部は面取りがされており、内面のハケ調整は失われ、外面のハケ調整は粗い。

SB117 (図版121)

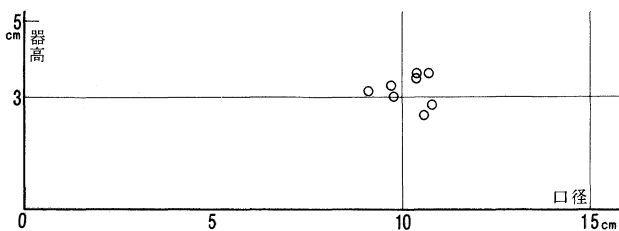
遺物の出土量は少ない。1～3は須恵器杯A IIである。杯Aは図示しないが黒色土器Aもみられ、SB258あるいはSB184段階の可能性はある。

SB118 (図版121 PL74 第56表 第233図)

土師器杯A IIは、その法量よりSB94段階である。9は大型の土師器盤B IIである。緑釉陶器の16・17



第232図 SB116土師器杯A法量分布



第233図 SB118土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		8	190	230	2.0%
	杯B		2	20		
	杯B蓋		2	20		
黒色土器A	碗		4	90	170	1.4%
	不明			80		
土師器	杯A II	21~29	34	2100	10630	88.7%
	杯A III	1~20	56	2500		
	碗	30・31	18	1540		
	碗C		3	20		
	盤B I	32	9	900		
	盤B II		3	70		
	不明			3500		
灰釉陶器	碗	33~36	6	470	920	7.7%
	皿B		1	10		
	皿C	37・38	5	320		
	不明			120		
緑釉陶器	碗			15	25	0.2%
	皿			10		

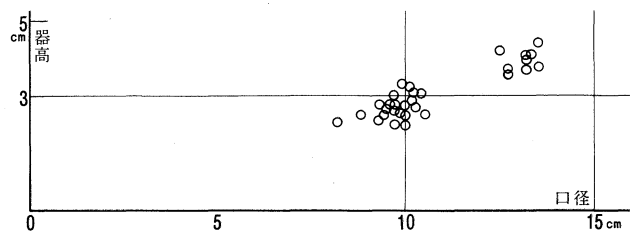
貯蔵具

須恵器	甕			1400	1400	99.6%
緑釉陶器	水注			5	5	0.4%

煮炊具

土師器	長胴甕A			465	1100	
	長胴甕C			15		
	小型甕B			10		
	羽釜A			610		

第54表 SB115出土土器構成表



第231図 SB115土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		2	40	40	1.8%
黒色土器A	杯A	9	3	205	460	21.2%
	碗		2	125		
	皿B		1	30		
	鉢		1	60		
	不明			40		
土師器	杯A II	1~5	21	635	930	43.0%
	碗	6~8	5	110		
	不明			185		
灰釉陶器	碗	10~12	14	475	690	31.7%
	皿B	13・14	5	215		
緑釉陶器	三足盤	15	1	50	50	2.3%

貯蔵具

須恵器	甕			2340	2340	99%
灰釉陶器	瓶			25	25	1%

煮炊具

土師器	長胴甕A	16・17		810	2850	
	長胴甕C			740		
	小型甕B			1300		

第55表 SB116出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		2	20	35	1%
	杯B蓋		2	15		
黒色土器A	碗		3	150	250	8%
	杯A II		4	70		
	不明			30		
土師器	杯A II	1~8	16	695	1885	63%
	碗		10	420		
	盤B II	9	2	285		
	不明			485		
灰釉陶器	碗	12~14	4	285	500	17%
	碗C		1	15		
	皿B		2	10		
	皿C	15	2	110		
緑釉陶器	不明			80	340	11%
	皿B	16	3	30		
	皿C	17・18	2	195		
	耳皿	19	1	115		

貯蔵具

須恵器	甕			550	1415	95%
	壺	11		795		
灰釉陶器	瓶			70	70	5%

煮炊具

土師器	長胴甕A			110	990	
	小型甕B			290		
	羽釜A			590		

第56表 SB118出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II	17	6	110	165	2.0%
	杯B蓋		4	55		
黒色土器A	杯A		2	15	65	0.8%
	碗	16	3	50		
黒色土器B	碗		1	5	5	0.06%
土師器	杯A II	10・11	28	1180	7635	91%
	杯A III	1~9	67	2805		
	碗	14	19	525		
	碗C	12・13	12	415		
	盤B I	15	35	1145		
	盤B II		37	745		
灰釉陶器	不明			820	475	5.4%
	碗	18~20	13	335		
	皿B		1	65		
緑釉陶器	皿C	21・22	3	75	70	0.8%
	碗	23	2	70		

貯蔵具

須恵器	甕			1080	1240	79%
	壺			160		
灰釉陶器	瓶			330	330	21%

煮炊具

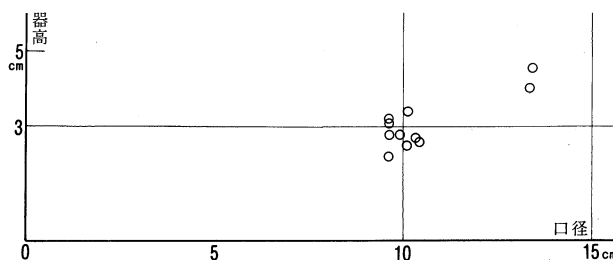
土師器	長胴甕A			190	350	
	長胴甕B			105		
	小型甕B			55		

第57表 SB120出土土器構成表

はd類に分類でき、18・19はc類に分類できる。

SB119 (図版122)

1は黒色土器A杯A I、2は碗である。3は須恵器杯A II、4は杯B、5は鉢である。杯Aの構成よりSB184段階である。6は土師器長胴甕B、7は長胴甕A、8は小型甕Bである。



第234図 SB120土師器杯A法量分布

SB120 (図版122 PL74 第57表 第234図)

土師器杯Aはその法量より、SB84段階である。23の緑釉陶器碗はe類に分類でき、口縁に三角形を刻み下部に指で押し込んだような縦長の輪花がつけられる。

SB121 (図版122)

遺物の出土量が少ない。1は灰釉陶器碗である。

SB122 (図版122 PL74)

1は土師器碗で、この形態はSB94段階あるいはSB52段階にみられる。2・3は灰釉陶器碗、4は皿Cである。5は越州窯系の青磁碗である。

SB123 (図版122)

遺物の出土量が少ない。1は土師器杯A II、2は灰釉陶器皿Bである。杯Aの中に大型がみられないこ

とと法量から土師器杯A IIはSB52段階の可能性が高い。

SB124 (図版122 PL74 第58表)

土師器杯A IIはその法量よりSB84段階である。17と18の羽釜Aは同一個体の可能性がある。15の緑釉陶器三足盤はa類に分類できる。

SB125 (図版123 PL74)

1は土師器杯A II、2は碗である。3・4は黒色土器A杯A II、6は杯A I、5は碗である。杯Aの構成より、SB111段階である。7・8はハケ塗りの灰釉陶器碗、9は小型甕Bである。

SB126 (図版123)

遺物は少ない。1は土師器杯A II、2は碗である。3は黒色土器A杯A II、4・5は碗である。

SB127 (図版123 PL74)

1は土師器杯A II、2・3は碗である。碗はSB94段階あるいはSB52段階にみられる形態であり、杯Aの法量はSB52段階である。

SB128 (図版123 PL74・75)

1・2は黒色土器A碗、3はハケ塗りの灰釉陶器碗、4は土師器小型甕Bである。杯Aには土師器と黒色土器A、須恵器がみられることからSB111段階である。

SB129 (図版123 PL75 第59表 第235図)

土師器杯A IIはその法量より、SB114段階である。11の黒色土器A碗のヘラミガキは十字の暗文風であるが、方向は放射状である。緑釉陶器は14がb類に分類でき、15はg類に分類できる。

SB130 (図版123)

遺物の出土量が少ない。1は須恵器杯蓋である。杯Aは図示できないが、ほとんどが須恵器で、SB258段階である。

食膳具

須恵器	杯A II	11	2	40	45	1.6%
	杯B		1	5		
黒色土器A	碗		6	80	205	8%
	碗C		1	5		
	杯A		4	90		
	不明			30		
土師器	杯A II	6・7	8	430	2030	74%
	杯A III	1~5	18	490		
	碗	8	7	240		
	碗C	9	1	50		
	皿A I		1	20		
	皿A II		1	25		
	盤B I		3	300		
	盤B II	10	1	85		
不明			390			
灰釉陶器	碗	12・13	5	380	440	16%
	皿B	14	2	60		
緑釉陶器	皿B		1	5	10	0.4%
	三足盤	15	1	5		

貯蔵具

須恵器	甕			750	780	95%
	壺			30		
灰釉陶器	瓶			40	40	5%

煮炊具

土師器	長胴甕A			105	1515	
	小型甕B	16		110		
	羽釜A	17・18		1300		

第58表 SB124出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		2	10	10	0.3%
黒色土器A	杯A		3	90	510	17.2%
	碗	10・11	4	340		
	不明			80		
土師器	杯A II	1~5	18	1020	2130	72%
	碗	6~8	9	770		
	盤B I	9	1	30		
	不明			310		
灰釉陶器	碗	12・13	6	235	275	9.3%
	不明			40		
緑釉陶器	碗	14・15	2	35	35	1.2%

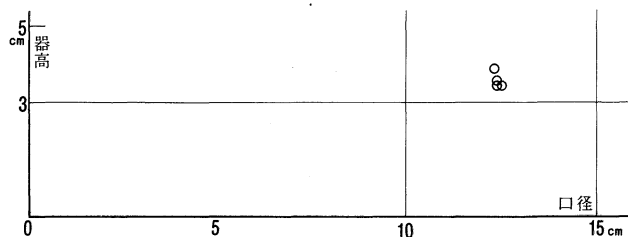
貯蔵具

須恵器	甕			835	835	100%
-----	---	--	--	-----	-----	------

煮炊具

土師器	長胴甕A			85	1105	
	小型甕B	16・17		1020		

第59表 SB129出土土器構成表



第235図 SB129土師器杯A法量分布

SB131 (図版123)

遺物の出土量が少ない。須恵器、土師器がみられる。

SB132 (図版123 PL75 第60表 第236図)

土師器杯A IIIはその法量により、SB74段階である。14は盤B IIに分類したが碗Cの可能性もある。

SB133 (図版124)

1は土師器杯A II、2は黒色土器A碗、3は灰白色軟質の須恵器杯A IIである。5は土師器長胴甕A、6は小型甕Bである。杯Aはその構成よりSB111段階である。

SB134 (図版124 PL75)

1は黒色土器A杯A II、2は須恵器杯B、3は須恵器鉢である。杯Aは須恵器も比較的多くみられることからSB184段階の可能性はある。

SB135 (図版124 PL75 第61表)

杯Aの構成より、SB144段階である。6は土師器鉢で、透かしがある高台が付く可能性がある。

SB136 (図版124)

1は黒色土器A杯A II、2は碗である。3は透かしが入れた鉢の高台部である。4はハケ塗りの灰釉陶器皿Bである。杯Aの構成より、SB144段階である。

SB137 (図版124 PL75)

1は非クロ土師器の内面黒色処理をした杯である。2は須恵器杯A II、3・4は杯蓋である。杯Aは須恵器がほとんどあり、SB258段階である。

SB139 (図版124 PL75 第62表)

杯Aの構成より SB144段階である。須恵器は灰青色硬質(8)と灰白色軟質の二種がある。

SB140 (図版125 PL75 第63表)

土師器杯A IIIはその法量より SB74段階である。18・19は灰釉陶器長頸瓶である。

食膳具

須恵器	杯A II		2	15	35	1.6%
	杯B		1	15		
	杯B蓋		1	5		
黒色土器A	杯A		1	10	50	2.3%
	碗	16	1	40		
土師器	杯A II		4	180	1900	87.1%
	杯A III	1~8	19	590		
	皿A I	11	1	180		
	皿A II	9・10	5	120		
	盤B I	15	2	110		
	盤B II	12~14	6	410		
	不明			310		
灰釉陶器	碗		4	180	195	9%
	碗C	17	1	5		
	皿C	18	1	10		

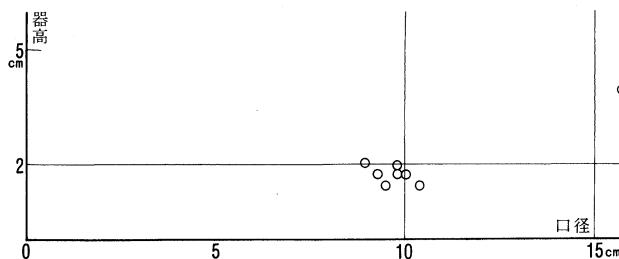
貯蔵具

須恵器	甕			440	440	95%
灰釉陶器	瓶			25	25	5%

煮炊具

土師器	長胴甕A			65	175	
	長胴甕B			30		
	羽釜A			80		

第60表 SB132出土土器構成表



第236図 SB132土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II		3	75	150	14%
	杯B		3	65		
	杯B蓋		1	10		
黒色土器A	杯A	2・3	7	470	620	59%
	碗	4・5	2	150		
土師器	杯A II	1	3	85	270	25.6%
	鉢	6	2	110		
	不明			75		
灰釉陶器	碗		1	10	15	1.4%
	不明			5		

貯蔵具

須恵器	甕			700	2000	99.3%
	壺	7		130		
灰釉陶器	瓶			15	15	0.7%

煮炊具

土師器	長胴甕A			370	405	
	小型甕B	8		35		

第61表 SB135出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II	8、9	5	345	530	35.7%
	杯B		2	60		
	杯B蓋		5	105		
	鉢	12	1	20		
黒色土器A	杯A	1~7	17	825	945	63.6%
	不明			120		
土師器	杯A II		1	10	10	0.7%

貯蔵具

須恵器	甕			1220	1445	100%
	壺			225		

煮炊具

土師器	長胴甕A	10・11		2950	3150	
	長胴甕B	13		160		
	小型甕B	14		40		

第62表 SB139出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A		3	20	45	1.2%
	杯B蓋		3	25		
黒色土器A	碗	12	2	80	80	2.2%
黒色土器B	皿	13	1	5	5	0.1%
土師器	杯A II	7	11	690	2530	70.5%
	杯A III	1~6	22	855		
	碗	9	2	130		
	碗C	8	2	115		
	盤B I	10・11	3	265		
	盤B II		1	10		
灰釉陶器	碗	14~17	12	780	925	26%
	碗C		1	5		
	皿B		1	5		
	皿C		1	5		
	不明			130		

貯蔵具

須恵器	甕			810	980	34%
	壺			170		
灰釉陶器	瓶	18~20		1900	1900	66%

煮炊具

土師器	長胴甕A			375	375	
-----	------	--	--	-----	-----	--

第63表 SB140出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		3	90	130	2.4%
	杯B		2	35		
	杯B蓋		1	5		
黒色土器A	杯A		1	5	175	3%
	碗	16	2	70		
	碗C	15	2	100		
黒色土器B	碗C	17	1	70	175	3%
	耳皿	18	1	105		
土師器	杯A II	8・9	5	370	3900	71%
	杯A III	1~7	36	1530		
	碗		3	130		
	碗C	10~12	12	760		
	盤B I	13・14	5	465		
	盤B II		1	15		
灰釉陶器	碗	19~23	9	860	1120	20.3%
	碗C	24	1	70		
	皿C	25~27	5	190		
緑釉陶器	碗	28	1	10	15	0.3%
	皿B		1	5		

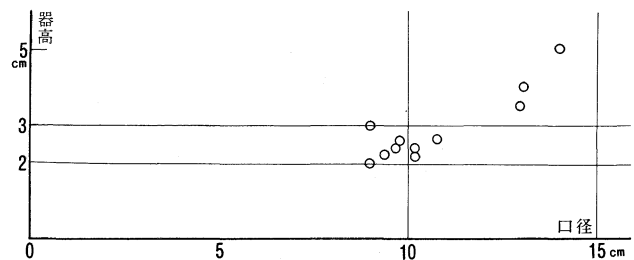
貯蔵具

須恵器	甕			500	555	48%
	壺			55		
灰釉陶器	瓶	29・30		600	600	52%

煮炊具

土師器	長胴甕A			105	2255	
	羽釜A			190		
	甌	31		1960		

第64表 SB141出土土器構成表



第237図 SB141土師器杯A法量分布

SB141 (図版125・126 PL76 第64表 第237図)

土師器杯A IIIはその法量より、SB74段階である。18は黒色土器Bの耳皿で、底部裏面を除きヘラミガキが施される。28はe類に分類される緑釉陶器碗である。

SB142 (図版126 PL76 第65表 第238図)

土師器杯A IIIはその法量より、SB32段階である。26は少なくとも3箇所以上に把手がつけられる。

SB143 (図版126)

1・2は黒色土器A碗、3は灰釉陶器皿Cである。

SB144 (図版127 PL76・77 第66表 第239図)

杯AはSB144段階を設定した基準資料である。須恵器は灰青色硬質(23)と灰白色軟質(22・24)の二種があ

る。16の黒色土器A碗は輪状高台がつけられ、越州窯系の青磁碗を模倣したようである。

SB145 (図版127 PL77)

1は内面を横方向のハケ調整で仕上げた非ロクロの小型の杯である。2は須恵器杯A III、3～6は須恵器杯蓋で、その内6は美濃須衛窯産である。図示しないが杯Aの構成よりSB258段階である。

SB146 (図版127)

1は須恵器杯A II、2は黒色土器A杯A II、3は長胴甕A、4は小型甕Aである。

SB147 (図版128)

1は黒色土器A杯、2は碗である。3・4は灰釉陶器碗である。

SB148 (図版128)

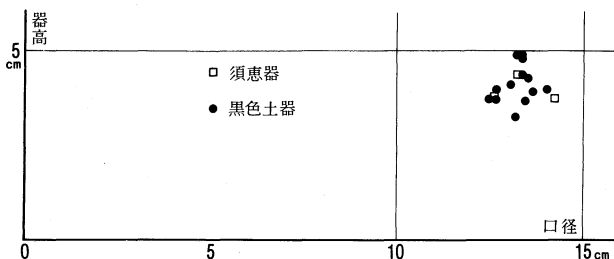
1は黒色土器A碗、2は土師器鉢、3は灰釉陶器碗である。

SB149

遺物の出土量が少ない。土師器や須恵器がみられる。

SB150 (図版128 PL77)

1は土師器杯A II、2は碗である。3・4は黒色土器A杯A IIで、4は内面のヘラミガキは十字に1回行われるのみである。5・6は灰釉陶器碗、7は須恵器壺、8は土師器小型甕Cである。杯Aは量は少ないがその構成より、SB114段階である。



第239図 SB144杯A法量分布図分布

食膳具

須恵器	杯A II		2	40	70	1%
	杯B		1	20		
	杯B蓋		1	10		
黒色土器A	杯A		2	40	370	7%
	碗	19・20	3	250		
	不明			80		
	不明					
土師器	杯A II	10~12	30	995	4235	83%
	杯A III	1~9	39	1640		
	碗	13・14	5	335		
	碗C	15・16	7	350		
	盤B I	18	2	130		
	盤B II	17	1	85		
	不明			700		
灰釉陶器	碗	21・22	3	175	435	9%
	皿B	23	2	80		
	皿C	24・25	3	90		
	不明			90		

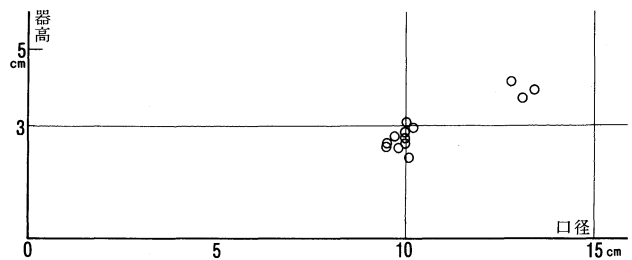
貯蔵具

須恵器	甕			210	225	100%
	壺			15		

煮炊具

土師器	長胴甕A			130	1365	
	小型甕B	27		100		
	羽釜	26・28		1135		

第65表 SB142出土土器構成表



第238図 SB142土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II	22~24	19	585	660	20%
	杯B		1	10		
	杯B蓋		4	45		
	不明			20		
黒色土器A	杯A	1~15	33	1510	2650	80%
	碗	16~18	8	685		
	皿B	19~21	5	145		
	不明			310		

貯蔵具

須恵器	甕	25		4800	5135	100%
	壺			335		

煮炊具

土師器	長胴甕A			6340	6700	
	小型甕B	26~28		360		

第66表 SB144出土土器構成表

SB154 (図版128 PL77)

1・2は土師器杯A II、3は椀である。4は黒色土器杯A II、5は椀C、6は皿Bである。7は灰釉陶器椀、8は皿Bである。

SB155

遺物の出土量が少ない。土師器、灰釉陶器がある。

SB156 (図版128 PL77)

1・2は土師器杯A III、3・4は杯A II、5は盤B Iである。杯A IIIはその法量よりSB32段階である。6・7は灰釉陶器椀である。8は羽釜Aで全体のわかる唯一のものである。

SB157 (図版128)

1・2は須恵器杯A IIである。杯Aの構成より、SB258段階である。3～5は土師器長胴甕Aであり、底部は周囲を横方向のハケ調整で仕上げたものもみられる。

SB158 (図版129 PL78)

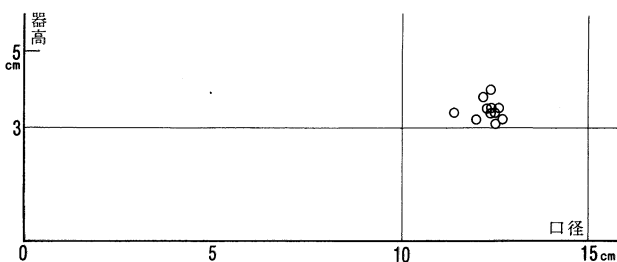
1は土師器杯A IIで、その法量よりSB94あるいはSB52段階である。2は黒色土器A椀C、3は椀である。4は土師器小型甕C、5は足釜の脚部である。

SB159 (図版129 第67表 第240図)

土師器杯A IIはその法量より、SB114段階である。土師器はいずれも薄手硬質である。17の緑釉陶器椀はd類に分類できる。18は灰釉陶器長頸瓶である。

SB160 (図版129 PL78 第68表 第241図)

土師器杯A IIはその法量よりSB114段階である。しかし、杯A IIの黒色土器Aの割合が高い。黒色土器の内面のヘラミガキは粗雑である。



第241図 SB160土師器法量分布

食膳具

須恵器	杯A		2	50	50	2%
黒色土器A	杯A		13	410	865	29%
	椀	10	8	385		
	不明			70		
土師器	杯A	1~7	24	875	1720	59%
	椀	8・9	7	215		
	蓋	11	1	35		
	不明			595		
灰釉陶器	椀	12	9	225	275	9%
	皿B	13~16	1	25		
	不明			25		
緑釉陶器	椀	17	1	30	30	1%

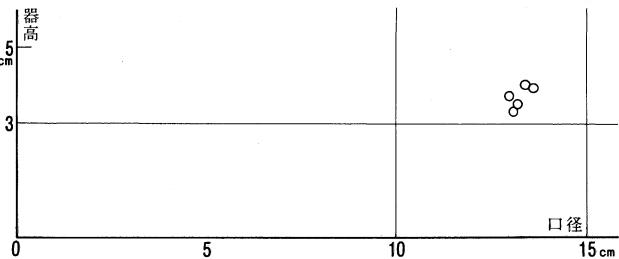
貯蔵具

須恵器	甕			945	1260	97%
	壺			315		
灰釉陶器	瓶	18		35	35	3%

煮炊具

土師器	長胴甕A			30	930	
	長胴甕B			150		
	小型甕B			750		

第67表 SB159出土土器構成表



第240図 SB159土師器杯A法量分布

食膳具

黒色土器A	椀	16		200	570	17%
	杯A II	13~15		290		
	不明			80		
土師器	杯A II	1~12	27	1650	2165	64%
	椀		4	85		
	鉢		2	45		
	不明			385		
灰釉陶器	椀	17・18	5	400	630	19%
	皿B	19	3	200		
	不明			30		

貯蔵具

須恵器	甕			3060	3060	98%
灰釉陶器	瓶			55	55	2%

煮炊具

土師器	長胴甕C			145	200	
	小型甕B			55		

第68表 SB160出土土器構成表

SB161 (図版129 PL78)

1・2は土師器盤B I、3は黒色土器A杯A II、4は碗である。5は灰釉陶器碗、6は土師器羽釜Aである。

SB162 (図版130 PL78)

1・2は須恵器杯B III、3は杯B I、4・5は杯蓋である。図示しないが杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。

SB163 (図版130 PL78)

1～3は土師器杯A III、4は土師器杯A II、5・6は盤B Iである。杯A IIIはその法量よりSB74段階である。なお、4の底部には焼成後に径5mmほどの穴が2箇所にあけられる。

SB164 (図版130 PL78 第69表)

杯Aはその構成より、SB144段階である。12の土師器長胴甕Aは頸部に強いナデが入れられ口縁が肥大化する。

SB165 (図版130)

1・2は須恵器杯A IIである。杯A IIはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。

SB166 (図版130 PL78)

1～3は黒色土器A杯A II、4は碗である。5・6は須恵器杯A II、7は灰釉陶器皿Bである。杯Aはその法量より、SB144段階である。8・9は外面が荒れているが長胴甕A、10は底部がつけられず筒状で、外面をハケ調整し底部周辺をヘラケズリで仕上げ内面に輪積み痕を残す。

SB167 (図版131 PL78 第70表 第242図)

土師器杯A IIIはその法量より、SB32段階である。口縁端部を面取りするもの、しないものの二種がある。なお39～41は特に大法量の碗である。

SB168 (図版131 PL78)

1～3は須恵器杯Aに、4は盤状になると思われ、5は皿Bである。杯A IIはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。6は土師器長胴甕Bである。

食膳具

須恵器	杯A II		2	30	65	6.3%
	杯B		1	25		
	杯B蓋		1	10		
黒色土器A	杯A	1～8	15	620	945	92.2%
	碗	9・10	2	285		
	不明			40		
灰釉陶器	碗		2	15	15	1.5%

貯蔵具

須恵器	甕			250	250	81%
灰釉陶器	瓶			60	60	19%

煮炊具

土師器	長胴甕A	12		1100	1540	
	小型甕B	11		440		

第69表 SB164出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		1	10	60	0.6%
	杯B		2	45		
	杯B蓋		1	5		
黒色土器A	杯A II		2	45	185	2%
	碗	47	2	120		
	不明			20		
土師器	杯A II	20～35	23	2510	8410	89.3%
	杯A III	1～19	37	2310		
	碗	36～41	10	1720		
	碗C	42・43	7	410		
	皿A II	46	2	70		
	盤B I	44・45	4	530		
	不明			860		
灰釉陶器	碗	48	6	530	765	8.1%
	碗C	49	1	110		
	皿B		3	20		
	皿C	50	2	105		

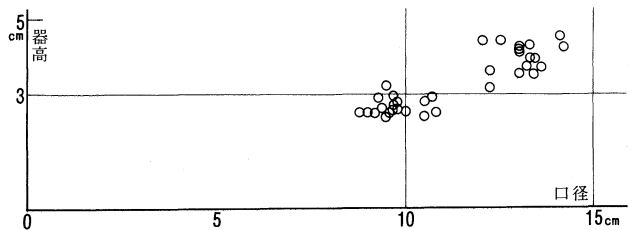
貯蔵具

須恵器	甕			130	130	70%
灰釉陶器	瓶			55	55	30%

煮炊具

土師器	長胴甕A			400	820	
	羽釜A			420		

第70表 SB167出土土器構成表



第242図 SB167土師器杯A法量分布

SB169 (図版132)

1～3は土師器杯AⅢ、4は杯AⅡ、5は碗、6・7は盤BⅠである。8は灰釉陶器碗、9は皿Cである。10はc類に分類できる緑釉陶器皿Bである。

SB170 (図版132 PL78)

1は黒色土器A杯AⅡ、2～4が碗、5は皿Bである。6は灰白軟質の須恵器杯AⅡ、7は茶褐色硬質の須恵器杯AⅡである。8は小型甕B、9は長胴甕Aである。10は灰釉陶器手付き瓶で、猿投窯産である。

SB171 (図版132)

遺物の出土量が少ない。1は灰釉陶器碗である。

SB172 (図版132 PL78 第71表)

杯Aの構成より、SB144段階である。9は扁平である。

SB173

遺物の出土量は少ない。土師器がみられる。

SB174 (図版132 PL78・79 第72表)

杯Aの構成より、SB258段階である。10は美濃須衛窯産である。12の長胴甕Aは口縁部が強く外反する。

SB175 (図版133 PL79)

1～3は須恵器杯AⅡ、4～6は杯BⅢ、7・8は杯蓋である。杯Aはその構成よりSB258段階である。9は土師器長胴甕Cでほぼ全体のわかる唯一のものである。

SB176 (図版133)

遺物の出土量が少ない。1は土師器長胴甕Cである。

SB177 (図版133)

遺物の出土量が少ない。1は土師器杯AⅡであり、その法量はSB94あるいはSB52段階である。

SB178 (図版133 PL79)

1・2は土師器杯AⅢ、3は杯AⅡ、4は碗、5は皿AⅠ、6は盤BⅠである。杯AⅢはその法量よりSB74あるいはSB31段階である。

SB179 (図版133 PL79)

1・2は土師器杯AⅢ、4は盤BⅡ、6は皿AⅠ、7は盤BⅠである。杯AⅢはその法量より、SB74あるいはSB31段階である。3・5は灰釉陶器碗である。

食膳具						
黒色土器A	杯AⅡ		1	50	1245	100%
	杯A	1～11	12	875		
	碗		1	20		
	皿B		2	100		
	不明			200		

貯蔵具						
須恵器	甕			510	510	100%

煮炊具						
土師器	長胴甕A	12		755	755	

第71表 SB172出土土器構成表

食膳具						
須恵器	杯AⅡ	1・2	7	395	1785	100%
	杯B	3～8	17	820		
	杯B蓋	9・10	12	430		
	不明			140		

貯蔵具						
須恵器	甕			2005	2310	100%
	壺蓋	11		305		

煮炊具						
土師器	長胴甕A	12		4600	5470	
	長胴甕C			720		
	小型甕A	13・14		150		

第72表 SB174出土土器構成表

SB180 (図版133)

遺物の出土量が少ない。1は灰釉陶器碗である。

SB181 (図版133 PL79)

1・2は土師器杯A II、3～6は黒色土器A杯A II、7～9は灰白色軟質の須恵器杯A IIである。杯A IIの構成より、SB111段階である。10～12はハケ塗りの灰釉陶器で、10・12は皿B、11は碗である。

SB182 (図版133)

遺物の出土量が少ない。1は黒色土器A杯A I、2は杯A IIである。3はハケ塗りの灰釉陶器皿Bである。杯Aは図示しながい須恵器と土師器もあり、SB111段階である。

SB183 (図版134 PL79 第73表)

杯Aの構成と土師器の法量より、SB114段階である。

SB184 (図版134 PL79 第74表 第243図)

杯AはSB184段階を設定した基準資料である。須恵器はいずれも灰青色硬質である。また、12の杯Bは体部の稜が不明確である。14の灰釉陶器長頸瓶は猿投窯産である。20の長胴甕Aは口縁部が強く外反する。

SB185 (図版135 PL79)

1は土師器杯A II、2・3は碗である。4は黒色土器A杯A Iである。杯Aの構成および土師器の法量より、SB114段階である。5は灰釉陶器皿B、6は碗である。

SB186 (図版135 PL79)

1・2は土師器杯A II、3は碗である。杯A IIはその法量より、SB52段階である。4は黒色土器A碗、5は杯A IIである。いずれも内面のヘラミガキは暗文状である。6～9は灰釉陶器碗、10・11は皿Bである。12は緑釉陶器の大型の碗で、c類に分類できる。

SB187 (図版135 PL80 第75表 第244図)

土師器杯A IIIはその法量より、SB84段階である。23の灰釉陶器長頸瓶は体部にヘラ状工具による刻みがみられる。35は土師器の鉢で、外面全体をヘラケズリしている。

食膳具

須恵器	杯A II		3	40	80	3%
	杯B		3	40		
黒色土器A	杯A II	8	2	60	810	34%
	碗	9	3	360		
	鉢	10	1	250		
	不明			140		
土師器	杯A II	1~4	7	630	1190	50%
	碗	5~7	3	190		
	不明			370		
灰釉陶器	碗	11	2	150	315	13%
	皿B	12	2	120		
	不明			45		

貯蔵具

須恵器	甕			285	285	100%
-----	---	--	--	-----	-----	------

煮炊具

土師器	長胴甕A			90	810	
	羽釜A	13		720		

第73表 SB183出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II	7~10	23	620	1075	49.2%
	杯B	12	10	350		
	杯B蓋	11	7	105		
移入須恵器	杯B		1	20	95	4.3%
	杯B蓋		1	75		
黒色土器A	杯A	1~5	15	750	970	44.4%
	皿	6	2	35		
	蓋		1	30		
	不明			155		
黒色土器B	碗		1	45	45	2.1%

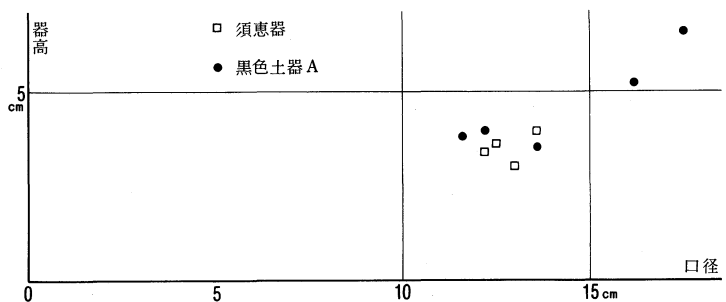
貯蔵具

須恵器	甕	13		1600	3250	91%
	壺	15・16		1650		
移入須恵器	甕			20	20	0.6%
灰釉陶器	瓶	14		300	300	8.4%

煮炊具

土師器	長胴甕A	20		2135	2770	
	長胴甕B	19		330		
	小型甕B	17・18		305		

第74表 SB184出土土器構成表



第243図 SB184杯A法量分布

SB188 (図版136 PL80・81)

1～3は黒色土器A杯A II、4は杯A I、5は碗、6は皿Bである。7は須恵器杯A IIである。杯Aはその構成より、SB144段階である。8・9はともに内面のみ施釉し重ね焼き痕をもつ灰釉陶器で、8は碗、9は皿Cである。10は須恵器の甕である。

SB189 (図版136 PL81 第76表)

杯Aはその構成より、SB144段階である。黒色土器A杯Aは法量よりさらに、A II(1~7)、A I(8・9)と分けることができる。

SB190 (図版136)

遺物の出土量が少ない。1は土師器である。

SB191 (図版137 PL81 第77表 第245図)

土師器杯A IIはその法量から、SB114あるいはSB94段階である。黒色土器Aは内面のヘラミガキが粗雑で、暗文状のものもみられる。

SB192 (図版137 PL81)

1～3は土師器杯A II、4・5は碗である。杯A IIはその法量よりSB94段階である。6は灰釉陶器碗、7は皿Bである。8は外面をハケ調整した須恵器甕であるが、成形はタタキのようである。9は長胴甕C、10は小型甕である。

食膳具

須恵器	杯A II		4	70	100	4.7%
	杯B		1	15		
	杯B蓋		1	15		
黒色土器A	杯A	1~9	14	1325	2020	95%
	碗	10・11	4	540		
	皿B		1	25		
	不明			130		
灰釉陶器	碗		1	5	5	2.3%

貯蔵具

須恵器	甕			190	385	86.5%
	壺	13		195		
灰釉陶器	瓶	12		60	60	13.5%

煮炊具

土師器	長胴甕A	14~16		1640	1750	
	長胴甕B			80		
	小型甕			30		

第76表 SB189出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II		4	45	120	2%
	杯B		1	75		
黒色土器A	碗		3	120	190	4%
	不明			70		
土師器	杯A II	7~10	12	845	2960	61%
	杯A III	1~6	20	880		
	碗		6	255		
	碗C	11	2	75		
	盤B I	12	4	635		
	不明			270		
灰釉陶器	碗	13~15	7	890	1615	33%
	皿B	16~19	7	340		
	皿C	20~22	4	330		
	不明			55		

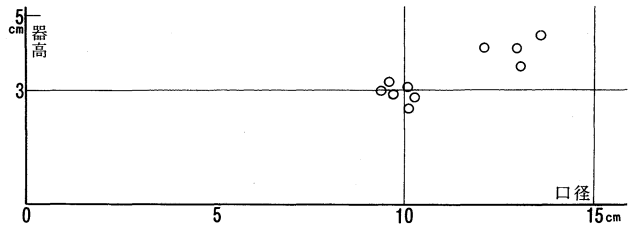
貯蔵具

須恵器	甕			300	300	30%
灰釉陶器	瓶	23		700	700	70%

煮炊具

土師器	鉢	25		330	1870	
	羽釜A	24		1540		

第75表 SB187出土土器構成表



第244図 SB187土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A		1	10	30	0.9%
	杯B		2	20		
黒色土器A	杯A		5	125	485	14%
	碗	11・12	5	250		
	不明			110		
土師器	杯A II	1~5	25	885	2095	61%
	碗	6~8	8	410		
	皿B	10	1	50		
	盤B II	9	1	80		
	鉢		1	280		
	不明			390		
灰釉陶器	碗	13~15	8	760	815	24%
	碗C		1	5		
	皿B	16	2	50		
緑釉陶器	皿B		1	5	5	0.1%

貯蔵具

須恵器	甕			1475	1515	67%
	壺			40		
灰釉陶器	瓶	18		735	735	33%

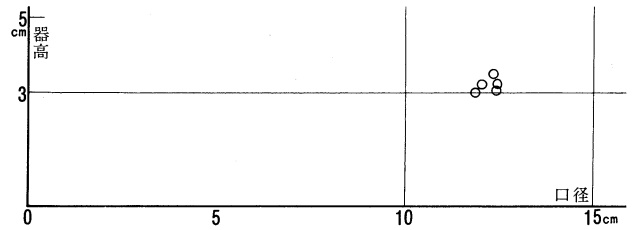
煮炊具

土師器	長胴甕A			330	935	
	小型甕A	17		300		
	小型甕B			195		
	羽釜			110		

第77表 SB191出土土器構成表

SB193 (図版137 PL81)

1は土師器杯A II、2は黒色土器A杯A IIである。杯Aはその構成よりSB111段階である。3はハケ塗りの灰釉陶器碗、4は土師器小型甕Bである。



第245図 SB191土師器杯A法量分布

SB194 (図版138 PL82)

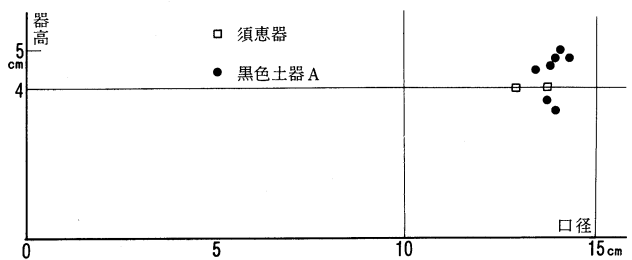
1・2は黒色土器A杯A I、3は碗、4は皿Bである。杯Aはその構成より、SB144段階である。5～7は土師器長胴甕A、8は小型甕Bである。

SB195 (図版138)

1～3は土師器碗で、この形態はSB114段階に多くみられる。4～6は灰釉陶器皿Bである。7は黒色土器A碗Cで、内面のヘラミガキは暗文状である。

SB196 (図版138 PL82 第246図)

1～6は黒色土器A杯A II、7は碗である。8・9は灰白色軟質の須恵器杯A IIであり、両者ともに黒斑をもつ。杯Aはその構成より、SB144段階である。10は口縁端部を面取りし、外反させる土師器鉢である。11・12はハケ塗りの灰釉陶器碗である。13は長胴甕Aである。



第246図 SB196杯法量分布

SB197 (図版138 PL82)

1は黒色土器A碗、2～4は灰白色軟質の須恵器杯A IIである。杯Aは図示しないが黒色土器Aがあり、SB144段階である。5・6はハケ塗りの灰釉陶器で、5は皿B、6は碗である。7は黒色土器Aの小型甕で、外面はロクロ調整で仕上げられる。8は小型甕B、9は粗いハケ調整がされる長胴甕Aである。

SB198 (図版139)

1～3は須恵器杯A IIである。杯Aはほとんどが須恵器であり、SB258段階である。4は土師器長胴甕Aである。

SB199 (図版139 PL82第78表)

2～6の須恵器杯A IIの中で、5・6はヘラ切りである。このことからSB01段階である。杯Bはその法量より、7はB III、9はB II、10・11はB Iに分けられる。

食膳具

須恵器	杯A II	2～6	13	610	1710	95%
	杯B	7～11	19	630		
	杯B蓋	12～14	10	470		
移入須恵器	杯B	16	1	20	30	2%
	杯B蓋		2	10		
黒色土器A	杯A	1	1	20	20	1%
土師器	甲斐型杯	15	1	30	30	2%

貯蔵具

須恵器	甕	17		840	900	100%
	壺			60		

煮炊具

土師器	長胴甕A			1920	1920	
-----	------	--	--	------	------	--

第78表 SB199出土土器構成表

SB200 (図版139 PL82)

1は黒色土器A杯A IIである。2～5は須恵器杯A II、6は杯B I、7は杯蓋である。杯Aの構成より、SB258段階である。8は土師器長胴甕A、9は須恵器甕である。

SB201 (図版139・140 PL82)

1～4は非ロクロ土師器の杯である。1は内面をヘラミガキし、外面はヘラケズリをしている。2は内外面ともにヘラミガキで仕上げている。ともに底部には木葉痕を残している。4は内面を横方向のヘラミガキで仕上げ、外面には縦方向のハケ調整がなされる。5・6・8は小型甕Aで底部裏面を含めた全体をハケ調整で仕上げている。7は粗いハケ調整が施こされた長胴甕Aである。

SB202 (図版140 PL82)

1～4は土師器皿A II、5は皿A I、6は盤B IIである。7は黒色土器A碗Cである。杯Aは図示できるものはないが、SB74段階である。

SB203 (図版140 PL82)

1～4は土師器杯A III、6は盤B IIである。5は黒色土器A杯A II、7は碗である。杯A IIはその法量より、SB74段階である。

SB204 (図版140)

遺物の出土量が少ない。1は土師器盤B II、2は黒色土器B碗Cである。

SB205

遺物の出土量が少ない。土師器、須恵器がみられる。

SB206

少量の遺物が出土したのみである。

SB207 (図版140 PL82)

1～7は土師器杯A III、8は杯A II、9・10は碗Cである。11・12は灰釉陶器碗である。杯A IIIはその法量より、SB31段階である。13は灰釉陶器広口瓶、14は土師器小型甕C、15は羽釜Aである。

SB209 (図版140・141 PL83)

1・2は土師器杯A IIで、その法量より、SB94段階である。3は土師器碗、4は黒色土器A杯A IIである。5～7は灰釉陶器碗で、5・6は口縁に輪花がつけられる。8～10は皿Bである。11は須恵器壺である。

SB210 (図版141 PL83)

1・2は土師器杯A IIで、2は焼成後に径5mmほどの穴が3箇所あけられている。4・5は黒色土器A杯A I・A IIであり、3は碗である。6は灰釉陶器碗である。7は須恵器の長頸壺であり、焼成は軟質で外面底部近くと頸部内面には、横方向のヘラミガキがなされている。

SB211 (図版141 PL83)

1は土師器碗、2は黒色土器A碗、3は灰釉陶器碗、4は土師器羽釜である。杯Aは図示できるものはないが、SB84段階である。

SB212 (図版141 PL83)

遺物の出土量が少ない。1は黒色土器A皿Bである。

SB213 (図版141 PL83)

1は黒色土器A杯A I、2は杯A IIである。3は須恵器杯A IIである。杯A IIはその構成よりSB144段階である。4は土師器小型甕B、5は長胴甕Aである。

SB214 (図版141 PL83)

遺物の出土量が少ない。1は土師器小型甕Aである。外面は器面が剥落している。

SB215 (図版142 PL83)

1は黒色土器A杯A II、2は軟質の須恵器杯A IIである。杯Aはその構成より、SB111段階である。4は土師器小型甕B、5は長胴甕Aで外面肩部と内面のハケ調整は省略されている。

SB216 (図版142 PL83 第79表 第247図)

杯A IIIはその法量より、SB32段階である。24は土師器の椀の中でも特に大型である。33の鉢には高台がつく。

SB217 (図版143)

1は土師器杯A、2は黒色土器A杯A I、3は灰釉陶器皿Bである。

SB218 (図版143)

1は須恵器杯Aである。杯Aはすべて須恵器であり、SB258段階と思われる。

SB219 (図版143 PL83)

1は須恵器杯A II、2は杯B、3・4・5は杯蓋、7は須恵器鉢である。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階と思われる。

SB220 (図版143)

遺物の出土量が少ない。1は灰釉陶器椀である。

SB221 (図版143)

1は土師器椀、2は土師器小型甕Bである。

SB222 (図版143)

1・2は土師器杯A II、その法量よりSB114段階である。3は灰釉陶器椀、5は土師器小型甕Bである。

食膳具

須恵器	杯A II		1	15	15	0.2%
黒色土器	杯A		1	20	250	3.5%
	椀	32	3	200		
	不明			30		
土師器	杯A II	14~23	20	1680	6380	90%
	杯A III	1~13	18	1030		
	椀	24~26	3	230		
	椀C		1	30		
	鉢	33	2	1360		
	盤B I	27~31	8	1210		
	不明			840		
灰釉陶器	椀	34	4	265	450	6.3%
	皿C	35・36	4	185		

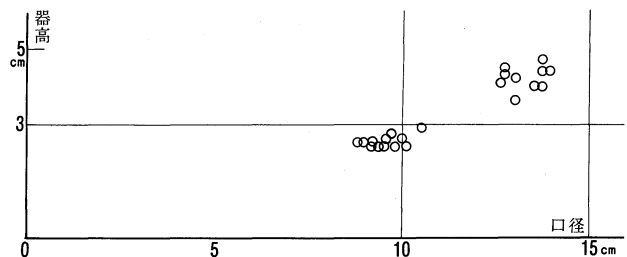
貯蔵具

須恵器	壺			45	45	56%
灰釉陶器	壺			35	35	44%

煮炊具

土師器	長胴甕A			45	435	
	小型甕B	37		390		

第79表 SB216出土土器構成表



第247図 SB216土師器杯A法量分布

4は口径25cmを測る大形の白磁鉢で、白色の胎土で外面底部を除き透明釉が掛けられる。

SB224 (図版143)

1・2は須恵器杯A II、3～5は杯Bで3・4はB Iに分けられる。6・7は須恵器杯蓋、8は鉢である。9は土師器長胴甕Aである。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。

SB225 (図版144)

1は土師器杯A III、2は杯A II、3は椀、4は大型の盤B I、5は羽釜Aである。

SB226 (図版144 PL84 第80表 第248図)

1は黒色土器A杯A II、2はA Iにわけられる。杯Aの構成より、SB184段階である。長胴甕Aは比較的頸部が短かく、8のように底部周囲をハケで再調整したものもみられる。

SB227 (図版144・145 PL84・85 第81表)

移入須恵器、特に美濃須衛窯産の割り合いが圧倒的に多い。杯Aをみると、すべてヘラ切りで、1と3のように二法量ある可能性がある。長胴甕は20のような全体をハケ調整するAと、縦方向のナデ調整をするXの二種がある。後者には木葉痕が残る。

SB228 (図版145)

遺物の出土が少ない。1は須恵器鉢である。

SB229

遺物の出土量が少ない。土師器、須恵器、黒色土器Aがみられる。

SB230 (図版145)

1～3は須恵器杯A II、4は杯B I、5～7は杯蓋である。杯Aはそのほとんどが須恵器であり、SB258段階である。

SB231

遺物の出土量が少ない。土師器がみられる。

SB232 (図版146 PL85 第82表 第249図)

土師器杯A IIIは、その法量より、SB32段階である。

食膳具

須恵器	杯A II	3~6	7	650	720	59.5%
	杯B		1	20		
	杯B蓋		2	50		
黒色土器A	杯A	1・2	3	360	490	40.5%
	不明			130		

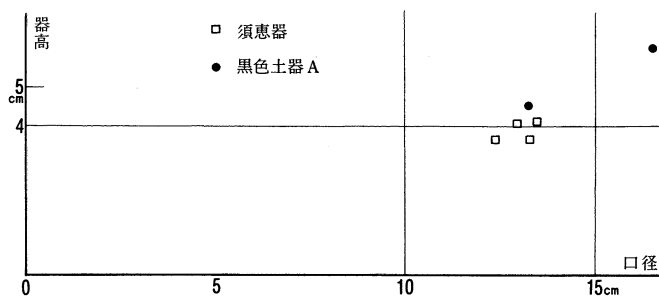
貯蔵具

須恵器	甕			120	135	100%
	壺			15		

煮炊具

土師器	長胴甕A	7~9		2305	2305	
-----	------	-----	--	------	------	--

第80表 SB226出土土器構成表



第248図 SB226杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A	1~4	15	420	1495	33%
	杯B	5~7	10	340		
	杯B蓋	8・9	19	395		
	鉢	15・17・18	3	130		
	不明			210		
移入須恵器	杯A	10	12	515	3010	67%
	杯B	12・13	6	410		
	杯B蓋	11	8	360		
	盤A	14		35		
	不明			1690		

貯蔵具

須恵器	甕			2925	3615	100%
	壺	16・19		690		

煮炊具

土師器	長胴甕A	20		4665	9795	
	長胴甕X	21		4830		
	小型甕A	22		300		

第81表 SB227出土土器構成表

それらの口縁部の形態は、端部を面取りするもの(1・6・7)としないものの二種がみられる。27の盤B IIは特に大型である。煮炊具は、羽釜A・甑・小型甕の三種類がみられる。甑(36)は内面が剥落している。

SB233 (図版146)

1は土師器杯A II、2は十字の暗文状にヘラミガキをいれた黒色土器A杯A II、3は土師器碗である。杯A IIはその法量より、SB94段階である。

SB234 (図版147 PL85 第83表 第250図)

黒色土器A杯Aは法量より、A I(4~6)とA II(1~3)にわけられる。12の皿Bは底部裏面を除き丁寧にヘラミガキがされる。杯Aはその構成より、SB144段階である。土師器長胴甕の頸部は比較的長く強く外反する。16は非クロ土師器の小型の杯であり、口縁にススが付着しており、灯明皿としての使用が考えられる。

SB235 (図版148 PL85)

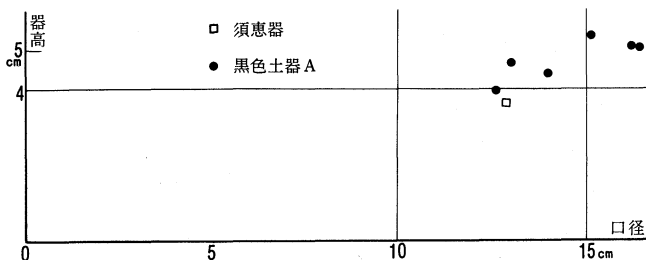
1・2は土師器杯A III、3~5は灰釉陶器皿C、6は灰釉陶器碗Cである。杯A IIIはその法量より、SB32段階である。7は土師器羽釜Aで、口縁部を大きく外反させる。

SB236 (図版148)

遺物の出土量が少ない。1・2は土師器杯A、3は灰釉陶器碗である。

SB237 (図版148 PL86)

遺物の出土量が少ない。1・2は土師器杯A IIである。3・4は灰釉陶器碗である。碗A IIはその法量より、SB94あるいはSB52段階である。



第250図 SB234杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A		6	100	100	1.6%
黒色土器B	碗C	30	1	10	10	0.2%
土師器	杯A II	13~19	17	1265	5605	89.6%
	杯A III	1~12	28	1570		
	碗C	20~24	8	450		
	盤B I	26~29	6	1240		
	盤B II	25	2	85		
不明				995		
灰釉陶器	碗	31	5	170	540	8.6%
	皿B	33・34	2	90		
	皿C	32	4	265		
	不明					

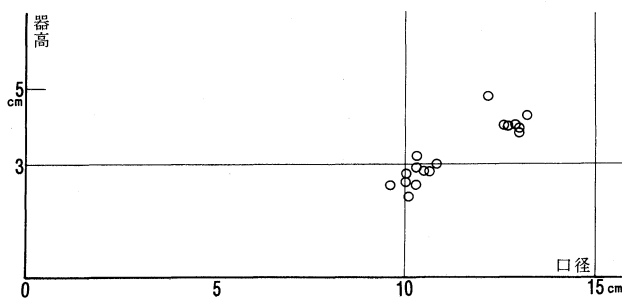
貯蔵具

須恵器	甕			150	170	94%
	壺			20		
灰釉陶器	壺			10	10	6%

煮炊具

土師器	小型甕B	37		325	2955	
	羽釜A	35		1830		
	甑	36		800		

第82表 SB232出土土器構成表



第249図 SB232土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A II	14・15	7	205	285	19%
	杯B		2	35		
	杯蓋B		4	45		
黒色土器A	杯A	1~10	16	730	995	66%
	碗	11	9	195		
	皿B	13	4	70		
土師器	不明	16		120	120	8%
黒色土器B	皿B	12	1	105	105	7%
土師器	不明			5	5	1%

貯蔵具

須恵器	壺	17		680	680	100%
-----	---	----	--	-----	-----	------

煮炊具

土師器	長胴甕A	18~22		8280	9950	
	長胴甕C	23		760		
	小型甕B	24~26		910		

第83表 SB234出土土器構成表

SB238 (図版148)

遺物の出土量が少ない。1は土師器杯A IIで、その法量より SB52段階である。

SB239 (図版148)

遺物の出土量が少ない。1は土師器杯A IIで、その法量より、SB94あるいはSB52段階である。

SB240 (図版148)

遺物の出土量が少ない。1は美濃須衛窯産の須恵器杯蓋、2は土師器長胴甕Aである。杯Aはそのほとんどが須恵器であるが、底部の切り離しが不明ながら、SB258段階あるいはSB01段階である。

SB241 (図版148)

1は須恵器杯B、2は美濃須衛窯産の杯蓋である。杯Aはその構成より、SB258段階である。

SB242 (図版148 PL86)

1は須恵器杯蓋、2は美濃須衛窯産の杯Aである。杯Aはその構成より、SB258段階である。

SB243 (図版148 PL85・86)

1は黒色土器A杯A I、2～6は須恵器杯A II、7は須恵器壺である。杯Aはその構成より、SB184段階である。

SB244 (図版148)

1は黒色土器A杯A、2～5は土師器碗である。碗の形態はSB114あるいはSB94段階にみられるものである。6・7は灰釉陶器碗、8は皿B、9は皿Cである。10・11は土師器小型甕Bである。

SB245 (図版148)

1は土師器碗、2は小型甕Bである。

SB246 (図版149・150 PL85・76)

1は黒色土器A杯A、3は碗、2は軟質の須恵器杯A IIである。4は灰釉陶器碗、5は須恵器壺である。煮炊具の出土量が多い。6～13は長胴甕Aで口縁部は頸部の強いナデのため肥大化し、稜がつけられたようになる。14～16は土師器小型甕Bである。

SB247 (図版150 PL86・87)

1～5は土師器杯A III、6・7は杯A IIである。杯A IIIはその法量より、SB74段階である。8は土師器碗、9は皿A II、10は皿A Iである。10・11は黒色土器B碗Cである。13・14は土師器鉢で、14は高台部に三方より透かし状の穴があげられる。15～18は灰釉陶器碗、19は皿B、20～23は皿Cである。

SB248 (図版150 PL86・87 第84表)

1は非ロクロの土師器で、内外面ヘラミガキがなされる。2は同じく非ロクロの土師器で両面がヘラミガキされ、筒状の器になるものと思われる。ともに黒色処理される。杯Aは須恵器がほとんどでSB258段

階である。須恵器杯Bはさらに法量より、杯B II(20)、杯B III(10・11)と分けられる。このうち12・19・20は美濃須衛窯産である。

SB249 (図版151 第85表)

黒色土器A杯Aはさらに法量より、杯A I(3・4・5)とA II(1・2・5)に分けられる。なお6は焼成後に底部に径5mmほどの穴がつけられる。杯Aはその構成よりSB144段階である。

SB250 (図版151)

1・2は須恵器杯A II、3は土師器長胴甕Bである。杯Aはその構成よりSB258段階である。

SB251 (図版151 PL87)

1は灰釉陶器皿である。2は土師器の大型の鉢で、口縁部を大きく外反させて端部を面取りし、全体はハケ調整で仕上げている。

SB252 (図版151)

1・2は黒色土器A杯A II、3は碗である。杯Aはその構成より、SB144段階である。

SB253

遺物の出土量が少ない。須恵器、黒色土器Aがみられる。

SB254

遺物の出土量が少ない。土師器、灰釉陶器がみられる。

SB256 (図版151 PL87第86表第251図)

杯A IIIはその法量よりSB32段階であり、形態は口縁端部を面取りするもの(1~3)としないものがある。

SB257

遺物の出土量が少ない。土師器、須恵器、黒色土器Aがみられる。

SB258 (図版152 PL87 第87表 第252図)

SB258段階とした基準資料である。長胴甕Aは内面全体にハケ調整をするもの(10・11)と、内面下部のハケ調整をしないもの(9)がある。12は一応長胴甕Bに分類したが、体部下半のみ縦方向のヘラケズリをし、

食膳具

須恵器	杯A	3~9	16	830	2365	78%
	杯B	10~12	13	805		
	杯B蓋	13~16	16	720		
	鉢	18	1	10		
移入須恵器	杯B蓋・杯B	19・20	2	280	280	9%
黒色土器A	杯A		2	30	50	2%
	不明			20		
黒色土器B	碗	1	1	25	45	1%
	杯	2		20		
土師器	杯A II		2	80	240	8%
	杯A III		1	15		
	碗		2	40		
	不明			105		
灰釉陶器	碗		2	65	65	2%

貯蔵具

須恵器	甕			530	710	72%
	壺			160		
	小壺	17		20		
移入須恵器	甕			155	275	28%
	壺			120		

煮炊具

土師器	長胴甕A			390	570	
	長胴甕B			180		

第84表 SB248出土土器構成表

食膳具

須恵器	杯A II	8・9	2	70	85	11%
	不明			15		
黒色土器A	杯A II	1~6	7	410	600	75%
	碗	7	2	120		
	不明			70		
土師器	杯A II			30	110	14%
	杯A III			60		
	不明			20		

貯蔵具

須恵器	甕			1040	1040	96%
灰釉陶器	壺			40	40	4%

煮炊具

土師器	長胴甕A	10		900	970	
	小型甕B			70		

第85表 SB249出土土器構成表

食膳具

黒色土器A	杯A		2	25	95	3%
	碗C	11	1	50		
	不明			20		
土師器	杯A II	5~8・10	9	670	2525	83%
	杯A III	1~4	8	650		
	盤B I	9	3	310		
	盤B II		1	5		
	鉢		2	670		
	不明			220		
灰釉陶器	碗	12・13	4	350	410	14%
	皿C	14	1	30		
	不明			30		

貯蔵具

須恵器	甕			600	600	100%
-----	---	--	--	-----	-----	------

煮炊具

土師器	長胴甕			10	2470	
	小型甕B			15		
	羽釜A	15		2445		

第86表 SB256出土土器構成表

口縁は面取りが行なわれる。

SB259 (図版152 第88表)

黒色土器A杯Aは法量より、杯I(1・3・4)と杯A II(2)に分けられる。杯A IIの構成よりSB144段階である。

SB260 (図版152 PL87)

1は土師器羽釜A、2は土師器杯A II、3は土師器碗である。杯A IIはその法量より、SB94あるいはSB52段階ある。

SB261 (図版153)

1は黒色土器A杯A II、2は灰釉陶器長頸瓶である。杯Aはその構成より、SB144段階である。

SB262 (図版153)

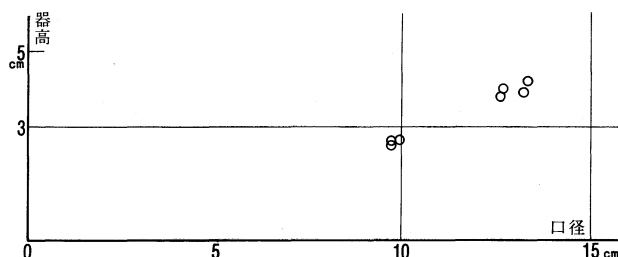
1・2は土師器杯A III、3~5は盤B IIである。6~8は灰釉陶器碗である。

SB263 (図版153 PL87 第89表 第253図)

杯A IIIはその法量より、SB32段階である。29の甗は内面があられている。

SB264 (図版154 PL88 第90表)

杯Aの構成より、SB144段階である。須恵器杯A II



第251図 SB256土師器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A	1~6	12	755	845	98%
	杯B蓋	7・8	3	90		
黒色土器A	不明			10	10	2%

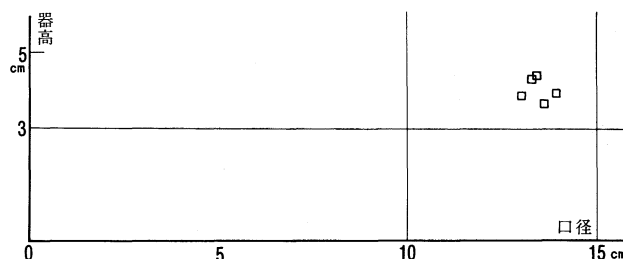
貯蔵具

須恵器	甕			1010	1045	100%
	壺			35		

煮炊具

土師器	長胴甕A	9~11		1235	1865	
	長胴甕B	12		580		
	小型甕B			50		

第87表 SB258出土土器構成表



第252図 SB258須恵器杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯A		1	20	55	4.6%
	杯B		1	20		
	杯蓋B		1	15		
黒色土器A	杯A	1~4	10	405	1130	95%
	碗	5~7	7	265		
	皿B	8~10	3	230		
	鉢	11	1	120		
	不明			110		
土師器	甲斐型杯		1	5	5	0.4%

貯蔵具

須恵器	甕	12		1380	1430	100%
	壺			50		

煮炊具

土師器	長胴甕A	13		1325	2030	
	長胴甕C	14		415		
	小型甕B	15		290		

第88表 SB259出土土器構成表

の焼成は良好である。9の須恵器皿Bは非常に量が少ない内の一つである。10の灰釉陶器は猿投窯産で、内面のみ施釉されており、トチン痕を残す。17は筒状の器で、明瞭な段を頸部につくり、それ以下を縦方向のハケ調整で仕上げている。

SB265 (図版155)

1は黒色土器A杯A II、3～6は須恵器杯A IIである。杯Aはその構成より、SB184段階である。

SB266 (図版155)

1～3は黒色土器A杯A II、4・5は杯A I、6・7は椀である。杯Aはその構成より、SB144段階である。8・9は須恵器皿Bで同一個体の可能性がある。10は須恵器壺、11・12は土師器長胴甕A、13は土師器長胴甕Bである。

SB267 (図版155 PL88)

1は黒色土器A皿B、2は須恵器杯A IIである。杯Aはその構成より、SB184段階である。

SB268 (図版155 PL88)

遺物の量が少ない。1は須恵器杯A IIである。

SB269 (図版155)

遺物の量が少ない。1は須恵器杯B、2は灰釉陶器椀である。

SB270 (図版155)

遺物の量が少ない。1は須恵器杯A IIである。

SB271 (図版155)

1は土師器杯A II、2は盤B II、3は黒色土器B椀、4は灰釉陶器椀である。

SB272 (図版155)

遺物の量が少ない。1は黒色土器B椀Cである。

SB273

遺物の量が少ない。土師器、須恵器がみられる。

食膳具

須恵器	杯A II		4	120	130	2%
	杯蓋B		1	10		
黒色土器A	杯A	19	2	85	225	4%
	椀	18	3	125		
	不明			15		
土師器	杯A II	9・10	30	1310	4365	75%
	杯A III	1～8	21	785		
	椀	11・12	2	185		
	椀C	13	2	110		
	盤B I	16	8	925		
	盤B II	14・15	3	225		
	鉢	17	1	250		
不明			575			
灰釉陶器	椀	20～23	7	700	1140	19%
	皿C	24・26	4	110		
	鉢	27	1	330		

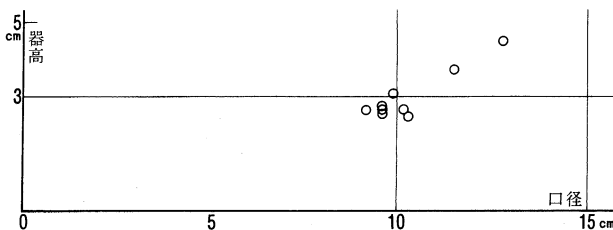
貯蔵具

須恵器	甕			310	375	37%
	壺			65		
灰釉陶器	壺			400	400	40%
緑釉陶器	水注	28		230	230	23%

煮炊具

土師器	長胴甕A			260	2900	
	羽釜A	30		1800		
	甕	29		840		

第89表 SB263出土土器構成表



第253図 SB263土師器杯A 法量分布

食膳具

須恵器	杯A II	6～8	5	280	365	32%
	杯蓋B		1	50		
	皿B	9	1	35		
黒色土器A	杯A II	1～3	6	220	620	54%
	椀	4	1	130		
	皿B	5	2	120		
	不明			150		
灰釉陶器	椀	10	1	160	160	14%

貯蔵具

須恵器	甕	11・12		8410	8410	99%
灰釉陶器	壺			25	25	1%

煮炊具

土師器	長胴甕A	13～17		4345	4625	
	長胴甕C	18		110		
	小型甕B			170		

第90表 SB264出土土器構成表

イ 掘立柱建物址

ST203 (図版166)

1は小型甕Aである。外面は体部上半を縦方向のハケ調整、下半から底部にかけては横方向のハケ調整をしている。内面は口縁部と底部を横方向のハケ調整で仕上げている。

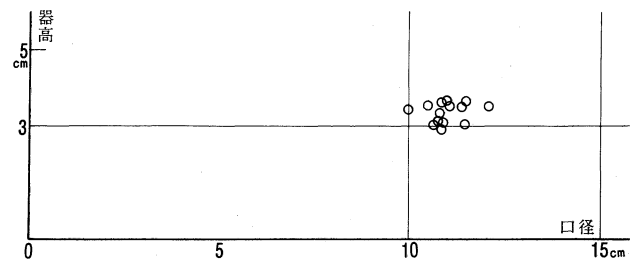
ウ 墓

SM01 (図版162 PL89)

1は蔵骨器に利用されていた須恵器の長頸壺である。口縁はそのまま開くが、内面端部には一条の凹線がはいる。焼成は良好で全体に厚いつくりをしており、外面はロクロケズリが省略されており、高台は雑なつくりである。

SK128 (巻頭図版2 図版162 PL88・89 第254図)

土師器杯A II (1~14)はその法量より94段階である。土師器はいずれも硬質薄手で丁寧な仕上げである。椀(15~17)はいずれも体部を直線的に立ち上げ、外傾する長い高台をもつ。そのうち15は高台端部内面に稜をもつ。緑釉陶器(18~24)は後で述べるf類である。いずれも高台裏面を除き釉が掛けられ、濃い部分が斑点状になっている。須恵器質の



第254図 SK128土師器杯A法量分布

胎土で、ヘラケズリ調整はなされず、糸切り痕を残す。高台は内面に段をもつのを特徴とし、内面にすべて断面U字状の圈線を廻す。内面を観察すると、18・19の椀には摩耗痕が認められ、かなり頻繁に使用されたことを物語っている。これらの緑釉陶器は高台や釉調など良く似ており、同じ時期に同じ窯で焼成された可能性がある。25は、灰釉陶器の小型の広口瓶である。これらの遺物は、いずれも副葬品と思われる。

エ 溝址

SD01 (図版163)

遺物の出土は少ない。1・2は灰釉陶器皿Bである。

SD02 (図版163)

中世の溝であり混入と思われる。1は黒色土器A椀、2は灰釉陶器椀Cである。

SD03 (図版163)

長大な溝であるため、遺物の出土量も多い。1・2は土師器杯A II、3は椀、5・6は黒色土器A杯A II、7・8は椀である。杯Aはその構成より、SB111段階である。9~12はいずれもハケ塗りの灰釉陶器で、9・12は椀、10・11は皿Bである。13は緑釉陶器皿Cで、b類に分類される。14は灰釉陶器長頸瓶である。

SD06 (図版163)

遺物の量は少ない。1~3は土師器杯A III、4・5は盤B Iである。6~8は灰釉陶器で椀と広口瓶で

ある。

SD07 (図版163)

遺物は少ない。1は灰釉陶器碗である。

SD08 (図版163)

遺物の出土はそれほど多くない。1～4は土師器杯A III、5～7は杯A IIである。杯A IIIはその法量よりSB32段階である。8は灰釉陶器皿C、9は黒色土器A碗である。

SD09 (図版163)

遺物はほとんど出土していない。1は須恵器の杯蓋である。

SD10 (図版163)

遺物の量は多くない。1は土師器碗C、2は盤B II、3は灰釉陶器碗、4は皿Bである。

SD11

遺物はほとんど出土しておらず、土師器・灰釉陶器がある。

SD13 (図版163)

中世の溝のため混入と思われる。1は黒色土器A鉢、2は須恵器杯A II、3は灰釉陶器碗である。

SD14

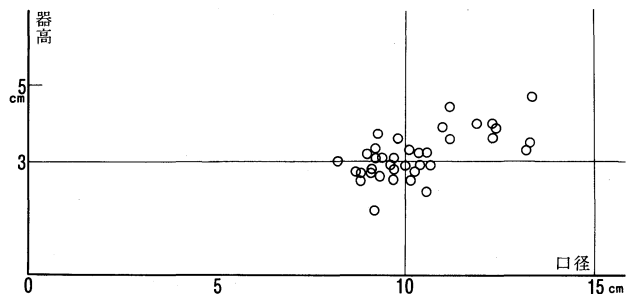
遺物は少量で図示できるものはない。わずかに土師器、黒色土器A、須恵器がみられる。

SD15 (図版163)

中世の溝のため混入と思われる。1は黒色土器A杯A、2は須恵器杯蓋である。

SD17 (図版164 PL91 第255図)

遺物の量は多い。1～29は土師器杯A IIIで、法量にバラツキがみられるが主体となるのはSB84段階である。30～36は土師器杯A II、37～41は碗、42は碗C、43・44は盤B II、45は盤B I、46・47は鉢の脚部である。48は須恵器杯Bである。49～58は灰釉陶器で、49～51は碗、52は碗C、53・54は皿B、55～58は皿Cである。59～63は緑釉陶器で、59・62・63はc類に分類でき、60・61はd類に分類できる。64は灰釉陶器広口瓶、65は土師器羽釜Aである。



第255図 SD17土師器杯A法量分布

SD18 (図版165)

1～5は土師器杯A IIIで、その法量よりSB32段階である。6・7は土師器碗である。8は灰釉陶器碗、9は皿Bである。10は緑釉陶器皿Cでc類に分類できる。

SD19 (図版165)

1・2は土師器杯A III、3は黒色土器A杯A IIである。4～9は灰釉陶器で、4・5は椀、6・7は皿B、8は皿C、9は広口瓶である。

SD22

ほとんど遺物は出土していない。わずかに土師器、灰釉陶器がみられる。

SD23 (図版165)

遺物は少ない。1は土師器杯A III、2は灰釉陶器椀C、3は美濃須衛窯産の須恵器杯蓋、4は須恵器の鉢である。

SD24

ほとんど遺物は出土していない。土師器、須恵器がみられる。

SD25 (図版165)

1～5は土師器杯A IIIで、その法量よりSB32段階である。6・7は土師器杯A II、8・9は椀、10は盤B II、11は盤B Iである。13は灰釉陶器椀、14・15は皿Cである。16・17は緑釉陶器で、16の合子はd類に分類でき、17の椀はc類に分類できる。18は小型甕Aである。

SD26

遺物はほとんど出土していない。

SD27 (図版165)

遺物の量は少なく、1は黒色土器A杯A Iである。

SD28 (図版165)

量は少ないが、古い様相を示す遺物が出土している。1は非ロクロ土師器の高杯で内面は黒色処理されており、外面にはヘラケズリ痕がみえる。2・3は須恵器杯A IIで、底部の切り離しはヘラ切りである。

オ その他の遺構

SK、SH、SF、SXとした中でも、遺物の出土量に大きな差がある。そこで、SKについてはここで主要なものを取り上げ、その他は第2章第2節(4)に掲げた一覧表に記しておく。なお、SHとSFからの遺物はほとんどないため取り上げてない。

SK01 (図版156)

1は須恵器蓋で口径が大きく、端部を強く折り曲げる。2は土師器小型甕Aで木葉痕を底部に残す。3は口径の大きい長胴甕Aで、外面をヨコナデ、内面を横方向のハケ調整で仕上げている。

SK26 (図版156 PL91)

1～3は土師器杯A III、その法量はSB74段階である。4～6は灰釉陶器でそれぞれ椀、椀C、皿Cであ

る。7～10は土師器足釜で、7・8は脚部、9・10は身部の破片である。

SK43 (図版156)

1～3は土師器で、1は杯A III、2は杯A II、3は盤B Iである。4は灰釉陶器碗である。5は緑釉陶器水注の頸部および把手部で、後述するd類に分類される。

SK102 (図版157 PL89)

1は杯A IIで、法量よりSB111段階である。2は土師器碗、3は盤B II、4は小型甕Bを小さくしたようなロクロ調整の壺である。5は灰釉陶器の広口瓶である。

SK103 (図版158 PL89)

1は土師器碗、2は灰釉陶器皿Bである。3は土師器小型甕Bで体部下半をロクロ調整の後、縦方向のヘラケズリをしている。

SK107 (図版158 PL89)

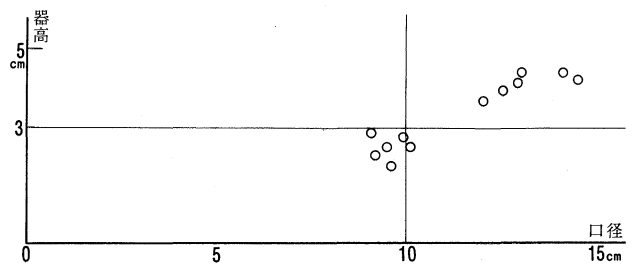
1～3は土師器、4～6は黒色土器Aで、いずれも杯A IIである。杯Aの構成より、SB111段階である。前者は非常に薄く仕上げられており、後者のヘラミガキは放射状方向で暗文風に十字形に行なわれている。

SK118 (図版158)

1は土師器杯A II、2・3は軟質の須恵器杯A II、4・5は黒色土器A杯A IIである。杯A IIの構成より、SB111段階である。6～9はハケ塗りの灰釉陶器で、6～8が皿B、9は碗である。

SK122 (図版158 PL89・90 第156図)

1～29は土師器で、1～15は杯A IIIである。杯A IIIはその法量よりSB32段階である。16～25が杯A II、26が碗C、27・28が盤B Iである。30は灰釉陶器皿Cである。



第256図 SK122土師器杯A法量分布

SK126 (図版159 PL89・90)

1・2は土師器杯A IIで、その法量よりSB114段階である。3・4は黒色土器Aの杯A Iと碗である。4のヘラミガキは、暗文風に放射状方向に行なわれている。5は土師器耳皿で、径5mmほどの穴が焼成前にあけられている。7は土師器鉢の脚部で、長方形の透かしがあけられている。6は漬け掛けの灰釉陶器碗である。

SK155 (図版159)

1～4は黒色土器Aで、1～3が杯A II、4は碗である。5は灰白色軟質で黒斑をもつ須恵器杯A IIである。杯A IIの構成より、SB144段階である。6は小型甕Bである。

SK203 (図版160 PL90)

1・2は黒色土器Aの杯A IIと碗である。3はハケ塗りの灰釉陶器碗である。4はa類に分類できる緑

釉陶器皿Bで、内面に断面U字状の幅広の彫り込みの印刻花文が施こされている。5は黒色土器Bの長頸壺で、外面全体と内面頸部に横方向のヘラミガキが施こされている。

SK204 (図版160 第91表 第257図)

杯A IIはその構成より、SB114段階である。13・14は黒色土器A碗、16はハケ塗りの灰釉陶器皿Bである。15は黒色土器B耳皿で、内面のヘラミガキはまばらである。

SK211 (図版160 PL90)

1・2は土師器杯A II、4～6は黒色土器A杯A IとIIである。7・8は軟質の須恵器杯A IIである。杯Aの構成より、SB111段階である。9・10はハケ塗りの灰釉陶器皿Bである。11～13は灰釉陶器の貯蔵具で、11は短頸壺、12・13は長頸壺である。14は土師器甕で全体にあらくハケ調整がされている。

SK218 (図版161 PL90 第92表 第258図)

1～8は土師器杯A IIで、その法量よりSB114段階である。9・10は土師器碗、11～14は黒色土器A碗である。

SX20 (図版166)

1～3は土師器杯A IIIで、その法量よりSB32段階である。4は土師器碗Cである。5は灰釉陶器碗で内面に幅広の一条の圈線をもつ。

食膳具

須恵器	杯A II		1	40	40	2%
黒色土器A	杯A II	7~12	8	520	965	45%
	碗	13・14	5	340		
	不明			105		
黒色土器B	耳皿	15	1	45	45	2%
土師器	杯A II	1~6	10	740	900	41%
	不明			160		
灰釉陶器	碗		2	50	215	10%
	碗C		2	15		
	皿B	16	5	120		
	不明			30		

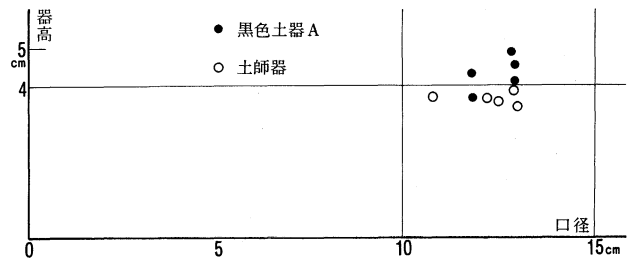
貯蔵具

須恵器	甕			480	490	96%
	壺			10		
灰釉陶器	壺			20	20	4%

煮炊具

土師器	長胴甕A			50	1370	
	長胴甕B			1100		
	小型甕B			220		

第91表 SK204出土土器構成表



第257図 SK204杯A法量分布

食膳具

須恵器	杯B		1	15	15	0.05%
土師器	杯A II	28~39	72	5850	27160	99%
	杯A III	1~27	82	4940		
	碗	40~42	18	1340		
	碗C	43~45	5	290		
	皿A II	46・47	2	140		
	盤B I	48~50・52・53	48	3790		
	盤B II		8	680		
	鉢			140		
	不明			9990		
灰釉陶器	碗	54	1	160	355	1%
	皿B	51	2	115		
	皿C		2	20		
	不明			60		
緑釉陶器	皿B			20	20	0.07%

煮炊具

土師器	長胴甕A			225	225	
-----	------	--	--	-----	-----	--

第93表 SX21出土土器構成表

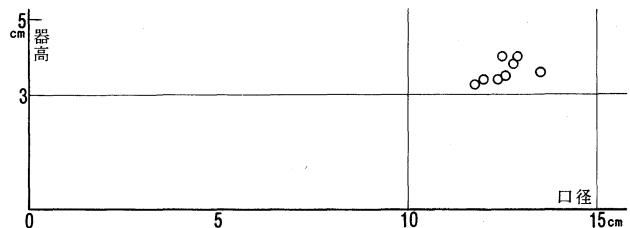
食膳具

黒色土器A	杯A II		2	115	465	24%
	碗	11~14		350		
土師器	杯A II	1~8	13	980	1485	76%
	碗	9・10	4	335		
	不明			170		

煮炊具

土師器	小型甕B			420	420	
-----	------	--	--	-----	-----	--

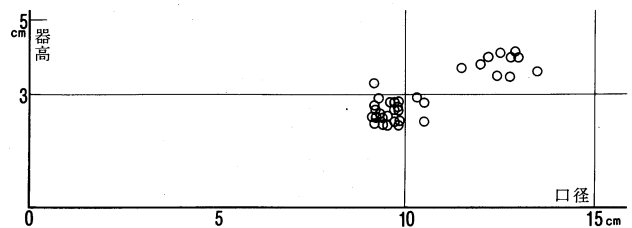
第92表 SK218出土土器構成表



第258図 SK218土師器杯A法量分布

SX21 (図版166 PL91 第93表 第259図)

大量の食膳具が出土している。その中でも土師器が大部分を占めるのが特徴的である。重量で見ると多いが、しずれも破片で復元できる個体は少ない。その中で杯AⅢはその法量よりSB32段階である。



第259図 SX21土師器杯A 法量分布

カ 遺構外遺物

F地区 (図版167)

1は土師器杯AⅡ、2～4は灰釉陶器碗、5・6は皿Bである。7・8は緑釉陶器で、7はb類に分類される耳皿で内面に一条の圈線がまわる。8はa類に分類される碗の体部で、内面に印刻花文が施される。

G地区 (図版167)

1・2は土師器杯A、3は黒色土器A杯AⅡ、4はAⅠ、16・17は口縁に片口が付く。5～11は灰釉陶器碗、12～15は皿Bである。

H地区 (図版167)

1～3は須恵器杯AⅡ、4はいわゆる「壺G」の底部である。5～8は灰釉陶器碗、9・11・12は皿C、10・13は皿Bである。13は内面に印刻花文が施される。14・15は緑釉陶器で、14は内外面に印刻花文が施されたa類に分類される碗、15はc類に分類される皿Cである。16・17は白磁碗である。

I地区 (図版168)

1～4は土師器杯AⅢ、5は皿AⅡ、6は杯AⅡである。7は黒色土器A杯AⅡである。8は灰釉陶器碗、9・10・12は皿B、11は皿Cである。13は白磁Ⅷ類碗、14は白磁Ⅳ類碗である。

K地区 (図版168)

1は土師器杯AⅡ、2・3は灰釉陶器碗、4は灰釉陶器碗C、5・6は灰釉陶器皿Bである。

L地区 (図版168)

1～4は土師器杯AⅢ、4は底部に焼成前に径5mmの穴があげられている。5・6・8・9は土師器杯AⅡ、7は杯AⅠである。10・11は黒色土器A杯AⅡ、12は皿Bである。13～17は須恵器杯AⅡで、13以外は灰白色軟質である。18は灰釉陶器碗、19～25・28は皿Bで28の内面には印刻花文が施される。26はa類に分類できる内面に印刻花文が施された緑釉陶器碗、27はc類に分類できる緑釉陶器である。

M地区 (図版168・169)

1～11は土師器杯AⅢ、12～14は杯AⅡ、15は碗Cである。16・17は黒色土器A杯AⅡである。16は須恵器高杯の脚部である。19・20は灰釉陶器碗C、21～23は皿B、24～29・31は皿C、30は長頸瓶の底部外面全体に縦方向の凹みがある。32～35は緑釉陶器である。32はa類に分類できる内面に印刻花文が施された碗である。33はc類に分類できる碗、34・35はg類の碗である。36は白磁Ⅴ類碗、37は白磁Ⅷ類碗、38～40は白磁皿である。

N地区 (図版169・170)

1～23は土師器杯AⅢ、24～26は杯AⅡ、29～31は椀C、32は皿AⅡ、33・34は盤BⅡ、35・36は盤BⅠである。37はSB22にみられるような手づくね土器である。38は黒色土器A椀である。39は須恵器杯B、40は輪状のつまみをもった杯蓋である。41～45は灰釉陶器椀、46は椀C、48～53は皿B、54～63は皿Cである。64～66は灰釉陶器鉢で、66の底部は高台に穴が開けられる。67～69は緑釉陶器で、67・68はc類に分類できる皿B、69はd類に分類できる皿Cである。70・71は白磁Ⅱ類碗、72～74は白磁Ⅴ類碗、75は白磁Ⅳ類碗、76・77は白磁Ⅷ類碗、78は白磁皿である。

O地区 (図版170～172)

1～28は土師器杯AⅢ、29・30は杯AⅡ、31は皿AⅡ、32は椀Cである。33は黒色土器A椀Cである。34～37は須恵器杯AⅡで、34～36はヘラ切りである。39は須恵器杯BⅢ、40は杯蓋、41は美濃須衛窯産の罎である。45～50は灰釉陶器椀、51～74は皿B、75～94は皿C、95・96は皿D、98は小瓶、99は合子である。100～103は緑釉陶器で、100はc類に分類できる椀、101はe類に分類できる椀、102はf類に分類できる椀、103はe類に分類できる水注である。104は土師器足釜の脚部である。106～107は白磁Ⅱ類碗、108～120は白磁Ⅳ類碗、121・122は白磁Ⅴ類碗、123～125は白磁Ⅷ類碗、126～128は白磁皿である。129は美濃須衛窯産の須恵器短頸壺である。

P地区 (図版172)

1は土師器杯AⅢである。2は白磁Ⅱ類碗、3・4は白磁Ⅴ類碗、5～7は白磁皿である。

R地区 (図版172)

1・2は土師器杯AⅡ、3・4は須恵器杯AⅡである。5～7は灰釉陶器皿Cである。8は白磁Ⅳ類碗、9・10は白磁Ⅱ類碗である。

S地区 (図版172・173)

1～12は土師器杯AⅢ、13は杯AⅡ、14・15は椀C、16は皿Aである。16は非ロクロの土師器高杯である。18・19は須恵器杯AⅡ、20は須恵器杯BⅣである。22～27は灰釉陶器皿Cである。26は白磁Ⅱ類碗、29～32・38・40は白磁Ⅳ類碗、33～37は白磁Ⅴ類碗、39は白磁Ⅷ類碗、41～44は白磁皿である。なお、44は内面に劃花文が配されている。

T地区 (図版173)

1は黒色土器A杯AⅡ、2は須恵器杯BⅢである。3は白磁Ⅴ類碗、4は白磁Ⅳ類碗、5～7は白磁皿である。

出土地点不明 (図版173)

ここで扱うものは取り上げの際の注記漏れや、移動の際に混乱した土器である。1～5は土師器杯AⅢ、6～8は杯AⅡ、9は盤BⅡである。10は黒色土器A杯AⅠ、11は皿Bである。12～14は須恵器杯AⅡ、15・16は杯蓋である。17・18は灰釉陶器椀、19・20は皿Bである。

2) 金属製品 (PL92~103)

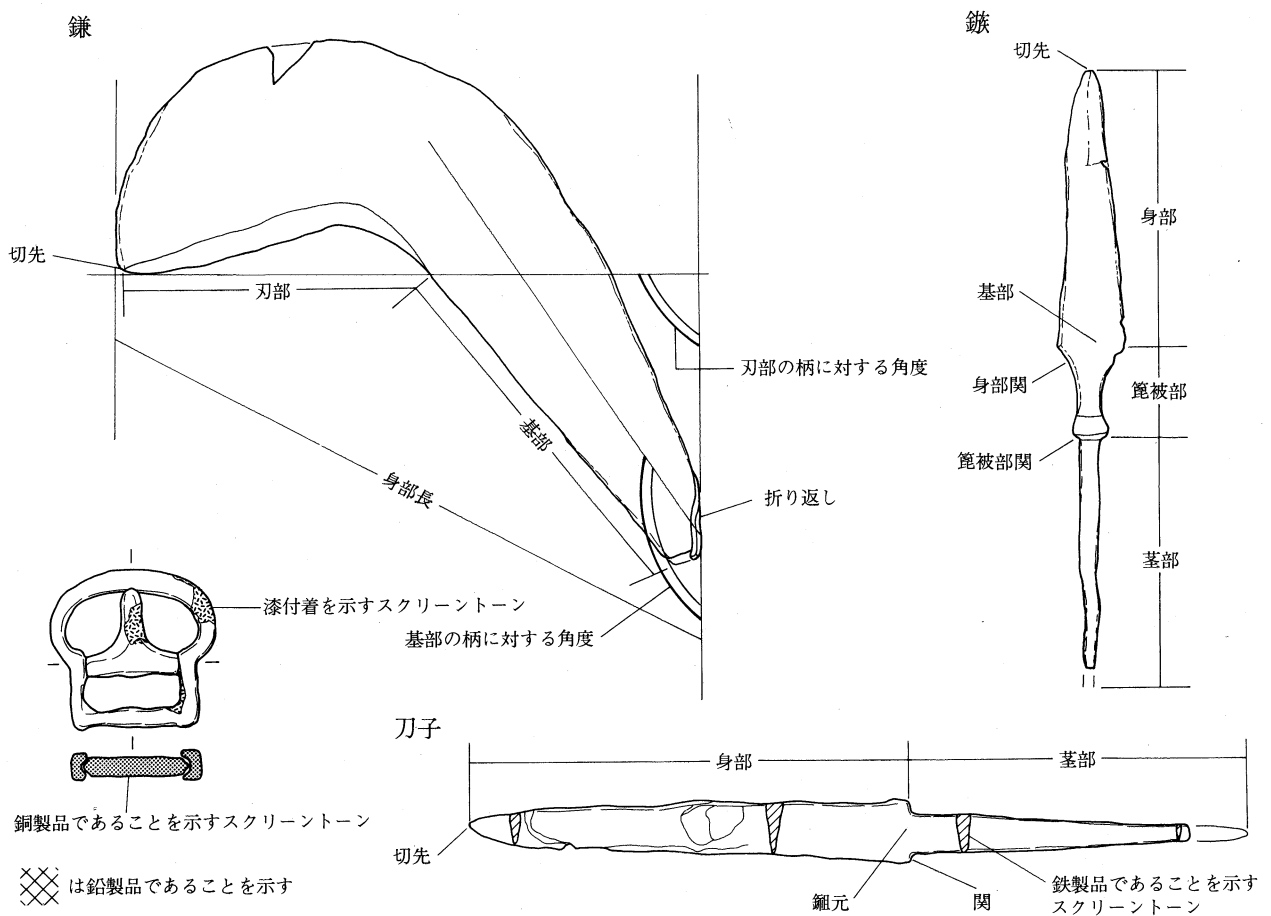
ここでは、金属でつくられた製品のすべてと、鉄製紡錘車との関連から土製紡錘車も含めて扱う。それらは古代の遺構内をはじめとして、遺構外、近世の遺構などから多数出土した。現在、金属製品の分類自体一般化されておらず、その名称も様々である。そこで、ここでは古代から近世までを一括して説明していく。各器種の名称についても通例に従う。記述の方法は遺構内出土品については遺構ごとに、遺構外出土品は層毎に、表化して行なう (第94~98表)。その中での分類は、第7章第3節で行なっている。なお、ここでの説明は個々の金属製品の観察を基本としており、各器種ごとの様相や、金属製品全体の動向は、第7章第3節でふれている。

金属製品の処理および、図化は当センターで行なった。その工程は①~④のようである。

- ① 発掘現場での取り上げ
 - ↓
 - ② 脱水・脱塩処理
 - ↓
 - ③ 錆とり
 - ↓
 - ④ 高化学分子による強化含侵 (ぜい弱なものは錆とりの前に行う)
- 必要なものはX線撮影
- 図化および写真撮影

実測図の縮尺は1:2である。遺物番号は遺構内の場合、遺構毎に土器の次に付けられている。例えば金属製品がSB58・14から始まるの場合は、1~13までが土器である。遺構外の場合は各層ごとに1から付けられている。例として、II・13はII層出土の13ということになる。

図の凡例は以下のようなものである (第260図)。



第260図 金属器凡例

ア 遺構出土の金属器 (図版174~182 第94表)

第94表 遺構出土の金属器一覧

出土遺構	図版番号	器種名	出土地点	特徴
SB01	27	鏃	埋土	篋被部、茎部の一部欠。III類。
SB02?	5	鎌	西壁上から掘り込み外にかけ、3点に分れ、隣接して出土。	先端部、折返し部欠。刃の付け方不明。推定完形長14cm前後、重量43g。VI類。
SB03	10	刀子	西壁上埋土	棟関緩やかな立ち上がり、刃関も同様か。平棟、平造り。5類。
		釘	埋土	茎中央の一部、破損大。断面ほぼ正方形。
SB04	22	刀子	埋土	茎部の一部、断面長方形、やや反りを持つ。
	23	紡錘車	埋土	軸一部(先端近く)。断面円形。
	27	鏃	床面(西北隅近く)	身部欠。篋被が台形状に広がらず、VIa類か?。
	28	鏃	床面近くの埋土。	茎尻わずか欠。表面剝落あり。VIIIc類。身部9.4cm、茎部7cm、先端でわずかに外側に反る。重量23.8g。
	26	筒状鉄製品(片閉じ)	埋土	内径1cmの筒状であるが、一方は閉塞。開口側外径は1.9cm前後で閉塞側より2mmほど開く、長さは開口側破損のため不明だが4cm前後か? 亀裂が深く入る。
	24	鍔鉋	埋土	茎部欠。断面円形の棒状(径3cm)の先端を敲き潰して、小さな鍔鉋状にしている。先端断面は底部の広い三角形。先端は尖がっている。
	25	鋏?	埋土	断面は、棟部が中心を外れた薄いカマボコ状で、鋏刃部の一部か? 未製品。
	29	刃装具(足金具)	埋土	銅製、連環式の足金具。鞘通し部は一部しか残存せず、長径は不明。鞘通し部の環は外側中央部に稜を持つ断面三角形、足緒通し部は稜が不明確で断面カマボコ形を呈する。
SB05		棒状不明品	床面(中央西北寄り)	断面不規則な楕円形の棒状破片。
	59	楔状工具?	床面(中央北寄り)	先端の尖った楔状の破損品、亀裂激しい。
SB09	7	带状鉄板	埋土	幅1.4cmの薄い(1mm)带状の鉄板。
	8	土製紡錘車	埋土	厚さ2.7cm、両端部の径が5.2cmと4.3cmの台錘形で、7mmの軸孔をもつ。軸孔の両端際がラップ状に開いている。
SB10	15	鎌	北壁中央部壁面上4枚重なって出土。 いずれも折り返し部を下にしている。	先端部、茎部を欠き、現長15.6cm。先端部近くは、右側面で、背部より刃部にかけて緩やかな刃付け。先端部以外は、刃部付近から両面より急刃となる。完形推定重量65g前後。VII類。
	14	鎌		先端部、折返し部欠。現長16.7cm。刃は先端部で左面より緩やかに刃付けされる。完形推定重量55g。VII類。
	13	鎌		折返しの一部のみ欠。全長13.7cm。刃付けは16と錆着しており不明。VII類。
	16	鎌		先端側1/3ほど欠。刃付けは錆のため不明。VII類。
	18	鑿?	床面(カマド寄り)	断面方形(5×6mm)の鉄棒の先端部が敲かれ、のみ状に刃が付くが鍛きが甘い。
	17	釘	埋土	脚尻欠。断面方形(5×5mm)。長さ不明。ほぼ方形の皿を持つ。IVa類。
	19	鎖(2個体)(馬具?)	床面近い埋土	径2.5mm程の針金で作られた兵庫鎖。1単位の大きさは1cm四方で小さく「遊び」は少ない。1本は一端が、もう1本は両端が欠損しているが、2本は1個体ではなく、馬具、「立聞き」に付く左右鎖か。
SB13	19	鋏?	カマド脇埋土	刃部残存。棟部丸い。
SB14	45	鋏	埋土	刃部。片面は平面、もう片面は棟部真近に最大の膨みを持ち、厚さを減じて刃となる。刃部長9.1cm。

SB14	43	釘	埋土	脚尻欠。6 cm前後。IV b 類。
	44	錐	埋土	両端部とも欠。断面は一辺2.5mmほどの方形、現存部の太さはほとんど差なし。
SB15	34	針	床面近い埋土	先端部欠。断面円形の末端を潰し偏平にして針孔を穿つ。基部中央がやや膨みをもつようである。
	35	刀子	床面（中央東寄り）	切先、茎部欠。棟関は垂直、刃関なし、平棟造り。3 類？。
	36	刀子	西壁際床面	切先、茎部欠。両関。平棟平造り。3 類？。
SB16	13	錐状工具	埋土	断面隅丸な方形で、先端尖る。茎部に木質部残存。
		釘		脚先端部1.7cm残存。一寸釘か？。
SB21	21	鉄鐸の舌？	西壁近く床面	断面隅丸の長方形の細い鉄棒の片側を敲き延して細くし、折り返して環にしたもの？。鉄鐸の舌とも考えられるが、環が小さい。
	22	刀子	カマド内	切先の一部。
SB22	14	紡錘車	埋土	紡軸尻と思われる。断面円形。
SB26	15	鋤・鍬	埋土	耳部のみ残存、片面の破損大、耳部の先端丸くつくる。袋部の鉄板の厚さ異なる。袋部片面の破損は使用時のものか。
SB28	23	刀子？	埋土	茎尻の一部か。破損著しい。
	24	不明品	床面（カマド付近）	板状、破損大い。
SB29	30	釘	埋土	脚尻欠。7.5cm前後か。IV a 類。
	31	刀子	埋土	切先、茎を欠く。刃関は垂直。棟関不明。平棟平造り。3 類？。
SB30	56	釘	床面(カマド脇)	完形。長さ10.4cm。茎部9×8mm。IV a 類。
	57	釘	埋土	頭部欠。基部断面4×3mmの方形。
SB31	25	刀子	埋土	切先、茎尻欠。基部幅2.8cm、基部棟部厚さ7.5mmのがっちりしたもの。棟関は垂直、刃棟は傾斜をもつ。丸棟平造り、身部にハート型の穿孔をもつ。7 類。
	26	刀子	埋土	刃部の一部。錆による膨張、剝落が激しい。
	27	刀子	埋土	茎尻。断面ほぼ長方形。
	28	鎌？	ピット 2 内	一方に刃をもち鎌だと思われるが、薄い。
	29	環	埋土	ほぼ円形の鉄棒を曲げてリング状にしたもの。一部破損。
	30	釘	埋土	脚尻欠。断面方形。2寸釘？。IV a 類。
	31	釘	埋土	脚尻欠。不整な皿をもつ円頭釘。皿と脚の接合部錆化による膨張で詳細不明。
	32	不明品	埋土	両先端欠。中央部に膨みをもつ棒状製品。錆化による膨張激しく断面不明。未製品？。
	33	掛金具の受壺？	埋土	断面長方形の鉄棒を折り曲げ、折り曲げ部は膨らましてリング状にしている。反対側は先端を尖らし、木質に打ち込んで使用したものと思われるが、先端部は欠損している。受壺にしてはリング径がやや小さいか。
	34	へら状工具	床面に近い埋土	形は裁縫用のへらに似るが、下端部は刃が付く。上端は細くなるか？この上方に茎が存在したか不明。
SB32	345	刀子	床面（中央南西側）	茎尻わずか欠。全長12.8cm。刃関部を欠損するが、両関の可能性大。平棟平造。錆化による表面剝落多い。7 類。
	346	刀子	床面(中央付近)	切先、茎尻欠。両関造り。身部に比し基部短小。右側面の刃付けが強い。平棟平造り、茎尻にわずか木質錆着。6 類。
	347	刀子	埋土	茎の一部。錆化による破損著しい。
	348	刀子	ピット 7 中	切先、茎尻欠。両関とも垂直に立つ。錆化による剝落著しい。3 類？。
	349	刀子	埋土	茎尻部。断面逆三角形。わずかに木質錆着。

350	刀子	埋土	身部の一部。破損、表面剥落著しい。
351	鋤・鍬	西壁近くの床面上の大石に銹着。	両耳部欠損。現重量170g。刃部断面は先端に近い程薄く先端頂部で3mm、側面はやや厚く6mmほどある。袋部は図の上側の鉄板の方が薄く、中央部では浅い。図左側の膨みは銹のため？ 図右側先端付近に片べりがみられる。
352	針状工具	埋土	断面の一边が1~2mmの方形な針状のもので、工具の一つか。両端部欠損。
353	毛抜き型鉄製品	埋土	脚部先端のみ、断面カムボコ状で、先端近く程薄くなり、先端はカーブして爪となる。
354	鑿	埋土	幅1.1cm、厚さ3.5mm、長さ不明。刀付けは片側が急。茎部欠。
355	鉄鐸の舌？	埋土	SB21の21と同様であるが、断面は丸い。
356	鍬	ピット中	身部先端欠。身部断面は平造りで薄い。VII c 類。茎部に繊維わずか残存。身部に破損あり。
357	鍬	埋土	茎尻欠、身部先端側は鍬が認められるが基部側は両丸造り。現重量11.9g。VII c ③類。
358	鍬	埋土	身部先端、茎尻わずか欠。身部断面片丸状を呈す。現重量9g。VI b 類。
359	鍬	埋土	雁股鍬、脚部の一方と茎尻を欠く。脚部は断面長三角で内側に刃をもつ。現重量300g。VII c 類。
360	鋳物片	埋土	厚さ5mmなどの鋳物(分析参照)。亀裂が深く入り、表面も銹化して膨みが厚い。実際はもっと薄いと想定される。煮炊具の一部とも思われる。
361	鋳物片	埋土	深く無数に亀裂が入る。銹化による膨張著しく、厚さが不明。
362	鎌	埋土	先端部、銹化による破損。剥落著しい。
363 364	鉄片	埋土	原形をとどめずとも不明。364はわずかに湾曲する。
365	掛金具？	埋土	ヘアピン状に折り曲げられた板状の鉄(根壺)に、長楕円形のリング(竿掛金)がはめこまれたもの。根壺の現存部は5.5cmと2.5cmとともに先端部を欠損しているが、曲げられてはいない。リングはわずかに反っている。
366	筒状鉄製品 (片閉じ)	埋土	長さ2.8cm、外径1.2cm、内径0.8cmの筒状であるが一方は閉じている。閉じ面の厚さは3~4mmで外面は中心に向かってわずかに膨む。亀裂が深く入り、鋳造の可能性あり。
369	紡錘車	埋土	紡軸の一部。断面円径で径は5.5mm。
367 368	紡錘車	埋土	紡軸先端付近。破損著しい。
370	釘	埋土	基部では幅8mm厚さ4mmの扁平な釘で、基部下端が折り曲げられて頭部となる。脚は急速に幅を減じ、長さは4cmと短い。IV b の特殊型。
371	釘	埋土	基部で幅1.2cm厚さ1~2mmの扁平な釘で、上端曲げられて頭部となる。脚は急速に幅を減じ、長さは4cm弱である。IV b の特殊型。
372	釘	ピット6の底面	円頭釘で脚先欠。長さ現長9.5cm、基部断面0.55×0.6mmの方形。径3cm前後のほぼ円形で中央部が厚いカサ状の皿がのる。皿部は造り出しでなく接着による。VII a 類。
373	釘	埋土	脚先欠。推定長6cm。亀裂、剥落多い。IV a 類。
374	釘	埋土	脚先わずか欠。推定長6cm。IV a 類。
375	釘	埋土	脚先、頭先端部欠。推定長6cm前後。IV a 類。
376	釘	埋土	脚先欠。IV a 類。
377	釘	埋土	脚先欠。長さに比して基部幅広い。推定長6cm前後。IV a 類。
378	釘	埋土	脚先欠。基部わずかに曲がる。推定長6cm。IV a 類。
379	釘	貼床中	脚先欠。IV a 類。
380	釘	埋土	脚部欠。IV a 類。

SB32	381	釘?	埋土	基部上端では断面が長方形であるが、脚部側は菱形を呈する。皿部は厚い(3mm)。皿部は半欠したものかもしれない。塹の可能性もある。
	382	釘	埋土	脚部部欠。推定長5cm前後。IV a類。
	383	釘	埋土	脚部欠。IV a類。
	384	釘	埋土	脚部欠。基部錆化による膨張あり。IV a類。
	385	釘	床面(カマド脇)	脚部わずか欠。推定長6cm、錆による破損、剥離多く。V a類。
	386	釘	埋土	頭部に破損あり。現長3.8cm。V b類か。
	387	釘	埋土	頭部欠。
	388	釘	ピット9内	頭部、脚部欠。破損多い。
	389	釘	埋土	頭部、脚部欠。
	390	釘	埋土	脚一部のみ残存。
	391	釘	埋土	頭部、脚部欠。
	392	釘	埋土	頭部、脚部欠。現長で8.5cmを側る。
		釘	埋土	脚部のみ
		鉄片	埋土	幅1.5cm四方。厚さ5mmほどの鉄塊状のもの
		鉄塊	貼床中	大きくゆがんだ白状の鉄塊で長さ1~1.5cm、径が1.5cmほどのもの。玉ネギ状に剥離し、破損が大きい。
		銅錠	ピット9内	1~2.5cm四方の破片が5片ある。1片は底部から胴部にかかる。他は胴部の破片であるが、細片のため法量不明。紙のように薄く、両面にロクロミガキ痕がみえる。
	393	鉛製品	埋土	棒状部と不整形三角部からなる。片面は平坦で、中央付近に縦に小さく不整形な突起(バリ?)をもつ。もう一面は棒状部はカマボコ状(厚さ5mm前後)を、三角部はそれより厚い(1cm)板状をなすが、先端側は次第に薄くなり、4mm前後となる。
SB33	2	刀子	埋土	基部の一部。断面ほぼ長方形。
SB37	31	紡錘車	埋土	軸部の一部、断面円形。
SB39		釘?	埋土	径4mmの円形に近い断面。長さ2cm。
SB40	4	鋳物片	埋土	厚さ4mmほどであるが、亀裂、膨張多い。
SB41	4	L字状不明品	埋土	L字状の角を境に一方は太く(6×5mm)、他の一方は細い(5×3mm)が、それぞれは先端に向ってさらに細くなる。細い方の先端部欠。
SB42	9	毛抜き型鉄製品	埋土	両先端部欠、幅5~6mm、厚さ2~3mmのカマボコ状の断面。
SB43	39	鏃	埋土	両先端部欠、身部両丸造り。VIII c ③類。
SB44	24	釘	埋土	脚部欠。断面方形。欠損あり。IV a類。
SB45	9	刀子	埋土	切先のみ。
SB47	20	紡錘車	西壁上	紡輪。径5.6cm、中心部の厚さ4mm、重量31.3g。軸穴径4mm。亀裂あり。I類。
SB48	20	紡錘車	床面(中央北西側)	両先端欠。最大径5mm。錆化による膨張、亀裂多い。
	21	紡錘車	埋土	紡輪。縁辺わずかに欠く。径4.3cm。中心部厚さ2mm、軸孔3.1cmの薄く小型で断面カマボコ状をなす。2類。
	22	鍔金具	ピット底部	木質長舌鍔の上端に固定される逆V字状金具。内側先端部わずか欠。
	23	刀子	埋土	切先、茎尻欠く平棟平造り。両関造り。研ぎ減り激しい。刀身曲っている。5類。
	24	刀子	埋土	切先、茎尻欠。平棟平造り。垂直な棟関をもつ。刃関なく刃部と基部の下側は一直線になる。刃部の先端側は刃を潰し平にし、逆に基部の下側に刃を付けている。おそらく基部を破損し、茎としての役割が果せず、逆転させたものと思われる。4類。

SB48	25	刀子	埋土	茎部のみ。現存茎部のみで11cm近い大型刀子。茎部中央より茎尻側は厚さ3.5mmほどの長方形断面を示すが、刃側は棟部で1mm、刃側で2~3mmほど薄くなる。これは茎の一部を刃にしたか、他の茎を接合したものでしょう。
SB49	22	紡錘車	埋土	紡軸の一部。断面は径3mmほどの円形。
SB51	9	鎌	埋土	3個に割れて出土したが完形。長さ20.4cm。最大径3.3cm。棟部の厚さ基部5mm、刃部2mmの大型。IX類。表面錆化による凹凸が激しく刃付けは明確でない。
SB52	27	刀子	埋土	切先、茎尻欠。平棟平造り。両関造り破損大。4類。
	28	刀子	埋土	切先、茎尻わずか欠。平棟平造り。両関造り茎部に木質部錆着。4類。
SB53	7	鎌	埋土	茎尻わずか欠。大きな逆刺しのある三角形の身部と堅牢で長い篋被部をもった銚状の鎌。身部断面両丸造。重量12.5g。I a類。
SB57	6	刀子	埋土	茎尻。
	7	刀子	床面（北西隅近く）	身部一部。平棟、平造り。
SB58	22	鎌状不明品	埋土	先端部欠。器形は鎌に似るが一樣に薄く刃付けが認められない。全体にわずか湾曲する。図の右端もわずかに折れ曲っているが、端部が破損か不明。表面に繊維の付着が多い。
	23	鐸	床面（中央南寄り）	1枚の薄い鉄板をまるめて造ったもの長さ8cm、上端部径1.1cm、下端部径2cm前後。舌はなく、舌を吊す門、門孔認められない。
SB63	48	鎌	埋土	先端部、折返し部欠。小型で薄い。錆化で膨張、破損大。重量18g。X類？。
	49	鎌	埋土	篋被及び茎の一部。篋被部は短い。
	50	紡錘車	埋土	紡軸の一部。断面4mmの円形。
	51	紡錘車	埋土	紡輪。径5.5cm、厚さ中央部3.5mm、先端部1mm。軸孔径4mm。重量18.3g。I類。
SB64	12	紡錘車	床面（中央南寄り）	紡輪の一部、縁辺部の残存なく、径不明。厚さ3.5mm。軸孔径5mm。4類。
	13	紡錘車	床面（南壁際）	紡軸の一部。断面径4mmの円形。
SB68	9	紡錘車	西壁中央上	紡輪。径5.9cm。厚さ中心部3.5mm、縁部1mm。軸孔径5mm。重量25.2g。4類。
SB66	41	鎌	埋土	茎部欠。身部は先端側両丸造り。基部は平造り、刃は薄く鋭い。篋被部短い。やや湾曲する。重量9.3g。VII c ③類。
	42	鎌	床面（中央）	茎部欠。身部は両縁わずかに内湾し、先端鋭い。全体に薄く先端部断面は鑄造り、基部側は両丸造り状をなす。重量10.0g。VII c ③類。
	43	鎌	床面近い埋地	身部先端及び茎尻欠、身部、篋被部ともに薄く。刃は鋭い。VII c ③類。
	44	鎌	床面（中央南西寄り）	身部先端部、茎尻欠、身部が大きく（推定長9.3cm）、篋被部の短い（1cm）VII c 類ではやや特異な型、身部は先端側は鑄をもつが、基部側は平造りとなる。茎部に繊維わずかに残存。重量18.0g。
	45	鎌	埋土	茎部欠。身部両丸造り。篋被部短い。身部中ほど及び切先部大きく屈曲する。重量10.1g。VII c ③類。
	46	鎌	埋土	身部一部と茎部欠。切先付近に鑄あり。基部付近両丸。全体に薄い。VII c 類？。
	47	鎌	埋土	断面菱形で鑄あり。切先鋭い。VII c 類？。
	48	鎌	埋土	茎尻欠。篋被部比較的長い。身部、篋被部ともに扁平だが切先近く鑄がわずかにある。破損、剥落多い。重量8.7g。VII c ③類。
	49	刀子	埋土	切先、茎尻欠、両関造り。平棟平造り。3類。
	50	刀子	埋土	身部。切先と茎部ほとんど欠。棟関は破損のため不明。平棟平造り。2類。
	51	釘	埋土	頭部は造り出さず、丸くおさめる。長さ4cm。I a類。

SB66	52	環頭釘	埋土	脚部欠。環部上側薄くなっている。
	53	鑿鉋	埋土	SB04・24と同類。刃部最大幅6mm。
	54	筒状製品 (片閉じ)	埋土	SB32・366とほぼ同タイプであるが、閉じ面の径は1.5cm、反対側は2.2cmで、やや円錐状を呈す。長さ3.3cm。中央付近に径8mmほどの穴があく。閉じ面の厚さは3mmほどで外面中央部はカマボコ状に膨らむ。亀裂深く、開口部は破損がある。铸造の可能性ある。
	55	釘?	埋土	断面5×4.5mmの長方形。釘か何かの茎と思われる。
	56	釘?	埋土	断面7×3.5mmの長方形。釘か何かの茎と思われる。
	57	鑿 ^{かすがい} ? 鑿?	埋土	一方の脚部欠。高さ5cm、幅2.5cmの縦長の鑿と思われるが、欠損部は細いので別品の可能性もある。
	58	鍍金具	埋土	SB48・22と同様な逆U字状金具。両端部欠損。内外の金具は潰れて接合して出土。
SB69	41	鎌	床面近い埋土	全長14.3cmの完形品。錆化による膨張で全体に膨みをもち、刃の付け方不明。50g。IX類。
	42	刀子	埋土	茎尻わずかに欠く茎部。
	43	刀子?	床面(東壁際)	茎尻か?。
	44	環?	床面	環状になっていたものと思われる。錆化による膨張激しい。
	45	紡錘車	埋土	紡軸の両端欠。紡輪径4.5cm、厚さ中心部5mm、縁部1.3mm。錆化による亀裂、膨張、剥落多い。I類。
	46	鍬	埋土	篋被部。VかVI類。
	47	釘	埋土	全長5.8cm。基部長方形だが脚部円形となる。IVa類。
	48	釘	埋土	脚先端欠。推定長9cm。IVa類。
SB71	8	紡錘車	3点とも北壁中央部付近にわずかに浮いて出土。	紡輪。径5cm、厚さ中央部1.5mm、縁部1mm。軸孔径4.7mm、重量12.1g。2類。
	9	紡錘車		紡輪。縁部欠損。径5.7cm、厚さ中央3.5mm、縁部1mm。軸孔4.5mm・重量16.5g。膨張、剥落多い。3類。
	10	紡錘車		紡輪、縁部一部欠損。径6.3mm、厚さ中央部3mm、縁部1mm・軸孔径4mm、重量25.4g。2類。膨張、亀裂、剥落あり。
	11	佐波理鏡	埋土	口縁部の一部。口縁側5.5cm、高さ2cmほどの細片のため、法量、器形ともに確定は困難。胴部の厚さは0.5mmに満たないが、口縁部1.1cmほどは内側に肥厚させ、端部では1.2mmほどある。肥厚部に浅い沈線が一条入る。
SB72	16	刀子	埋土	茎および身部の一部。棟は丸味を帯びる。垂直に近い両関。茎に比し身部は非常に小さい。本来の形に近いのか研ぎ減り、破損等によるものが不明。8類。
	17	鎌	床面(北西隅壁際)	先端側欠。基部に最大径(3.2cm)をもつ。断面薄く(1.5mm)両面から緩やかに刃がつく。II類。
SB74	49	刀子	埋土	切先、茎尻欠。棟部丸味を帯びる。両関浅く緩やか。身部小さい。8類。
	50	不明品	埋土	特殊な釘か。
	51	不明品	埋土	鉄板状であるが、片面は粗で鍛冶滓に似る。
	52	紡錘車	埋土	紡軸の両端のほとんどを欠く。紡輪径4.3cm、厚さ中央部3mm、縁部0.7mmの小型なもの。2類。
	53	鍬	埋土	身先、茎尻欠。雁股鍬。重量19.8g。錆による膨張激しい。VIIIb類。
	54	鍬	床面(北東隅近し)	身先、茎尻のほとんどを欠く。雁股鍬。重量16.6g。破損、剥落激しい。VIIIb類。
	55	鍬	床面(西壁中央際)	茎尻欠。篋被部長く、身部は小さい。身部切先近くに鏑を残す。基部付近は両丸造り。重量8.0g。身部に繊維の付着がある。VIIb類。
	56	刀子?	埋土	身部15cm、茎部10cm、基部幅2.9cm、基部棟部幅6mmの切先大きく反りをもつ大型利器。丸棟、両関造り。刃は両面付け、柄の繊維は炭化して、残存するが、少なくとも3か所括れ：身部が抜けないう

SB74				に外側から強く締めつけたことを示す。繊維は柔らかいものと思われるが不明。使用方法は逆手に持って切先を中心に機能させたものか。12類。
SB78	16	鎌	南壁上	折返し部付近欠。現長16.2cm、重量31g、錆化のため表面剝落多く、刃は付け方は不明であるが、屈曲する辺りより先端側に認められる。X類。
	17	釘	埋土	頭部欠。脚欠。断面方形。
	18	釘	埋土	頭部欠。錆化による被損多い。断面長方形。
	19	肘金具	埋土	フック部は面取りされた方形の鉄棒の先端部を約60°ほどに折り鉤状にし、基部は環状にする。根壺部は、環に通した鉄棒をへアピン状に折り曲げて連繋させているが、その脚部は先端でそれぞれ外側に折れ曲がる。折れ曲がるまでの脚の長さ(2.5cm)は固定した戸枠などの厚さとなる。
	20	刀子	埋土	身部の一部。棟部やや丸みをもつ。
	21	刀子	埋土	茎部の一部。断面長方形。
SB80	84	釘	埋土	脚欠。錆による膨張大。IV類。
SB81	39	鎌	埋土	ほぼ完形。身部先端側に錆が認められる。逆刺先がわずかに欠損するが、尖ったものだろう。VII a類。
	40	刀子	床面(中央)	茎及び身の一部欠。身部、茎部とも棟部を丸く成形。両関造り。
	41	毛抜き型鉄製品	埋土	肩部が欠損しており正確でないが、身幅1.5cm前後、長さ10.8cmを測る。脚は幅6mm、厚さ3mmで断面カマボコ状、脚は中間部で内湾し、いったん開くが再び爪が内側に入る。
SB86	26	紡錘車	床面(西壁近く)近くに重なって出土	紡軸。両端欠。3つに折れ、重なって出土。全長30cm近くある長い紡軸。亀裂、膨張著しく太さは明確でない。
	29	紡錘車	埋土	紡軸。両端欠。2つに折れ重なって出土。断面形は5mmを測るが膨張激しく明確でない。糸繰(鉤)部の痕跡残す。
	27	紡錘車	埋土	紡軸の一部。断面5mmの円形。
	28	紡錘車	埋土	紡軸。両端欠、断面5mmの円形。
	30	釘	埋土	脚先欠。円径に近い大きな皿(7×6mm)を丁寧に造り出す。V a類。
	31	釘	埋土	脚先わずかに欠く。曲げ部が大きく、長い頭部をもつ。脚部大きく折れ曲がる。推定長5cm。IV a類。
	32	鐸	埋土	上縁部わずかに欠、長さ7.2cm、残存上端径8mm、下端径1.7cm。舌、門、門孔は認められない。
SB87	14	釘	埋土	脚部欠。IV a類。
SB89	3	錐状工具	床面(南西隅近く)	断面最大部(9×9mm)が一端より1/3の位置にあり、両端に向って細くなり先端は尖る。短い側は木質部の付着があり柄であろう。破損が著しく明確でないが、関は存在しない。穿孔用の工具であろうか。
SB90	6	鎌	埋土	茎部欠。切先近くにわずかに錆がある。VIII c ⑤。亀裂、剝落多い。
SB94	46	刀子	埋土	切先欠、平棟平造り。棟関緩やか。刃関なし。身部破損多い。3類。
	47	刀子	床面(北東カマド近く)	茎尻わずかに欠く。平棟平造り。垂直な両関がある。7類。
	48	鎌	床面(中央)	茎尻欠。雁股。21.0g。VIII b類。
	49	釘	埋土	頭部欠。断面方形。長さ5.5cm。
SB96	20	鎌	埋土	茎部欠。身部先端に錆がある。篋被部は茎に向け徐々に太くなり茎に続く。亀裂多い。12.2g。VII a類。
	21	釘	埋土	頭部、脚部先端欠。断面方形。
	22	芋引鉄	ピット中	脚部の先端は尖っていないが、木質部が断面も被っており、欠損ではなさそう。刃は鋭く尖らない。
SB98	9	鑿	埋土	長さ17cm、刃わたり1.6cmを測る。上端側7.7cmほどは円錐形の筒状にし、木質部がはめ込まれていたが、使用時の敲打により、外側の

SB98				鉄部が大きく裂かれている。刃部側は両面から鍛いて徐々に刃付けがなされるが、片方の角度が急で片刃状である。120g。
	10	釘	埋土	脚部欠。推定長5.5cm。IV a類。
SB99	95	釘	床面（中央西寄り）	ほぼ完形。長さ8.7cm、断面偏平な長方形。IV b類。
SB101	13	刀子	埋土	完形。全長15.1cm、平棟平造り・両関垂直。7類。
	14	刀子	埋土	切先欠。現長21cmの大型。平棟平造り。棟関をもつ。破損、剥落激しい。2類。
	15	釘	埋土	ほぼ完形。現長10.5cm。頭部は造り出していない。剥落多い。I a類。
	16	釘	埋土	全体に錆による損傷著しい。長さ4.2cm。V b類か。
	17	不明品	埋土	断面10×5mmの板状をなす。鑿か？。
	18	紡錘車	埋土	紡軸糸線（鈎）部。
	19	紡錘車	カマド内	紡軸一部、断面円形。
	20	鎌	埋土	茎尻欠。身部偏平な両丸造り。篋被部は身部に比し太いが、亀裂が多く形状が明確でない。11.0g、VII a類。
	21	鎌	埋土	茎尻欠、身部両丸造り。柳葉型で重扶をもつ。重量11.1g、膨張、剥離多い。VII a類。
SB106	3	刀子	埋土	茎部のみ。木質部錆着。
SB109	13	鋳物片	埋土	厚さ3mm、わずかに湾曲する。亀裂多い。
	14	釘	埋土	頭部、脚、先欠。現長7.7cm。亀裂、剥落多い。
SB111	99	鎌	埋土	刃部、茎尻欠。雁股。重量12.5g。VII b類。
SB113	4	刀子	埋土	切先、茎部欠。平棟平造り。棟関あり。刃関不明。
SB114	25	釘	埋土	頭部、脚先欠、長さ3.6cm。
SB115	39	釘	埋土	脚部欠。IV a類。
SB116	18	刀子	埋土	切先、茎尻欠。平棟平造り。両関であるが破損のため形成不明。4類。
	19	鉄片	埋土	薄い鉄片で鎌などの一部か。
	20	鎌	埋土	切先、茎尻わずかに欠く。身部平造り。篋被は明確な台状をとらない。膨張、剥離、欠損多い。重量20.0g。I a類。
SB118	20	鎌	床面（北壁近く）	雁股鎌、茎部、刃部欠。内部からの錆による膨張なく、基部の厚さ2mmはほぼ原寸とみてよい。重量17.7g。VIII b類。
	21	釘	埋土	脚先欠。亀裂多い。IV b類。
	22	鎌	埋土	茎部欠。雁股鎌。左右の刃部が前後反対側に大きく屈曲し、片方の刃にはリングがはめられている。重量17.2g。VIII a類。
	23	刀子	床面（中央北寄り）	切先、茎尻欠。錆化による破損が著しく形状不明確。関不明。研減りで身幅小さい。1類。
SB120	25	毛抜き型鉄製品	埋土	2つ折りにして偏平な頭部を作り出す。脚部断面5.5×1.8mmの長円形。3体に分れて出土したが接続しない。
	26	釘	埋土	完形。長さ5cm。IV a類。
		不明品	埋土	1~2mmの薄い板状破片であるが、製品としては脆弱で、表面が平滑さに欠ける。一面は重ねられたように段差をもつが、反対面は錆がうきあがり明確でない。鍛冶の二次産物とも考えられる。
SB122	6	刀子	北壁中央上	身部一部。
SB125	10	鎌	床面（北西部隅）	身部逆刺部先端及び茎部欠。身部両丸造り？ 亀裂、膨張激しい。200g。I a類。
	12	佐波理鏡	埋土	残存部は口縁部3.5cm、高さ7.6cmで全体の1/9程度にすぎず、正確な形状不明だが、口径小さく、深いタイプ。胴部厚さ0.7mmであるが口縁部の1.2cmほどは内側に徐々に肥厚し、端部近くで1.4mmほどになる。端部より9mm下に浅い沈線が入る。

SB129	18	釘	埋土	頭部欠。長さ3.3cm。
	19	不明品	埋土	薄い三角状の鉄板。先端側は刃付けられている可能性がある。
	20	不明品	埋土	薄い長方形鉄板内の中心部に方形の穿孔がある。
	21	錐	埋土	両端部欠。基部側3mmの方形で次第に細くなり尖がる。錆による亀裂、剥落がある。
SB130	2	釘	床面（西壁中央近く）	頭部、脚先欠。
SB139	18	刀子	埋土	切先、茎尻欠。平棟平造り。両関造り。研ぎ減りが著しい。2類。
SB140	21	刀子	埋土	基部のほとんど及び切先欠。棟部わずかに丸味をもつ。両関造り。3類？。
SB141	33	鎌	埋土	雁股鎌。一方の刃部先端及び基部欠。両刃部屈曲し、接着している。重量19.5g。Ⅷa類。
	34	釘	埋土	脚先欠。内部からの膨張あり。Ⅳa類。
SB142	29	鎌	埋土	茎尻欠。内部からの膨張のため身部鑄造りが両丸造りか不明。重量13.7g。Ⅶa③類。
	30	釘	埋土	ほぼ完形であるが剥離激しい。長さ8.2cm。Ⅳa類。
SB145	8	刀子	埋土	身部の一部。平棟造り。
SB150	9	刀子	床面(カマド脇)	切先欠。現長21cm。平棟平造り。両棟垂直に近い。研ぎ減り激しい。2類。
SB156	9	鎌	埋土	茎尻欠。切先付近に鑄が認められる。Ⅶa③類。
SB159	19	紡錘車	床面(中央付近)	紡軸の軸尻側欠。紡軸径5.8cm。輪部の厚さ中央部3.5mm、縁部1mmで軸上側は完存し、時計方向半周ラセン状の糸繰部をもつ。2類。
	20 21	釘	床面（中央東より）	20、21は並んで出土。いずれも頭部、脚先を欠く。
SB163	7	刀子	埋土	切先、茎尻欠。平棟平造り、棟関垂直だが、刃関傾斜あり。研ぎ減り著しい。2類。
	8	刀子	埋土	身部の一部。棟部丸い。
	9	刀子	埋土	基部一部。反りをもつ。
	10	煮炊具？	埋土	残存部6×3cmの鑄造破片。径22cm前後と推定される器の一部。断面の形状は垂直面が「く」の字状に屈曲していったん外側に張り出し、1.1cmの間隙をおいて再び逆「く」の字状に屈曲して、ほぼ垂直に立ち上がっている(天地逆転も考えられる)。その断面径は2~4mmである。亀裂が多数見られる。鑄物の容器とみて煮炊具と考えたい。
	11	環	埋土	断面角丸方形の長方形リング。一方の頂点にわずかに凹みがあるが、繫目か摩耗は不明。鎖か掛金具の一部と推定される。
	12	鎌	埋土	身部及び茎尻欠。篋被に一部欠損あり。
SB167	51	鎌	埋土 上から52、51、 53と重なって出 土。	切先わずか欠。現長13cm。刃部屈曲点付近より刃が付く。刃の付け方不明。重量30g。裏側に植物繊維が不規則に錆着する。Ⅶ類。
	52	鎌		先端部付近のみ残存。棟部が薄い。膨張多く刃の付け方不明。
	53	刀子		基部の一部。
	54	刀子	埋土	茎尻欠。棟関垂直に近い。刃棟なし。棟部わずかに丸味をもつ。8類。
	55	紡錘車	埋土	紡軸の一部。断面4mmの円形。
SB169	11	不明品	埋土	中央部に膨みをもつ板状製品の一部。刀子としては刃付けが甘い。
SB170	12	刀子	埋土	身部及び基部の一部。両関造り。棟部わずかに丸味をもつ。
	13	釘	埋土	頭部、脚部先端欠。
SB178	9	紡錘車	埋土	紡軸両先端欠。軸の現長24cm。糸繰り部側軸の15.5cmはほぼ完存。紡軸茎5cm。輪部は厚さ中央部3.5mm、縁部1mmの薄いカマボコ状。重量36.3g。2類。

SB178	10	鉛製品	埋土	棒状部分と塊部分からなる。いずれも一面は平面で突起部を棒状部から塊部にかけてもつが、高さは不規則である。これはSB32・393にも認められたが飾り金具としてはめ込むための突起なのか、鑄造のバリなのか不明。反対側は棒状部も塊部も丸味を帯び、塊部は一段と厚くなる。しかし、いずれも均一性を欠く、本来の形状が不明である。機能はSB32・393と同様であろう。表面の多くは酸化鉛で黒ずんでいる。
SB184	21	釘	埋土	脚部のみ残存。
	22	燧鉄	埋土	裾先端部残存。山形の基部を内湾気味に立ち上がらせているようであるが、全体の形状は不明。
SB185	7	釘	埋土	頭部付近が内部からの膨張著しく形状不明。脚を欠く。長さ5.1cm。
SB191	22	不明品	埋土	製品の縁辺部の破片。端部は4mmの厚さをもつが内側は1mmほどになっている。
	23	鍍金銅鈴	床面（中央北東寄り）	径3.2cm、厚さ1~2mmの球形の鈴で、中央部よりやや上側に刻線が入る。鈕は角丸の板状で、頂部を穿孔しさし込み留める。下部には、両端で広がった一文字のスキャン孔が鈕と直角方向にあげられる。表面は鍍金が良く残る。出土時には全面黒く錆に覆われていた。
SB196	16	紡錘車	埋土	上軸先端及び下軸の多くを欠。紡輪径6.1cm。厚さ中央部4mm、縁部1mm。重量52.5g。2類。
SB197	10	刀子	埋土	身部及び茎部の一部。破損多く形状不明。
SB199	21	銅製竿	埋土	細く尖がる。長さ11.7cm、基部断面3.5×3mm。表面に漆膜が残存。
SB202	8	紡錘車	床面（中央南寄り）	紡輪。径5.6cm。厚さ中央部4mm、縁部1mm。カマボコ状を呈するが縁部は両面から敲き延している。軸孔5mm。重量21.5g。4類。
SB203	8	刀子	埋土	茎部。茎尻わずか欠く。
	9	刀子	埋土	茎部。茎尻わずか欠く。
	10	刀子	埋土	身部、平棟平造り。両関は垂直に近い。茎部をほとんど欠く。9類。
	11	鏝?	埋土	断面六角形。堅く鍛かされている。
	12	銅製品	埋土	互に葉柄部を繋いだ2枚の対称的な銀杏の葉を、繋目で折り返し、2枚重ねたように銅板を折り曲げて重ね、その中央部に棒状製品を貫通させている。銅板端部は破損し、棒状製品も一部しか残存せず、全体の形状が推定できない。
SB207	16	紡錘車	埋土	紡輪。縁部に欠損がある。輪部径4.7cm。厚さ中央部4mm、縁部1mm。軸孔3.5mm、重量15.6g。2類。
	17	工具?	埋土	両先端が欠け、断面方形の棒状品で、中ほどでいったん膨みをもち先端に向け細くなる。先端側は断面長方形を呈す。工具と思われるが、鏝の一種、あるいは未製品の可能性もある。
	18	鉄鐸	床面(西南寄り)	両先端欠。長さ6cm。舌、門、穿孔等は認められない。上端口径1.2cm、下端口径1.6cm。
SB209	12	毛抜き型鉄器?	埋土	小片が2個体同位から出土。厚さが異なるが同一体か。
SB216	38	鎌	床面（中央東北寄り）	基部欠。刃付けは両面からの急刃。重量14g。表面に繊維の錆着がある。
	39	釘	床面（中央南西寄り）	皿部の一部、脚先わずか欠。現長6.9cm、大きく皿部を造り出す。IV a類。
SB227	23	刀子	埋土	切先、茎尻欠。刃関は緩やか。平棟。I類。
SB235	8	鏝	埋土	両丸造（鑄造りの可能性もあり）茎尻欠。重量18.3g。VII a◎類。
SB237	5	鑄造品破片	埋土	厚さ5mm前後。亀裂、膨張著しい。
SB243	9	刀子	埋土	切先わずか欠く。全長13.8cm。平棟平造り。両関ともわずか傾斜をもつ。2類。
SB246	17	鏝	埋土	身部及び茎尻欠。
	18	刀子	ピット内	切先、茎尻欠。平棟平造り、両関であるが破損のため形状不明。
SB247	24	刀子	埋土	切先、茎尻わずか欠く。平棟平造り。両関造り。8類。

SB248	21	紡錘車	埋土	紡軸の一部。断面円形。
SB249	11	釘		脚部を欠く円頭釘と頭部を欠く釘が一部縦に重なって出土。1個体であったものが折れてしまって打ち直したものか。皿部径1.1cm。VII a類。
	12	刀子	カマド内	茎尻わずか欠。長さは20cmを超える長目のものであるが、研減りのためか身幅狭い。棟関は残るが刃関は破損。形状不明だが存在した可能性大。棟部わずかにカマボコ状を呈す。2類。
SB252	4	釘	埋土	頭部欠。
SB256	16	鏃	埋土	切先、茎尻欠。両丸造り。先端側やねじれがある。13.8g。VII c ③類。
SB262	9	鎌	埋土	ほぼ完形。全長18.5cm、最大幅4.9cmの大型の鎌。刃側屈曲点よりわずか手前から急な刃付けがなされる。重量70g、上面に繊維付着。VIII類。
	10	釘	埋土	脚部欠。破損著しい。IV a類。
	11	鏃	埋土	茎尻わずか欠。篋被部短く、身部長い(7.8cm)。重量13.8g、剝離著しい。II c類。
SB263	31	不明品	埋土	先端の尖った刀子状を呈するが片端が欠損しており器種不明。
SB266	15	芋引金具	埋土	片側脚部先端わずか欠く。刃は尖る。
SK25	2	鎌	埋土	破損多いがほぼ完形。基部は長く、刃部で急に屈曲。重量30g。X類。
	3	不明品	埋土	勾玉状、釘の一種か。
SK42	4	釘	埋土	脚部。
	5	釘	埋土	頭部欠。
SK51	7	鏃	埋土	茎尻欠。雁股鏃。刃部内側気味に開く。重量は21g。VIII a類。
SK120	5	紡錘車?	埋土	軸尻?断面円形。釘の可能性もある。
SK128	26	毛抜型鉄製品	埋土	脚部一部。断面わずかカマボコ状。
SK129	7	紡錘車	埋土	紡軸の一部。断面円形。
SK132	12	不明品	埋土	わずかに孤をもつ板状製品の一部。
SK139	1	紡錘車	埋土	紡輪の一部。径5cm。膨張。剝離多く断面形状不明。
SK149	1	鏃	埋土	身部、茎尻欠。VかVI類。
SK168	1	釘	埋土	頭部先端、脚部先端わずか欠く。長さ2.5cm。基部先端をやや長めにそのまま屈曲させる。III a類。
	2	鏃	埋土	脚部欠。推定長3cm。IV類。
SK186	1	鑿?	埋土	厚さ2.5mmほどの板状工具で先端部は丸味をもつ。頭部は敲打痕が明瞭に残る。鑿の一種か。
SK200		釘	埋土	現存部3.5cm、頭部、脚部先端破損で形状不明。
SK203	6	鍔金具	埋土	鍔上端の逆U字金具。鳩胸外側に当る金具は、ほとんど欠損するが、断面方形の鍔を一本残す。内側の金具は長三角形で、目釘孔を2個もつ。
SK238	2	紡錘車	埋土	紡軸両端部欠。断面最大径5mmの円形。
SK277	1	釘	壁上に並んで出土	2個体錆着して出土。頭部、脚部先端欠。
	2	釘		頭部、脚部先端欠。
S X 20	6	釘		脚部欠。IV a類。
S X 21		鋳物状鉄片		2cm四方の板状破片。亀裂多い。
	55	銅製鞍		現存長さ3cm、内径8mmの筒状で中央部がわずか膨らむ。一端を欠損するが、原寸に近いものだろう。表面に魚子の地紋等が認められる。
S X 22	316	釘		頭部付近を欠く。

SK1023	1	佐波理鏡	埋土	口縁部側4cm、高さ1.1cmの細片。厚さ0.5mmほどに薄く仕上げられているが、口縁端部の3.5mmほどは内側に肥厚し、その境目には沈線が巡る。
SK1137	1	刀子	埋土	平棟、平造り。身幅の差はなく、先端側でやや反っている。切先・茎を欠く。
SK1153		釘	埋土	基部一部。断面4×5mmの方形。
SK1157	1	釘	埋土	頭部、脚部先端欠。亀裂多い。
SK1190	1	釘	埋土	完形。長さ4.5cm。V b類。
SK1203	1	釘	埋土	脚部欠。IV a類。
SK1226	1	鉄鐸	埋土	長さ8.7cm、上端口径1.6cm、下端口径2.1cm。薄い鉄板をまき込み合せ目で重複させ、下端まで閉じるようにする。
SM1162	1 2 3	釘	埋土	3は完形で長さ3cm。1は脚、2は皿部及び脚部を欠くが、いずれも想定長3cm。1・3はVI b類。
S T 03	1	楔状工具	埋土	平面は卵状。断面は中央部膨らみ縁辺部は薄くなるが、刃はない。敲打痕も認められないが工具の一種かとも思われる。
S D 02	3	刀子	埋土	身部先端、茎尻欠。平棟平造り。棟関（形状不明）のみ。
	4	鋤・鍬	埋土	片耳部欠。全長14.2cm、横幅推定長14.6cm。刃先部最大幅が図面下側で3.5mm、上側で3mmの狭いタイプ。袋部は浅い（下側1.2cm、上側7mm）が、耳部先端で上側から敲击潰し、木質部が抜けないようにしている。図の刃部左側に片減り、破損がある。
SK06		刀子	埋土II	切先のみ。
SD07	3	釘	埋土 I	脚部のみ。
	2	不明品	埋土 I	変形Y字状をなすが、両先端は欠損していると思われる。断面方形。本来は環状のものか。
	4	釘	埋土 I	脚部欠。IV類。
	5	毛抜型鉄製品	埋土 I	両爪部欠。現長10cmを越す長目のもの。脚部は断面はわずかにカマボコ状を呈す。
SD13		弾丸	埋土II	鉛製。径12.5mm、重量11.5gの球形。表面酸化され白い。
SD17	67	鏃	埋土 I	両脚部先端欠。断面ほぼ方形で、脚の長いものである。
	68	鏃	埋土	篋被部及び茎部の一部。
	69	鏃	埋土	茎尻わずか欠。雁股鏃。現長17.5cm。重量28.9g。VIII c類。
	70	釘	埋土	断面4.5×2.2mmの薄型で、基部下端をそのまま折り曲げて頭としたもの。III a類。
	71	刀子	埋土	切先のみ。
	72	刀子	埋土II	身部先端及び茎尻欠。内部からの膨張著しく、形状明確でない。棟関のみ。身部、茎部の接点で「く」の字状に折れ、それぞれが反り上がる。
		毛抜型鉄製品	埋土	1.5cmほど残存。断面6×2mmの長方形。
	73	苧引鉄	埋土	両脚部先端欠。刃部平坦面をもつ。
SD19	11	刀子	埋土	身部4cmの小さなもの。棟関は傾斜をもち刃関は垂直。茎部欠。平棟。
	12	苧引鉄	埋土	片側脚部欠。身幅の広い(2.3cm)、両肩の張ったタイプ。刃部は尖る。
SD25	19	毛抜き型鉄製品	埋土	脚部の一部。断面長楕円形。
	20	鏃	埋土	雁股鏃。刃部、茎部欠。VIII b類。
NR01	4	刀子	埋土II	切先、茎尻欠。両関とも浅く、茎部幅広い。亀裂、剝離著しい。9類。
	5	釘	埋土	頭部、脚部先端欠。脚部大きく屈曲。

第95表 II層出土の金属器一覽

図版番号	出土地点	器種名	特 徴	図版番号	出土地点	器種名	特 徴
1	DJ17	鎌	茎部わずか欠。現長14.6cm。刃付けは上面から急傾斜になされる。重量44g。IX類。	20	SF11	錐	断面方形。先端鋭く尖がる。基部側先端は、断面長方形を呈する。
2	OE02	鎌	先端部、茎部欠く。刃の付方不明。	21	NX20	錐	断面方形。先端鋭く尖がる。基部側先端も細くなるが、断面長方形を呈する。
3	NV14	鎌	基部付近。折返し部欠く。	22	UA25	鋏	両身部の一部。刃付は刃側端部付近で片面より急角度でなされる。基部は断面方形。
4	OD02	鎌	基部。左利き用?	23	PG18	鋏?	断面薄いカマボコ状。鋏と思われるが刃付が不明瞭。
5	N地区	特殊鎌	鎌状に湾曲した製品の一部で、外湾側は両面から緩やかに、内湾側は片面から刃状を呈する。	24	PX02	鋏?	断面薄いカマボコ状で一辺に刃がつく。
6	N地区	鋤・鍬	耳部か耳部末端刃側を丸くおさめる。刃側は末端部ほど厚く(5~6mm)、刃先端側は薄く(3~4mm)となる。袋部は左右厚さが異なる。	25	OU15	工具?	鍬に似た形状で柄に当たる部分が直角に曲がる。身部の先端はわずかに下側に曲り、その中心部に半円状の抉りがある。
7	NR07	紡錘車	紡輪及び紡軸の一部。紡輪は径4cm、厚さ3mmで小型で厚い。重量29.1g。5類	26	RX08	毛抜き型鉄製品	断面4.5×2.5mmの長方形。両脚部先端側欠。
8	OQ09	紡錘車	紡軸の一部。断面円形。	27	NR05	毛抜き型鉄製品	脚部の一部。断面5×2.2mmの長方形。
9	OF11	環	内径13.5×4.5mmの長円形。断面は三角形で外側中央部に稜をもつ。	28	OA13	毛抜き型鉄製品	脚部一部。断面5×2.5mmでカマボコ状を呈す。
10	N地区	刀子	身部先端、茎尻欠。平棟平造り。棟関垂直、刃関傾斜。茎部大きく屈曲。	29	NT23	毛抜き型鉄製品	肩部付近。幅4.5mm、厚さ1.5mmでわずかにカマボコ状を呈す。
11	OY11	刀子	切先及び茎の大半欠。平棟平造り。両関垂直。亀裂多い。3類。	30	IM22	鉄鐸	長さ5.7cm、上端径1.4cm、下端径1.9cm。厚さ1mmほどの鉄板を巻き込んで造るが、合わせ目は下裾開きである。舌及び取り付け方法は不明。
12	ST05	刀子	切先及び茎の大半欠。棟関垂直、刃関不明。破損多い。	31	NK06	燧鉄	山形の身部の裾を内湾気味に立ち上がらせたもの。底部の厚さ4.5mm。
13	IV23	刀子	茎尻欠。平棟平造り。棟関垂直。刃関はっきりしない。切先やや反る。11類。	32	MK08	燧鉄	31と同形だが、底部中央やや内湾する。片側裾部及び頂部欠。底部厚さ4.5mm。亀裂、剥落激しい。
14	NR01	刀子	身部。切先欠。	33	TN23	燧鉄	背の低い山形。裾部の立ち上がり部は破損のため不明。底部厚さ4mm。
15		刀子	切先欠。平棟平造り。棟関は2段関、刃関1段関。茎部は木質部銹着。身部内部からの膨張著しい。9類。	34	OR13	釘	完形。長さ15.1cm、断面9×15mmの大型。IV _a 類。
16	PK14	刀子?	先切。平棟。小刀の可能性もある。	35	NW14	釘	頭部の一部。脚部欠。断面9×9mmで太い。亀裂、破損多い。iv _a 類。
17	NQ19	工具	茎部中央欠。断面4.5×3mmの細い角棒の先端を鍛いて刃付けをする。	36	SN11	釘	脚部欠。断面長方形。頭部を丁寧に敲き出す。iv _a 類。
18	SE07	鎚鉤状工具	茎尻欠。径5mmほどの断面円形の細い鉄棒の先端を敲き潰し、断面偏平なカマボコ状の刃を造り出し、先端を尖らせる。	37	OB07	釘	脚部先端わずか欠。長さ4.5cm。iv _a 類。
19	OT16	鎚鉤	身部及び茎部の一部。身部は断面偏平な三角形状で、下側は平面、上側は中央に鑄をもつ。身部の基部は身幅をわずかに減じて刃を持たない。全体に反りを持ち、切先が上がる。垂直に近い両関を経て茎部につながる。	38	NM21	釘	脚部先端わずか欠。長さ5.5cm。iv _a 類。
				39	OG03	釘	脚部先端欠。iv _a 類

40	MV20	釘	脚部先端わずか欠。長さ5cm。 iv _a 類。	66	OL22	棒状不明品	方形断面(4.5×4.5mm)の棒状 製品の一部。何かの茎か。
41	RW08	釘	脚部先端欠。皿部が基部に対し 斜に付く。v _a 類。	67	OO07	棒状不明品	角丸長方形(8×5mm)の棒状製 品の一部。やや湾曲する。
42	VA24	釘	完形。長さ7.7cm。脚部先端を巻 き込む。v _a 類。	68	NR20	棒状不明品	長方形断面(5×4mm)の棒状製 品の一部。何かの茎か。
43	NW07	釘	皿部及び脚部先端わずか欠。長 さ8.3cm。	69	SC03	刀子状不明 品	刃が明確でない。刀子の茎とし ては薄すぎる。
44	MD02	釘	脚部先端わずか欠。長さ4.9cm。 基部上に長楕円形の皿がのる。 vii _c 類。	70	OA13	不明品	刃はない。一端は完結している が一端は欠損。
45	SG06	釘?	頭部に敲打痕があり、堅く鍛造 されているので鑿の可能性もあ る。i _b 類。	71	OF20	棒状不明品	方形断面(4×4mm)な棒状製品 の一部。何かの茎の一部か。
46	RV04	釘?	頭部に敲打痕があり、堅く鍛造 されているので鑿の可能性もあ る。i _a 類。	72	UA25	带状鉄板	基部の広い鉄板が折れ曲ったも のだが刃はない。
47	NV19	釘	完形。長さ4.6cm。i _a 類。	73	SH05	鏃	中央部一部欠。
48	SE02	釘	ほぼ完形。長さ3cm。i _a 類。	74	OC13	円板	径3.4cmほどの円板で一部を欠 く。
49	NQ04	釘	ほぼ完形。長さ6.5cm。脚部大き く屈曲。iii _a 類。	75	RW16	不明品	耳かき状に湾曲した突出部をも つ板状製品で反対側は欠損して いる。
50	NR23	鏃	茎部欠。剥落多く身部断面形状 不明。重量20.2g。	76	OD14	不明品	75と同形。全体に反りをもつ。
51	OI20	鏃	切先、茎部欠。身部両丸造り。 重量8.2g。	77	NT13	筒状製品	ラッパ状に口が開く筒状製品で 内径は3mm。端部欠損。
52	NV04	鏃	切先、茎尻欠。身部両丸造り。 刃が鋭い。重量8.2g。vii _a 類。	78	SE02	筒状製品	77と同形だが小型。筒内径2mm。 筒内に竹(?)の細片が刺し込 まれていた。端部欠損。
53	DO15	鏃	茎尻欠。身部先端付近に錆があ る。重量10.1g。vii _a 類。	79	RU01	不明品	断面円形(径7mm前後)の鉄棒 が湾曲したもの。一端欠損。本 来は環状製品か。
54	ND23	鏃	切先・茎欠。両丸造り。重量8.5 g。vi _b 類。	80	OK14	釜	鑄造製。径24cmの釜の口縁部 の一部と推定される。端部より4.5 cm下側に膨みがあり、鏽の痕跡 の可能性もある。全面に亀裂が 深く入り膨張も著しい。厚さ 2~3mmか。
55	NO23	鏃	身部基部及び篋被部の一部。重 量3.3g。	81	OM14	釜?	5cmほどの細片。わずかに湾曲 をもつ。煮炊具の一部か。亀裂、 膨張著しい。厚さ2~3mm。
56	NO23	鏃	身部の切先、篋被部欠。平面五 角形。偏平な両丸造り。小さな 抉りをもつ。重量9.1g。ii _a 類。	82	OH09	釜?	3.5cm四方ほどの鑄造細片。わ ずかに湾曲をもち外側に1.7cm幅 ほどの膨みをもつ。鏽釜か。
57	OR17	鏃	篋被部及び茎部の一部。篋被部 長い。vかvi類。	83	OA07	斧	着柄部は袋状(内法4.4×3.1cm の方形断面)であるが、折り返 し部がわずか。着柄部から刃部 へ向い片側面が緩く膨み、刃部 は弧状を呈す。長さ15.5cm。刃 幅6.1cm、袋部鉄板厚6×8mm、刃 角度20°、重量800g。
58	OR20	鏃	篋被部及び茎部の一部。	84	OQ05	不明品	径6mmの断面円形の屈曲した棒 状の鉄製品。
59	NS21	鏃	同上	85	OQ06	鑄造鉄片	3.5×2cmの細片。亀裂、膨張著 しく、厚さ不明。
60	OD18	鏃	雁股鏃。両刃部及び茎尻欠。亀 裂著しい。17.6g。viii _b 類。	86	SE02	不明品	一端に関をもち鏃の篋被部に酷 似するが、鏃にしては茎が太す ぎる。(10×6mm)。
61	OA01	鏃	雁股鏃。両刃部及び茎部欠。重 量11.2g。viii _b 類。	87	NW15	鎌?	鎌の可能性は強いが、剥落、欠 損が多く確定できない。
62	MB05	鏃	完形。全長15.5cm。身部断面は 膨張が激しく明確でないが、錆 か、両丸造り。身部先端部付近 で屈曲し、切先が反る。篋被部 の断面は円形に近い。重量27.8g。				
63		鏃	完形。全長17.3cm。iv類。				
64	RX08	棒状不明品	断面角丸方形の棒状製品の一 部。				
65	NW05	棒状不明品	長方形断面(6×4mm)をもつ棒 状製品の一部。				

88	NP16	佐波理鏡	口縁部6×1cmの細片。口径が大きく(18cm近い)浅い鏡が推定される。厚さ0.5mm程にクロロピキされるが、端部のみ膨れ1.5mmとなる。内側端部に沈線が1条入る。			はめ込む。全面に稜が認められ、丁寧に整形されている。「C」字形の鉸具頭部で横幅は4.5cm、帯留部で3.4cm、縦幅は4.2cm。表面に一部に黒漆が残る。	
89	NQ13	佐波理鏡	口縁部2.5×3cmの細片。口径3cmでやや深目の鏡が推定される。厚さ0.8mm程であるが、端部に向け徐々に膨らみ1.9mmとなる。沈線はもたない。	91	NY02	鉈尾	表金具。表側は縁部を面取りし、裏側は縁を1mm余り残して内側を窪め三方に鉋痕を残す。横幅3cm、縦幅2.5cm。
90	OQ21	鉸具	外枠を一体につくり、刺金軸を	92	SC08	不明品	不整形な鳥形にも見える。炭化物の付着もあり、銅滓の可能性が高い。

第96表 I層出土の金属器一覧表

図版番号	出土地点	器種名	特徴	図版番号	出土地点	器種名	特徴
1		鎌	基部欠。小型。内部から膨張し刃付方法不明。	18	NS03	鑿	先端部わずか欠。楔状、頭部に敲打痕がある。
2	MV20	刀子	茎尻欠。平棟平造り。棟関のみ。	19	NY19	鑿	楔状、頭部敲打痕がある。
3	MA09	刀子	茎尻欠。平棟平造り。両関垂直。10類。	20	OE18	鑿	断面方形の棒状の一端側を太くし、その先端を上下から敲击潰して刃付けしたもの。茎部側は欠損あり。
4	L地区	刀子	切先、茎尻欠。棟関のみ、平棟平造り。破損激しい。	21	OC21	鑿	断面長方形の棒状の先端を上下から敲击潰して刃付けしたもの。茎部側は欠損。
5	NV15	刀子	切先、茎尻欠。平棟平造り。両関造り。9類。	22	OM11	鑿?	1.3cmの径をもつ断面円形の基部に厚い皿がのり釘状を呈す。皿部は敲打により中央部が凹む。ノミの可能性もある。
6	L地区	分子	切先、茎尻欠。平棟平造り。浅い棟関。刃関不明。	23	TS05	錐	先端部欠。断面方形。
7	IH21	刀子	茎尻わずか欠。切先が反りペーパーナイフに似たタイプ。左側より刃が付く。両関垂直に近い。茎部に木質部残存。10類。	24	OI15	錐?	断面方形であるが角付が甘い。
8	M地区	刀子	ほぼ完形。関をもたない。全長17.5cm。	25		不明品	半円形の鉄板の弦側の両端に折り返しの耳をつけたもの。一方の耳は欠損。
9		刀子	身部先端部。	26		針	円形断面(径5mm)の鉄棒の一端を扁平にし針孔を穿つ。他の一端は欠損。
10	M地区	剃刀?	身幅が広く、身の薄い剃刀状タイプ。棟関垂直。刃関は形状不明。棟部わずかカマボコ状。研ぎ減りが著しい。	27		工具	彫刻刀の切り出しに似た刃をもつ。
11	SG05	刀子	身幅一定。垂直な両関をもつが、棟関わずか。左側より刃付け。膨張、剝落著しい。	28		工具	裁縫用ヘラに似た刃をもつ。先端及び基部先端側欠。
12	OJ03	燧鉄	低い山形で、裾部をわずかに上げさせた小型品。	29	N地区	工具	28と同形だが大型、基部先端尖がる。
13	NO17	燧鉄	12と同じ形態。一部欠損。	30	OG08	工具	緩やかに湾曲させた断面長方形の鉄棒の先端を釘抜き状に成形したものだが、釘抜きには切り込みが浅い。茎部側端部は関状に切り込まれ、小さな突出部をもつが、先端は欠損。
14	PR20	燧鉄	底部がわずか弧状を呈する山形。両端部の立ち上がりはない。頂部近くに穿孔がある。	31	MP12	鑿	筒状部(木質挿入)断面は円形で径も大きい(1.8cm)が、刃先に向けて細く方形(8×5mm)となる。刃先付近で緩やかに湾曲する。刃先及び基部側欠。
15	OE18	燧鉄	高い山形の裾部を小さく立ち上げさせたもの。亀裂多い。				
16	HN14	楔型鉄製品	断面長方形で、先端部は四方から減幅し尖がる。				
17	NS07	鑿	先端部欠。楔状。頭部に敲打痕がある。				

32		紡錘車	紡輪の一部。径4.5cm。厚さ1.6mm。軸孔5mm。6類。	62	ME06	釘	ほぼ完形。長さ4.3cm。ii _b 類。
33		肘金具	SB78・19と同型。根壺部の脚は折り曲げられてはいない。片側脚部先端欠損。	63	LI07	釘	脚部先端欠。菱形の皿部を付ける。vii _b 類。
34		鍔	鍔の端部か。刺金らしい製品も伴出しているため、簡単な鉸具頭にしていただ可能性もある。	64	MN06	釘	脚部先端欠。基部を折り返す。iii _b 類。
35	SG05	鉸具	刺金のみ。大きさからみて馬具用だろう。	65	HM14	釘	脚部欠。i _b 類。
36	NY17	毛抜き型鉄製品	断面7×3mmのわずかにカマボコ状をした鉄棒を弧状に折り返している。脚部先端に小さな爪をもつ。片方の脚先端部欠。	66	OR06	釘	ほぼ完形。長さ8.5cm。ii _b 類。しかし皿部欠損の可能性もある。
37	OD05	毛抜き型鉄製品?	断面7×1.5mmの薄い方形。半欠か完形か明確でなく、毛抜き型鉄器と断定できない。	67	NC01	釘	長さ7.3cm。ii _b 類。皿部を欠損した可能性もある。
38	OW19	鉄鐸	半欠。舌なし。穿孔等も認められない。	68	M地区	釘	脚部先端わずか欠。長さ8.3cm。ii _a 類。
39	M地区	釘	ほぼ完形。長さ10.1cm。IV _a 類。	69	NO03	釘	脚部欠。ii _b 類。
40	WA03	釘	頭部先端わずか欠。長さ5cm。iv _a 類。	70	IP25	釘	脚部欠。i _b 類。
41	MA09	釘	ほぼ完形。長さ5.5cm。iv _b 類。	71	OH22	釘	脚部欠。i _b 類。
42	HM14	釘	脚部先端わずか欠。長さ5cm。iv _a 類。	72	NW03	釘	長さ4.2cm。皿部欠損の可能性あり。ii _a 類か。
43	NA22	釘	ほぼ完形。長さ3.3cm。iv _a 類。	73	OE20	釘	頭部欠。長さ8.5cm。iv _a 類か。
44	OA20	釘	脚部先端欠。iv _a 類。	74	OO21	釘	ほぼ完形。長さ11cm。i _b 類。
45	OE21	釘	脚部欠。頭部丁寧に造り出す。v _a 類。	75	MA09	鍔	茎部欠。身部、身部関とも丸味を帯びた長三角鍔。断面両丸造りか。重量18.1g。篋被部及び茎部に木質部付着。
46	NH01	釘	脚部欠。v _a 類。	76	NV06	鍔	茎尻欠。身部鑄造りか。剝離著しい。重量26g。vi _b 類。
47	OA14	釘	脚部先端欠。v _a 類。	77	SP14	鍔	切先、茎尻欠。身部両丸造りか。茎部断面円形。亀裂、膨張著しく身部側面の剝落多い。重量22.1g。vi _b 類。
48	NW14	釘	脚部先端わずか欠。長さ5.5cm。v _a 類。	78	OJ20	鍔	切先、茎尻欠。身部両丸造りか。重量19.7g。vi _b 類。
49	NQ04	釘	完形。長さ5cm。v _a 類。	79		鍔	身部先端部。縁部に不規則な鋸歯状が認められる。剝落か。切先近くに鑄がある。
50	ID24	釘	完形。長さ6.7cm。v _b 類。	80	TO03	鍔	身部及び篋被部。身部偏平な両丸造り。重量10.1g。vi _b 類。
51	SN01	釘	脚部先端欠。v _b 類。	81	SD07	鍔	篋被部。断面は薄い(3mm)が長い。(6.5cm)を超える。vかvi類。
52	Z	釘	脚部先端わずか欠。長さ5.2cm。vi _b 類。	82	JF25	鍔	篋被部。vi _b 類?。
53	M地区	釘	脚部先端わずか欠。長さ3.1cm。vi _b 類。	83	OX12	鍔	切先欠。全体に偏平で小型。重量7g。vii _c ④類。
54	NV05	釘	脚部先端欠。vi _b 類。	84	PG14	鍔	篋被部及び茎部の一部。
55	MA01	釘	脚部先端わずか欠。3cm。vi _b 類。	85	NN21	鍔	雁股鍔。刃部両先端欠。篋被部断面ほぼ円形。6.6g。viii _b 類。
56	IA16	釘	ほぼ完形。8.5cm。vi _a 類。	86	PQ05	棒状不明品	端部近くに括れをもつ。断面円形の棒状製品の一部。
57	NX05	釘	脚部先端わずか欠。長さ10cm。ii _a 類。	87	SF10	棒状不明品	断面方形。何かの茎の一部か。
58	HN20	釘	完形。長さ9cm。ii _a 類。	88	MO19	棒状不明品	断面方形。何かの茎の一部か。
59	OC17	釘	ほぼ完形。長さ5.8cm。i _a 類。	89	NN03	棒状不明品	断面方形。何かの茎の一部か。
60	OC14	釘	完形。長さ8.5cm。脚部大きく屈曲。i _b 類。	90	JF25	棒状不明品	断面方形。何かの茎の一部か。
61	MG11	釘	脚部先端わずか欠。3.8cm。ii _b 類。				

91	OE19	棒状不明品	断面長方形で、やや湾曲する。	102	NU08	環	断面は7×4mmの角丸長方形。リング内径2.6×2.2cm。
92	NV08	不明品	断面は扁平な菱形。両端部欠。	103	NF01	不明品	リング状のものか。
93	SG06	不明品	頭部に切り込みをもつ楔状製品。	104	L地区	鎌状不明品	全面薄い。片側縁部はさらに薄くなり刃付けされた可能性がある。しかし端部に折り返しの耳があり鎌ではない。
94	OA22	不明品	湾曲した板状製品。	105	HV23	板状不明品	両端欠損。鑿？。
95	SL06	不明品	鎌の篋被に似るが、両先端側が細い。	106	RX01	取っ手？	引出しの取っ手か？。
96	OC10	鍔鉄？	片側端部欠。	107	MJ14	不明品	破損が激しい。鞍金具の一部か。
97	KA09	不明品	両端部欠。断面凹字状をなす。	108	MB05	不明品	断面菱形。両端欠。
98	OC21	鑿？	形状は鑿であるが、鍛えが甘い。片側端部欠。	109	NY07	鋳物片	断面三角形の棒状。両端欠。
99	MP01	不明品	燧鉄に似るが薄い。	110	IB28	不明品	端部近くを直角に屈曲させた板状製品。
100	OE18	鎌？	薄く（2mm以内）片側に刃をもつ。鎌の先端部か。	111	PG18	不明品	薄い板状。端部鋭いが刃になるか不明。
101	HO23	不明品	正方形の鉄板。内面より膨張し厚さ不明。穿孔はない。				

ウ 近世遺構出土の金属器（図版187・188 PL102 第97表）

近世遺構出土の金属器は、そのほとんどを「近世整地土層遺構」として取り上げたため、遺構ごとにとめることができず、出土地点を記してある。

第97表 近世遺構出土の金属器一覧

図版番号	出土地点	器種名	特徴	図版番号	出土地点	器種名	特徴
1	HN12	不明品	先端の三角形状部の一辺は1.5cmほど。先端欠。轡金具か。	14	HT18	折釘	13と同種であるが、いずれも断面方形。長軸側先端欠。
2	NH12	鉄皿	径11cm。高さ2cmの浅い。鑄造皿の一部。表面剝離（特に裏側）が激しく熱を受けたためか。	15	IH18	不明品	13と同種、鉤状の片側欠損。
3	SK2007	鎌	折り返しのつく鎌で先端側欠損。混入品か。	16		燧鉄	両端を細め突出部と造り出し、身部の上端まで巻き上げているが、先端は欠損し不明。
4	HM16	鎌	茎部を直角に屈曲させる型であるが、茎部欠損多く、構造不明。身部は小型で厚手。	17	HP16	燧鉄	低い山形の両端裾部を鉤状に折り曲げ立ち上らせたもの。小型。片側曲げ部欠。
5	HY20	環	断面長方形。	18	HW20	燧鉄	17と同型で大型。半欠。
6	HW20	環	断面長方形。	19	HX21	燧鉄	17と同型で大型。半欠。
7	HX19	不明品	一辺3.5cmの方形鉄板で4隅に穿孔がある。	20	HX19	燧鉄	17と同型。低い山形。両端部欠。
8	HU18	不明品	一辺1.8cmの方形鑄造鉄板。	21	HX19	刀子	身部。基部側欠。
9	HW19	不明品	棒状先端欠。	22	HX18	刀子	身部内湾する小型。傾斜のある刃関をもつ。
10	HX19	不明品	脚部先端欠。壺金具か。	23	HV20	刀子	身部の一部。丸棟、破損多い。
11	HV20	工具？	半楕円形の弦に当る両脇に耳がついたもの。一方の耳は欠損。刃と確定できる部分は認められない。	24	HW19	刀子	茎部。木質部残存。
12	SX22	錠	南京錠。錠穴部破損。	25	HX19	刀子	茎尻部。端部近くに穿孔がある。木質部残存。
13	HR18	折釘	鉤状に折れ曲った製品で、一方は断面長方形で先細で長く、もう一方は断面円形で短い。鉤釘か。	26	IB23	環	一端の開いたリング。
				27	HR18	棒状不明品	断面長方形。何かの茎の一部？。
				28	HX19	不明品	長三角形の板状製品で湾曲する。両端部欠損。

29	HW20	不明品	断面長方形に近い。燧金具の可能性もある。	61	HQ14	釘	脚部先端わずか欠。長さ7.5cm。皿部が基部に対し直角につく。
30	HW19	釘	基部の一部、脚部先端欠。IV _a 類。	62	HK13	釘	脚部先端わずかに欠。長さ9.1cm。60と同型。
31	HI16	釘	完形。長さ3.8cm。iv _a 類か。	63	HX19	釘	脚部先端欠。長さ12cm以上の大型釘。頭部一部欠損がある。
32		釘	脚部先端欠。vi _a 類。	64	HW19	飾金具?	皿状部の縁辺部に欠損がある。ヘアピン状に折れ曲った基部は、板状のものを噛ませ固定するためのものか。
33	HL16	釘	皿部先端わずか欠。長さ6.2cm。vi _b 類。	65	HV15	引手	径3.5×1.8cmの楕円形で深さ7mm。
34	HW19	釘	皿部先端わずか欠。長さ6.1cm。vi _b 類。	66	HN14	鉛製沈子	投網の沈子と推定される。両端に穿孔をもつ。
35	HW19	釘	脚部欠。vi _b 類。	67		不明品	半月形の平面形を呈し、1枚の銅板を型に当てて打ち出したものか。縁部のうち弧側はわずかに凸凹をもち輪花状。端部は折り返され高さ1.7cmのへりとなる弦側には折り返し部はないが、弦中央に幅3mm、高さ5mmの薄い突起をもつ。
36	HL16	釘	脚部欠。vi _b 類。	68	HX21	煙管	雁首。火皿下の脂返しが直角に近く湾曲。ラオにとりつく部分が肩付となる。火皿と首部の接合部に補強帯が巻かれる。
37	HX19	釘	完形。長さ5.2cm。vi _b 類。	69	MS19	煙管	雁首。脂返しの湾曲は大きい。肩付。補強帯をもつ。
38	HS15	釘	脚部先端わずか欠。vi _b 類。	70	OA06	煙管	雁首。首部ほとんど欠損。脂返しの湾曲大きい。補強帯をもつ。
39	HW19	釘	脚部先端欠。vi _a 類。	71	HT18	煙管	雁首。長さ9cmの大型。脂返しの湾曲緩やか。補強帯をもつ。火皿平面三角形に近い。
40	HW19	釘	完形。長さ3.6cm。vi _b 類。	72	NW10	煙管	雁首。火皿欠。湾曲緩やかな脂返し。補強帯ない。
41	HV19	釘	頭部付近。vi _b 類。	73	HW21	煙管	雁首。脂返しの湾曲ほとんどない。
42	HS17	釘	脚部先端欠。vi _b 類。	74	I 0	煙管	吸口。ラオ挿入部より端部側は段差をもって細くなる。
43	HW20	釘	脚部先端欠。vi _b 類。	75		煙管	吸口。ラオ挿入部より急に細くなり端部に続く。
44	HK16	釘	基部の一部と脚部先端欠。木質部錆着。vi _b 類。	76	HX21	煙管	吸口。75と同型
45	HM02	釘	脚部欠。vi _b 類。	77	HX20	煙管	吸口。端部に向け直線的に細くなる。欠損がある。
46		釘	脚部欠。vi _b 類。	78	MI08	煙管	吸口。77と同型であるが長い。
47	HX19	釘	完形。長さ3.6cm。vi _b 類。	79		煙管	吸口。77と同型。欠損がある。
48	HX21	釘	ほぼ完形。長さ3.6cm。vi _b 類。	80		煙管	吸口。77と同型。ラオ側は潰れている。
49	HW19	釘	脚部先端欠。vi _b 類。	81		煙管	吸口。77と同型。欠損多い。
50	HW19	釘	脚部先端わずか欠。長さ3cm。vi _b 類。				
51		釘	脚部先端わずか欠。基部太く急激に細くなり短い。長さ2.4cm。vi _a 類。				
52	HK15	釘	脚部先端欠。ii _b 類。				
53	HU21	釘	脚部先端欠。vi _b 類。				
54	HJ14	釘	脚部欠。亀裂深く入る。i _a 類。				
55	HL16	釘	脚部先端欠。vi _b 類。				
56	HK15	釘	脚部欠。円頭釘か。viii類?。				
57	HV21	釘	脚部欠。ii _b 類? vi _b 類の皿部欠損の可能性もある。				
58	HS23	釘	脚部先端欠。基部深く折り返す。iii _b 類。				
59		釘	脚部欠。本質部錆着。i _a 類。				
60	HV20	釘	脚部欠。断面8mm方形の大型釘で、頭部に角丸長方形の皿がのる。viii類。				

第98表 銭貨一覧

No.	出土地点	層	貨幣名	書体	初鑄年	径	重量	備考
1	SB159		富壽神寶		818	23.5	2.35	完形 埋土(床面近く)
2	SX1245		開元通寶		621	24.5	2.7	〃 8枚一括出土
3	E	I	〃		〃	24.0		略完形
4	H	I	〃		〃	25.0		半欠
5	N	I b	〃		〃	24.5		略完形
6	O	I	〃		〃	24.7	2.5	完形
7	O	I	〃		〃	24.2		略完形
8	O	I	〃		〃	24.2	2.05	完形
9	不明		〃		〃	24.2		略完形
10	ST01		至道元寶		995	24.5	2.0	ST01内の SK1052内出土完形
11	不明		〃		〃	24.8		わずか欠損
12	SB30		咸平元寶		999	24.8	2.55	完形 大型
13	N	I	〃		〃	21.5	1.2	完形 小型
14	SX1245		□徳元寶	真	1005			半欠 「景德元寶」
15	U	I	景德元□	〃	〃	23.5		〃残存 「景德元寶」
16	SX1245		祥符元寶	〃	1009	24.0		一部剝落
17	M	I	祥符通寶		1010	25.0	2.55	略完形
18	H	I	天禧通寶		1018	24.0	1.9	完形
19	M	I	〃		〃	25.5		一部欠損
20	N	I	〃		〃	24.4	3.05	完形
21	O	I	天□□寶		〃			半欠「天禧通寶」
22	T	I	天聖元寶	篆	1023	24.2	3.2	完形
23	SX1245		皇宋通寶	篆	1039	24.6	2.9	完形
24	SX1245		〃	〃	〃			わずか欠損
25	H	I	〃	〃	〃			〃
26	L	I	〃	〃	〃	24.5	3.35	完形
27	L	I	〃	真	〃	25.0	3.05	完形
28	L	I	〃	〃	〃	24.5	2.85	完形
29	M	I	〃	〃	〃	24.7	2.40	完形
30	M	I	〃	篆	〃			周辺欠損
31	M	I	〃	真	〃	24.0	2.4	完形
32	M	I	〃	〃	〃			わずか欠損
33	N	I	〃	篆	〃	24.5		〃
34	R	I	〃		〃			欠損多い
35	T	I	〃	篆	〃	24.2	2.6	完形
36	SB1148		嘉祐元寶	真	1057	25.0	2.5	完形
37	O	I	□祐元□	〃	〃			半欠「嘉祐元寶」
38	P	I	嘉祐元寶	〃	〃	23.7	2.6	完形

39	T	I	嘉祐通寶		〃	24.5	2.85	完形 No. 57と共伴
40	SK1051		熙寧元寶	篆	1068			半欠 No. 71と共伴
41	SK1193		〃	〃	〃	23.5		略完形
42	F	I	〃	真	〃	25.0	3.85	完形
43	M	I	〃	〃	〃	24.5	2.8	〃
44	M	I	□寧元寶	〃	〃			半欠「熙寧元寶」
45	N	I	熙□□□	篆	1068			一部残存「熙寧元寶」
46	O	I	熙寧元寶	真	〃	24.5	3.35	完形
47	O	I	〃	篆	〃	23.5	2.1	〃
48	O	I	〃	真	〃			周辺わずか欠損
49	不明		〃	篆	〃			〃
50	SK1130		元豊通寶	真	1078	24.5	3.5	6枚一括出土 完形
51	〃		〃	篆	〃	24.5	3.7	〃 〃
52	SK1136		〃	真	〃	24	2.65	完形
53	SX1245		元豊□□	篆	〃	25.7		一部欠損「元豊通寶」
54	I	II	元豊通寶	真	〃			周辺欠損
55	O	II	〃	〃	〃	23.5	2.5	完形
56	T	II	〃	〃	〃			7枚一括出土 完形
57	I	I	元□通寶	篆	〃	23.5	2.45	No. 39と共伴 完形「元豊通寶」
58	SK1130		元祐通寶	真	1093	24.0	3.6	6枚一括出土 完形
59	SD04		〃	〃	〃	23.0		周辺欠損
60	M	I	〃	篆	〃	24.5		一部欠損
61	M	I	〃	真	〃			周辺欠損
62	M	I	〃	〃	〃			周辺欠損
63	N	I	〃	〃	〃	24.0	2.0	完形
64	N	I	〃	篆	〃			周辺欠損
65	不明		〃	真	〃	24.5		周辺欠損
66	N	II	紹聖元寶	〃	1094	22.0	2.9	完形
67	O	I	紹□□寶	〃	〃			1/3残存「紹聖元寶」
68	M	I	聖宋元寶	篆	1101	24.5		一部欠損
69	T	I	〃	〃	〃	24.1		〃
70	SK1130		大觀通寶	真	1107	24.5	3.9	6枚一括出土 完形
71	SK1051		政□通□	篆	1111			半欠 「政和通寶」 No. 40と共伴
72	SX1245		政和通寶	〃	〃	24.4	2.6	完形
73	N	I	〃	〃	〃	26	2.6	完形
74	SK1130		淳熙元寶	真	1174	23.2	3.7	6枚一括出土 完形
75	SK1030		大定通寶	〃	1178	25.0	2.2	完形
76	SK1137		〃	〃	〃	25.0		6枚一括出土 一部欠損
77	N	I	洪武通寶	〃	1368	22.5	2.7	完形
78	SK1138		永樂通寶	〃	1408			周辺欠損
79	G	II	〃	〃	〃			周辺欠損

80	H	I	〃	〃	〃	25.1	3.2	完形
81	M	I	〃	〃	〃	24.7		周辺欠損
82	SM1162		寛永通寶	〃				他5枚
83	SX2020 2021		〃	〃		25.1	3.1	完形、背文「文」
84	SX2020		〃	〃		24.5	2.8	完形
85	SX2023		〃	〃		23.0	1.6	完形
86	SX2023		〃	〃		24.8	1.9	完形
87	近世整地土		□永通□	〃				半欠「寛永通寶」
88	〃		寛永通寶	〃		24.5	2.8	完形
89	SD04		寛永通寶	真		24	2.2	完形
90	F	I	〃	〃		25.1	2.5	完形、背文「文」
91	F	I	〃	〃		25	3.4	完形、背文「文」
92	G	I	〃	〃		23.5	2.9	完形
93	H	I	〃	〃		25.1	3.05	〃 背文「文」
94	H	I	寛□□寶	〃				半欠「寛永通寶」
95	H	I	寛永通寶	〃		24.5		完形
96	H	I	〃	〃		24.0		わずか欠損
97	H	I	〃	〃		22.5	2.1	完形
98	M	I	〃	〃		24	2.05	〃
99	M	I	〃	〃		23.5	2.3	〃
100	N	I	〃	〃		23.5	2.7	〃 背文「文」
101	N	I	〃	〃		24.5	2.25	〃
102	O	I	〃	〃		23.5	1.5	〃
103	O	I	〃	〃		23		〃
104	P	I	〃	〃		23		〃
105	P	I	〃	〃		25.1	2.7	〃 背文「文」
106	R	I	寛□□寶	〃				¼残存「寛永通寶」
107	S	I	文久永寶	〃	草文1863	27.1	4.0	完形、背面、青海波文
108	SX1245		□□元寶	〃				¼残存
109	N	II	□□元寶	篆				半欠
110	F	I	□宋□寶	〃				半欠
111	F	I	□□元寶	〃				〃
112	不明		不明					わずか欠損 永楽通寶か？
113	不明		□宋元寶					わずか欠損 聖宋元寶か？
114	F	I	不明					一部欠損
115	I	I	不明					〃

3) 鍛冶関係資料

ここでは鍛冶に関係した資料と、砥石を含めて扱う。具体的に鍛冶に関係した資料として、羽口と鉄滓がある。いずれも現在分類が定まっておらず、個々に表化して説明する(第99~101表)。また両者ともに、特徴的なものを図化したのみで、すべてについて行っていない。しかし説明の表では、すべてを扱っており、図版の欄が空欄となっているものが、図化してないものである。なお鉄滓については、新日本製鉄株式会社伊藤薫氏の分析を載せてある(第7章第3節参照)。砥石についても、表化して説明したが、遺構外出土品には近世まで含んでいる可能性がある。この点は、鉄滓と羽口についても同様である。また、遺物番号の付け方は金属製品と同様である。

ア 羽口 (図版190 PL104 第99表)

第99表 遺構出土の羽口一覧 (外径、内径の数値の上段は炉側径を、下段は鞆側径を示す)

遺構	図番号	出土位置	遺存部分	計測値(mm)			備考
				現長	外径	内径	
SB32		ピット1内	体部	?	70?	20?	炉側に近い、被熱の痕跡なし。通風孔に髓抜の擦痕がある。
		ピット6内	炉側	?	80?	24?	1部に被熱による青灰色部がある。
		床面	炉側先端	?	90?	22?	気泡の多い海線状付着物がある。
		埋土	炉側先端	?	80?	19?	同上
SB47	21	埋土	炉側先端	?	100	23	溶解激しく先端は黒いガラス状をなす。特に下側はガラス状塊が5cmほど突出固化する。側外面は被熱で青灰色となるが、その状況から炉内への挿入角推定40度。胎土と製法は髓抜に1.5~2cmほどスサ入り粘土で肉付けし、同様に横へ継なげて長く、さらにその上へ同程度の厚さの粘土を巻いて成形している。
SB99		埋土	炉側先端	?	?	?	外皮は黒くなめらかなガラス状をなすが、破面は白色の海線状の溶融物が付着。
SB104		埋土	炉側先端	?	?	?	同上
SB120		埋土	炉側先端	?	?	?	同上
SB124		埋土	炉側先端	?	60?	24?	端部黒色ガラス質部をもち、周辺は被熱により紫灰色に変色。
SB125		埋土	体部	?	?	20?	
SB129	22	カマド付近	鞆側	110	70 80	20 20	平面わずかに「八」の字型。先端部なめらかで黒色のガラス質だが剥離面は気泡が目立つ。側外面は端部から40cmほど青灰色に変色。胎土にスサを含まない。
SB182		埋土	炉側先端	?	80?	?	外側面青灰色。胎土に2cm近いスサが入る。
SB203	6	埋土	炉側先端	?	?	22?	胎土にスサが入る。
SB220		埋土	炉側先端	?	?	?	黒色ガラス質物の付着がある。
SB235		埋土	炉側先端	?	80?	22?	多孔質なガラス状付着物がある。胎土にスサを含まない。
SK42		床面	体部	?	80?	22?	外側面の1部に青灰色の変色がある。胎土に1cm余りのスサを混入する。
SK73	2	埋土	完形	142	65 73	20 20	平面先細り型。炉側先端部は溶融し鉄滓と結合して気泡のあるタール状付着物で覆われる。鞆側部は軸に対し垂直に成形され、鞆との結合状況を示す痕跡はない。外側面は板状工具で調整。胎土にスサをわずかに入れる。炉内への挿入角推定32度。
	3	床面	半完形	?	60 70	20 20	先細り型。炉側先端部に気泡をもつガラス状付着物があり、ひき続いて青灰色変色部が4cm程度外側部に広がる。通風孔に髓抜痕がある。スサがわずかに入る。

SK73		—	炉側先端	?	93	?	ガラス状の付着物がある。長石粒多く混入。スサをわずかに含む。		
SK101		埋土	炉側先端	?	?	?	同上		
SK158	3	—	半完形	152	77?	20?	77?	20?	軸側端部欠で長さ不明。中央部の1部を除いて両端とも被熱で青灰色となり端部側は紫黒色のガラス状となる。胎土はわずかで1cmほどのスサを混入する。
	2	—	炉側先端	?	69?	24?			端部気泡をもつガラス状付着物がある。外側面は青灰色に変色。胎土にスサをわずかに含む。
		—	炉側先端	?	?	?			肉厚で大型。多孔質。タール状付着物がある。2cmほどのスサが混入。
SD02		埋土	体部	?	75	24			外側部に一部青灰色の変色がある。スサ痕を残す。
SD17		埋土	体部	?	?	?			胎土中にスサ痕を多量に残す。

II層出土の羽口……9点出土するがすべて形状不明。そのうち中央部片1点を除くとすべて炉側先端付近の破片でタール状の付着物がある。

I層出土の羽口……8点出土。すべて炉側先端付近でタール状付着物がある。そのうち1点は外径80mm、孔径20mm（いずれも推定）の破片。他は細片で計測不可。

イ 鉄滓（図版190 PL104・105 第100表）

第100表 遺構出土の鉄滓一覧

出土遺構	点数	出土位置	特 徴
SB01	1	埋土	指頭大で不定形。水酸化鉄の錆に覆われる。
SB04	2	埋土	1点は卵大で不定形。外皮は黒色のなめらかな面と気泡のある粗鬆な面があり、鉄錆が局部的に発生。破面は気泡がみられる。炉壁の熔融を含み軽い。
SB05	2	床面(中央西寄り)	1点はゴルフボール大の不定形、ほぼ全面に黄褐色の鉄錆が覆う。もう1点は6×4×2cm、100g、外皮はなめらかな肌をもち、赤褐色の錆が覆う。一部流出固化したような突起がある。破面はコークス状の気泡をもつ。
SB13	2	埋土	1点は5×3×1cmの不定形。外皮は凹凸をもつが肌はなめらかで色は青黒い。破面は気泡をもつ。他の1点は指頭大。鉄錆が覆う。
SB15	1	埋土	10×8×3.5cmの平面楕円形碗形滓で重量450gある。表面は凹凸の少ない青紫色で底側は顆粒状の凹凸をもつ粗鬆な肌で黒紫色を呈する。水酸化鉄の鉄錆が覆う。
SB16	5	埋土	ゴルフボール大～卵大。うち2点は扁平で、10×6×2cm、250gの楕円形の碗形滓を1点含む。碗形滓は赤褐色の錆に被われ底側は滴下状の凹凸をもつ。破面は気孔少なく銀黒色呈す。現状の1点の破面は気孔は小さく緻密で磁性をもつ。
SB21	1	床面(西壁際)	ゴルフボール大で扁平。肌は粗鬆で一部顆粒状の凹凸がある。色は紫色。
SB28	1	埋土	テニスボール大の塊状。重量220g。外皮粗鬆。破面は気孔は多くなく、光沢のある黒色を呈する。金属錆による亀裂が入る。比重は高く磁性をもつ。
SB30	1	床面(カマド付近)	9×7×3.5cm、重量380gの一部欠損した碗形滓。表面はなめらかな面と粗鬆な面を合せもつ。底面は気孔があるが多くなく緻密。色は紫黒色ないし青黒色で錆が多く付着する。
SB31	6	埋土	指頭大からゴルフボール大。外皮粗鬆で紫色、破面気孔少なく緻密で錆による亀裂の多いものと破面灰黒色で多孔質なものがある。いずれも水酸化鉄の錆に覆われる（解析試料）
SB32	29	埋土(26点) ピット9内(2点) 貼床中(1点)	29点のうち、野球のボール大1点(250gの不定形塊状。肌は赤褐色で粗鬆。破面気孔をもちコークス状)。碗形滓2点(うち1点は8×6×2cm、150gの楕円形。外皮は粗鬆な紫色、破面コークス状多孔質で黒色。木炭繊維付着。他の1点は青灰色の炉材粘土を付着させた破片)以外はいずれもゴルフボール大から指頭大で不定形である。それらの中には比較的緻密で比重の高いものと、多孔質で比重の軽いものがある。磁性をもつものが2点ある。(解析試料)
SB41		埋土	ゴルフボール大で不定形。外皮はなめらかな面と粗鬆な面を合せもつ。破面はコークス状多孔。青灰色。
SB42		埋土	指頭大

SB43	1	埋土	6×4×3cm、重量139gの塊状。外皮は粗鬆で凹凸がある。木炭痕多数。赤褐色の鉄錆に覆われる。
SB48	1	埋土	指頭大。外皮なめらか。破面気泡多い黒色。
SB52	1	埋土	10×6×3cm、重量310gの椀形滓。表面は気泡なく、底面、破面は気泡多く粗鬆。色は黒色で部分的に鉄錆がある。表面を中心に錆色に変色した木炭が付着する。一部に青灰色の炉粘土が認められる。
SB66	2	床面	1点は6×4×1.5cm、重量70g。しわ状の凹凸のある紫黒色の外皮と、コークス状の気孔の多い黒色の破面をもつ。他の1点は椀形滓の一部で7×6×3.5cm、重量250g。表面は凹凸があるが肌はなめらかな黒色で一部に木炭痕を残す。底側は粗鬆。破面は気孔はあまり多くない。
SB69	1	埋土	9×7.5×2.5cmで一部欠損した椀形滓。表面は凹凸が激しく凹部には木炭繊維が噛み込まれる。底面は米粒か顆粒状の凹凸をもつ粗鬆な肌。破面は気孔はあまり多くない。赤褐色の錆に覆われる。
SB73		埋土	小卵大の塊状。紫色の粗鬆な外皮をもつ。水酸化鉄の錆に覆われる。
SB74		埋土	ゴルフボール大。黒色で粗鬆な外皮。破面の気孔はあまり多くない。
SB76	1	床面(中央)	半欠の椀形滓。7×7×3cm、重量270g。表面、底面ともに粗鬆であるが凹凸は大きくない。紫または黒紫色を呈す。破面は一部コークス状多孔質であるが一部は緻密。黒色の錆が局部的に発生。
SB80	2	埋土	1点は椀形滓の一部か。3mmほどの粗鬆で赤黄色の外皮の内側はコークス状の気泡のある黒色滓である。他の1点は指頭大。
SB81	1	埋土	椀形滓の細片か。外皮粗鬆で一部に鉄錆がある。破面にコークス状の気泡をもつ。ともに黒紫色。
SB86	1	床面(中央南東寄り)	不定形な卵大の塊状。外面粗鬆で黒紫色。錆がほぼ全面覆う。比重大。わずかに磁性がある。
SB94	5	埋土	うち2点は卵大で形状から椀形滓の一部か。ともに厚さは1.5cm程度。外皮はなめらかな凹凸と、気泡をもつ凹凸、さらに滴下状の凹凸部と合せ持つ。破面は比較的緻密な灰黒色。他の2点は指頭大、及びゴルフボール大の塊状。
SB96	2	埋土	ともに卵大。うち1点は椀形滓と推定されるもので外皮は粗鬆。皮面は気泡少なく比重高い。もう一点は不定形、気泡のある小さな凹凸が全面に目立つ。
SB99	2	埋土	指頭大とゴルフボール大でともに不定形。顆粒状の凹凸をもつ粗鬆な肌で紫黒色。
SB101	1	埋土	ゴルフボール大で一面は紫黒色のガラス状、一面は気泡のある粗鬆な肌。比重小さい。
SB102	1	埋土	半径8.5cm、厚さ3cmの円形の椀形滓、重量390g。上面は米粒大から小豆大の凹凸をもち、底部は凹凸は少ないがなめらかではない。破面はコークス状の気泡をもつ。
SB114	1	床面(中央)	ゴルフボール大の不定形塊状。外皮粗鬆、破面コークス状気孔多く、光沢がある。
SB115	3	埋土	1点は9×7×4cm、重量380g、平面楕円形で椀形滓の可能性はある。表面は気泡による顆粒大か小豆大の凹凸が全面を覆い、底面は凹凸は少ないが粗鬆な肌である。ともに赤褐色な錆が覆う。
SB118	2	埋土	ともにゴルフボール大の不定形。1点は破面が気孔はあるが黒光りし、他の1点は気泡による粗鬆な紫黒色を呈する。
SB120	2	埋土	1点は卵状で、一面は気泡によるしわ状の凹凸があり、もう1面は気泡は少ないが肌は粗鬆。青黒色。比重大さい。他の1点は白色から乳白色の軽石状部分をもち比重が小さい。ゴルフボール大の不定形。
SB122	4	床面(中央西寄り)	2点は卵大の扁平なもので、外皮は凹凸は少ないが肌は粗鬆。破面は気孔がみられる。他の2点はゴルフボール大の不定形。気泡が多く比重が小さい。木炭繊維が付着。ともに紫黒色を呈するが、前2点は錆化が進む。
SB124	6	床面(中央から北側にかけて散在)	塊状の1点を除き他は扁平。塊状の1点は卵大で不定形。灰黒色な粗鬆な肌で、破面は比較的緻密で比重は高い。扁平なものうち3点は7~8cm×5~6cmで、うち2点は外皮粗鬆で紫黒色だが、黄褐色の錆が覆う。他の1点は片面はなめらかな黒色で、もう片面には青灰色の炉壁が付着する。他は指頭大。
SB125	2	床面(南西隅)	1点は8×4×1.5cm、重量100g。外皮粗鬆で1面には木炭繊維が多数付着。褐色の錆が覆う。破面は多孔質で紫黒色。もう1点は10×8×3cm、重量350gの楕円形滓。上面は凹凸があまりなく底側は顆粒状ないし滴下状の凹凸をもつ。赤紫色ないし青紫色を呈す。破面は小さな気孔をもつコークス状で青黒色。
SB127	1	埋土	ゴルフボール大。凹凸多く褐色の錆が覆う。比重高い。
SB142	1	埋土	指頭大。粗鬆な肌。褐色の錆が覆い亀裂が入る。

SB156	1	埋土	5×4×2cm、重量100g。カマボコ状をしており腕形滓の一部か。上面は比較的なめらか、底面は小さな凹凸が多い。破面は気孔少なく比重高い。赤黒色を呈する。
SB163	1	埋土	指頭大で20g、比重が高い。外皮は厚く、青白色でわずかに気泡をもつ。内部は青紫色で鉄錆がつく。磁力がある。
SB167	1	埋土	ゴルフボール大で不定形。表面滴下状及び顆粒状の凹凸がある。外皮は褐色の錆に覆われるが破面は紫色を呈す。わずかに磁性を示す。
SB169	1	埋土	3×2×2cm、重量30gで比重が高い。黒光した岩石質で一面は鉄錆が覆う。
SB174	1	床面	6×6×2cm、重量255gで比重が高い。腕形滓の一部。上面は凹凸が大きく木炭を噛み込む。底面は凹凸は小さいが一部気泡もあり粗鬆。破面は緻密で青黒いが銀白色に光る。鉄錆が覆う。磁力をもつ。
SB182	1		7×7×4cm、重量355g。外皮は小さな凹凸があるが肌は比較的なめらか。青色ないしは赤紫色を呈す。破面は気孔の小さなコークス状で黒色である。
SB187	1	床面(中央北西寄り)	7×4×3cm、重量175gで比重が高い塊状。凹凸多く粗鬆。表面全体に鉄錆が覆う。
SB191	1	埋土	5×3×1.5cmで扁平で湾曲。肌は粗鬆で破面は小さな気泡をもつ。
SB196	2	埋土	1点はゴルフボール大不定形、凹凸はげしい、表面はガラス状であるが内部は気泡多く海線状。比重小さい。
SB202	1	埋土	指頭大。外皮は茶褐色で粗鬆な肌。
SB207	2	埋土	1点は卵大、もう1点はゴルフボール大。いずれも外皮粗鬆で局部的に赤褐色の錆が発生。破面は気泡が認められるが多くない。
SB209	1	埋土	指頭大で扁平。青紫色で粗鬆な肌。鉄錆が局部的に発生。磁性がある。
SB224	1	埋土	指頭大。外皮精密な紫色を呈す。
SB247	2	埋土	1点は4×3×3cm、重量85g。1点は指頭大。いずれも水酸鉄の錆で覆われる粗鬆な肌。破面気孔ほとんどなく青紫色の錆が発生。わずかに磁性がある。
SB248	1	埋土	指頭大。赤褐色な粗鬆な肌。
SB251	1	カマド内	4×2×0.8cm。青黒色。一部鉄錆発生。気泡多くコークス状。
SB263	2	埋土	1点は5×4×2cm、重量135g。もう1点は4×3×2cm、重量70g。いずれも水酸化鉄の錆に覆われる。破面は気孔があるが比較的緻密である。
SK73	51	埋土	ゴルフボール大がわずかなり、ほとんどは指頭大、外皮が青黒色でなめらかな肌、内側が紫色のもろい海綿質であるものと、内外とも紫色のもろい海綿質であるものがある。(解析試料)
SK118	1	埋土	親指指頭大。外側は粗鬆な肌。破面は青黒くコークス状の気孔をもつ。比重は高い。
SK120	1	埋土	ゴルフボール大で不定形。外皮青黒色の粗鬆な肌。破面コークス状。比重大。
SK126	1		ゴルフボール大で不定形。外皮は気泡があり粗鬆。気孔があり灰黒色。コークス状を呈す。
SK129	1	壁土	ゴルフボール大で不定形。外皮一部顆粒状の凹凸をもつ粗鬆な紫色の肌。破面はコークス状で光沢のある黒色を呈す。
SK168	1		ゴルフボール大で不定形。外皮は凹凸少ないが肌はなめらかでない。比重が高く磁性をもつ。
SK21	1		ゴルフボール大で不定形。外皮青黒色の粗鬆な肌。破面コークス状。
SK1057	10		指頭大。いずれも海綿状で軽い。
SK1144	11		指頭大。いずれも海綿状で軽い。
SK1201	1		8×5×1.5cm。重量195g。腕形滓か。肌は上面粗鬆で木炭を深く噛み込む。底面は小さなしわ状の凹凸をもつ。破面は気孔の多い部分と緻密な部分がある。
SD06	1		指頭大。青黒色の粗鬆な肌。やや磁性がある。
SD17	2		1点はゴルフボール大。紫色の粗鬆な肌。比重高くわずかな磁性がある。他の1点は炉壁をとりこんだ海綿状の比重の軽いもの。
SD18	2		ゴルフボール大の不定形。
SD19	2		ゴルフボール大と指頭大。

I 層の鉄滓

全部で34点。うち塊状が15点、扁平状が13点、椀状が6点ある。塊状で大きくて卵大。ほとんどはゴルフボール大前後の不定形。そのうち表面は凹凸が激しいが肌はなめらか、内部は気泡多く海綿質で軽く、つやのない黒色を呈するものが8点、形状は同様であるが内部がやや緻密で鉄錆を伴うものが5点、表面の凹凸は少なく、内部が緻密で比重の大きいものが2点ある。扁平なものは径が7cm前後のものと同径前後のものが多く、鉄分の残留が多いものと少ないものがある。肌は大きな凹凸はないが粗鬆で、破面はコークス状を呈するものが多く、色は褐色の錆の下は青黒、灰黒、赤紫、青紫色等を呈する。うち磁性をもつものが1点ある。椀状はいずれも破片である。表面の凹凸は激しくないが粗鬆、底面は気泡のため小さな凹凸がある。

II 層の鉄滓

31点出土。うち塊状が13点、扁平状が16点、椀状が2点ある。塊状は卵大からゴルフボール大前後の不定形であるが、I層より大き目。塊状のうち8点は親指指頭大で気泡の多い粗鬆な肌をもつ比重の軽いもの。他はテニスボール大の不定形で、赤褐色の錆を付着し、表面は米粒大の凹凸をもった比較的比重の高いものである。扁平で不定形の形状をもつものは径50mm前後が多く、中には80×90×30mmという大きいものもある。赤褐色の錆を付着し、破面はコークス状の気孔をもつが比較的緻密である。これらの中には椀形滓の破片が含まれる可能性がある。椀状を呈するものはいずれも破片であるが、1点は70×70×35mmの半楕円形を呈し340gある。上面は凹凸はあるが肌は比較的なめらか、底面は小さなしわ状ないしは米粒状の凹凸をもつ。破面はコークス状に似るがあまり多孔質ではない。

ウ 砥石 (図版191・192 第101表)

第101表 砥石一覧

遺構	番号	特徴
SB04	30	石質硬砂岩。自然石を縦に半割して成形。割面以外はわずかに磨いた程度でほとんど自然面を残す。割り面を下にして使ったらしくその反対側中央部に細かい擦痕が認められる。
SB27	8	石質細粒の砂岩、小口1箇所を除いて全面に磨き痕が認められるが、主に使用された面は3面。正面、側面とも内湾する。正面は縦位にその裏面は斜位に擦痕が入る。
SB31	35	半欠。石質硬砂岩。全面に研磨痕を残すが主として使用された面は正面と1側面。正面は中央部のみが縦長に研ぎ凹められているが、その中にはひっかいたような太い擦痕が認められる。
SB63	52	石質、中粒の砂岩で硬質。3面使用。縦位の擦痕をもつ。
SB70	6	端部のみ残存。石質は細粒の砂岩。4面使用でそれぞれ湾曲。
SB111	100	石質、細粒の砂岩。4面使用。そのうち一面は尖ったものあるいは幅の狭いもの(5mm)の研磨に使われている。
SB86	35	石質、頁岩。研ぎべりが激しく薄い。縦位に使用。
	33	石質頁岩。4面使用でそれぞれ内湾する。縁部に横位の擦痕があるが、使用痕でなく製作痕か。一方の小口には凹みがあり紐通し孔の可能性がある。他の小口は研磨されていないが、細かい擦痕が斜位に入る。
	34	石質頁岩。4面使用。2面内湾。ほとんどは縦位の擦痕。1面には左右から付けられた細い斜位とやや深い縦位の擦痕がある。針状のもの研ぎか。
SB117	4	残存部一部で形状不明。石質砂岩。正面に細くて浅い擦痕が認められる。
SB135	9	一部欠損。石質は緑色片岩。全面研磨され丁寧に成形される。両面とも平滑に使われており、置き砥石で刀子などを研いだものだろう。
SB172	13	一部残存、石質凝灰岩。4面とも使用され、それぞれ内湾する。
SB191	24	一部残存。石質凝灰岩。側面も研磨される。両面ともわずかに内湾。
SD17	74	石質、中粒の砂岩で硬質。半割したのみで、自然面をそのまま使用。ほとんど研ぎべりが無い。尖ったものを研いだと思われる細くて深い1条の擦痕がある。

PS01	1	両端欠損？。石質砂炭。4面使用し、いずれも中央部内湾。
NP19	2	石質凝灰岩。4面使用。端部研ぎべりで刃状に尖る。
MC01	3	残存一部。石質凝灰岩。4面使用。端部研ぎべりで刃状に尖る。
LX02	4	石質凝灰岩。4面使用。両端研ぎべりで刃状に尖る。
LI02	5	半欠。石質凝灰岩。二面使用も全体に薄く、中央部内湾。
FL05	6	半欠。石質凝灰岩。一面使用。端部研ぎべりで刃状に尖る。
NV02	7	石質砂岩。自然面をほとんどそのまま使用。一面のみわずかな面的な研ぎべりと細くて深い線条痕が1本入る。
HO22		自然石のまま。両端部に敲打痕をもつ。

(4) 文字関係資料

ア 墨書土器・刻書土器・篋書土器

まず、それぞれの定義について簡単にふれておきたい。

墨書土器はともかくとして、後二者については、他に線刻、刻線文、陰刻、ヘラ記号等と称せられる場合もあり、その使われ方もまちまちであるというのが現状である。長野県においては、かつて岡田正彦によって次のように定義され（岡田1973、1978）、ある程度定着しつつある。

『墨書土器』は文字、記号を墨がきした土器であり、絵画は画くとの観念から『墨画土器』と称する。（中略）『刻書土器』は文字を篋状工具等により土器に刻み記したものをいう。（中略）従来、一般に呼称されていた篋書土器の名称では篋状工具以外の工具——例えば、鋭利な鉄製品で書かれたものは、厳密に包括できないことになり、また、窯印と称せられる記号と文字とでは、おのずとその持つ意義に相違がみられることから、あえて『刻書土器』と称することとした。もちろん文字も正確には記号であるが、それぞれの内容に多様性があることを考慮し、文字以外の記号を陰刻した土器類は、仮に『刻印土器』と称しておきたい。窯印では焼成後陰刻された土器は包括できず、刻印必ずしも窯印を意味するとは断言できないからである。墨書はすべて焼成後なされるのに対し、刻書は焼成前にもおこなわれる。」

しかしこの定義も、『刻書土器』について、焼成前に施されたものと焼成後に施されたものが一括されてしまう点、また、『刻印土器』について岡田氏は特にふれておられないが、「美濃国」刻印土器のように、印体を用いて施印されたものと名称のうえで混乱する心配がある点など、問題が多いと思われる。前者についていえば、焼成前のものは、発注者からの依頼によるものが含まれるにせよ、基本的には生産の段階（生産地）でのものであり、焼成後のものは使用の段階（消費地）でのものである。ここには基本的な違いがあると思われる。また後にふれる（第7章第4節）ように、焼成前のものと焼成後のものとは、その出現の時期に差異があり、後者は墨書土器の盛行する時期に見られるものであるが、前者はそれに先行するものである。以上により、両者は区別して整理する必要があると思われる。また『刻印土器』については、墨書にも記号様のものが存在するが、それを特に区別していないこと、文字と記号とを厳密に区別することは困難なこと、印体を用いた刻印土器との混乱を招く心配があることなどから、特に記号のものを区別する必要性は今のところ認められず、また、氏の言われるような意味で『刻印土器』の名称を用いることは適当でないと考えられる。むしろ施文の段階（場）と施文方法の違いとによって、分類することの方がより妥当であろう。

このような観点から、名称については今後さらに検討される余地はあるものの、本稿では以下のように定義し記述をすすめていきたい。

墨書土器——文字・記号・絵画などを墨書きした土器。朱書のものも含まれようが、本遺跡では出土していない。

筆先を整えた跡あるいは試し書きと思われる墨痕のあるものは、本来転用硯や墨溜めと同様の範疇でとらえるべきものであろうが、識別の困難なものもあるので、本稿では広義の意味でこれに含めておきたい。

刻書土器——土器焼成後に、釘状工具などにより文字・記号・絵画などを器面に刻み記したもの。

篋書土器——土器焼成前に、篋状工具もしくは釘状工具などにより文字・記号・絵画などを器面に刻み記したもの。

刻印土器——土器焼成前に、印体を用いて文字・記号などを器面に押印したもの。本遺跡では出土していない。

以上のように分類した場合、本遺跡では、墨書土器253点、刻書土器14点（内3点は墨書と同一個体）、篋書土器13点（内1点は墨書と同一個体）が出土しており、その数は県下随一のものである。それらをまとめて第102・

103表、図版193～図版206に示したが、ここでは遺構ごとにその概要を記したい。出土状況について特に記さないものは埋土中の出土である。

なお、墨書の中には重ね書きしたと思われるものがある。それについては図中スクリーントーンの濃淡で表現してある。また、刻書・篋書は原則として拓影を掲載したが、刻書には極めて線が弱く拓影では表現できないものがある。それらについては実測図を載せた。

SB03 (図版205 PL111)

篋書土器1点。須恵器杯の底部外面に、鋭利な棒状工具によって「田」と記されている。欠損しているが、SB175、SB199の例と同様「田中」であろう。

SB05 (図版205)

篋書土器1点。やはり須恵器杯の破片で「中」の篋書をもつ。切合い関係をもつSB03からの混入であろう。やはり「田中」であろうが、SB03の「田」とは接合しない。

SB06 (図版193 PL106)

墨書土器3点、刻書土器1点。1は墨痕あざやかで、一見「力」のようにみえるが、どのような文字を表現したものであるのかは不明である。白く抜けている部分は筆が割れたためのもではなく、意図的に縁どりをしたものである。SB111の14に、縁どりをし中を塗りつぶした例があるが、本例も同様のものではないかと思われる。4は墨の残りが悪く判読できなかった。7は2～3文字記されている。「□田加」であろうか。墨痕のとらえられる範囲で図示したが、判読は困難である。

8は黒色土器杯A IIの底部内面に「×」と刻書されている。

SB11 (図版193 PL106)

墨書土器1点。体部外面に横位に記され、墨の残りは良くないが、「西寺」と読むことが可能である。

SB17 (図版193)

墨書土器3点。いずれも器面の汚れのため判読困難である。墨痕の確認できる範囲で図示した。

SB20 (図版193)

墨書土器3点。5は墨痕のみえる範囲で図示したが判読は困難である。6、7は小片で判読不能である。

SB25 (図版193 PL106)

墨書土器2点。1は黒色土器A杯A IIの完形品で、体部外面に正位で「南」と記されている。4は小片のため文字は不明である。

SB26 (図版193・194 PL106)

墨書土器4点。4は「蕪」と読め「蘇」と同字である。同様のものがSB267に1点、「蘇」と読めるものがSB189に1点あるが、筆跡は異なるようである。7はSB83、SB87などにみられる「𠂇」であろう。1・13は欠損のため判読できなかった。

SB32 (図版194 PL106・111)

墨書土器2点。底部はともに「加」であるが、筆跡は異なる。308は体部外面にも1字墨書されているが、摩耗しており判読できなかった。「加」は同期の遺構に複数みられる。

SB46 (図版194 PL106)

墨書土器1点。体部外面に正位で「財富加」と記される。「財と富とを加える」の意であろうか。各地にみられる「財集」・「富集」などと同様、財と富とをめぐる呪儀に関わるものであった可能性が高い。なお、SB188から「財□」が、遺構外から「富」が出土しており、同様の性格が考えられる。

SB48 (図版194)

灰釉陶器に墨痕が認められるものが1点出土した。底部内面に多くの筆の痕が残されているが、文字とはならない。底部外面のものは墨痕薄く判読不能である。筆先を整えたものか試し書きに使用されたものと思われる。

SB49 (図版194)

墨書土器3点。内1点は篋書を合せ持つ。4は「万」であるが、これはSB111を中心に多数出土しており、本遺跡の墨書土器を代表するものである。「万」の書き方にはいくつかの種類(207ページ参照)があるが、本例の場合には一画ずつ筆を入れている。一画めの書出しにあたる部分は、筆が多少荒れているようではあった感じをもち、他の部分は鋭い感じで筆が入っていて、筆の運びが異なる印象が強い。8は上部が欠損しており判読不能。底部外面に「×」の篋書がある。7は偏の部分が判読できず、不明である。

SB50 (図版194)

墨書土器1点。墨痕の確認できる範囲で図示したが、「加」の可能性が強い。

SB53 (図版194)

墨書土器1点。文字の下半部は器面が汚れており、肉眼ではほとんど読みとることができない。赤外線フィルム撮影による写真から「子」と判断した。

SB55 (図版194)

墨書土器1点。残存部がわずかであり判読不能である。

SB63 (図版194)

墨書土器1点。底部外面に「加」と墨書されている。底部内面は転用硯として利用されている。

SB64 (図版194)

墨書土器1点。小片であるが、残存部から「九」の一部と思われる。

SB72 (図版194 PL111)

墨書土器2点、刻書土器2点。1の偏は「方」であろうが、隣の部分が欠損のため判読不能である。15は小片のため判読できなかった。

2は底部内面に大きい弱い線で「×」と刻書されている。14は「~~木~~」の刻書の上に、細く弱い線が何本か重ねられている。

SB77 (図版194)

墨書土器1点。体部外面に横位で「木」と記されている。

SB78 (図版195)

墨書土器1点。底部外面に「加」と墨書されている。底部内面は朱墨の転用硯として利用されている。

SB83 (図版195 PL106)

墨書土器1点。「𠂔」と墨書されている。同様の文字がSB26、SB87と遺構外出土のものにみられる。「氏」のようにも見えるが、「氏」は別にあり、一応別字と考えておきたい。

SB87 (図版194・195 PL106・111)

墨書土器3点、刻書土器3点が出土した。墨書土器では、12は欠損のため判読できない。「万」の一部、あるいは2字となる可能性も考えられる。13はやはり欠損のため判読不能である。6は「𠂔」である。同時期に複数みられる文字であるが、読みは不明である。

3・5・11は刻書土器である。3は何らかの記号であろうか。5は黒色土器A碗Aの底部内面にIII—eタイプの「万」が刻まれている。同様のものはSB111にみることができる。11は口縁部から底部に向かって矢印形の記号が刻まれる。体部外面に刻書された例としては、本遺跡唯一のものである。

SB90 (図版194)

墨書土器の小片が1点出土しているが、欠損部が多く判読不能である。

SB91 (図版194・195)

墨書土器5点。20は灰釉陶器碗Aの底部内面に墨痕が残るが、薄くて判読不能である。また、その上にはほぼ全面に薄い墨痕がのっている。わずかに摩滅痕もみられ、転用硯として再利用された可能性がある。他は黒色土器Aの小片で、文字の判読は不能である。

SB94 (図版194・195 PL106)

墨書土器3点。43・44は小片のため判読困難であるが、43は「長」の可能性もある。42は体部内外面に少なくとも10字以上が記されている。内面では「申」、「田」、「石」などが、外面では「在」が読みとれる。文字により墨に濃淡があり、筆跡も同一のものではない。複数の手によって習書されたものか、あるいは何らかの意味をもった寄書きであるのか、その性格については明らかではない。

SB95 (図版195)

墨書のある須恵器の小片が1点出土している。欠損しているが、残存部より「九」の一部と思われる。

SB96 (図版195)

墨書のある土師器の小片が1点あるが、判読は不能である。

SB98 (図版195)

墨書土器1点、土師器皿Aの体部外面、焼成時の割れを繕うかのように「〇」が墨書されている。対照する位置にも同様のものが記されている。

SB100 (図版195)

墨書土器1点。小片であり、文字の一部が残るのみである。他からの混入である。

SB102 (図版195 PL107)

墨書土器9点。内6点が「万」であるが、すべて筆跡が異なる。6・10・12・13はIII—eタイプ、31はIII—a②、38はII—aである。31が底部外面に記される他は体部外面に記されており、内正位が2点(12・38)、逆位が3点(6・10・13)である。28は灰釉陶器皿Bの体部外面に、釉のかかっている部分から無釉の部分にかけて文字が記されている。釉の部分は墨がほとんど残らず、文字を読みとることは困難であるが、なんとか「木」偏を読みとることが可能である。旁は不明である。この例は灰釉陶器の釉の上にも墨書されることがあることを示している。釉上は墨ののりが悪く、また消えやすい。このことは、墨書が何度も繰り返しかえし使用されることを前提になされたものではなかったことを示唆している。底部内面は転用硯として再利用されており、内外面に墨痕が点在している。39と図示していない1点は欠損のため判読できない。

SB103 (図版196 PL107)

墨書土器5点。12は灰釉陶器の椀で、体部外面の施釉部分から無釉の部分にかけて墨書の痕がみられるが、墨の残りが悪く判読できず、図示も困難であった。底部内面は転用硯として使用されている。他はいずれも土師器である。6は「大」、19もややバランスが悪いものの「大」と判断される。7・20はともに文字のごく一部しか残っておらず判読不能である。

SB108 (図版196)

墨書土器1点。「广」である。

SB110 (図版196 PL107)

墨書土器2点。4は黒色土器Aの体部外面に「調」と逆位で記されている。対照する位置にも墨痕らしいものが認められるが、墨書であるかどうかははっきり確認できなかった。12はIII—bタイプの「万」であろう。

SB111 (図版196~198、205 PL107・108・111)

35点の墨書土器と4点の刻書土器(内1点は墨書と同一個体)が出土しており、本遺跡で最も多くの文字資料を有する。このうち、墨書30点、刻書3点(内1点は墨書と同一個体)は「万」と読むことができ、「万」を紐帯とする何らかの結合のあったことを示している。

「万」の書き方にも別記のように様々の種類があり、多くの書き手によって記されたものであることを示唆している。また、これらの中には明らかに、二度書き(重ね書き)したと思われる痕跡を残しているものがある。12・24・40などは、細く濃い墨で書かれたものの上に、太くやや薄い墨で重ね書きしている。24の場合、III—bタイプであるが、下書きのものはIII—fタイプであったことが読みとれる。こうした例が、手本をなぞる習書的なものに由来するものなのか、文字の修正によるものであるのか、または別の意味が

あるものなのかは明らかではない。さらに、重ね書きしたのが、同一人物であったのか否かについても不明である。また、14の体部外面の例は、最後の部分でいったんはねた後、筆を置き直して再度はねているように見えるが、この部分は細い筆で縁どりをし、中を塗りつぶしたような形跡がみられる。同様の例はSB06の1にも見ることができたが、これらは文字を知って記したのではなく、文字の形を模して写したものと見える。墨書が識字層によって為されたものばかりではないことを示しているように思われる。

刻書はいずれもIII-eの「万」であるが、これにも「万」と「丌」の二つのタイプがあり、書き手が複数であった可能性がある。39は墨書と刻書とともに持っており、刻書の「万」も墨書と同じ意味を持っていたことがわかる。また、体部外面や内外面に「万」を複数記す例が多いのも本址の特徴である。これらはすべて埋土中からの出土であり、すべてがこの住居址に直接伴うものとは言えないが、いずれにせよ、この時期に多数の人によって「万」という文字が記され、それを紐帯とした何らかの営みがあったことは確かである。また、それを記したのが必ずしも文字を自由にあやつれる者ばかりではなかったということも、推定することができるのである。

このほか、51の「休」も同時期に複数みられるものである。98は「榛原」である。「はいばら」と読むことができ、埴原牧跡（松本市中山）との関係が注目される。

遺物は、ほとんどすべてが床面から浮いた状態で出土しており、住居廃棄の際に埋め戻した土とともに投棄されたものと考えられる。

SB112 (図版198 PL108)

墨書土器1点。須恵器杯蓋の内面に「大」と記されているが、やはり重ね書きの痕跡がみとめられる。

SB118 (図版198)

墨書土器1点。灰釉陶器碗Bの底部破片である。外面に墨書があり、「人」偏が推定できるが、文字の残存部が少なく判読は不能である。

SB126 (図版198)

墨書土器が1点あるが、小片のため判読できない。

SB128 (図版198)

墨書土器1点。偏側は「余」と思われるが、旁側が欠損しており判読不能である。

SB133 (図版198 PL108)

墨書土器が2点出土した。いずれも「万」である。1は土師器の杯AIIで、内外面に墨書が認められる。底部内面のものには、重ね書きもしくは筆を置き直した痕が認められる。体部外面のものは欠損が大きく判読できないが、「万」であった可能性が高い。両者は明らかに筆跡が異なっており、同一個体に複数の人物によって墨書されることもあることを示している。

SB135

墨書土器が1点あるが、摩耗が激しく判読不能であった。図示してない。

SB139 (図版198 PL108)

墨書土器5点出土。6は黒色土器の体部外面に、近接して二種類の文字が記されている。「キ」は上半部が欠損しているが、「千」もしくは「干」の可能性も考えられる。これと「巾カ」とは筆跡が異なる。また「キ」は摩耗して墨痕も薄い、「巾カ」の方は墨痕あざやかである。時期を違えて異なる手によって記されたものと思われる。16は残存部から判断してSB144・10と同様「縣」であろう。3・15・17は、欠損あるいは小片のため判読不能である。

SB141 (図版198)

墨書土器の小片が1点あるが、判読は不能である。

SB144 (図版198・199 PL108)

墨書土器10点出土。本址は6期に比定されているが、該期の遺構中最も多く墨書土器を有する住居址である。

判読できないものを含めてすべて別の文字である。18は「吉」であるが、図で濃く示した部分のみ極端に墨が濃い。これは埋没中の摩耗の結果、墨の濃さにむらができたというような残り方ではなく、この部分を後に書き足したという感の強い残り方である。6は「文□寺」であろう。二字目は「十」とも「中」とも見えるが、はっきりしない。SB11の「西寺」とともに、寺の存在を示唆するものとして注目される。7は「氏」。20は文字の左半分が欠損しているが、「舎」と読むことが可能である。23は墨の残りが悪いが、「□田」、「下之□」の他「子」が二箇所に記されている。いずれの筆跡も別のものである。「子」の内一方は「□田」の上に重ねられており、「子」は前二者より後に記されたものと思われる。24は墨も薄く文字もわかりにくい、「朋」ではないかと思われる。10は「縣」であろう。これにも薄い墨で部分的に重ね書きしている部分がある。そのあり方からみて、形を整えるための修正であろう。他はいずれも欠損のため判読不能である。

前述のように、10点の墨書はすべて別の字句であり、「文□寺」、「舎」など特殊な場所を表現していると思われる字句を含むなど、注意すべき要素を持っている住居である。

SB145 (図版199 PL108)

須恵器杯蓋の内面に、「廣」の墨書と一直線の大きな傷をもつものが1点ある。これは焼成後のものであり深く大きな傷であるが、果たして意図的に刻まれたものであるのか、刻書土器の範疇に入るものなのかどうかについては疑問が残る。

SB160 (図版199 PL108)

墨書土器3点。15は「木」と読めるが、他は小片のため判読不能である。

SB164 (図版199)

墨書土器の破片が1点出土した。一部欠損しているが、「九」であろう。

SB165 (図版199)

墨書土器1点。墨痕が薄く判読困難である。墨痕の見える範囲で図示した。

SB168 (図版199 PL108)

墨書土器2点。2は墨が薄く読みとりにくいが「南」と読めそうである。他の1点は小片のため判読できない。

SB170 (図版199)

墨書土器2点。いずれも欠損部が大きく判読できない。

SB172 (図版199 PL108・109)

墨書土器2点。4は「万」と読んだが、あるいは右上部に一部重なって小さな別の一文字があるかもしれない。8は墨痕ははっきりしているものの判読は困難であった。3文字で、2字め3字めはおそらく、「子」であろう。1字目については、「財」の可能性があり、「財子」と読めることになる。これが「財部」の姓と係わるものであるのかどうかは文献でも確認できず、何ともいえない。同じ時期に「財口」(SB188)や、「財富加」(SB46)があり、それらとの関連も考えられる。但し、「財」の筆跡はこれらのものと随分異なる。

SB175 (図版200 PL111)

篋書土器3点。3は杯A IIの底部外面に「×」が、7、8は、杯蓋の外面に、つまみ部分から口縁部に向かって「田中」と記されている。SB03、SB05、SB199出土のものと同じ筆跡である。

SB181 (図版200)

墨書土器3点。3は「休」であろう。8には複数文字記されている。一方は「子」であるが、もう一方の文字は欠損のため判読不能である。並列しているが一続きのものとは思われない。後者は横位の可能性もある。他の1点は小片であり、判読不能である。図示してない。

SB182 (図版200)

墨書土器1点。底部外面と体部外面に2～3か所墨書されているが、いずれも文字のごく一部が残るのみで判読不能である。図示してない。

SB188 (図版200 PL109)

墨書土器4点。11は一応「子」としたが、欠損しており形がやや不自然であるので、別の文字の可能性もある。9は灰釉陶器の大形の皿Cに横位で2文字墨書されている。墨痕が薄く判読困難であるが、上の文字は隣の「丈」の部分がよみ取れる。偏の部分ははっきりしないが、墨のみえる範囲で判断して「財」ではないかと思われる。下の文字は不明である。他の1点は黒色土器Aの小片で判読不能。図示してない。1は墨痕あざやかに「南」と記される。同期のSB25、SB246にも「南」があり、SB246のものとは同じ筆跡と思われる。

9は南壁中央部の壁ぎわ、1はカマド脇の床面直上で逆位で出土。他は埋土中からの出土である。

SB189 (図版200 PL199)

墨書土器4点。11は「大臤」であろう。「臤」は「朗」の本字である。人名かあるいは祝いの儀式に係わるものであろうか。1は墨の残存状態が悪く読みとりにくい。「蘇」ではないかと思われるが、他の2例とは書き方が異なる。また、その右の口辺部に――が引かれている。墨痕はさらに薄く、書かれた時期が異

なるようである。6は2文字と思われるが、欠損のため判読できない。17は左半分が欠損しており、また、ややバランスは悪いものの、構えの中の「半」の一部と思われることから「南」と判断したい。

SB191 (図版200)

墨書土器の小片が3点あるが、いずれも判読不能である。

SB194 (図版200 PL109)

墨書土器1点。「千」である。カマド近くの床面直上で逆位で検出された。

SB195 (図版200)

墨書土器3点。1は一応「大」としたが、三画目がやや不自然であり別字の可能性も考えられる。4・6はいずれも墨痕が薄く判読困難であるが、4は「男」、6は「休」と読めそうである。なお、6は内面を転用硯として利用している。

SB196 (図版200 PL109)

墨書土器3点。14は欠損部が大きく文字を決しがたい。「休」または「木」と思われるが、「休」のようになる可能性も残されている。15は小片であるが、おそらく「玠」であろう。この文字も複数の出土がみられるが、いずれも筆跡は異なるようである。9は「任」が須恵器杯A IIの体部外面に2か所正位で記されている。

SB197

刻書土器1点。須恵器杯A IIの底部内面に「メ」と記される。何らかの記号であろう。

SB199 (図版205・206 PL111)

墨書土器1点、篋書土器2点。20は残存部から「上」と推定したが、欠損のため断定はできない。18・19はともに須恵器杯A IIIの底部外面に「田中」と記されている。「田中」の篋書は全部で6点となるが、いずれも同じ工具を用い、同じ筆跡で、同じ器種に記されている。おそらく、生産の場で同時に記されたのであろう。本址は3期に比定され、本遺跡における文字資料の初現である。

SB209 (図版200)

墨書土器の小片1点、下半が欠損しているが、「九」の一部と認められる。

SB210 (図版200)

墨書土器1点。杯の体部外面に2箇所墨書されているが、墨痕薄く判読不能である。一文字は確認できる範囲で図示したが、もう一文字については、筆の痕を追うことができず、図化もできなかった。

SB212 (図版201)

墨書土器1点。器面の汚れのため読みとりにくいのが、体部外面にわずかに墨書の痕跡を認めることができる。「万」であるかもしれないが、断定はできない。図示した部分以外にも何か所か墨痕と思われるものが認められるが、判別することができなかった。

SB233 (図版201 PL109)

墨書土器1点。土師器碗Aの底部と体部外面に墨書されている。前者は「世」と読んだが、後者は文字のほとんどが欠損しており判読不能である。

SB234

墨書土器2点。いずれも破片であり、判読不能である。図示していない。

SB243 (図版201)

墨書土器2点。欠損しているが、いずれも「九」であろう。3はその右肩部分にやや太く薄い墨痕が見られるが、同じ文字の一部であるのか疑問である。

SB246 (図版201 PL109)

墨書土器1点。文字の左半分が消えているが、「南」である。

SB250 (図版201 PL109)

墨書土器1点。「安」がはっきりと記されている。

SB252 (図版201)

墨書土器2点。いずれも小片のため判読が難しいが、3はII-aタイプの「万」の可能性はある。

SB258 (図版201 PL109)

墨書土器2点。4は墨痕が薄く読みとりにくい、体部外面に2～3文字記されている。一文字めは「千」である。二文字めは「广」の部分が見える。「广」の内部およびこの下にも文字が記されているが、墨痕が薄く、読みとることができない。あえて推測すれば「千麻呂」という人名が考えられる。

なお、図示できなかったが、「浄」と読めそうなものがもう1点出土している。

SB259 (図版201 PL109)

墨書土器4点。6は「野」で、「野」であろう。16は器面が汚れているうえ、多くの筆が入り乱れているように見え、文字として読みとることができない。試し書きの可能性も考えられる。他の2点は欠損のため判読できず、図示していない。

SB261 (図版201)

墨書土器1点。小片である。偏は「彡」であろうか。欠損のため判読できない。

SB264 (図版201 PL109)

墨書土器2点。5は「加」、19は小片のため判読不能である。

SB265 (図版201)

墨書土器2点。「九」がいずれも底部外面に記される。

SB266 (図版201)

墨書土器 4 点。いずれも小片のため判読不能であるが、14は「真」の草書体に類似している。

SB267 (図版201 PL109)

墨書土器 2 点。1は「蕪」である。SB26に同様の文字があるが筆跡は異なる。2は「九」で、本遺跡では「万」について多い文字である。

SK90

墨書土器 1 点。文字の上半にあたる部分が欠損しているが、文字のバランスからみると「十」と読んで差支えないと思われる。

SK118 (図版202)

墨書土器 1 点。欠損のためごく一部しか残っておらず、文字は不明である。なお、底部外面は転用硯として利用されている。

SK155 (図版202 PL109)

墨書土器 4 点。1・4は共に「休」であるが、旁が1は「大」と「丿」との組合わせであるのに対して、4は現在と同じ筆順で記しており、書き方が異なる。2は不明、3は「万子」である。人名であろう。

SK202 (図版202 PL110)

墨書土器 4 点。1は「休」である。2・3・6は小片のため判読不能である。

SK203 (図版202 PL110)

墨書土器 1 点。III—bタイプの「万」である。

SK204 (図版202 PL110)

墨書土器 2 点。いずれも「万」である。9は2か所に記されているが、両者は明らかに筆跡が異なる。

SK211

墨書土器 2 点。6は上部が欠損している。残存部から推定できるのは「盆」、「盈」などである。もう1点は小片のため判読できない。

SK254 (図版206 PL111)

篋書土器 1 点。須恵器杯B IIIの底部外面に「×」が記されている。

SK259 (図版202)

墨書土器の小片が1点あるが、欠損のうえ、墨が薄く判読不能である。

SK336 (図版202)

墨書土器 1 点。「尙」(周の異体字)と似ているが断定はできない。ここでは不明としておきたい。

SD02 (図版202 PL110)

墨書土器 2点。1はⅢ—a②タイプの「万」である。もう1点は小片のため判読不能。図示してない。

SD03 (図版202 PL110)

墨書土器 6点。4はⅢ—a②、15はⅠタイプの「万」である。4と17の「九」も筆跡が異なる。16は「氏」か「仄」かのいずれかである。1点は小片のため判読できない。図示してない。

SD06 (図版202)

墨書土器 1点。墨痕が確認できる範囲で図示したが、文字の判読はできない。

SD—17 (図版202)

篋書土器 1点。須恵器杯AⅡの底部外面いっばいに「×」が記されている。

SD—19 (図版202)

墨書土器 1点。小片である。「九」と思われるが、「大」の可能性もあり、断定できない。

SD27 (図版202)

墨書土器 2点。2の底部内面には判読不能の文字とともに多くの墨痕が残されている。筆直しあるいは試し書きではないかと思われる。なお、底部外面には漆が付着していた。

遺構外 (図版203・206 PL110・111)

包含層出土遺物の中にも墨書土器35点、刻書土器 2点(内1点は墨書と同一個体)、篋書土器 3点が認められた。その主なものについてふれたい。墨書土器では、F・9は底部のほぼ全面にわたって真黒に墨痕が残っている。墨溜めの可能性もあるが、筆の走った痕が何か所かにみられるため、塗りつぶしたものと判断した。F・11はⅠ・7の例から「玠」とした。G・19は筆の痛みが想像できる墨書である。修正をしたものであろうか、一部に重ね書きの痕がみられる。乱れてはいるが、「寺」と読んだ。H・18、24はいずれも小片であるが、23との比較から「九」の一部と判断した。H・19は「真」である。8は墨痕薄くほとんど読みとることができない。2文字かもしれない。Ⅰ・15は体部外面に墨書が、底部内面に「×」の刻書がある。墨書文字は残存部がごくわずかであるため判読できないが、「万」の一部である可能性が考えられる。Ⅰ・10は墨痕薄く判読困難であるが、残存部から「申」と判断した。上部にも墨痕らしいものが認められるが、判然としない。L・35は小片のため文字の判読はできないが、太い筆と細い筆の二種類の文字が記されていたらしい。37は文字の半分が欠損しているが、おそらく「冨」で間違いあるまい。38は文字上半が汚れと欠損のためわかりにくい、Ⅲ—bタイプの「万」と思われる。M・41は一見「九」の一部のように見えるが、SB32の308などの例をみると「加」である可能性も高い。底部内面は朱墨の転用硯として利用されている。O・7は杯AⅢの体部外面に、点が4点台形状に記されている。墨痕あざやかである。欠損部分にも同様のものが記されていたのであろう。129はSB87の6とおなじ「仄」である。Z・21は「大川」である。近くを流れる田川あるいは奈良井川を指したものであろうか。

墨書「万」の書き方について

「万」は本遺跡の墨書・刻書を代表する文字であり、墨書土器252点中116点(内31点は同一個体に複数記される)、刻書土器14点中10点にこの文字が記されている。しかし、既に記したように、その書き方には様々なタイ

ブがあり、多くの書き手によって書かれたものであることを示している。ここでは記述の便宜上、以下のよう分類した。

I 一筆がきのもの。平仮名の「ろ」のような形を呈する。SB111・16

II 二筆で書かれるもの。

a、一画めと三画めとが一筆で書かれるもの。「𠄎」SB111・92

b、二画めと三画めとが一筆で書かれるもの。

①「万」のような形になるもの。SB111・15

②平仮名の「の」のように筆を運ぶもの。「可」と似た形となる。SB111・49

c、一画めを書いた後さらにIタイプを書くため、一画めの一部が二重となるもの。「𠄎」SB111・93

III 一画ごとに筆を入れるもの。

a、一画めと二・三画めとが一点で接続するもの。

①二画めの肩を意識しているもの。「𠄎」SB111・25

②二画めが緩い弧を描いて、あるいは直線的に下に向けて下ろしており、肩に対する意識の薄いもの。「𠄎」SB102・31、SB49・4

b、一画めと二・三画めとの間が離れるもの。これにも上記の①～②が考えられるが、実際には①のタイプしか存在しない。「𠄎」SB111・37

c、二・三画めが「力」のように書かれるもの。「𠄎」SB111・97

d、「万」と書かれているもの。

e、「𠄎」形を呈するもの。刻書はすべてこのタイプである。これにも、①二画めが長いもの「𠄎」SB102・12と、②三画めが長いもの「𠄎」とがある。SB102・6

また、それぞれ二画め、三画めの最後をはねるものと流すものがある。

第102表 墨書土器一覧

凡例

1. 番号は図版番号である。
2. 文字の項は、以下のように記した。
「□」…判読できないもののうち、字数が推定できるもの。
「？」…字数の不明なものおよび文字や記号を構成するものかどうか不明なもの。
「○か？」…判読できないが、残画や墨痕から字句を推定したもの。
「○・○」…複数の字句が同じ部位に記されているが、連続した語句として認められないもの、それぞれが独立しているもの。
「○/○」複数の字句が異なる部位に記されているもの。
3. 器種区分は、本章第2節2-1)の器種分類による。
4. 部位は、体部外面を「体外」、底部内面を「底内」のように略記した。
5. 字句の向きは、以下のように表現した。
A…土器を正位に置いた時、字句も正位となるもの。
B…土器を逆位に置いた時、字句が正位となるもの。
C…土器を口縁部を左に横位に置いた時、字句が正位となるもの。
D…土器を口縁部を右に横位に置いた時、字句が正位となるもの。
E…土器の底部外面に記されるもの。
それぞれ内面に記されている場合は○を付し、⑤のように記した。
蓋の場合は、「外面」、「内面」とのみ記した。
6. 時期区分は第5章第3節4)による。
7. 年代観は土器によって示した。従って、混入等の場合、遺構の年代観と一致しないものがある。

出土遺構	番号	文字	土器	器種	部位	向き	時期	備考
SB06	1	□	黒色土器A	杯A II	体外	Dか?	6	
"	4	?	"	皿B	"	?	"	
"	7	□田加か?	"	"	"	C	"	
SB11	3	?	須恵器	杯A II	"	Cか?	4	
"	4	西寺	"	"	"	C	"	
SB17	2	□	黒色土器A	"	"	A	6	
"	4	?	"	"	"	?	"	
"	3	?	"	杯A I	"	?	"	
SB20	5	□	須恵器	皿B	底外	E	"	
"	6	?	黒色土器A	?	体外	?	"	小片
"	7	?	"	?	"	?	"	"
SB25	1	南	"	杯A II	"	A	"	
"	4	□	"	"	"	Cか?	"	
SB26	4	蕪	"	"	"	A	"	
"	1	□	"	"	"	"	"	
"	7	夙	"	皿B	"	"	"	
"	13	□	"	杯A II	"	"	"	
SB32	279	加	灰釉陶器	椀C	底外	E	12	
"	308	加/□	"	皿C	底外/体外	E/?	"	
SB46	1	財富加	黒色土器A	杯A II	体外	A	6	
SB48	15	(墨痕)/?	灰釉陶器	皿C	底内/底外	㊦/E	10	
SB49	4	万	黒色土器A	杯A II	体外	A	6	
"	8	□	"	"	"	"	"	底部外面に篋書「×」
"	7	□	"	"	"	B	"	
SB50	7	加か?	灰釉陶器	椀B	底外	E	12	
SB53	1	子か?	黒色土器A	杯A II	"	"	5	
SB55	3	?	"	"	体外	Aか?	6	
SB63	45	加	灰釉陶器	皿C	底外	E	12	転用硯
SB64	11	九か?	土師器	?	体外	?	6	混入
SB72	1	加	黒色土器A	杯A II	"	B	"	
"	15	?	"	?	"	?	"	小片
SB77	1	木	須恵器	杯A II	"	C	4	
SB78	15	加	灰釉陶器	椀A	底外	E	13	転用硯
SB83	9	夙	黒色土器A	皿B	"	"	6	
SB87	12	?	"	?	体外	Aか?	"	二字か?
"	13	□	"	"	"	"	"	
"	6	夙	黒色土器A	椀A	底外	E	6	
SB90	3	?	"	杯A II	体外	Dか?	"	
SB91	13	□	"	"	"	Aか?	7	
"	20	□	灰釉陶器	椀A	底内	㊦	"	

SB191	30	?	黒色土器A	?	体外	?	〃	小片
〃	31	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	32	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
SB94	43	□	〃	〃	〃	〃	9	〃
〃	44	?	土師器	?	〃	?	〃	〃
〃	42	申□田石□寺 /□在□□□ □□	〃	杯A II	体内/体外	◎A/A?	〃	10字以上、習書か?
SB95	17	九か?	須恵器	〃	体外	B	5	
SB96	19	?	土師器	?	〃	?	8	小片
SB98	5	○・○	〃	皿A	〃		13	
SB100	8	?	黒色土器A	?	〃	?	?	小片
SB102	13	万	〃	杯A II	〃	B	7	
〃	6	万	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	10	万	〃	〃	〃	〃	〃	
〃		?	〃	〃	〃	?	〃	
〃	12	万	〃	〃	〃	A	〃	
〃	28	和	灰釉陶器	皿B	〃	〃	〃	転用硯
〃	31	万	〃	〃	底外	E	〃	
〃	38	万	黒色土器A	?	体外	A	〃	
〃	39	□	〃	杯A	底外	E	〃	
SB103	6	大	土師器	杯A II	体外	A	8	
〃	7	?/?	〃	〃	底外/体外	E/?	〃	
〃		?	灰釉陶器	椀A	体外	?	〃	転用硯
〃	19	大か?	土師器	杯A II	底外	E	〃	
〃	20	?	〃	?	体外	?	〃	
SB108	1	广	黒色土器A	杯A II	〃	A	5	
SB110	4	調	〃	〃	〃	B	7	
〃	12	万	土師器	?	〃	A	〃	
SB111	1	□	〃	杯A II	〃	Aか?	〃	
〃	25	万	〃	〃	底内	◎	〃	
〃	24	万/万・万	〃	〃	底外/体外	E/B・B	〃	
〃	9	万	〃	〃	体外	B	〃	
〃	11	万	土師器	杯A II	底外	E	7	
〃	14	万/万・万	〃	〃	底内/体外	◎/B・B	〃	
〃	12	万	〃	〃	底内	◎	〃	
〃	15	万	〃	〃	体外	D	〃	
〃	16	万	〃	〃	底外	E	〃	
〃	88	万/万か?	黒色土器A	〃	底外/体外	E/B	〃	
〃	89	万か?	土師器	〃	底内~体内	◎	〃	
〃	90	万	〃	?	体外	B	〃	
〃	29	万・万	黒色土器A	杯A II	〃	B・D	〃	

SB111	61	万・万か?	〃	碗A	〃	B・B	〃	
〃	60	万	〃	〃	底外	E	〃	
〃	31	万	〃	杯A II	体外	B	〃	
〃	36	万か?/万か?	〃	〃	底外/体外	E/B	〃	
〃	35	万か?/万か?	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	37	万	〃	〃	底外	E	〃	
〃	39	万	〃	〃	体外	B	〃	底部用面に刻書「万」
〃	40	万	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	54	万	〃	碗A	底外	E	〃	
〃	49	万か?/万	〃	杯A II	底外/体外	E/B	〃	
〃	91	万	〃	碗A	底外	E	〃	
〃	92	万	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	93	万	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	94	万	〃	杯A II	〃	〃	〃	
〃	95	万か?	〃	〃	体外	B	〃	
〃	96	万	〃	杯A	〃	A	〃	
〃		?	〃	杯A II	〃	Bか?	〃	
〃	97	万	〃	杯A	〃	B	〃	
〃		?	〃	〃	〃	?	〃	
〃	51	休	〃	杯A II	〃	A	〃	
〃	98	榛原	〃	〃	〃	〃	〃	
〃		万か?	〃	?	〃	B	〃	
SB112	4	大	須恵器	杯蓋	外面		4	
SB118	12	□	灰釉陶器	碗A	底外	E	9	
SB126	6	?	黒色土器A	?	体外	?	?	小片
SB128	1	□	〃	碗A	〃	B	7	
SB133	1	万/万か?	土師器	杯A II	底内/体外	㊦/A	〃	
〃	2	万	黒色土器A	碗A	体外	B	7	
SB135		□	〃	〃	〃	A?	6	
SB139	3	?	〃	杯A II	〃	?	5	
〃	6	キ/巾	〃	〃	〃	A・B	〃	
〃	15	?	〃	?	〃	?	〃	小片
〃	16	縣か?	〃	〃	〃	D	〃	〃
〃	17	□	〃	〃	〃	?	〃	〃
SB141	32	□	〃	〃	〃	〃	6	〃 混入
SB144	18	吉	〃	碗A	〃	B	〃	
〃	6	文□寺	〃	杯A II	〃	D	〃	
〃	7	氏	〃	〃	〃	A	〃	
〃	3	□・□	〃	〃	〃	B?・B?	〃	
〃	20	舎	〃	皿	〃	D	〃	
〃	23	子 □子田・下之□	須恵器	杯A II	〃	B・B・C	〃	

SB145	24	明か? 朋か?	〃	〃	〃	B・B	〃	
〃	22	?・?	〃	〃	〃	?・?	〃	
〃	14	□	黒色土器A	〃	〃	Bか?	〃	
〃	10	縣	〃	〃	〃	B	〃	
SB145	3	廣	須恵器	杯蓋	内面		4	同じ面に焼成後のキズ有り(中央部一直線)
SB160	15	木	黒色土器A	杯A II	体外	B	8	
〃	20	□	〃	?	〃	?	〃	小片
〃	21	□	〃	〃	〃	〃	〃	〃
SB164	13	九	〃	〃	〃	〃	6	
SB165	2	□	須恵器	杯A II	底外	E	4	
SB168	2	南	〃	〃	〃	〃	〃	
〃		□	黒色土器A	?	体外	?	〃	小片
SB170	5	□	〃	皿B	〃	〃	6	
〃	11	□	〃	?	〃	〃	〃	小片
SB172	4	万	〃	杯A II	〃	A	〃	
〃	8	財子か?	〃	〃	底外	E	〃	
SB181	3	休	〃	〃	体外	B	7	
〃	8	□・子	須恵器	〃	〃	?・B	〃	
〃		?	黒色土器A	?	〃	?	〃	小片
SB182		?/?	〃	杯A II	底外/体外	E/?	〃	
SB188	11	子	〃	〃	体外	A	6	
〃	9	財□	灰釉陶器	皿C	体外	C	6	
〃		?	黒色土器A	杯A II	〃	?	〃	小片
〃	1	南	〃	〃	〃	A	〃	
SB189	11	大腹	〃	碗A	〃	B	〃	
〃	1	蘇か?	〃	杯A II	〃	A	〃	
〃	6	□	〃	〃	〃	Aか?	〃	
〃	17	南	〃	〃	〃	C	〃	
SB191	19	?	〃	?	〃	?	〃	小片、混入
〃	20	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃、〃
〃	21	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃、〃
SB194	2	千	〃	杯A II	〃	D	6	
SB195	1	大か?	土師器	碗A	〃	A	8	
〃	4	男か?	灰釉陶器	皿B	底外	E	〃	転用硯
〃	6	休か?	〃	〃	〃	〃	〃	転用硯
SB196	14	木か?	黒色土器A	杯A II	体外	B	7	
〃	15	玊か?	〃	?	〃	?	〃	小片
〃	9	任・任	須恵器	杯A II	〃	A・A	〃	
SB199	20	上か?	〃	〃	底外	E	3	
SB209		九	黒色土器A	〃	体外	B	7	混入

SB210	5	?・?	〃	〃	〃	Aか?・?	〃	
SB212	1	万か?	〃	皿B	〃	A	6	
SB233	3	世か?/?	土師器	碗A	底外/体外	E/B?	9	
SB234		?	黒色土器A	杯A II	体外	D	6	2字か?
〃		□	〃	〃	〃	?	〃	
SB243	3	九か?	須恵器	〃	底外	E	5	
〃	8	九	〃	〃	〃	〃	〃	
SB246	3	南	黒色土器	碗A	体外	C	6	
SB250	2	安	須恵器	杯A II	底外	E	4	
SB252		?	黒色土器A	〃	体外	?	6	
〃	3	万	〃	?	〃	A	〃	
SB258	4	千广□	須恵器	杯A II	〃	C	4	
〃		浄か?	〃	〃	底外	E	〃	
SB259	6	野	黒色土器A	〃	〃	B	7	
〃	16	?	〃	?	〃	?	〃	小片
〃		□	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃		?	〃	?	体外	?	7	
SB261	2	□	黒色土器A	杯A II	体外	Cか?	6	
SB264	5	加	〃	皿B	〃	B	〃	
〃	19	□	〃	?	〃	?	〃	小片
SB265	1	九	〃	杯A II	底外	E	〃	
〃	3	九	須恵器	〃	〃	〃	〃	
SB266	3	□	黒色土器A	〃	体外	Aか?	〃	
〃		□	〃	?	〃	Cか?	〃	
〃		?	〃	〃	〃	?	〃	
〃	14	真か?	〃	杯A II	〃	A	〃	
SB267	1	蕪	〃	皿B	底外	E	5	
〃	2	九	須恵器	杯A II	体外	A	〃	
SK90	1	十か?	灰釉陶器	碗B	底外	E	12	
SK118	7	?	〃	碗A	体外	?	7	転用硯
SK155	1	休	黒色土器A	杯A II	〃	B	6	
〃	2	□	〃	〃	〃	?	〃	
〃	3	万子	〃	〃	〃	A	〃	
〃	4	休	〃	碗A	〃	〃	〃	
SK202	1	休	〃	杯A II	〃	〃	7	
〃	2	□	〃	〃	〃	〃	〃	小片
〃	3	?	〃	〃	〃	?	〃	〃
〃	6	?	〃	?	〃	〃	〃	〃
SK203	1	万	〃	杯A II	底外	E	〃	
SK204	9	万・万	〃	〃	体外	A・A	〃	
〃	11	万	〃	〃	〃	B	〃	

SK211	6	□	〃	〃	〃	A	〃	
〃		?	〃	?	〃	?	〃	小片
SK259	2	□	〃	〃	〃	Aか?	?	〃
SK336	1	□	須恵器	杯A II	〃	?	7	
SD02	1	万	黒色土器A	椀A	〃	B	〃	混入
〃		?	須恵器	?	〃	?	〃	
SD03	4	万	黒色土器A	杯A II	〃	A	〃	〃
〃	5	九	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	15	万か?	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	16	仄か?	〃	?	〃	〃	〃	小片
〃	17	九	土師器	?	〃	B	〃	〃
〃		?	〃	?	〃	?	〃	〃
SD06	9	□	黒色土器A	杯A II	体外	?	7	混入
SD19	10	九か?	土師器	〃	〃	A	8	〃
SD27	1	九	黒色土器A	〃	〃	〃	6	
〃	2	□・(墨痕)	須恵器	〃	底内	㊦	〃	
F地区 I層	9	底部ぬりつぶし	土師器	〃	〃	㊦	8	
〃	10	?	黒色土器A	〃	体外	Aか?	6、7	
〃	11	珎か?	〃	〃	〃	B	〃	〃
G地区 I層	18	万	土師器	杯A I	体外	A	8	
〃	19	寺か?	黒色土器A	椀A	底外	E	6、7	
〃	20	□	〃	杯A II	体外	?	〃	〃
H地区 I層	23	九	須恵器	杯A II	底外	E	4、5	
〃	24	九か?	〃	?	体外	?	5、6	小片
〃	18	九か?	黒色土器A	〃	〃	B	〃	〃
〃	19	真	〃	椀A	底外	E	6、7	
〃	8	?	灰釉陶器	皿B	〃	〃	7、8	2字以上か?
I地区 I層	15	□	黒色土器A	杯A II	体外	A	6、7	底部内面に刻書「×」
〃 II層	7	珎	〃	〃	〃	〃	5、6	
〃	10	申か?	灰釉陶器	皿B	底外	E	7	
L地区 I層	29	?	土師器	?	体外	?	7、8	小片
〃	30	万	黒色土器A	〃	〃	B	6、7	〃
〃	31	万	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	32	?	土師器	〃	〃	?	7、8	
〃	33	□	〃	椀A	底外	E	8	
〃	34	□	黒色土器A	〃	〃	〃	6、7	
〃	35	?	〃	?	体外	?	〃	小片
〃	36	□	〃	〃	〃	A	〃	〃
〃	13	□/人か?	須恵器	杯A II	底外/体外	E/B	4、5	
〃	37	富	灰釉陶器	皿B	底外	E	7、8	
〃	38	万	須恵器	杯A II	体外	B	7	

L地区 II層	39	万か?	黒色土器A	?	〃	〃	6、7	
〃 〃		?	〃	〃	〃	?	〃 〃	小片
〃 〃	40	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃
〃 〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃
M地区 I層	41	九または加	灰釉陶器	椀A	底外	E	10~12	転用硯
〃	42	□	須恵器	杯A II	〃	〃	4、5	
O地区 II層	7	フ・フ	土師器	杯A III	〃		12	
〃	129	フ	黒色土器A	?	体外	A or C	6、7	
S地区 II層	45	□	〃	〃	〃	?	〃 〃	
Z	21	大川	〃	杯A II	〃	A	6	

第103表 刻書土器一覧

出土遺構	番号	文字		器種	部位	向き	時期	
SB06	8	×	須恵器	杯A II	底内	㊦	6	
SB72	2	×	黒色土器A	〃	〃	〃	〃	
〃	14	㊦	〃	〃	〃	〃	〃	
SB87	3	㊦	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	5	万	〃	椀A	〃	〃	〃	
〃	11	↓	〃	?	体外		〃	
SB111	56	万	〃	椀A	底内	㊦	7	
〃	62	×	〃	〃	〃	〃	〃	
〃	39	万	〃	杯A II	〃	〃	〃	体部外面に墨書「万」
〃	87	万	〃	椀A	〃	〃	〃	
SB145	3	一	須恵器	杯蓋	内面		4	同じ面に墨書「廣」
SB197	2	米	〃	杯A II	底内	㊦	7	
H地区 I層	20	?	黒色土器A	椀A	〃	〃	6	
I地区 I層	15	×	〃	杯A II	〃	〃	7	体部外面に墨書

第104表 篋書土器一覧

出土遺構	番号	文字		器種	部位	向き	時期	
SB03	9	田	須恵器	杯B	底外	E	3、4	「田中」の一部
SB05	58	中	〃	〃	〃	〃	〃 〃	「田中」の一部
SB49	8	×	黒色土器A	杯A II	〃	〃	6	体部外面に墨書「?」
SB175	3	×	須恵器	〃	底内	㊦	4	
〃	7	田中	〃	杯蓋	外面		〃	
〃	8	〃	〃	〃	〃		〃	
SB199	18	〃	〃	杯B III	底外	E	3	
〃	19	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
SK254	1	×	〃	〃	〃	〃	4	

SD17	66	×	〃	杯A II	〃	〃	〃	
G地区 II層	21	×	〃	杯A	底内	㊦	5	
S地区 II層	46	×	〃	杯A II	底外	E	〃	
I, T地区II層	2	才	〃	杯B III	底内	㊦	4	

イ 筆・陶硯

SB32のカマド横ピット内から筆の穂先が出土した。(図版207 PL111)。炭化し一部破損しているものの、比較的良く原形が保たれており、毛の一本一本を判別することができる。動物質の毛を用いているが、その種類は明らかにできなかった。先端部から基部までの長さは3.2cm、基部はやや偏平につぶれているが、その径は0.5cm前後である。基部の部分はわずかにくびれており、中が空洞であるので、何かを芯にして基部にあたる部分をまとめ、軸の中に入れてとりつけたものと思われる。出土状態からみて、この筆がこの住居内で使用されたものである可能性が高い。従来、軸の出土は知られているが、筆の穂先の出土は極めて珍しいものである。

陶硯は2点出土したが、いずれも包含層からのものである(図版207 PL111)。2は円面硯の脚部である。S地区とO地区から出土した小片が接合した。全体がロクロナデで仕上げられ、V字状の鋭い刻みが0.6cm～0.8cm間隔でつけられている。透かしもあるが何か所かは不明である。胎土には砂が混じる。在地産のものであり、時期的には4～6期にあてられる。3は檜崎彰一の分類による定型式無堤の風字硯である(檜崎彰1982)。3片に割れていたが、ほぼ完形になるものである。SB68の検出時にその検出面より出土した。胎土に砂を含み、白っぽい色を呈する。内面はきれいに面取りされ平坦である。全体によく使用されているが、特に中央部は研磨されて卵形状に窪んでいる。墨痕ははっきりしない。外面は、周辺部がヘラケズリで粗く調整されており凸凹している。脚は長方形で、ヘラケズリで仕上げられている。時期的には14期に位置づけられよう。

ウ 転用硯

ここでは以下のものを転用硯と認定した。すなわち、土器・陶器の一部に、明らかに使用による摩滅痕が認められるか、墨・朱墨が付着しているかあるいは浸透しているもの。墨が付着していても使用による摩滅痕が認められないものは、墨を溜めたもの(墨溜め)の可能性が考えられるが、ここでは広義に解釈して、転用硯として扱った(玉口時雄1980)。また、筆先を整えたことによる墨痕あるいは試し書きによる墨痕と思われるものについては、前述のように墨書土器として扱った。こうしてとり上げられたものは全部で56点にのぼる(第105表)。

SB18 (図版207)

7、椀Cの底部小破片であるが、内面が滑らかで朱墨が付着している。

SB30 (図版207)

55、広口瓶の胴部内面を利用したもので座りはよくない。中央部に径4～5cmの範囲で摩滅痕がみられ、ほぼ全面にわたって朱墨が付着している。摩った部分は朱の付着が薄く、周辺部分が濃い。割れ口断面にも濃い朱墨の付着がみられる。15.0×10.5cmの菱形を呈し、大きく打ち欠いたのみで周囲の調整は施していない。

SB32 (図版207)

灰釉陶器の皿を転用したものが6点出土した。

285、約1/2を欠損するが、底部内面が滑らかに摩滅しており、わずかに朱墨の痕跡が残る。体部外面にも朱墨が付着している。

293、皿Cの段の部分に濃く、そこを中心に口辺部から底部まで薄く朱墨が付着している。体部外面にも一部朱墨の付着がみられる。摩滅痕は確認できない。

311、底部外面中央部に濃い朱墨が付着する。摩滅痕は確認できない。周囲を打ち欠いて形を整え、座りをよくしている。3/4を欠損する。

342、底部内面全面に墨が付着している。部分的には滑らかなところがあるが、はっきり使用痕と判断できる摩滅は認められなかった。高台を打ち欠いて座りをよくしている。半分を欠損する。

343、底部外面中央部がやや摩滅し、底部ほぼ全面および高台の一部に朱墨が付着している。約1/2が欠損している。

344、底部内面に墨が付着している。小片であり転用硯のごく一部である。この部分については摩滅痕は認められない。

SB36 (図版207)

3、底部外面中央部を中心に摩滅痕が認められるが、使用度はさほど多くはないと思われる。底部全面にわたって高台部分まで墨の付着がみられる。一部欠損している。

SB58 (図版207)

15、底部内面がほぼ全面にわたって、ロクロ目がわずかに残る程度に摩滅し、薄く朱墨が付着している。体部内面にも点々と朱がとんでおり、完形の状態で使用されたものと思われる。

SB63 (図版207)

45、底部内面に、ほぼ全面にわたって墨が残り、一部に摩滅痕が認められる。半分近くを欠損する。底部外面に「加」の墨書がある。

SB66 (図版207)

33、底部内面中央部に摩滅痕が認められる。半分近くを欠損している。

SB73 (図版208)

7、底部高台内に、濃く朱墨が付着している。摩滅痕はまったく認められないので、朱墨溜めとして使用されたものであろう。体部外面にも朱墨の垂れた痕がはっきり残っている。なお、ほぼ完形に復元できたが、欠損部分の割れ口にも朱墨が付着しているので、使用時にはすでに一部が破損していたものである。

SB74 (図版208)

48、須恵器甕の胴下半部の破片を利用している。内面広い範囲にわたって非常に滑らかに摩滅しており、かなり使用されたものと思われる。使用面および割れ口のすべての面に朱墨が付着している。

SB78 (図版208)

11、底部内面に濃い朱墨が付着し、一部に摩滅痕がみられる。欠損しているが、底部中央部を中心に使用されたものと思われる。

15、底部内面を利用している。朱墨が摩滅部分は一面に、その周囲ではロクロ目に沿って付着している。周囲は打ち欠いて形を整えているが、一部欠損している。底部外面に「加」の墨書がある。

SB86 (図版208)

23、ロクロ目は残るが底部内面中央部が滑らかに摩滅している。この部分を中心に濃い朱墨が付着し、口辺部まで広がっている。

SB87 (図版208)

8、わずかにへら切り痕が残るものの、底部外面中央部が径4.5～5 cmの範囲で滑らかに摩滅している。部分的にしみのような墨痕が残る。

SB91 (図版208)

20、底部内面ほぼ全面にわたって墨が薄く残る。同じ面に判読不能の墨書がある。

SB94 (図版208)

45、底部内面が中央部を中心に滑らかに摩滅しており、わずかに朱墨の付着がみられる。周囲は打ち欠いて形を整えているが、半分近くが欠損している。

SB96 (図版208)

10、土師器杯A IIの周囲を打ち欠いて、再利用したものである。底部内面のロクロ目の稜の部分に、こびりつくように濃い朱墨が付着している。摩滅の痕跡はまったく認められない。朱墨溜めであろうか。

SB102 (図版208)

28、底部内面の一部に摩滅痕が認められるが、使用度はさほど高くないようである。内外面および割れ口断面に点々と墨がとんでいる。体部外面には判読不能の墨書がある。

SB103 (図版208)

12、底部内面を使用している。部分的に摩滅痕が認められ、その部分は滑らかである。摩滅部分の周辺には薄く墨が残っている。周囲を打ち欠いて形を整えているようだが、欠損部分も多い。

SB110 (図版208)

9、底部外面と高台内に薄く朱墨が付着している。摩滅痕は認められない。朱墨溜めであろう。

SB114 (図版208)

11、底部内面が、径5～6 cmにわたって滑らかに摩滅している。また、底部から口辺部にかけてしみ状に濃い墨痕が残る。

24、小片であるが底部内外面に墨が付着している。内面は滑らかであるが、外面は摩られていない。

SB120 (図版209)

24、内面が滑らかに摩滅しているが、中央部はやや粗い。ほぼ全面にわたって濃い朱墨が付着している。周囲を打ち欠いて形を整えているが、一部欠損している。

SB142 (図版209)

21、底部内面中央部に摩滅の痕が認められる。墨痕は残っていない。

SB195 (図版209)

4、底部内面が摩滅しており、全体に薄い墨痕が残る。底部外面に判読不能の墨書がある。

6、底部内外面に墨の付着がみられる。内面は滑らかに摩滅しているが、外面には摩滅痕が認められない。「休」の墨書がある。

SB227 (図版209)

8、蓋の天井部内面に、ロクロ目に沿うようにほぼ全面にわたって朱墨が付着している。摩滅痕は認められない。使用面を上にした場合、きわめて座りが悪く、多くの部分が欠損しているものと思われる。

12、杯B II底部内面が摩滅しており、わずかに墨痕が残る。摩滅痕から、口辺部の残存する部分を向う側に置いて使用したものと思われる。手前側は打ち欠いて形を整えている。

SB263 (図版209)

21、灰釉陶器碗Aの破片で大部分が欠損しているが、底部の中央部寄りに摩滅痕が認められ、一部に薄く墨が付着している。

SK101 (図版209)

4、底部内面中央部に径4～4.5cmの範囲で摩滅痕が認められ、内面のほぼ全体に薄く墨の付着がみられる。周囲を打ち欠いて形を整えているが、一部欠損している。

SK118 (図版209)

6、摩滅部分は滑らかで、その周囲に濃い墨が付着している。やや不安定な形であるが、割れ口部分にも墨の付着がみられ、摩滅部分を使用する分には座りも必ずしも悪くないので、転用硯としては完形品と考える。

7、高台内のほぼ全面にわたって墨が付着している。わずかに摩滅痕と思われる部分が認められるが、使用度はさほど高くない。座りを考えて周囲を打ち欠き調整している。体部外面に欠損のため判読不能の墨書がある。

SK120 (図版209)

4、底部内面が滑らかに摩滅している。座りが極めて悪く、半分近くが欠損しているものと思われる。

SD17 (図版209)

52、底部外面に高台の内側まで濃い墨が付着している。摩滅痕は認められない。小片であり大部分が欠損しているものと思われる。

53、底部内面が非常に滑らかに摩滅している。かなりの部分が欠損している。

SX21 (図版210)

51、底部内面がほぼ全面にわたって滑らかに摩滅しており、濃い朱墨が付着している。朱墨の付着は施釉された口辺部にも及んでおり、割れ口断面の一部にも付着がみられるが、大きな割れの部分は欠損しているであろう。

遺構外 (図版210)

H・21、底部内面中央部が径5 cm内外の円形の範囲で滑らかに摩滅しており、その周囲に濃い墨が付着している。周囲を打ち欠いて形を整えている。

H・22、底部内面中央部が滑らかに摩滅しており、濃い朱墨が付着している。転用硯の一部である。

I・16、底部高台内に濃い朱墨が付着している。摩滅痕は認められない。周囲を打ち欠いて座りをよくしているが欠損している。

I・17、底部内面の中央部付近に、やや粗いが摩滅痕がみとめられ、無釉部分全体に朱墨の付着がみられる。割れ口断面の一部にも朱墨が付着しているが、多くの部分を欠損している。

K・4、底部内面中央部を中心に濃い朱墨が付着している。摩滅痕は認められない。朱墨溜めと思われるが大部分を欠損している。

L・41、底部内外面に濃い墨が付着している。内面は滑らかだが、外面には摩滅の痕がみられない。大部分が欠損している。

M・23、底部内面中央部が非常に滑らかに摩滅しており、無釉の部分には全面にわたって朱墨が付着している。大部分が欠損している。

M・41、底部内面中央部が径5 cmの円形の範囲で滑らかに摩滅している。また、全面にわたって濃い朱墨が付着している。周囲を打ち欠いて調整した痕跡が見られるが、一部欠損している。底部外面に「九」もしくは「加」と読める墨書がある。

M・43、底部内外面とも全面にわたって濃い墨が付着している。いずれにも摩滅痕は認められない。多くの部分を欠損している。

N・50、底部内面中央部付近に摩滅痕が認められる。周辺部には濃い朱墨が付着している。多くの部分を欠損している。

N・80、底部内面中央部が一部摩滅している。全面にわたって濃い朱墨が付着しており、割れ口断面の一部および高台の一部にもその付着がみられる。周囲を打ち欠いて形を整えている。

N・81、底部内面の中央部に近い部分が比較的滑らかに摩滅しており、ほぼ全面にわたって墨が付着している。底部外面の一部にも墨の付着がみられるが、これは墨書の一部である可能性もある。大部分を欠損している。

O・130、底部外面の中央部近くが滑らかに摩滅している。その部分は薄く、周辺部は濃く朱墨が付着している。周囲を打ち欠いて座りをよくしているようであるが、多くの部分を欠損している。

O・131、小片である。底部内面に朱墨が付着している。摩滅痕は認められない。

O・132、底部内面ほぼ全体にわたって朱墨が付着している。割れ口断面にも朱墨の付着がみられるので、この形で使用されたものと思われる。摩滅の痕跡は全く認められず、朱墨溜めと思われる。

O・133、底部内面に朱墨が付着している。全体的に自然摩滅しているが、周囲の一部は打ち欠いて形を整えているようである。使用のための摩滅痕は認められない。大部分が欠損している。

以上のように、本遺跡では筆の穂先、陶硯のほか多くの転用硯が出土しており、文字を記す階層の存在を明らかにしている。数多く出土した墨書土器も、この集落内で記されたものと考えてよいだろう。中でも特徴的なのは、転用硯の内半数以上が朱墨であることであろう。朱墨は在地で文書の読みあわせの際に使用され、確実に紙に書かれるものであるといわれている。本遺跡の性格を考える上で極めて示唆的である。これらの資料から考えられるいくつかの問題点については、第7章で改めて述べたい。

引用文献

- 岡田正彦 1973 「墨書・刻書土器小考」『信濃』25-4 信濃史学会
 1978 「信濃の墨書・刻書土器」『中部高地の考古学』長野県考古学会
 玉口時雄 1980 「転用硯考」『古代探叢』
 檜崎彰一 1982 「日本古代の陶硯」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』平凡社

第105表 転用硯一覧

出土遺構	番号		器種	使用面	使用度*1	時期	墨書土器との伴出	備考
SB18	7	灰釉陶器	椀C	底部内面	A	?	×	朱墨
SB30	55	〃	広口瓶	体部 〃	B	12	×	〃
SB32	285	〃	皿B	底部 〃	B	〃	○	〃
〃	293	〃	皿C	〃	C	〃		〃
〃	311	〃	皿B	〃	C	〃		〃
〃	342	〃	〃	〃	B	〃		〃
〃	343	〃	〃	〃	B	〃		朱墨
〃	344	〃	皿	〃	C	〃		〃
SB36	3	〃	椀B	底部外面	B	〃		×
SB58	15	須恵器	杯A II	〃 内面	B	4	×	朱墨
SB63	45	灰釉陶器	皿C	〃	B	12	○	底部外面に墨書「加」
SB66	33	〃	椀B	〃	〃	〃	×	〃
SB73	7	〃	〃	底部外面	C	14	×	朱墨
SB74	48	須恵器	甕	体部内面	A	?	×	〃
SB78	15	灰釉陶器	椀A	底部 〃	B	13	○	〃 底部外面に墨書「加」
〃	11	〃	皿B	〃	B	〃		〃
SB86	23	〃	皿C	〃	B	〃	×	〃
SB87	8	須恵器	杯B III	底部外面	A~B	4	○	〃
SB91	20	灰釉陶器	椀A	底部内面	C	7	○	同じ面に墨書、判読不能
SB94	45	〃	〃	〃	A~B	9	○	朱墨
SB96	10	土師器	杯A II	〃	C	8	○	〃
SB102	28	灰釉陶器	皿B	〃	B	7	○	体部外面に墨書、判読不能
SB103	12	〃	椀A	〃	A	8	○	〃 〃
SB110	9	〃	〃	底部外面	C	7	○	朱墨
SB114	11	〃	〃	〃 内面	A	8	×	〃
〃	24	〃	〃	〃	A	〃		〃
SB120	24	〃	皿C	〃	A	11	×	朱墨
SB142	21	〃	椀A	〃	B	12	×	〃

SB195	4	〃	皿B	〃	B	8	○	底部外面に墨書、判読不能
〃	6	〃	〃	〃	A	〃		〃 「休」か
SB227	8	須恵器	杯蓋	内面	C	2	×	朱墨
〃	12	〃	杯B II	底部内面	B	〃		
SB263	21	灰釉陶器	椀A	〃	B	12	×	
SK101	4	〃	〃	〃	B	8	×	
SK118	7	〃	〃	底部外面	B	7	○	体部外面に墨書、判読不能
〃	6	〃	皿B	〃 内面	A	〃		
SK120	4	灰釉陶器	椀A	底部内面	A	7	×	
SD17	52	〃	椀C	底部外面	C	12	×	
〃	53	〃	皿B	底部内面	A	〃		
SX21	51	〃	〃	〃	A	12	×	朱墨
I、H地区II層	21	〃	椀A	〃	A	10		
〃	22	〃	皿B	〃		12		朱墨
I地区 I層	16	〃	椀	底部外面	C	13		〃
〃 II層	17	〃	椀A	〃 内面	B	12		〃
K地区 I層	4	〃	椀C	〃	A	8		朱墨
L地区 〃	41	〃	皿B	〃	A	9		
M地区 〃	41	〃	椀A	〃	B	10~12		朱墨、底部外面の墨書 「九」または「加」
〃 II層	23	〃	皿B	〃	A	12		朱墨
〃	43	〃	皿C	底部内外面	C	〃		
N地区 II層	80	〃	皿B	底部内面	B	11		朱墨
〃	50	〃	〃	〃	B	〃		〃
〃	81	〃	〃	〃	B	12		
O地区 II層	130	〃	椀A	底部外面	A	13		朱墨
〃	131	〃	?	〃 内面	C	?		〃
〃	132	〃	椀A	〃	C	12		〃
〃	133	〃	皿B	〃	C	11		〃

※1 使用度の凡例は次のようである。

A……器面が非常に滑らかに摩滅しているもの。

B……摩滅の痕跡は認められるが、調整痕が残り、使用度があまり高くないもの。

C……摩滅の痕跡が全く認められないもの

(5) 土製品 (図版211 PL91)

SD17・74は底の部分から発見されたもので、ほぼ全体がわかる。中空になっており、三角形の体部に一部欠損しているが把手が付けられる。下部には中空の部分をはずして径7mmほどの穴が貫通している。成形は、内部に炭化した藁状の植物質が残っており、中空にするため植物の束を芯にいれその周囲に粘土を巻いたと考えられる。

N・79は瓦塔の一部と考えられる。小片のためはっきりしないが、屋蓋の部分と思われる。

SD21・1は瓦塔の軸部とも考えられる。

(6) その他

ア 木製品 (図版211 PL91)

木製品の出土は少なく、次に説明する一点のみである。

SB66・59は砧であり、炭化したため残ったと考えられる。材質は広葉樹で、ノミの痕が柄の部分に明瞭に残っている。身部の径は7cmと比較的細く、上下は欠損している。

イ 漆製品 (第148図)

SK128より3点が副葬品としてまとまって出土している。しかし、いずれもベースとなる材質は腐敗してなくなっており、漆皮膜のみ残っている(註1)。

1は高台の付かない口径10cm、底径4cmほどの椀である。残存する漆の膜の裏には板目が残っており、木取りの方法は横木取り(証目)である。漆は黒漆である。

2は箱で、周囲を欠損しているが、推定で長辺20cm、短辺18cm、厚さ2cmを測る長方形で、角の部分は面取りがされている。出土時には一つにみえたが、整理時に観察すると、蓋と身の重なった状態であることがわかった。製作方法はベースに麻布を1ないし2枚重ねた乾漆法である。なお縁の部分には強化を目的とした紐(麻布)が付けられている。このようなやや厚くなった端部は置口あるいは覆輪と呼ばれる。乾漆法は10世紀ごろまで盛行し、12世紀には消滅してしまう。出土例は少なく貴重な資料である。なお、漆は黒漆である。

3は2と同様に蓋と身が重なった鏡を入れるための箱と思われる。形状は、破損が著しいためはっきりしないが、円あるいは八角形になると思われる。ベースは木製か乾漆かは不明である。但し、布(麻)は使用されており、それが木に貼られたものか、乾漆のベースにされたものかは不明である。漆は黒漆である。

この他、内面に漆が付着している土器の椀がいくつか認められた。それらは塗られたものか、パレットとして使用したものか判断できなかった。今後注意していく必要がある。

(註1) SK128出土の漆製品については、東京国立文化財研究所より、御指導をいただいた。

第3節 小結

1 竪穴住居址

時期 分類		1	2	3	4	5	6	7	8
I	A								
	a								
	B								
II	A	a							
		b							
	B	a							
		b							
	C								

- I群 方形プランを呈するもの
 A類 カマドが壁中央に位置するもの
 B類 { a カマドが壁中央から若干壁に寄るもの
 b カマドがコーナーに位置するもの
- II群 長方形プランを呈するもの
 A類 a カマドが長辺中央に位置するもの
 b カマドが短辺中央に位置するもの
 B類 a カマドが長辺隅に位置するもの
 b カマドが短辺隅に位置するもの
 C類 カマドがコーナーを向くもの
- III群 カマドあきの壁が外側へ湾曲するもの
 IV群 カマドのある壁が長く、台形を平面プランを呈するもの
 V群 カマドの付く壁が独立し、五角形の平面プランを呈するもの

(1) 古代堅穴住居の構造と使用状況

(ア) 検出された堅穴住居址

今回の調査によって検出された堅穴住居址の総数は66軒にのぼる。これらの住居址をその出土遺物から時期毎に分けると第262図に示した通りになり、奈良・平安時代の全時期を通じて堅穴住居が盛んに造られたことを物語っている。各時期はさらに、2段階ほどに分かれる場合がほとんどである。その消長につ

ては第8章において詳述するので、ここでは個々の堅穴住居址の構造に視点を当て、その特徴と変遷を概観する。

(イ) 平面プランとカマドの位置(第261図)

平面プランの基本は方形であり、これに長方形を加えたものが全時期を通じて認められる。いびつに見えるものも多いが、3期～9期にかけてのものについては、切込みが基盤の礫層に達することや、切り合い関係が複雑であることによって生じた変形と考えると、差し支えなさそうである。10期以降、カマドがコーナーに寄り始めると、さまざまな形態が出現する。しかし、これらも大幅な変化ではなく、基調は方形であると言えよう。

以上のように、平面プランの変化は、カマド設置の方向によって大きく左右されると考えられるため、さきにかまどの位置の変化についてみておこう。

カマドの設置される

	9	10	11	12	13	14
III						
IV						
V						

第261図 堅穴住居址の形態とその変遷

位置の基本は、いずれの壁においてもその中央であり、こうした例は全時期を通じて存在している。中央からややコーナーに寄る例は4期から少数見られるが、いわゆるコーナーカマドが増加し主流になるのは、9期以降である。住居のプランが変形しはじめるのは10期であり、カマドがコーナーに寄ることが先行し、それにつられて平面プランにも変化が起こっていることがわかる。

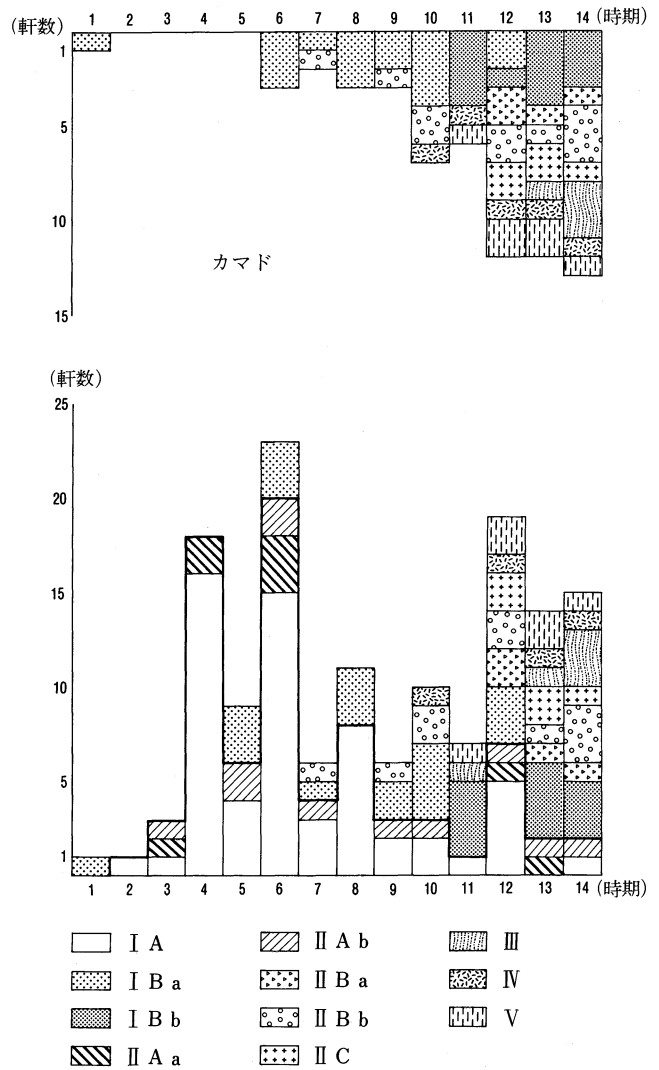
カマドがコーナーに寄ってくる要因は、カマド使用以外のために堅穴住居の空間を有効に利用する必要性が高まった点にあらう。カマド利用時の行動半径を考慮すれば、コーナーに寄るほど住居内の使用空間が広がるのである。しかし、初期のコーナーカマドのように、方形プランの住居空間内を単にコーナーへ移動させると、カマド周辺のスペースが狭くなりすぎて調理時に動きづらくなってしまふ。そのための工夫として生まれたのが、カマドの脇を張り出させたもの(第Ⅲ群)や、カマド専用の壁を設けて五角形プランとするものなどである(第Ⅴ群)。また、長方形のプランを持つものも増加の傾向を見せる。

こうした、カマドのコーナーへの移動がなぜ起こったのであろうか。カマド出現以来、カマドは調理の中心であり、食生活を支えていたものとして堅穴住居中央の位置を与えられてきた。造り付けカマドであるため、その位置は住居構築時には壁中央と定まっておき、それを基本に貯蔵穴などの配置が決っていったものと推測される。このように、堅穴住居の設計自体がカマドの設置を第一義的に考えていた節がある。ところが、カマドがコーナーへ移動するという事態は、カマドそのものを使用するときのスペースが、住居空間内で狭くなったただけにとどまらず、カマドに関わらないスペースを広くする必要性に迫られていたことを示していよう。さらに、食生活の中心的位置を占めていたカマドがコーナーに寄ることは、それにとって変わるものが出現したことを想定させる。今回の調査では、囲炉裏や堅穴以外の住居空間を検出し得なかった。そのため、まったくの推定に過ぎないが、古代から中世への調理方法の変化の一端を、こうした住居附属施設の配置の変化や、住居空間に占める割合からも考えられる可能性を示しておきたい。

カマド以外に堅穴の空間を使いたいならば、住居そのものを大形化すれば、カマドを移動する必要性はなくなる。それにも関わらず、狭い床面積の中で配置を変え、若干の張り出しを設けるなどの工夫をせざるを得なかったのは、堅穴の構築技術以外の要因も絡んでくるのであろう。

(ウ) 床の構造(第263図)

本遺跡の床構造の特徴を列挙すると、①深い荒掘りを持たないこと、②住居中央部分のレベルが低くなる例が多いこと、の2点である。①の点はこの地区の地盤が礫層であるため掘りにくかったこと、また水



第262図 堅穴住居形態と、カマドの位置、時期別軒数変化

はげが比較的よく、床下に工夫をする必要がなかったことがあげられよう。後者の点は②にも関わってくる。すなわち、通常の堅穴住居の荒掘りは中央を高いまま残し、壁際を深く掘り返して湿気が住居中央に残らないようになっている。しかし、ここでは住居中央が低くても差し支えなかったであろう。したがって本遺跡における床面構築手順は、ある程度想定した床のレベルに達すると、特に壁際を深くするなどの工程を省き、そのまま黄褐色土を敷いて床面としているのである。

使用状況についてみると、床面が堅くなっている範囲がカマド前方から住居中央にかけてであり、古代堅穴住居の一般的な傾向と変わらない。

(㉔) 壁・上屋の構造

壁を想定できる資料は皆無と言ってよい。堅穴部分の壁についてはSB36で壁に貼り付いた炭化材があり、壁材を支えていた支え棒の可能性はある。また、SB59ほか数例に周溝が認められており、壁材を差し込んだ可能性がある。

掘込み部分より上位の壁については、堅穴部分のプランがかなりいびつであること、あるいは、コーナーに寄るカマドの片袖が、堅穴の壁をそのまま利用していることなどから、掘込み部分の立ち上がりの外側に壁が存在していた可能性が考えられる。

上屋については、柱穴のあるものが少なく不明な点が多い。柱穴の残るものは6期以前のものが多く、SB174では4本の支柱穴と壁際の支柱穴が確認されている。時期の新しい住居では堅穴内部に柱穴を待たないものが多く、このことは古代東国の堅穴住居の一般的な傾向と一致している。

(㉕) カマドの構造

本遺跡のカマド構造は、各々の例において細部の工夫はあるものの、時期によって大きく変化することなく、構築技術の面では一定していたようである。これに対して、変化が顕著に現われるのは、カマドの設置場所とそれに伴う住居形態である。後者についてはすでに触れているので、ここではカマド構造について構築の手順を追う形で取り上げて行く。

①荒掘り

燃焼部の幅を決め、袖石を固定させるための荒掘りを行う。この場合、袖石固定のため、その部分だけ深く掘り下げる例と、火床全体を深く掘り、若干埋め戻す要領で袖石を固定しようとした例がある。火床部の掘り込みは、一方で支脚石の固定にも関与している。また、この時点で、煙道の掘り込みも作られたと考えられる。特に、SB94、96では煙道部をも大きく荒掘りしている。

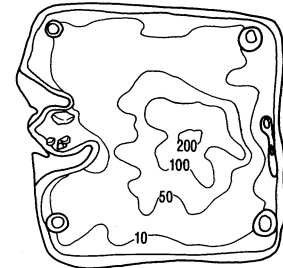
②基礎となる袖石の設置

石は硬砂岩かあるいは花崗岩が多く用いられており、両者を混ぜて使用している場合がほとんどである。形状は枕状の長めの石を用い、石の長軸が上下となるように差し込まれている。上面はその上に石を積みやすくするためカットされ平に加工している例がみられる。

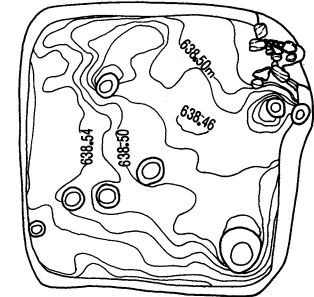
差込みの角度は、垂直かやや内傾させるものが多く、外傾するものは破壊にもなっており袖石がずれたもの以外、本来存在しなかったのかもしれない。

③基礎となる袖石の固定

最下段の基礎とした石と石の間隙や外側を、礫や土によって固める。この際に土器片を用いるものも数例(SB52ほか)存在する。特に意味を持たせる例もあると考えられるが、一般的には、単なる材として使っ



SB07床面等高線図
(単位 kg/cm²)



SB50床面等高線図
第263図 床面の構造

たのであろう。このほか、堅固にするため、さらに袖の外側に沿って石列を作る例がある（SB28）。また、コーナーに設置されたカマドでは、袖石を壁に密着させ固定させているものが認められる。

④石を積み上げて天井石を乗せる。

この場合、平石の平らな面を上下にして重ね、天井石が乗りやすいように工夫されているものが多い（SB175）。

⑤カマドの完成

ロームと暗褐色土などを混ぜ合わせた土によって、全体を被覆して形状を整える。

以上概観したものが、本遺跡の基本的なカマドの構築方法である。このほか、以下の例が少数認められる。

- a) 袖の芯に礫をほとんど用いないタイプ。8期以前の各時期に少数ながら存在している（SB07ほか）。
- b) a) に近く、袖石の乗る部分だけ大形の礫を埋め込むもの（SB94ほか）。
- c) コーナーカマドにおいて、一方の壁をそのまま片袖に利用し、内側に礫を並べるもの（SB27）。
- d) 火床が壁のラインより外側に出るもの。両袖は地山の内側に礫を並べるだけになる。本遺跡ではSB257のみで認められる。

- e) 袖石の固定のための掘り方を持たず、地山をある程度掘り残して袖の一部とするもの（SB264）。

袖部の構築方法を中心にみてきたが、カマドの機能に対する袖部の形状はすでに完成の域に達しており、時期によって若干の改良はあるものの大きな変化は認められない。

これに対して、煙道の形態は熱効率の問題に関連して改良が進められていたと考えられる。しかし本遺跡の場合、古代以後の堆積作用が少なかったため、煙道の多くが壁際の一部しか検出できないか、あるいはまったく見つからない状況であり、積極的にコメントできるものではない。火床部からの立ち上がりの角度の差については、一定の時期的な変遷は認められず、個々の住居毎で異なっているようである。比較的緩やかな立ち上りを示すものは少なく、火床部から階段状に立ち上がる例がほとんどである。煙道部の構築は素掘りのままのもの、やや広めに掘っておいて礫を両わきに並べるものが大半を占めている。

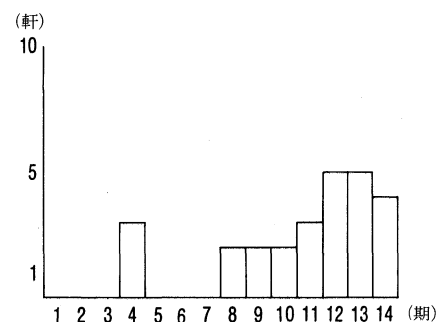
⑥その他の施設

貯蔵穴あるいはそれに類したピットは、4期に3軒あり、その後、8期以降再び増加の傾向を見せている（第264図）。

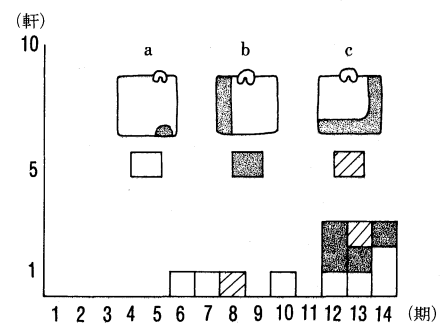
住居床面の一部に盛り上がりを持つもの（テラス・ベット状遺構）には次の3タイプが存在する（第265図）。

- a) ステップと言った程度のものである。この中には入口施設の可能性を持つものも含まれていよう。
 - b) 一壁面に沿って長方形のプランをなすもの。
 - c) 「L」字状あるいは「コ」字状に住居中央を取り囲むように存在するもの。
- b)・c) は明らかに、住居空間の間仕切の役を果たしており、テラス上で一定の行動が取れる広さを備えている。

出入口の施設として明らかなものは、SB227に認められるスロープであろう。しかし、これは一般的な堅穴住居とは異なっており特殊な例である。一般的な堅穴住居では、SB07でカマドと対する位置に小ピットがうがたれた例が認められる。以上、少数の



第264図 貯蔵坑及びそれに類したピットの設置された住居址軒数



第265図 テラス(ベット状遺構)のある住居址軒数

例しか確認できなかったが、これらが入口施設であるならば、いずれもカマドと対する位置に入口が存在していたことを示している。

竪穴内の空間分割を示すものとしては、先述のテラスのほか、SB187で間仕切り溝が確認されている。この住居においては、この溝を境として北側に貯蔵穴などのピットが集中している。

貼床下に存在し、明らかに当該住居に関係すると思われるピットは少ない。カマドに関連し、焼土・灰・土器片が入ったものは少数例しか認められず、いわゆる床下土坑と呼ばれるものもほとんど存在しない。わずかにSB94などで土器の埋納された例が認められる程度である。

(2) 古代竪穴住居の廃絶とその後

(ア) 住居廃絶の過程

本遺跡では、火災などの不慮の事故によって、遺物が生活時の状況を残したまま検出された住居址は存在しない。炭化材を多く検出した例はSB36だけである。その場合もカマドの破壊がなされ、遺棄された遺物が見あたらないことなどから、住居廃絶時に要らなくなった建築材を焼却したものと考えられる。このように、多くの住居址を検出したものの、各時期とも火の管理が行き届いており、火災による焼失家屋は存在していない。

SB32において、壁際に多量の土器が床面に並べられた状態で発見されているが、この場合は一般的な住居とは考えられず、この例を持って他の竪穴の住人の生活を復元することはできない(SB32については本節3を参照)。

このように、本遺跡においては特殊な例を除いて、引越しが決まると竪穴内の家財道具は片付けられ、一定の処理がなされるのである。

ここでは、さらに住居の移動が決まったのち、その住居がどのように処理されて行くのかを追ってみたい。

①室内にある器物の整理、搬出をおこなう。

これは、生活時の状態で遺棄された遺物がないことから判断される。SB213などのようにカマドの脇に3枚重ねの土器が存在する例が認められるが、いずれも床面からは浮いており、遺棄と言うよりも後述するカマドの廃棄に関する行為の一例と思われる。

②建築材の除去

遺存していないので断定はできないが、隣接地に短期間内に住居が建てられていること。住居廃絶後の窪地が、短期間内(同一土器型式時間内)に再利用されていたり(SB99など)、廃棄場になっていたりしていること(SB78~80)などから、住居廃絶に伴うすみやかな建築材撤去が推定できる。SB36などは特別な例であったと言えよう。

③カマドの破壊

②との前後関係は不明であるが、時期を問わずほとんどの住居址で、カマドの破壊が確認された。破壊の箇所は前方部の天井、袖、支脚を対象としており、その内の一ヶ所か、あるいはいくつかの組合せで破壊が実行されている。破壊ののち、土器や礫をまじえた土によってカマドは埋められ封鎖される。

④住居の埋め戻し

①~③が終わったのち、住居の壁際からの埋め戻しが始まる。住居中央床面上に礫を集積したり、焼土のある場合があり、埋め戻し前に、何らかの行為がなされたことを示している住居址もある(SB43など)。

以上が、基本的にみられる住居廃絶の流れであるが、④ののちに、礫を集積したり、土器の多量投棄が認められる住居址も存在し(SB05, 51)、これらが一連のものであるのか、時間差を持つものなのかは確定しきれなかった。

(イ) カマドの廃棄

住居の廃棄前にカマドの一部を破壊し、燃焼部を封鎖する行為は全時期を通じて認められる。また、住居内の他の部分に比較して、手厚く入念に処理がなされており、当時の人々によってカマドが大きな意味を持っていたことを示している。その方法には変化が乏しく、個々の住居において若干の差が認められる程度である。時期的な傾向の変化も認められない。これは、伝統的に儀礼としての「カマド廃棄」の手順が定まっており、確実に踏襲されていたためと考えられる。基本的な廃棄の手順は以下のようになり、その組合せによって各竪穴住居の個性が現れている。

①天井石の除去

検討材料となり得る152例中、比較的良く天井石の残存していた例はわずかに4例である。また、煙道部際の天井石だけが残っていたものは15例であった。後世の攪乱によって天井の失われた例も含まれると考えられるが、地表面に近い煙道部側の天井石のみ残っている例が多い点から、焚口に近い側の天井石は、故意に外された可能性が高いと言えよう。

②支脚の除去

支脚石の残存していた例は17例認められた。しかし、残存していた支脚石の上面に土器片をかぶせるものもあり、機能を停止させようと言う意志が認められる。

③袖の破壊

両袖が比較的良く残存していた例は2例のみである。破壊の方法は、焚口に近い側だけを崩すものが多く、左右両袖を崩すものと片袖のみを崩すものが認められる。時期的な傾向などはとくに認められず、個々の家の習慣によるものと考えられる。

④火床の封鎖

袖の破壊の後、袖に使用されていた礫や土をカマドの内側に崩して、火床を封鎖するものが多く認められる。これには、煮炊具の破片が混入する傾向が強いが、完形に近いものは少ない。

⑤燃焼部を土・礫などで埋める

火床がある程度埋まると、煮炊具の破片を平らに敷いてさらに封鎖するものや(SB116など)、完形に近い食膳具を投棄する例が認められる(SB52など)。

この時点では、支脚もはずされていて、さらに、土や礫を使ってカマドの燃焼部を埋め尽くすものと考えられる。

⑥礫でカマド全体を封じる

SB49や69などでは、最後にカマドの上部を多量の礫で覆い、完全に封鎖している。

以上、「カマド廃棄」の方法についてみてきたが、基本的な手順は長期間にわたって変わっておらず、その儀礼的な側面が固く守られていることを窺わせる。また、竪穴住居廃棄の行為の中でも、特に力を入れているらしく、カマドの重要性を裏付けている。今後は、統計的な資料の裏付けを行い、さらに保守的な行為の中での差異が、何を示しているのかを検討して行かなければならないであろう。

(ウ) 住居址内検出の礫について

本遺跡の竪穴住居址の大半のものに、礫の集積や散乱が認められた。これらは、それぞれの場合において異なった行為の結果を示しており、ただの投棄物として単純に片付けてしまうことはできない。本遺跡の例を見て行くだけでも、それぞれ礫の集積された場所・時期・供給された場所・集積のパターンなどが異なっており、礫集中の意味もそれぞれ異なっていたと推定される。以下、本遺跡の主なパターンをあげ今後の検討材料としたい。

(A)住居の使用中にすでに存在していたと考えられるもの。

(B)住居の廃棄時に関連すると考えられるもの。

(C)住居廃絶後の窪地を利用したもの。に大別できる。

(A)の例としては、SB32の焼土をとともなる遺構がその可能性を持っている。この場合、検出時は(B)と同様に、床面上に礫が集積した状態を示しているの見極めが難しい。

(B)はさらに、①カマドを破壊したときの礫を、そのままカマド前方や側方にまとめて放置したもの(SB184)、②破壊したカマドを封鎖するために、多量の礫をカマドの上にかぶせたもの(SB69)、③住居の廃棄に当たって、住居中央の床面上に礫を集積したもの(SB43)、などが認められる。

SB43などに認められる③の例は、土器をほとんど伴わずに焼土・炭化物を含むもので、礫そのものも被焼を受けたものが多く存在している。①②では、多くの土器片や完形土器を伴うことが一般的であり、③とは異なった様相を示している。これは、住居廃棄にとともなう行われる一連の行為の中であって、土器の使用も認め、破壊と埋め戻しの行為に主体がおかれる、「カマド廃棄」とは異なる脈絡に属するものと考えられよう。よって、同じ住居址床面で検出された礫の集積であっても、①と③ではその内容と意味において大きく異なっているのである。

(C)には、④住居址の覆土上層に多量の礫の集積が認められる場合、⑤特別なまとまりはなく、散乱している場合、とが認められる。前者には、SB106のように、多量の礫で面を作り、その場でなんらかの行為がなされたことも予想できるようなもの。そして、他の場所で使用した礫をまとめて廃棄したと考えられるもの、の二者が存在する。その場に設置されたものか、あるいはまとめて投棄されたものであるのかは、発掘時の観察によって判断しなければならないであろう。今回は、可能性を示すのみにとどめておきたい。

(4) 堅穴住居廃絶後の窪地利用

堅穴住居がある程度埋まると、使用不可能となった土器片などが投棄されるようになる。これは、従来から指摘されていることであるが、本遺跡の各住居址もその例に漏れない。住居址の埋土に土器片がレンズ状に堆積している状況は、SB02の遺物出土状態(第12図)などで明瞭に掴むことができる。しかし、その廃棄のパターンも単純ではない。本遺跡の堅穴住居址埋土(床面は除く)における、基本的な遺物の出土状態を見ると、次のようにまとめることができる。

①カマドの周辺で床面から若干浮いた状態

これらは、床面から浮いているとは言え、住居廃棄にとともなる、カマドの破壊と封鎖に関連したものが多くと考えられる。食膳具・煮炊具を問わず、カマド周辺に礫とともに出土する状況は、多くの住居址で認められており、カマド内とカマド周辺の土器が最も多く接合している。このことは、当該住居で使用した土器を廃棄するに当たって、カマドを意識していることを示しており、単なる窪地への不用品の投棄とは異なっている。

②壁付近で床面から浮いた状態

埋め戻しと考えられる逆三角堆土が形成された後、食膳具を主体とした土器の投棄がいくつかの住居で認められる(SB05・49・102ほか)。このなかには、住居廃棄の一連の行為に含まれるものと、当該住居とは無関係に、投棄されたものがあると考えられる。今後これらも、厳密に分けて行く必要がある。

また、「壁付近」と一括したが、SB05で見られるような、灰や炭化物と共に多量の土器がまとまって出土する例や、SB63のように、少数の土器がまとまりなく散在するが、住居址中央では希薄になる例がある。前者は付近での一括投棄であり、後者は一括投棄ではないが、結果的に壁付近に遺物が集まった例と考えられる。いずれも、逆三角堆土が形成された後では、堅穴の壁外側からの投棄であり、住居中央まで投棄物が到達する例は少ない。逆に、住居中央の埋土上層にまとまった土器が存在する場合は、そこには特別な投棄の行為があったか、別の遺構があったとも予想される。

③住居埋土全体に広がる。

意図的に、数回にわたって土器の大量投棄が認められるものに、SB78～80があげられる。これらの中心は食膳具であり、断続的にこの場所に捨てられた可能性を示している。時期的には、SB32の存在する第12期に、最も多くの食膳具の廃棄が認められている。他の遺跡と比較しても異常な量であり、本遺跡を語る上で重要な遺物出土状況と言える。

このほか、住居址埋土最上層では、自然の力も手伝って土器の細片が散在する例や、遺物の投棄がほとんど確認できないものも存在する。

今回は、遺物の出土する場所によって3タイプに分類したが、これはあくまで表面的な分類にとどまっている。③は②の積み重ねによってでき得るし、②の中でも、個々の場合によってその意味するところは異なっている。これらの点を明らかにするのは、発掘の時点での観察などにかかってくる。古代人の行動様式を知るには、机上のみではなく、発掘時において細かな観察と分析が必要であることを、あらためて痛感するものである。

次に、竪穴住居址の埋まりきらない窪地を利用した施設について挙げておこう。SB99は、当初埋土上層から、多量の食膳具が出土した住居址とみられていた。本遺跡の場合、遺構確認面が現水田面に近いこともあって、住居址の埋土は鉄やマンガンの沈澱により変色し、切り合い関係が非常に掴みにくくなっていた。また、住居址床面とこれらの遺物には型式差がないため、住居址埋土中位の遺構の確認が難しくなってしまった。しかし、SB99の遺物出土地点を確認していくと、埋まりきらない住居址中央に、土坑が掘り込まれていることが判明した。この他、埋まりきらない住居址の窪地を利用した施設については、前述したSB106の、多量の礫もその可能性を持っている。

このように、古代においても竪穴住居址の埋まりきらない窪地は、不用物の廃棄場としてのみではなく、窪地を利用したなんらかの施設の存在も考慮に入れることが必要であろう。古代の竪穴住居址の埋土については、これまで余り注意されてこなかったように思える。しかし、こうした窪地は当時盛んに利用されていたと考えられ、調査の方法とともに見方を改善していく必要があるだろう。

参考文献

- 岡田正彦 1977 「平安時代土師器等の編年試論」『信濃』29-9
 桐生直彦 1984 「カマドを有する住居址を中心とした遺物の出土状態について(素描)」『神奈川考古』19号
 土井義夫・渋江芳浩 1987 「平安時代の居住形態」『物質文化』49
 土井義夫ほか 1984 『宇津木台遺跡群IV』
 福岡県教育委員会 1985 『塚堂IV』

2 SK128をめぐる問題

ア 土壙墓

SK128は平安時代中葉にあてられる土壙墓である。木棺の存在が想定でき、多くの副葬品を持つ。このように豊富な副葬品をもつ平安時代の土壙墓は、県内各地でいくつかの類例がみとめられ、かつて桐原健によって集成されて検討が加えられている(桐原1976・1986)。本址についても、すでに同氏によって性格づけが試みられているが(桐原1986・1987)、ここでは氏の成果に拠りながら、本址の性格について考えられるところを若干述べてみたい。

本址出土の遺物の内、遺体の頭部にあたると思われる北側に置かれていた漆製品・八稜鏡は棺上に、東壁および西壁に沿って出土した土器類は、棺の脇に並べられていたものと考えられる。このような状況で遺物を出土する土壙墓の例を、出土状況の比較的明らかなものについて改めてまとめると第106表と第266図のようになる。これらについてみると、遺物の多くは碗、皿、杯の食膳具であり、壁に接してもしくは、土壙の片隅にまとめられて埋納されている場合が多く、棺が想定される場合、棺外もしくは棺上に置かれたものと推定される。特に鍛冶田遺跡A地区第2号土壙の場合、土壙の長軸方向の両壁ぎわに粘土をもって段が形成され、その段上に土師器・黒色土器Aの杯が4点正位で並置されており、棺を土壙内に安置した後、ここで最後の葬送儀礼が行われたことを強く示唆している。また、神子柴遺跡の土壙墓の場合、東壁北寄りの壁に接して、灰釉陶器の碗・皿の2点が内面を内側に向け横位で出土している。あたかも、棺と土壙との間隙にさしこんだかのような状態である。この例も埋葬直前の供献を窺わせていよう。これらの例を参考にすると、棺外に置かれた食膳具類は、いよいよ遺体を埋葬するにあたって、死者に最後の供献をするために用いられたものであったと推定される。いわゆる「黄泉戸喫」である。

ところで、死後すぐに死者の枕元に飯を供える枕飯の風習がある。この枕飯とヨモツヘイグイとは混同されるむきもあるが、本来は別のものであろう。前者は、12世紀以前の成立と考えられる『葬法密』(上井久義1979)に、「葬送に至るまで、常の如く供膳すべし」、とあるように、生者と同じ扱いでの供膳である。終命から埋葬までの間はいわば^{モガリ}殯の期間であって、死者と現世とはまだ完全に断絶してはいない。一方、ヨモツヘイグイは、それによって黄泉の国の住人になることであり、現世との絆が完全に断切られることを意味する。従って、そのための供献は埋葬に伴って行われるものであり、埋葬後墓前に供えられることもあった(上井1979)。直葬の更埴市島・道前遺跡第1号土壙墓の場合、壁際の高い位置から遺物が出土する場合などはこの例であろう。また平安時代にしばしばみられる「横穴式石室利用の埋葬」における副葬品も、ここでとりあげた土壙墓の場合と同様の構成をもっており(原・鳥羽1979)、土壙墓出土の食膳具の性格を考えるうえで参考になろう。

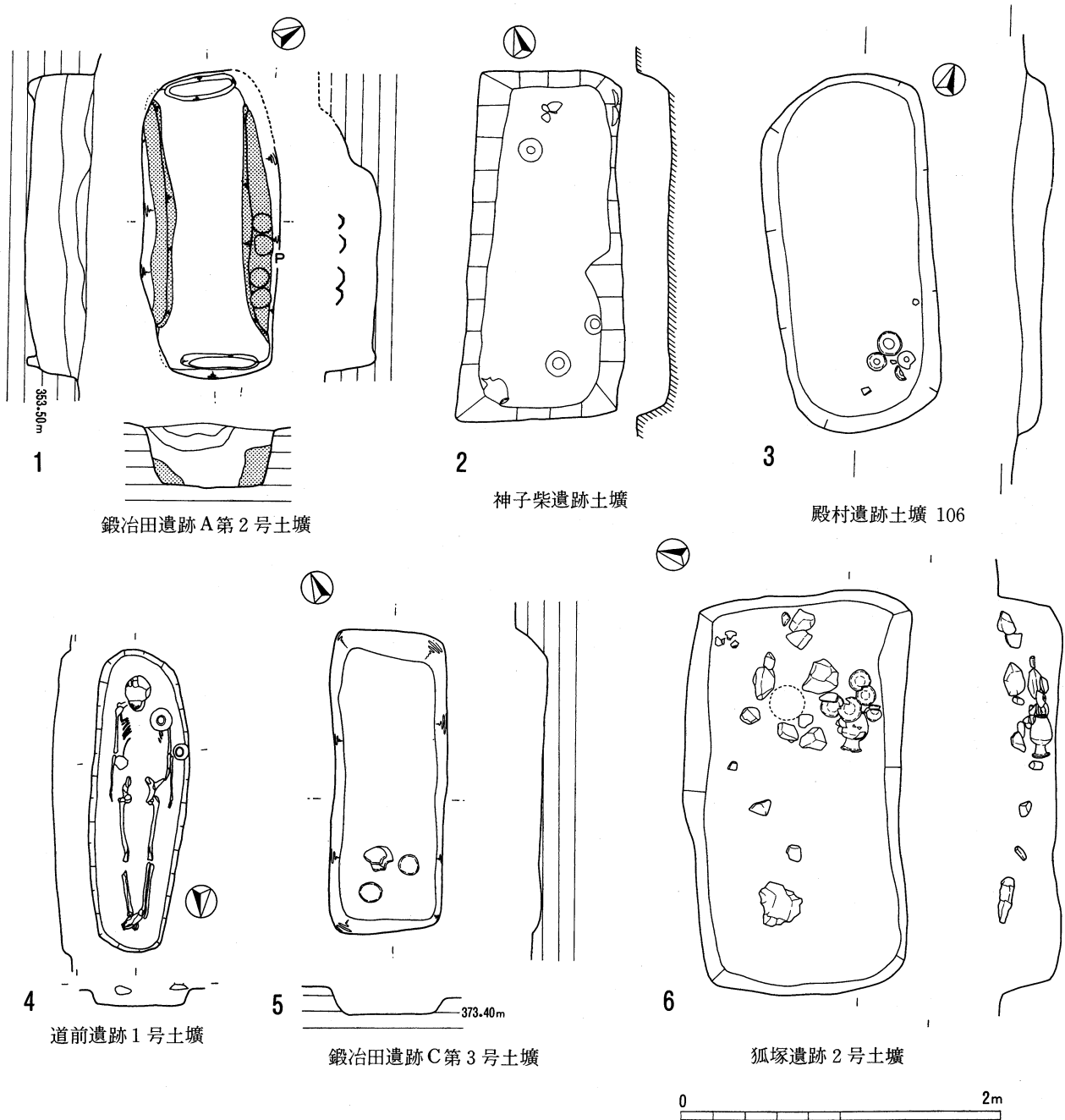
鍛冶田A2号土壙の場合、ヨモツヘイグイのための供献のあり方を窺わせる好資料といえよう。県内諸例の出土状況を見ると、本址も含めて向きや配置が雑然としている場合の方が多いが、儀礼終了後、棺あるいは遺体と土壙との空隙部に入れられたものであれば問題はない。また、ひとかたまりにまとめられているものの中には、外容器に納められていた可能性の考えられるものもある。死者に供献した食膳具類を、別にまとめて埋納する場合もあったのであろう。また、棺内や棺の内外に置かれているものがある。これらの場合、棺内のものと棺外のものとの、特に区別できるような材料はないが、あえて推測すれば、枕飯として供えられたものが、遺体の入棺とともに棺内に入れられたものといえるだろう。

本址出土の食膳具類もこのような性格をもったものと考えられ、土壙に棺を安置した後、その東側で葬送の儀式が行われ、その際、死者に供献されたものが棺の脇に並べられて埋納されたのである。

さて、このようにして埋納されている供献品をみると、長頸瓶(壺)または小型甕と碗・皿・杯類がセッ

遺跡名	所在地	遺構名	長軸×短軸×深さ	軸方向	時 期	遺物の位置 (※1)	遺 物	備 考
城 山	諏訪市	1号土壙	160×150×40		10世紀前	不明	土師羽釜1 灰釉椀1	
城 山	諏訪市	2号土壙	185×115×10		10世紀前	不明	土師杯2 灰釉椀(皿)4	
足 場	富士見町	6号土壙	75×85×29		9世紀後	不明	土師皿1	
足 場	富士見町	7号土壙	75×65×42		9世紀後	不明	土師(甲斐型)杯2	
前 田	大町市	P170	180×110×16	南北	10世紀末	棺外	土師杯2、小甕1、 黒色土器A椀3、 黒色土器B椀3、 黒色土器B耳皿1	位置は集落縁辺か
五十畑	大町市	P341	251×138×39	東西	10世紀前	棺外	須恵長頸瓶1、黒色土器杯3、灰釉皿2	頭部東より歯出土
馬場街道	穂高町	2号土壙	150×80×28	南北	10世紀前	不明	須恵長頸壺1、灰釉椀1、灰釉小瓶1	
殿 村	山形村	土壙106	225×105×12	南北	11世紀初	棺内	灰釉椀1 土師杯4	
平 出	塩尻市	長方形ピット	250×100×80	南北	10世紀代	不明	灰釉皿1	
中 道	箕輪町	土壙17	約200×120×?	南北		不明	須恵長頸瓶1	下部に焼土
神子柴	南箕輪村	土壙墓	215×98×21	南北	10世紀後	棺内・棺外	灰釉長頸瓶1、灰釉皿2、灰釉椀2 土師杯2	単独で存在
御狩野	茅野市	土壙1	190×100×23	南北	10世紀後	棺外	土師杯2、土師椀2、土師小型甕1 灰釉椀1、鉄鐸1 舌2	
狐 塚	茅野市	1号土壙	230×130×40	南北	11世紀初	不明	土師杯4、土師盤1、灰釉椀1	日常生活の場から位置的に隔絶した地点を墓域として設定
狐 塚	茅野市	2号土壙	270×140×50	南北	11世紀初	棺外・棺内	土師杯30、土師盤4、灰釉椀2、灰釉皿3、灰釉長頸瓶2、ミニチュア状甕2、紡鐘車1	石組にもみえる多量の礫をもつ木棺葬
狐 塚	茅野市	3号土壙	200×90×40	南北		不明	土師杯6、ミニチュア状小型甕1	直葬墓
南丘A	伊那市	1号墓壙	230×90×20	南北	9世紀中	不明	灰釉水瓶1	
道 前	更埴市	1号土壙墓	191×63×12	南北	10世紀前	棺外	灰釉皿2	埋葬遺体遺存頭部用
鍛冶田A	飯山市	2号土壙	188×85×35	北西-南東	9世紀末	棺外	土師杯1 黒色土器杯3	段が設けられ、その段上に土器が正位で並ぶ
鍛冶田A	飯山市	3号土壙	175×75×20	南北	11世紀初	不明	土師杯1	
鍛冶田A	飯山市	13号土壙		南北?	9世紀末	不明	黒色土器杯1	
鍛冶田C	飯山市	3号土壙	190×70×20	南北	9世紀末	棺外	土師杯3 黒色土器杯2	
城 平	伊那市	4号土壙	180×95×20	南北	9世紀初	不明	須恵杯1	
中 道	箕輪町	M・12号土壙	125×105×91		8世紀		須恵杯1	
大 境	伊那市	1号土壙	140×100×45	東西	10世紀前	不明	土師杯1	
五輪堂	更埴市	2号土壙	210×130×40	南北	9世紀中	不明	黒色土器杯3 須恵蓋1	

第106表 長野県内の平安時代土壙墓



第266図 県内出土墓壙

トをなすものと、碗・皿・杯類のみのものがあり、それらの中にもさまざまな土器類が用いられていることが知られる。時代が下がるに従って、副葬品の量が多いものが増えるという傾向がみられない訳ではないが、副葬品の多少や質の相違は同時期・同地域のものの中でもみられるので、これらの相違は葬送儀礼の軽重、すなわち被葬者の階層差によるものととらえることができると思われる。

本址の時期は、その遺物から9期にあてられる。この時期の遺構分布をみると第307図のようになり、調査区の西側に住居址のまとまりがみとめられる。それはさらに、南側への展開が考えられるから、本址は、この北辺に位置することになる。また、本址と時期を前後すると思われるSM01は、その西辺にあったといえるだろう。ともに、住居址に近接した集落内といえる範囲におさまる。また、ともに単独で検出されており、墓域を形成してもない。いわば集落内で、住居群に近接してその外側に墓が作られていたという状況である。このように住居群に近接して墓が営まれるというのは、平安時代の集落遺跡にしばしばみら

れる傾向である。しかし、この当時すべての人が埋葬されたわけではなく(田中久夫1975)、こうした遺跡においても、墓の検出は住居址に比して非常に少ない。このことは、被葬者が集落の中で特別な立場にいたものの、すなわち、埋葬儀礼を必要とされた人物であったことを示唆している。さらに、県内で副葬品を豊富にもつ土壙墓は、おおよそ9世紀末～10世紀以降にあてられ、9世紀半ば以前に位置づけられるものはほとんど見付かっていない。このような土壙墓の出現は、9世紀後半以降といえそうである。また火葬墓についても、やはり豊富な副葬品をもつ更埴市五輪堂遺跡二号火葬墓(更埴市教育委員会1982)、同上ノ田一号火葬墓・平田二号火葬墓(更埴市教育委員会1983)なども同時期のものである。このような傾向は県内のみならず各地でみられ、中世に続くものである(埋蔵文化財研究会1983)。畿内では、9世紀後半以降、薄葬が志向されている中で、豊富な副葬品を持つ木棺墓例が少なくなる(黒崎 直1980)とされるのに対して、地方においては、むしろそれが増える傾向にあることが認められる。こうした事から、このような土壙墓の被葬者について、該期に農村の中で新たに成長してきた階層、すなわち富豪層もしくは在庁官人層が想定されるのである。特に本址の場合、同様の出土状況を示す県内の土壙墓の中で、その副葬品は一級品である。八稜鏡はもちろんのこと、それとともに出土した漆椀は、当時食器としては最高級品であった。緑釉陶器についても同様のことがいえ(巽 淳一郎1983)、それを所有する階層はおのずから限定されるものである。これらの副葬品のあり方は、平安京跡で発掘された該期の貴族の墓(平安京右京三条三坊)に匹敵するものであり(京都市埋蔵文化財研究所1980)、この被葬者は一定の位階をもつ者であることも想定され、この集落のみならず周辺地域をも含めて、相当の有力者であったことが窺われるのである。近くに設けられたとされる覚志駅、あるいは国衙に係わる人物であった可能性が考えられよう。10世紀は律令国家体制から王朝国家体制への大きな転換期とされる。上記の想定が可能であれば、地方の墓制の上にもその一端が現れているといえるだろう。

ところで、すぐ近くには火葬墓 SM01がある。本址とほぼ同時期もしくは、やや古い時期にあてられるものである。とすると、本遺跡では土葬と火葬の二種類の葬制が、さして時をおかずに行われていることになる。時間的にも空間的にも近接する二つの墓の関係——特に被葬者について——が問題となろうが、判断材料に乏しく今後の課題とせざるをえない。

引用文献

- 上井久義 1979 「喪葬史序説」『葬送墓制研究集成』第5巻 名著出版
 桐原 健 1976 「信濃における平安期土壙墓の性格」『信濃』28-1 信濃史学会
 1986 「土壙出土緑釉陶器の性格」『信濃』38-9
 1987 「古代松本平の東西問題」『信濃』39-8
 黒崎 直 1980 「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集VI』 奈良国立文化財研究所
 巽淳一郎 1983 「平城京における焼物容器一八・九世紀の宮廷で使用された焼物の特質」『月刊文化財234』
 田中久夫 1975 「文献にあらわれた墓地」『墓地』 社会思想社
 原 明芳・鳥羽英継 1979 「麻績村武士塚古墳発掘調査報告」『長野県考古学会誌』第33号
 埋蔵文化財研究会 1983 『古代・中世の墳墓について』

出土資料の引用文献

- 城山遺跡 諏訪市 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市内その1・その2—』
 足場遺跡 富士見町 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—富士見町内その1—』
 前田遺跡 大町市 大町市教委 1981 『借馬遺跡III 追分遺跡 前田遺跡 南原遺跡』
 五十畑遺跡 大町市 大町市教委 1984 『五十畑』
 馬場街道遺跡 穂高町 穂高町教委 1987 『矢原遺跡群(馬場街道遺跡)』
 殿村遺跡 山形村 山形村教委 1987 『殿村遺跡』
 平出遺跡 塩尻市 平出遺跡調査会 1955 『平出』
 中道遺跡 箕輪町 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡箕輪町—』
 神子柴遺跡 南箕輪村 南箕輪村教委 1969 『神子柴遺跡緊急発掘調査報告書(第3次発掘調査)』

- 御狩野遺跡 茅野市 長野県教委 1976 『昭和50年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その1・富士見町その2』
- 狐塚遺跡 茅野市 茅野市 1986 『茅野市史』上巻
茅野市教委 1984 『第2回諏訪地区遺跡調査研究発表会資料』諏訪考古学研究所
- 南丘A遺跡 伊那市 長野県教委 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近—』
- 道前遺跡 更埴市 丸山敏一郎 1976 「更埴市島・道前遺跡の土壌墓」『長野県考古学会誌』26
- 鍛冶田遺跡 飯山市 飯山市教委 1980 『鍛冶田』
- 城平遺跡 伊那市 長野県教委 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近—』
- 大境遺跡 伊那市 長野県教委 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近—』
- 五輪堂遺跡 更埴市 更埴市教委 1973 『五輪堂遺跡II』
- 上ノ田遺跡 更埴市 更埴市教委 1983 『横沢遺跡群I』
- 平田遺跡 更埴市 更埴市教委 1983 『横沢遺跡群I』
- 平安京右京三条三坊 京都市 京都市埋蔵文化財研究所 1980 『平安京跡発掘資料選』

イ 瑞花双鳥八稜鏡について（巻頭図版2）

本鏡は、径11.1 cm、縁厚0.3 cm、紐厚0.55 cm、重量117 gを測る青銅鏡である。鏡面および鏡背面ともに鍔とともに絹と思われる細かな平織りの布が付着している。このことは、布に鏡をくるみ、漆箱にいれ、丁寧に埋納されたことを物語っている。また紐孔にも布が通っており、布は紐としての機能を果たした可能性がある。なお、出土時には鏡面を上向けていた。

外形は八稜形で、鏡面は平担である。広瀬都巽の分類に従って鏡を観察してみたい。鈕および鈕座は、一般的な分胴形に近い円錐形の素鈕である。縁は蒲鉾式膨側高縁であり、界圏は円形単圏で細かくかつ低い。何回か踏返が行われたらしく、文様は不鮮明で、細部の表現は省略されている。また鍔と布の付着のために観察はむずかしい。しかし次のように文様をよみとることができる。外区には一对の飛雲文と三対の草花文を対称に配置している。内区は、瑞花を上下に据え、双鳥を内方向に向かって左右に対峙させる、瑞花双鳥の様式をとっている。このことから、瑞花双鳥八稜鏡と呼ぶことができよう。

県内における八稜鏡および和鏡の出土数と出土遺跡については、古くは桐原健(桐原1968)や、最近では壇原長則(壇原1985)、長野県史(長野県史刊行会1988)により集成されている。それらによると21遺跡25面から知られている。その他、伝世品がいくつかみられる。

まず、長野県史の集成から遺構の状況および、伴出の遺物がはっきりする八稜鏡を取り上げてみると以下のようなになる。

- 1 吉田川西遺跡
- 2 箕輪町大原第二・三遺跡 第1号住居址(箕輪町教育委員会1978)
- 3 茅野市阿弥陀堂遺跡 溝2・溝4(茅野市教育委員会1983)
- 4 栄村乗落遺跡 竪穴住居址(桐原1968)
- 5 奈川村金原遺跡 土壌墓(南安曇郡誌改訂編纂会1956)
- 6 原村判ノ木山西遺跡 14号住居址(長野県教育委員会1981)

以上の6例である。出土数に比較して、意外と少ないことがわかる。

これらにもとづき個々の伴出遺物から、時期について考えてみたい。

吉田川西遺跡例はその時期を、10世紀中頃から後半に置くことができる。2は、伴出している灰釉陶器が虎溪山1号窯式で、土師器杯Aは口径も小さく、吉田川西遺跡SB94段階に置くことができ、10世紀後半から11世紀前半という年代が与えられる。3はいずれも溝という良好な資料ではないが、溝2をみると、大原2号窯式あるいは虎溪山1号窯式の灰釉陶器が伴ない、土師器杯AはSB94あるいはSB52段階であり、10世紀後半から11世紀前半という年代が与えられる。溝4では3面出土しているが、年代を決めるに

良好な遺物はない。4は、伴出した灰釉陶器の椀が「椀B」の形態をしており、虎溪山1号窯式あるいは丸石1号窯式と思われ、10世紀末から11世紀という年代が与えられそうである。5は実測図がないため、掲載された写真より判断すると、灰釉陶器の椀は「椀B」の形態をしており、体部下半を張らすことから虎溪山1号窯式の可能性が強く、10世紀末から11世紀前半という年代が与えられそうである。6は比較的少量の遺物を伴っており良好である。灰釉陶器をみると「椀A」と「椀B」が共存し、皿Bの口径にいくぶん縮小の傾向がみられることから、虎溪山1号窯式と考えられる。また土師器杯AはSB94あるいはSB52段階における。このことから年代的には10世紀後半に置くことができそうである。

以上のように伴出した遺物からみると、八稜鏡が使用された時期は10世紀後半から11世紀にかけてということになる。当然この年代は鏡が使命を終わって、遺棄された年代であることはいうまでもない。翻って、出土状況のはっきりしない茅野市下姥塚出土例(宮坂1968)も伴出した遺物の中に、大原2号窯式あるいは虎溪山1号窯式の灰釉陶器の椀があることから、同様な時期が与えられる可能性が高い。

鏡背面の文様についてみると、いずれも瑞花双鳥ないし瑞花双鳳の様式である。今回取り上げた例のほかにも出土状況のはっきりしない八稜鏡がいくつかあるが、一部を除き、やはり瑞花双鳥ないし瑞花双鳳の様式である。

次に瑞花双鳥(鳳)八稜鏡について、従来の研究にふれておきたい。

この鏡についての研究は、明治時代より行なわれており、後藤守一(後藤1939)、中野政樹(中野1973)、広瀬都巽(広瀬1974)の研究が代表的である。それらは大筋変わりがなく、まとめると以下のようである。

瑞花双鳥(鳳)八稜鏡にみられる文様様式は、それまでの海獣葡萄鏡や伯牙弹琴鏡、盤鏡などの唐鏡から脱して、その中の唐花双鸞鏡式を発展させ和鏡の構成の第一歩を踏み出した姿とされる。具体的には文様様式の変化としては、瑞花が和鏡独特の山吹、芙蓉、牡丹または菊花に、双鳥が双鶺鴒や双雀へ変化がみられることをあげられている。このように瑞花双鳥(鳳)の文様様式は、和鏡独特な文様様式を造りだす過渡的な様式とされる。時期的には、それらに永延二年(988)銘や、永延三年(989)銘、寛弘四年(1007)銘、永保二年(1087)銘をもつことから、10世紀後半から11世紀にかけて盛行し、11世紀後半にはその文様様式が崩れだし、藤原鏡や羽黒鏡にみられる様式が生まれるとしている。

さらに中野政樹は、「延喜期前後は旧文化から新文化に移ろうとする形勢の動きはじめた時代で、あらゆるものにそれがみられるが、鏡も例外ではない。」と、瑞花双鳥(鳳)八稜鏡が、産みだされた背景について指摘している(中野1973)。

このように、瑞花双鳥(鳳)八稜鏡は10世紀後半にその様式を確立させ盛行し、11世紀後半の和鏡と交代する。その過程は唐様式の模倣から新たな「日本的」な様式の確立と評価されている。

長野県内の出土例をみると、先に述べたようにいずれも瑞花双鳥(鳳)八稜鏡であり、その時期も10世紀後半から11世紀前半に集中しており、「瑞花双鳥」様式の成立と時期的に一致するのが興味深い。特に9世紀までの集落址の調査例がそれ以降の調査例と比較して非常に多いにも関わらず、鏡の出土例が少ない。このことから一般集落では鏡をもつ必要がなかった可能性や、それをもち得る有力者が存在しなかった可能性を指摘できる。それに対して10世紀以降は、鏡に対する新たな価値が生まれ、鏡を所有できる有力者が生まれてきたといえそうである。また、菊池誠一が東日本の鏡の出土状況をまとめているが、10世紀から11世紀には集落址からの鏡、それも八稜鏡の出土が増加するとしており、長野県の状況と一致する(菊池1987)。特に本報告で、窯業生産や食器の面、金属器の面で10世紀から11世紀にかけて大きな変化がみられ、それらは中世へ第一歩を踏み出した段階と評価している。鏡においても中野政樹が指摘するように、瑞花双鳥八稜鏡の様式の成立とその頻繁な使用もそれと無関係ではないと思われる。

引用文献

- 菊池誠一 1987 「平安時代の集落出土鏡の性格」『物質文化』49
桐原 健 1968 「平安期にみられる山地居住民の遺跡」『信濃』20-4
後藤守一 1939 「藤原鏡の成立」『考古学論叢』11輯
壇原長則 1985 「中野市間山発見の八稜鏡について」『高井』73
茅野市教育委員会 1983 『構井・阿弥陀堂遺跡』
中野政樹 1973 『和鏡』美術撰集 第7巻
長野県教育委員会 1981 『昭和51・52年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一茅野市・原村その3一』
長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 遺構・遺物
広瀬都巽 1974 『和鏡の研究』角川書店
南安曇郡誌改訂編集会 1956 『南安曇郡誌』
箕輪町教育委員会 1983 『大原第二・三遺跡』
宮坂光昭 1968 「諏訪湖東縁の終末期古墳群の考察一茅野市姥塚古墳の検討から一」『信濃』20-4

3 SB32をめぐって

SB32は、他の竪穴住居址と異なり、その規模と施設、廃絶状況から特別な性格が考えられるのでここで取り上げる。SB32の廃絶年代は、第8章第1節でふれられているように11世紀中頃とすることができる。他の遺構との重複関係は、中世の遺構にきられている以外、古代の遺構には切られていない。

ア 構造 (第267図)

規模は一辺南北10m前後、東西10m前後を測り、やや崩れた正方形の掘り込みを持つ竪穴住居址である。検出面からの深さ80cm前後、床面積は85㎡ほどである。掘り込みの深さは検出面で他との比較をしてみると、同時期のものよりかなり深い。当時の地表面の高さを考慮にいれば、実際には1m以上の掘り込みがあったと思われる。断面より構築方法を考えると、まず砂利まじりのⅢ層を大きく掘り込む。その次に、粘土混じりのⅢ層の土を貼り、たたきしめて床にしている。なお、床面の下より遺物がみつかったが、この時点ではいりこんだ可能性が高い。次に上屋構造であるが、規模の大きな柱穴が認められず、はっきりしない。その点は同時期の竪穴住居址と同じである。ただ、中央のピットは正方形にちかい組み合わせをしており、補助柱穴の可能性も捨てきれない。また、東壁沿いには後で述べるように土器が一行に並べられており、その列と壁との間に15cmほどの空間がみられる。さらに床面全体が焼けているが、壁に近い部分は焼けていない。このことにより、当時は土のむきだしの壁ではなく、板を立ててあった可能性が考えられる。

イ 施設 (第267図)

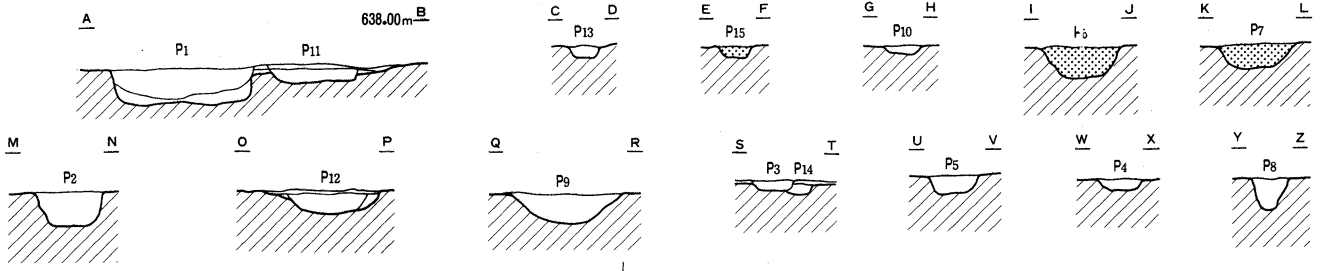
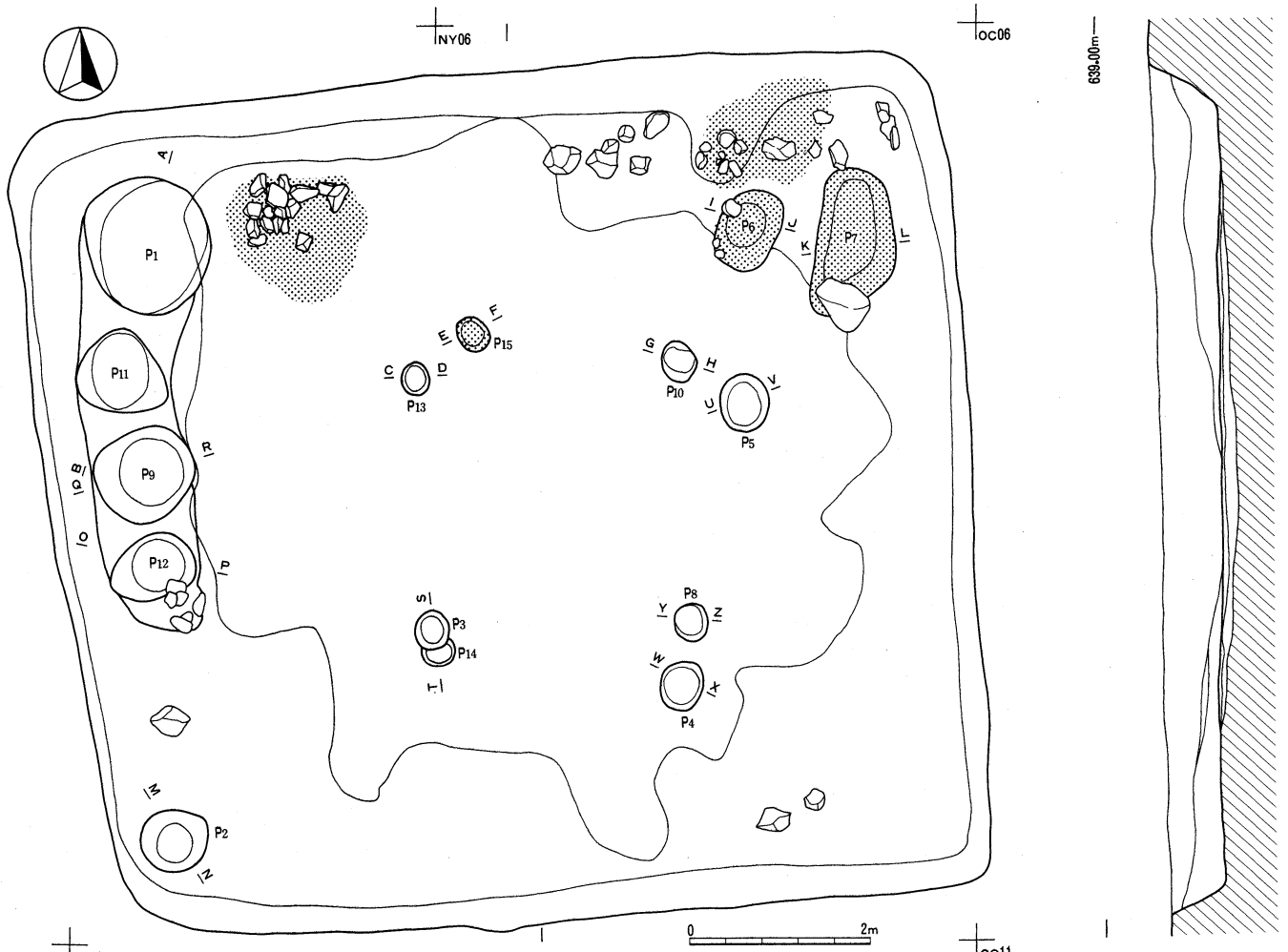
カマドは、北東隅のやや西よりに北壁と直交するようにつくられる。残存状態は悪く西袖の一部が残っているだけであり、壁の部分には煙道の痕跡がみられる。この他の施設としては、西よりの北壁近くに石組がみられる。石はすべて割石で火を受けており、長辺を立てている。その周囲には焼土が厚くみられる。ピットはいくつか検出された。P1・P9・P11・P12は連続した溝状をなして検出され、掘り下げると4つのピットがでてきた。それらの埋土の中には多量の土器片と炭が混じっており、短時間で埋められた状況を示している。貼り床の粘土はこれらのピットの東端にかかっている。P6・P7はともに焼土を埋土に多く含むことから、隣接するカマドと関連した施設の可能性が高い。その他、ピットがいくつかみられるが性格は不明である。なお、掘り込みが深いにも係わらず、入口的な施設はみつからなかった。

ウ 食器列

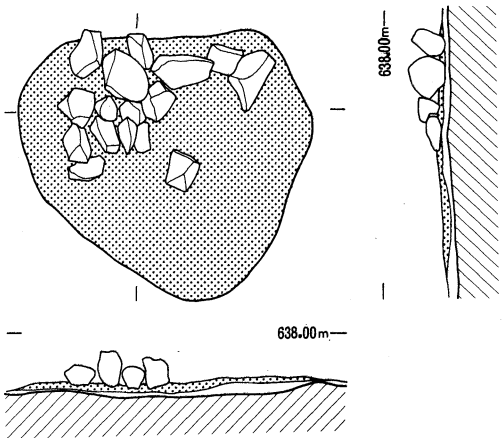
これは、施設に含められると思われるが特に取り上げる。特徴的なことは、東壁に沿って一行に直線的に多量の食器、それも食膳具が並べられていることである。その中には、明らかに重ねられている部分もみられる。このことから、ここが食膳具置き場としての可能性が考えられる。それらの食膳具は、置かれ方から床に直接置くのではなく、のせるための棚あるいは台の存在も考えられる。しかし、床に密着して重ねられた状態や、正位のものも多く崩れていないことから、棚が存在しても低かった可能性が高い。食膳具の並べ方は第268図のようである。この中から、器種の組み合わせなどに規則性を見いだすことは困難である。ただ特徴としては、土器の種類が、ほとんど土師器に限られていることがあげられる。同時期の竪穴住居址の資料の中で、灰釉陶器の量が多いのとは対称的である。このことは後で述べるような、この時期の土師器食膳具の持つ性格を物語っていると思われる。しかしこれが、当時の状況をそのまま表しているとは一概に言えず、住居の廃棄の際の持ち出しや、埋没の際の乱れも考慮しなければならない。

エ 廃棄の状況

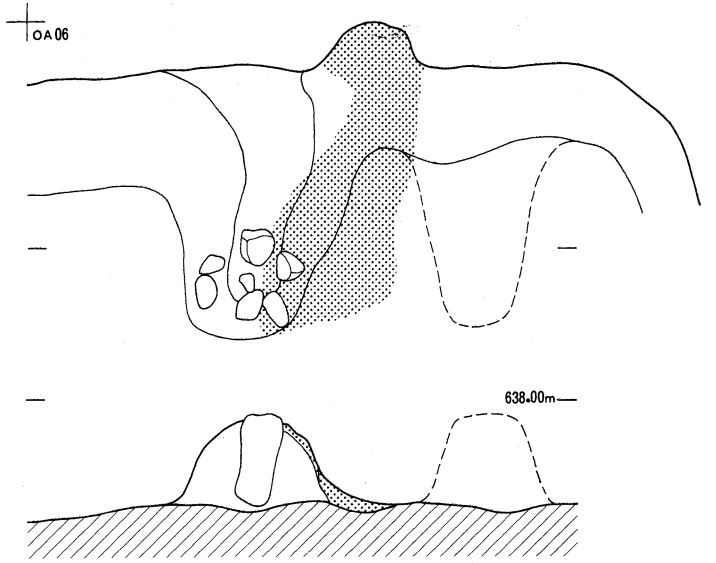
まず特徴的なことは、多くの食器を使用できる状態で置いたまま埋められてしまったことである。このことは、土師器の供給が十分であったためとか、また、必要としなくなったためなどと理由はいくつか考



平面図・断面図(1:80)



石組み (1:20)



カマド (1:20)

第267図 SB32

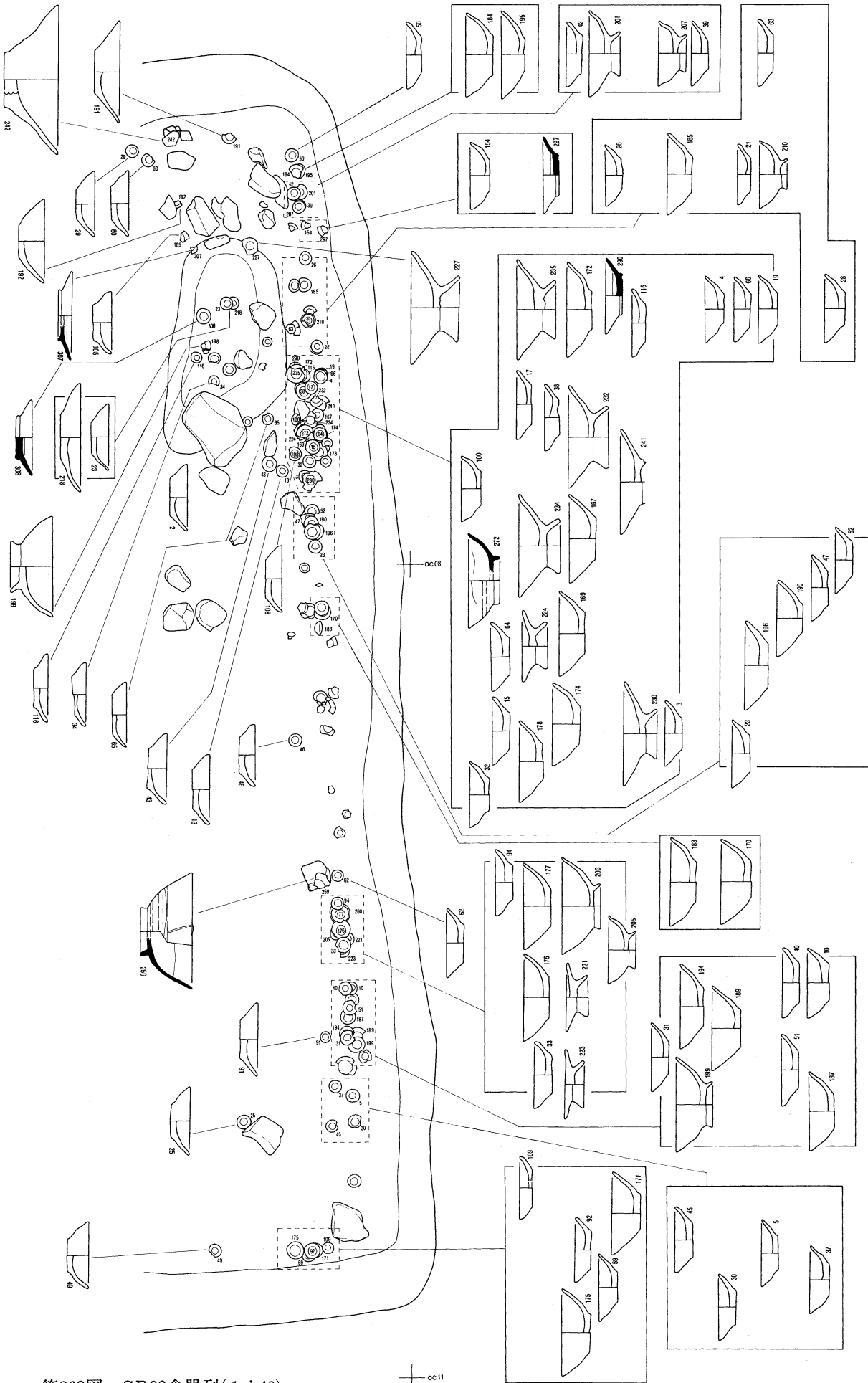
えられる。しかし、置いたまま埋めてしまうということは、日常の食生活で土師器の食膳具が必要とされなかった可能性も示している。

埋土は上下二層に分けることができる。その埋没の順序は、最初に、Ⅲ層をベースとした小砂利を含み茶褐色をした、あまり遺物を含まない2層が壁際に堆積する。その後、残った中央の逆三角形の空間に、炭を多く含み土器や金属器(特に釘)が多数入る1層が堆積する。この状況は何を示すのであろうか。人為的に埋められたと仮定して、大胆な推定を試みたい。まず2層の堆積は、存在していたであろう周堤の土が崩され埋められたものと考えたい。その理由としては、構築の際に、Ⅲ層を掘り込みそのまま積まれ、周堤とされたため、2層がⅢ層に類似していることがあげられる。次に、2層のみでは不足し逆三角形となった空間を、他から土を運んで埋めることになる。この土が1層である。その中には多量の土器や金属器が混じっており、この空間が一種のごみ穴として利用された可能性もある。ただその堆積の状況より、長時間にわたって使われたのではなく、短時間で埋められたものと考えられる。また1層中の金属器をみると、釘や建具がみられる。釘についてみれば、それが単独で捨てられたとは考えられず、建築材や家具などの木材とともに捨てられた可能性がある。また建具の中には、締めり金具のようにその用途が堅穴住居にそぐわないものもみられ、周囲にあった大きな建物を壊して捨てた可能性も考えられる。

オ 住居の性格

SB32の特徴として、その規模から多数の人間を収容できることがあげられる。東壁に並べられた食膳具もそれに対応しているように多量である。さらに焼土を伴った石組は、同時期の堅穴住居址にはみられないもので、祭祀に関係した遺構とみることができる。このようにみるとSB32は、多数の人々が集まって祭祀をし多量の食膳具を使って食事をする場所、すなわち宴会の場という性格が考えられる。周囲にみられるSB99やSB30、SK73のような大量の土器の出土した遺構およびその廃絶後の空間は、ここで使用された食膳具の捨て場と考えられる。その捨てられた量の多さは、ここで頻繁に宴会が行なわれていたことを物語っていると思われる。

次に周囲を含めて考えると、さらにその性格ははっきりしてくる。位置としては、西側が開口する溝に囲まれた区画の中にSB32は存在する。第8章で述べられているように、この区画の中からは多量の緑釉陶器や朱墨硯が出土しており、当時の「領主」の居館と考えられる。その中でのSB32の位置づけは、「領主」が行なう支配秩序を維持するための、宴会の場とすることができるのではないか。さらに1層中に捨てられたと考えられる建築材は、「領主」の居宅とも想定される東区画のピット群の建物のものとも、溝に沿って建てられていた、塀あるいは門の一部とも考えられる。このことから、SB32の廃絶と居館の廃絶とは期を一にしていた可能性がある。すなわちSB32の消滅は、「領主」自体の動向と大きく係わっていたことになる。



第268图 SB32食器列(1:40)

4 遺構の時期区分 (第107表)

各説の中では、遺構間の重複関係より相対的な新旧関係についてふれてきた。次にここでは、絶対的な時期区分を行うことにする。前提としては、今回の調査で年代を決めるのに良好な資料はみつかっていない。そのため、杯AのSB201段階からSB31段階の14段階の区分を採用し、それぞれを期と呼び、1～14期に区分する。それぞれの年代については第7章第2節を参照されたい。時期の比定は、遺構の切り合い関係を優先し、次に土器研究の成果を用いて行う。また、竪穴住居址の場合は埋土と床面に時間差をつける考え方もあるが、本遺跡の場合、後者からの遺物が少なく、前者からが圧倒的である。そこで、竪穴住居址の埋土全体から出土した土器群から決めることにする。そのためここで与えられた時期は、当然ではあるが、竪穴住居がその機能を終え埋没が完了するまでの幅を持った時間である。

次に、遺構内遺物はその量にバラツキがみられる。量の少ない場合は幅をもった時期区分しかできない。また、遺構の重複関係から下限と上限がわかる場合もあり、それについても示している。

遺構の内、竪穴住居址(SB)と溝址(SD)に関してはなるべく時期の比定を行なった。墓(SM、SK)、不明遺構(SK、SX、SH、SF)については、遺物の量が多く判断できるもののみ時期比定を行なった。掘立柱建物址については、遺物が少ないため重複関係から判断したものが多い。

期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	不明	
杯A 段階	SB 201	SB 227	SB 01	SB 258	SB 184	SB 144	SB 111	SB 114	SB 94	SB 52	SB 84	SB 32	SB 74	SB 31		
S B	201	227	01 09 199	02 11 22 35 41 56 77 85 89 97 100 105 112 117 130 145 157 162 165 168 174 175 198 200 218 219 223 230 241 242 248 250 258	03 53 93 95 108 113 134 137 139 146 184 226 243 267 269	06 17 20 25 26 44 45 46 49 55 72 75 79 83 87 90 107 135 136 144 164 166 170 172 188 189 194 196 212 213 215 234 244 246 249 252 259 261 264 265 266 268	07 91 102 110 111 125 128 133 147 181 182 193 210	96 103 109 114 116 129 150 159 160 183 185 195 221 222 245	94 101 118 191 192 209 233	94 13 19 48 52 58 76 122 123 127 186 238	04 13 19 81 84 115 120 124 161 187 211	15 37 10 14 16 24 29 30 32 36 43 47 61 63 66 67 80 88 99 142 156 167 169 216 232 235 256 262 263	05 10 14 16 24 29 30 32 36 43 47 61 63 66 67 80 88 99 142 156 167 169 216 232 235 256 262 263	12 21 65 70 71 74 78 86 98 132 140 141 163 178 202 203 257	27 28 31 33 38 40 42 50 51 57 59 64 68 69 73 179 207	18 23 49 54 59 60 62 82 92 104 106 121 126 131 143 148 149 155 171 173 176 177 180 190 197 204 205 206 208 217 220 224 225 228 229 231 236 237 247 251 253 254 270 271 272 273
	墓							← SM01		SK128						
	S T			← 203 ← 204 ← 205								← 201 ← 202 ← 208				
	S D		28					03					8 17 18 19 23	12		
	S K			01	254		155	118 202 203 204 211 336	101 102 107 126 151 218 220 251	84 209	02 64 129	51	06 42 43 47 90 91 120 122 132	146 148 154 178 182 187 216 226 338	25→	
													SX20 SX21			

第107表 遺構時期区分表

第6章 中・近世

第1節 遺構・遺物の概観

1 はじめに

奈良時代に始まる集落は、その分布と内容を変えながら平安時代末期まで継続する。その後環境や遺構・遺物の様相に大きな変化が認められる。前者では、遺跡中央を南北に流れる自然流路（NR01）ができたり、またII層内の土中金属集積層形成の原因となった地下水の上昇、あるいは流路の変化があった。この結果、調査区中央から東よりにかけては湿った環境になったと思われる。後者としては、カマドの付随する竪穴住居の消滅や在産焼物の急激な減少があげられる。ここでは、このような変化を境にした13世紀以降を扱うことにする。

2 遺構と遺物の調査

(1) 遺跡での調査

トレンチ調査主体の59年度調査では、多数の中・近世遺物が出土したが遺構は確認できなかった。翌60年度の面的な調査では、遺構外遺物の採集と層位的な検討の結果、かなりの遺構を確認することができた。ただし、水田などを含めた総合的な土地利用状況は掴むことができなかった。

遺構番号は、検出された順に形状を示す記号（第1章参照）と数字の組み合わせで付けられた。溝と井戸を除き、I層中の整地土層と関わりがある遺構については、2001から通し番号で、それ以外については1001から通し番号を付けた。さらにいくつかの遺構（たとえばピット）によって構成される建物址などは、個々の番号の上位に建物址などの番号を付けた。

遺物は遺構内出土については遺構毎に取り上げ、遺構外遺物については、可能な限り層位別にグリッド毎に取り上げた。

(例)	—発掘時—	—整理時—	—報告書—
	SK1001	SK1001	不明遺構 SK1001
	SP1002		柵址 SA01(SP1002)
	SP1003		(SP1003)
	・		
	SP1013	ST01	掘立柱建物址 ST01(SP1013)
	SP1014		(SP1014)
	SP1015		(SP1015)
	SP1016		(SP1016)
	・		
	SK1030	SK1030	火葬関係遺構 SK1030

(2) 遺構の整理

遺構番号毎に図面の整理を行ない、台帳を整備しながら全体図の作成を行なった。次に遺構間の検討を行ない、建物とそうでないものに大別した。前者の認定は発掘時と整理時の双方で行なわれ、その経緯については、各説でふれることにする。また、遺構と認定し番号を付けた以外に、道やゴミ捨て場と考えられるものもあるが、第4節でふれる。

(3) 遺物の整理

遺構外と遺構内出土の二者に分けられ、前者は遺構毎に整理をした。後者については、多量の古代の遺物と混在するため、従来中世以降とされるものについて抜き出した。このことから、明らかになっていない中世の在地生産の焼物を、見落した可能性も否定できない。観察は遺構内・外をこえて接合をし、種類別に行なった。その後、実測用の遺物は種類毎に代表する、あるいは実測可能であることを基準に選別した。

第2節 遺構

遺構を性格から分けると、建物址、柵址、溝址、井戸址、火葬関係遺構、性格不明遺構等に分けられる。出土遺物はそれほど多くなく、遺物による時期分けはむずかしい。しかし、分布が集中したり、同じ計画性がうかがえるものもある。土層の分布は一様ではなく、下記に示す a・b・c となる。それぞれにおける検出層位は以下のようである。

a—I層直下Ⅲ層となる部分

I層中の検出 なし

Ⅲ層上面の検出

SK1125・1128・1131・1132・1143・1145～1156・1160・1164～1167・1170・1176～1182・1190・
1192～1195・1198・1200・1201・1203・1204・1206・1207・1211・1212・1214～1217・1221・
1223・1224・1243・1245・1246・1248～1252 SD04・15・16 SX08

b—I・II・Ⅲ層、および整地土が存在する部分

I層中（整地土上面） SK2005 ST2001・2004 SD2023 SE01

II層上面

SK1028・1030・1051・1077・1079・1124・1126・1127・1168・1169・1208・1219・1222・1225・
1229・1240～1244 SD09・15・16・20・21・32・2015・2017 ST01 SA01 SX22

（整地土下面）

SK2006～2015・1173・1174・1183～1189・1196・1197・1205・1208・1203～1239 ST05・06

c—I・I b・II・Ⅲ層が存在する部分

I層中 なし

I b層上面 SD02

I b層中 ST02・03に付属すると思われる焼土址

II層上面 ST02・03

1 建物址

ここで扱うのは、柱を立てる施設（柱穴・礎石）があり、その配置により建物と認められたものと、底面が堅い掘り込みがあり内部空間が機能していたと考えられる二者である。これ以外に柱穴群や、建物の内部施設の可能性がある掘り込みもある。

建物は次のように分けて検討する。なお、桁、梁は入口方向の検討が不十分なため、長軸方向を桁行、短軸方向を梁行と表現してある。

- ア 礎石や集石上に直接柱を立てたと考えられる建物址
 - 1 礎石建物址
 - 2 基壇状基礎を有する建物址
- イ 柱穴を掘り、柱を立てたと考えられる建物址
 - 1 柱穴のみの掘立柱建物址
 - 2 柱穴と竪穴を有する掘立柱建物址
- ウ 方形を基本とする竪穴内に柱を立てたと考えられる建物址
- エ 単位や構造が捉えられなかった建物址関係と思われる遺構
 - 1 イー2の可能性がある竪穴
 - 2 径80cm以下の柱穴状の掘り込みの集中

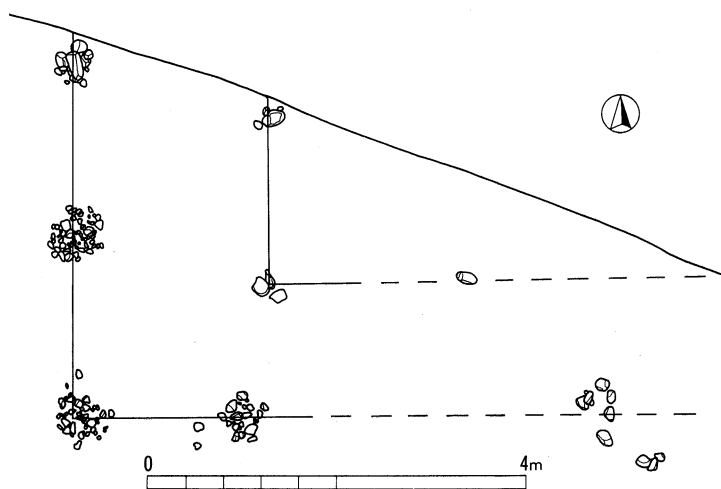
アー1

ST2004 (図版73 PL51 第269図)

H地区北端の整地土上面で検出され、9ヶ所の栗石と考えられる人頭大の礫の集中からなる。調査範囲外に伸びている可能性が強い。礫集中の中には平石を置くもの、礫のみ集中するものなどあり、複数の礫は径30~80cmの範囲に置かれる。明確な掘り込みはない。

規模は、桁行約4間(約5.5m)×梁行3間(約3.8m)以上で、棟方向はN-88°-Eを指向する。柱間寸法は桁行で約1.8m、梁行で約1.8~2mを測る。栗石は側辺と内側では東西方向にズレをもつが、南北方向が一致していることより、一棟の建物内のズレと考えたい。

遺物は周辺より出土したが、本址との関係ははっきりしない。



第269図 ST2004 (1:80)

アー2

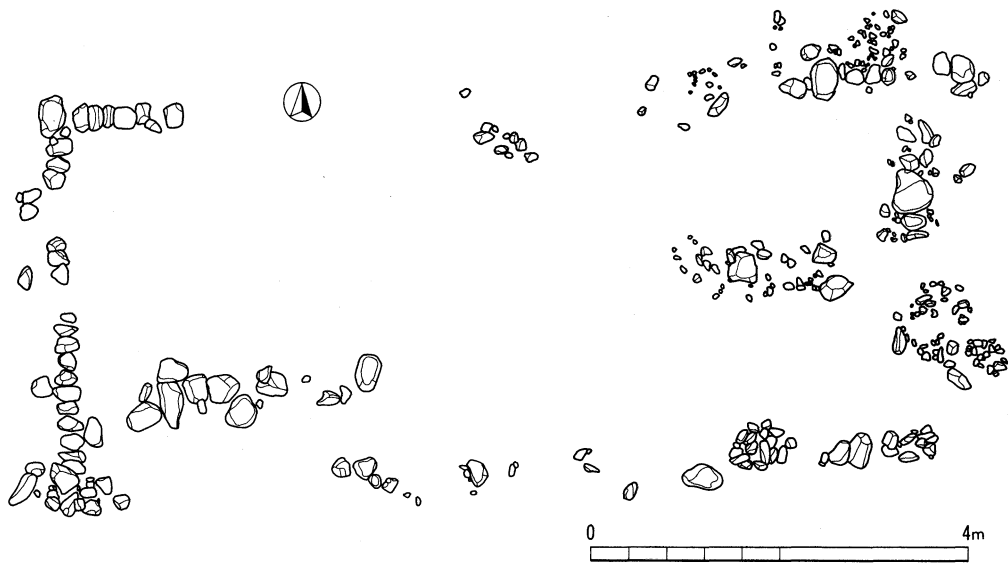
ST2001 (図版73 PL51 第270図)

H地区整地土上面で、長方形に石列が配された基礎が検出された。石列の南北辺は良好に遺存するが、東西辺は遺存状態が悪い。規模は桁行約9.2m、梁行約4.4mで、平面形は東西辺の南辺西寄りが内側に入る。長軸はN-87°-Eを指向する。石列は人頭大の細長い石を主体に、長軸を辺と直交させて並べるものが多い。しかし細かな礫を集中させている部分もある。その中に、明確な柱穴・礎石と考えられる施設はなかった。

遺物は石列内より、近世陶磁器片が出土した。

ST2002 (図版73 PL52 第271図)

H地区整地土上面で、長方形の掘り込みに石混じりの土を入れ、立ち上がり部分に石を並べた構造の基



第270図 ST2001 (1:80)

礎が発見された。掘り込みの規模は梁行約4.3m、桁行方向は南辺が削平されているが残存部分から約7.5m以上と考えられる。石列は東西に人頭大から拳大までの石をほぼ一列に並べたものが認められるが、他は明瞭でない。石の並べ方は、石列に対して直交のものと並行のものがあるほか、拳大の石を寄せ集めた部分がある。なお、石列東辺ほぼ中央には突出部があり、入り口施設の可能性がある。このほか、上面で平石がいくつか検出されたが、規則性がなく礎石とは認められなかった。

ST2003 (図版73 PL51)

H地区整地土上面で、調査区外に伸びる逆L字状の石列が検出された。これはST2001やST2002と同様な基壇状の基礎と考えられる。石列の規模は大部分が調査区域外にかかるため不明であるが、東西約1.6mを測る。基礎内部には掘り込みや盛土、礎石等は検出できなかった。遺物の出土はない。



第271図 ST2002 (1:80)

イ—1

ST02 (図版67 PL48 第272図)

N地区北東部に位置し、I b層上面で焼土址、II層およびII層中で柱穴を検出し、最終的な建物址としての認定は整理時に行なった。規模は桁行4間(約7.4m)×梁行3間(約8.8m)である。ただし、北側に柱穴2本と焼土址(SF1119)が検出されており、さらに北側に伸びる可能性がある。棟方向は、柱穴が等間隔で並ぶ南北方向と推定され、その場合N-3°-Eである。

柱の配置は、側柱、内部南寄りに東西方向の柱列、さらにそれと直交する南北方向の柱列がある。柱間寸法は桁行で約1.7m~2.0m、梁行で約2.0~2.5mを測る。東部の梁方向が約4.0mと広いが、もう1間入

る可能性がある。柱穴は径30cm前後で、形態は方形、円形、楕円形と様々である。これらの柱穴のいくつかには柱痕が認められた。

内部の施設としては、焼土址(SF1638)がある。この他に、SK1035・1036・1038・1039・1044・1045・1046・1635~1637があるが、いずれも浅く不整形である。

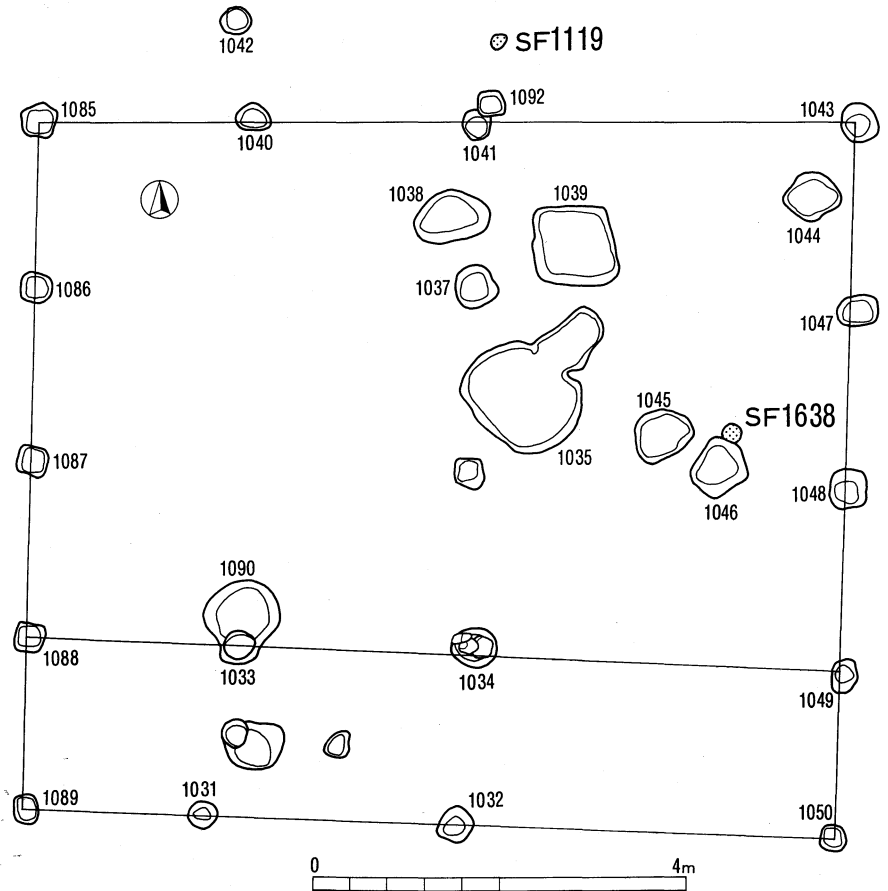
遺物は周辺より、内耳鍋片や中世末~近世の陶器片が出土している。

ST05 (図版59 PL47 第273図)

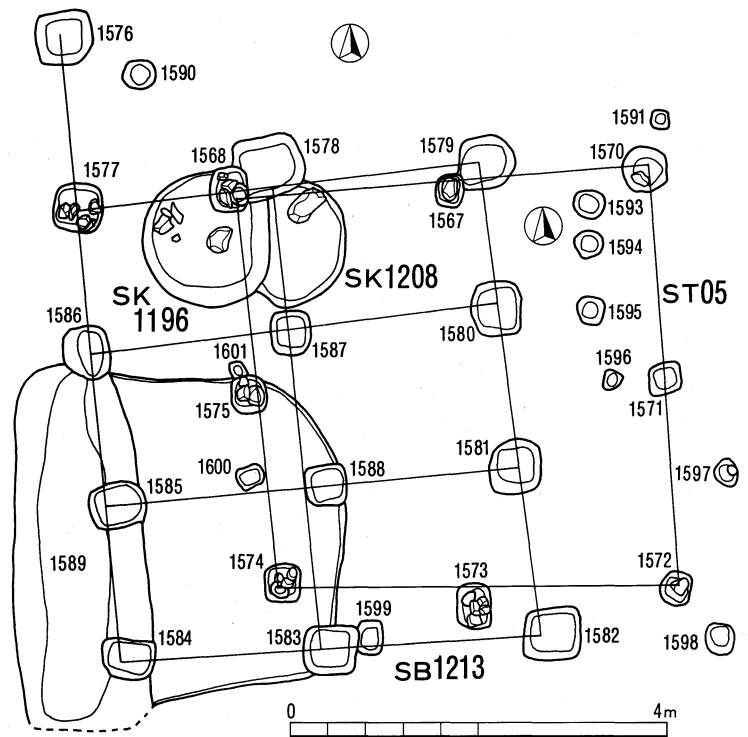
H地区の近世遺構下のⅢ層上面で、ST2003に切られ、SK1196・1208、SB1213を切って検出された。規模は2間×2間で、柱間寸法は南北方向で約1.9~2.0m、東西方向で約2~2.3mを測る。棟方向は摺めないが、南北方向でN-6°-Eを指向する。柱穴は側柱のみ検出され、平面形は径約30~50cmの方形が多く、断面は台形あるいは方形である。中には柱の固定用と思われる礎が入ったものもある。なお、西側柱列の底面には建物の重量で沈んだと思われる径20cmほどの凹みがみられる。遺物の出土はない。

ST10 (図版63 第274図)

M地区のⅡ層上面で検出した柱穴を、整理時に検討し建物址と認定した。他の遺構との切り合いはない。規模は桁行3間(約5.8m)×梁行2間(約4.2m)で棟方向はN-9°-Eと推定される。柱の配置はST01とST02に類似する可能性があり、総柱建物の北側内部の梁の柱が欠ける配



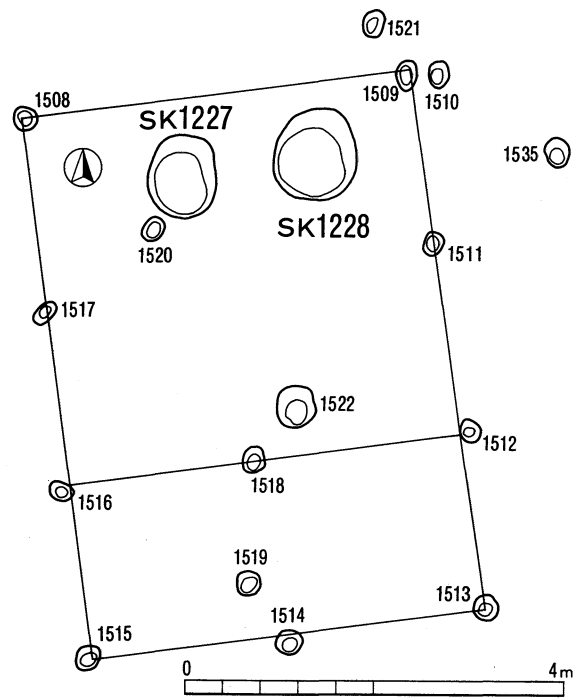
第272図 ST02 (1:80)



第273図 ST05・SB1213 (1:80)

置である。柱間寸法は桁行方向で約1.8~2.0mで梁行方向約1.9~2.2mを測る。柱穴は径30cm前後の円形あるいは楕円形で、深さは20cm前後である。

内部には施設としての可能性があるSK1227・1228が並んである。両者は共に垂直に掘られ、30cmほどの深さを持つ。平面形はSK1227が約0.9×0.8m、SK1228が約1.0×0.9mのほぼ円形である。なお、SK1228の底面は火を受けた痕跡が認められる。



第274図 ST10 (1:80)

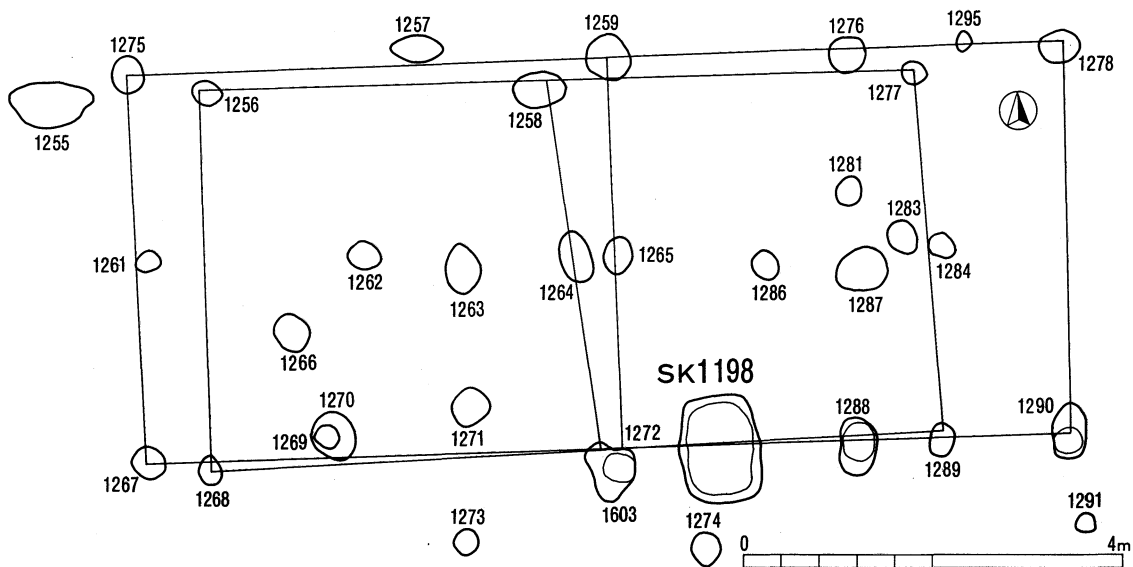
ST11 (図版66 第275図)

SD02・21に囲まれた地割の中にあり、ST12を切っている。II層上面で検出した柱穴を、整理時に検討し建物址と認定した。規模は桁行2間(約7.0m)×梁行2間(約3.8m)の長方形と思われる。棟方向はN-87°-Eを指向する。なお桁行は、SP1285が延長上にあることから、もう一間東に伸びる可能性もある。また西側部分の柱間寸法が長すぎることから、二間に分かれ都合4間になる可能性もある。

柱穴の配置は東半分の状況より、総柱の可能性もある。柱間寸法は、桁行で約2.6m、西端は4.4mを測る。梁方向では約1.8~2.0mを測る。柱穴は径約30~40cmの円形あるいは楕円形で、深さは10~20cmを測る。遺物は出土していない。配置からSD02・21、ST12~14と一連のものと考えられる。また次に述べるST12とは規模とその重複関係より、ST11がST12の建て替えの可能性もある。

ST12 (図版66 第275図)

ST11に切られており、整理時に検討認定した。規模は桁行3間(約10m)×梁行2間(約4.8m)の長方形で、棟方向はN-88°-Eを指向する。柱穴の配置は西半分ですべてが検出されていないが、ほぼST11と同じになると思われる。柱間寸法は桁行で東より、約2.6、2.4、4.4mを測り、梁行で北より約1.9~2.0mを測る。



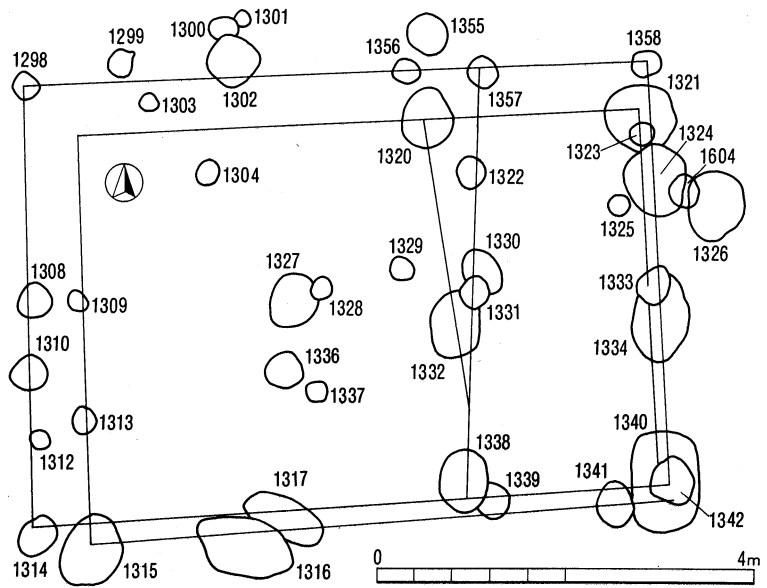
第275図 ST11・12 (1:80)

桁行に関しては、西端が長すぎ、もう一間はある可能性がある。柱穴は、径20～60cmの円形あるいは楕円形で、深さは20～30cmを測る。遺物は出土していない。

前に述べたように、ST11はこの建物址の建て替えの可能性がある。

ST13 (図版66 第276図)

SD02・21に囲まれた地割の中に、ST14に切られて存在する。整理時に検討認定した。規模は桁行3間(約6.7m)×梁行2間(約4.7m)の長方形で、棟方向N-88°-Eを指向すると思われる。



第276図 ST13・14 (1:80)

ST14と類似した関係にあり、南へさらに一間延びる可能性がある。南に延びた場合、棟方向は南北方向となる。柱穴の配置は、ST14に類似しており、中央桁行の西から2番目の柱穴を除きすべて検出された。柱間寸法は桁行で1.8～2.4mで、梁行で2.2～2.4mを測る。柱穴は径30～100cmの円形あるいは楕円形で、深さ約20cmを測る。遺物は出土していない。ST14の建て替えでの可能性がある。

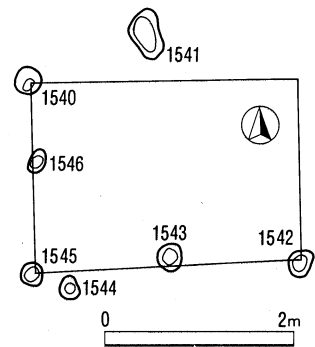
ST14 (図版66 第276図)

ST13に切られて検出される。整理時に検討認定した。規模は桁行3間(約6.3m)×梁行2間(約4.6m)の長方形である。棟方向はN-87°-Eであるが、南側に一間延びる可能性があり、その場合、棟方向は南北になる。柱穴はすべてが検出されていないが、一部内部柱の欠ける建物になると思われる。柱間寸法は桁行で2.2～2.4m、梁行で2.2～2.4mを測る。柱穴は径20～100cmの円形あるいは楕円形で、深さ20cmを測る。柱穴の平面規模がST13より大きいものが多く、柱を抜き取ったためとも考えられる。遺物は出土していない。また、その規模と配置より、ST13の建て替えの可能性がある。

ここまで述べてきたST11～14は、SD02・21に囲まれた地割の中に存在しており、それぞれ関連を持っていると思われる。

ST15 (図版66 第277図)

N地区のII層上面で柱穴を検出し、整理時に建物と推定したものである。北東隅の柱穴は発見できなかったが、規模は2間(約2.2m)×2間(約2.9m)の側柱建物と考えられる。南東隅で柱穴が近接しているが、建て直しか補助柱穴か判断できない。棟方向はN-3°-Eを指向している。遺物の出土はない。



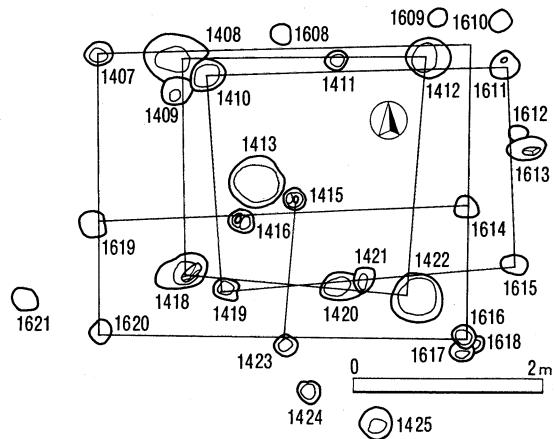
第277図 ST15 (1:80)

ST16 (図版64 第278図)

M地区の柱穴の集中する部分にあり、整理時の検討で建物としたものである。その柱穴の数からすると小規模な建物が何回となく建てられたようであり、これはその一つである。規模は桁行2間(約3m)×梁行1間(2.2m)の長方形で、棟方向はN-90°-Eを指向する。遺物の出土はない。

ST17 (図版64 第278図)

ST16と同様に柱穴の密集する部分より抽出した。規模は2間(約3.0m)×2間(約3.8m)の総柱建物と考えられる。棟方向はN-96°-Eと推定した。柱穴は直接切り合うものではなく、柱穴群全体との関わりは不明である。なお、南東隅の柱穴は重なっており、切り合いか建て直しか補強のためのものか判断できない。出土遺物はない。



第278図 ST16~18 (1:80)

ST18 (図版64 第278図)

ST16・17と同様に柱穴群の中の建物址である。規模は1間(約2.6m)×1間(約2.7m)の方形で、棟方向は不明である。ST16に切られるが、柱穴の規模はこの柱穴群の中の建物址と比較して大きい。遺物の出土はない。

ST19 (図版60 第279図)

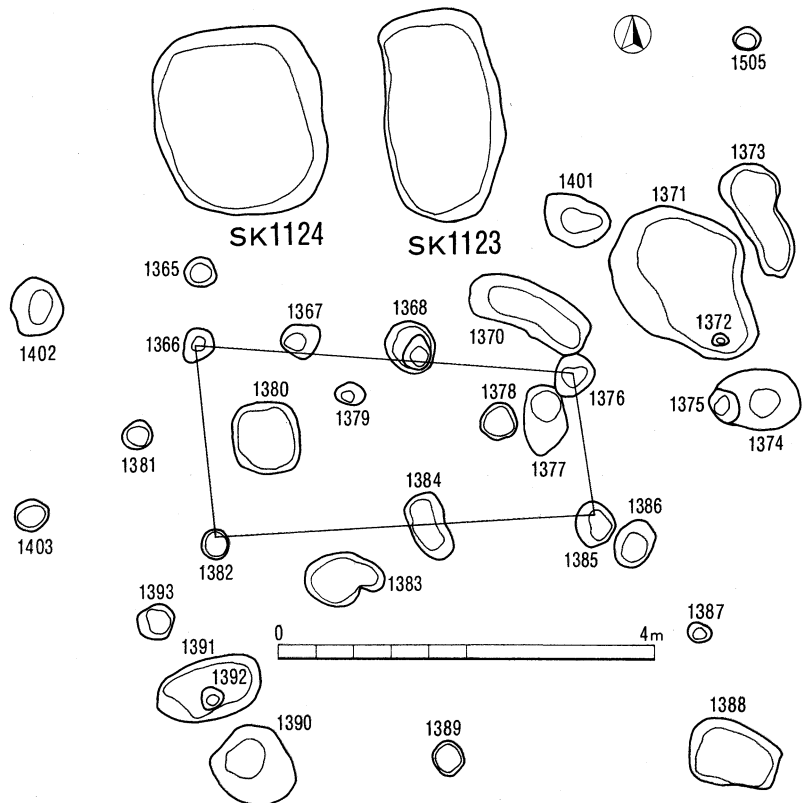
M地区に位置し、柱穴群の中に存在する。規模は桁行2間(約4.1m)×梁行1間(約2.1m)の長方形である。ただし周囲に柱穴が多数存在することから、規模はさらに大きくなる可能性がある。

イ-2

ST01 (図版68 第280図)

N地区東部、SA01の西に位置する。発掘時においてII層上面で柱穴が方形に配列されるのを認め、建物址とした。しかしその後柱穴が発見され、最終的な規模や形態は整理時に検討した。

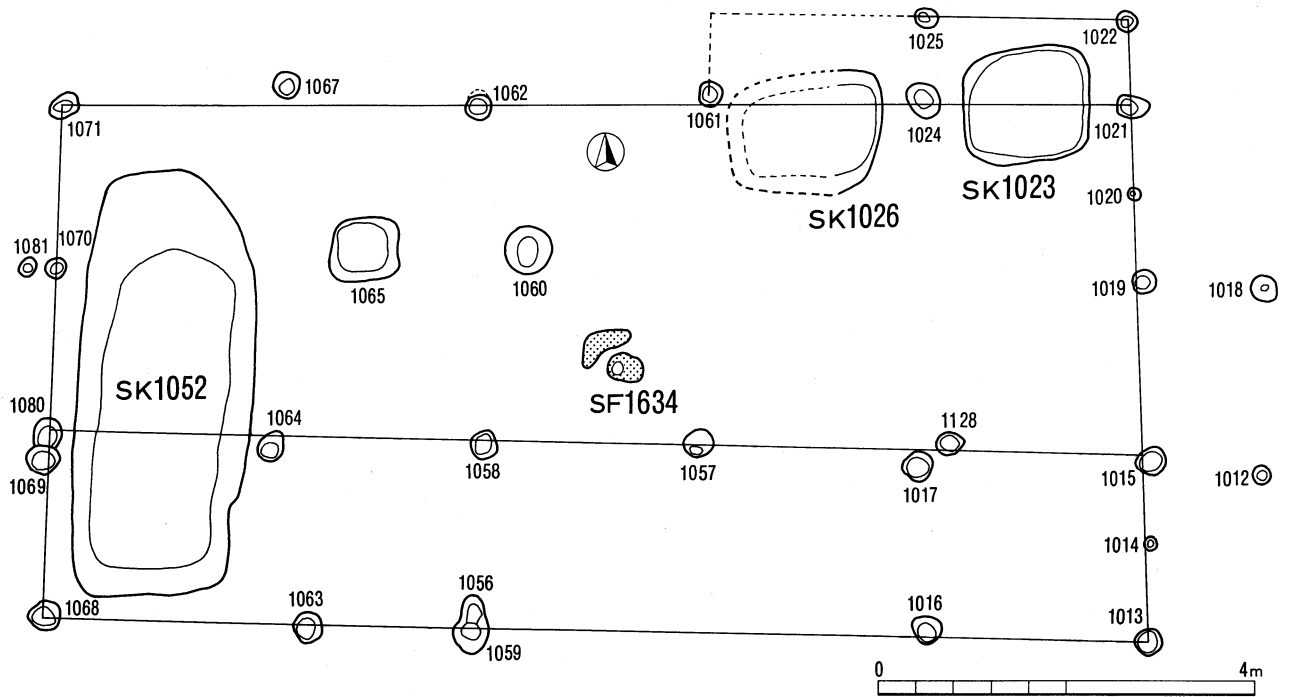
規模は桁行5間(約12m)×梁行3間(約5.7m)の長方形で、北東隅と東辺中央にそれぞれ1間×推定2間と1間×1間の張り出しを持つ。主軸方向は、N-99°-Wを指向する。柱穴の配置により、桁柱列が欠ける構造と考えられる。なお東辺には梁行の間に小さな柱穴が、西と南の柱列には掘り直しとも考えられる切り合う柱穴がある。柱間寸法は桁行で1.8~2.5m梁行で1.8~2.0mを測る。



第279図 ST19 (1:80)

これらの柱穴は径20~30cmの円形あるいは方形で、中には柱痕が認められるものもある。

付属施設としては、掘り込み(SK1023・1026・1052)と焼土址(SF1634)がある。SK1023・1026は北東部の張り出し部にかかって並んでおり、共に垂直に掘り込まれ底面は硬くない。SK1052は西側隅にあり、浅い長方形で底面は硬い。SF1634は中央にある。壁が焼けた浅い掘り込みであり、周囲には灰が分布する。この



第280図 ST01 (1:80)

他、SK1060・1065も施設の可能性があり、柱穴より大きめで、北西部に並列している。

遺物はSK1052より、「大観通寶」が出土した。

SB1213 (図版59 第273図)

H地区に位置し近世遺構の下面のⅢ層上面で、ST05・2003に切られて検出された。規模は桁行4間(約6.9m)×梁行間(約4.6m)の総柱建物である。なお北端では柱穴が一つしか検出されなかったが、その位置からみて、本址のものとし桁行4間と判断した。棟方向はN-8°-Eを指向する。柱穴は径40~60cmの方形で、断面形は台形あるいは方形である。その中には底面が硬いものも認められた。柱間寸法は桁行で1.5~1.9mで、梁行は2.0~2.4mを測る。南西隅に桁方向2間、梁方向1間の範囲に土間状の掘り込みがある。これは、西側に傾斜し床面は硬い。

遺物の出土はない。

ST03 (図版69 第281図)

ST02に隣接する。最終的な認定は整理時に行なった。SP1098に切られる。

規模は桁行4間(約10m)×梁行2間(約8m)で、柱穴のうち平石が据えられたSK1094が重量を支える棟柱に関係する柱穴とし、棟方向は南北でN-1°-Eと推定した。柱穴の配置は側柱のみ検出したが、柱間寸法は桁行で2.5~2.8m、梁行で西部が約2.8m、東部が約4.9mとバラツキがあり、梁行は3間であった可能性もある。また、西には対応しそうな柱穴もあり、そちらにもう一間延びる可能性がある。柱穴は径30~50cmである。

付属施設としては、SX1100と焼土址(SF1111~1118)がある。SX1100は長方形の掘り込みで、長軸5.8m、短軸2.8m、深さ60cmを測る。底面はⅢ層を掘り込み堅くない。埋土は砂礫を多く含み、人為的に埋められた可能性がある。焼土址は、厚い火床面のみ検出したが、本来は掘り込みがあった可能性がある。

遺物はSX1100より、播鉢と灰釉徳利が出土している。

ウ

SK1248 (図版58)

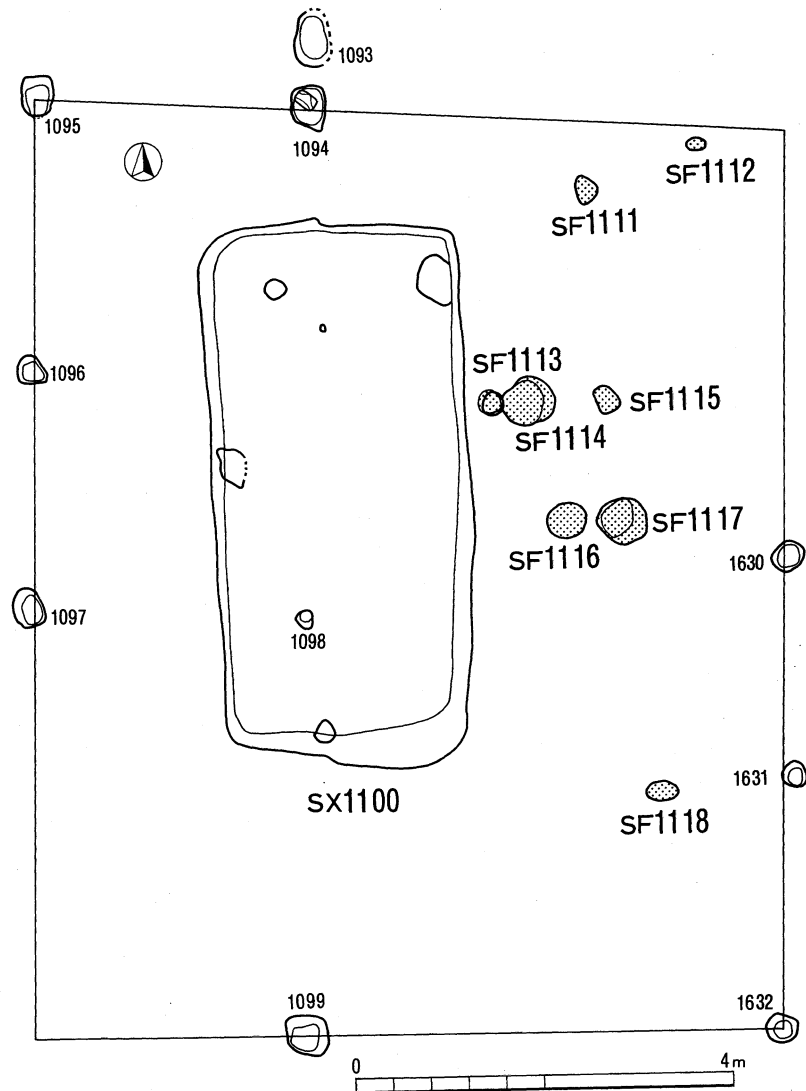
L地区に位置し、一辺3m前後の方形でSK1461に切られる掘り込みで、整理時に認定した。壁が緩やかに傾斜し床面は堅い。施設としては、柱穴と考えられる掘り込みが2箇所にある。なお、周囲に柱穴はみられない。

エー1

SK1121 (図版60 PL47)

M地区に位置し、隣接してSP1487がある。規模は東西約3.2m、南北約3.2mを測る方形で、掘り込みは浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は叩き締められている。底面には径20cm、深さ10~20cmほどの柱穴が2個あり、東よりのものは周囲が盛り上がっている。遺物としては、内耳鍋片が出土している。

以上のことから、隣接するSP1487を含めて一2に近い建物址が推定され、その竪穴部分と思われる。



第281図 ST03 (1:80)

SB1148 (図版58)

L地区に位置し、古代竪穴住居址を調査中に床面を発見した。SB1179に切られ、上面を削平されているため、全体の規模や形態は不明である。残存部分は東西約5.3m、南北約3.2mでL字状である。床面は薄く貼り床され、堅く締まっている。径20~30cmほどの柱穴が検出され、配置より桁行2間(約3.2)×梁行1間(約1.7m)の建物が想定できそうである。ただし柱穴の配置より、床面の範囲が広がることから、問題も残る。また、床面には人頭大から拳大の礫が散在していたが、廃棄時に入ったものと思われる。

SB1179 (図版58 PL47)

SB1148を切っている、L字状の堅い床面をもつ浅い凹みである。規模は東西約4.4m、南北約3.6mで、径30~50cmの柱穴が壁際に2個ある。周囲の柱穴も含んだ建物とも考えられるが、はっきりしない。

SK1193 (図版58)

M地区に位置し、SK1177・1178・1181・1192に切られ、SK1244と重複する。規模は残存部分で、東西約3.1m、南北2.8mの方形になる。掘り込みは浅く、緩やかに立ち上がる。床面は叩き締められ堅く、その上に酸化鉄の沈着がある。周囲に柱穴はあるが、一2かウかは判断できない。

SK1204 (図版60)

M地区に位置し、SK1206とSK1207に切られる。規模は南北約2.5m、東西約1.5mの長方形で、壁は垂直に掘り込まれ、40cmほどの深さである。床面は叩き締められたように堅く、径30cm、深さ10cmほどの柱穴が一つある。イー2かウかは判断できない。

SB1200 (図版58)

L・M地区の境で、SB1179に切られて検出された。形状は楕円形であるが、床面はL字状で、南北約3.2m、東西の残存部分約3.0mである。壁は緩やかな立ち上がりで、壁から床にかけて底面は堅く締っている。3個の柱穴が検出されたが近接しており、どのような建物になるかは判断できない。

SB1161 (図版58)

M地区に位置し、SK1158に切られ、上面が削平されているため、全体の規模や形状は不明である。一応残存部分はL字状で、東西約5.8m、南北約4.6mを測る。底面は堅く8個の柱穴状の掘り込みがある。どのような建物になるか判断できない。



第282図 柱穴群の分布 (1:600)

エー2 (第282図)

建物とすることができなかった、柱穴の集中である。そのまともりはA～Mの13箇所ある。規模のはっきりしたもの柱間寸法は、1.2m～3mである。その範囲で結んでみた。

A・Bは先に述べたSB1148・1161・1178・1200に関係する可能性がある。CとDは先に述べたSK1193との関連が考えられる。Fは柵址として独立する可能性もある。G・HはST10との関係が考えられる。IはSD02・21の地割内の建物(ST11～14)と関連をもった施設(建物・柵等)の可能性もある。JはST19を中にもち、さらに小さな建物が建つ可能性を示している。Kも同様に小規模な建物が建つ可能性がある。LはSD02と、MはST01との関連が考えられる。

2 柵址

SA01 (図版70)

ST01の東に位置する。規模は全長10.8mで柱間約1.2m、10本の柱穴がN-2°-E方向に直線的に並ぶ。柱穴は径20～30cmの円形で、深さ15～25cmを測る。SK1001を意図的に外しており、これとの関係が考えられる。

SA02 (図版65)

H地区に位置し、II層上面で検出した。規模は全長約6.4mで、N-95°-Eを指向する。柱穴は径30～40cmの円形で、深さ15cmを測る。柱間寸法は約0.8～2.0mとばらつきがあり、さらに規模も小さいことから、建物址の可能性も否定できない。

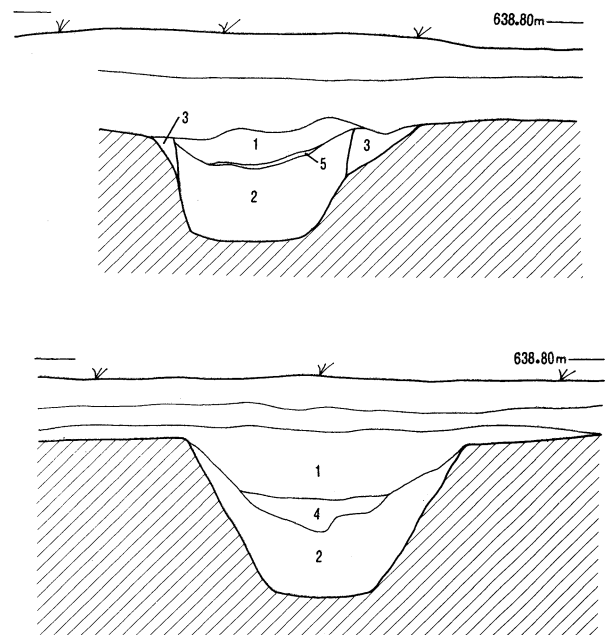
3 溝址

SD02・21 (図版62・63・66・67・69 PL48 第283・284図)

東西方向に並ぶ3本の大溝と、コの字状に巡る大溝で構成される。さらにそれぞれを相互に細い溝で結んだ部分がある。これらは一連の溝と考えられ、まとめて述べる。重複関係は、SB255を切り、ST2001、NR04・05、SX2020・2021・2023、SE01に切れ、上面には整地土がのる。溝は幅1.6～2.0mの断面UあるいはV字状で、深さ60～90cmを測る。なお東西方向の東端の溝が、平面形で明瞭に段差が付けられている部分があり、いくつか分割されて掘削された可能性がある。また、埋土中に黄色砂の薄い帯状の堆積(5層)が認められ、埋没途中で一時的な変化があったことが窺える。

この溝によって、東西20m、南北23.5mほどのコの字状の区画が構成される。この中には数棟の掘立柱建物址が存在することから、区画は屋敷地としての意味があったと考えられる。また、溝が切れる部分は入口と想定でき、この場合東西方向の溝の北側に道の存在が考えられる。

なお、東西方向の溝はさらに東に延びる長いものであり、区画以外の用途も考える必要がある。



第283図 SD02断面 (1:40)

SD04 (図版51・52・53 第285図)

F・G地区を東西に走り、西端は調査区外に延びる。位置的には現在の畑境の土手と一致しており、それに先行する溝と思われる。幅1.6~0.5m、全長約52.2mである。断面形はU字状で、深さ40cmを測る。底面には酸化鉄が沈澱(2層)し、西に向けて傾斜している。埋土中には礫が認められ、それに混じり大量の瓦と少量の陶磁器片とガラス片が出土した。

これらのことからこの溝は埋められ、現在の土手となったと思われる。

SD05 (図版61 第286図)

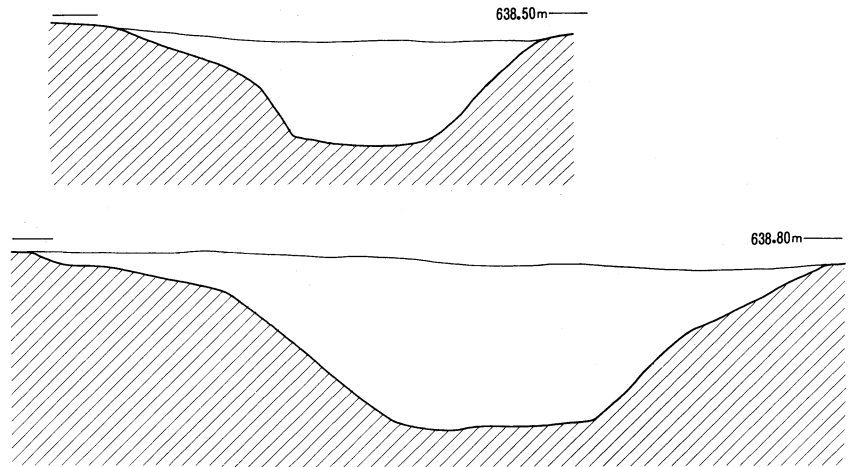
M地区に位置し、平面形が不整形で、複数の遺構の重複の可能性もある。平面形は大きく南北二つに分かれ、溝にいくつかの掘り込みが複合しているようである。幅はそのため一定ではなく、深さも同様である。なお北側部分には礫の集中が認められる。鉄砲の鉛玉が出土している。

SD15 (図版57・59・62 第287図)

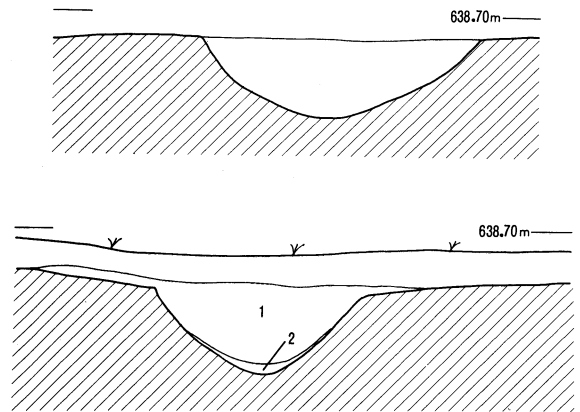
G・H地区を東西に走り、ST2001、SX22に切られる。全長は28.8mほどである。幅は0.8m、深さは10cmと浅く、底面の傾斜はほとんどない。埋土は水の影響を受けておらず、恒常的な水路とは考えられない。後で述べるSD16と並行に走ることから地割と関係するものと思われる。

SD16 (図版55・57・58 第288図)

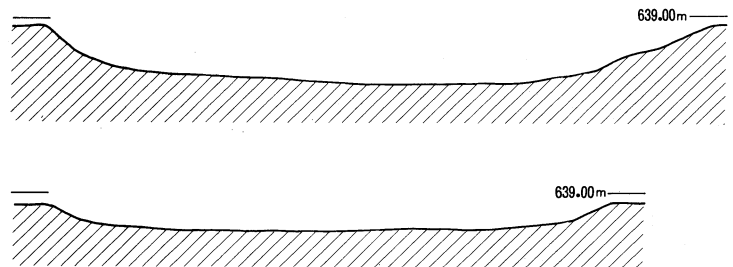
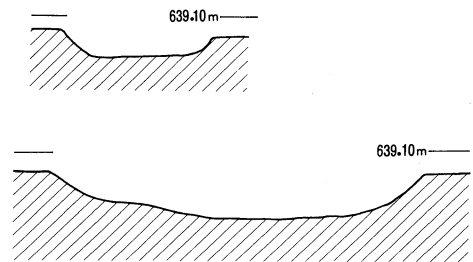
SD15と並行し、東で南側へL字状に折れる。全長は東西方向が32.2mほどで、折れ曲がった部分は8mほどである。底面には小礫や酸化鉄の集積が認められることから、流水と関係していると考えられる。これにより、本来はもっと長いと思われる。幅は0.7~1.4m、深さは20cmほ



第284図 SD21断面 (1:40)



第285図 SD04断面 (1:40)

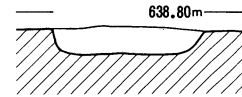


第286図 SD05断面 (1:40)

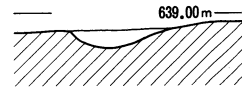
どを測る。走行方向がSD15と一致することから、関連が考えられる。

SD30 (図版59 第289図)

H地区を東西に走る溝で、SX22を切っている。全長10.4mほどで、幅0.8~1.0m、深さ10cmほどを測り、断面形は台形である。底面はほぼ平坦で、酸化鉄の集積が認められる。このことからSD16との共通性が認められ、その延長部分の可能性も考えられる。



第287図 SD15断面 (1:40)



第288図 SD16断面 (1:40)

SD32 (図版59 第290図)

H地区を東西に走り、北端は調査区外に延びる。全長20.5mほどで、幅0.3~1.2m、深さ20cmを測り、断面形は台形である。底面は北側が深く凹凸がある。走行方向や南端の位置からSD15との関連が考えられる。



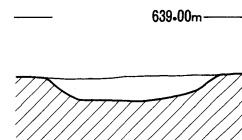
第288図 SD16断面 (1:40)

NR04 (図版62 第291図)

H地区に位置し、SD21を切り、上面にST2001が構築される。当初自然流路と考えられたが、L字状に曲がることなどから溝として報告する。東西方向5.4m、南北方向2.2mと短く、幅は0.7~1.4mと一定しない。断面形は浅いU字状で、深さ5~30cmを測る。底面には酸化鉄の沈殿がみられ、流水があった可能性があり、その場合は全長はさらに長くなるものと思われる。



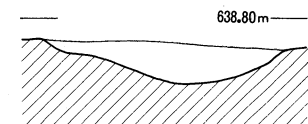
第289図 SD30断面 (1:40)



第290図 SD32断面 (1:40)

NR06 (図版63 第292図)

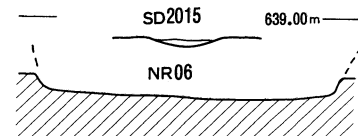
H地区に位置し、SK1238を切り、ほぼ重なるSD2015に切られ、SD21との関係はわからない。当初自然流路と考えたが、走行方向が一定、しかも地形の傾斜と異なることから、溝と考えて報告する。全長は中途途切れてしまうが、東西方向に6.0m、南東方向に5.2mほどである。幅は最大2mを測り、深さは10cmと浅い。このため本来は連続し、全長19mほどになると思われる。底面には酸化鉄が集積し流水の可能性もある。また走行方向より、区画の機能ももっていた可能性がある。なお、SD2015とは若干の位置の違いがあるが、同じ遺構である可能性もある。



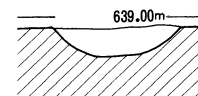
第291図 NR04断面 (1:40)

SD2015 (図版73・74 第292図)

H地区に位置し、NR06を重なるように切る。全長13.6m、幅0.4~0.6m、深さ10cmほどである。断面は台形で、底面に凹凸があり、酸化鉄の集積が認められる。このことから流水があり、本来はもっと長かったと考えられる。走行方向から区画としての性格が考えられる。



第292図 NR2015断面 (1:40)



第293図 SD2016断面 (1:40)

SD2016 (図版73 第293図)

H地区に位置し、上面が削平されているため、全容は明らかでない。ただ、東端の立ち上がりが緩やかであることにより、本来は長かったも

のと思われる。残存の全長は7.2m、最大幅は約0.6mである。断面はU字状で、深さ20cmを測り、緩やかに西に傾斜する。酸化鉄の集積は認められない。地形とは逆の傾斜をしていることや、流水の痕跡がみられないことから、区画の溝の可能性が強い。

4 火葬関係遺構

骨片が一定量出土した遺構をここで扱う。

SK1030 (図版69 第294図)

ST02の南に位置する。隣接して骨片の集中箇所があるが、掘り込みが確認されず単独に存在する。南北約1.2m、東西約1.0mの長方形で、東・西辺に突出部をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面の中央部から突出部にかけて小溝がある。それ以外は平坦である。埋土の下層からは人骨片と炭粒、焼土塊が出土し、底部の一部が火を受けている。人骨片は一体分には満たない。遺物は下層より「大定通寶」が出土した。

性格としては、火葬との関連が考えられる。

SK1125 (図版56 第294図)

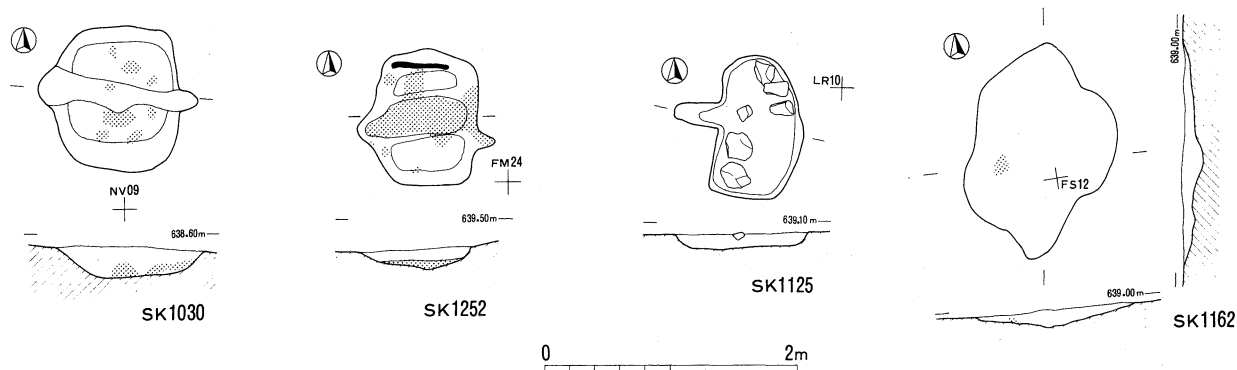
L地区に位置する。長軸約1.1m、短軸約0.7mの隅丸の長方形で、西辺中央に突出部を持つ。壁はほぼ垂直で、深さ10cmほどであり、突出部は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、火を受けた痕跡はない。埋土中には20cm前後の石が散在していたが、いずれも浮いており、廃棄後に入ったものと思われる。人骨片は一体分に満たず、他に遺物の出土もない。性格としては火葬との関連が考えられる。

SK1252 (図版51 PL48 第294図)

周囲に中世の遺構がみられないF地区に位置する。長軸約1.1m、短軸約0.7mのややくずれた長方形で、東・西辺中央に突出部をもつ。壁は緩やかに立ち上がり、深さは20cmを測る。底面には凹凸がみられる。壁は全体に火を受けており、埋土の下層に人骨片と炭化物、焼土粒が多く含まれている。遺物は底面より、「洪武通宝」が出土した。人骨片は一体分に満たない。SK1030、SK1125と同様に火葬に関連した遺構と考えられる。

SM1162 (図版52 第294図)

F地区に存在し、上面はかなり耕作で削平を受けている。残存部分で長軸1.7m、短軸1.2mを測り、不



第294図 火葬関係遺構 (1:60)

整楕円形である。掘り込みは浅く、中央に向かって緩やかに凹む。埋土には炭化物が多く含まれ、南西部より人骨片と「寛永通宝」6枚が重なって出土した。火葬に関係した遺構と考えられる。

5 井戸址

SE01 (図版75 PL53)

I地区の近世整地土層の上面でSD02、SK2008を切って検出した。構造は直径3mほど垂直に掘った後、砂礫混じりの暗灰黄色土を入れながら、直径約2mの円形に20~30cmの河原石を積み上げている。調査は1mほどまでを手作業で、それ以外を重機で掘り下げたが、石の崩落で危険なため、断念した。従って、深さや底の状況は不明である。出土遺物としては、陶器片がある。

6 その他の遺構

ここでは掘り込みが認められ、遺構として調査を行なったが、その性格がはっきりしないものを扱う。今回の調査ではここに含めて説明しなければならない遺構が多い。このことは後で述べるように、集落を考えるうえで大きな問題になる。説明の方法としては、便宜的に規模によって下記のように大別し、個々についてはその中でふれていく。またSKについては一覧表をつけてある(第108表)。

ア—長軸・短軸0.8m未満

イ—長軸0.8m以上2.0m未満、短軸0.3m以上1.9m未満

ウ—長軸1.9m以上3.3m未満、短軸1.2m以上2.2m未満

エ—長軸3.3m以上、短軸2.2m以上

ア

SK1054・1078・1132・1150・1173・1219・1220・1222・1229・1230・1234・1235がある。これらの規模は掘立柱建物址施設の規模に近い。しかし、SK1219・1220を除き、周囲に遺構は認められない。また掘り方は浅く、断面がタライ状のものが多い。

この中で、SK1150は炭化物を多く含む埋土でありながら、壁が火を受けておらず、ゴミを処理する目的があったのかもしれない。

イ (第295図)

平面形と規模により、5つに分けて説明する。

・長軸約1.1~1.3m前後の円形あるいは方形(SK1077・1151・1152・1166・1183・1216・1236・1239) これらの埋土は単層で、その位置も単独ではなく、周囲に同様遺構が分布する。

・長軸約1.4~1.5mの円形あるいは方形(SK1101・1120・1133・1141・1156・1164・1178・1181・1183・1186・1187・1191・1196・1197・1199・1225・1250)

いずれも垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は単層のものが多いが、人為的に埋め戻された可能性があるものもいくつかみられる。

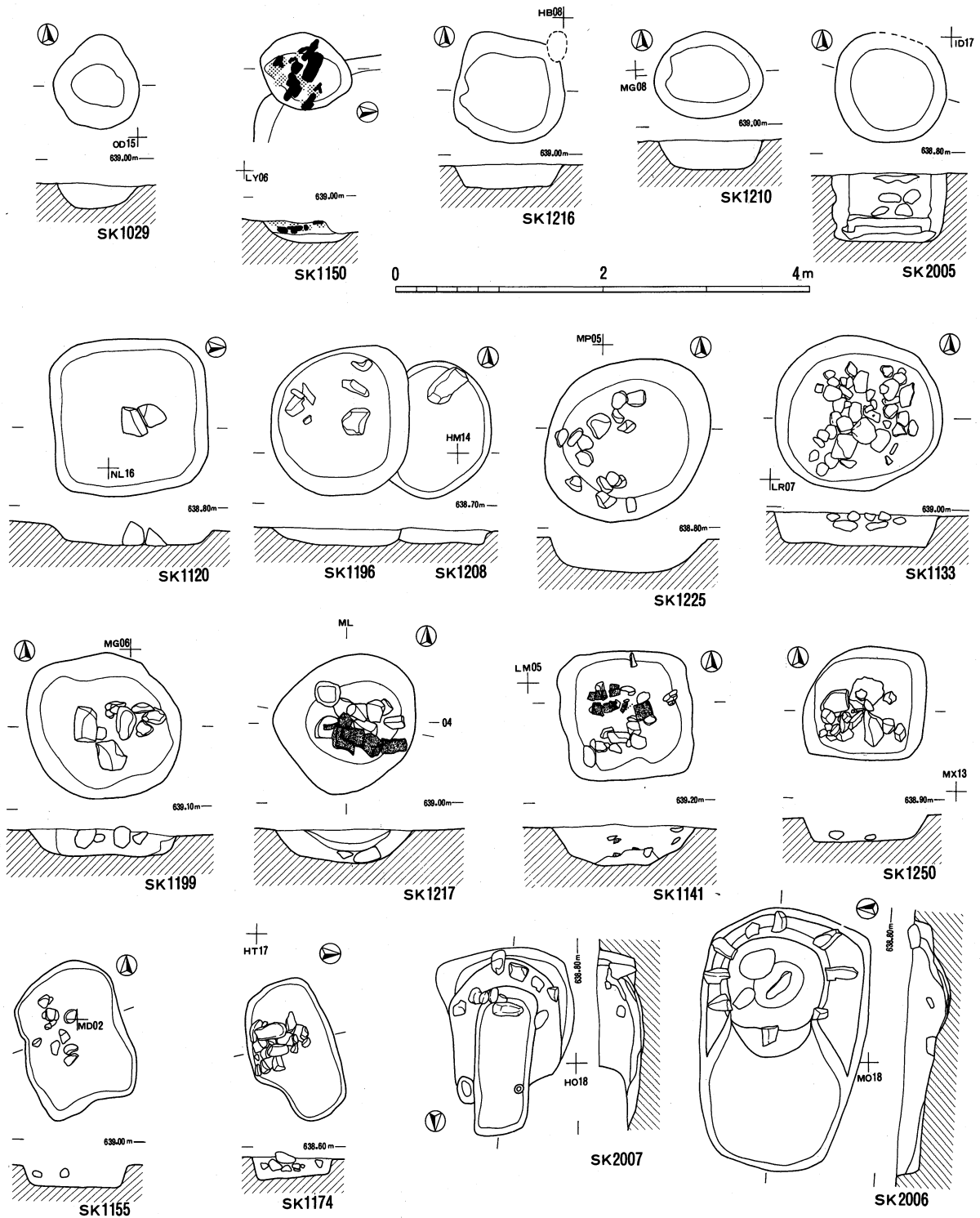
1・2個の大礫—埋土……………SK1196・1225

大礫—埋土—小礫……………SK1250 埋土—礫……………SK1133

埋土—1・2個の礫—埋土……………SK1120

壁際埋土—内側埋土—礫……………SK1199

このうち、SK1141は壁面の一部に火を受けた痕跡があり、少量ながらも骨片の出土があり、火葬関係遺構の可能性がある。また、SK1199はその形態より、内側に桶や箱が入れられた可能性がある。なおSK1011・1120・1133・1186・1187は周囲に同様な遺構がなく、単独で機能した遺構と思われる。



第295図 その他の遺構 1 (1:60)

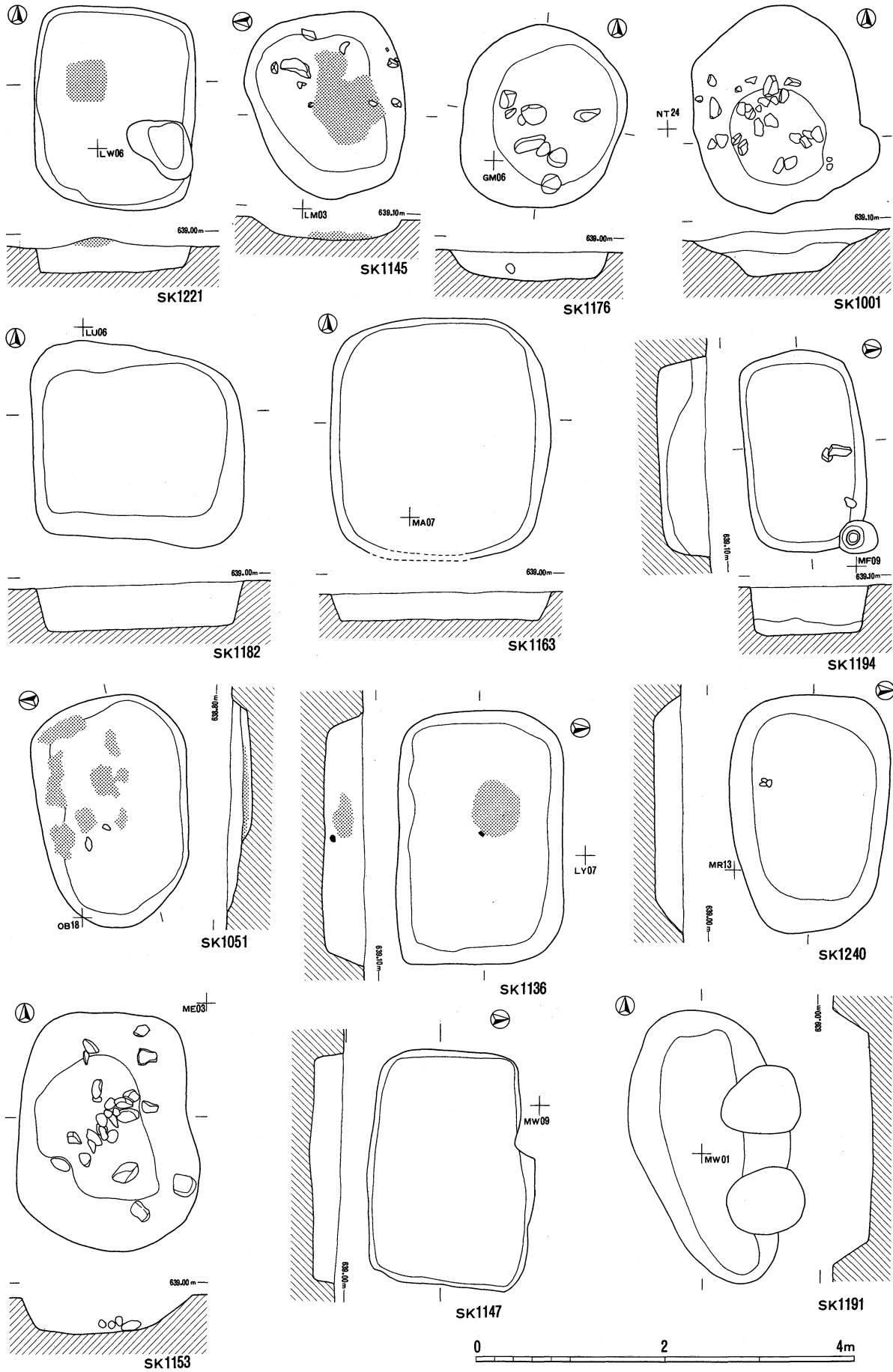
・長軸約1.0~1.4m、単軸0.7~1.2mの長方形 (SK1155・1165・1174・1184・1198・1203・1223・1243)

これらは台形あるいは方形の断面形が多い。埋土はSK1223を除き単層である。なお、埋土の上部に礫を混入するものもみられる (SK1155・1174)。

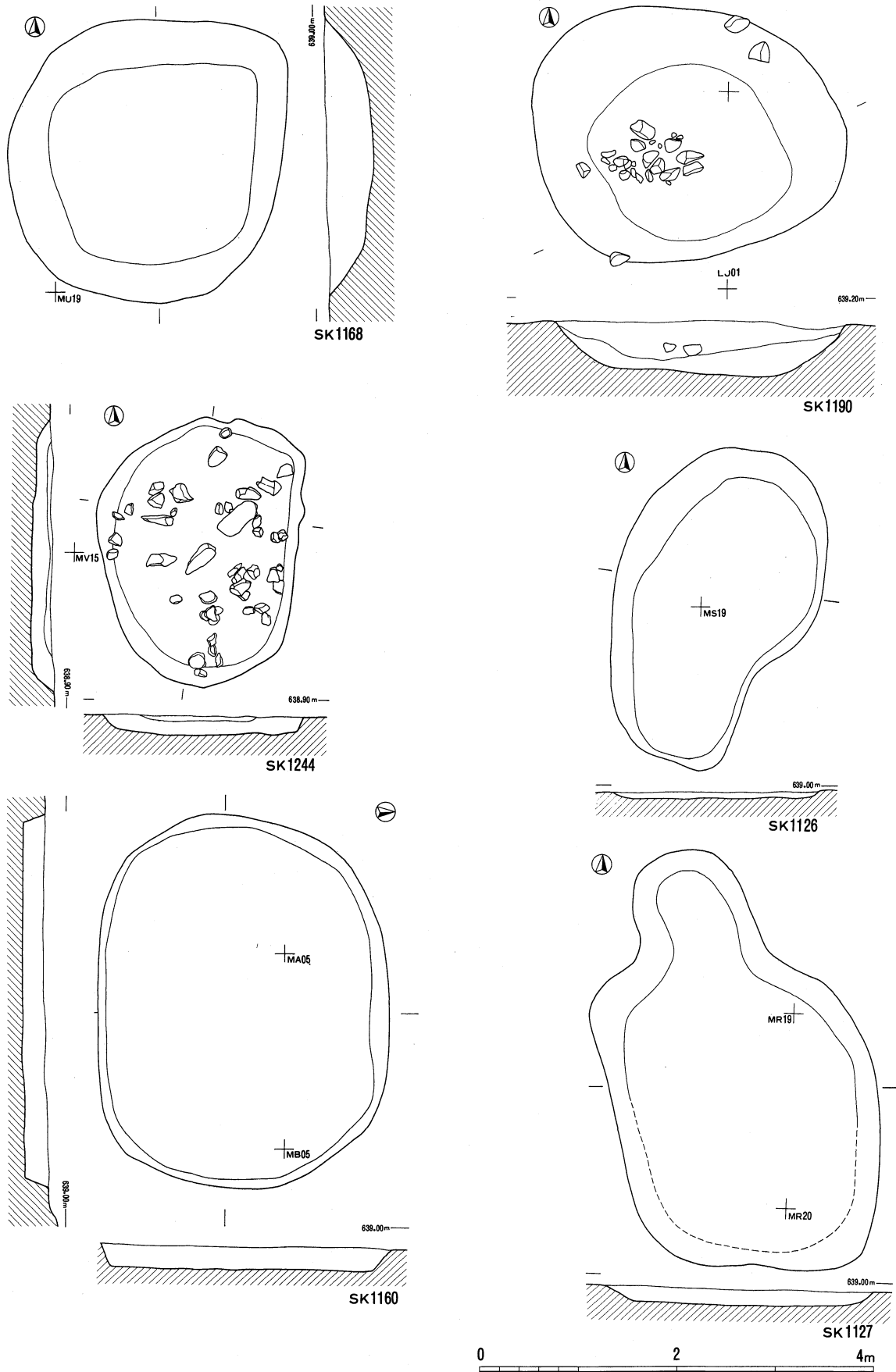
・長軸約1.0~1.4m、単軸0.7~1.2mの楕円形 (SK1130・1192・1206・1207・1210)

SK1130は単独で存在し、埋土上部に小礫が混じり、底面より宋銭が6枚一括して出土しており、火葬関係の遺構の可能性がある。また、SK1210は縦に分層ができたことから、箱や桶が埋められた可能性がある。

・長軸1.4~1.7mの長方形 (SK1023・1165・1180・1195・1212・1215)



第296図 その他の遺構 2 (1:60)



第297図 その他の遺構 3 (1:60)

ほとんどの埋土は単層である。SK1023・1108は周囲に同規模の遺構がなく、単独で機能した遺構と思われる。

以上5つに分けて説明してきたが、これ以外に底面が不安定な、SK1079・1231・1237・1238がある。またSK1231～1238は近接しており、相互に関連している可能性がある。

ウ (第296図)

- ・ 方形 (SK1121・1124・1134・1135・1137・1145・1176・1182・1189・1192・1221)
- ・ 方形で大型 (SK1163)
- ・ 楕円形 (SK1001)

埋土は単層が多い。なお、埋土中に焼土塊を含むもの (SK1221)、礫を含むもの (SK1176)、礫と炭を多く含むもの (SK1182)、底面状に灰層をもつもの (SK1145) がある。SK1001は壁は緩やかに傾斜し、埋土中に礫が多い。SK1163は床面が堅く、ウに分類した建物址の施設の可能性もある。

- ・ 長軸約2.0～2.2m、短軸約1.2～1.5m の長方形 (SK1123・1140・1194・1211・1214)

いずれも箱形の断面をもつ。なお、SK1123は底面に段差をもつ。

- ・ 長軸約2.4～2.8m、短軸約1.5～2.0m の長方形 (SK1051・1136・1153・1175・1185・1188・1240・1247)

壁が垂直、あるいは斜めに掘り込まれる。底面は平坦である。このうち、SK1051は内部で数回火を焚いたと考えられ、炭化物層を挟んで2枚の焼土層がある。他に埋土を含むもの (SK1153)、焼土層や焼土の塊をもつもの (SK1136・1240) がある。

- ・ 長軸約2.7～3.2m、短軸約1.4～1.8m の長方形 (SK1122・1131・1147・1204)

いずれも壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦で、埋土は単層である。

- ・ 長軸約3.0m、短軸約1.7m の楕円形 (SK1191)

エ (第297図)

大型のものが一括されており、形態や規模は様々である。SK1168は長軸2.9m、短軸2.8mの方形である。壁は斜めに掘り込まれ、中央に向かって凹む。SK1244、SB255は楕円形あるいは長方形で、底面に礫が多くみられる。SK1160は壁が垂直に掘り込まれ、底面は堅く平坦であり、ウに分類した建物址の可能性が有る。このほか、不整形な掘り込みとしては、SK1126・1127、SX22・2023がある。このうち、SK1126とSK1127は近接する底面の平坦な浅い掘り込みで、関連性が考えられる。またSX22・2023は遺物を多く出土しており、とくにSX2023はSX2020・2021の埋没途上にできたゴミ捨て場の可能性がある。なおSX2020・2021は、井戸の可能性もあるがはっきりしない。

第108表 中・近世SK一覧 (*1は第295～297図に遺構図をとりだす。 *2は本文中に説明あり)

遺構番号	図版	規模m (長軸×短軸)	形態	壁		底面	礫	焼土 炭灰	埋没状況		遺物
				壁	立ち上がり				埋土		
*1 1001	70	2.0×1.7	円形	斜	屈折	平	○		横	①暗褐色土 ②暗褐色土 拳大礫多く含む	
1011	70										
1028	70	1.9×1.1	方形	直	屈折	平			単	暗褐色土 (粘性強い)	
*1 1029	70	0.9×0.8	方形	斜	緩曲	窪			単	暗褐色土 (粘性強い)	
*1 1051	70	2.5×1.6	円形	直	屈折	平	◎		横	①黒褐色土 (炭、焼土多く含む) ②炭③焦土	
1054	68	0.8×0.8	円形	斜	緩曲	平					
1077	68	1.0×1.0	方形	直?	屈曲?	平?					
1078	68	0.7×0.7	円形?	斜?	緩曲	平?					
1079	70	1.1×0.8	円形	斜?	緩曲?	平?					

※ 1	1120	68	1.6×1.5	方形	直	屈折	平	○	単	暗褐色土（礫含まず）	
	1121	60	3.4×3.2	方形	斜	屈折	平（堅い） 柱穴		単	灰褐色土（砂塊混）	内耳鍋
	1122	60	3.2×1.3	方形	緩曲	屈折	平		単	灰褐色土（砂塊多く混）	
	1123	60	2.3×1.2	方形	直	屈折	平		単	にぶい黄褐色土（砂塊多く混）	
	1124	60	2.0×1.8	方形	緩曲	屈折	平		単	灰黄褐色土（砂塊多く混）	内耳鍋
※ 1	1126	64	3.3×2.1	不整形	斜	緩曲	平		単	暗褐色土（ボンボンする）	
※ 1	1127	64	4.2×1.8	不整形	斜	屈折	平		単	暗褐色土（ボンボンする）	
	1130	56	1.2×0.7	円形	斜	屈折	凹凸あり	○	単	暗褐色土	
	1131	58	3.1×1.5	方形	直	屈折	平		横	暗褐色土（小砂粒混）②暗褐色土（礫小砂粒混）	
	1132	58	0.8×0.5	円形	直	屈折	平	○	単	暗褐色土	内耳鍋
※ 1	1133	56	1.6×1.5	方形？	直	屈折	平	○	単	暗褐色土（小石、炭混）	
	1134	58	2.0×1.6	方形？	直	屈折	平		単	暗褐色土（小砂塊混）	
	1135	58	1.0×1.6	方形	直	やや緩曲	平		単	暗褐色土（微砂粒塊混）	
※ 1	1136	58	2.7×1.7	方形	直	屈折	平	○	単	暗褐色土（砂粒塊混、炭少混）	※ 2
	1137	58	1.9×1.8	方形	直	屈折	平堅い		単	暗褐色土（砂粒塊混、粗砂、細砂僅混）	内耳鍋
	1138	58	—×1.4	方形	直	屈折	平		単	暗褐色土（黄砂塊混、粗砂、細砂僅に混）	
	1139	58	？	方形	直	屈折	平		単	暗褐色土（黄色砂塊混、粗砂、細砂混）	内耳鍋
	1140	58	2.0×1.4	方形？	直	屈折	平	○	単	暗褐色土（砂粒塊混、粗砂、細砂混）	内耳鍋
※ 1	1141	56	1.5×1.3	方形	直	屈折	凹凸あり	○ ◎	横	①暗褐色土②黄褐色砂質土	※ 2
	1142	56	1.0×0.8	円形	斜	緩曲	くぼむ		横	①暗褐色土②黄褐色砂質土	
	1143	56	0.8×0.8	円形？	直	層折	平 柱穴		単	暗褐色土（小礫若干混）	
	1144	56	0.8×0.6	円形		窪み状			横	①暗褐色土②黄褐色砂質土	
※ 1	1145	56	2.0×1.6	方形？	斜	緩曲	平	○	横	①暗褐色土②灰、炭	内耳鍋
	1146	56	1.0×1.8	方形	直	屈折	平	○	単	黒褐色土	
※ 1	1147	58	1.8×1.5	方形	直	屈折	平		単	暗褐色土（炭若干含む）	
※ 1	1150	58	0.8×0.8	円形	斜	緩曲	平	◎	横	①炭化物、焼土塊②暗褐色土	
	1151	58	1.0×0.9	方形	直	屈折	平		単	褐色土（小炭混）	
	1152	58	0.9×0.8	円形？	直	屈折	平		横	①褐色土②にぶい橙色（少量の炭混）	
※ 1	1153	58	2.5×1.8	方形	斜	屈折	平	○	単	暗褐色土（小炭混）	※ 2
	1154	58	1.4×1.3	方形？	直	屈折	平		単	黒褐色土（大小炭混）	内耳鍋
※ 1	1155	58	1.4×1.1	方形	直	屈折	平	○ ○	単	褐色土（微量の炭化物混）	内耳鍋
	1156	58	1.2×1.2	方形	直	屈折	平		単	褐色土（微量の炭化物混）	内耳鍋
※ 1	1160	58	3.8×3.0	円形	直	屈折	平		単	暗褐色土（僅かな小礫混）	内耳鍋
※ 1	1163	58	2.5×2.3	方形	直	屈折	平		単	暗褐色土（黄色砂混、炭、焼土散在）	内耳鍋
	1164	58	1.5×1.4	方形	直	屈折	平		単	暗褐色土（粒、鉄分塊混る、細砂、粗砂僅かに含む）	
	1165	58	1.6×1.0	円形	直	屈折	平		単	暗褐色土（砂粒塊混）	
	1166	58	1.0×1.0	円形	直	屈折	平		単	褐色土（ローム、砂粒塊多く混）	内耳鍋
	1167	58	—×0.9	円形	直	屈折	平		〃	暗褐色土（砂粒ブロック混）	
※ 1	1168	64	2.9×2.8	方形	斜	緩曲	平		〃	灰褐色土（粘質しまっている）	
	1170	58	1.3×—	円形	直	屈折	平		単	暗褐色土（砂粒ブロック混、細砂、粗砂僅かに混）	
	1172	65			直	屈折	平				
	1173	65	0.8×0.8	円形	直	屈折	平		単	暗灰黄色土	
※ 1	1174	62	1.5×0.8	方形？	直	屈折	平	○	単	暗灰黄色土	※ 2
	1175	58	2.9×2.0	方形	直	屈折	平		単	暗褐色土（砂粒塊混）	
※ 1	1176	54	1.9×1.7	方形？	直	緩曲	平	○	単	褐色土（円礫多く混、砂粒僅かに混）	
	1177	58	1.0×0.8	円形	斜	緩曲	平	○	単	暗褐色土（鉄分ところどころ含む）	内耳鍋
	1178	58								暗褐色土（若干炭化物混）	※ 2
	1180	57	1.8×1.2	方形？	直	屈折	平		単	暗褐色土（指頭大礫混、若干炭化物混）	内耳鍋
	1181	58	1.2×1.0	方形？	斜	屈折	平（少しくぼむ）		単	（若干炭化物混）	内耳鍋

※1	1182	58	2.3×2.0	方形	斜	屈折	平(北へ傾斜)			単	灰褐色土(粘質、拳大の礫、炭、砂粒多く混)	※2
	1183	65	1.1×1.0	円形?	斜	屈折	平			単	暗灰黄色土(砂粒混)	内耳鍋
	1184	62	1.2×1.0	方形	斜	屈折	平			単	暗灰黄色土(砂粒混)	内耳鍋
	1185	62	2.4×1.4	方形	斜	屈折	平(南やや高い)			単	暗灰黄色土(砂粒混)	
	1186	59	1.2×1.2	方形	斜	屈折	平	○		単	暗灰黄色土(砂粒混)	
	1187	65	1.4×1.3	方形	斜	屈折	平			単	暗灰黄色土(砂粒混)	
	1188	62	2.7×1.9	方形	斜	屈折	平			単	暗灰黄色土	※2
	1189	66	2.2×1.9	方形?	斜	屈折	平			単	暗灰黄色土(砂粒点在、指頭大~拳大の石点在)	内耳鍋
※1	1190	56	3.2×2.6	円形	斜	屈折	平	○		横	①灰褐色土(小石多く含む)②黒褐色土(骨片多く含む)	※2
※1	1191	58	—	—	斜	やや緩曲	平			—	—	
	1192	58	2.2×1.8	方形	斜	緩曲	平	○		単	暗褐色土(鉄分沈澱)	
	1193	58	3.1×2.7	方形	斜		平			単	暗褐色土	
※1	1194	60	2.2×1.3	方形	直	屈折	平	○		横	①暗褐色土(砂粒の小塊混)②暗褐色土(砂粒多く含む砂)	克納償(近世)内耳鍋
	1195	59	1.6×1.2	方形?	直	屈折	平	○		横	①暗褐色土②褐色土(砂粒多く混)	
※1	1196	59	1.4×1.3	方形?	直	屈折	平			単	黒褐色土(砂粒混)	※2
	1197	66	1.2×1.1	円形	直	屈折	平			単	暗灰黄色土(指頭大砂粒、褐色土塊混)	内耳鍋
	1198	66	1.1×0.8	方形	直	屈折	平			単	暗灰黄色土(指頭大砂粒、褐色土塊混)	
※1	1199	60	1.5×1.4	円形?	直	屈折	平	○		縦	①黒褐色土②暗褐色土(砂塊多く混)	内耳鍋
	1201	60	1.4×1.2	円形?	直	屈折	平	○		単	暗褐色土(焼礫入る)	内耳鍋
	1203	58	1.4×1.2	方形?	直	屈折	平			単	暗褐色土(砂塊混)	内耳鍋
	1204	60	2.7×1.6	方形	直	屈折	平			単	暗褐色土(砂塊混)	内耳鍋
	1205	65	—×1.6	?	—	—				横	①黒色土(褐色土粒少し混)②褐色土(炭粒少し混)	
	1206	60	1.1×0.8	円形	斜	緩曲	平			単	暗褐色土(砂塊混)	
	1207	60	1.2×0.6	円形	直	屈折	平			単	暗褐色土	
※1	1208	59	1.3×—	円形	直	屈折	平	○		単	暗褐色土	内耳鍋
※1	1210	60	1.1×0.8	円形	直	緩曲	平			縦	①暗褐色土(砂塊多量に混)②暗褐色土(砂塊少し混)	
	1211	58	2.2×1.4	円形	直	屈折	平					
	1212	60		円形	直	屈折	平			単	暗褐色土(砂塊僅かに混)	内耳鍋
	1214	60	2.1×1.5	方形	直	屈折	平			単	暗褐色土(砂塊混)	内耳鍋
	1215	58	1.7×1.2	方形	直	屈折	平			横	①暗褐色土(砂まだらに混)②褐色土(砂多く混)	内耳鍋
※1	1216	58	1.1×1.0	方形	直	屈折	平			単	暗褐色土	
※1	1217	60	1.4×1.4	方形?	直	屈折	平	○		横	①灰黄褐色土(粘質)②暗褐色土(粘質)③灰黄褐色土(粘質)	※2
	1218	60	1.0×0.9	円形	直	緩曲	平	○		単	灰褐色土	
	1219	60	0.8×0.6	円形	斜	緩曲	平			単	灰褐色土	
	1220	60	0.8×0.8	円形	斜	緩曲	平			単	灰褐色土	
※1	1221	58	2.2×1.7	方形	直	屈折	平	○		横	①焼土塊②暗褐色土(砂塊混)	※2
	1222	60	0.7×0.6	方形	直	屈折	平	○		単	暗褐色土(大量の灰混、細砂塊僅かに混)	
	1223	58	1.2×1.0	方形	直	屈折	平			横	①黄褐色土(指頭~拳大礫混)②オリーブ褐色土(指頭大~拳大礫、砂混)	
	1224	58	—	円形	直	屈折	平 柱穴			横	①暗褐色土(砂、鉄分塊混)②黒褐色土(炭化物、砂塊混)	
※1	1225	63	1.6×1.6	円形?	斜	緩曲	平	○		単	灰褐色土(砂塊混)	
	1226	63	0.9×0.9	方形	斜	屈折	平			単	灰褐色土(砂粒混、粘質)	
	1227	63	1.0×0.9	円形	直	屈折	平			単	灰褐色土	
	1228	63	0.9×0.7	円形	直	屈折	平	◎		単	灰褐色土	
	1229	63	0.6×0.5	円形	直	屈折	平			単	灰褐色土(炭混)	

	1230	63	0.8×0.7	円形	直	屈折	平			単	灰褐色土（炭混）	
	1231	63	1.0×0.7	円形	直	屈折	平			単	灰褐色土（砂粒混）	
	1232	63	1.1×0.9	円形	斜	屈折	平			単	灰褐色土（砂粒混）	
	1233	63	1.3×1.0	円形	斜	緩曲	凹凸あり		○	単	灰褐色土	
	1234	60	0.8×0.7	円形？	斜	緩曲	くぼむ			単	灰褐色土（砂塊混）	
	1235	60	0.9×0.7	円形？	斜	緩曲	くぼむ			単	灰褐色土（砂粒混）	
	1236	60	1.0×1.0	円形？	直	屈折	平		○	単	灰褐色土（砂粒混）	
	1237	60	1.7×1.2	円形	斜	緩曲	くぼむ、凹凸あり			単	灰褐色土	
	1238	63	1.6×1.2	円形	斜	緩曲	平、凹凸あり			単	灰褐色土（砂粒混）	
	1239	63	1.0×0.9	方形	直	屈折	平			単	灰褐色土	
※1	1240	63	2.5×1.7	円形	斜	屈折	平		○	横	①暗灰黄色土（炭混）②暗灰黄色土（焼土、木炭混）③焼土	※2
	1241	63	1.4×1.4	方形？	斜	緩曲	平		○	単	暗灰黄色土（砂粒混、焼土粒、木炭点在）	※2
	1242	58	1.0×0.9	円形	直	屈折	平			単	暗褐色土（砂粒僅かに混）	内耳鍋
	1243	58	1.3×0.7	円形	直	屈折	平			単	（暗粒塊混）（砂粒塊混）	
※1	1244	64	2.7×2.1	円形	直	屈折	平（鉄の沈殿）		○	横	①暗褐色土（砂質ぎみ粘柱あり、焼土炭粒含む）②暗褐色土（粘質、焼土、炭粒僅かに混）	蓮弁文青磁碗・土器皿（非ロクロ）
	1246	58	1.2×1.2	方形	斜	屈折	平			単	オリーブ褐色土、暗褐色土まだらに混	
	1247	58	2.5×1.8	方形	直	屈折	平			単	暗褐色土（細砂含む）	内耳鍋
	1249	58	1.6×1.1	方形	斜	屈折	平		○	横	①暗褐色土（細砂僅かに混）②暗褐色土（微砂粒塊混）	※2
※1	1250	58	1.2×1.1	方形	直	屈折	平			単	暗褐色土（粗砂、細砂僅かに混）	
	1251	58	2.1×—	方形	直	屈折	平			単	暗褐色土（砂塊混、粗砂、細砂僅かに混）	

遺構番号	図版	規模 (長軸×短軸)m	形態	壁		底面	断面図	埋土			遺物	備考
				立ちあがり				礫	炭	焼土		
※1	2005	1.1×1.1	円形	直	屈折	平	台形	○			※2	桶が埋設されていた可能性あり
※1	2006	2.6×1.6	楕円形	斜	屈折	平	台形	○	○	◎	なし	炉の可能性あり
	2007	(1.9)×1.2	楕内形	直	屈折	窪	台形	○	○	◎	なし	炉の可能性あり
	2008	0.9×0.9	円形	直	屈折	平	台形				なし	
	2009	—×0.6	楕円形	斜	緩曲	U字形	V字形				なし	
	2010	1.0×0.5	楕円形	直	屈折	平	台形				なし	
	2011	2.6×2.1	不整形	斜	緩曲	平	台形				なし	
	2012	1.5×0.9	楕円形	直	緩曲	U字形	U字形	○			なし	深い（検出面より1.2m）
	2013	1.0×—	円形？	斜	緩曲	平	台形				※2	
	2014	0.3×0.2	楕円形	斜	緩曲	U字形	U字形				※2	

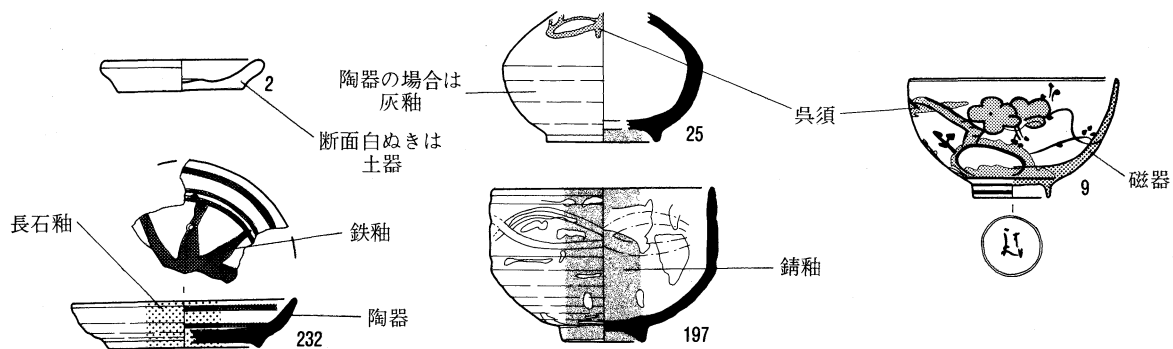
◎は壁が焼けている。

第3節 遺物

1 概観

遺物には、焼物、石製品、金属製品がある。これらは遺構内、遺構外の双方より出土している。ただし、遺構内遺物は掘り込みを有する遺構のみで、整理時に検討したゴミ捨て場等の出土遺物は、遺構外遺物として扱っている。遺構内と遺構外遺物は破片数の比で、約1：9であり後者が圧倒的に多い。特に前者は破片1点という場合も多く、また遺構外遺物との接合も珍しくない。

そこで、材質ごとに遺物を概観する。また図版の凡例は第298図のようである。



第298図 遺物図版凡例

(1) 焼物

時代的には平安時代末期から現在に至るものがみられる。それらは多様で、遺跡外で生産され、搬入され消費されたものである。そこで、記述を簡略化するために、焼物の種類と産地について、概観しておく。

ア 焼物の生産地と種類 (註1)

これまでの生産地での研究を参考に、便宜上16世紀を境として二つに区分して記述する。基本的には生産地別に土器・陶器・磁器の違いで区別する。そして、産地が判明しない場合と、技術的に類似点が認められるが産地が特定できない場合には、「系」をつけて記述する。また、本遺跡に継続して最も多く搬入される瀬戸・美濃産の陶器は、古瀬戸・大窯製品・本業焼に分けた(註2)。なお、土器に関しては古代との生産の関係が、明確でなく、土器と呼ぶ(註3)。

ア) 15世紀以前

陶器類は生産地別に、施釉の有無や焼成方法に違いがみられる一方、同一生産地で異なる場合もある(註4)。ここでは、従来のように生産地名で焼物の種類を呼び、通称で焼物種や内容が理解されると判断した場合はそのまま使用する。また、施釉陶器が一貫してみられる瀬戸・美濃産の陶器は、窖窯製品を「古瀬戸」と呼び、それ以後と区別した。

a 土器

土器には酸化炎焼成の皿のみがある。従来、県内では器種が皿のみに限定されるので「かわらけ」、あるいは酸化炎焼成を捉えて土師質土器とか土師器とか呼ばれている。県内の出土例をみる限り、供給圏は狭く、県内で生産された可能性が考えられる。なお、内耳鍋については主体が16世紀と考えられ、イ)で扱うことにする。

b 陶器

施釉・無釉の両者がある。施釉された陶器には国産品と輸入品があり、前者を「古瀬戸」、後者を輸入陶器と呼ぶ。無釉陶器は東海産の瓷器系製品と北陸を生産地と考えられる須恵器系製品がある(註5)。前者には供膳具中心の窯、鉢・壺・甕中心の窯、さらに、両者を併焼する窯等が知られる(註6)。それらの消費地での様相は複雑であり、できる限り生産地別に識別した。その中でも窯の特定ができなかった碗・皿は「山茶碗」、捏鉢は「東海系の捏鉢」と呼ぶ(註7)。後者の須恵器系製品は、従来出土数は少なかったが、松本平では出土数が増加している。この須恵器系の陶器については珠洲自体の生産でない可能性も指摘されるが、ここでは珠洲系と呼ぶ(註8)。

c 磁器

全て国外からの輸入品で、青磁・白磁・青白磁がある。通例に従った。

イ) 16世紀以降

土器類については前述した通りであるが、搬入される陶磁器に関しては施釉陶器・磁器(染付)があり、生産地別に陶器・磁器の別を示した。さらに、器形と施釉方法等で、各生産地をこえて共通する焼物もあるが、これについては特別ふれない(註9)。

a 土器

酸化炎焼成のものを土器、還元炎為成のものを瓦質土器と呼称する(註10)。前者には内耳鍋が多くみられる。生産地は県内の可能性があるが、明確でない。

b 陶器

全て施釉された国内産の陶器で、生産地としては瀬戸・美濃(註11)と肥前、量は少いが信楽・備前等、信楽や美濃の影響下に出現する県内諸窯(註12)、と推定されるものがある。基本的には生産地で示し、瀬戸・美濃は大窯製品、本業焼とに分け、肥前産は肥前系陶器とした。又、県内諸窯産は説明は不明のものが多く、在地系陶器とした。

c 磁器

輸入されたものと国産品があり、白磁と染付がある。前者は輸入染付、白磁と呼び、国内産は染付に限定されるので肥前系染付、瀬戸・美濃産染付とした。

イ) 器種

器種は良好な一括資料がないので、法量の違いが型式差であるのか、使う上での法量の差であるのか判断としない。ここではア)と同様に、16世紀を境として二分し、そのなかで分類する。

15世紀以前

・供膳具 食物を盛る器(神仏も含める)

碗 口径14~17cmの青磁、古瀬戸平碗、山茶碗等と10~12cm前後の古瀬戸天目茶碗がある。

皿 口径11~14cmの土器類と、口径10cm前後の古瀬戸縁釉小皿、腰折皿、龍泉窯系青磁皿、土器皿、白磁皿、口径7~8cmの古瀬戸折縁小皿、山茶碗皿、土器皿等がある。

鉢 高台や足が付き、口径16cm以上を測る。青磁の盤と大きめの古瀬戸折縁大皿・直縁鉢がある。

その他 青白磁の小型の水注がある。

・貯蔵具 物を入れる器

壺 口径の小さい貯蔵具。常滑三筋壺、渥美壺、古瀬戸瓶子・四耳壺、輸入陶器梅瓶がある。

甕 口径の大きな大型貯蔵具。常滑甕、中津川甕がある。

その他 青白磁の合子がある。

・調理具 食物の物理的加工に使う器

搗鉢 おろし目のない常滑・中津川等の東海系捏鉢とおろし目のある珠洲系搗鉢、古瀬戸の搗鉢が

ある。

おろし皿 内面底部におろし目を持つ。古瀬戸おろし皿のみある。

・煮炊具 食物の化学的加工を行う器 出土していない

・調度具その他

華瓶 古瀬戸の華瓶がある。

香炉 青磁と古瀬戸の香炉がある。

16世紀以降

・供膳具

碗 口径10～12cmを測る瀬戸・美濃大窯製品、本業焼、新業焼、肥前系陶器、肥前系染付と口径13cm以上の瀬戸・美濃本業焼各種碗がある。これらをさらに法量より、口径5～8cmを小碗、口径13cm以上を大碗その中間を中碗とした。

皿 灯明皿も含めた。皿は、口径5cm以下の特小皿、8～11cmの小皿、12～15cmの中皿、19～21cmの大皿、28cm前後の特大皿に分けられる。特小皿は肥前系染付、小皿は肥前系染付、瀬戸・美濃大窯製品本業焼、土器がある。中皿は肥前系陶器、肥前系染付、瀬戸・美濃大窯製品、本業焼製品がある。この小皿と中皿は、時期毎に数通りのセット関係があるとともに、さらに細分できる可能性を持つ。大皿は肥前系染付、瀬戸・美濃本業焼がある。特大皿は肥前系染付がある。

鉢 口径21cm前後の肥前系染付と口径28cm～32cmで内面に釉や櫛描文の装飾を持つ瀬戸・美濃本業焼、口径36cm前後の瀬戸・美濃本業焼と肥前系陶器（唐津）鉢がある。

その他 瀬戸・美濃本業焼仏飯具がある。

・調理具

挿鉢 口径29cm以上で内面におろし目を持つ。瀬戸・美濃大窯製品、本業焼、在地系陶器がある。

捏鉢 内面に装飾のない深い鉢で、口径30cm以上を大捏鉢、それ以下を小捏鉢とした。

・貯蔵具

壺 小型の貯蔵具で、徳利・汁次を含めた。徳利は瀬戸・美濃大窯製品？と本業焼、肥前系染付、備前があり、汁次に瀬戸・美濃本業焼、油壺に肥前系染付、瀬戸・美濃本業焼がある。その他、全体の形は不明だが、壺類と考えられる破片に瀬戸・美濃本業焼がある。

甕 常滑か在地系陶器の大甕がある。

・煮炊具

鍋 体部内面の2箇所には耳の付く深い鍋。土器がある。

ハウロク 体部内面の2箇所には耳の付く、煎るための浅い器。土器がある。

土瓶 注口をもち、底部が露胎である。在地系陶器か瀬戸・美濃本業焼と思われるものがある。

・調度具その他（特定の使われ方のため特定の形をとる調度具関係の器を中心に一括した）

火鉢 鉢型で足が付く。土器と瓦質土器がある。

華瓶 筒型の胴に首の付く形で、耳が付く。肥前系の染付がある。

水滴 具象・箱型の二種あり、2箇所に小孔がある。瀬戸・美濃本業焼がある。ビンダライ 長楕円形の平面形の器で、瀬戸・美濃本業焼がある。

香炉 全体の形がわかる破片はない。瀬戸・美濃本業焼がある。

蓋 壺、土瓶等とセットになると思われるが、セット関係は掴めなかった。

植木鉢 全体の形は不明。瀬戸・美濃本業焼がある。

(2) 石製品

石製品には、比較的量の多い石臼のほか、硯、砥石、不明品がある。ほとんどが遺構外からの出土である。この中で砥石については、中世以降に限定できるものが少なく、第5章第2節3でふれる。

- (註1) 陶磁器の識別にあたって田口昭二・藤沢良祐・仲野泰弘・森田勉各氏の鑑定・指導を受けた。しかし、遺跡全体の陶磁器の全容がはっきりしない段階で行ったため、赤羽一郎(赤羽1977、1984)、伊藤嘉章(伊藤1988)、上田秀夫(上田1982)、小野正敏(小野1982)、大橋康二(大橋1985)、鋤柄俊夫(鋤柄1985)、田口昭二(1977、1983)、仲野泰弘(仲野1985、1986a、b、1987)、榑崎彰一(榑崎1958、1977、1978)、藤沢良祐(藤沢1979、1982a、b、1986、1987)、吉岡康暢(吉岡1977a、b)、横田賢二郎、森田勉(横田・森田1978、森田1982)の研究を参考とした。
- (註2) 藤沢良祐の分類による(藤沢1987)。
- (註3) 鎌倉時代以降の土器に非ロクロとロクロ整形があることが知られるが、それらと平安時代の土師器は連続する関係にあるのかは明確でない。
- (註4) 榑崎彰一の指摘がある(榑崎1977、1979)。
- (註5) 榑崎彰一による(榑崎1977、1979)。しかし、近年、関東に見られる平安時代後半の酸化炎焼成土器(県内では土師器とされるロクロ整形の酸化炎焼成の土器)と須恵器との関係が注目されている。その場合、名称に問題が生じるが、ここでは陶器に限定して榑崎氏に従った。
- (註6) 前掲註3に同じ。
- (註7) 産地が推定できるところで、碗には東濃・瀬戸・渥美、その他尾張産があり、皿は東濃産、捏鉢には常滑・中津川産等があるが、生産地が判断できないものが多い。
- (註8) 須恵器系陶器は、珠洲自体でないといわれる製品が数例見つかっている(飯山市教育委員会1985)。また、その一部は県内産である可能性を指摘する考えもある(鋤柄俊夫1986)。これらの陶器については、今後注目する必要がある。本遺跡で出土した破片の胎土には白色の粒(海綿骨針?)を含む。
- (註9) 例えば、京焼き風とか京焼き系と呼ばれる高台を薄く削り、上絵を施す焼物があげられる。
- (註10) 県内で生産された可能性が高い。今のところ、江戸時代に火鉢を中心として出土例が確認される。また、別系統の可能性もあるが、瓦質土器の出現は更に遡る可能性もある。
- (註11) 藤沢良祐氏は「村むらで特徴ある器種を焼成していた」と述べている(藤沢1987)。細かくみれば更に生産地が特定できる可能性があるが、今後の検討を待ちたい。また、瀬戸と美濃は識別できなかったので一括した。
- (註12) 仲野泰弘の指摘による(仲野1983)。

引用文献

- 赤羽一郎 1977 「常滑」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館
『常滑焼』ニューサイエンス社
- 飯山市教育委員会 1985 『長者清水遺跡』
- 伊藤嘉章 1988 「瀬戸・美濃における大窯生産」『岐阜市歴史博物館研究紀要2』
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染め付け碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究2』
- 大橋康二 1984 「肥前陶・磁の変遷と出土分布」『国内出土肥前陶磁』九州陶磁文化館
1985 「肥前磁器のながれ」『季刊考古学13号 特集 江戸時代を掘る』雄山閣
- 鋤柄俊夫 1985 「中世信濃の東海系移入雑器」『同志社大学考古学シリーズII 移動と移住』同志社大学考古学シリーズ刊行会
「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃38-4』
- 田口昭二 1977 「美濃」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館
1983 「美濃窯における白瓷と白茶碗」『美濃陶磁資料館報II』
『美濃焼』ニューサイエンス社
- 仲野泰弘 1983 「長野県出土の近世陶磁」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3
1985 「長野県出土の近世陶磁」『愛知県陶磁資料館研究紀要』4
1986 「中村遺跡出土の近世陶磁」『中村遺跡 関越自動車道(新潟線) 渋川インター地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-III)』渋川市教育委員会
1986 「浅間山の噴火(天明三年)に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器」『愛知県陶磁資料館研究紀要』5
1987 「江戸時代の瀬戸窯と京焼風陶器」『愛知県陶磁資料館研究紀要』6
- 榑崎彰一 1958 「岐阜県中洗北第1号窯の調査」『陶説61』
1977 「瀬戸」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館
1978 「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集LXXIV』
1979 「16世紀の美濃陶」『島根県立博物館調査報告』3冊
- 藤沢良祐 1979 「長野県出土の古瀬戸について」『信濃31-11』
1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁8』
1984 「古瀬戸概説」『美濃陶磁歴史資料館報III』

- 1982 「瀬戸古窯址群 I」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 I』瀬戸市歴史民俗資料館
 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 V』
 1987 「付編 本業焼の研究」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』
 吉岡康暢 1977 「加賀・珠洲」『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館
 1977 「珠洲陶の編年をめぐる問題」『珠洲法住寺第3号窯』石川県教育委員会
 横田賢二郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶器について」『九州歴史資料館研究論集 4』
 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 2』

2 各説

(1) 焼物

ここでは遺構内遺物は、出土した遺構を検出面ごとに分けて説明する。遺構外遺物は、その出土層位ごとに説明する。

ア 遺構内遺物

ア) I・III層部分

この部分で検出された遺構からは古代の焼物が多数出土したが、中世以降の焼物は少量である。

SK1136 (図版212)

古瀬戸の縁釉小皿(1)、内耳鍋小片がある。なお1は遺構外出土と接合し、他に同個体と思われるものもある。

SP1141 (図版212)

内耳鍋の大型破片がある(1)。

SK1148 (図版212)

古瀬戸の天目茶碗(1)と内耳鍋の小破片がある。

SK1153 (図版212)

内耳鍋の大型破片がある(1)。そのほか内耳鍋の小破片があるが、いずれも口縁を外反させる。

SK1178 (図版212)

古瀬戸の天目茶碗(1)と縁釉小皿(2)がある。2は遺構外出土品と接合した。

SK1179 (図版212)

古瀬戸の縁釉小皿(1)と直縁鉢、内耳鍋の小破片がある。古瀬戸はいずれも遺構外と接合した。

SK1182 (図版212)

古瀬戸鉢(1)と内耳鍋の破片がある。1は遺構外出土と接合した。

SK1190 (図版212)

近世陶磁器がかなりまとまって出土した。1～5が瀬戸・美濃本業焼である。1は鉄釉に灰釉をとばした小碗、2は灰釉小碗、3・4は肥前系染付皿、5は錆釉挿鉢、6はホウロクである。このほか瀬戸・美

濃本業焼の鉄釉徳利、灰釉碗、常滑甕の小破片がある。これらは、SX2020・2021の出土の焼物と器種の構成が類似する。

SK1217 (図版212)

口縁を外反させる内耳鍋の大型破片がある(1)。

SK1221 (図版212)

古瀬戸の天目茶碗(1)と縁釉小皿(2)、内耳鍋の破片がある。1は遺構外出土の破片と接合した。

SK1249 (図版212)

古瀬戸の縁釉小皿(1)と、内耳鍋の破片がある。

SD04 (図版212)

1～5は瀬戸・美濃産染付である。1は紙型刷りの染付碗、2は小碗、3・4は碗、5は皿、6は瀬戸・美濃本業焼あるいは在地系陶器の糸目土瓶である。このほかガラス片や、大量の瓦の破片がある。

SD30 (図版212)

1は鉄釉碗、2～4は瀬戸・美濃産染付あるいは在地系磁器で、2は小腕、3は小皿、4は型造り角皿、5は在地系陶器と思われる蓋である。このほかにも近世陶磁器片がある。

イ) I・II・III層部分

SK1174 (図版213)

瀬戸・美濃本業焼鉄釉碗(1)、灰釉碗、瀬戸・美濃染付皿がある。

SK1196 (図版213)

瀬戸・美濃本業焼長石釉碗(1)と灰釉小皿がある。1は高台脇にピン跡が残る。

SK1240 (図版213)

精選された胎土で、軟質焼成のロクロ整形土器皿(1)がある。

SK1241 (図版213)

非ロクロ成形土器皿(1)がある。

SK1244 (図版213)

1～3は非ロクロ成形土器皿、4は龍泉窯系青磁碗である。いずれも破片である。

SX08 (図版213)

1～4は非ロクロ成形の土器皿で、口径に大小がある。5は白磁碗で、V類に分類される。

SX22 (図版213)

瀬戸・美濃本業焼灰釉碗(1)、鉄釉碗、肥前系染付特大皿(2)、内耳鍋片がある。2は遺構外と接合した。

SB255 (図版213)

非ロクロ成形の土器皿(1)と瀬戸・美濃本業焼長石釉中皿がある。1は遺構外と接合している。長石釉皿はSD21と遺構が重複しているため混入の可能性がある。

ウ) I・整地土・II・III層部分

a II層上面

SK1188 (図版213)

内耳鍋大型破片(1)と、瀬戸・美濃本業焼長石釉中皿の小破片がある。1は遺構外出土の破片と接合した。

SD32 (図版214)

遺構外と接合した瀬戸・美濃本業焼大鉢(1)がある。

b 整地土下面

SK2013 (図版213)

完形のロクロ成形土器皿(1～6)がある。形態は立ち上がり部分が強くロクロナデされ、見込みが盛り上がる。底面には糸切り痕が残り、雑ではあるが周囲、あるいは縁辺をヘラケズリで仕上げている。口縁部にススが付着するものが多い。

SK2007 (図版213)

1はロクロ成形土器皿であるが、見込みは盛り上がりせず、ヘラケズリもされない。

SK2014 (図版213)

瀬戸・美濃本業焼灰釉碗(1)がある。SX2020・2021例と比較すると、器高が小さい。

SX2023 (図版214)

多量の近世陶磁器が出土している。碗は、1・2が瀬戸・美濃本業焼で、1が天目茶碗、2が呉須による加飾のある灰釉碗である。3～5が肥前系陶器の碗、6～8は肥前系染付碗である。このほかにも灰釉碗、染付碗がある。9は肥前系陶器の蕎麦猪口である。10～20が皿である。10～12が灯明皿に使用したと思われる土器皿である。13～17が瀬戸・美濃本業焼で、13は灰釉型打ち皿、14は長石釉丸皿、15は長石釉輪禿皿、17は錆釉輪禿皿がある。18・19は肥前系染付皿、鉢に近い20がある。21は銅緑釉を流し掛けしている鉢、22は灰釉捏鉢、23は外体下半から底部にかけて錆釉を掛け内部から口縁外部に灰釉を掛けた鉢、24は灰釉鉢である。鉢はいずれも瀬戸・美濃本業焼である。25は瀬戸・美濃系の播鉢である。このほかホウロク、内耳鍋、土製の筒状のものの破片がある。

これらは下部に存在するSX2020・2021出土の焼物と接合する例が多い。

SX2020・2021 (図版214・215)

多量の近世陶磁器が出土している。1～7は瀬戸・美濃本業焼灰釉碗、8は「木下弥」の刻印がある肥前系陶器碗、9～11は肥前系染付碗である。その他、瀬戸・美濃本業焼の灰釉碗16片、鉄釉碗2片、上絵

付け碗1片、肥前系陶器碗1片、肥前系の染付碗6片がある。12は瀬戸・美濃本業焼長石釉中皿、13～15は肥前系染付皿である。この他、瀬戸・美濃本業焼の輪禿中皿がある。16～18は瀬戸・美濃本業焼灰釉鉢、20は同じく鉄釉鉢である。19は肥前系の染付鉢である。21～25はいずれも錆釉が掛かった播鉢でありこのほか5片ある。25は瀬戸・美濃本業焼と思われる灰釉油徳利、26は肥前系の染付徳利である。27はホウロクである。

これらはSX2023や整地土出土の焼物と接合する例が多い。

SK2005 (図版215)

1・2は瀬戸・美濃本業焼の拳骨茶碗、3は同じく灰釉皿、4は輪禿皿であり、このほか灰釉碗、錆釉の掛かった灯明皿がある。5は播鉢で他に破片が3片ある。6は肥前系の赤絵の染付油壺、7は土器の火鉢、8は瀬戸・美濃本業焼の灰釉水滴である。

SE01 (図版215)

1は産地不明の灰釉輪禿皿である。このほか瀬戸・美濃本業焼の鉄釉碗3片、灰釉碗1片がある。

エ) I・I b・II・III層部分

a I b 上面

ST03 (図版213)

1が瀬戸・美濃本業焼あるいは大窯の灰釉の瓶類の口縁、2が紫色の錆釉が掛かった播鉢の口縁である。

SD02 (図版213)

1は瀬戸・美濃大窯天目茶碗、2は内耳鍋である。図示したほか内耳鍋の破片が多数と、瀬戸・美濃本業焼の鉄釉碗、常滑甕が出土している。

SD21 (図版213)

1はロクロ整形土器皿であり、もう1点ある。2は瀬戸・美濃大窯天目茶碗、3は灰釉碗、4は灰釉丸皿、5は丸ノミによる加飾をもった灰釉丸皿である。6は外面に薄く透明感の無い灰釉を掛け、内面に錆釉と思われる釉を掛けた瀬戸・美濃産瓶である。このほか、龍泉窯系青磁碗、常滑甕、内耳鍋がある。このうちに内耳鍋は88片あるが、いずれも図示できない。

イ 遺構外出土

遺構外からの出土は、中世以降の焼物全体の9割を占めている。ここでは層毎に焼物について説明していく。第3章で述べたように、基本層序の各層は自然堆積と考えられないが、時間的に一定の傾向が認められる。そのため層毎に記す。

ア) II層 (図版216, 217)

最も多いのは内耳鍋、次いで土器皿である。しかし、内耳鍋は小破片のため図示することはできない。陶磁器類は捏鉢を含めて、14世紀までのものが多く、それ以降は非常に少なく小破片である。

1～9は土器皿で、非ロクロ(1～7)とロクロ整形(8・9)がある。10～12は山茶碗である。13はその小皿である。14・15も無釉陶であるが、産地や器種は不明である。ともに底部に糸切り痕を残す。16は小天目茶碗で釉は剥落している。17～19は龍泉窯系青磁碗である。20～27は東海系無釉陶の捏鉢である。その

うち、21は胎土が粗くその他は緻密な灰白色である。28は須恵器質の播鉢であり、口縁および内面はロクロ整形で、外面はナデのままである。29・31・32は東海系無釉陶の壺である。29は三筋壺、31は体部に線刻で模様が描かれており、32は渥美産と思われる底部である。30は常滑産、33は中津川産とおもわれる無釉陶の甕である。34は輸入陶磁器の梅瓶で、青灰色の胎土に化粧掛けをし、線刻で牡丹と思われる模様を彫り、牡丹の中は緑釉、その他には鉄釉をハケ塗りしている（巻頭図版5）。35・36は瀬戸・美濃本業焼の長石釉皿で、36は鉄釉で草花文を描いている。

イ) II b 層 (図版217)

分布範囲は狭く量は少ない。最も多いのは内耳鍋であるが、破片のため図示できない。

1・2はロクロ整形の土器皿である。1は細砂粒を多く含み灰白色で、コテを使って内面を再調整しているようである。2は酸化鉄を含む明褐色の胎土であり、見込みに一方向のナデがみられる。3は古瀬戸縁釉小皿、4は同じく大窯製品の丸皿、5は古瀬戸おろし皿、6も同じく鉄釉の花皿、7は瀬戸・美濃本業焼の鉢である。

ウ) I 層 (図版218~223)

中世以降の焼物が出土している。特に近世の陶磁器類は多量である。

1~30は土器皿で、非ロクロ成形(1~9)とロクロ整形(10~30)がある。31~42は山茶碗である。このうち36~40は胎土が粗く、他は灰白色である。このうち37は渥美産である。

43~48は古瀬戸平碗で、45のみ付け高台で、他は削り出し高台である。49~57は古瀬戸天目茶碗である。58~61が同安窯系の青磁碗、62~70が龍泉窯系の青磁碗、71が口縁に雷文を施す青磁碗、72はやや厚い濁った釉が高台端部まで掛かる青磁碗である。73・74は白磁碗で、73は口禿の碗である。75は青磁の盤である。

76~85は古瀬戸縁釉小皿、折縁小皿である。86~89が同じく腰折れの皿である。90~92は輸入陶磁器で、90が龍泉窯系の青磁小皿、91・92は白磁皿である。なお、92の外底面に「○」の墨書がある。93~99が古瀬戸おろし皿、100~104は東海系の捏鉢である。105~114は古瀬戸系の鉢類である。このうち、105・112が直縁で、他は折縁である。116~118が常滑壺、119が古瀬戸瓶子である。120が渥美甕(?)、121が常滑甕、122が中津川甕である。123は青磁香炉、124~126は青白磁の合子で、124が壺型合子の蓋、125・126が印籠型合子の身である。127・128は東海産の鉢と思われる、無釉である。129は古瀬戸の水滴、130は青白磁の小型水注の把手である。

131~158は瀬戸・美濃大窯製品である。131~136は丸碗、133は外面に線刻で文様が付けられている。137~141は天目茶碗である。142~153は皿類で、142~144が丸皿、147~149が内禿皿、150が鉄釉稜皿、151が内面に丸ノミで文様を彫った皿、153はヒダ皿である。これらのうち、142には漆による補修痕が残る。154~156が播鉢、157・158が香炉である。159~173は内耳鍋である。

近世の焼物の量は多い。174~199は瀬戸・美濃本業焼の碗である。174・175が灰釉碗、176が上絵付碗、177は鉄絵のある灰釉筒茶碗、178が鉄絵灰釉丸碗、179は瀬戸・美濃以外の可能性もあるが鉄絵灰釉碗である。180~186は鉄釉碗で、180・181は外面に沈線が走る。182~186がいわゆる拳骨茶碗、187が鎧手茶碗である。188~196は天目茶碗で、192・196は灰釉を飛ばしており、196は段天目である。197・198は錆釉に灰釉を飛ばした碗で、体部外面に巾広の沈線を持つ。199は呉須絵の碗である。200~207が肥前系染付碗である。208・209は瀬戸・美濃の染付碗で、209は紙型刷りによる。210~220は瀬戸・美濃本業焼の小碗で、210~215は灰釉、216~220は鉄釉が掛かる。なお、213は口縁部に呉須が掛けられ、219・220は底部に刻印がある。221は瀬戸・美濃産と思われる染付小碗である。

222~249・251~256は瀬戸・美濃産本業焼の皿である。222~228は長石釉丸皿、229~237が鉄絵の長石釉丸皿である。238~249は輪禿皿で、238・239・248が灰釉、240~245が鉄釉、246・247・249が長石釉を

掛けている。252・253は瀬戸・美濃産以外の可能性も考えられ、252は灰釉、253は鉄釉が掛けられる。251は長石釉の向付であり、254～256は灯明皿である。250は肥前系陶器瑠璃釉の輪禿皿である。

257～259は瀬戸・美濃産の蓋類であり、対応する器種が不明である。260は染付の蓋物の身、262は瀬戸・美濃本業焼の呉須絵の仏飯具である。

263～277は瀬戸・美濃本業焼の鉢類である。263～275は盛鉢で、266は片口が付くものと思われる。なお、270は植木鉢の可能性もある。272～276は大型で、捏鉢と思われる。278～287は挿鉢で、口縁部の形態は様々である。285・286の底部はロクロヘラケズリがされるが、糸切り痕が残る。これらの挿鉢は瀬戸・美濃本業焼の可能性もあるが断定はできない。

288は甕、289は肥前系染付の花瓶、290は瀬戸・美濃産の徳利、291・292は土瓶である。293は瀬戸・美濃産と考えられるが、器種は不明である。249・295は瀬戸・美濃本業焼の灰釉が掛けられた箱型の水滴である。

296～298・301は素焼の火鉢である。類例が少なく、中世まで上る可能性もある。301以外は瓦質である。299は素焼の人形、300は陶器の人形であるが水滴の一部の可能性もある。

302～305は二次的加工でつくられた円盤である。もとは302・303が内耳鍋、304が天目茶碗、305が山茶碗である。いずれも、縁部を研磨している。

エ) 整地土 (図版224・225)

多数の近世の焼物が出土した。これらは、下面で検出した遺構出土の焼物と接合する例が多い。

1～4は土器皿である。5～22は瀬戸・美濃本業焼もしくは、在地系陶器の可能性もある。5～14は灰釉碗で、図示以外にも破片があり量的に最も多い。15は上絵付碗、16は鉄釉に灰釉を飛ばした碗である。17・18は鉄釉碗、19は錆釉に灰釉を飛ばした碗で体部に沈線による装飾がある。20～22は天目茶碗で、20は灰釉を飛ばしている。23は肥前系の染付碗、24は肥前系の陶器碗である。25～31は瀬戸・美濃本業焼の小碗である。このうち、25は灰釉、26は鉄釉を掛ける。27は灰釉に鉄釉を流し掛けしており、28～30が上絵付、31は口縁部に呉須を掛けている。32～34は肥前系の染付小碗で、32はいわゆるコンニャク判、33は細筆の割り描きダミ筆塗り、34は細筆で直接描いている。

35～39は瀬戸・美濃本業焼の仏飯具で、35は鉄釉を掛け、36～39は灰釉を掛ける。

40～46は瀬戸・美濃本業焼の皿である。このうち、40・41が長石釉丸皿、42は長石釉で鉄絵のある皿、43・44は鉄釉の輪禿皿、45・46は灰・鉄釉の掛け分け皿である。47・48は肥前系の染付皿である。

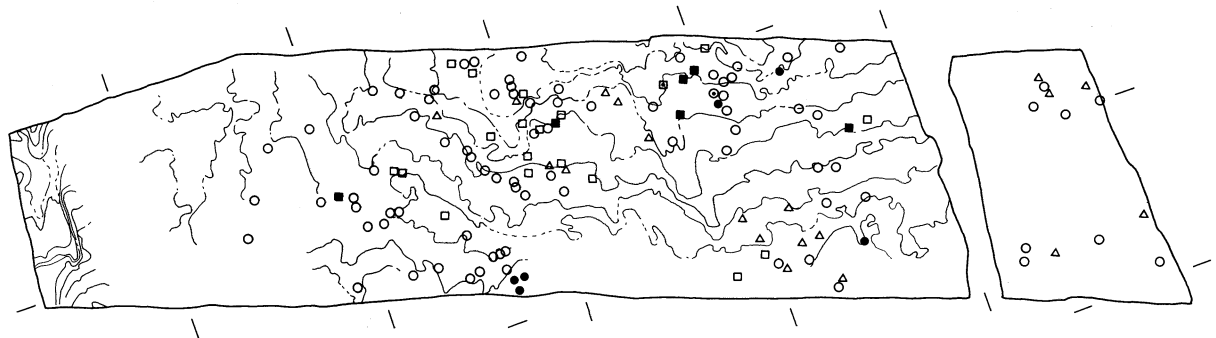
49・50は瀬戸・美濃本業焼の汁次で、49には紙型刷りの鉄絵がある。51は肥前系の染付の蓋物の身である。52・53は瀬戸・美濃本業焼のビンダライで、いずれも鉄絵が描かれる。

55・56は瀬戸・美濃本業焼の盛鉢である。55は灰釉に緑釉を流し掛けしており、56は呉須絵がみられる。57は唐津産の盛鉢で、赤紫色の胎土に白色の化粧土を刷毛で押し当てた文様がある。58～60は瀬戸・美濃本業焼の片口、61は器種・産地とも不明である。

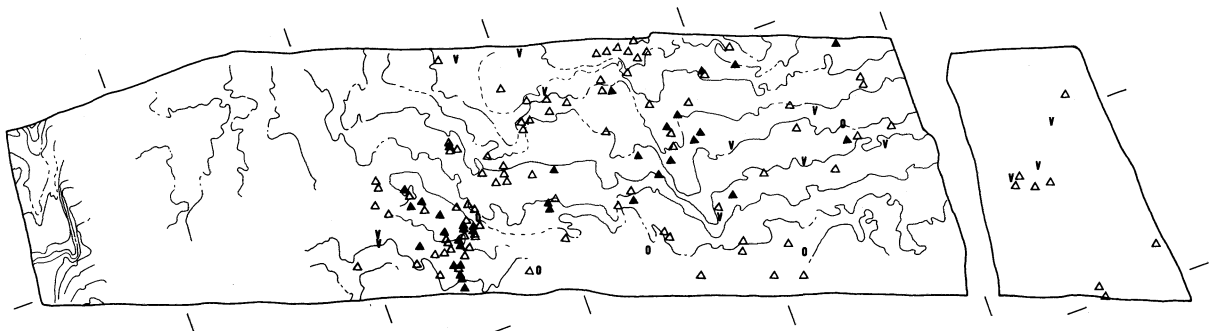
62～67は挿鉢で、65が瀬戸・美濃本業焼である以外は、産地は明確でない。66は体部外面と口縁を二次的に研磨している。

68・69はハウロクで、68は口縁部を丸く納めており類例は少ない。

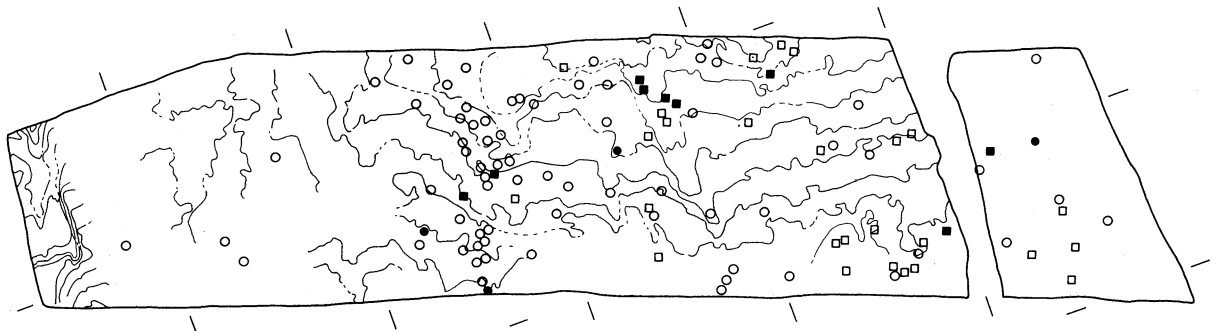
(2) 遺構外出土焼物の分布状況



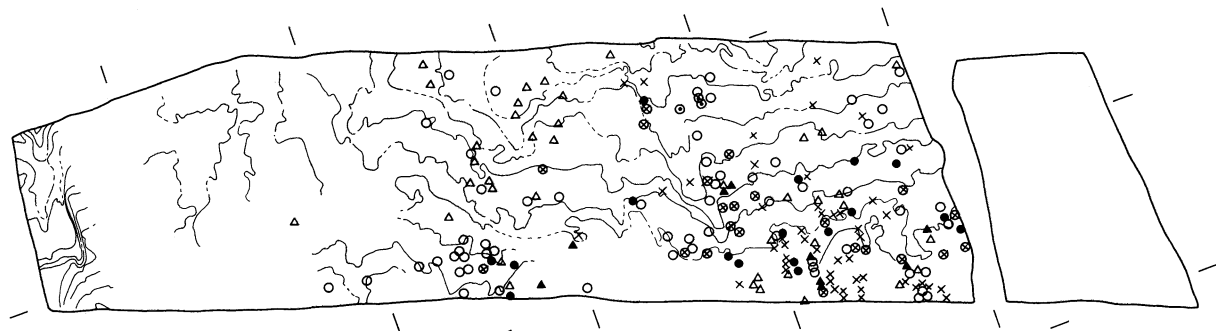
輸入陶磁器 △ 同安窯系 龍泉窯系 ○ I層 ● Ib層 ● II層 雷文 □ I層 ■ Ib層 ■ II層



東海系捏鉢・山茶碗 捏鉢 △ I層 ▲ II層 山茶碗 ▼ I層 ○ II層

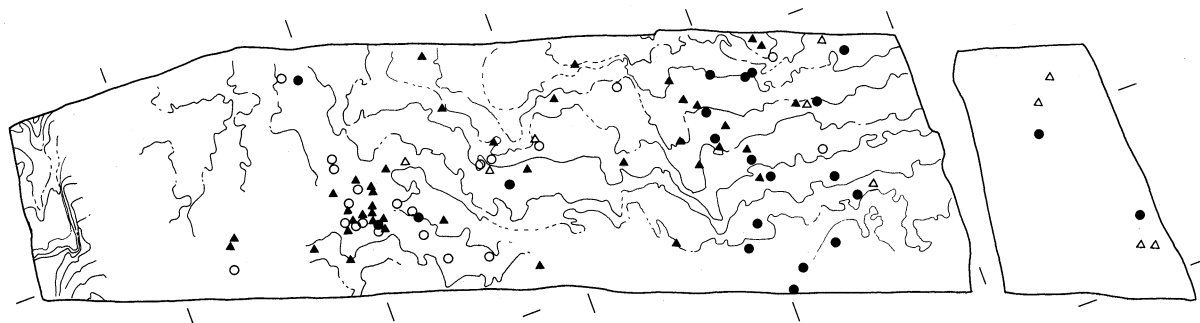


常滑・中津川・渥美 壺 □ I層 ■ II層 甕 ○ I層 ● II層



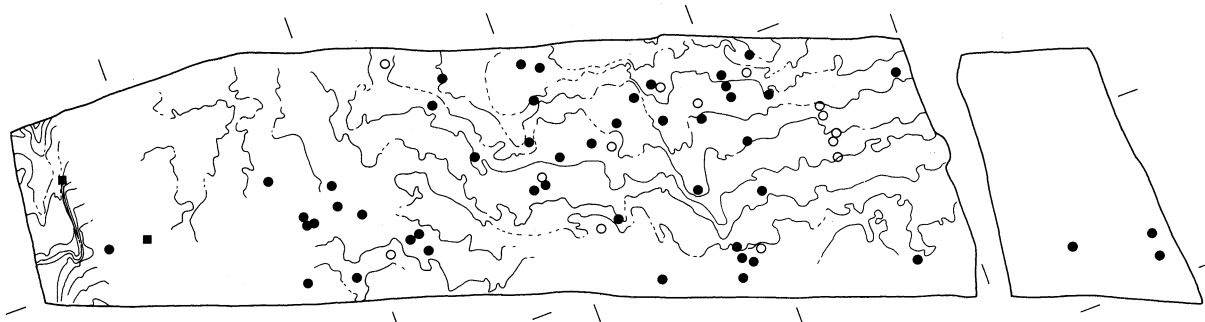
土器皿 ロクロ調整 ○ I層 ● Ib層 ● II層 × 不明 非ロクロ △ I層 ▲ II層

第299図 中・近世焼物出土分布 1



古瀬戸 1

● 天目茶碗 ○ 平碗 ▲ 小皿 △ おろし皿



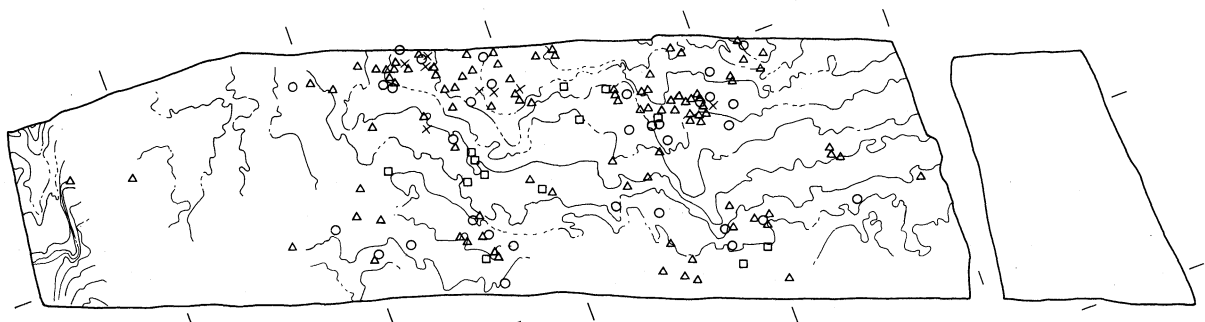
古瀬戸 2

● 鉢 ○ 瓶類 ■ 挿鉢



内耳土器

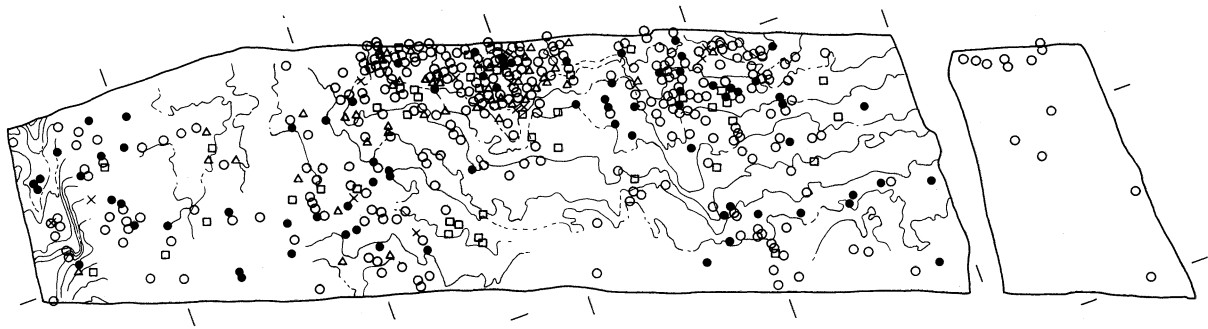
● I層 ▲ Ib層 ○ II層



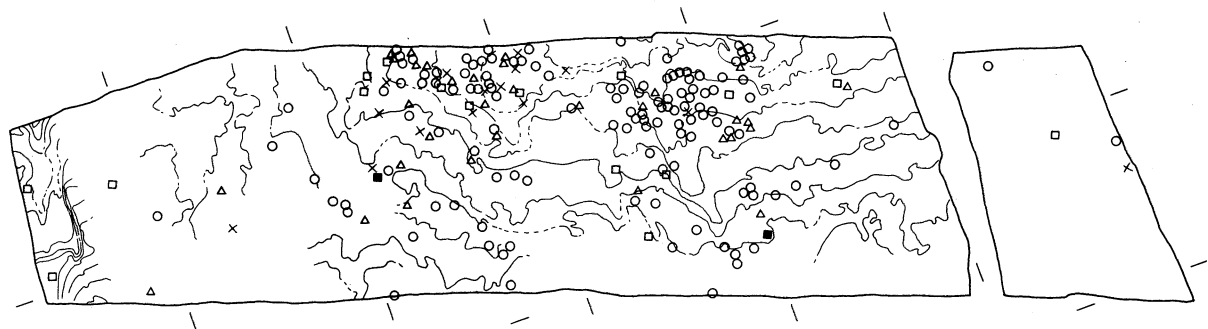
大窯製品

○ 天目茶碗・丸碗 ▲ 皿 □ 挿鉢 × その他

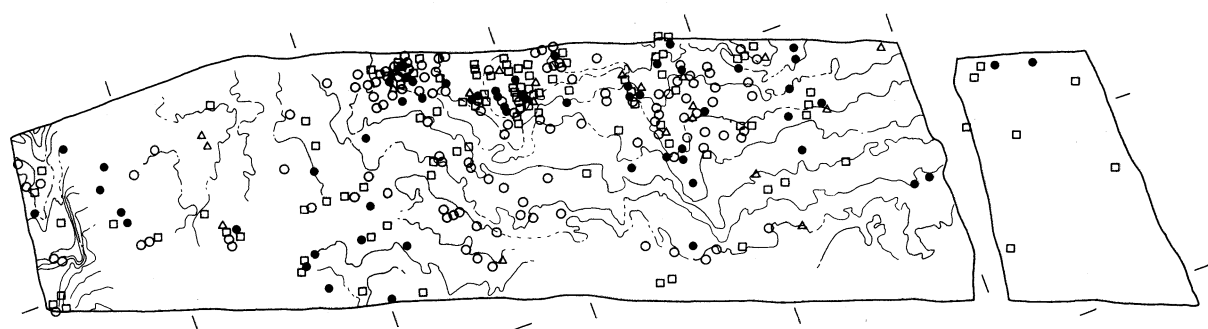
第300図 中・近世焼物出土分布 2



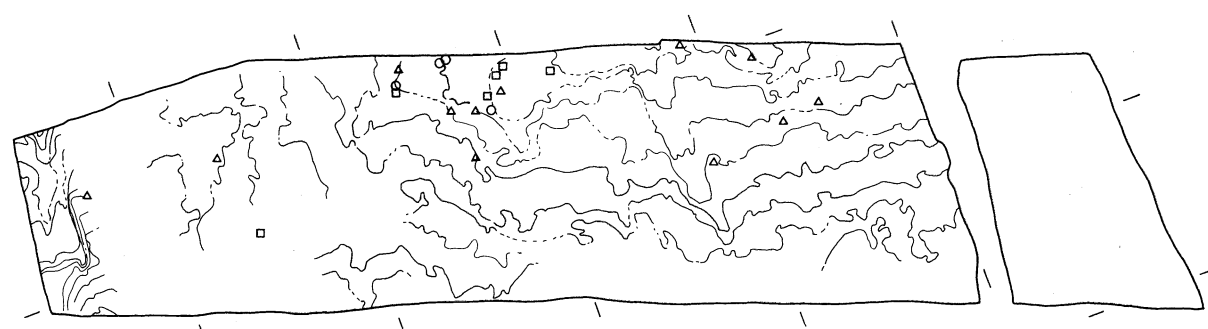
瀬戸・美濃本業焼 1 ● 鉄釉碗 ○ 灰釉碗 × 錆釉碗 ▲ 上絵付碗 □ 天目茶碗



瀬戸・美濃本業焼 2 ○ 丸皿 ▲ 輪杢皿 他の皿 □ I層 ■ II層 盛鉢 × I層

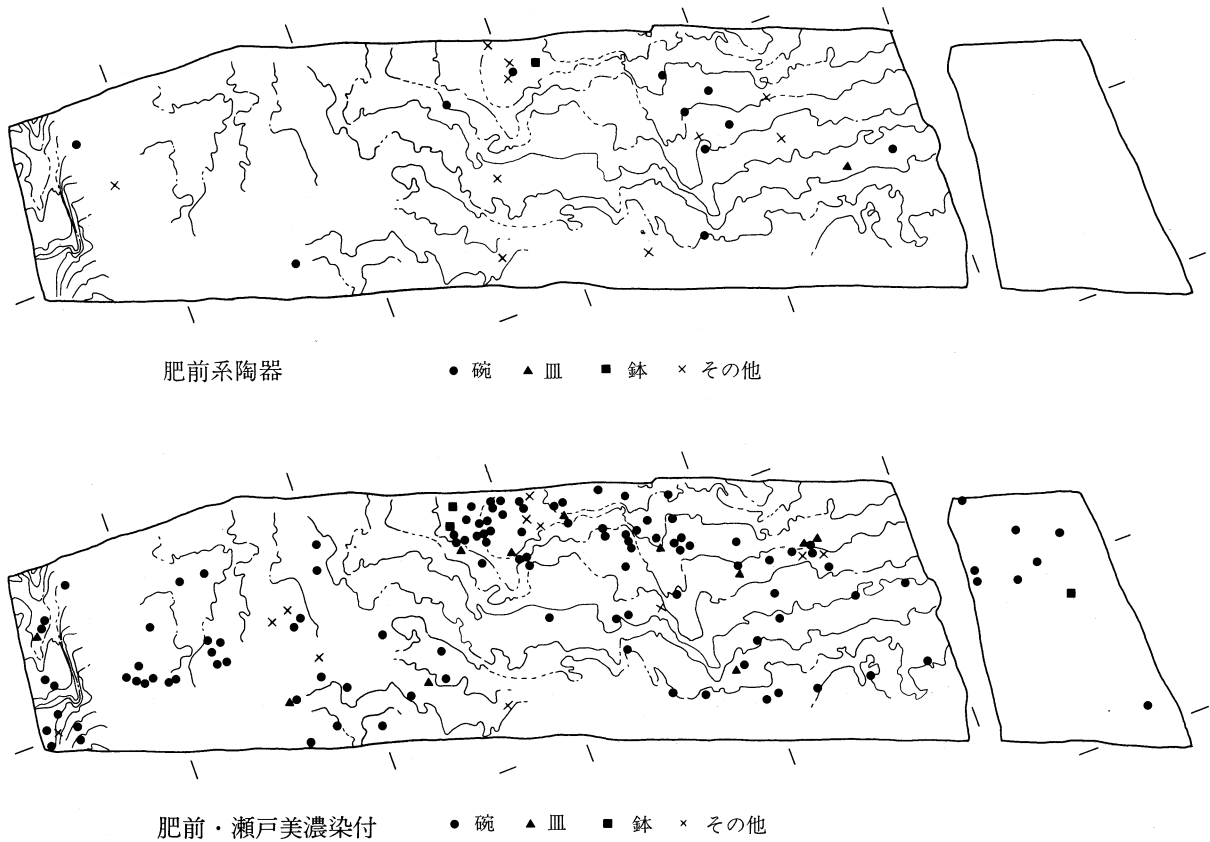


瀬戸・美濃本業焼 3 ○ 播鉢 □ 壺・徳利・花瓶他 ▲ 調理用鉢 ● その他



近世土器 ▲ 火鉢 ○ 皿 □ ホウロク × その他

第301図 中・近世焼物出土分布 3



第302図 中・近世焼物出土分布 4

時期別に遺物の分布をみると、集中する部分がいくつかみられる。時期別の根拠は、主に陶器と磁器の年代による。

まず、中世前半とされる東海諸窯の陶器・輸入陶磁器は、調査範囲内の中央から東部と南部にかけて集中する(第299図)。その中でも、同安窯系の青磁や常滑の壺・甕類はR地区を中心に、東海系の捏鉢や常滑の甕はM地区東部を中心に分布する。なお、非ロクロ成形土器皿と軟質のロクロ整形土器皿もM地区東部を中心に分布する(第299図)。接合関係は、R地区にはほとんどみられないのに対して、M地区東部では近接距離で見られる。

次に中世後半では、古瀬戸の碗・皿・鉢を中心にM地区西部に分布する。特にⅢ層の砂礫が高くなり、土坑群が集中する部分に多い。接合は近接距離で見られる。また、口縁部が外反する内耳鍋の分布もこの部分に集中する(第300図)。

中世末から近世前半は、瀬戸・美濃大窯製品がH地区・O地区・N地区西部を中心に分布する(第300図)。また接合する例も多くみられる。なお、口縁が直立するロクロ整形土器皿も同様な分布をしている(第299図)。

近世中期から末期にかけては、出土数が多く、また広範囲にわたって分布するが、濃密なのは整地土と建物址群の存在する部分である(第300~302図)。N地区東部からO地区西部がそれに次ぐ。

この限定された場所に集中するということは、そこが生活用具を廃棄する場所であり、隣接して生活の場を持っていたと想定できる。以上のように分布の意味を考えると、その集中範囲の動きは生活の場が動いていることを示している。

2 石製品 (図版225・226)

石臼、硯、砥石、碁石などがある。なお、砥石については、第5章第2節の鍛冶関係資料の中でふれている

石臼には、茶臼(SX21)と穀物を製粉する石臼(SX1221・1、1~21)がある。前者は上の部分のみである。後者は遺構から出土は1点のみで、遺構外の出土がほとんどである。多くは安山岩製で、播り目は6分割と思われる。しかしいずれも遺存状態は悪く、摩耗が激しかったり、面が偏って減っている。使用に耐えきれなくなり、廃棄されたと思われる。割れ方からみると、4分割を基本としており規則性が感じられ、石臼の廃棄に際して意図的に割る行為があった可能性もある。

この他、22は同じ安山岩質の播鉢状の製品である。角のとられた直方体に、やや深めに円形の凹みが造られている。また、上縁に注ぎ口状の刻みがあり、凹みの内面は磨かれている。内面の凹みが小さいため、摺りつぶす道具とは考えられず、細かく叩き潰すための容器と考えられる。民俗例に、いろりの脇に火付け用の炭を擦り潰す容器が置かれることがあり、その可能性もある。

硯は、図示したのは4点(SX2013・1、I・1~3)であるが、合計で5片出土している。いずれも石質は、粘板岩である。

碁石は2点であり、いずれも黒石で遺構外よりの出土である。時期の特定はできない。

用途不明の石製品として、線刻が施されたものがある(I・4)。石質は粘板岩で、形態は長方形で平たく、周囲に硯のように縁が造りだされている。線刻は、金属製の利器を使い、向き会う弓と矢のようなものが描かれている。

第4節 小結

1 中世以降の焼物

第2節で述べたように様々な焼物が出土している。このことはそれらが本遺跡で消費されたことを物語っている。また、特徴としては、そのほとんどが在地産ではなく、県外から搬入される点をあげることができる。さらに、器種も様々なものがあり、時代毎にその構成は大きく異なっている。ここでは、時代をおって、搬入の状況と器種構成の変化について整理しておきたい。

最初に断わっておかなければならないが、第2節で述べたように、遺構外出土が大部分であるため、出土分布の重なりを同時存在の根拠とする。また、年代の根拠については生産地の研究による年代を当てる。なお、時期の区分は、3で述べる集落の変化の区分に沿っている。

(1) 12世紀後半～13世紀前半

R地区を中心に出土している。しかし、遺構としてはSX08があるのみで、遺物の量も少ない。

器種からみると、供膳具に碗・皿、調理具に捏鉢、貯蔵具に壺・甕が、このほかに合子がある。煮炊具はみられない。量的には壺が多い。

生産地別でみると、常滑や渥美などの貯蔵具が最も多い。輸入陶磁器（同安窯・龍泉窯系、ほか）には供膳具とわずかに貯蔵具がみられる。在地産は土器皿に限られる。このようにみると、供膳具のほとんどが輸入陶磁器、貯蔵具のほとんどが東海産という状況であったことがわかる。

古代末期に位置づけられたSB31段階の内容と比較すると、煮炊具の欠落、調理具の出現、貯蔵具の増加、在地生産品の減少、供膳具の器種や量の減少を、変化としてあげることができる。

(2) 13世紀後半～14世紀前半

器種的には変化はみられない。ただし、量と生産地に変化がみられる。供膳具は輸入陶磁器（青磁）がはいり、後半には東濃産の山茶碗がみられるようになる。皿は碗に比較して少なく、輸入陶磁器や在地産土器皿がある。調理具は増加し、中津川・瀬戸産がほとんどとなる。なお、捏鉢は破片が多く、破損率が非常に高かったことを示している。また調理具として、須恵器質の搦鉢、古瀬戸のおろし皿がある。貯蔵具は甕が常滑・中津川産、壺は古瀬戸の瓶子が入る。

このように量的な変化を伴って、生産地も変わってくる。

(3) 14世紀後半

量的に少ない。わずかに古瀬戸の平碗、天目茶碗がみられるのみで、東海産の無釉陶はみられない。生活の場として利用されなかったのが、量を減らした要因と思われる。

(4) 15世紀

M地区を中心に、土坑群と重なる部分からの出土が多い。

供膳具は古瀬戸が主体で、わずかな輸入陶磁器が加わる。碗（天目茶碗・平碗など）は引き続き多く、それに対し小皿類（緑釉小皿など）が、その量を急激に増加させ、碗の量を圧倒するようになる。在地産の土器皿の存在は不明である。

貯蔵具は古瀬戸系の瓶子がみられるが、常滑は確認できなかった。

調理具は捏鉢はなくなり、古瀬戸系の搦鉢がわずかにみられる。

煮炊具は、この段階で多量に内耳鍋がみられるようになる。小林秀夫の分類に従えば、口縁が外反することからA類にあたる（註1）。

以上のようにこの時期では、供膳具は古瀬戸を中心とする搬入品、煮炊具は在地産という焼物の状況が読みとれる。

(5) 16世紀～17世紀初頭

H・O・N地区に分布が集中する。生産地に大きな変化はなく、器種の面に変化がみられる。

供膳具には碗と皿がある。碗（天目茶碗・丸碗）は量的に減少し、すべて瀬戸・美濃産の大窯製品になる。皿は量的に増加し、大窯製品を主体としてわずかに輸入陶磁器や在地産土器皿がある。大窯製品は丸皿がほとんどで、ヒダ皿や内禿皿や稜皿は少ない。土器皿はロクロ整形のみである。

調理具としては、瀬戸・美濃大窯製品の搦鉢がある。

煮炊具には多量の内耳鍋がある。小林分類に従えば、A II・III類にあたるものが主体である（註2）。

貯蔵具についてははっきりしない。

(6) 17世紀中頃～18世紀前半

H地区を中心に分布する。なお、この中を大きく二時期に分けて説明する。

17世紀は瀬戸・美濃本業焼が主体で、肥前系陶磁器がその中で徳利・大皿の特殊品を中心に量を増していく。器種も前段階ときほど変わりが無い。供膳具には碗と皿がある。碗には天目茶碗と丸碗があり、量的には少ない。皿は長石釉を掛けたものや、鉄絵に長石釉を掛けたもの、輪禿皿があるが量を減じていく。また、櫛描き文様をいれ銅緑釉を流し掛けた盛鉢もみられる。調理具には搦鉢がある。煮炊具、貯蔵具ははっきりしない。

18世紀前半は、多くの器種があり産地も様々になる。供膳具をみると、碗・皿ともに法量がいくつもみられるようになり、産地は従来の瀬戸・美濃系に肥前系が加わり二つになる。全体量は少ないが、皿は肥前系の割合が増大する。鉢は引き続き瀬戸・美濃系が圧倒的であるが、珍しいところでは唐津がある。調理具では搦鉢があり、SK1190・SX2020～2023の出土品がこれに当たるものと思われる。ただし産地は不明である。煮炊具ではハウロクがある。貯蔵具については不明である。なお、油壺・ビンダライ・灯明皿など様々な器種がみられるようになる。

(7) 18世紀後半～19世紀前半

整地土の存在する部分一帯が、分布の中心になる。

供膳具は、瀬戸・美濃系の陶器が再び圧倒的になり、若干の在地系陶器が加わるようになる。器種としては、灰釉を掛け器高と口径がともに大きな碗が多くみられる。ただし整地土下面の遺構からも、いくつかの出土があり、時間的には若干溯る可能性も否定できない。また、鉢や仏飯具にも灰釉が掛けられる。これらの灰釉を掛ける一群は、同一産地のようであるが、瀬戸・美濃産と限定できず、技術系からみるとその系譜上のものと思われる。このほか、上絵付け碗・拳骨茶碗・錆釉碗・鉄釉碗などがあり、碗の絶対量も増大している。それに対して、皿は量を減少させている。このように瀬戸・美濃本業焼が量を増大させるのに対して、肥前系の陶器・染付は量を減少させる。

調理具は、かなりの量の瀬戸・美濃系の搦鉢・捏鉢・片口がある。

貯蔵具と煮炊具ははっきりしない。

これら以外に、灯明皿など様々な器種がある。

ここでは技術的にみて瀬戸・美濃本業焼としたが、産地は在地の可能性も否定できない。なお、これらの中に瀬戸・美濃系の染付、特に広東碗のような器形がみられないことから、19世紀もそれほど新しくならないと思われる。

以上12世紀後半から19世紀を通して、焼物の様相を器種と産地の両面からみてきた。これが、消費地としての松本平における一般的な状況か否かは判断ができない。今後報告書の刊行される長野線松本市分の

成果によって、本資料の評価が本格的にできるであろう。

2 中世以降の建物

第2節1では、柱穴、礎石、集石、竪穴ないしは掘り込み、焼土の有無に基づいた分類に従って、説明を加えた。そこで本項では、当該期の建物にみられる際立つ点に視点を置きながら、建物構造やその持つ機能に関する2・3の点につきふれておきたい。

(1) 柱穴や基礎からみて

直立する柱と、これに横架する桁や梁を骨格とした建物は、構造上相関的な平衡関係の維持によって支えられているはずである。柱穴や基礎地業からみると以下のような類型がみられる。

A……梁2間を基本とし、桁行方向に屋内空間を広げるもの。中央の梁柱が棟を支える構造となる(ST05・10~14・SB1213など)。

B……梁行2・3間分は側柱だけとし、梁行方向に屋内空間を広げるもの(ST01~03)。

C……桁行・梁行が2間以下で小型、単純な柱構造となるもの(ST16~18など)。

D……礎石ないしは石列の基礎をもつもの(ST2001~2004)。

(2) 付属施設や周辺の状況から

建物は、建築目的やそれに基づいた使用状況がつかめないと、性格のきめ出しはきわめて難しい。ここでは、付属施設や周辺にみられる遺構とのかかわりあいから、機能についてふれておく。

A……屋敷地内で関連し合う2棟並列の建物(ST11と13、ST12と14)

SD02・21区画内に並列してST11・13とST12・14が建てられている。ST12・14は建て直しによって、先行するST11・13の位置へ建てられるが、その際規模をやや広げる。ここで明らかな点は、2棟並列する建物が構造的には同じ姿で建て直されていることである。並列の一つST11(ST12)は柱数が多く、もう一つのST13(ST14)は、内部の柱数を少なくして空間を広くしている。火床や掘り込みなどを持たない点を勘案すると、ST11(ST12)は倉庫、ST13(ST14)は土間の広い納屋風の建物構造が想定できる。

B……火床・掘り込みを単独に、または両方を持つ建物(ST01~03・SB1213)

ST01は火床と浅い掘り込みをもち、ST03は火床と深い掘り込みをもち、ST02は火床、SB1213は浅い掘り込みをもち、なお、浅い掘り込みの床面は、堅く固められることが多い。火床をもつST01・02は住居、SB1213も構造的にはST01に類似することから住居、ST03は火床をもつ中央に深い掘り込みをもちことから住居以外の性格が考えられそうである。この中でも、ST01は東側に柵址が付属し、住居構造の1つの典型を示すものと考えられる。

C……井戸を伴ない、集石・列石基礎の建物(ST2001~2004・SE01・SK2013)

ほぼ半分ほどが用地外へ延びるため、全体構成をみることはできない。しかし、栗石の上に礎石を置いたと思われる母屋(ST2004)、石列基礎建物(ST2001~2003)2棟以上、竪井戸(SE01)、井戸に付属する遺構(SK2013)を配置するかなり大きな屋敷構えを窺わせるものである。なお、ここでは柱穴が見つからないが、この種の建物群を含む屋敷内建物すべてが礎石や石列基礎であった、とは言いきれない。

建物全体の配置に関連し、井戸と水場を南東端とし、また、石列基礎建物2棟が鍵の手をなして屋敷地内建物配置の南西端を画したのではないかと推定される。以上にみられるように、本例で明らかな点は、倉庫または納屋などの収納・作業空間や水場が、居住空間である母屋をとり囲む配置による屋敷構えになっていることである。

(3) 複数回建て直す小型建物 (ST16~18)

中・近世の建物址が集中するM地区南端に、その都度規模を多少変えながら、しかし、同じ場所へ建て

直しをした小型掘立柱建物がある。ここで注目されるのは、同じ場所を選ぶことである。小型であり、柱穴の掘り方は小さい。資材小屋であろうか。付近一帯にみられる建物その他の遺構との関連はつかまえていない。

(4) 近辺にみられる調査事例から

いくつか文献が残っている。松本市内の「嶋立組之内波多村屋付覚」(正保二年・1645年)では、2×1間～7×5間までの建物規模が、また、「御本陣並御家中様御宿明科村・塔ノ原村・潮村改帳」(正徳四年・1714年)では、梁行3間が一般的で最高4間、桁行3～11間3尺とある(註4)。梁行をほぼ一定にし、建物空間を広げるのに桁行方向へ延ばすのは、本遺跡例に類似する。

このほか諏訪郡富士見町砂原遺跡の発掘事例がある(註5)、比較はむずかしい。それは本遺跡の場合、屋敷構えの全体を窺い知るものではなく、特に建物群を関連的にとらえることができなかつたことによる。砂原遺跡例の示唆することに照らせば、本来住宅建物はそれぞれに与えられた機能を発揮し合うことにより、住宅機能を補完するものであることに留意し、関連し合う建物群としてのとらえと、その中における建物個々の性格分析が必要となろう。

3 中世以後の集落景観

12世紀中頃を最後として集落の主体となっていた、堅穴住居址は姿を消す。この居住形態の変化がおこった後を、ここでは扱うことにする。

12世紀後半以降、第3章で述べたように環境の変化が認められる。それは主に地下水の変動によるものであり、遺構と遺物の面から、12世紀後半から15世紀を上昇期、16世紀から現代までを下降期としてとらえることができる。そこで大きく上昇期と下降期に分けて考えていく。

地下水の変動について、最初にふれておきたい。第3章で述べたように、II層中とI b層上面には、厚く堅い土中金属集積層が形成される。これは、水田にみられるような下面に形成される集積層とは異なり、土中の水の影響により上面に形成された盤層と考えることができる。盤層の形成要因としては、地下水と隣接する河川の水のしみだしの二つが考えられる。今回の場合、河川については隣接して田川があるが、その水位から関連は考え難い。現在の地下水はIII層の礫のはるか下を流れている。近世をみても、SE01は5 m以上の深さがあり、当時もかなり深い部分を流れていたと考えられる。しかし河川の影響が考えられない以上、地下水の上昇があったと考えるしかない。その場合、丘中学校付近の桔梗ヶ原面の段丘崖から流れ出た地下水が、一度地表に出た後再び地下に潜って、III層上面を不透水層として流れた可能性が考えられる。この状態で、盤層が厚く形成された部分(H・N・O地区)は、地表直下がかなり湿った状態になっていたと考えられる。

(1) 上昇期

ア 12世紀後半から13世紀前半

堅穴住居址が消滅後、NR01が調査区中央を流れる。なお、NR01の上面には土中金属集積層がみられず、切っているSX08からは13世紀初頭と考えられる土器皿が出土しており、13世紀前半までは地下水の上昇はなかったことになる。この12世紀後半から13世紀前半は、遺構としてはSX08のみみられるだけで、他ははっきりしない。遺物は搬入品の陶磁器類を主体としており、その年代をみる限り、古代14期との時間的な断絶は認められない。その分布域はR地区を中心としており、古代14期の遺構および白磁の分布のやや南寄りとなる。しかし古代に含めた柱穴群がそれに重なり、それらが該期になる可能性も考えられる。このようにみると古代14期とした集落は、その構成する要素を変化させながら、南に動いた可能性がある。またその要因の一つとしては、NR01の形成も考えられる。

古代から連続した集落と考えられる。しかし、遺物分布の集中がみられ、その集中を特定の場所への投棄と考えれば、そのような規制を必要とする屋敷地の形成があったと考えられる。また古代14期には輸入陶磁器（白磁）の量から有力者の存在を考えたが、この時期も常滑の古相の壺や甕、輸入陶磁器を持つことより、その性格に変わりがないと考えられる。ただしその中心はさらに南寄り、調査区外にでる可能性が高い。

イ 13世紀後半から14世紀前半（第303図1）

この時期の遺物はII層内から出土し、II層を切り込むかたちで同時期の遺構が検出されていることから、13世紀後半から地下水が地表近くを流れていたと考えることができる。この時期の遺構および、遺物は、H・N・O地区に分布しない。このことは、その部分が生活の場所として適さなくなったことを示しており、地下水の上昇も大きな要因と考えられる。

遺構と遺物の分布は、M地区東部が中心になる。遺構としてはSK1244やSB255などで、建物址は検出できていない。ただ遺物では生活用具の焼物が一応すべて揃い、隣接する場所に生活域があった可能性は高い。また、この場所を投棄の為の空間とするならば、その中に大量の輸入陶磁器（青磁）がみられる。ただし、前段階とは場所を大きく変えており、系譜がつながるか否かは判断できない。

ウ 14世紀後半から15世紀前半

この時期も地下水は上昇していたと思われる。しかし、遺物や遺構はほとんどなく、今回の調査範囲が、居住域として利用されなくなったことを物語っている。とくに、14世紀までと15世紀後半以降ではその様相が大きく異なることから、転換期とも考えられる。

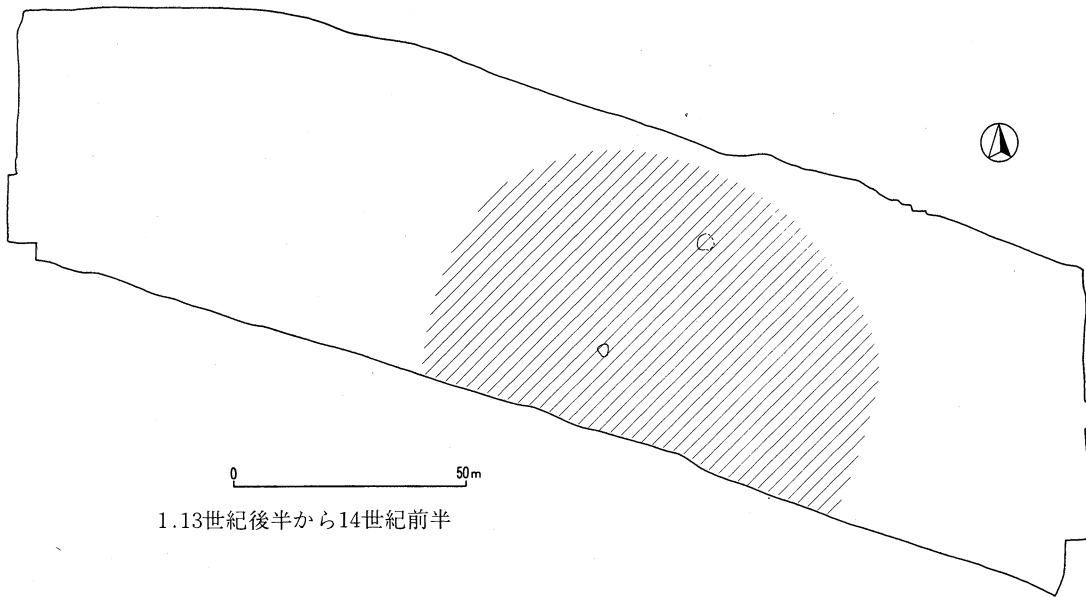
エ 15世紀後半（第303図2）

この時期の遺構と遺物の分布は、L地区東部からM地区西部の比較的III層の礫が高い場所に集中する。このあり方は、地下水の上昇により湿地化がみられるH・N・O地区を避けているようである。遺構をみると、集中する多数の土坑と、建物址の一部と考えられるSB1161・1148・1179・1200の浅い掘り方の遺構からなる。両者は重複しており、時間差をもつ可能性もある。注目したいのは土坑群の軸方向と分布で、これ以降にみられる遺構のそれと一致している。このことはこの段階で、以後の地割の原形ができたことを示している。またこのことは、次の段階でつくられるSD02とSD21による区画が、この場所を避けていることからいえる。遺物は調理具や貯蔵具が少量であることから、生活用具の焼物種類が完結していない。これらのことから、多数の土坑は、生活に直接結びつく遺構というより、火葬関係の遺構あるいは生産に関係する遺構と考えたい。また浅い掘り方の遺構はそれらに先行する可能性がある。

(2) 下降期

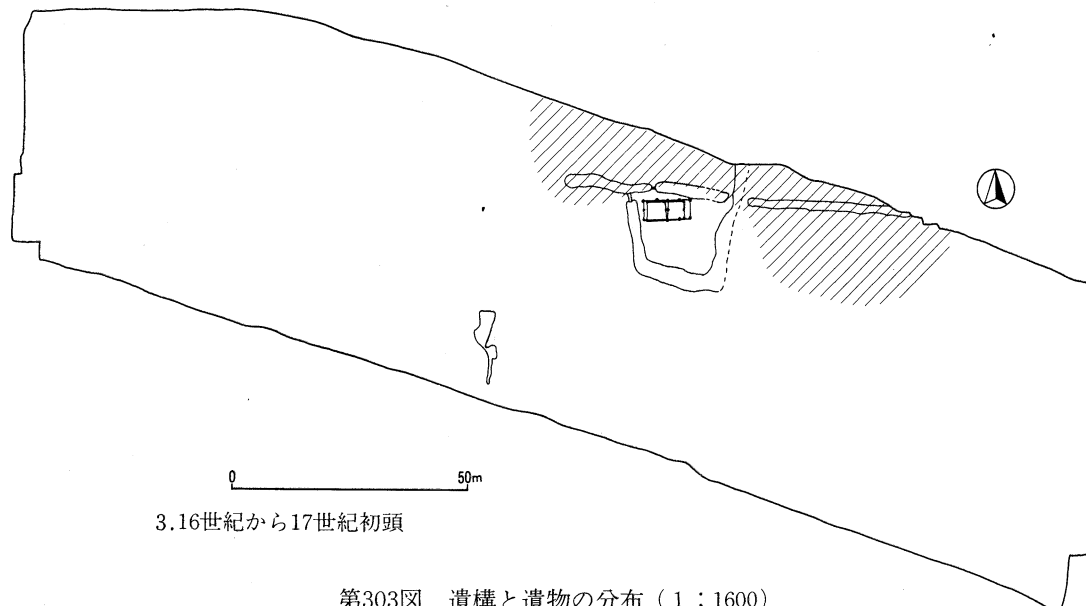
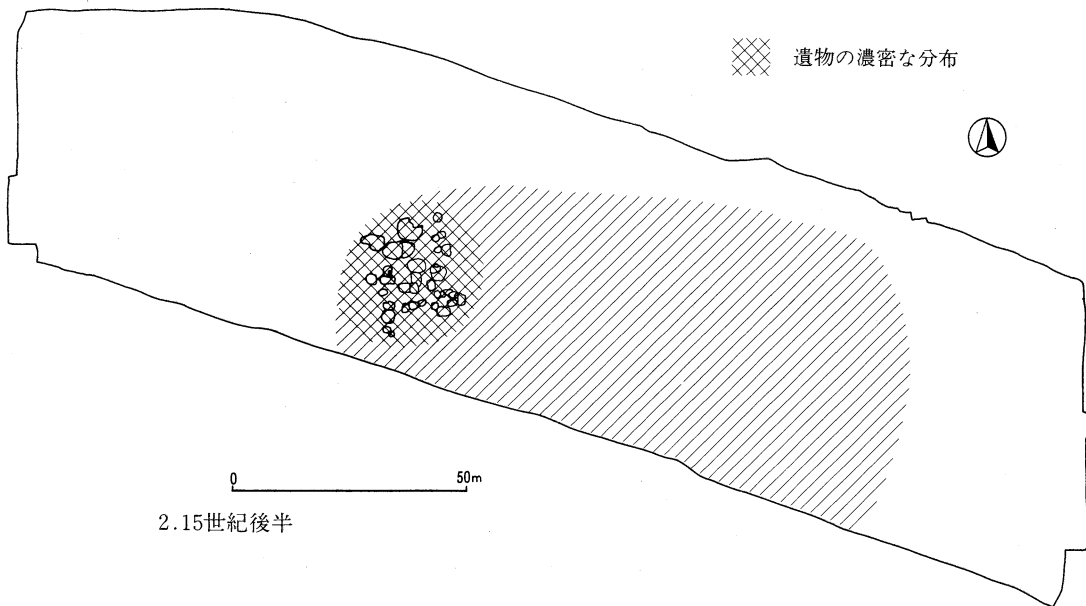
オ 16世紀から17世紀初頭（第303図3）

これまで湿地化していたH・N・O地区に、遺構がII層を切ってつくられる。このことから、地下水は下降したと考えられる。また遺物の分布もH・N地区を中心としており、住民の活動の中心部分が北へ移動した可能性を示す。最初にSD02とSD21による区画がつけられる。特にSD02は東へ向って大きく伸びており、水の管理という機能をもっていたとすれば、今まで放棄されていた東側部分の開発に入った可能性もある。その主体者は、やはりSD02とSD21の区画の中に居住していたと思われる。その区画の中には住居と倉庫が存在すると思われ、彼らはやや有力な土豪層であり、区画はその屋敷地と考えられる。しかし、遺物にはこれといって特徴がないことから、百姓の域は脱していないと思われる。ただこの一土豪だけによって、溝の掘削をはじめとする開発が行なわれたとは考えられず、ほかに労働力を得る必要があったと思われるが、それらの住居等は明確にできない。ただ遺物の分布等から、北側調査区域外に存在する可能性はある。

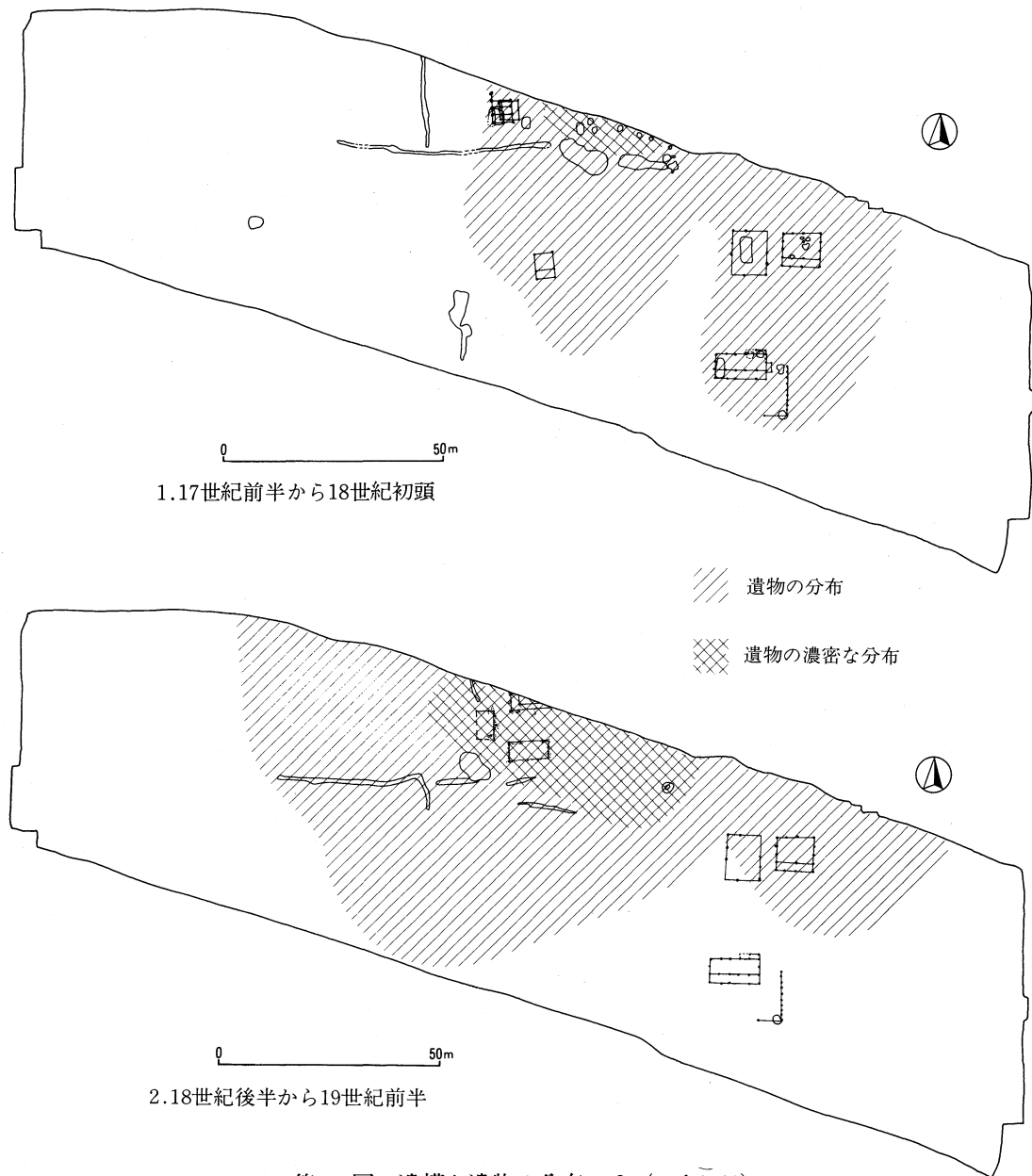


/// 遺物の分布

XXXX 遺物の濃密な分布



第303図 遺構と遺物の分布 (1 : 1600)



第304図 遺構と遺物の分布 2 (1:1600)

カ 17世紀前半から18世紀初頭 (第304図1)

土豪の屋敷地は継続して存在していたと考えられ、その北西に建物(ST05、SB1213)がつくられる。周囲の溝(SD15、SD32)も、整備され一体の地割が明確となる。この後半にSX2020~2023が構築され、屋敷地は放棄される。しかし、整地土やその下面の遺構には大量の遺物が投棄されている。これは隣接する部分で生活が営まれていたことを物語るものではないだろうか。遺物の内容をみると、本来多い瀬戸・美濃産の陶器のほかに、肥前系の陶磁器がみられる。また通常の生活では必要としない大型鉢類が多くみられ、さらに水滴などの特殊な遺物もみられ、接客・文書作成を行う者が存在した可能性を示している。なお、これの住居は、今回の調査区の北側である可能性が強い。また周囲にはいくつも建物(ST01、ST02、ST03)が並び、全体が居住域となる。有力者層の屋敷地を一般の百姓の家がとり囲むような景観であった可能性もある。

キ 18世紀から19世紀前半 (第304図2)

この段階で居住地の整備が行なわれる。その後、礎石をもつ建物が建てられる。その配置は母屋(ST2004)を中心に基壇状の基礎を有する蔵(ST2001)や納屋(ST2002・2003)が囲むようで、井戸(SE01)も造られる。

かなりの有力者の屋敷地と推定される。東側は明確ではないが、前段階からの建物があった可能性もあるが、建て直しなどがみられず、生産域になった可能性もある。

しかし、19世紀の中頃になり屋敷地もなくなり、一帯は畑地や水田になり現在の景観に近づくようになる。

以上のように変遷をみることができる。今回の調査区内が居住域として利用されるのは、古代(8～12世紀中頃)、中世前半(13～14世紀前半)、中世後半(15世紀後半)から近世(19世紀前半まで)である。

最後に、この3つの時期を比較して中世以降の様々な特徴を整理しておきたい。

一つは、土地に対する考え方である。古代においては居住域の移動がみられ流動的であるのに対して、中世後半以降は溝などつくることによって、他の目的と明確に区別をしている。このように土地に対する意識が大きく異なるが、中世前半がその移行段階と思える。

次に墓に対する考え方である。古代においては、明確な墓域は形成しない。しかし中世後半以降、火葬関係の遺構は建物に隣接して認められるが、墓は確認できない。このことから集落内の一画に墓をまとめてつくる状況が生まれていたと推定される。

最後に投棄に対する考え方である。それは不用になったものの処置に反映される。古代は堅穴住居址への一括投棄がみられるのに対して、中世以降は建物址に付属すると考えられる堅穴には投棄がみられない。消費された量の違いにも起因すると思われるが、中世以降は屋敷地内の一定の空間に捨てられた可能性がある。これは土地に対する意識の違いが大きな要因と思われる。

(註1) 小林秀夫の分類による(小林1982)。

(註2) 註1と同じ。

(註3) 今回調査した桁行3間以上の建物を柱間数と内部の柱の関係からみると、総柱の配置、内部の1本の柱が欠ける配置、梁3間分の1間がない配置、2間分の距離を1間分の柱で支える配置、内部に柱がない配置がみられる。SD02・21に囲まれた中には、機能が異った二つの建物が同時に建てられている。しかしいずれも総柱である。このことは機能とか規模に関わらず、柱の配置は同じにしなければならなかった可能性が強い。言い換えれば、柱の配置すなわち建物の構造は、その時代のもっていた建築技術の限界に規定されていたといえる。今日の調査では、遺物の分布よりST11～14の総柱が古く、内部の柱を省略するST10・01が新しくなる。このように次等に内部の柱を省略するという傾向が認められる。

(註4) 倉科明正の分析による(倉科1983)。

(註5) 正式な報告書は刊行されていないが、中世末から近世にかけての建物址群が調査されている(富士見町教育委員会1984)。

引用文献

- 倉科明正 1983 「第4章 調査のまとめ 土座敷址」『松本市新渉秋葉原遺跡』松本市教委
 小林秀夫 1982 「中世以降の遺物」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—』長野県教委
 富士見教育委員会 1984 「富士見町・砂原遺跡」『第2回諏訪地区遺跡調査研究発表会資料』諏訪考古学研究所

第7章 成果と課題

第1節 古代集落景観の変遷 ——遺構の変遷を中心として——

1 概略

時期区分は第5章第3節でふれてきた。土器一型式の存続期間は25～50年を想定しており、その期間内で建て替えが行われている場合が多い。吉田川西の集落が断絶することなく続いていたと仮定し、土器の分類で示された時間幅を住居址の切り合い関係などに換算すると、竪穴住居一軒の存続期間はほぼ20年である。土器による時期区分と切り合い関係を総合すると、少なくとも22期に区分が可能であり、竪穴住居の建て替えが頻繁に行われていたことを示している。

竪穴住居は個々の特徴に乏しく、どの家が次の段階でどこへ移ったかを知ることは非常に困難である。ここでは、カマドの設置された位置、主軸方位、住居の規模、平面プラン、占地場所の類似をもって段階区分の可能性を示しておきたい。

集落の範囲については、東西の2方向でその限界をほぼ確認することができた。しかし、南北方向は調査範囲外に大きく広がるようで、時期によっては集落の中心が調査範囲外にあると考えられる場合が認められる。そのため、集落の全貌については判然としない部分がある。

2 1期の集落(第305図1)

SB201が単独で存在する。これは単独による開発であるのか、それとも広い範囲に住居が散在していたのかは周辺の調査が進むまでは判然としない。

3 2期の集落(第305図2)

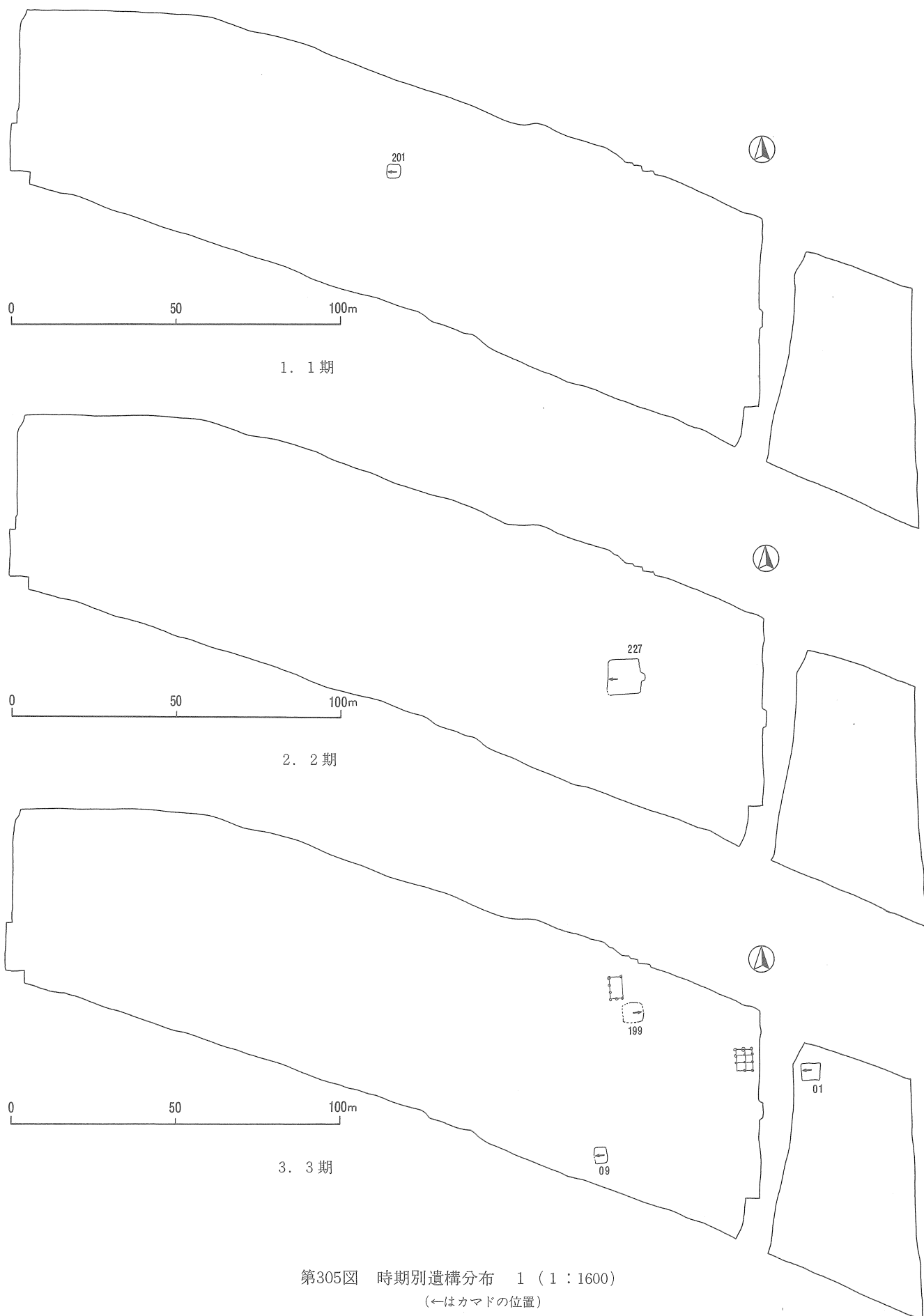
この時期も1軒のみである。しかし、SB227は県内の調査例としては有数の大型住居であり、この住居が単独で存在していたとは考えにくい。また、朱墨硯を出土することなどから当時としてはかなり有力な人物がいたと思われ、吉田川西の集落が徐々に力をつけてきた集落ではなく、有力な者を意図的に配置した集落であることが考えられる。

4 3期の集落(第305図3)

前時期までは竪穴住居が散在していたか、あるいは単独で存在していたと考えられるが、この時期には40～50m間隔に3軒の住居が存在するようになる。集落の住居密集傾向の始まりである。北よりのSB199と南よりのSB09の対置は、4期まで確実に集落の2グループとして継続される。

また、西カマドと東カマドの住居はこの時期から9期まで終始ほぼ同数存在するようになる。このカマドの位置が単なる占地場所によって規制されたものであるのか、あるいは、出自系統に係わっているのか、今後検討されるべき問題であろう。

伴出遺物のない掘立柱建物址の時期を確定することは難しいが、竪穴住居の配置関係から考えると、この時期1～2棟の掘立柱建物が存在していた可能性がある。



第305図 時期別遺構分布 1 (1:1600)
(←はカマドの位置)

5 4期の集落(第306図4)

急激に住居数が増加する時期である。しかし、SB85と175の重複にみられるように、少なくとも2時期には分離される。また、東西の2群が形成される時期である。

第1群は、前時期に南北に分かれて存在したSB199とSB09を踏襲しており、南北2グループに分かれる。前時期の2住居の主軸方位が類似した住居は、ほぼ同じ位置に集まって存在しており、そこでの変遷(SB175→85ほか)を遂げている。主軸方位の異なる住居はそれら伝統的なものの周辺に位置している。

第2群は、第1群の西側に新たに形成される。前時期の主軸方位に近いものが、やはり南北に1軒ずつ配置されている(SB250・145)。その他は、この時期から現れる主軸を持つものである。この第2群は一見環状の配置になっているが、基本は第1群と同様南北2グループによって成り立っている。両グループの中央にはカマドを持たず、段状の床面を持つSB222があり、両グループに係わった特殊な機能が想定される。

第1群は古くからの居住区を踏襲しており、主軸方位も前時期のものと類似したものが多い。比較的大型の住居も第1群に存在しており(SB174)、集落の中心はこちらにあったと考えられる。第2群は前時期と主軸方位を同じくする2軒が、第1群から分離して新たに形成され、発展したものと考えられよう。

この他、北カマドの住居が両群に存在するようになる。この後も各時期1～2軒ずつ見られるが、決してそれ以上にはならず、特別な立場にある可能性を持っている。

掘立柱建物は各群に1棟ずつか、あるいは各グループに1棟ずつ存在していた可能性がある。前時期の竪穴住居1棟に対して掘立柱建物1棟?から、各集団に1～2棟へと変わり、個別から集団への変化が認められる。

6 5期の集落(第306図2)

前時期に続き東と西の2群が認められるが、グループ構成には変化が認められる。調査区内には大型の住居が見あたらなくなり、集落の主体が調査区の南側に移った可能性もある。4期にみられた南北グループによる構成と言った状況が認めにくくなり、個々の住居が点在する形をとっている。

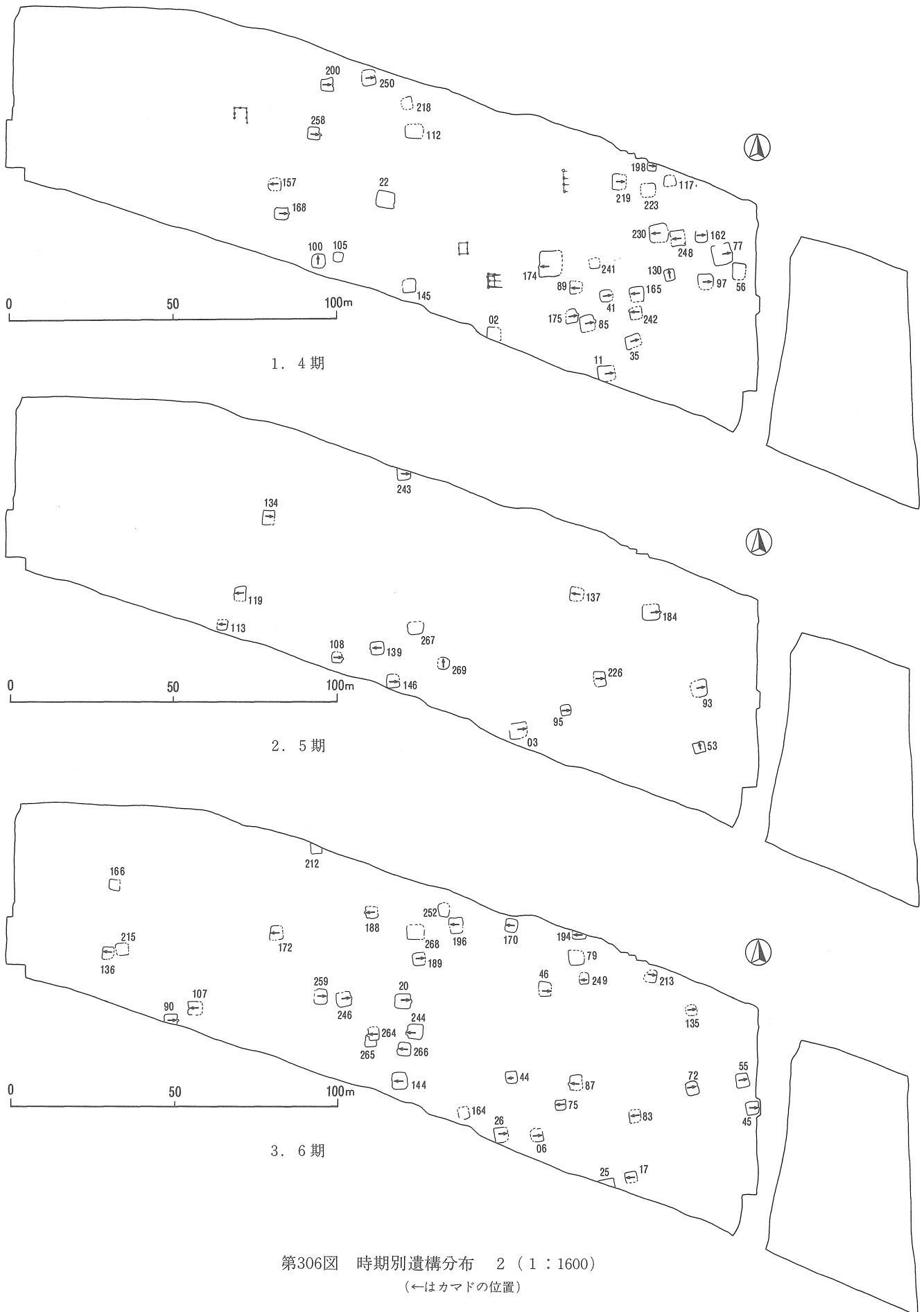
7 6期の集落(第306図3)

住居がグループを形成する時期が完全に終わり、規模の平均化した住居が、調査範囲内全体に点在するようになる。この時期も大型住居は認められないが、集落自体は調査区の南に広がる気配を見せており、そちらに存在しているのかも知れない。この時期の中心地域が南によると考えられる理由は、北と西側を区画する溝(SD3)がこの時期に掘られたと考えられるからである。

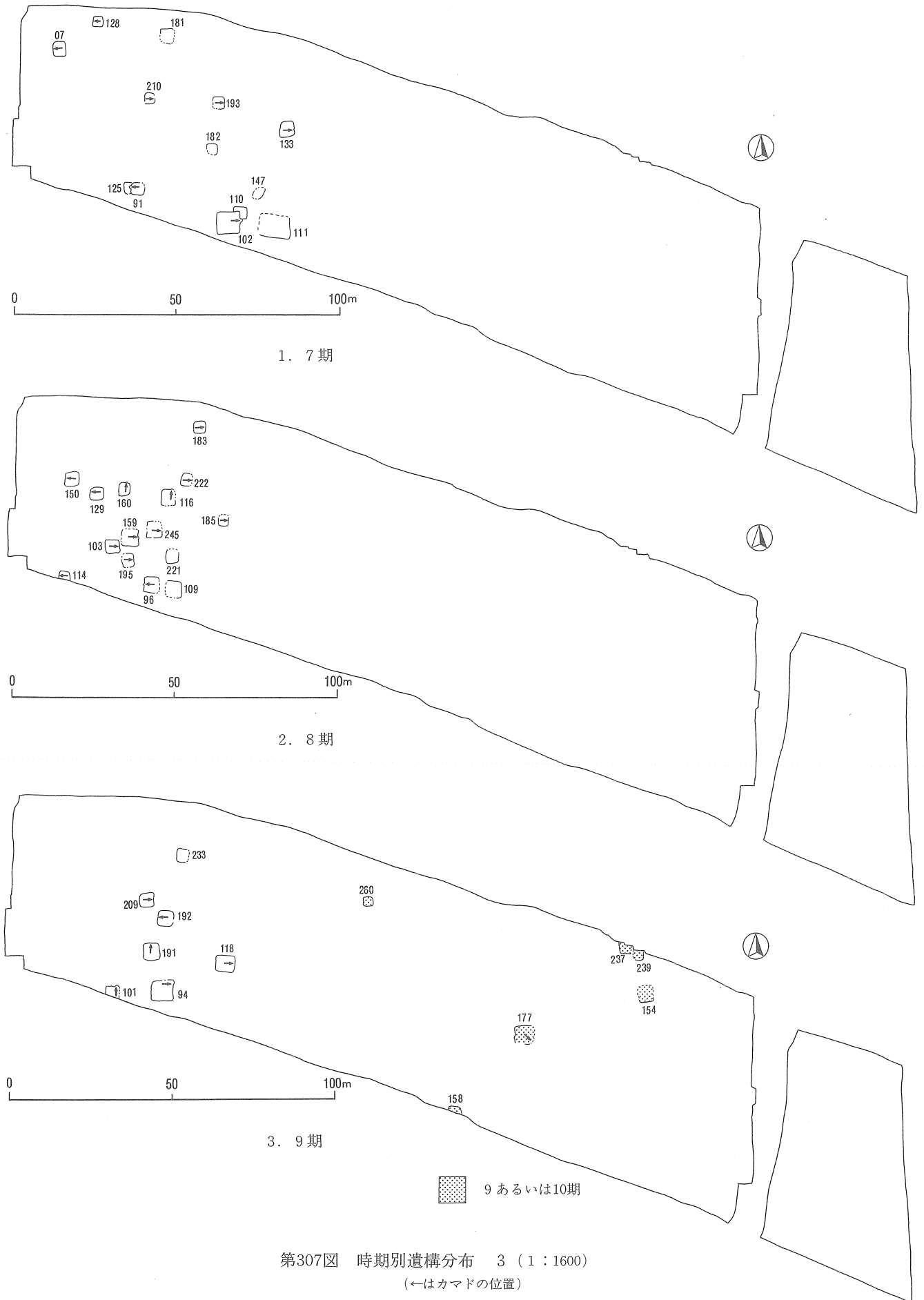
切り合い関係から少なくとも2時期には分離される。カマドの位置と主軸方位の類似したもの同士が近接しており、その類似性から建て替えと考えることができよう。

8 7期の集落(第307図1)

集落の中心が、調査区の西側に移ってくる。前時期の溝はまだ埋まりきっておらず、この時期の遺物の廃棄場所として使われているが、住居の配置については完全に溝を無視している。その配置は南東に大型住居を置き、そこから北西に向かって小型住居を列状に配す形をとっている。重複関係が認められ、また大型住居が2軒あることから、各々近接する住居同士に前後関係があると判断される。



第306図 時期別遺構分布 2 (1:1600)
 (←はカマドの位置)



第307図 時期別遺構分布 3 (1:1600)
(←はカマドの位置)

9 8期の集落（第307図2）

調査区西よりに住居がさらに集中し、居住区域がかなり限定されている。住居が密集した集落形態を示し、住居の建て替えも決められた範囲内で行われたようである。近接して、同一方向にカマドを有する住居があり、これらが建て替えによる前後関係を示しているものと考えられる。

10 9期の集落（第307図3）

8期と同様、調査区西側の狭い範囲に集中する。大型の住居 SB94が南寄りに存在し、その他の住居は南北方向に列をなして配置されていたと考えられる。その最北端に SK128が存在する。

2期に分かれるが、集落は調査区外の南側に延びると思われ、調査区内には少数の住居址しか存在していない。

11 10期の集落（第308図1）

再び調査区東側に住居が移動してくる。9期にいち早くコーナーカマドを採用した大型の SB94を踏襲する SB122と、少数の住居が、調査区西側にとどまっている。全体の配置は大きな弧を描くようにも見える。減少傾向にあった西カマドの住居がこの時期には1軒のみとなる。また、コーナーカマドと壁中央にカマドを持つものが存在するが、一概に前後関係にあるとは言えず、各々の出自系統で建て替えが行われていくものと考えられる。

12 11期の集落（第308図2）

調査区西側に残るグループと東側で定着したグループに分かれる。

13 12期の集落（第308図3）

SB32を含む溝で囲まれた地域が屋敷地になる可能性を持っている。屋敷地と考えられる場所はさらに溝によって2分される。西側地域では、SB32を中心に堅穴住居が存在し、祭祀関係の遺物、鍛冶関係の遺物をはじめ多量の遺物の投棄が認められる。これに対して、東側の部分は掘立柱建物が建つと思われる柱穴群が見ついている。居宅、倉庫群、馬舎などのいずれかが存在していたのであろう。

溝で囲まれた区域以外では、その南と西に住居が集中している。堅穴住居のまともりは、南東から北西に広がっており、溝による方形の地割りの延長を見いだすことはできない。ただ、SB32の西側の2本の溝によって区画された南北方向の空間は、さらに南へ行っても堅穴住居の途切れる地域となっており、方形区画に沿った道が存在していた可能性を示唆している。

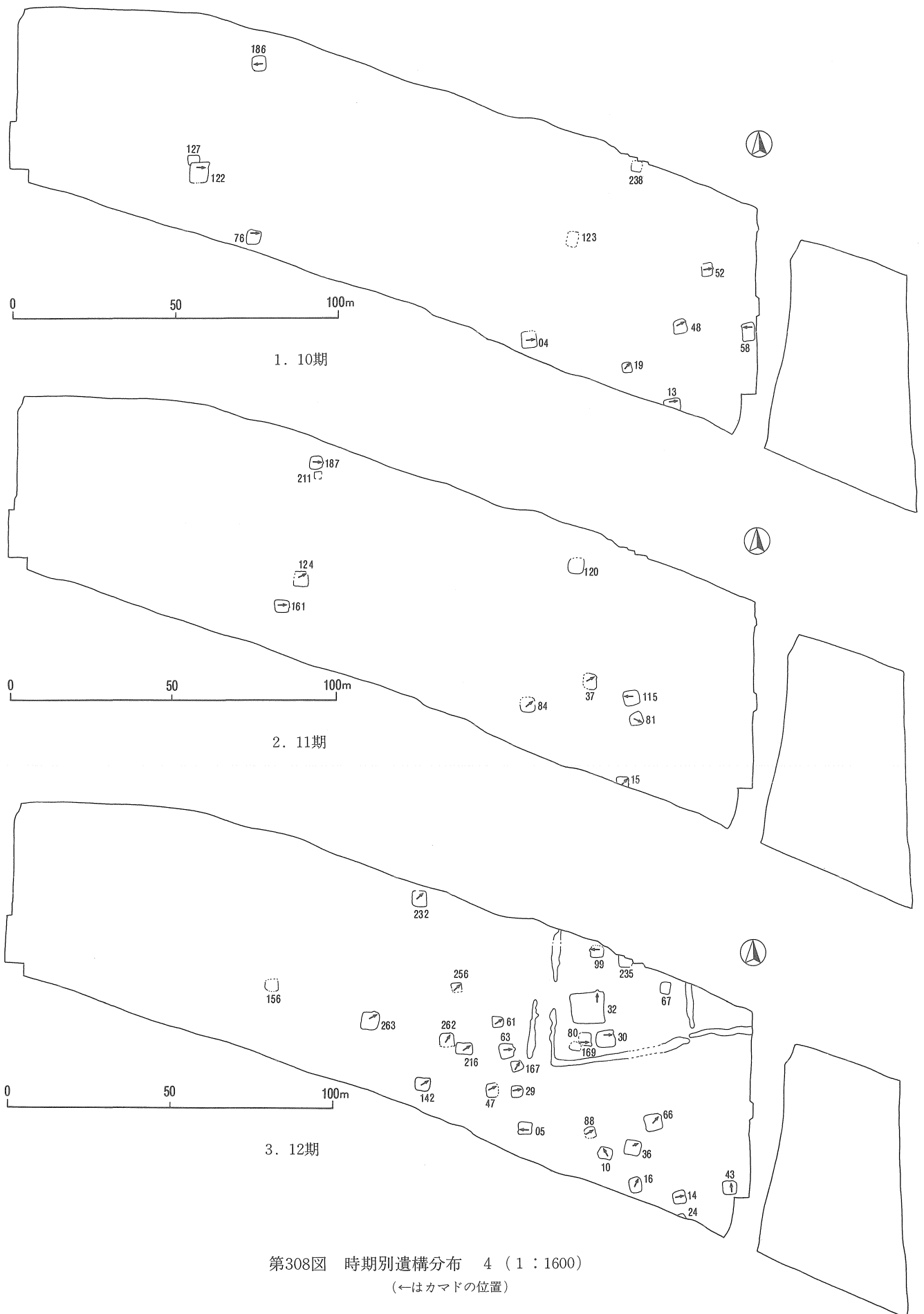
SB63と167ほかで切り合い関係が認められており、少なくとも2段階に区分される。各住居址とも近接する場所に規模・カマドの位置などで類似しており、建て替えの可能性を示している。

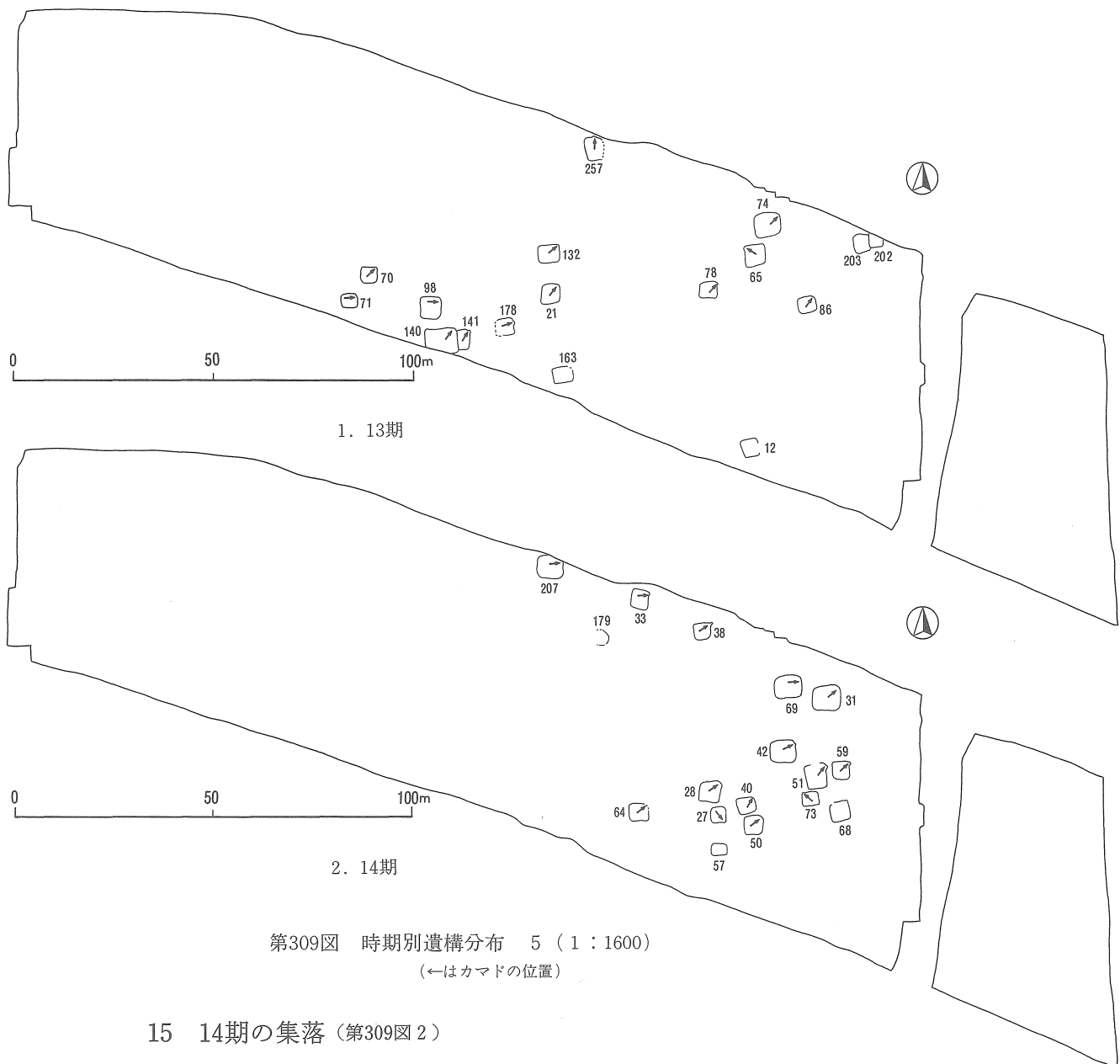
14 13期の集落（第309図1）

前時期の溝を切る住居が現れ、早くも屋敷地が他へ移動したことを示している。

前時期に存在したと想定した南北の道は、この時期にも続いていたらしく、堅穴住居の空白域をつくっている。

堅穴住居址には切り合いが認められ、少なくとも2時期の変遷が考えられる。





第309図 時期別遺構分布 5 (1:1600)
 (←はカマドの位置)

15 14期の集落 (第309図2)

調査区南東部に掘立柱建物が存在し、白磁の分布もこの地区に偏ることから、この場所に有力者が居住していたと考えられる。竪穴住居はその北西側に広がっている。

近接した場所に竪穴住居が集中しており、切り合い関係は認められないものの2時期には分離できそうである。

以上、吉田川西遺跡の古代集落の変遷を追ってみた。本遺跡の場合、奈良時代の初期(あるいは若干遡る)から平安時代の末まで集落がほぼ継続しており、その点だけからみても松本平の中では特異な集落であることがわかる。しかも、集落の形成当初から自然発生的な集落とは異なっており、その後平安末に至るまで浮き沈みはあるものの、地域の中核をなすかなり有力な集落であった様相を示している。

また、同時期存在の住居を確定することはできなかったが、竪穴住居の耐久年数を20~30年と想定すると、本遺跡の一時期に存在した住居数はかなり多いものと考えられる。

このように、集落の継続性、大型住居を含む住居数の多さが集落の特徴と考えられる。その意味するところについては第8章で触れることにする。

第2節 吉田川西遺跡における食器の変容

1 はじめに

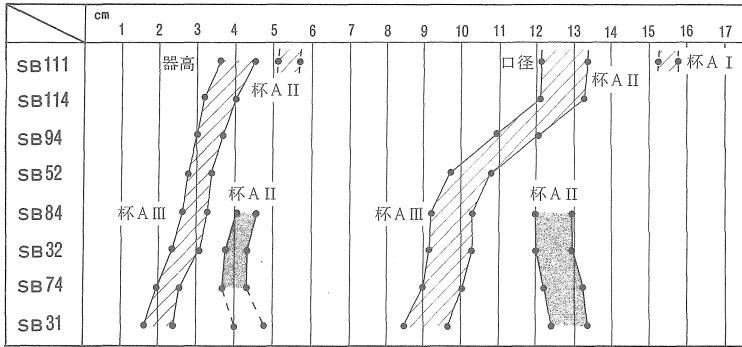
松本平では1980年代に入り大規模な発掘調査が始まり、奈良・平安時代の資料も膨大な量となった。そのような状況の中で在地土器の編年は、島田哲男（島田1983）、山下泰永（山下1986）、直井雅尚（直井1987）の研究により、大筋は明らかになってきた。それらをふまえて、食膳具に焦点を当てその変化を考えた（原1987 a、b）。その中では食膳具に3段階の大きな変化がみられることを示し、それぞれ第1、第2、第3段階とした。今回は、その内容及び移行期の様相を明確にすることを目的にし、また貯蔵具、煮炊具、搬入品についてもふれてみたい。

2 時間軸の設定（第310・311・312・313図）

最も出土量が多く変化がとらえやすい器種は杯Aであり、須恵器、黒色土器A、土師器の三種がある。これまでの研究で、須恵器主体から黒色土器主体へ、さらに土師器という変化、須恵器の切り離し技法のヘラキリから糸切りへの変化、また、土師器のみになる段階では法量に減少がみられることが指摘されている（原1988）。これらの点は本遺跡でも遺構の切り合い関係から確認された。

そこで食器を考察するにあたり、今回得られた杯Aを上記の変化の流れに沿って並べ、その代表的な遺構番号をつけて段階と呼び、時間軸とした。（ ）内はその良好な資料である。

1. SB201段階 非クロ土師器の段階。（SB201）
2. SB227段階 須恵器がほとんどで、すべてヘラキリの段階。（SB227、SD28）
3. SB01段階 須恵器がほとんどで、ヘラキリと糸切りの両者が存在する段階。（SB01、SB09、SB199）
4. SB258段階 糸切りの須恵器が主体で、黒色土器Aがみえだすが、その比率が20%以下の段階。（SB77、SB85、SB175、SB230、SB248、SB258）
5. SB184段階 須恵器の比率が低下し、黒色土器Aが増大し比率が20%から60%の段階。（SB03、SB139、SB184、SB226）
6. SB144段階 黒色土器Aが主体になり、その比率が60%をこえる段階。（SB06、SB44、SB55、SB72、SB83、SB87、SB144、SB188、SB189、SB234、SB259）
7. SB111段階 黒色土器Aが主体で土師器が登場し、須恵器がわずかに残る段階。（SB102、SB111、SK204、SK211）
8. SB114段階 土師器杯A IIがほとんどとなり、法量が口径13cm前後、器高3cmから4cmに集中する段階。（SB96、SB103、SB114、SB116、SB129、SB159、SB160、SB183）
9. SB94段階 土師器杯A II中心で、法量が口径11cm前後、器高3cmから4cmに集中する段階。（SB94、SB118、SB191、SK128）
10. SB52段階 土師器杯A IIは小型化し、法量が口径10cm前後、器高3cm強前後に集中する段階。（SB4、SB19、SB52、SB58、SB186）
11. SB84段階 土師器杯A IIは小型化し杯A IIIとなる。法量が口径10cm前後、器高3cm前後に集中する。ここで新たに大型法量（口径13cm前後、器高4cm前後）の杯A IIが登場する段階。（SB15、SB84、SB115、SB187）
12. SB32段階 杯A IIIはさらに小型化し、法量が口径10cm前後、器高2.5cmから3cmに集中し、杯A IIも



第311図 土師器杯A法量の変遷

存在する段階。(SB05、SB32、SB63、SB66、SB99、SX21)

- 13. SB74段階 杯AはA IIとA IIIの二法量あり、A IIIはさらに小型化し、法量が口径10cm前後、器高2cmから2.5cmに集中する段階。(SB74、SB132、SB141)
- 14. SB31段階 杯Aは二法量あり、杯A IIIの法量が口径8cmから10cm、器高2cm以下に小型化し集中する段階。(SB31、SB59)

3 食膳具

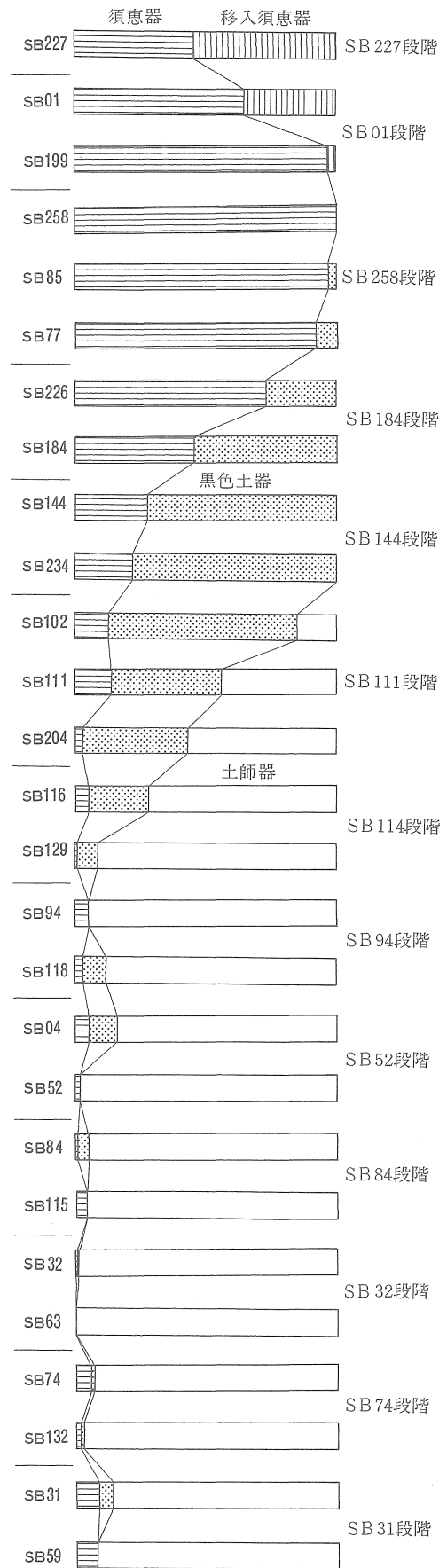
(1) 各器種について

ア 杯A (第312・313図)

時間軸の項と重複する部分もあるが、土器の種類別にみていきたい。

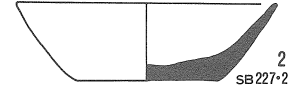
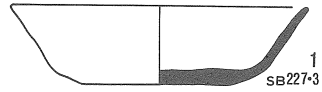
① 須恵器

SB227段階(1・2)は資料が少なくはっきりしないが二法量ある可能性がある。底部はヘラキリである。SB01段階(3~5)になり糸切りが現れ、ヘラキリと混在する。形態は底部が大きく体部の傾斜は小さい。SB258段階(6~9)になると糸切りが大部分になる。形態は底径が縮小するに伴って、体部の傾斜は大きくなる。しかし、切り離し面の大きさに比べ、体部の立ち上がる部分が広く、見かけの底面が大きな形態もある(8)。SB184段階(10~13)では器高と底径がともに小さくなり、それともない体部の傾斜が大きくなる。SB144段階では、前段階と同様な形態(17)があるほか、新しい形態(18)が登場する。それは焼成も灰白色軟質と異なり、内面底部周囲に強いナデをいれず、中央より緩やかに立ち上がり体部を膨らませ口縁をやや外反させる。後述する黒色土器Aの杯A IIに近い形態である。SB111段階(24・25)になると前段階で現れた形態がほとんどとなる。焼成も土師器に近いものや、底部の内外面に黒斑を持つものが多くなる。次のSB114段階にはほとんどみられない。

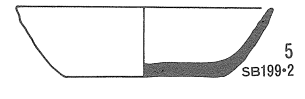
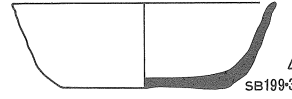
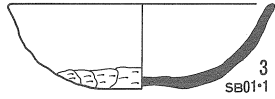


第310図 杯A土器構成の変化

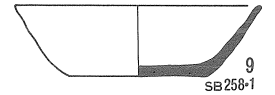
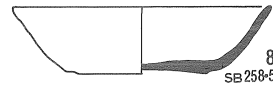
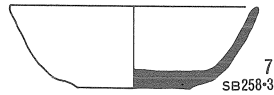
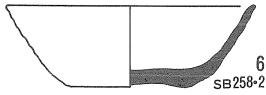
SB227段階



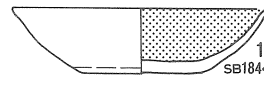
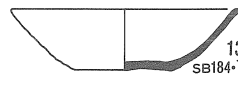
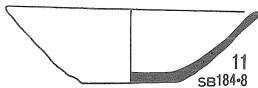
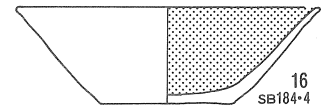
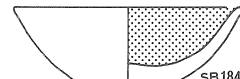
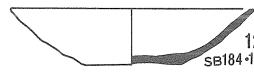
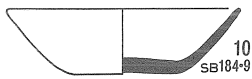
SB01段階



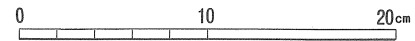
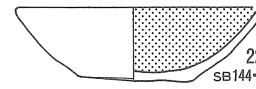
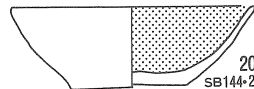
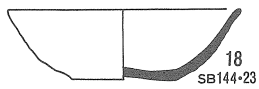
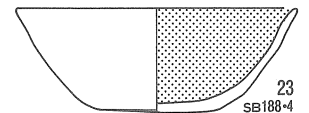
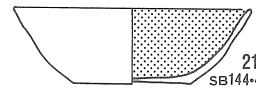
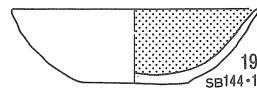
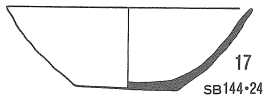
SB258段階



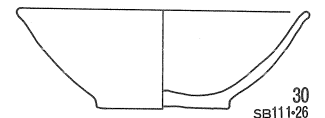
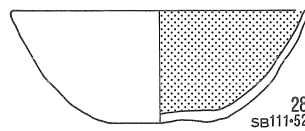
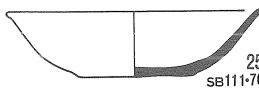
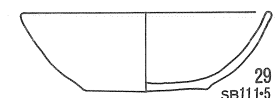
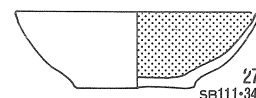
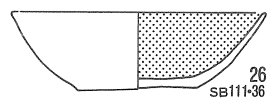
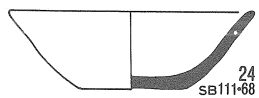
SB184段階



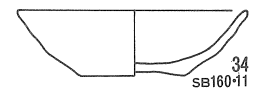
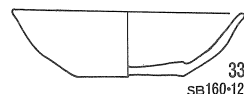
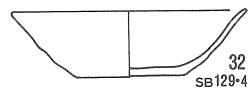
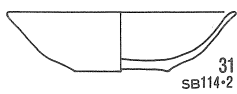
SB144段階



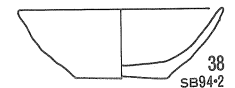
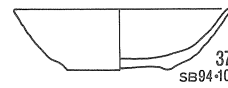
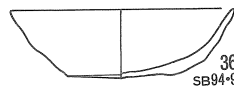
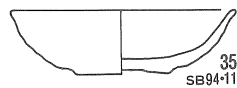
SB111段階



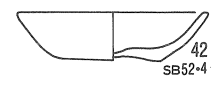
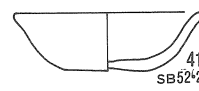
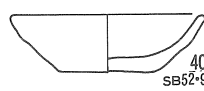
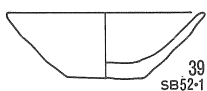
SB144段階



SB94段階

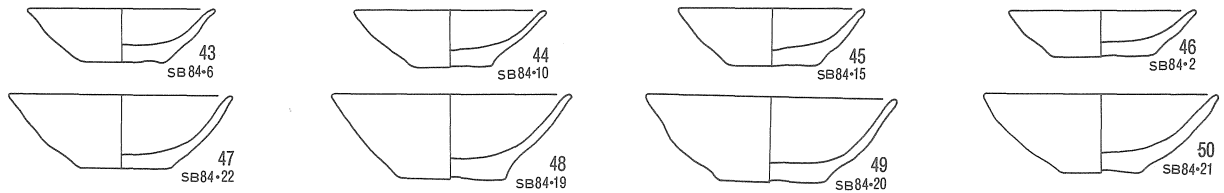


SB52段階

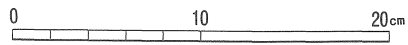
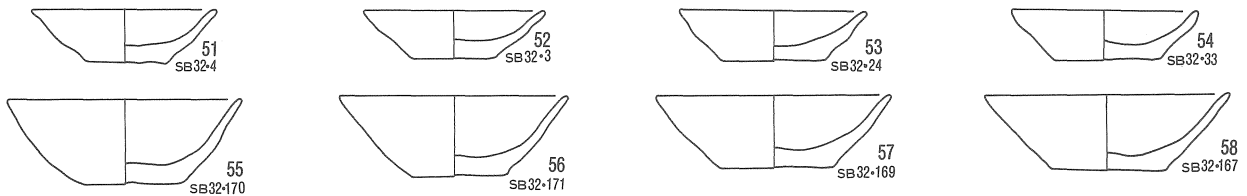


第312図 杯Aの変遷 (1:4)

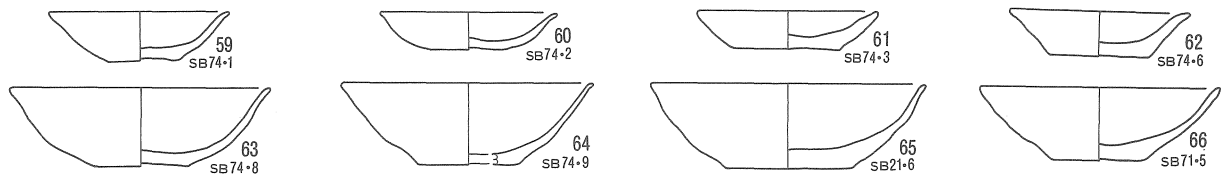
SB84段階



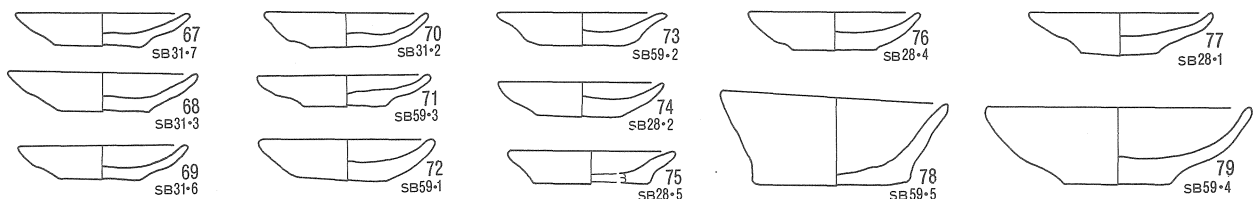
SB32段階



SB74段階



SB31段階



第313図 杯Aの変遷 2 (1:4)

以上みてきたが、形態をみる限り二つの系統があるようである。一つはSB01段階からSB144段階まで底径の減少と体部の傾斜を大きくする形態である。もう一つはSB144段階から出現する黒色土器Aに近い形態である。前者を「須恵器系」、後者を「黒色土器A系」と呼べそうである。現象的には前者から後者へと変化するが、単なる形態変化の延長ではなく、器種の交代と言えそうである。

② 黒色土器A

SB258段階より確実にみられるが、出土量が少なくはっきりしない。SB184段階(14~16)になり資料が増加する。この段階にはA IとA IIがあり、当初から二法量あった可能性が強い。量的にはA IIが圧倒的に多い。形態は底部内面周囲に明瞭な境をつくらず、中央から緩やかに弧を描き立ち上がり、体部下半をやや膨らませながら口縁をわずかに外反させる。この形態はSB144段階(19~23)、SB111段階(26~28)でも維持される。技法的にはロクロ調整で仕上げ、糸切りを基本とする。わずかに底部全面は周囲をロクロヘラケズリ、あるいは手持ちヘラケズリで仕上げたものもある。内面のヘラミガキは口縁近くを横方向に2~5回程行い、それ以下を放射状に行う。傾向としては調整の粗雑化がみられ、SB111段階ではヘラミガキの単位の間ロクロナデの痕跡を残すものもみられる。

③ 土師器 (第311図)

出現はSB111段階のメルクマールになり、杯A I (29)とA II (30)の二法量がみられる。形態は、「黒色土器系」に分類できる。SB114段階(31~34)ではA IIに若干法量の減少がみられ、A Iはなくなる。杯A IIはSB94段階(35~38)から法量の減少の一途をたどり、SB52段階(39~42)では口径9~11cm、器高3cm前後まで小さくなる。またこの段階まで焼成は薄手で硬質である。SB84段階になり大きな変化が起きる。それ

は新たな大型の杯の登場である。ここにおいて従来の杯A IIの小型化した杯A(43~46)と、新たに登場した大型の杯A(47~50)の大小二法量になり、新たな法量分化が成立する。この二法量はSB31段階まで続く。これにより矛盾を生じるが、前者を杯A IIIと呼ぶことにする。この段階の杯A IIIは前段階と同じ法量であるが、焼成は軟質厚手に変化し、それまでは3回以上のロクロナデがみられたのに対して2回となる。SB32段階(51~58)になり杯A IIIはさらに法量を減少し、形態は二種みられる。一つは53のように体部へ二回の強いロクロナデをいれ口縁をまっすぐに立ち上げる。もう一つは55のように底部より一回のロクロナデでやや外反するように立ち上げ、皿A IIの仕上げと同様に口縁端部を面取りする。杯A IIIはさらに小型化を続けSB74段階(59~66)になる。やはり形態は二者があり、体部を張らせるもの(59~61)と、外反させるもの(62)である。これは、SB32段階の二つの形態の延長の可能性もある。SB31段階(67~79)になり杯A IIは量が少なくなる。杯A IIIは器高がさらに減少し、皿A IIと区別がつかない法量となる。やはり形態的には口縁を内湾させるものと、外反させるもの(73・75)の二者がある。

イ 碗(第314図)

土器の種類別ではなく時間軸に沿ってみたい。灰釉陶器については後述する。

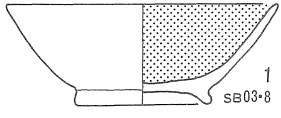
SB184段階に黒色土器Aが登場する(1)。量が増大するのはSB144段階(2~8)である。形態は体部を膨らませ立ち上がり、口縁をわずかに外反させる。高台は角高台(2)もあるが、ほとんどが断面三角形で外傾する。この形態は施釉陶器の碗に近い。ただし、輪状高台を持ち比較的直線的に立ち上がり口縁を大きく外反させる、越州窯系青磁の碗を模倣した形態(8)もみられる。SB111段階(9~12)も黒色土器A碗がほとんどであり、体部を直線的に立ち上げる形態がみえはじめる。SB114段階(13~20)になると、土師器が主体となり黒色土器Aは量を減少させる。その形態のほとんどは体部を直線的に立ち上げる。しかし、黒色土器Aには体部下半を張らす形態も残る。この後、高台が長く外傾する傾向がSB52段階まで続く。SB94段階(21~21)になると土師器の比率が高くなり、形態は体部の傾斜を小さくする傾向がみられる。SB52段階になり、二種の形態が混在する状況が生まれる。従来の体部を直線的に立ち上げる形態は、傾斜を小さくして存在する(25~27)。一方、器高が比較的大きく体部下半を大きく張らす形態(28)が登場する。これは前段階でも破片でいくつかみられるが、この段階でははっきり認められる。土師器と黒色土器Aがみられるが、後者の深い形態の碗には黒色土器Aが比較的多い。SB84段階(29~32)では深い碗が主体となり、直線的に立ち上がる碗は量を減少させる。両者に土師器と黒色土器Aがみられるが、前者が量的には多い。SB32段階(33~40)になると、深い碗がほとんどとなり、土師器と黒色土器Aがみられる。後者に比較的法量も大きく体部下半を大きく張らす形態が多い。SB74段階(41~43)になると土師器と黒色土器Aはともに量を大きく減少させ、それに代わるように灰釉陶器の量が二者を凌ぐようになる。わずかに残ったものの形態は、体部が直線的で不安定になる。SB31段階になり土師器と黒色土器Aはほとんどなくなり、灰釉陶器、山茶碗とわずかな輸入陶磁器になる。

以上みてきたが、二つの形態を認めることができる。一つはSB184段階からSB84段階まで続く碗であり、もう一つはSB52段階以降主体となる深い碗である。この二者の碗の存在は以前指摘したが、ここでその系譜をはっきりさせることができた(原1988)。これより前者を碗A、後者を碗Bとする。この碗の交代は後述する灰釉陶器にもみられ、土師器と黒色土器Aだけの問題ではなさそうである。また、碗Bはその出現時期と形態から、碗Cとともに大小の構成となる可能性が強い。もう一つ特徴としては、碗には緑釉陶器、灰釉陶器、土師器、黒色土器Aなど多種の土器が、同時にみられるということがあげられる。

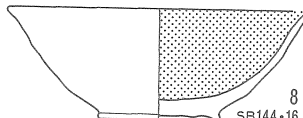
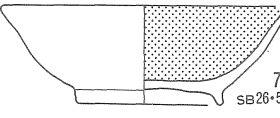
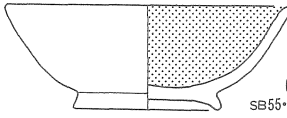
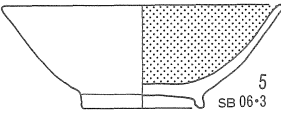
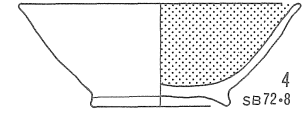
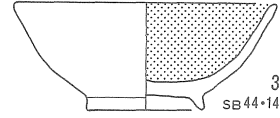
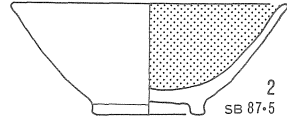
ウ 碗C(第315図)

出現はSB114段階であり、黒色土器Aと土師器、灰釉陶器がある。しかし、SB84段階(7・8)までは法量や形態がともに不安定で、体部下半を張らせる形態が多い。SB32段階(9~12)になり形態と法量がとも

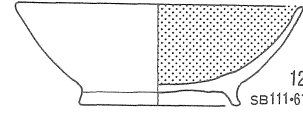
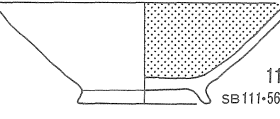
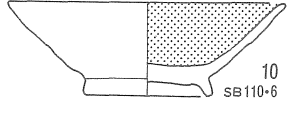
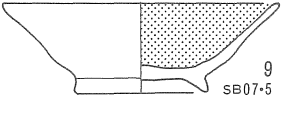
SB 184段階



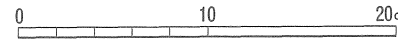
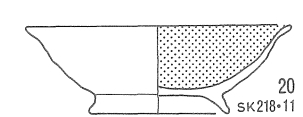
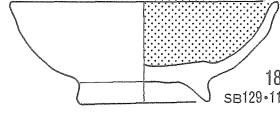
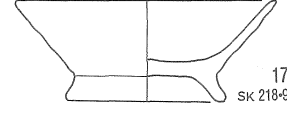
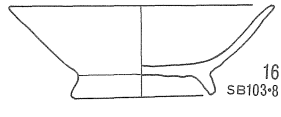
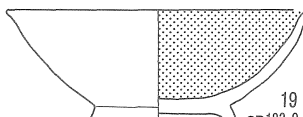
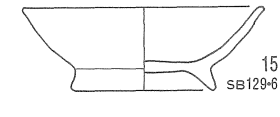
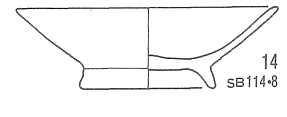
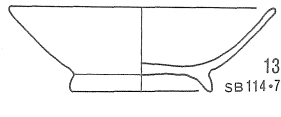
SB 144段階



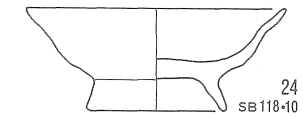
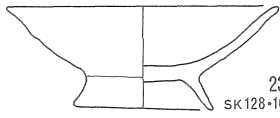
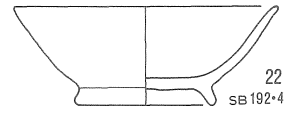
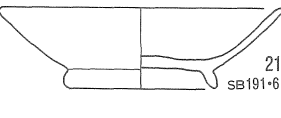
SB 111段階



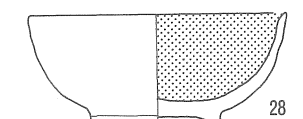
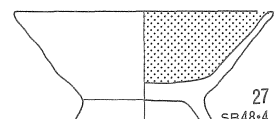
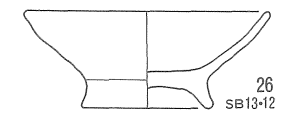
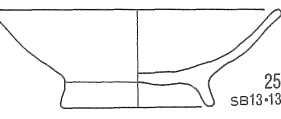
SB 114段階



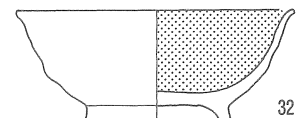
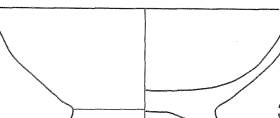
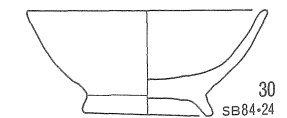
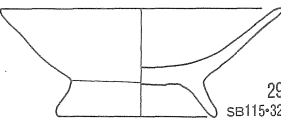
SB 94段階



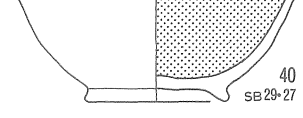
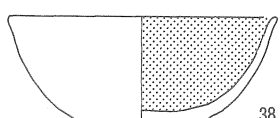
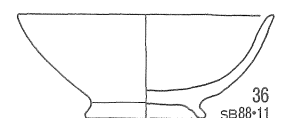
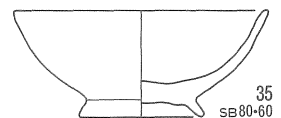
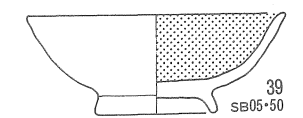
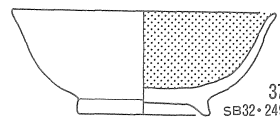
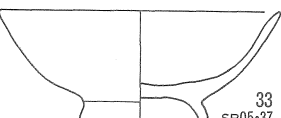
SB 52段階



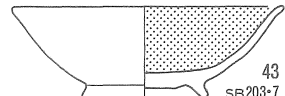
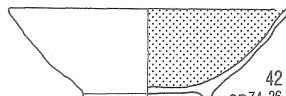
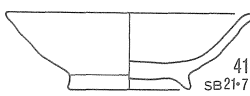
SB 84段階



SB 32段階



SB 74段階



第314図 碗の変遷 (1 : 4)

に安定し、土師器、黒色土器A、黒色土器Bがみられる。いずれも形態は共通しており体部下半が張り、口縁端部をやや外反させ外傾する高台をつけ、椀Bをそのまま小型化したようである。また後述する灰釉陶器・緑釉陶器の形態とも共通する。SB74段階(13~16)になると、器高が減少し、体部が直線的に立ち上がる。この傾向は次のSB31段階(17・18)まで続き、黒色土器はみられなくなる。このような流れのなかで、黒色土器Bがある一定量を占める点に注目しておきたい(註1)。

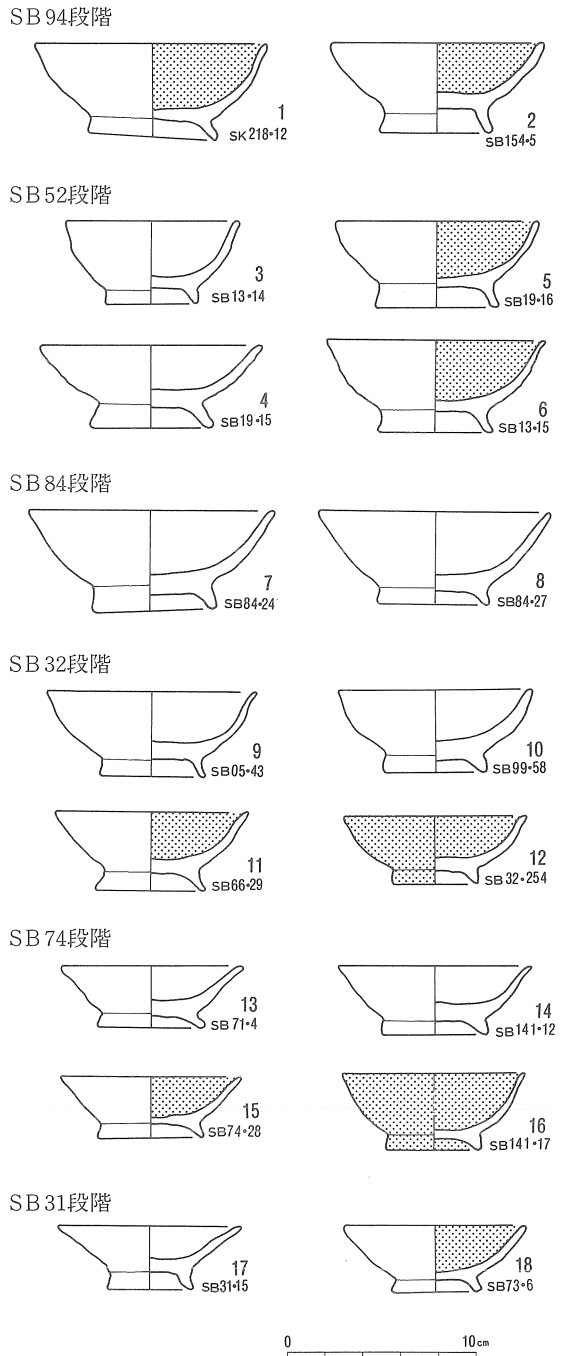
椀CはSB32段階で椀Bと明確に大小のセットとなる。また、多種の土器によってつくられる点も椀Bと共通しており、本来「椀B II」とでも呼ぶのが適当なのかもしれない。

エ 皿B (第316図)

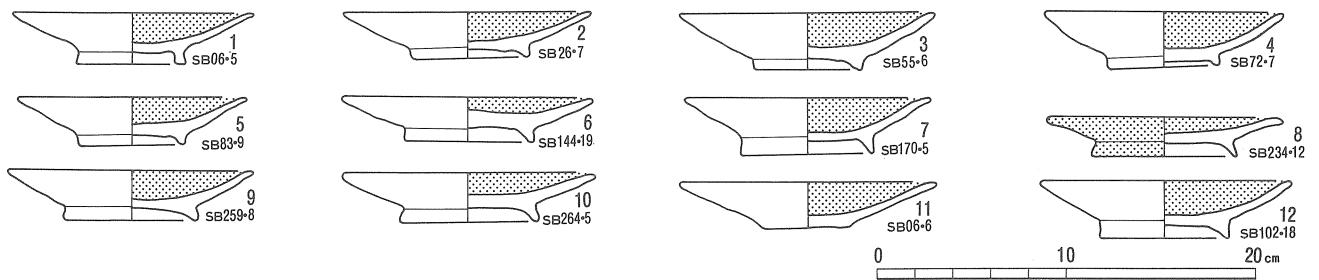
黒色土器Aと灰釉陶器がほとんどで、わずかに須恵器がみられる。黒色土器AはSB184段階で出現するが形態のわかるものが少ない。SB144段階(1~11)になるとその量も安定し、資料も多い。しかし、SB111段階(12)では急激にその量を減少させ、多量に搬入され始める灰釉陶器にとって代わられるようである。SB114段階以降は灰釉陶器のみとなり、SB32段階になり皿Cが量を増し皿Bは減少し、SB74段階になると皿Cのみとなる。このように黒色土器Aでつくられるのは短期間である。黒色土器Aの形態は施釉陶器に近く、内湾させるものと、外反させるものの二種があり、高台も断面角型と断面三角形の二種がある。これが時間的な理由によるのかは不明である。調整はロクロで仕上げ糸切り痕を残し、内面のヘラミガキは放射状である。

オ 皿A (第317図)

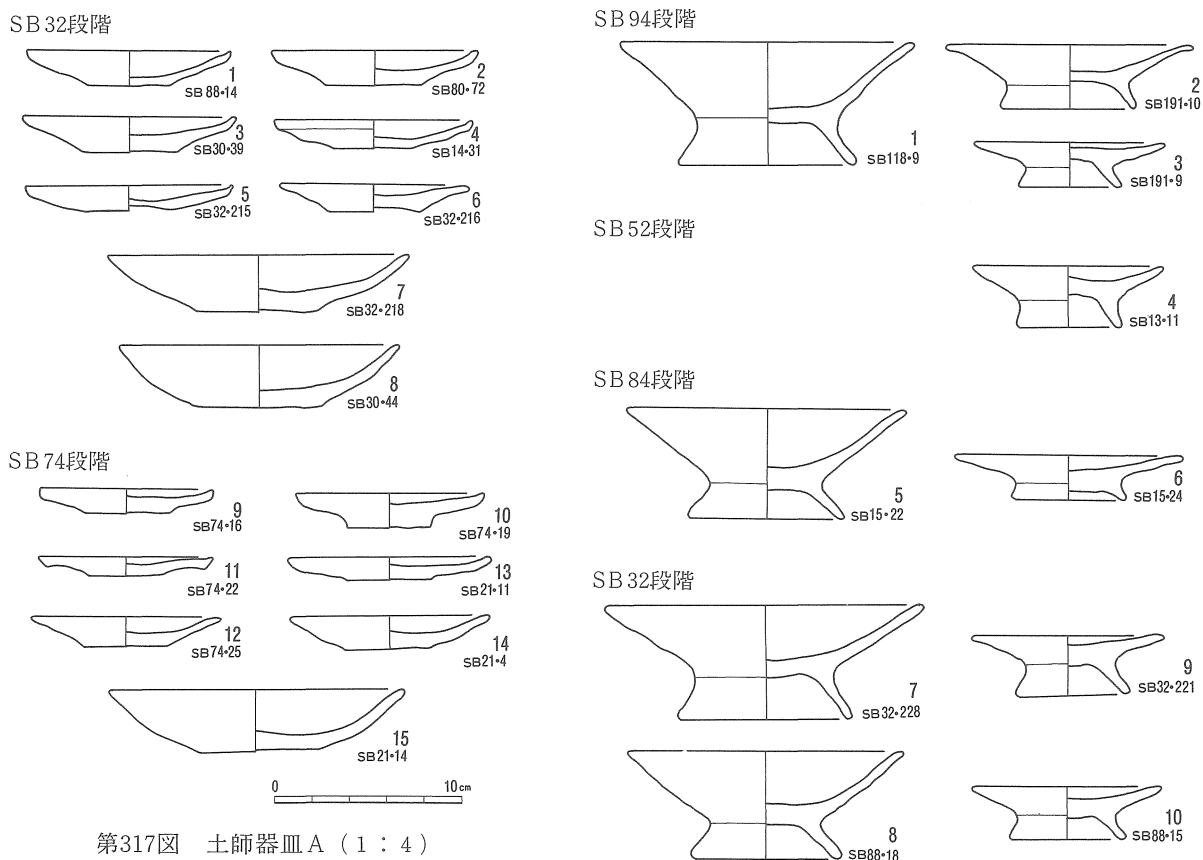
すべて土師器でA IとA IIの二法量あり、出現はSB32段階である。A IIは口縁の形態が二種みられる。一つは端部を面取りし、もう一つは直線的に上げる。量的



第315図 椀Cの変遷(1:4)



第316図 皿B(1:4)



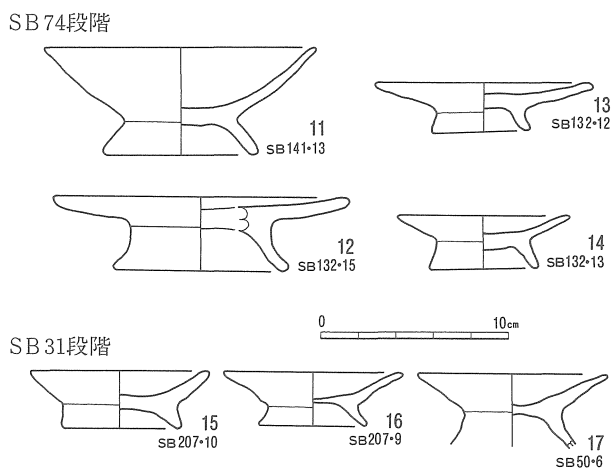
第317図 土師器皿A (1 : 4)

には前者が多い。SB32段階(1~8)では口径が大きく、端部の面取りも丁寧に行われ底部が比較的薄く仕上げられる。それに対してSB74段階(9~15)になると、口径が減少し面取りも粗雑になり、底部も厚く仕上げられる。SB31段階になると杯A IIIが小型化し法量がそれと一致してしまい、取り込まれてしまうようである。

この器種の出現については、形態から平安京の「土師皿Cタイプ」との関連を持った成立を考えた(原1988)。これは後述するようにその出現は、時間的にも一致しており、中央との関連を考える上の好資料である。

カ 盤B (第318図)

すべて土師器で、B I と B II の大小二法量あり、出現はSB94段階(1~3)である。ただし、SB52段階までは量が不安定で、明確に大小が確認できるのはSB84段階(5・6)、SB32段階(7~10)である。次のSB74段階では減少する。B I の形態はSB94段階では大型で碗Aに近いが、高台の長さとお口の縁の外反が異なる。量的に安定するSB84段階とSB32段階を比較すると前者の方が身部が深く、後者の方が浅い。このように身部が徐々に浅くなる傾向がある。SB74段階にその量が急激に減少してしまいうためはっきりしないが、最終的に身部が平坦になった可能性もある。B II はSB84段階まで資料が少なく特徴がはっきりしないが、皿Bのように高台の低いもの、比較的高台の高いものがある。定型化するのにはB I と同様にSB84段階であり、身部が比較的平坦で高台の長さはまちまちである。SB74段階(13・14)になりその量は減少し、SB31段階



第318図 盤Bの変遷 (1 : 4)

階(15~17)では扁平化した椀Cと似た形態になるが、高台の高い形態も存在する。

以前、盤Bは在地の土器の型式変化の延長に生まれたのではなく、新しい器種として取り入れられたとした(原1988)。形態はB Iが椀A、B IIが皿Bに近くその型式変化の延長上と考えられなくもない。しかし、この形態が全国的にみられることは確かであり、新しい器種と考えたい。

キ 杯B

すべて須恵器であり、SB144段階までみられる。量的にはSB184段階で減少をはじめ、SB144段階になるとほとんどみられなくなる。しかし良好な資料は少ない。そのため今回は気づいた点のみを記し、細部については松本市分の報告書の成果を期待したい。

杯Bの法量の組合せは、SB227段階ではB IIおよびB III、さらにB IIより口径の大きな法量が存在する。SB01段階になると杯B Iが加わる。SB01段階でもヘラキリがほとんどを占める SB01にはB Iは存在しない。それに対して、ヘラキリの割合が減少したSB199ではB Iがみられる。このことからB IはSB01段階から出現する可能性が強い。SB258段階は、B IIはほとんどみられなくなり、B I・B III・B IVの組合せとなり、明確に法量分化がみられるようになる。量的には前二者が多い。

産地からみると、在地産がほとんどを占めるようになるのは、SB258段階である。それまではある一定量を美濃須衛窯産が占めるが、ここで極端に減少してしまう。時期的に法量分化の明確化の段階と一致しており、注目したい。

(2) 器種構成について

時間軸によった、器種構成は以下のものである。

- SB201段階 詳細は不明である。
- SB227段階 資料が少ない。須恵器杯A、杯B II、盤A、杯蓋、鉄鉢型鉢、甕型の鉢、土師器高杯。
- SB01段階 資料が少ない。須恵器杯A II、杯B II、杯B III、杯蓋。
- SB258段階 須恵器杯A II、杯B I、杯B II、杯B III、杯B IV、杯B蓋、黒色土器A杯A。
- SB184段階 良好な資料が少ない。須恵器杯A II、杯B I、杯B III、杯B蓋、黒色土器A杯A I、杯A II、椀A、皿B。
- SB144段階 黒色土器A杯A I、杯A II、椀A、皿B、須恵器杯A II。須恵器杯B、杯蓋の量は少ない。なおわずかであるが、灰釉陶器椀Aがみられる。
- SB111段階 黒色土器A杯A I、杯A II、椀A、皿B、須恵器杯A II、土師器杯A I、杯A II、灰釉陶器椀A、皿B。黒色土器A皿Bは少ない。
- SB114段階 土師器杯A II、わずかではあるが杯A I、椀A、黒色土器A椀A、わずかであるが杯A I、杯A II、灰釉陶器椀A、皿B。
- SB94段階 土師器杯A II、椀A、わずかに盤B I、盤B II、黒色土器A椀A、椀C、灰釉陶器椀A、皿B、皿C。
- SB52段階 土師器杯A II、椀A、椀B、椀C、盤B I、盤B II、黒色土器A椀A、椀B、椀C、灰釉陶器椀A、椀B、皿B、皿C。
- SB84段階 土師器杯A II、杯A III、椀A、椀B、椀C、盤B I、盤B II、黒色土器A椀A、椀B、椀C、灰釉陶器椀A、椀B、椀C、皿B、皿C。
- SB32段階 土師器杯A II、杯A III、椀A、椀B、椀C、盤B I、盤B II、皿A I、皿A II、黒色土器A杯A、椀B、椀C、黒色土器B椀C、灰釉陶器椀B、椀C、皿B、皿C。
- SB74段階 土師器杯A II、杯A III、椀B、椀C、盤B I、盤B II、皿A I、皿A II、黒色土器A椀B、椀C、黒色土器B椀C、灰釉陶器椀B、椀C、皿B、皿C。

SB31段階 住居址の数は多いが良好な資料が少なくはっきりした様相がつかめない。土師器杯A II、杯A III、椀C、灰釉陶器椀B、椀C、皿B、山茶碗。

以上各段階ごとに、器種構成をみてきたが、それを整理すると第319図のようになる。

次に画期がどこに置けるのか考えてみたい。第一はSB258段階とSB144段階の間である。その内容は、多くの法量をもつ杯Bから一法量の椀A・皿Bへの交代と、杯Aの一法量から二法量化及び「須恵器系」から「黒色土器A系」への変化である。第二はSB114段階とSB84段階の間である。大きくは一法量の椀A・皿Bと再び二法量から一法量化した杯Aから、杯Aと椀B、皿A、盤Bなどの一器種大小二法量への変化である。SB94段階とSB52段階の器種構成は移行期の様相となる。さらに最後にSB31段階の次に器種の急減という大きな画期が置ける。

(3) 土器の変化について

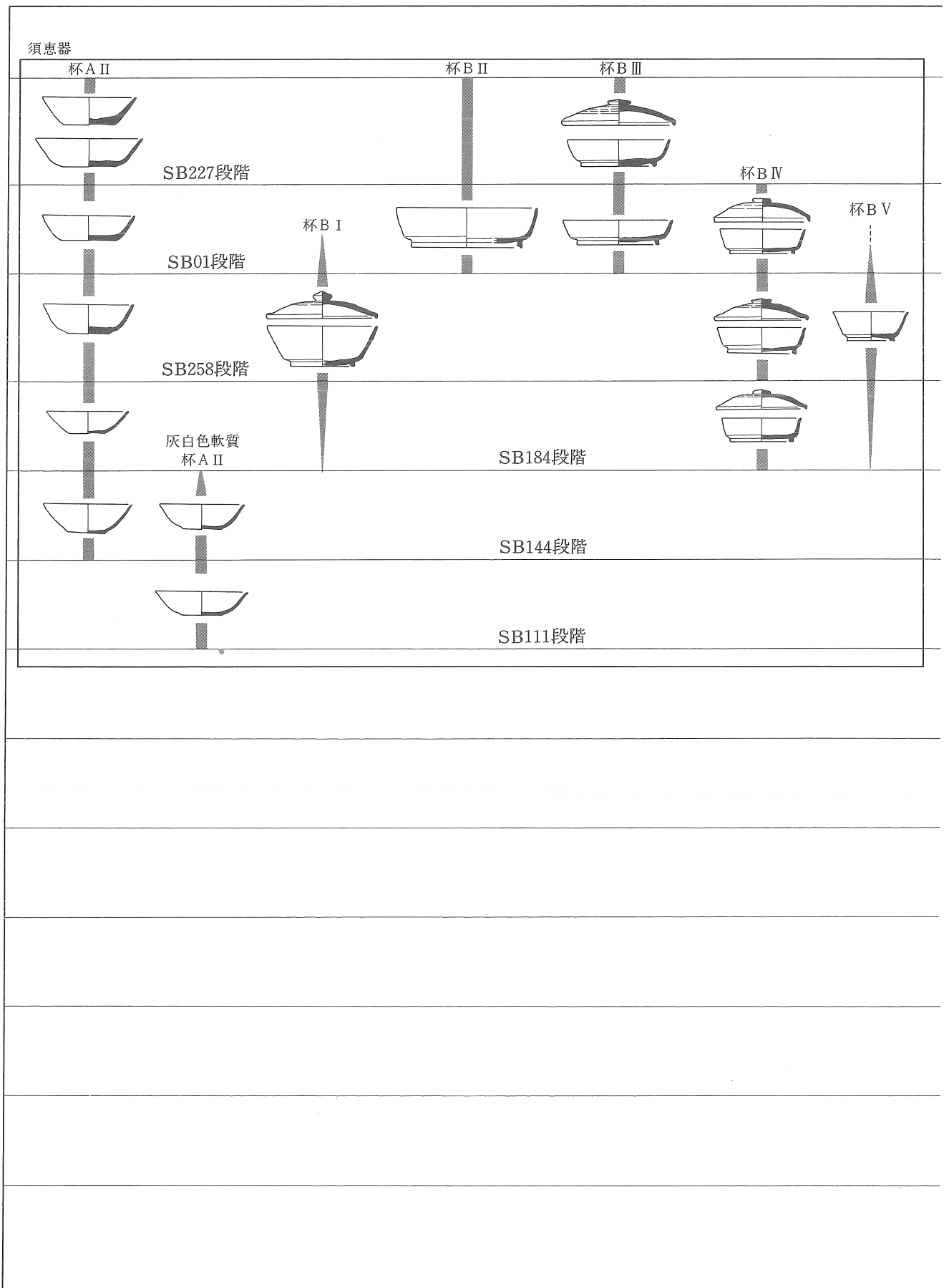
ここでは、生産という側面にも目を向けながら、土器全体についてその変化を総括しておく。

最初の大きな変化が起きるのは、SB01段階あるいは、SB258段階の古い時期である。それ以前は美濃須衛窯産に依存する割合も多かったが、これを境として在地産による構成が確立される。次のSB184段階からSB144段階にかけて黒色土器Aの登場(註2)と須恵器の減少という変化が起きる。両者は技術面で関連が考えられ、両者の器種がまったく異なることから、別々の生産集団が存在したのではなく、一つの生産集団の中で計画的な転換があったようにも思える。次のSB144段階では須恵器に変質が起こり、貯蔵具生産と食膳具生産が分離した可能性がある(註3)。続くSB111段階では3種の土器(黒色土器A、土師器、須恵器)が存在し、その焼成も類似している。次のSB114段階になると土師器がほとんどを占めるようになる。黒色土器は椀にみられるのみとなる(註4)。須恵器はSB94段階を最後に貯蔵具も失われてしまう(註5)。このSB114段階からSB52段階が、SB258段階で成立し土器の種類を変化させてきた窯業生産が、大きく動揺し解体した時期とすることができそうである。SB84段階から、土師器は軟質厚手という粗雑化の方向がはっきりする。これは大量生産を前提としていると思われ、生産に対する考え方の変化があったと思われる。この変化に対応するようにSB32段階から、在地生産品と広域流通品の器種分業という傾向がみえだす。SB31段階を最後に在地における窯業生産は大幅に縮小し、中世にみられる食器のほとんどを広域流通品でまかなう傾向がはっきりしはじめる。

(4) 食器の使用状態

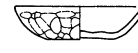
SB32段階にみられる状況についてふれておく。特徴としては多量の食膳具が出土することがあげられる(第320図)。しかしながら、吉田向井遺跡(長野県埋文センター1988)のSB32段階の資料と比較する限り普遍的ではなさそうである。むしろ、本遺跡のSB32段階の大きな特徴と言えそうである。住居址の出土遺物はほとんどが遺棄されたと考えられることから、これらは食膳具の多量の消費を物語っているととらえたい。また、小規模な遺構の中から多量の食膳具が出土する例もいくつか見られ、それらは一時的に多量に使った食膳具を捨てるためのゴミ穴と考えられる(SX21、SB99)。次にその捨てられた食膳具類は、SX21、SB99、SB32でみると土師器が圧倒的で、灰釉陶器や黒色土器Aの量は少ない。そのほかこの段階の住居址の食膳具をみても、土師器が圧倒的である。また、その土師器の器種の中でも杯A II、A IIIが圧倒的に多い。

それではこのことが何を意味するのであろう。多量の食膳具、特に土師器の投棄遺構は京都や、鎌倉などの都市の遺跡にみられる(百瀬1985)。その理由は、土師器が宴会に使われ、二度と使用されることなく廃棄されたためとされている(河野1986)。このことからすれば、SB32段階の土師器の食膳具は宴会のためにつくられ、それが終わると二度と使用せずそのまま捨てられるという、中世の「かわらけ」の性格をすでに持っていた可能性がある。このように土師器の日常の食事で使用される比重は低下し、それとは逆に灰釉陶器の日常生活で使用される割合が高くなったと考えられる。



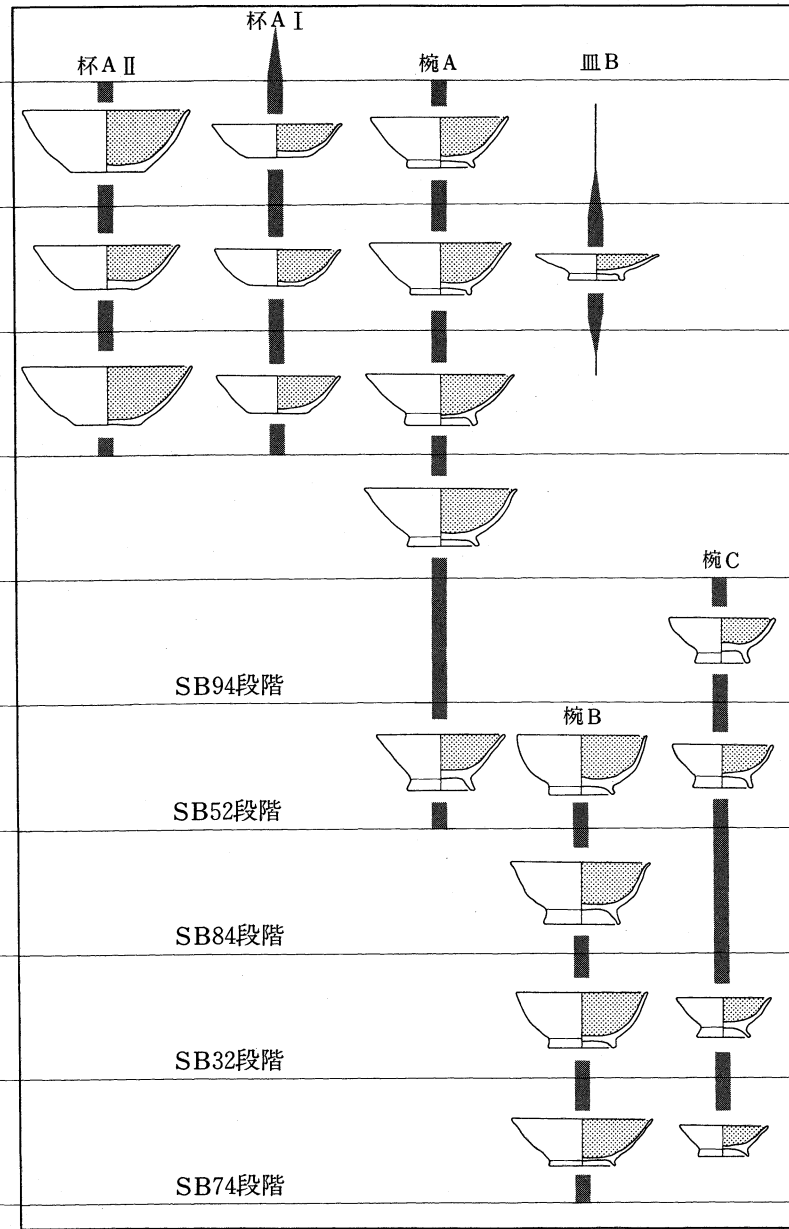
第319図 器種消長表（1：8）

SB201段階

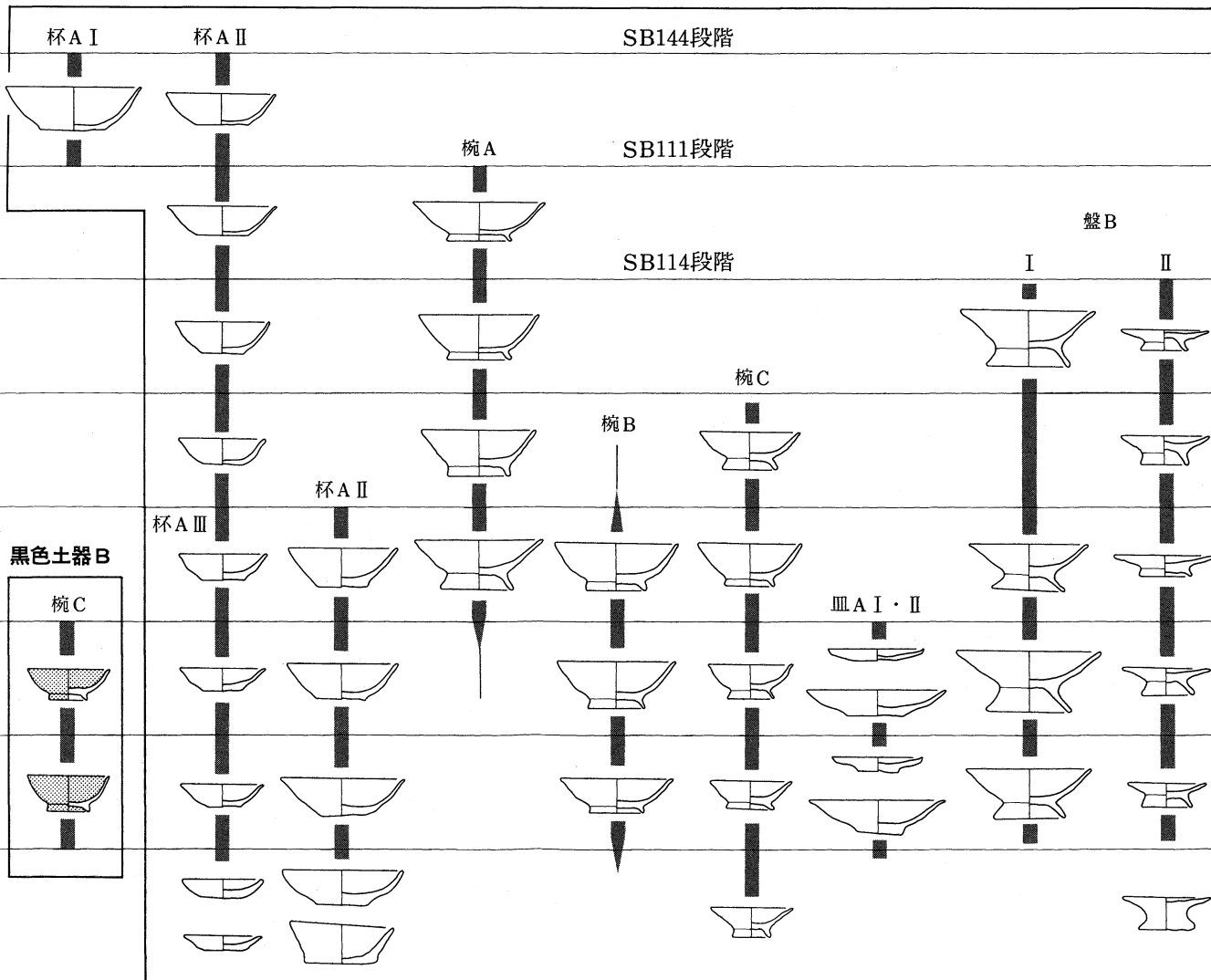


非口口土師器

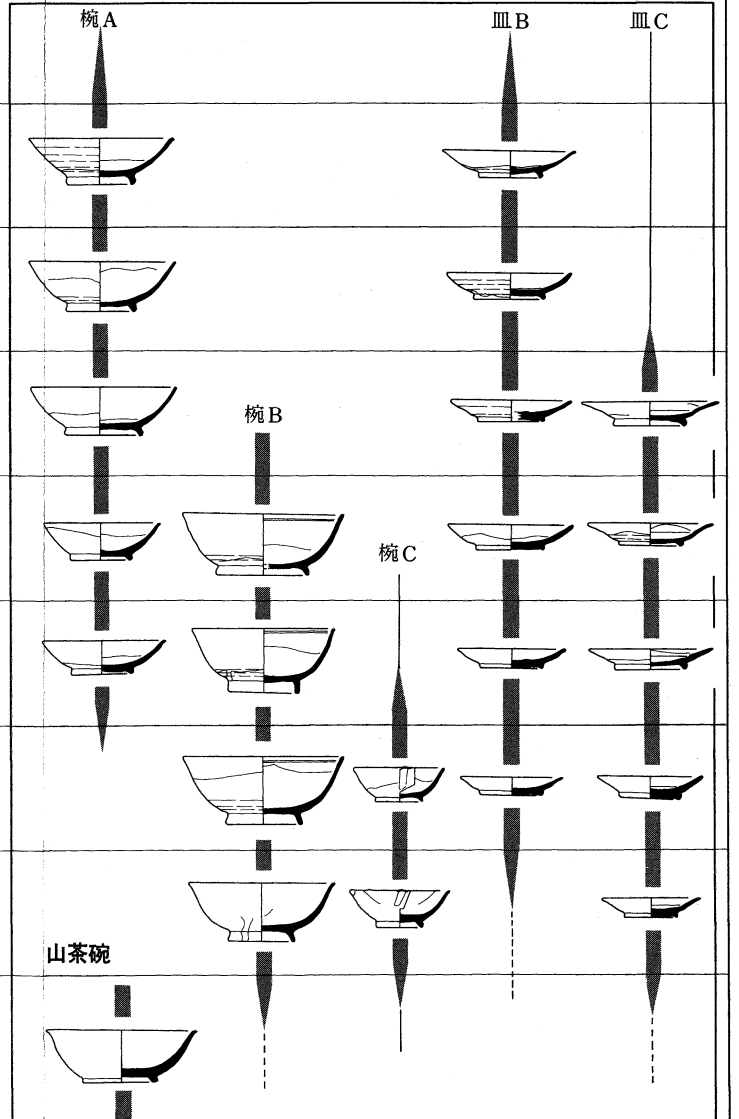
黑色土器 A



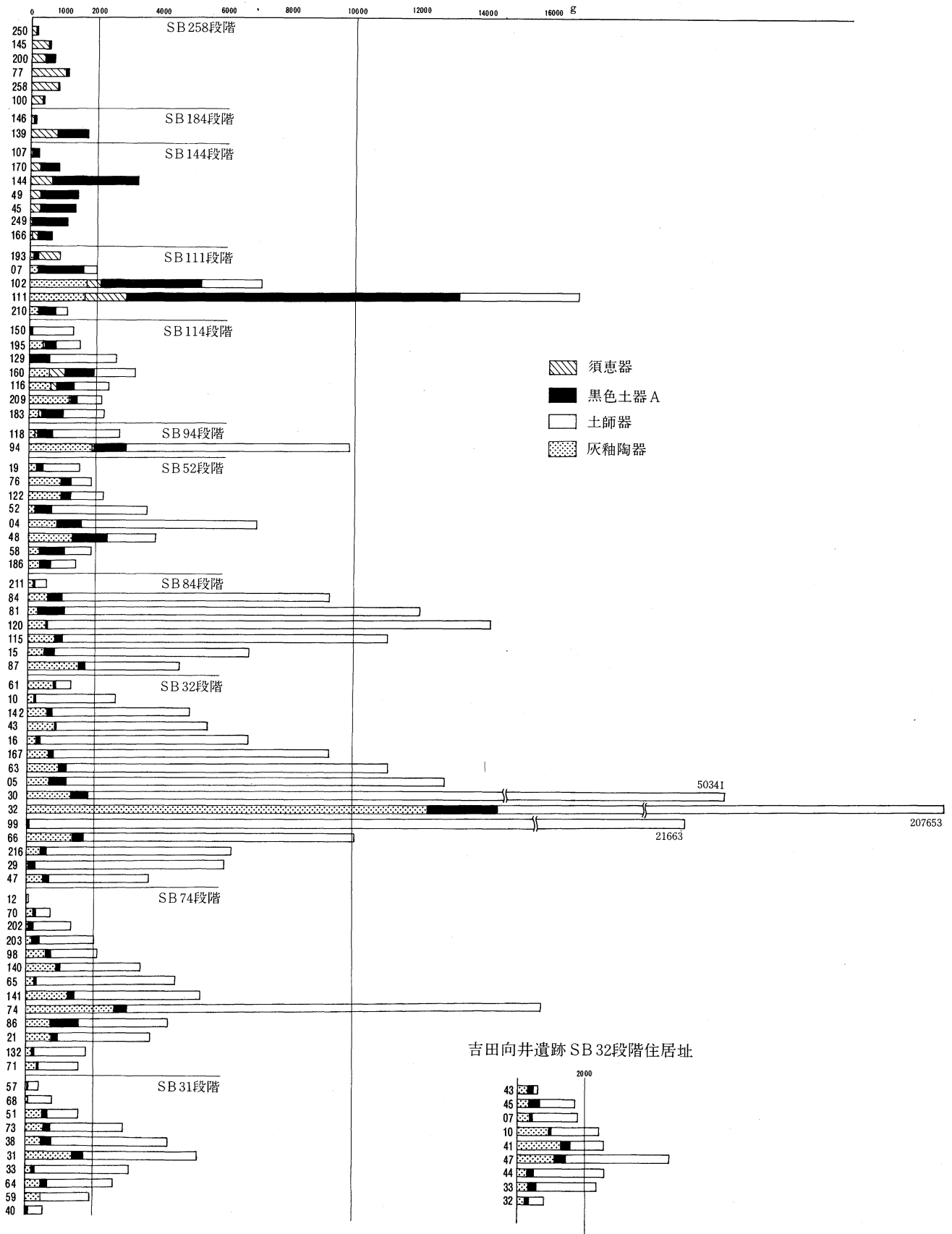
土師器



灰釉陶器



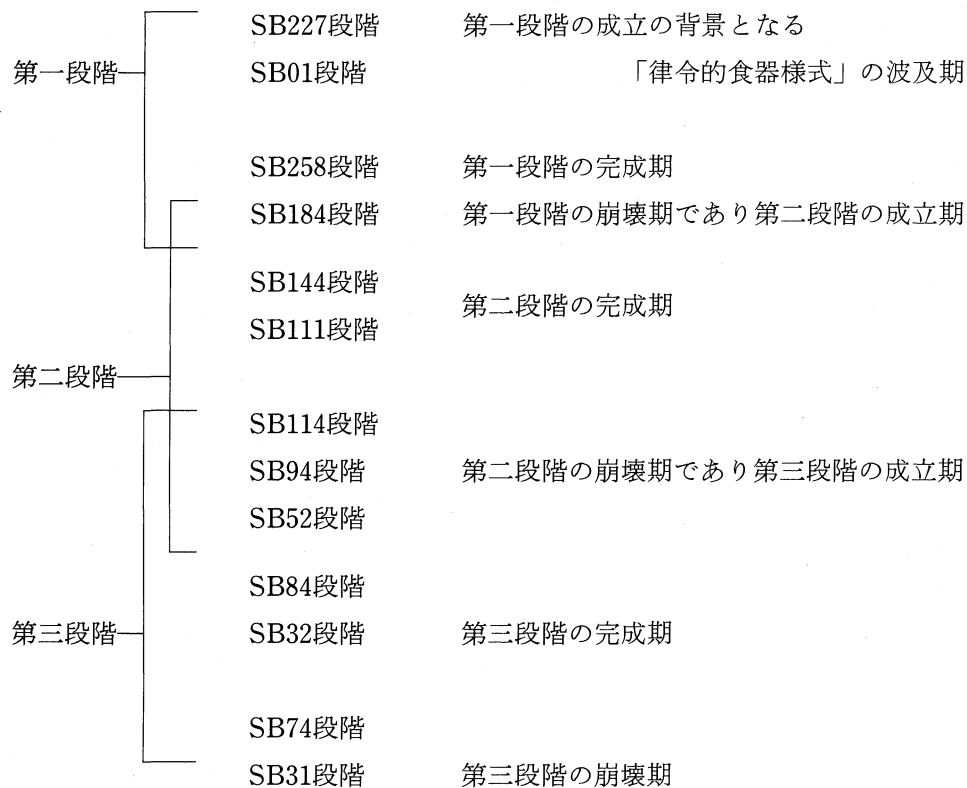
SB31段階



第320図 住居址別食膳具の土器種類別量の変化
 (SB52段階以降は須恵器をはぶいている)

(5) 食膳具についてのまとめ

平安時代の食膳具を、その構成からみて、大きく3段階にとらえられることは、以前に述べた。本遺跡では、それと次のような対比ができる。



次に、三段階のそれぞれの内容と特質について考えてみたい。

第一段階は、「金属器指向型」の杯Bの法量分化に代表される。しかし、その内容については今回の資料でははっきりさせることはできず、以前指摘した内容を追認できたのみである（原1987）。

第二段階は、初期では杯Aに二法量がみられるが、基本的には第1段階が法量分化を基調とするのに対して一器種一法量である。その器種も碗・皿に代表される磁器指向型に特徴がある。杯Aも第一段階とは系譜が異なるようである。土器も黒色土器Aから次第に土師器へという動きがみられる。磁器指向型の器種には、越州窯系青磁、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器A、土師器がみられ、土器の種類の重層性を大きな特徴としてあげることができる。

第三段階は、第二段階と同様に土器に重層性がみられることがあげられる。器種でみると、杯A IIとA III、碗Bと碗C、皿A I、A II、盤B Iと盤B II、皿B、皿Cによって構成され、これらが大小二法量となる点に大きな特徴をもつ。この大小の組合せは、中世にみられる大小の土器皿の組合せを想像させる。特に碗と大小の皿の組合せを中世の基本セットするならば、その部分のみを取り上げて「プレ中世的」とでも呼べそうである。またこの段階には、大量の土師器が消費されている。それは、前述したように日常の食生活では考えられない量であり、宴会などで使われる目的があった可能性がある。この土師器の日常食生活での役割の低下も「プレ中世的」と呼べそうである。もう一つ、この段階の特徴として上げなければならないのは、碗B・皿B・Cにみられるような灰釉陶器の占める量の増大である。土師器の食器が宴会用としての性格を強くしたのに対して、灰釉陶器のような広域流通品が、日常の食生活で地位を高めたと思われる。在地生産品と広域流通品の器種分業を中世的とするならば、このような状態もやはり「プレ中世的」と呼べそうである。

次に、それぞれの成立背景について考えてみたい。第一段階と第二段階は、全国的な食膳具の変化に対

応した変化と考えることができる。特に、第2段階は施釉陶器の模倣が椀・皿などの器種にみられるが、それは多分に現象的であり、全国的な磁器指向型の器種による食膳具の再構成という新たな食膳具様式の成立が背景にあったと推定している。

第三段階の食膳具構成の成立について、中央の変化に敏感に反応したためと考えてきたが、その点にしばらく今回の資料から検討してみたい。杯Aをみると二分量存在する。この分量分化は、後で述べる年代観によると1000年前後になる。平安京での小皿と皿の大小二種セットの成立は、10世紀後半でありほぼ対応する(堀内1985)。次に椀Bの出現である。これは灰釉陶器や緑釉陶器にもみられ、畿内の瓦器の深椀にもみられる。その出現時期は、平安京において10世紀後半であり、ほぼ共通している。また、皿A IIについても以前指摘した通り畿内と密接な影響下に出現したようである(原1988)。このように個々の器種について見ると、当時の政治的中心地である平安京の変化と対応しているようである。また、平安京において大量の土師器食膳具消費の行為がみられるのも同時期のものである(百瀬1985)。上述のように、第三段階の食膳具は平安京にみられる食膳具のあり方と密接な関係をもって変化しており、ただ松本平のみで成立したのではなく、中央の変化が地方へ浸透し受容される中で成立したと考えることができる。

最後に、吉田川西遺跡の食膳具の特徴についてあげておきたい。SB111段階までは他の集落と比較してそれほど目だった特徴を持っていない。SB111段階以降は他の集落との違いが明確に現れる。その一つは、SB111段階からSB32段階まで多量の緑釉陶器や、数は少ないが輸入陶磁器が持ち込まれることである。それらは、土器の重層性を特質とするならば、その頂点とも言えるものである。また、SB32段階にみられる多量の土師器食膳具の使用もあげなければならない。他の遺跡と比較してもやはりその量は異常とも思えるほどである。それが日常の食生活以外の宴会での使用と考える根拠でもある。以上の特徴は、高級陶器を持つことのできる有力者層が存在することを示しており、多量の土師器食膳具を必要とする宴会が、その有力者によって支配秩序を維持するために、頻繁に行われてきたことを示していると思われる(原田1987)。

4 貯蔵具

今回の資料の中に全体の形態がわかるものが少なく、土器の種類についてのみふれておきたい。須恵器の貯蔵具はSB94段階までは確実に存在する。それ以降については、住居址の埋土中には必ずといっていいほど須恵器の貯蔵具の破片が入るため、存在しなかったとは断言できない。灰釉陶器はSB184段階からみられる。ただし、搬入品としては、それ以前に美濃須衛窯や猿投窯の須恵器が入る。特に前者はSB01段階まで多量にはいる。灰釉陶器の量の増大が顕著になるのは、SB114段階あたりからである。ただし、それまでの須恵器の量と比較すれば決して多くはない。このことは土器以外の材質、例えば曲物などの貯蔵具を考えなければ理解できない。

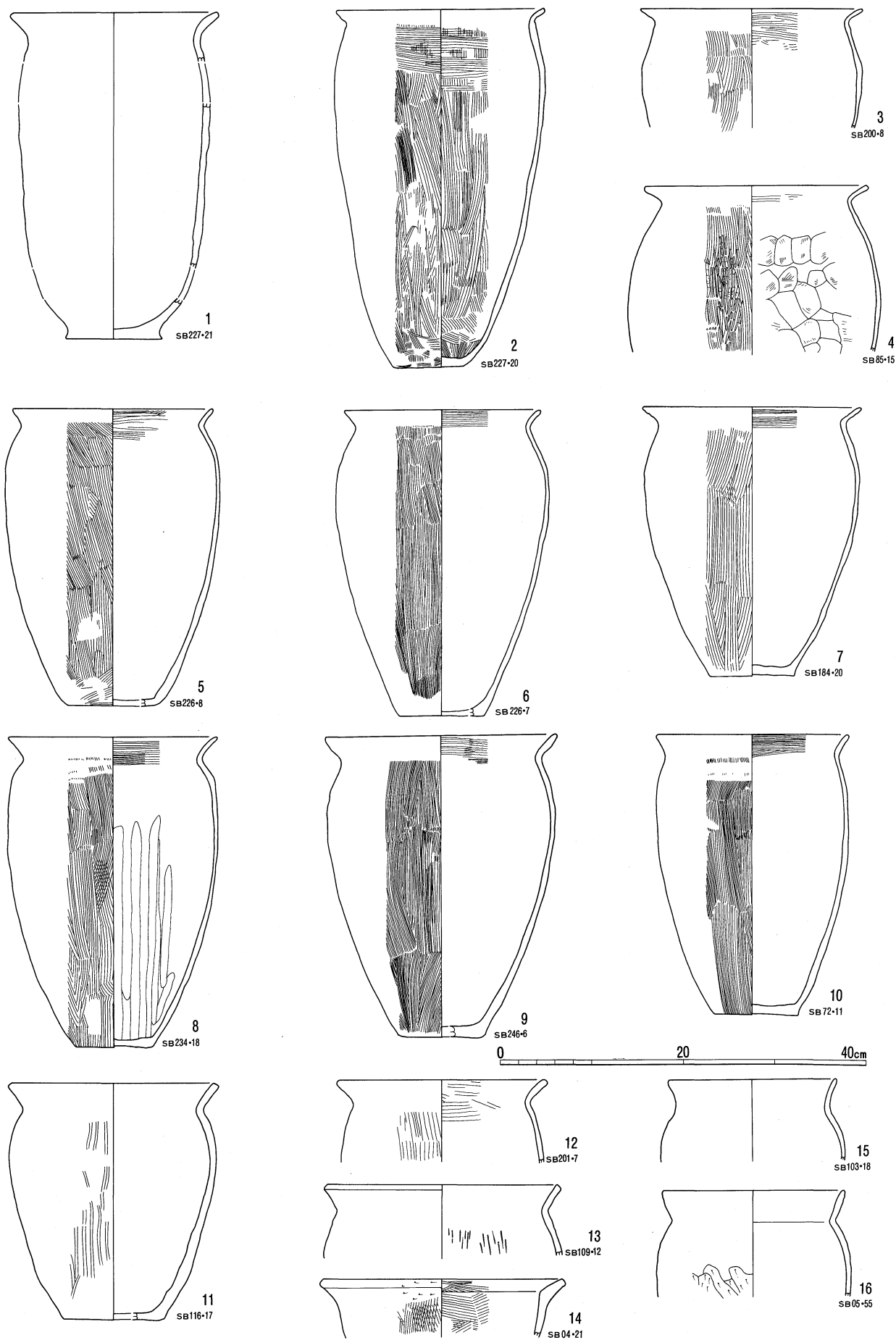
5 煮炊具

(1) 器種構成

煮炊具を大きく分けると、長胴甕、小型甕、羽釜がある。大きな流れをみると、SB227段階では長胴甕A、小型甕Aと、全体をナデで仕上げた器壁の厚い長胴甕Xが存在するが、大小二種の構成である。この傾向は、SB258段階で長胴甕Bや小型甕Bが加わり小型甕Aがなくなるなどの変化がみられるが、SB114段階までは続く。SB114段階で羽釜が出現し、SB32段階で長胴甕と入れかわり、SB31段階まで続く。ただし、SB114段階からSB32段階の間は長胴甕Cや甲斐型の甕があり、混乱した状況がみられる。

(2) 個々の器種について

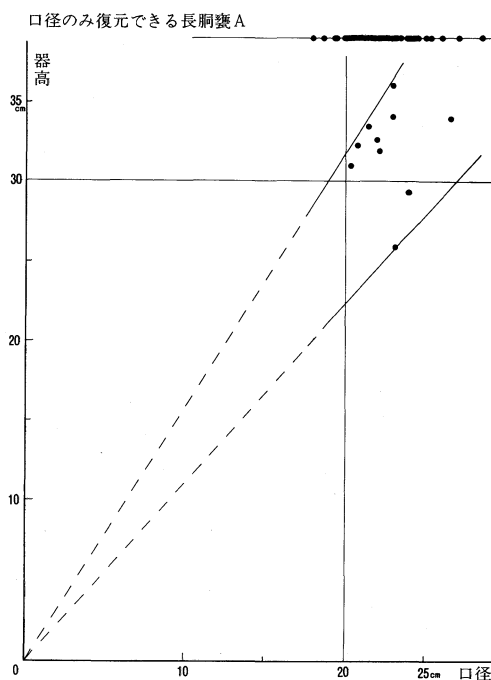
ア 長胴甕(第321図)



第321図 長胴甕 (1 : 6)

① 長胴甕A

SB227段階よりみられ、型式変化しながらSB114段階まで続く。SB227段階(2)では内外面をハケ調整、口縁部のみ横方向のナデで仕上げる。SB258段階(3・4)になると資料は少ないが、内面のハケ調整は口縁部のみとなり、外面の横方向のハケ調整は失われる。形態的には口縁部が短く強く外反するのを特徴とする。SB184段階(5~7)になると外面を3段に分けてハケ調整を行っており、底部周囲をハケ調整やヘラケズリしたものも見られる。内面は口縁部が横方向のハケ調整、体部は縦方向のナデで仕上げられる。形態的には口縁部が前段階と比較して長く外反も弱くなる。この段階の特徴は法量の規格化にある。これはSB144段階においても共通するが、第322図のように口径20~25cm、器高30~35cmに集中する。SB144段階(8~10)でも、口縁部が長く外反が弱くなる傾向は続く。また、頸部に強くナデをいれるため口縁部が肥大したり、口端部を面取りするものもみられる。調整は前段階と同様であるが、ヨコナデが肩部にもみられるようになる。SB111段階では好資料がないが、SB114段階(11~13)になると法量が減少し、それに伴い全体にずんぐりとした形態になる。口縁の肥大化が進み、端部の面取りが顕著となる。ハケ調整も粗くなり内部は省略され、外面のナデの範囲は広がる。



第322図 長胴甕A法量分布

② 長胴甕B

いわゆる「武蔵型」の甕で、SB258段階からみえはじめ、少量であるが一定の比率で存在しており、SB144段階までみられる。形態は、量が少ないことと、非常に薄い仕上のため復元できず、はっきりしない。

③ 長胴甕C

SB114段階(15)からSB32段階(16)までみられる。全体の形態はわからないが、全面をロクロ調整で仕上げたのち体部下半をヘラケズリする。

④ その他の長胴甕

一つは、SB227段階にみられる、器壁が厚く、ナデ調整のみによって仕上げられる長胴甕Xである(1)。木の葉底で体部を直線的に仕上げる。このような甕は古墳時代の伝統を引き、SB01段階でみられなくなる。

次はいわゆる「甲斐型」の甕でSB52段階で1点みられる(14)。口縁をハケあるいはヘラケズリで仕上げ、体部は直線的に下がる。

イ 小型甕(第323図)

① 小型甕A(1・2)

全体をハケで仕上げ、口縁部を大きく外反させる。SB258段階までみられる。古墳時代の系譜を引く小型甕である。

② 小型甕B(3~11・13~17)

ロクロで仕上げる小型甕である。外面の頸部以下をカキメあるいはロクロナデで仕上げ、底部に糸切痕を残す。出現はSB258段階で、量の多少はあるがSB52段階までみられる。形態は共通するが、法量はまちまちであり、口径7cmから16cm、器高9cmから25cmを測る(第324図)。変化がみられるのは、調整と形態である。調整は、SB258段階からSB184段階ではカキメを施すのが一般的で、新しくなるほどロクロナデで仕上げる傾向があるが、最後まで二者は共存する。形態は長胴甕Aと同様に、口縁部が長くなりながら外反

を弱くしている。

③ 小型甕C (12)

SB114段階から量は少ないがみられる。全体をナデによって仕上げている、厚いつくりをしている。

ウ 羽釜・甕 (第326図)

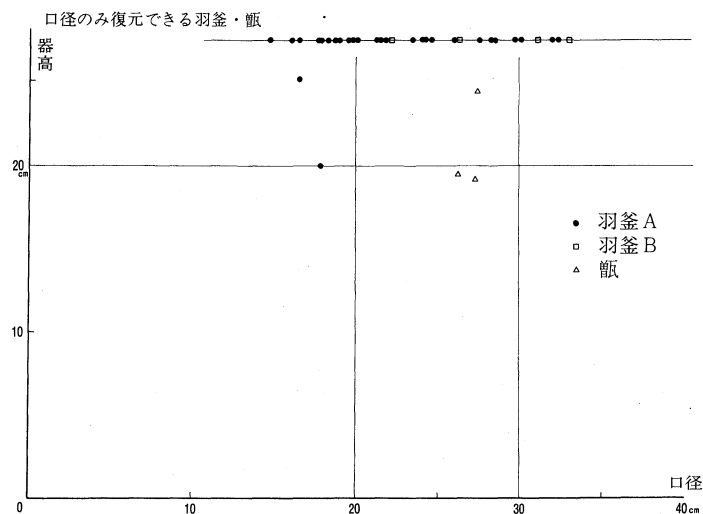
羽釜には大きく分けて二つの形態がある。さらに底を抜いた甕が存在し、それも含めていく。

① 羽釜A (1~4)

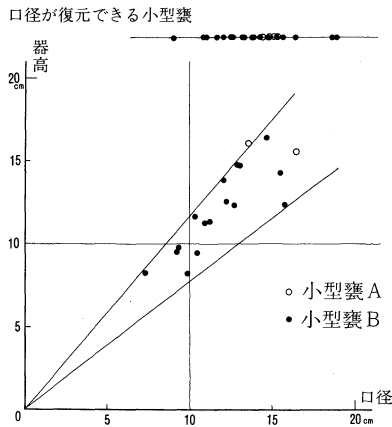
出現はSB114段階である。鋳が全周し、丸底と平底の二種がある。口縁の形態は端部を丸くまとめるものが多いが、鋳の断面形は様々である。しかし、全体復元のできるものが少なく形態についての検討は、今後資料の増加を待たなければならない。法量についても資料数が少ないためはっきりしないが、口径を見る限り15cmから33cmと一定していない(第325図)。調整も、ヘラケズリやヘラ状工具によるナデなど一定しない。

② 羽釜B (7~9)

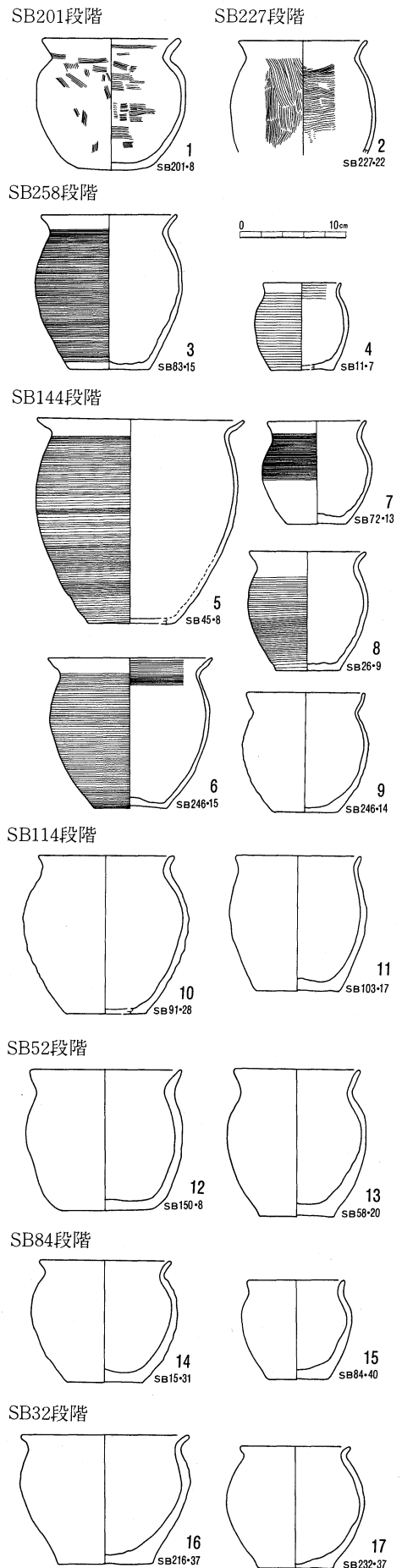
SB74段階からわずかにみられるが、SB31段階には量を増す。しかし、全体の形態がわかるものはない。大きな特徴は、鋳が全周せず把手状にいくつか付けられる点あげられる。このことは鋳をつけることによって、カマドとの密着をよくするという機能を失っている。また、口縁端部が面取りされ平坦に仕上げられるのも特徴の一つである。体部は比較的深くなると思われるが、底部の形態はわからない。この中に含めてよいのかわからないが、鉢



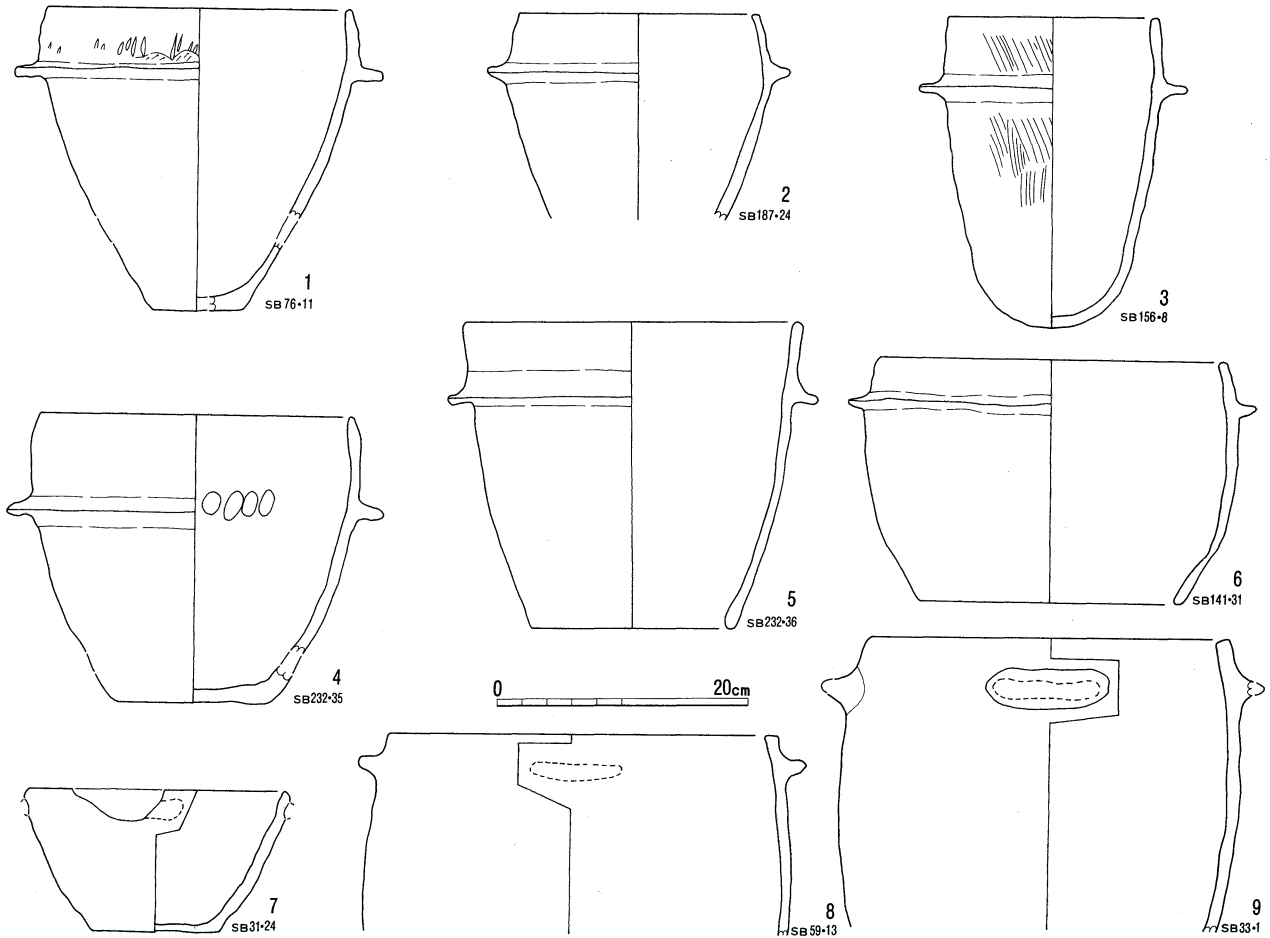
第326図 羽釜・甕法量分布



第324図 小型甕法量分布



第323図 小型甕 (1 : 6)



第325図 羽釜・甑 (1:6)

に把手状のつまみをつけたものもある(7)。

③ 甑 (5・6)

ここでは「羽釜型の甑」を取り上げる。このような甑は、鏝の部分に比べて底部の破片の量が少ないことや、底部が口縁部の破片とよく似ていて見分けがつかないが、比較的多く存在しそうである。調整は羽釜Aとかわりがない。法量は比較的大きなものが多く、羽釜Aの口径のバラツキのうち大型は、甑の可能性もある(第326図)。形態もいろいろあるが、底部端部が肥大化してやや段をつくることは共通する。また、羽釜Aと比較して内面の剝落が顕著である。

エ 足釜

量が少なく全体の形態のわかるものはない。脚部の形態は、獣足状や直線的なものがあり、いくつか形態はありそうである。上部はSK26やSB32の例を見ると羽釜状になる可能性がある。ただし、口縁がやや内湾し、端部を薄く仕上げる点は羽釜と異なる。全体の形態は、長野市大室村北遺跡出土例のようになると思われる(森島1978)。

(3) まとめ

以上煮炊具についてみてきた。そこでいくつかの画期を設定してみたい。

一番大きな画期はSB114段階からSB52段階の間に設定できる。それは長胴甕と小型甕の大小のセットから、羽釜へという器種の大きな変化である。これは古墳時代からの伝統がここで途絶えたことを示している。さらに、煮炊具全体の量の減少をあげなければならない。それ以前は、カマドの周辺より多量の長胴甕が出土するが、SB114段階以降長胴甕も羽釜も出土量は極端に減少する。これが使用法の変化によるも

のなのか、他の理由によるのか、その背景はわからない。次に小さな画期は、SB01段階あるいはSB258段階である。それは主に、生産に関する部分の可能性が高いが、長胴甕と小型甕の規格化である。それ以前は何種類かの甕があり、形態と法量は一定ではなかったが、ここで長胴甕Aと小型甕Bという規格化された二種が登場する。この背景は、小型甕へのロクロ技術の導入、わずかに一点ではあるがタタキ技法を持った長胴甕A (SB85・15) の存在など、須恵器生産からの煮炊具生産への何らかの関与が考えられよう。ただし、使用法に関しては、小型甕AとBでは法量が同じ点(第324図)や、長胴甕の形態も変わらないことから、変化はなかったと思われる。

最後にSB31段階の後に、土器による煮炊具の消滅ということで、大きな画期としたい。

次に煮る、蒸す道具という点からみると、前者が圧倒的に多い。特にSB114段階まで甗はほとんど見られない。ところが、SB32段階から「羽釜型甗」が出現しその量は増加し安定する。しかしこのことから蒸す調理法が古墳時代の後にいったん下火になり、11世紀に本格的に復活したとは速断できない。

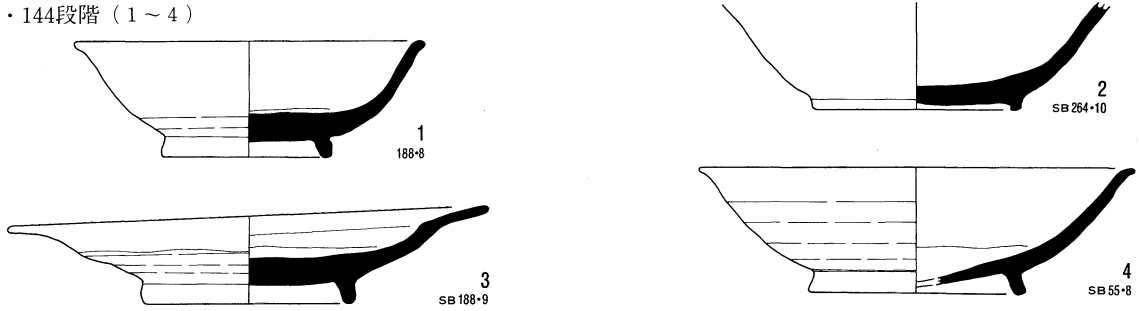
6 搬入品

(1) 灰釉陶器 (第327~329図)

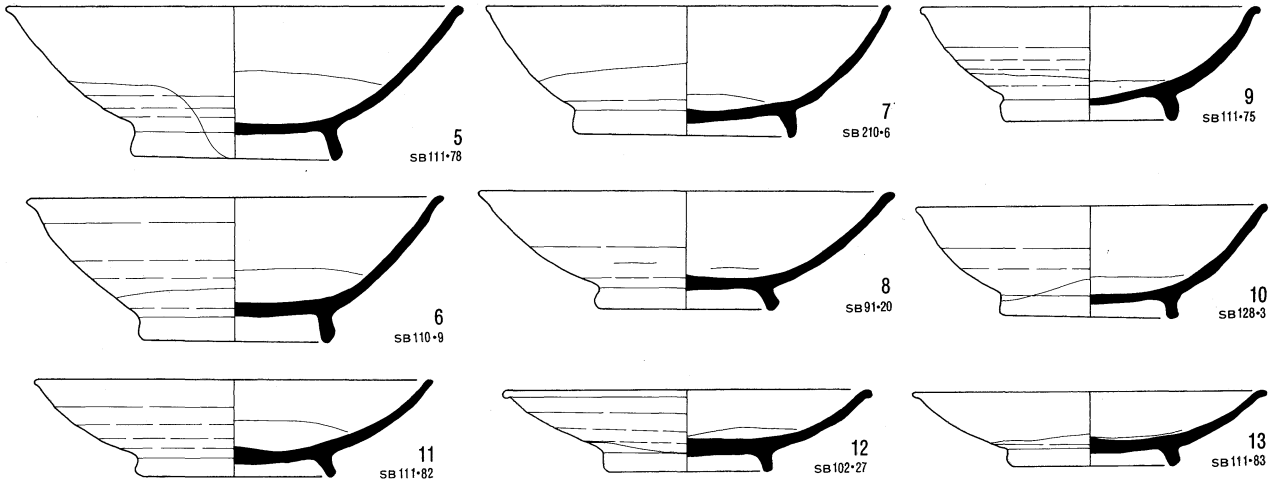
出土量の多い食膳具にしぼって考えたい。また、山茶碗についてもここでふれることにする。

まず搬入の始まりは、少量であるがSB184あるいはSB144段階である。それらはトチン痕を持ち内面のみを施釉した椀(第327図2)や、自然釉のみで重ね焼きをした椀・皿(第327図1・3)、全体をハケ塗りした椀(4)などがある。このほか長頸瓶、手付き瓶(SB170・10)などもある。SB111段階になり多量に搬入され始める。それは、この段階以前の特殊品的なあり方と異なり、日常の食膳具として考えられる量である。椀をAとBに分けた場合、椀Aがほとんどで大(5・6)、中(7・8)、小(9・10)の三法量がある。皿は皿B(11~13)がほとんどで、二法量に分けられそうである。いずれもハケ塗りで、体部下半をヘラケズリし断面三日月型の高台が付く。SB114段階では椀Aが主体で大(14・15)と中(16・17)の二ないし三法量もつ。皿B(18~20)の量も多い。漬け掛けが一般的だが、わずかにハケ塗りもみられる。SB94段階では椀A(21~29)が主体であるが、わずかに器高の大きい体部下半が張る椀Bもみられる。また、大型の椀Aには口縁をつまむ輪花が施される例もある(21・22)。皿は皿B(27・28)が主体で、皿C(29)もわずかにみられるようになる。皿Bの法量は減少傾向にある。SB52段階になると椀B(30~32)の量が多くなり、椀A(33~36)と匹敵するようになる。椀Bは器高が大きく体部下半が張るが、高台の形態は三日月型を呈するものもある。椀Aは大小二法量が認められる。皿は皿B(37~39)と皿C(40~42)があり、その量は後者が増大してほぼ同量になる(第330図)。皿Bより皿Cの口径が大きい。SB84段階では椀A(48)の比率が低下し、椀B(43~47)が主体となる。椀Bは体部下半を大きく張らせ、比較的長く直立する高台がつく。皿は皿B(49~51)と皿C(52~54)がほぼ同量であり、後者の口径が大きく、底部裏面を大部分回転ヘラケズリ調整が行われ、皿Bは糸切り痕を残す。この他椀Cもみられるようになる。SB32段階では、椀Aがほとんどなくなり椀B(55~63)が主体となる。椀C(64~66)の量も多くなる。このように、椀は形態の共通する大小二法量を確実にもつようになる。椀Bは体部下半の張りは弱くなり、高台も外傾するものが多くなる。また底径も小さくなり、縦長の輪花がいくつかみられる。椀Cの形態は椀Bをそのまま小さくしたようで、同じように縦長の輪花がつけられる。皿は皿C(69~72)がほとんどとなり、その口径は減少し内面の段も不安定になる。SB74段階になると、椀全体にしめる灰釉陶器の量が、他の在地産の土器を圧倒するようになる。やはり椀B(73~78)が主体で、前段階の傾向が続き底径は小さくなり、体部下半の張りも弱くなり、高台の形態は大きく外傾し断面が三角形となるものもみられる。椀C(79・80)は器高を減少させてくる。皿は皿C(82~84)がほとんどとなり、口径が減少し内面の段は不安定である。わずかに皿D(81)がみられる。SB31段階になり、灰釉陶器の量は

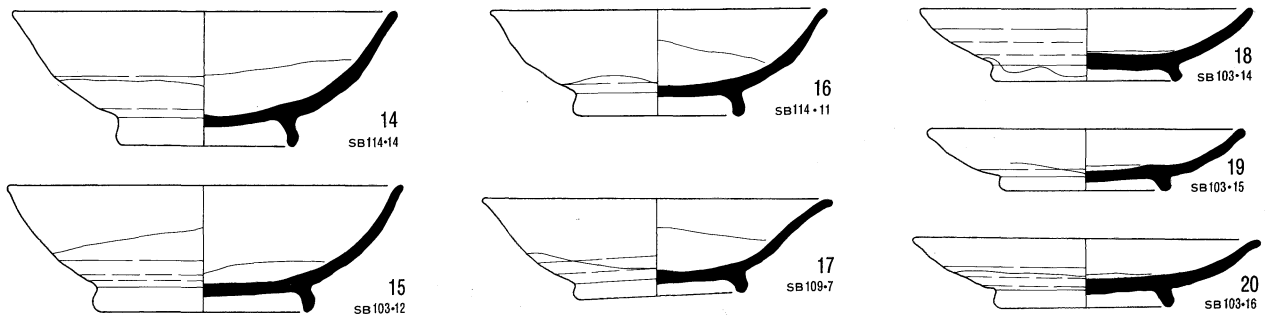
SB 184・144段階 (1~4)



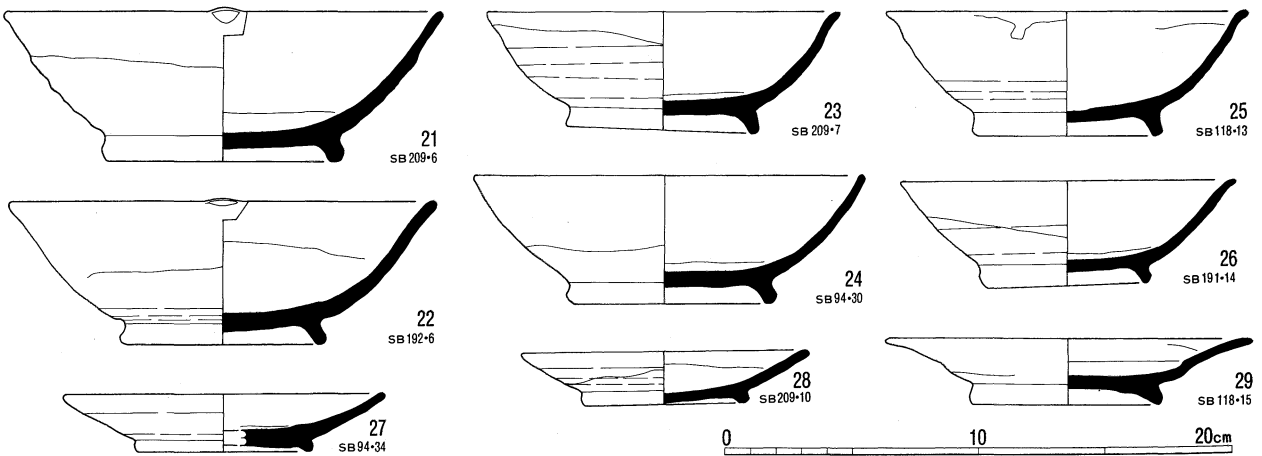
SB 111段階 (5~13)



SB 114段階 (14~20)

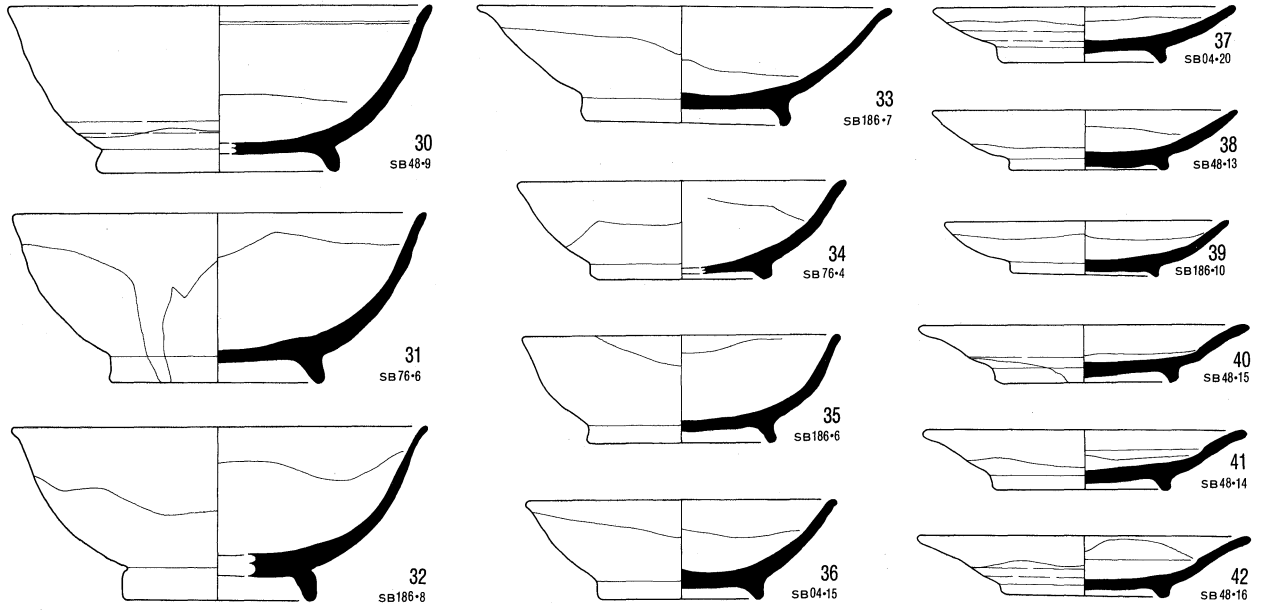


SB 94段階 (21~29)

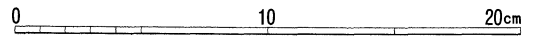
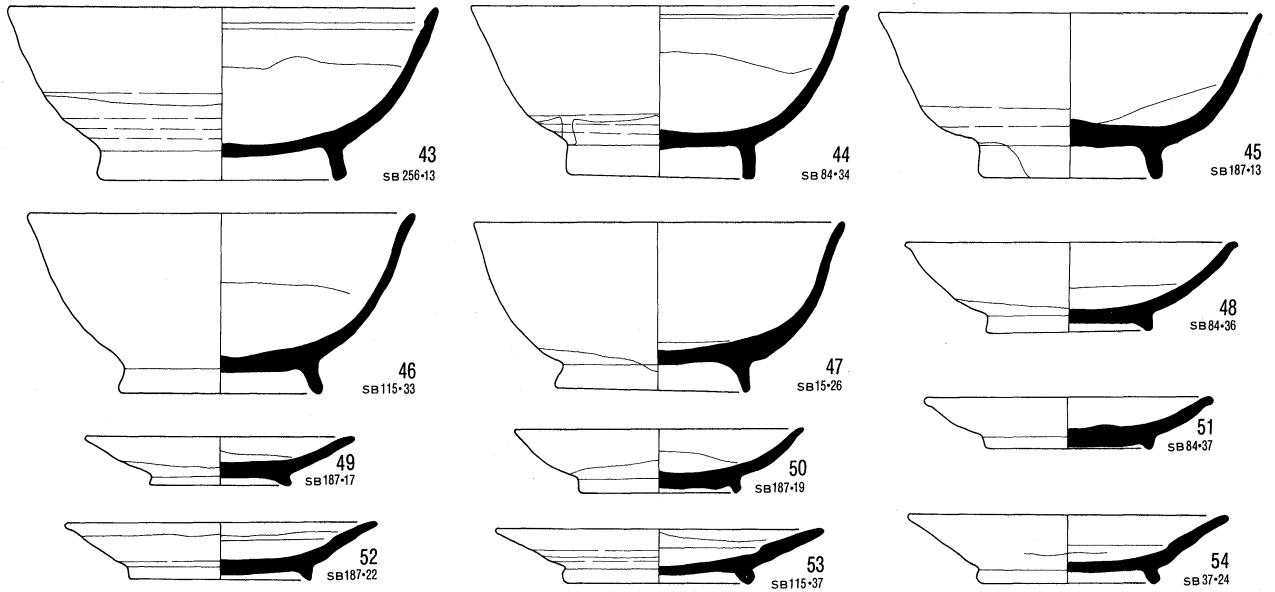


第327図 灰釉陶器 1 (1:3)

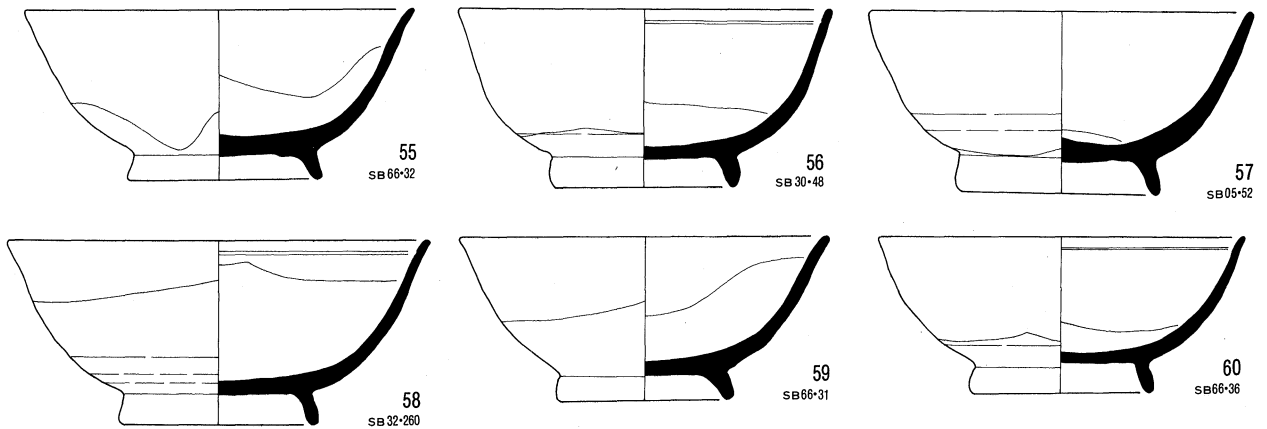
SB52段階 (30~42)



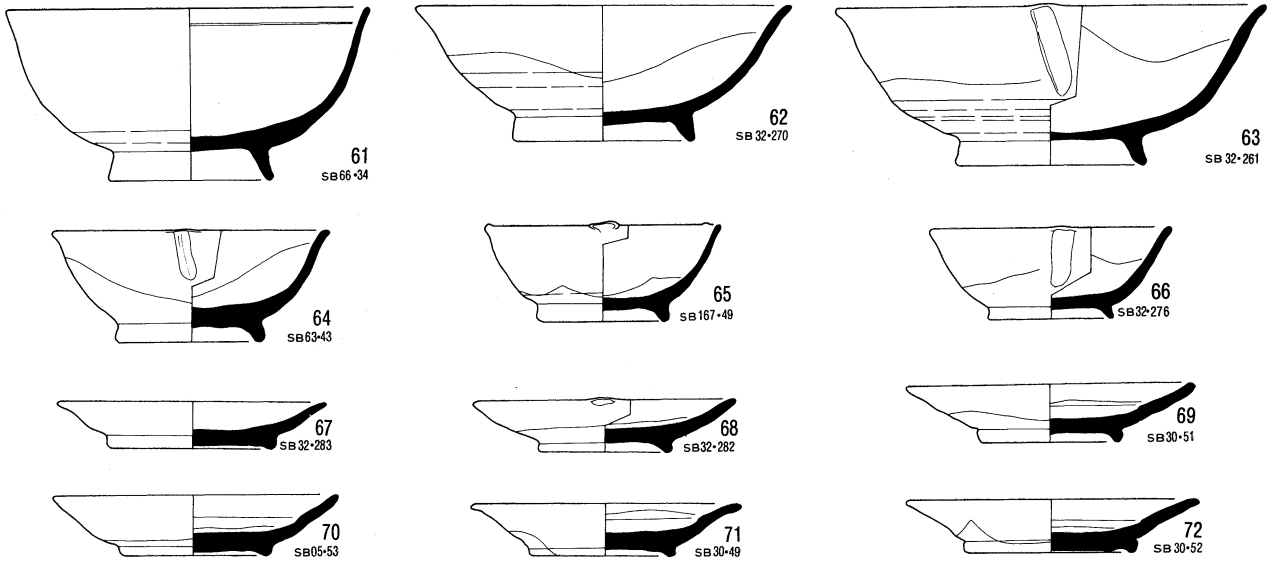
SB84段階 (43~54)



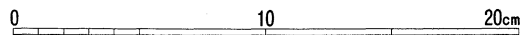
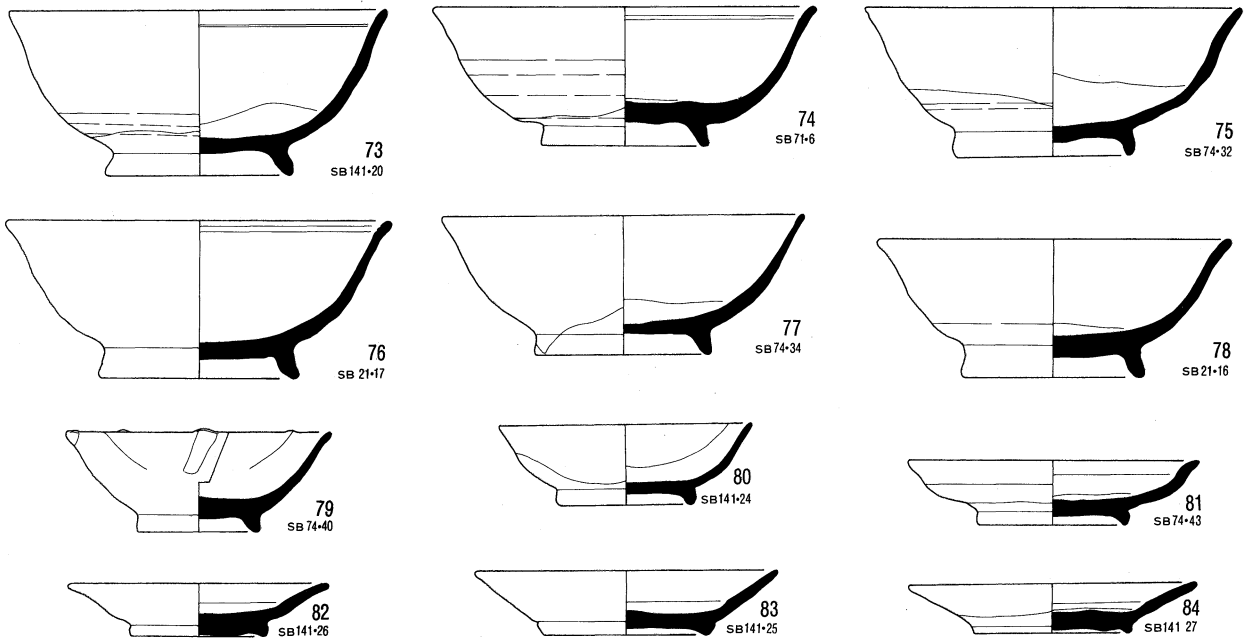
SB32段階 (55~72)



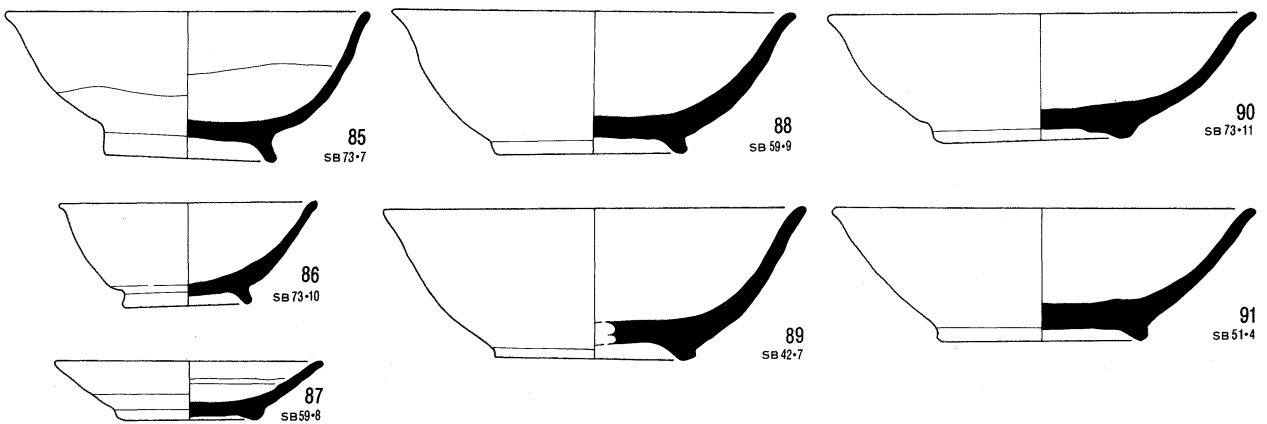
第328図 灰釉陶器 2 (1:3)



SB74段階 (73~84)



SB31段階 (85~91)



第329図 灰釉陶器 3・山茶碗 (88~91) (1:3)

減少する。かわりに山茶碗がみられるようになる。量の少ない灰釉陶器は碗B(85)と碗C(86)がみられる。山茶碗は碗(88~91)のみであり、形態は灰釉陶器に比較して口径は大きく器高が小さい。また、高台は器高が低く靱殻痕がみられる。

器種の変化を、形態の変化にふれながらみてきた。そこで器種構成の画期を考えることにする。一つは、碗Aと碗Bの交代がみられるSB52段階からSB84段階である。しかし、この段階では碗AとBの区別がつけ難い形態も多く存在する。とくにSB52段階では、従来碗Aに多かった断面三日月の高台が碗Bにもみられる(註6)。新しい傾向がはっきりするのは、SB32段階である。この変化は、碗Aが三法量に対して、碗Bと碗Cという二法量へという変化でもある。また、皿がBからCへという量の変化がみられるのもこの時期である(第330図)。碗の変化は灰釉陶器ばかりではなく、在地の土器にもおこっており、時期もほぼ一致している。

次の画期は、碗と皿という構成が崩れ始めるSB31段階である。

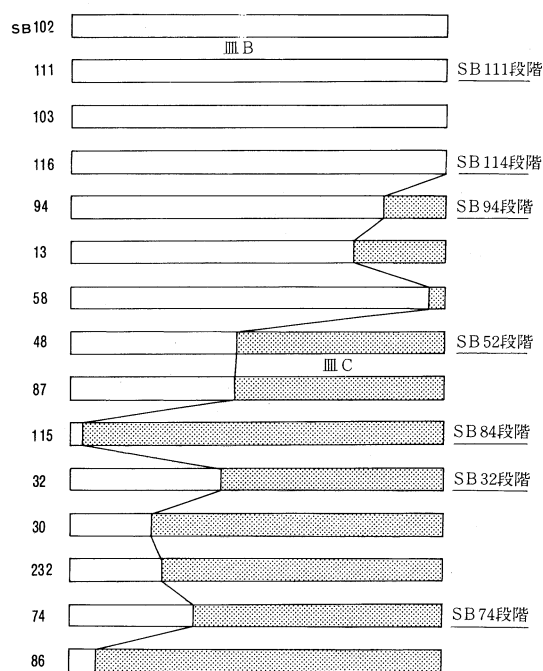
次に産地との関連を考えてみたい。SB111段階までは猿投産、尾北産、東濃産と複数の産地が認められる(註7)。しかしSB111段階になると、搬入量の増大とともに東濃産がほとんどとなる。この傾向はSB74段階まで続く。尾北産はSB114段階で姿を消す。SB31段階で山茶碗が主体になると、圧倒的な量をほこった東濃産が姿を消し、尾張産にかわってしまう。SB111段階の東濃産の流入は、その生産を開始する時期と対応しする。それに対してSB31段階での急減は、流通ルートの変化によるものか、東濃窯の生産減少のためか判断はできない。

窯式との比較をしてみたい(第114表 註8)。SB144段階では、猿投産が黒笹14号窯式および90号窯式、尾北産はS-4型式がはいる。SB111段階では東濃産光ヶ丘1号窯式、SB114段階では大原2号窯式が多く、光ヶ丘1号窯式がわずかにはいる。SB94段階では大原2号窯式が、SB52段階では虎溪山1号窯式が主体である。SB84段階では虎溪山1号窯式が主体で、丸石2号窯式がわずかにはいる。SB32段階では丸石2号窯式が主体であり、SB74段階になると(仮)大原10号窯式が主体で、丸石2号窯式が入る。SB31段階では(仮)大原10号窯式がはいるが山茶碗(藤沢編年4型式)がほとんどとなる。


最後に若干の考察をしてみたい。まず在地産の食膳具との関連では、第三段階では土師器が日常生活以外で、使用される場合が多くなったと考えられることから、灰釉陶器が日常の生活に土師器より高い比率で使われた可能性が高い。この点については今後の検討課題でもある。しかし、この灰釉陶器の食膳具の中に占める役割の増大は、在地産食膳具が失われる直前のSB31段階で、碗は山茶碗(搬入品)、皿は土師器(在地生産品)という状況を生み出す。器種別分業を中世窯業の特徴とするならば、中世へ足音を高めた構成である。次に碗における変化の内容及び時期、在地産の食膳具の変化が一致する点である。これは偶然ではなく全国的な食膳具の変化の中で、灰釉陶器の生産地として変化を要求された結果だと思われ、同じ変化の波を受けた在地の食膳具構成に共通点を持つのは当然と言える。

(2) 緑釉陶器 (巻頭図版3・4 第332・333図)

緑釉陶器は調査区全域から出土しており、その点数は612点を数える(第110・111表)。その量は松本平でも



第330図 灰釉陶器皿出土割合の変遷

類別	胎土	釉				技法	高台	器種	輪花・その他
		色調	ツヤ	釉着	施釉部位				
a	灰白色 やや硬質	淡黄色 あるいは 淡緑色	有	良	全	器面全体をヘラミガキによって仕上げる		椀、皿、三足盤、段皿、双耳壺、水注	ヘラで刻む輪花
b	灰白色 やや硬質	淡黄緑色	有	良	全	ロクロケズリ痕が残り、一部ヘラミガキ		椀、皿、耳皿	口縁をつまむ輪花 内面に細い圈線
c	薄い青灰色 硬質 須恵器的	緑色	無	不良 まだら	全	ロクロナデのみで、ヘラミガキはほとんどなし		椀(2~3法量)、皿、段皿、耳皿	輪花なし
d	暗黒灰色 硬質 須恵器的	濃緑色	有	良	全	器面全体をヘラミガキによって仕上げる		椀、皿、段皿、水注、合子	輪花なし
e	白色 軟質	濃緑色	有	良 はげやすい	全	ロクロナデのみで、ヘラミガキはほとんどなし		椀、皿、稜皿、水注	縦長のヘラによる輪花 口縁に三角形の刻み
f	暗青灰色 硬質 須恵器的	濃緑色	有	良	底部裏面をのぞく	ロクロナデのみ 糸切痕を残す		椀、皿、耳皿	?
g	青灰色 硬質	緑色	無	良	全	ロクロナデのみ		椀	
x	上記以外								

第109表 緑釉陶器の分類

群を抜いており、当地方の緑釉陶器の推移の一端を知ることができる。

ア 分類

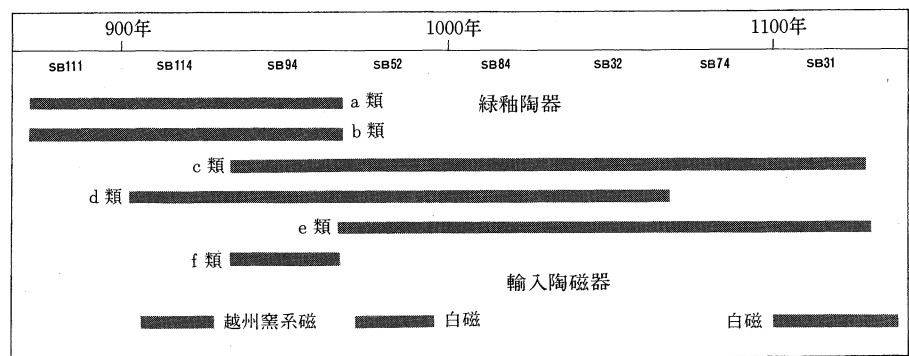
釉調(巻頭図版3・4参照)、胎土、技法、高台の形態より、第109表のように分類した。この他分類不能の小片が若干ある。なお、削り出し高台はなく、すべて付け高台である。

イ 時間的な流れ

分類にしたがって出土した住居址を並べると第110表のようになる。搬入の開始は9世紀後半で、搬入の終了は12世紀前半となるが、混入の可能性もある。各類の時期的な変化は、第331図のようになる。このことから大きく a・b → d (f) → e・c という動きが想定できる。また、遺構外より出土する緑釉陶器の分布はその時期の住居址の分布と一致している。

ウ 生産地

今回出土した緑釉陶器は、生産地や畿内の研究者の指導を得た(註9)。しかし、生産地に関する見解は必ずしも一致していない。そこで生産地の特定はできないまでも、その系譜について考えてみたい。



第331図 緑釉陶器・輸入陶磁器の搬入

寺島孝一は平安京出土の

時 期 (杯A区分)	遺 構	分 類							時 期 (杯A区分)	遺 構	分 類						
		a	b	c	d	e	f	g			a	b	c	d	e	f	g
SB111段階	SB102	2	6						SB32段階	SB 32			54	6	44		
	110		1							36					2		
	111		2							63			1				
	181		1							80					1		
	210	1	1							99			5				
	SK202	1								169			1				
	203	1								235			1				
SB114段階	SB 96	1								263					1		
	109	1								SK 42			3				
	114		1							43				1			
	116	1								182			2				
	129				1			1		SD 17			11	1			
	159				1					18			1				
	222				1					19			2				
	SK151				1					25			3	1			
SB94段階	SB 94	3	1		1			3		SX 21			1				
	101	1							SB74段階	SB 65					1		
	118	1		3	1					74			6		2		
	191		2							78			1				
	233		1							98						1	1
	237			2						141			2		1		
	SK128							7		178	1						
SB52段階	SB 04					2				203			1				
	19					2				SK316			1				
	52			3					SB31段階	SB 28					2		
	123			1						31			6			1	
	186			3						64					1		
	SK129				2	1				68			1				
SB84段階	SB 37			1													
	84					1											
	115			1		2											
										73					1		
	120					1			SB52あるいは SB31段階	SB 69	1		10		13		
	124	2															
SB32段階	SB 30					3			合 計		17	16	127	17	81	10	2

第110表 遺構出土の緑釉陶器
(破片数 接合したものは1点と数える)

緑釉陶器をAからCに分けている(寺島1976)。A類は付け高台で丁寧な仕上げをしておりトチンを用いていることから猿投系、B類は削り出し高台や重ね焼きの使用などを特徴とした官窯系で生産地を畿内周辺、C類はB類と異なり付け高台で生産地は近江地方に求めている。しかし、大きくはA類とB類に分けられそうである。今回出土した緑釉陶器はこの分類でいくと、付け高台である点とトチンを使っている点で、すべてA類、すなわち猿投系になり、広義の意味で東海系とすることができるであろう。6分類した緑釉陶器は時期的に先ほど述べたような動きが、伴出する在地の土器から考えられた。さらに細かく高台の形態を見ると、 $a \rightarrow b \rightarrow (f \rightarrow d) \rightarrow e \rightarrow c$ という形態変化を考えることができる。この点からすれば、一つの技術系譜とも思える。しかし、焼成と技法が異なり、産地は一つでない可能性がある。a～f類の中で生産地に対する見解が一致するのは、a類が猿投産、f類が近江産の二つである。このことからすると、近江産の緑釉陶器は地理的には畿内に近いが、猿投系の技術系譜上にあるのではないと思われる。

エ 器種 (第332・333図)

碗は、a類(1)とb類(8～12)がゆるやかに立ち上がる碗Aの形態をとるのに対して、c類(16～22)・e類(41～44)・f類(50～51)は体部下半を張らす碗Bの形態をとる。輪花も灰釉陶器と同様に、碗Aには口縁をつまんだ形態に対して(b類 8)、碗Bは縦長の刻みあるいは凹みがみられる(e類 41～43)。また、41のように口縁を三角に刻むものもみられる。数の多いb類とc類の法量をみると、前者が一法量であるのに対して、後者は大・中・小の三法量あるようである。たお、a類とb類には印刻花文を施した碗も見られる。

皿は皿Bと皿Cがみられる。そのほかa類には印刻花文の皿C(3)がみられ、c類には口縁を三角形に刻む輪花をもつ稜皿がみられる。

耳皿はいずれの類にも見られ、高台を付けている。ヒダはつけられず、皿を折り曲げた形態である。

食膳具以外では、a類に三足盤(6)や双耳壺(7)、d類に合子(40)、d類とe類に「平出タイプ」の水注(39・49)がみられる。

オ 使用痕

使用痕はいくつか観察できる。一つは高台の端部であり、摩耗がいくつかに見られる。とくに、SB148・3のようになら摩耗して端部の稜が失われたものもある。また、内面にも使用痕がみられる。とくに50と51の碗には内面の釉がすれている部分がある。このようなことから、緑釉陶器は日常雑器とまではいえないまでも、かなり頻繁に使われていたものと思われる。

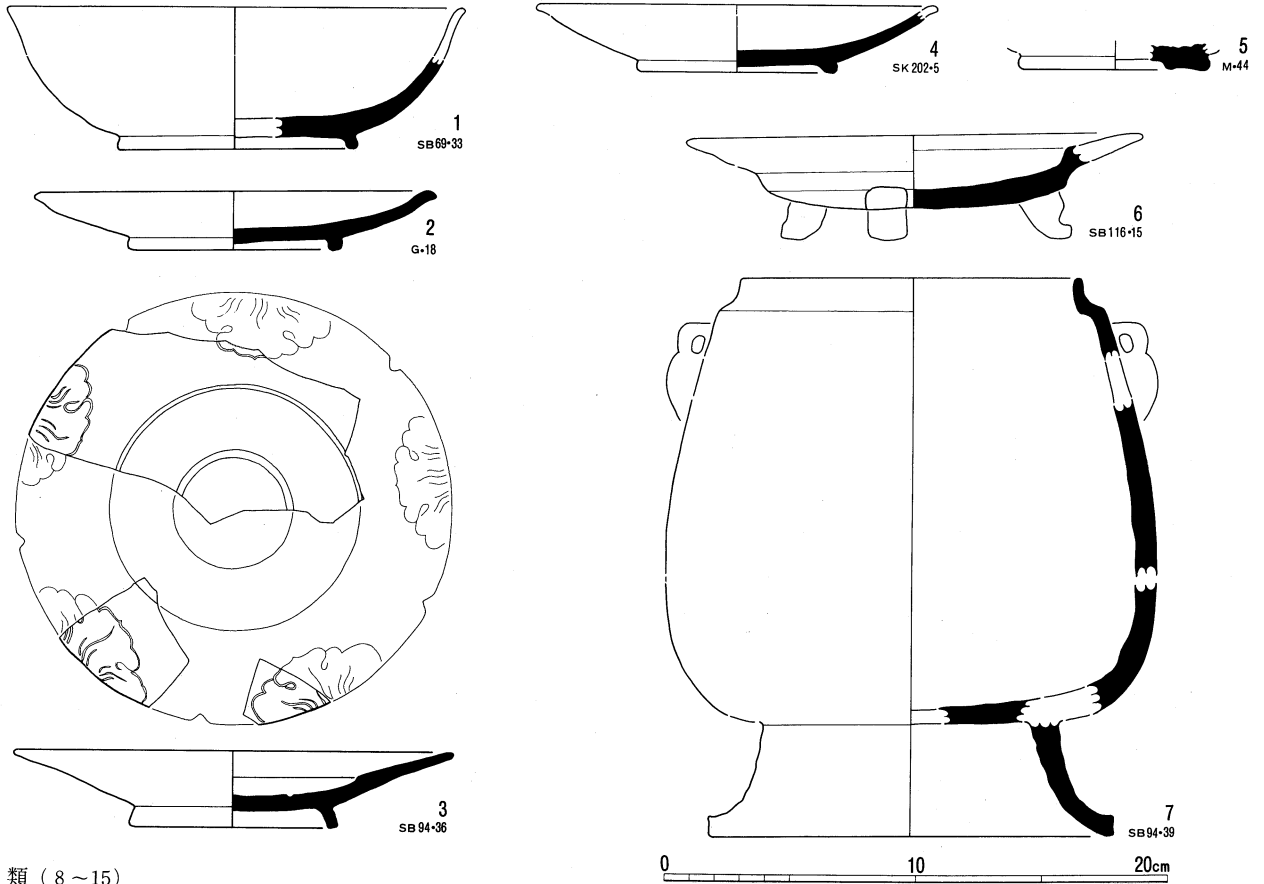
カ まとめ

緑釉陶器について分類を行い、いくつか気づいた点にふれてきた。近年松本平でも三間沢川左岸遺跡(註10)、あがた遺跡(註11)などの集落遺跡においても、多数の緑釉陶器が発見されるようになってきた。しかし、

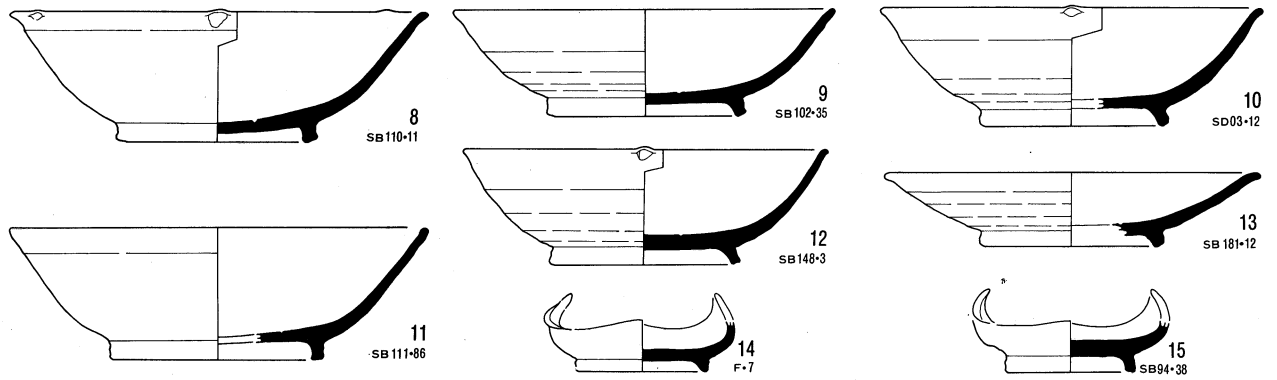
分類 地区	a	b	c	d	e	f	g	計
F	4	3	3			1		11
G	3	7	2			1	1	14
H	3		3			2	2	10
I			3	1	1		1	6
J			1		2			3
K	1							1
L	13	24	1	1	5	5	3	52
M	16	11	6	1	2	2	9	47
N			49	15	14			78
O	5	1	68	16	15	3		108
R			6			1		7
S	1		1	1	2			5
計	46	46	143	35	41	15	16	342

第111表 遺構外出土の緑釉陶器
(破片数 接合したものは1点と数える)

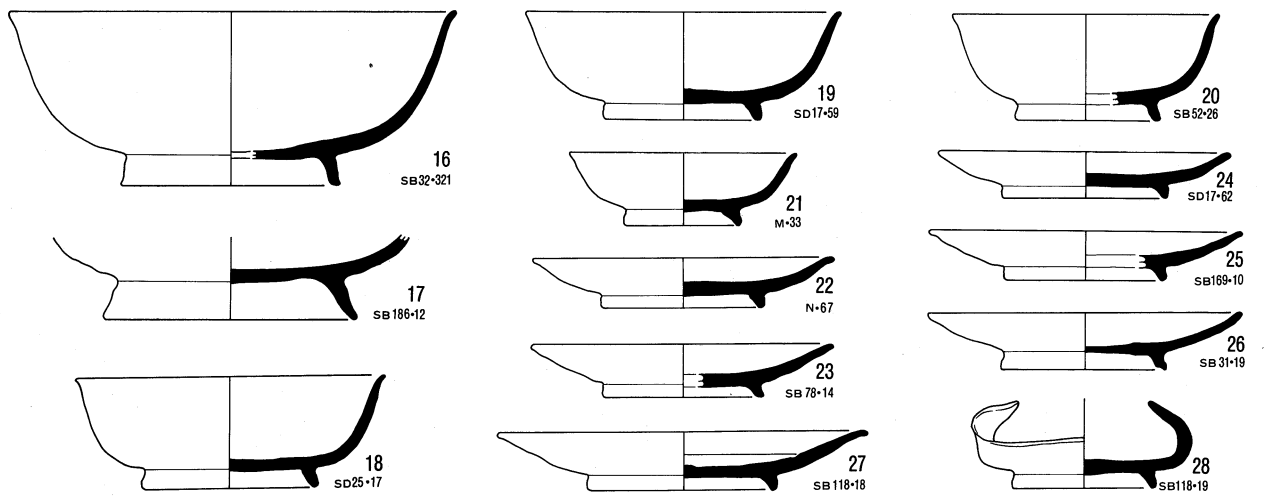
a類 (1~7)



b類 (8~15)

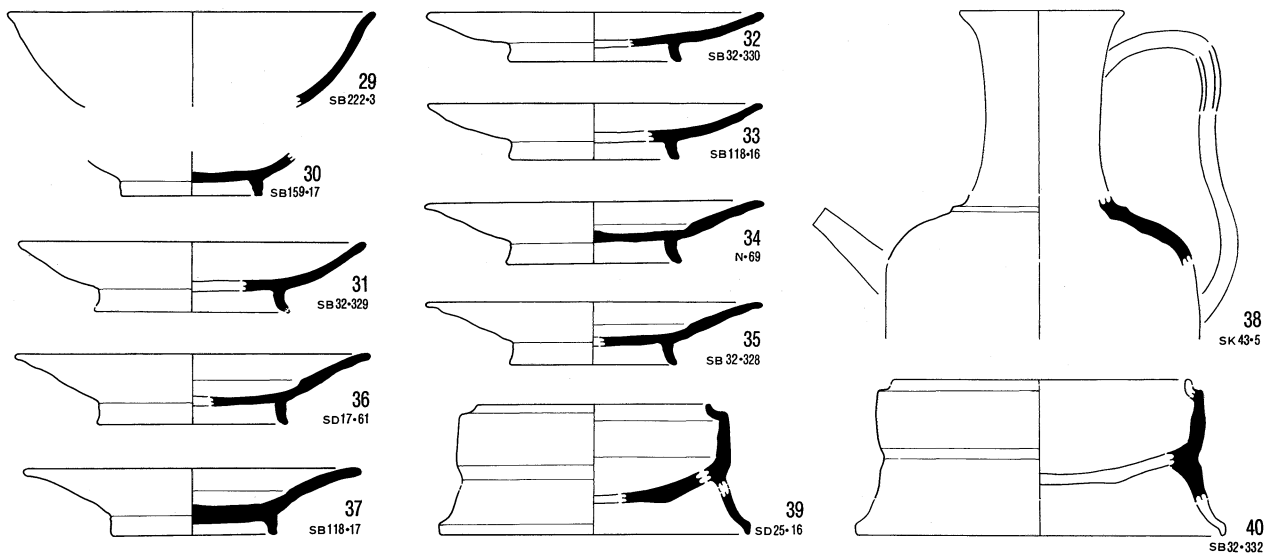


c類 (16~28)

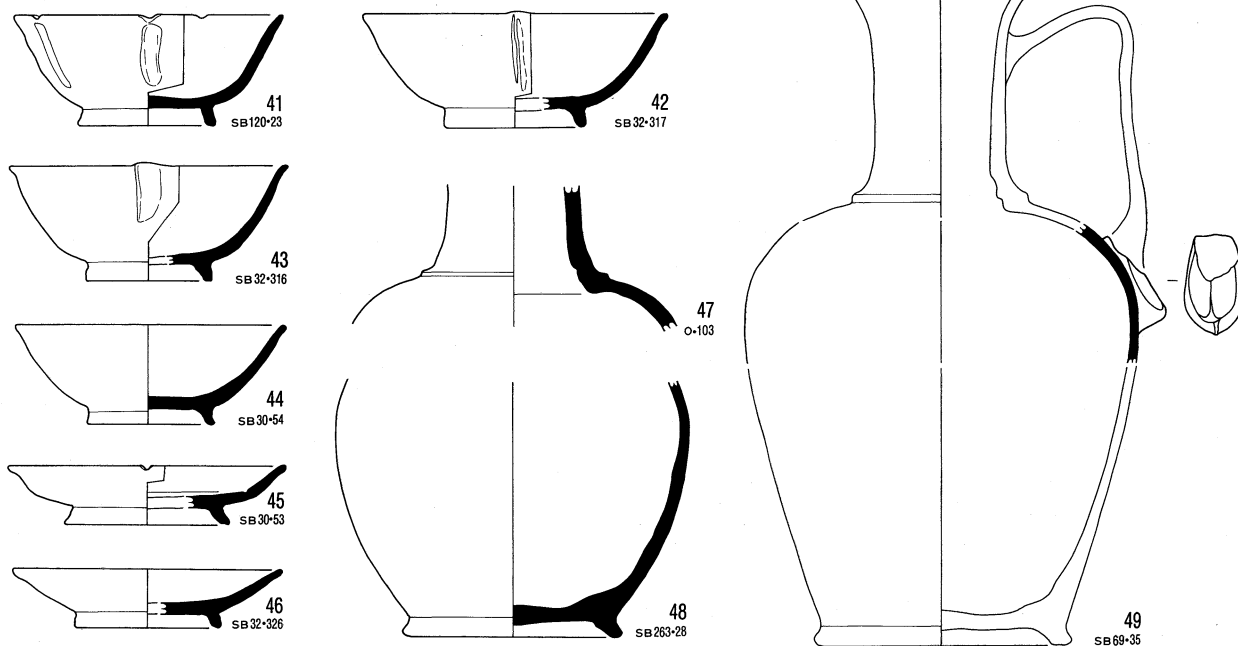


第332図 緑釉陶器 1 (1:3)

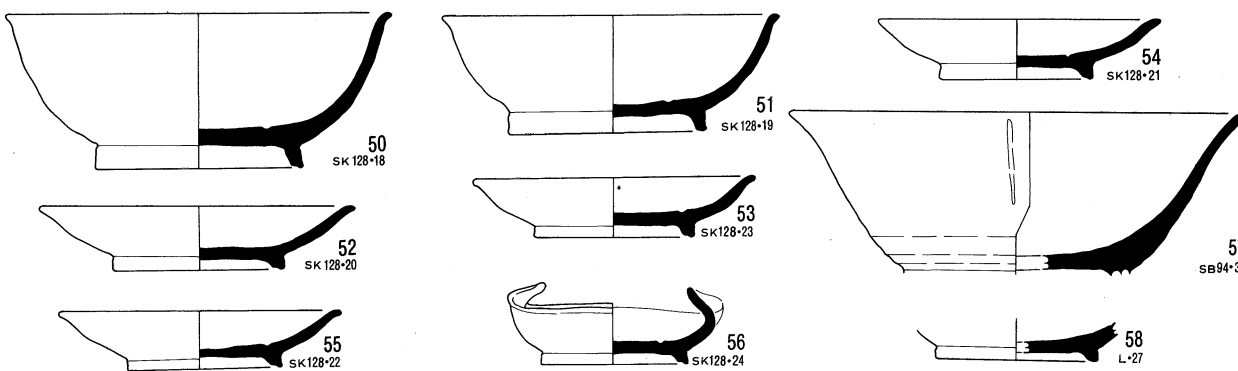
d類 (29~40)



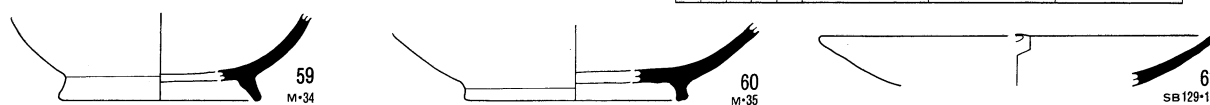
e類 (41~49)



f類 (50~58)



g類 (59~61)



0 10 20cm

第333図 緑釉陶器 2 (1:3)

遺構		分類		越州窯系青磁碗	白磁鉢	白磁Ⅱ類碗	白磁Ⅳ類碗口縁	白磁Ⅳ類碗底部	白磁Ⅴ類碗口縁	白磁Ⅴ類碗底部	白磁Ⅶ類碗口縁	白磁Ⅶ類碗底部	白磁Ⅳ・Ⅴ類体部	白磁皿	白磁不明	白磁壺	青白磁皿	青白磁不明	合計	
		番号	時期 (杯A区分)																	
SB28	SB31				1															1
SB31	〃								1					2			1	1		5
SB38	〃				1															1
SB42	〃				3								2					1		6
SB51	〃				5								1	1						7
SB57	〃				1															1
SB59	〃				4				1					1				1		7
SB68	〃				1								1							2
SB69	〃				2	1							1	2		1				7
SB98	SB74															1				1
SB122	SB52	1																		1
SB222	SB114				1															1
合計		1	1	18	1	0	2	0	0	0	0	0	5	6	0	2	1	3		40

第112表 遺構出土の輸入陶磁器

分類	地区																不明	計		
	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	R	S	T						
越州窯系青磁碗							1			1										2
白磁鉢							1													1
白磁Ⅱ類碗				1						4	30	2	2	6	1					46
Ⅳ類碗 口縁	1			1				1		1	25	2		7	1	1				40
〃 〃 底部											1	2			4	3				10
Ⅴ類 〃 口縁				3					2	8	10	1		11	2					37
〃 〃 底部														3						3
Ⅷ類 〃 口縁				1	1				2	1	2			2						9
〃 〃 底部											1	2		4						7
Ⅳ・Ⅴ類碗 体部		1	5	4	1			2	2	13	41	3	6	30	10	6				124
皿									2	5	12	5		8	4	4				40
不明			2						1	2	7			5	2	2				21
計	1	1	11	7	1	1	4	11	37	131	13	8	80	23	13					340

第113表 遺構外出土の輸入陶磁器

(破片数 接合したものは1点と数える)

本遺跡の出土量は群を抜いている。搬入され始めるのが9世紀後半、それ以後11世紀前半をピークにして搬入され続ける。このことは集落の性格に起因すると思われる。

(3) 輸入陶磁器 (巻頭図版5)

10世紀から16世紀にわたる多数の輸入陶磁器が発見された。ここでは12世紀代の北宋後半期までを扱うことにする。その出土数は、遺構内についてみれば第112表のようであり、遺構外は第113表のようである。総数は380点である。ここではそれを器種ごとにみて、その後若干のまとめをしたい(註12)。

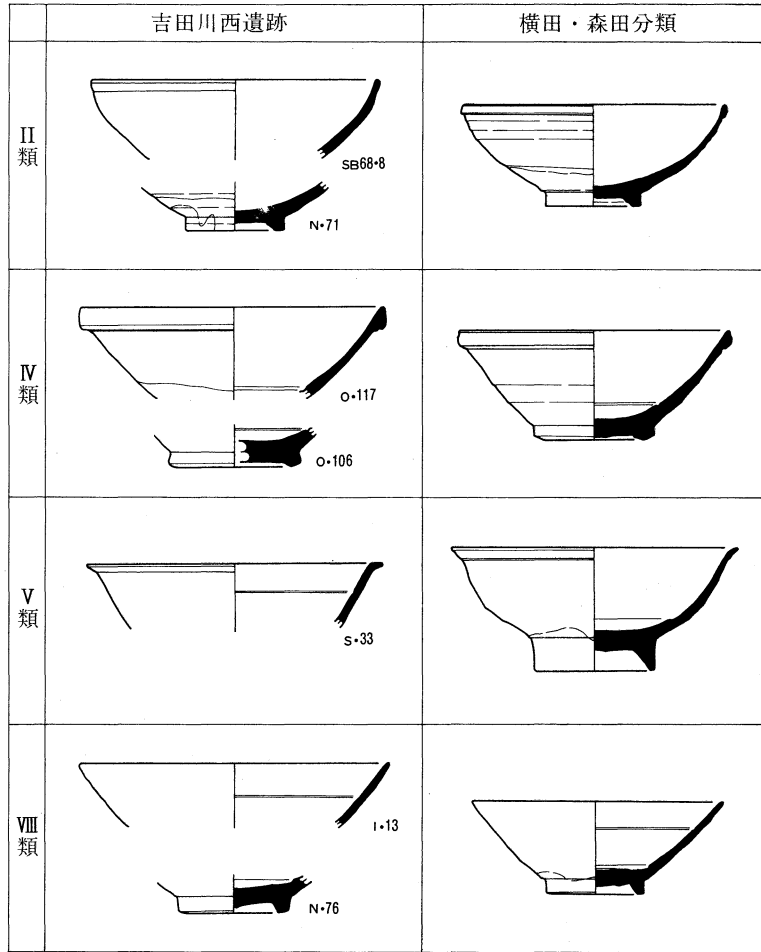
ア 器種

① 碗 (第334~336図)

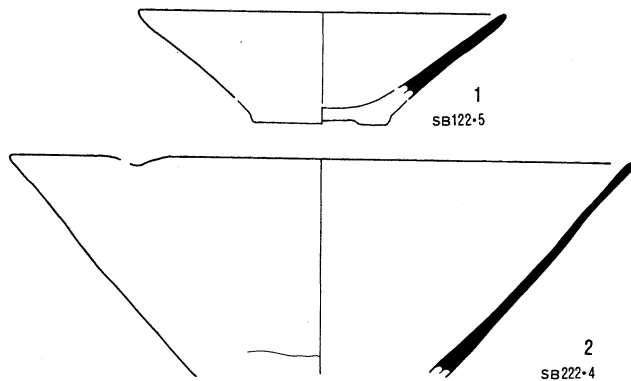
白磁碗の分類は、第334図のように横田・森田分類にしたがう(横田・森田1978)。それによれば、ほとんどがII・IV・V・VIII類に分類される。しかし、体部破片からはII類の抽出はできても、IV・V・VIII類の分類はできない。とくに、V・VIII類は底部がなければ分類できない。そのため森田・横田分類の意図には沿わない点もであるが、口縁が端反りするものをV類、口縁部直線的に立ち上がるものと底部に輪状の釉を拭った跡のあるものをVIII類としておく。出土量はIV・V類が圧倒的に多く、ついでII類が多い。しかし、竪穴住居址からの出土はII類が多い。この違いをどのように理解するのか問題の残るところである。

この他、越州窯系青磁が総数で3点出土している。SB122からは口縁部がやや肥大した直線的に立ち上がり、下部を欠損するが蛇の目高台がつくと思われる碗が出土している(第335図)。横田・森田分類ではI-1類に当たるものである。この他図示しないが、体部破片が出土している(巻頭図版5)。

SB222からは定窯系の白磁の鉢が出土している(第336図)。口径25cmと大型で、白色の緻密な胎土で艶のあまりない透明釉がかかり、口縁部に輪花が刻まれている。この他遺構外より一点出土している。



第334図 白磁碗分類図 (1:4)

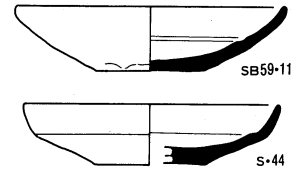


第335図 越州窯系青磁碗・白磁鉢 (1:3)

② 皿 (第337図)

碗に比べて出土量は少ない。しかし、堅穴住居址からの出土量は、碗21に対して皿6と比較的高い。

白磁の皿は大きく二つに分けられる。一つは、SB59・11に代表される高台を付けずやや内湾しながら立ち上がるタイプと、S・44に代表される体部に稜をはっきりともつタイプである。内面は前者が沈線状の浅い凹線を一条回すのに対して、後者は沈線をいれそこより大きく折り曲げる。釉も前者がII類の碗に近く化粧掛けもされているのに対して、後者はIV・V類の碗のそれに近い。堅穴住居址からは前者が圧倒的に多く出土している。



第336図 白磁皿 (1:3)

この他青白磁の皿がSB31より出土している。

③ 壺

SB69・39は白磁小壺の栓型の蓋である。II類の碗に近い黄味がかった釉がかけられており、糸切り痕をのこしている。SB98・8は白磁四耳壺の口縁部である。

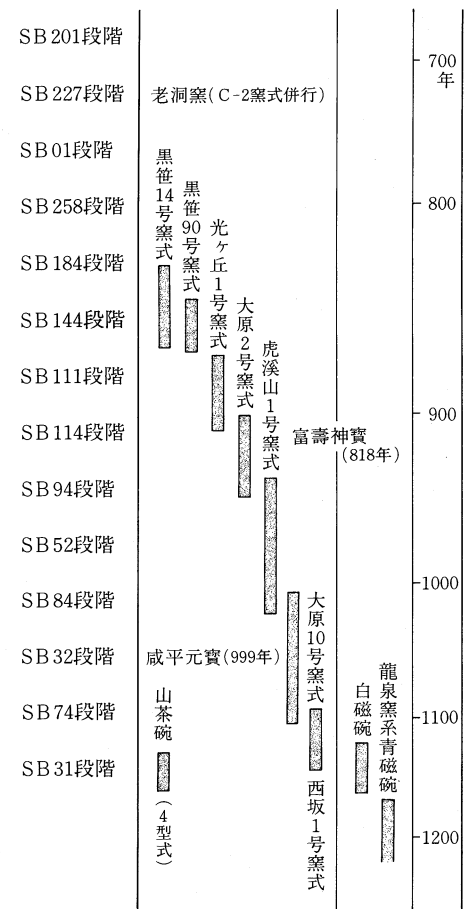
イ まとめ

第112表で示したようにほとんどはSB31段階にはいる。ただし、越州窯系青磁と定窯系の白磁鉢は、SB114段階からSB52段階にはいる。このことから二つの受容の時期があったと考えても良さそうである。年代的には越州窯青磁に代表される第一の波を10世紀代、第二の波を12世紀代とできそうである。近年松本平における輸入陶磁器の出土量は増大している。しかし、越州窯青磁や初期の白磁は大町市五十畑遺跡(註13)、松本市三間沢川左岸遺跡(註14)と数えるほどしか出土していない。ほぼその時期も10世紀代である。いずれの遺跡も緑釉陶器の出土量が多い。また、白磁IV・V類は多く、大町市来見原遺跡(大町市教委1988)、豊科町矢原遺跡(豊科町教委1987)、松本市北方遺跡(松本市教委1988)など近年増えはじめており、11世紀末から12世紀の遺跡を調査すれば、必ず発見されるという状況が生まれてきている。このことから、第一の波と第二の波では受容の意味が大きく異なると思われる。特に第一の波では、緑釉陶器以上の焼物の頂点として使用された可能性がある。それに対して第二の波は、13世紀にみられる龍泉窯青磁の流入傾向とよく似ており、ある程度日常の食器としての性格を持った可能性がある。

7 年代の比定

今回年代を比定するのに使用できる資料は、銭貨とある程度年代のかたまりつつある搬入品である。銭貨は堅穴住居址より2点出土している。ともに共伴資料の上限を示すことしかできない。一つはSB114段階の杯Aを共伴するSB159より出土した富壽神宝である。初鑄は818年であり、SB114段階は9世紀の第一四半期より古くはならない。もう一つはSB32段階の杯A IIIが共伴するSB30より出土した宋銭の咸平元寶である。初鑄は999年であり、SB32段階は1000年より古くはならない。

次に灰釉陶器の年代観の使用である。現在編年については多くの研究がある(第114表)。本書は前川要の灰釉陶器と藤沢良祐の山茶碗の年代の研究に従いたい(註15)。杯Aの段階区分と灰釉陶器の共



第337図 杯A段階区分の年代

檜崎彰一 齊藤孝正(註8)		齊藤孝正 (註8)		藤沢良祐 (註8)		前川 要 (註8)		田口昭二 (註8)		若尾正成 (註8)		齊藤孝正 (註8)								
猿投窯		猿投窯		瀬戸窯		猿投・東濃窯		東濃窯		東濃窯		尾北窯								
期	窯 式			山 茶 碗																
V	黒笹14号					黒笹14号窯式		窯 式		窯 式		S-47								
	黒笹90号					黒笹90号窯式		光ヶ丘1号		光ヶ丘1号		S-4								
VI	折戸53号			I	段階	型式	窯 式	折戸53号窯式	第1段階		大原2号		大原2号		S-4'					
	東山72号								1		広久手C-3		第2段階		虎溪山1号		虎溪山1号		S-27	
									2		広久手F		第3段階		丸石2号		丸石2号		S-1	
													第4段階		(仮)大原10号					
	百代寺												第5段階		西坂1号		西坂1号			
								第6段階		谷迫間2号		谷迫間2号								
VII	東山105号			II		3		旭浄水場		浅間窯下1号		浅間窯下1号								
		VII		2		4		南山一7		丸石3号		丸石3号								
				3		5		水無瀬中 釜ヶ洞一1		窯洞1号		窯洞1号								
				III		6		八床一8												
		VIII		1		7		南山一1												
				2		8		大草一6												
				III																
				IV																
				3																

第114表 灰釉陶器・山茶碗 編年対比表

伴関係についてはすでにふれてあり、年代の対比は第337図のようになる。この年代は銭貨と矛盾しない。

最後に輸入陶磁器である。SB31段階と伴う白磁II・IV・V類の碗は、11世紀後半から12世紀前半に多量に輸入される。この点も灰釉陶器との対比をした第337図と矛盾しない。また、SB31段階には龍泉窯系青磁は入っておらず12世紀後半まで下がることになる。

このことから第337図の年代を本書は使用することにした。

8 まとめ

食器を食膳具、貯蔵具、煮炊具、搬入品に分けてみてきた。最後にそれを総合してまとめとしたい。

大きな画期としてとらえられそうなのは、SB114段階からSB52段階の間、年代的には10世紀代である。それは食膳具、貯蔵具、煮炊具の全ての点より指摘することができ、また搬入品や在地産土器からみた窯業生産という点からも大きな変動の時期である。それ以降の食膳具については「プレ中世的」とよんだが、食膳具や貯蔵具にみられる広域流通品である灰釉陶器の流入や、須恵器の消滅から想定される須恵器生産の停止など、中世への第一歩を踏み出したと言えそうである。また、今回その内容については言及する資料を持ち合わせないが、SB31段階以降、年代的には12世紀中頃以降に、本格的な中世的食膳具様式の成立が予想される。

もう一つの画期は、SB227段階からSB258段階、年代的には8世紀後半から9世紀前後に置きたい。それは食膳具や煮炊具にみられる新たな規格の成立である。また、須恵器の本格化およびムラでの土器生産

の停止などを考え合わせれば、古墳時代の伝統を払拭し、律令体制がそれなりに確立した段階とすることができる。

ここまで吉田川西遺跡の出土資料をもとに、古代の食器の変容について考えてきた。今後、ここでとらえてきた変化が、多量の緑釉陶器の搬入に代表される吉田川西遺跡の特殊性によるものなのか、今後検討する必要がある。

- (註1) 黒色土器 B は碗 C や耳皿にみられる。時期的には SB32・74 段階に多い。碗 C は畿内のそれと底部裏面に糸切り痕がなければ、見分けがつかないという橋本久和の指摘がある(橋本1987)。
- (註2) 内面を黒色処理した非ロクロの土師器は、長野県内において5世紀末より認められる(原1989)。今回黒色土器 A としたものは系譜的に異なると考えている。
- (註3) SB144段階から SB111段階にかけて須恵器の食膳具は、杯 A II のみとなり、しかも灰白色軟質である。同時に存在する須恵器の貯蔵具は、それ以前と同様に硬質である。
- (註4) 黒色土器 A は SB114段階以降、碗および碗 C にのみみられる。内面のヘラミガキは、SB114段階から SB52段階までは粗雑で、ロクロナデの痕跡が観察できるものや、暗文状となるものが多い。しかし碗 B の形態の登場以降は再び丁寧になる。
- (註5) SB94段階、すなわち10世紀後半での須恵器生産の停止は、笹沢浩によって指摘されている(笹沢1986)。
- (註6) このようなことから東濃窯では、碗 A から碗 B への転換が明確でなかった可能性がある。
- (註7) 生産地と窯式の識別は、樽崎彰一・田口昭二・斉藤孝正・若尾正成・前川要の手を煩わした。
- (註8) 窯式名は、東濃窯については田口昭二(田口1973)、若尾正成(若尾1987)に従い、猿投窯と尾北窯については樽崎彰一(樽崎1983)、斉藤孝正(斉藤1981、1982)に従った。
- (註9) 緑釉陶器については、樽崎彰一、百瀬正恒、吉村正親、平尾政幸、小森俊寛、斉藤孝正、前川要の指導をうけた。
- (註10) 松本市教育委員会により、昭和62、63年に調査された。報告書未刊
- (註11) 松本市教育委員会により、昭和61~63年に調査された。報告書未刊
- (註12) 輸入陶磁器については、森田勉、百瀬正恒、吉村正親の指導をうけた。
- (註13) いわゆる「西寺タイプ」の白磁碗が出土している。大町市教育委員会により、昭和59年に調査が行われた。報告書は遺構編(大町市教委1984)のみ刊行されている。
- (註14) 越州窯系青磁碗の破片が堅穴住居址より、2~3点出土している。
- (註15) 第337図に示した年代は、11世紀までが前川要(前川1984、1987)、12世紀以降は藤沢良祐(藤沢1982)に従っている。

引用文献

- 大町市教育委員会 1984 『五十畑』
- 大町市教育委員会 1988 『来見原II』
- 河野真知郎 1986 「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会
- 斉藤孝正 1982 「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』No. 211 ニューサイエンス社
- 1988 「中世猿投窯の研究——編年に関する考察——」『名古屋大学文学部研究論集』CI・史学34
- 斉藤孝正ほか 1981 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告III』小牧市教育委員会
- 笹沢 浩 1986 「凸帯付四耳壺考」『長野県考古学会誌』第51号 長野県考古学会
- 島田哲男 1983 「第VI章まとめ 第2節 土器について」『吉田向井』塩尻市教育委員会
- 田口昭二 1973 「美濃古窯の灰釉陶器と山茶碗の編年」岐阜県多治見市立精華小学校
- 1982 「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』No. 211 ニューサイエンス社
- 1983 「美濃窯における白瓷と山茶碗」『美濃陶磁歴史館報』II 土岐市美濃陶磁歴史館
- 寺島孝一 1976 「平安京出土の緑釉陶器」『考古学雑誌』61—3 日本考古学会
- 直井雅尚 1986 「第3章調査結果 第3節 遺物—土器」『補論』『松本市島立南栗遺跡』松本市教育委員会
- 樽崎彰一 1983 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査報告(III)』愛知県教育委員会
- 長野県埋蔵文化財センター 1988 「第19節 吉田向井遺跡」『中央自動車道長野線 埋蔵文化財発掘調査報告書2』
- 橋本久和 1987 「西日本からみた古代末~中世の土器」『神奈川考古』第23号 神奈川考古同人会
- 原 明芳 1987a 「松本平における平安時代の食膳具」『信濃』39—4
- 1987b 「信濃における食器の系譜」『文化財信濃』14—3
- 1988 「第19節吉田向井遺跡 5 成果と課題 (1)古代末期の焼物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
 (勲)長野県埋蔵文化財センター
- 1989 「信濃における「黒色土器」出現とその背景」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
- 原田信男 1987 「食事の体系と共食・饗宴」『日本の社会史』第八巻 岩波書店
- 藤沢良祐 1982 「瀬戸古窯跡群I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III
- 堀内明博 1985 「瓦器成立以後の平安京の土器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』III
- 前川 要 1987 「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」『中近世土器の基礎研究』III 日本中世土器研究会

松本市教育委員会 1988 「松本市北方遺跡」

森嶋 稔 1978 『更級埴科地方誌』(二)更級埴科地方誌刊行会

百瀬正恒 1985 「平安京及びその近郊における土器の生産と消費」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会

山下泰永 1985 「第3節 遺物 1 土器」『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校、条里的遺構』松本市教育委員会

横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究紀要』4

若尾正成 1987 「白瓷から白瓷系陶器への転換期について」『美濃の古陶』美濃古窯研究会会報 No. 1

参考文献

西 弘海 1978 「西日本の土師器」『世界陶磁全集』2 日本古代

1982 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』平凡社

宇野隆夫 1985 「古代的食器の変化の特質」『日本史研究』280

第3節 金属製品と鍛冶資料

1 金属製品と鍛冶資料

はじめに

金属器は、総計940点出土した。内訳は古代の遺構より349点、中・近世の遺構より154点、II層より131点、I層より300点、出土地点不明が6点である(第115表)。このうち古代の遺構出土の349点は一遺跡出土としては県内最高で、伴出した多量の鉄滓や羽口などの鍛冶関係資料とともに奈良・平安時代、とりわけ平安時代の金属器の様相をとらえる貴重な手がかりを与えてくれた。

中世の遺構に伴う金属器はわずかで特筆すべきものはないが、近世では比較的まとまった資料が得られている。以下、主な出土金属器及び鍛冶関係資料をとりあげ若干の考察を試みたい。

(1) 鎌 (第338~342図 第116表)

鎌は総計24点出土した。そのうち22点は刈り鎌で、他に特殊鎌が2点ある。刈り鎌は古代の遺構から15点(住居址14、土坑1)、近世の遺構から2点(整地土1、土坑1)、II層から3点、I層から2点出土した。特殊鎌は古代の竪穴住居址とII層から1点ずつ出土している。これらの鎌は数量的に多いばかりでなく、県内では実態が明確でなかった古代後半から末期のものが大半を占め、該期の研究に貴重な資料を与えてくれた。以下中南信地方の既出の鎌との関連もみながら、本遺跡の古代の鎌を中心に分析した。

鎌は形態より第338図・第116表のように分類をした。また、中南信地方及び本遺跡の古代の遺構出土の鎌を時期別配列したのが第339図であり、大きさとの関連でみたのが第340図である。

形態変化の概要は次のように指摘できる。

身部の平面形態を中心にみるならば、基部に最大幅をもち刃部先端側が狭くなるタイプが、5期を境に転換する。5期以降は時代が下るにつれて刃部は三日月状から半月状へと増幅していくのに対し、基部は逆に減幅し着柄部として機能化され、刃部から分離していく。基部、刃部の柄に対する角度(以下立ち上がり角度と呼ぶ)は、基部が時代が下るにつれ次第に鈍角化するのに対し、刃部は1から2期にかけて直角に近い数値から若干鈍化をみせるものの、その後はほとんど変化せず、14期になると再び直角近くになる。これは基部角度が急になるのに伴って、刃部の湾曲度が強くなり、刃角度がほぼ一定に保たれていることによる。ただし、14期(12期よりその傾向がみられる)では、基部から刃部にかけて「く」の字状に屈曲するようになり、やがてこれは、直角近く屈曲する近世鎌に続いていくものと推測される。また、着柄部形態は基部の立ち上がり角度と対応しており、本遺跡時期区分1期では端部が折り返されるが、その後は立ち上がり角度を急にするため、折り返し部は基部に対し直角方向から平行に近い方向へ度合を強め端部から棟部にかけて折り返される。これに伴って折り返し部下端隅は角状から角丸状に変化し、やがて基部幅が狭くなるにつれ端部の直線部は失われ、端部全体が丸味を帯びるとともに、折り返しは再び棟部から刃部にかけて及ぶようになる。

一方大きさにおいては、8期を境として大きな変容をみせる。7期以前は身部が18~20cmほどの大型鎌が中心をなしているのに対し、9期以降は特大鎌とともに中、小鎌の急増が注目される。形態においても身幅の広いVIII類や、身幅が狭く細長いX類など変化に富み、機能分化の進展を窺わせる。7期以前にも小型や中型鎌の存在は否定できないが、おそらくその比重は非常に低く、機能分化も2、3に限られていたのではないだろうか。

素材	出土地点 器種	古 代					中 ・ 近 世					Ⅱ 層	Ⅰ 層	計	備 考	
		SB	SK	SX	溝	計	土坑 (住居址)	整地	墓址	SX	溝					計
鉄	鋤 ・ 鍬	2				2					1	1	1		4	
	鎌	15	1			16	1	1				2	4	2	24	
	苧引鉄	2			2	4									4	
	紡錘車	33	4			37							5	8	50	
	刀子	63 ⁽¹⁾			5	68	1	6				7	12 ⁽¹⁾	25	112	()は鋸
	工 具	19	1			20	1	1				2	9	16	47	ヤリガンナ、タ ガネ、ノミ、モ リ、ハリ、ハサ ミ、その他
	燧 鉄	1				1		5				5	3	4	13	
	煮炊具	1				1							2		3	
製	毛抜型鉄器	7	1		3	11		2				2	4	2	19	
	締まり金具	4				4								1	5	
	釘 ・ 鋸	70 ⁽¹⁾	7	1	4 ⁽¹⁾	82 ⁽²⁾		54 ⁽¹⁾	3			57 ⁽¹⁾	27 ⁽¹⁾	83 ⁽²⁾	249 ⁽⁶⁾	()は鋸
	馬 具	3	1			4								2	6	
	鍬	42	2		3	47							14	11	72	
	鐸 ・ 舌	6 ⁽²⁾				6 ⁽²⁾	1					1	1	1	9	()は舌(?)
	そ の 他							5				5	1 (オノ)		6	
	不 明 品	性格不明	8	1		1	10	1	4				5	8	18	41
器形不明		22 ⁽⁴⁾	1	(1)		24 ⁽⁴⁾		8 ⁽²⁾				8 ⁽²⁾	19 ⁽⁶⁾	54 ⁽⁷⁾	105 ⁽¹⁹⁾	()は铸造品
銅	佐波理鏡	3				3	1					1	2		6	
	煙 管							17				17			17	
	そ の 他	3		1 シオア		4		1				1	2		7	
	錢 貨	2				2	14 ⁽²⁾	2	6	12	2	36 ⁽²⁾	12	70	126 ⁽²⁾	()は住居址
	不 明 品	1				1		3				3	3		7	
鉛	彈 丸										1	1	2	2	5	
	沈 子												1	1		
	不 明 品	2				2									2	
計	鉄 製 品	298	19	2	18	337	5	86	3		1	95	110	227	769	
	銅 製 品	9	0	1		10	15	23	6	12	2	58	19	70	163	
	鉛 製 品	2	0	0		2					1	1	2	3	8	
	総 計	309	19	3	18	349	20	109	9	12	4	154	131	300	940	

※ 出土地点不明の6点含む

第115表 金属器の出土状況

分類の 視点 型	身部平面形態		基部、刃部の柄に対する角度		基部端の形態	
	基部幅と刃部幅との関係	身部の湾曲状況	基部 ^{*2}	刃部 ^{*3}	折り返し部	端部形状
I	基部に最大幅があり、先端側わずかに狭くなる。着柄部と刃部の区別はない。	刃部を中心に緩やかに湾曲。	わずかな鈍角(102°~107°)	ほぼ直角	端部全体あるいは上側半分以上に及ぶ。	端部直線的、下端隅のほとんどは角状。
II	〃	〃	かなりの鈍角(135°~138°)	わずかな鈍角(110°前後)	端部の上側半分ほどに及ぶ。	端部直線的、下端隅の多くは角状。
III	両者にほとんど差はない。着柄部と刃部の区分なし。	基部から刃部にかけてはわずかであるが、先端近くで急に湾曲する。	さらに鈍角化(139°~149°)し、柄部としての機能拡大	〃	端部上端から棟側にかけて折り返す。	下端隅は角状と角丸に処理された双方ある。
IV	〃	基部はわずかであるが、刃部の湾曲は大きくなる。	〃	〃	〃	下端隅はすべて角丸。
V	基部より刃部に向け徐々に増幅するがその差は小さい。着柄部と刃部の区分なし。	基部はほぼ直線的に立ち上がる。刃部は棟側の湾曲が急であるが、刃側は緩やかなため三日月状となる。	〃	〃	〃	〃
VI	基部幅は狭くなるが、刃部に向け急増しその差は大きい。着柄部と刃部の区分が不明瞭ながらみられる。	基部幅が狭く、刃部幅が拡大するうえ、刃部棟部の湾曲がさらに急になるものが多く、身部全体が三日月状を呈す。	〃	〃	基部が狭くなるため端部の大半を占める。	端部は狭く、下端隅から折り返し部まで曲線を描きながら連続する。
VII	基部幅はVI類よりさらに狭くなり、刃部の増幅は急である。基部は着柄部としてより明確になる。	VI類に近いが、刃側は基部から「く」の字に近い屈曲をして横にのび、より刃部として独立してくる。刃部は半月に近い三日月状を呈す。	〃	〃	基部はさらに狭くなるため、端部全体に及ぶ。	〃
VIII	基部は先端部では狭いが刃部に向け急に増幅し、そのまま幅広な刃部を形成する。	基部は直線的に立ち上がる。刃部は棟側の湾曲が急で、刃側は基部から「く」の字状に屈曲して直線的にのびるため刃渡りの短い半月状を呈す。	大きな鈍角(155°)	ほぼ直角	〃	〃
IX	基部幅はほとんど増幅せず立ち上がり、刃部に至って急増する。基部は明確に着柄部として独立する。	VIII類と同じであるが、刃部棟部先端側の湾曲が緩やかになるため刃渡りののびた半月状となる。	〃	〃	〃	〃
X	基部は長く、先端部を除けば比較的幅広。刃部幅は狭く、基部と同等かわずかに広い程度で、身部は細長く形成される。着柄部と刃部が不明確なものと、屈曲が大きく明確なものがある。	基部はほぼ直線的に立ち上がり、基部から刃部にかけて大きく湾曲する。	III~VII類と同程度	直角に近いものとわずかに鈍角をなすものがある。	〃	〃
(XI) *1	IX類と同じ	基部は直線となり直角に屈曲して刃部に続く、刃部はIX類と同じ	垂直に立ち上がり完全に柄の一部となる	直角	折り返しが消失し、目釘で固定されたものと想定される。	

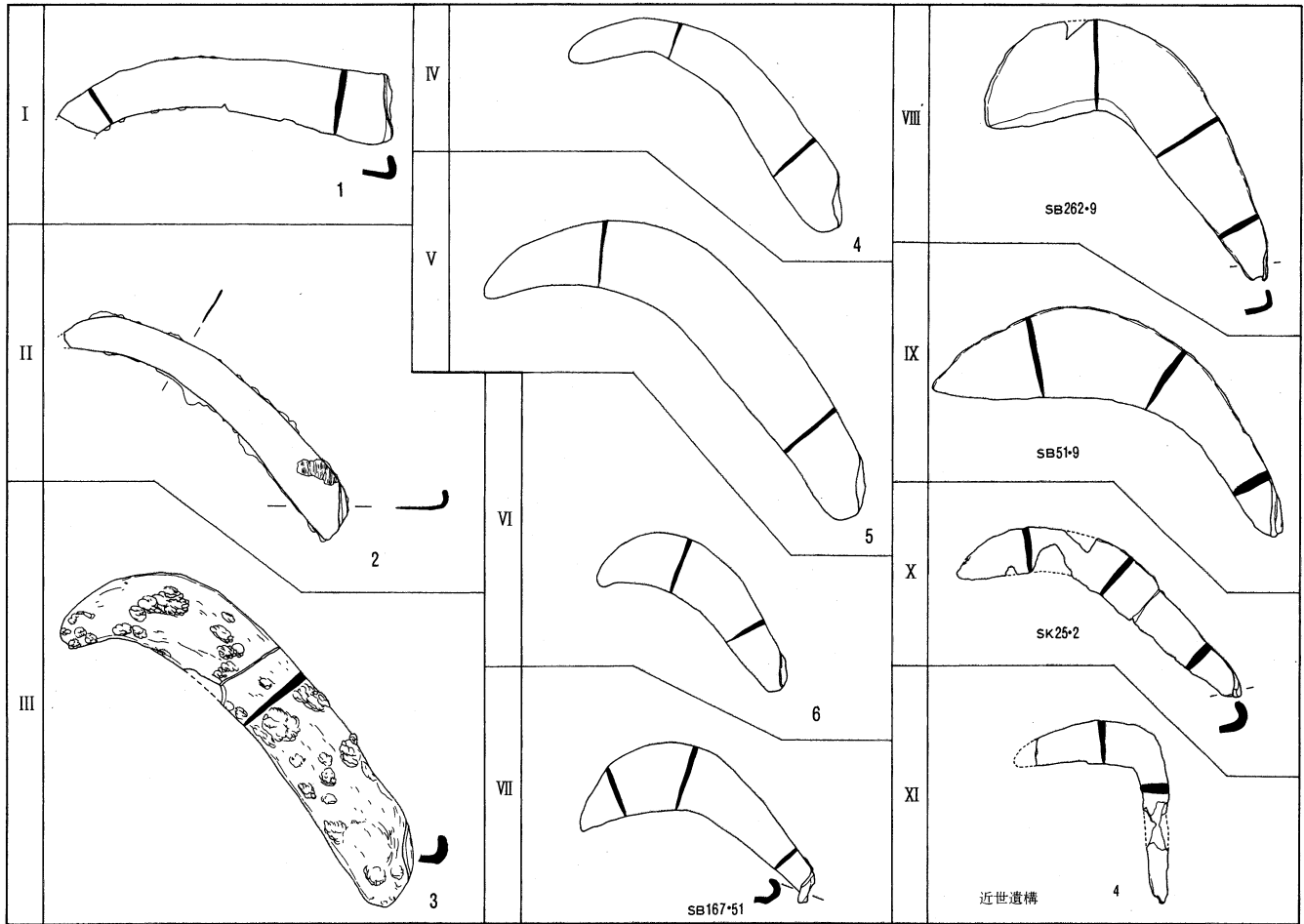
※1、(XI)は近世遺構出土の鎌であるが、古代鎌との関連を示すため記載した。

※2、刃部角度は使用ベリのため正確には期待できない。およその平均値で示している。

※3、ここでいう「基部」は刃付されていない身部の根元側という意味で、「着柄部」とほぼ同義語である。

ただ古い時期では、着柄部の形態及び機能上の分化が十分でないため「基部」をもってこれに当てている。

第116表 鎌の分類



第338図 鎌分類 (1:3)

- | | | |
|---------------|-------------|-------------|
| 1. 堂地中道遺跡53号住 | 2. 足場遺跡8号住 | 3. お玉森遺跡6号住 |
| 4. 南高根遺跡1号住 | 5. 大芝東遺跡1号住 | 6. 沢入口遺跡2号住 |

以上の概観にもとづき古代の鎌を便宜的にI～V期に区分し、本遺跡出土の鎌の位置づけをしてみたい。

I期(本遺跡時期区分2～4期以下同じ)：この期はI類に代表される。基部側に最大径があり、身部の立ち上がり角度(基部 $102^{\circ}\sim 117^{\circ}$ 、刃部ほぼ直角)は比較的緩く、古墳時代以来の名残を留めている。しかし、身部の湾曲は緩やかで着柄端部も角状でありながら、折り返し部は端部全体に及ばないものが多く、古墳期のものと隔りも大きい。本遺跡にこの期のものは認められない。

II期(5～7期)：該期はII類に代表される。身部は基部側がいまだわずかに幅広であるが、身部の立ち上がり角度(基部 $135^{\circ}\sim 138^{\circ}$ 、刃部 110° 前後)はかなり急になる。着柄部の折り返しも端部の上側半分ほどだけになる。この期のものにはSB72・17が1点ある。刃部先端側が欠損しているがII類に属しよう。SB72は6期の遺構である。なお、4、5期にかけてIII類がある。III類は基部立ち上がり角度($139^{\circ}\sim 149^{\circ}$)はさらに急で、それに伴って着柄部折り返しは端部の上側から棟側にかけてなされる。この立ち上がり角度と折り返し位置はこれ以降の鎌に継続される。この鎌は基部と刃部の差はほとんどなく身長が19cmほどの大型の鎌になるが、I、II類と異なって身部幅が広くがっしりしており、刃部先端付近のみ急湾しているのが特色である。おそらくI、II類とは異なった機能を持ち、その後の大鎌(大芝東1号住、花上寺57号住、吉田川西SB10・16)につながるものと推定される。

III期(8～9期)：この期はIV類に代表される。これは他遺跡で2点認められるのみで実態はあまり明確でない。しかしII期よりもさらに基部立ち上がり角が急で、湾曲度も大きいようである。基部端部は丸く処理される。

IV期(10期)：V、VI類がこの期の中心である。IV期以降はいずれも刃部幅が増大するのに対し、逆に基部幅は減少して、刃部に最大幅のある三日月状となる。ただし、この期の大型品は基部と刃部幅の差はまだ小さい。基部端は丸く処理され、折り返しは端部のほぼ全面に及ぶものが多い。また大きさでは、大、中、小とバラエティーに富む。

V期(11、12期)：この期にはVII、VIII、X類が属する。これらの形態は基本的にはIV期と同じであるが刃部幅はさらに拡大して肉の厚い三日月になるのに対し、基部側はますます細くなり端部は尖ってくる。折り返しは刃側から棟側へ端部全体に渡る。刃側はIV期のような基部から刃部にかけての連続的でなめらかな湾曲でなく、「く」の字状に近い屈曲となって刃部と着柄部の分離が進む。これらの変化は中世鎌の特色を強くもつVI期の鎌へ続くもので、過渡的な時期としてIV期からあえて独立させた。

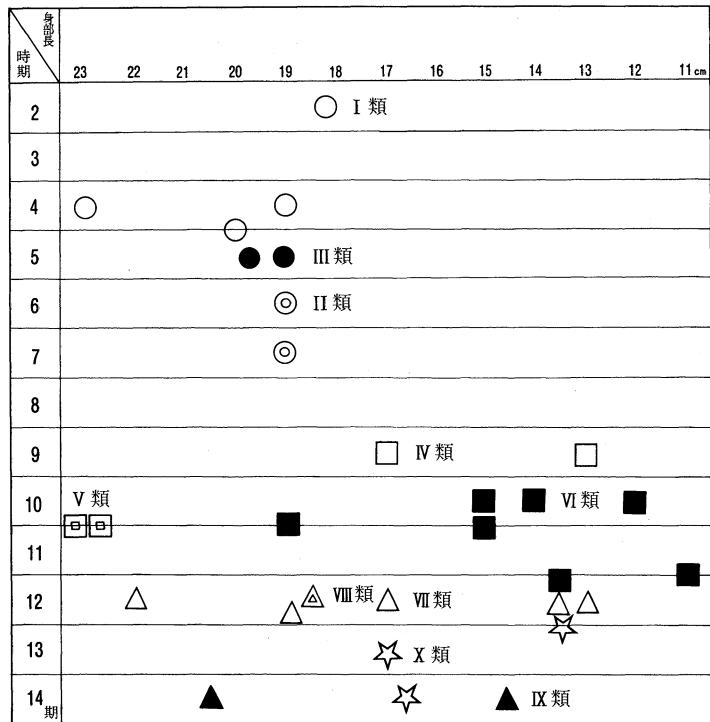
本遺跡からは10点出土したが、SB225出土は11期、それ以外は12期と推定される遺構出土のものである。10点中SB10及びSB225出土の5点はSB10・13以外は先端部が欠損して形状がはっきりしないが、刃側の屈曲からみてIV期に近く、SB167・51とSB262・9は屈曲が鋭くVI期に近い様相を呈している。SB63・48は先端部欠損しているがX類だろうか。ただ、他のX類より小型である。SB167・52、SB216・38は先端部のみで形状不明。この期は大きさにおいて、大、中、小とバラエティーに富むだけでなく、SB63・48にみられるような細長身型やSB262・9のような幅広型も並存しており、機能分化は相当進んでいたことを窺わせる。

VI期(13・14期)：IX、X類がこの期に属する。「く」の字状の屈曲はさらに強まり、刃部と着柄部が明確に分離する。刃部は直線的で比較的長い刃渡りをもつ半月形に近くなり、着柄部は細く、その分だけ厚手となる。これらの特色はほぼ中世鎌の特色を備えているとあってよかろう。本遺跡ではこの期のものが3点ある。そのうち13期のものは他遺跡も含めてもSB78・16の1点で様相は明確にならない。SB78・16は細長身のX類で、着柄部、刃部幅の差はほとんどないが、「く」の字に深く屈曲し分離は明確にされている。

時期 分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	近世
I		① ②	③	④ ⑤	⑥										
II					⑦	⑧ ⑨	⑩								
III				⑪	⑫ ⑬ ⑭										
IV								⑮ ⑯							
V										⑰ ⑱					
VI										⑲ ⑳	㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕				
VII												㉖ ㉗ ㉘	㉙ ㉚ ㉛		
VIII												㉜			
IX														㉝ ㉞	
X												㉟ ㊱	㊲ ㊳	㊴	
XI															㊵

第339図 時期別の各分類鎌の分布状況
中南信地方の出土例を中心として

14期の2点中SB51・9は大型で、大きな半月型刃部と細い着柄部が明確に分離した中世鎌の特色を備えたものである。SB69・41は小型品で屈曲はやや緩いものの、屈曲後の刃部は長くやはり中世的な度合が強い。なお、本遺跡の鎌に時期不明なものが7点ある。SK25・2は細長身のX類で、SK25は14期の遺構を切って構築しているが時期が確定できない。II・1は着柄部が独立しVI期以降に属しよう。II・2は大型の鎌であるが両端欠損で時期不明。II・4はVI期以降の古代鎌の可能性が強い。近世遺構出土鎌のうち土壌出土の近・3は近世鎌とは考えにくく、やはりIV期以降の古代鎌の混入と思われる。近世整地出土の近・4は着柄部が直角に曲がる厚手の小型鎌。着柄部は破損のため明確ではないが、おそらく目釘で固定されたものであろう。



第340図 時期別・分類別鎌身部の大きさ
—中农信地方の出土例を中心として—

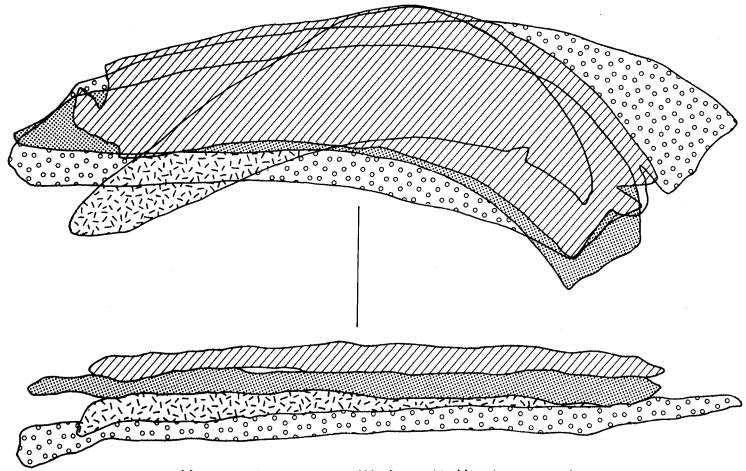
なお、ここで便宜的に設定した各期の絶対年代は、I期(8世紀第2四半期～9世紀第1四半期)、II期(9世紀第2四半期～10世紀初頭)、III期(10世紀第1四半期～10世紀第3四半期)、IV期(10世紀第4四半期～11世紀初頭)、V期(11世紀第1四半期～第3四半期)、VI期(11世紀第四半期～12世紀第2四半期)である。

以上形状を中心に時期別の変化をみたが、しかし、この変化は当然機能差をも含んでおり、以下機能面で若干触れておきたい。

前述のようにIII期(8期ごろ)を境に大きさにおいて大きな変化が認められる。出土例ではII期以前(8・9世紀)は大型しかみられない。もちろん中小鎌の存在も他県の例などから否定できないが、この時期は大型が中心の組成であったと思われる。しかし、この大型も、やや細めで長身、立ち上がりの比較的緩やかなI、II類は時期差としても、身幅が広くがっしり、立ち上がりの急なIII類は別機能をもって併用されたとみる方が自然である。

次に転換期後の実態を、比較的資料のまとまったIV・V期を中心にみておく。第340図によると、大、中、小と3つほどのブロックが存在する。これをIII期(8期ごろ)以前と比較すると、大型は分化してさらに大型化した一群(大型)とやや小型化した一群(中型)が分離し、新たに多数の小型が出現して、少なくとも大きさにおいて3種の分化が考えられる。ところで、SB10(12期)は4点の鎌が一括出土している。これは住居址北壁上中央付近に床面より数cm浮いて検出されたものだが、4点とも刃先を同一方向に向けてほぼ揃えた状態で出土した(第341図)。おそらく身部のみが一括、縄等で括られていたのではないと思われる。このことから、使用状況をそのまま示しているといいがたく、1住居址における使用セットと速断はできない。しかし、この4点は大きさも形状も異っており、それぞれ別の機能をもっていたと想定する方が自然である。また、この4点はいずれも刃先が欠損しており、大きさを正確に測定できないが、推定によると大型1(SB10・16)、小型1(SB10・13)、中型2(SB10・14・15)となり、さらに中型は身長19cm近いやや大型のもの(SB10・15)と、17cmほどのやや小型のもの(SB10・14)とに分かれる。第340図においても中型は17～18cmほどで2つのブロックに分けることも可能であり、あるいは特大、大、中、小の4分割が妥当かもしれない。

一方、形状ではV～VII類、身幅が非常に広く鋭く「く」の字状に屈曲した特異な形状をもつVIII類、細長身なX類と少なくとも3形態は考えられ、形状、大きさ等から、5～6種の機能分化が想定される。その場合それぞれどのような機能を分担していたか、ここでは深く立ち入る余裕はないが、基本的な点のみを指摘しておきたい。まず、SB10・16に代表される身部22～23cmほどの大型の鎌（V類～VI類）である。

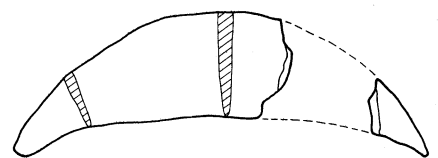


第341図 SB10鎌出土状態（1：2）
（上より15、14、13、16）

SB10・16の場合では最大幅5.7cm以上

に及び厚手のがっしりしたもので、重量も150gはゆうに超えそうである。この鎌は刃側に重心をもつもので、おそらく遠心力を働かせ薙ぎ刈りしたものだだろう。草はもちろんのこと細い灌木刈にも耐えられそうで、原野や林の下草等を刈るのに適していそうである。次に、SB262・9（VIII類）は柄に対し直角に直線的に短い刃がつく。これは引っ掛けて手元に引き寄せるようにして切るのに適している。刈敷等を採るのに適しよう。やや薄手ではあるが、その分は身幅の広さで補強したのかもしれない。次に中型のVI、VII類はいわゆる草刈用と思われる。形状は大型と同じであるが、小さい分だけ軽くまた薄い。薙ぎ刈りも手持ち刈りも可能で、稲の根刈にも使われた可能性がある。これに対し身長 of X類は身部が細くさらに軽くなる（推定30数g）。身部の細さから薙ぎ刈りは不向きで手持ち刈りだろう。また、刃部の湾曲は引き廻刈りに適しており、SB78・16やSK25・2は湾曲点の使用減りはその傍証になる。これらは、稲の根刈り用としての条件を備えており、稲刈鎌として分化されたものかもしれない。なお、このX類に近いものに、SB10・14、SB02・5、さらには、花上寺57号住の小型鎌がある。これらが本来の形に近いものか、使用減りによるものか判断が難しいが、もしこれが同系列だとしたら、その大きさは中型の小ぶりのものから小型の大ぶりのものが多く、木下忠による「稲を刈る鎌は五寸（約15cm）内外にかぎる（百姓伝記）」にほぼ近い大きさといえよう（木下1966）。次に小型鎌をみるとこれは現在使用されている木切鎌、桑切鎌に近い。これらは桑や麻等の茎、それに近い灌木、雑草の切断、刈敷の小枝切り等々、小回りを利用して多用される鎌であるが、当時もそのような使い方をしていたのかもしれない。いずれにしろ、今日見られる基本的な分化はすでにこの時期になされていたと見るべきだろう。

最後に特殊鎌について触れたい。1点（SB235・9）は欠損部が多く断定はできないが、全長10cm、最大幅3cm、棟部の厚さ4mmほどの左右対称の半月形の鎌が想定される（第342図）。刃は研ぎ減りで内湾するが、切先近くは特に磨耗が激しい。穿孔はない。もう1点（II・5）は鎌状に湾曲したものだが、両端は破損している。最大幅2.8cmほどの縁部は、一方両刃状に一方は片刃状になるが、片刃状で内湾する側が刃として使われたものと推定される。県内では後者に非常に近いものに飯山市北原遺跡B・5出土品があり、平面形状は異なるが両側の刃付けが同じものに田中沖遺跡16号住の出土品がある。また、前者に近いものが吉田向井43号住114があるが、これは破損した鎌の刃側に本質部を着柄し、棟側を刃として使っていたと推定されるものである。これらの鎌の機能は明確でないが、SB235・9と同形のものの棟側に木質の柄をつけ、アワの穂摘具として使っていた五島列島福江島の民族例（立平進1986）もあり、本遺跡のものもこのような使われ方をし



第342図 特殊鎌（1：2）

た可能性が強い。ただ、外湾側を刃としたものは、苧引鉄としての利用も可能で、両端部突起部をもつ田中沖遺跡や刃部の甘い吉田向井遺跡のものは搔器として考えるべきかもしれない。

以上分類とその時期的位置付け、及び機能に触れてきたが、県内の出土絶対数が少なく、推測の域を出ていない。特にIV期以前についてはその感が強く、今後の発掘例の増加によって大きく修正される点も多いと思われる。しかし、本遺跡ではV期以降の鎌を比較的まとまって出土し、それらは古代後半期から末期の鎌のおよその輪郭を示唆してくれたように思う。

8～9世紀をへて刃部幅の拡大化、基部の鋭角化に伴う柄着の強化と、身部湾曲の深化をはかってきた古代鎌は、10世紀後半にはほぼその姿を完成させるとともに、機能分化を急速に広げたとみることができる。さらに、本遺跡最高の出土量をもつ12期はその頂点に立つとともに、すでに身部には「く」の字状屈曲による刃部、着柄部の明確な分離と、半月形刃部の確立という中世鎌の萌芽が明確に読みとれ、すくなくとも、12世紀前半には中世鎌の原型は生まれていたものと考えたい。即ち、本遺跡の鎌は古代鎌の進展と中世鎌への移行期を示す貴重な資料であり、さらに、鎌の機能分化は特殊鎌も含め鉄器生産技術とともに農業技術の進歩を示唆するが、特に10世紀後半以降にみられた鎌の様態から、根刈りの一般化、雑草や刈敷による堆肥の普及、家畜用飼料の刈りとり、畑作物の普及等との関連で追求されるべき課題を残している。また、関東や東北地方に多出する目孔をもつ半月形穂摘具は、県内ではほとんどない(天伯B28号住に1点のみ出土)。この経緯も特殊鎌との関連をみながら検討されるべき課題である。

(2) 鋤・鍬

鋤、鍬は4点発見された。そのうち2点は平安時代の住居址(SB26・15、SB32・351)、他は中世の溝(SD02・4)及びII層(II・6)からである。SB32・351は耳部端を欠損して全体の形状は明確でないが、平安期に多い刃先部の長いU字形鋤・鍬の一つである。しかし刃先部の長さ(8.4cm)に比して刃先幅(8.5cm)が狭く、先端も尖っているのでむしろ「V」字形に近く、このタイプの類例は少ない(註1)。身部横幅が10cm前後(推定)と狭く鍬としての可能性が大きい(註2)。SD02・4は片方の耳部が欠損しているが、身長14cm、身幅14.7cm(いずれも推定)の小型のU字型である。しかし、先端部が尖っており口の開いた「V」字形に近い。刃先部が短かく最大値でも3cmである。なお、後に述べるように鋤として利用されていた可能性がある。次に製法をみると、4点とも基本は2枚の鉄板を貼り合わせ、刃側は叩いて密着させ反対側は開いて袋部としている。この2枚の鉄板は厚さを異にするが、厚い側は(個体によって薄い側も)さらに少なくとも2枚の鉄板を貼り合わせているらしいことが、刃部外縁や袋部端部に沿って縦に走る亀裂から推測される。薄く圧延した鉄板を折り重ねて、横割れに対するねばりを与えたものだろうか。なお、袋部での前後2枚の鉄板の開き具合は、薄い側が大きく捲れ上った形状を呈し、中央付近では奥行き(深さ)も短い。この開きの広い側、即ち木質部の膨みの大きい側を手前にした時、SB32・351は刃部先端右側に、SD02・4は左側に使用減りが明瞭に認められ、両者が異った使われ方をしたことを示している。このことから、SB32・351を鍬とするならばSD02・4は鋤となろう。

(3) 苧引鉄

発見された4点はいずれも平安時代の遺構からの出土で、そのうち2点は住居址(SB96・22、SB266・15)、他の2点は溝(SD17・73、SD19・12)出土である。4点のうちSB96、SB266、SD17の3点は肩の丸いタイプで、11cm余りの大型と8～9cmの小型がある。刃は鋭さに欠け、特にSD17は刃端部が1.5mm程フラットになっている。これに対しSD19は身部長(推定)はSB96と同じであるが、肩は角状で身部幅は広く刃は鋭利でタイプを異にしている。なおSB96は背の突起部全体に木質部の付着があり、柄部の状態を示している。

(4) 紡錘車 (第343図 第117表)

総計50点(土製1、鉄製49)が出土した。25遺構(住居址22、土坑3)から土製も含め34点、遺構外から16点(I・11、II・5)である。しかしいずれも欠損品で、これらの中には同一個体の存在も考えられ実際の個体数は若干減少するかもしれない(第117表)。

輪部の形状及び大きさを示したのが第343図である。

輪部形状(鉄製)はその断面形状から次の6つに分ける。

- a. 上面、下面ともに上側に湾曲した三日月状をなす。中央部の厚さ3.5~4mm
- b. 上面のみ外湾し下面は平らな弓状。平安期中型と小型はすべてこのタイプ。中心部の厚さ1.5~4mmとバラツキがある。
- c. bと類似するが縁部付近で両面より狭くなるもので大型に多い。中心部の厚さ3.5~4mm。
- d. 両面ともに外側に膨み凸レンズ状をなす。中心部の厚さ3.5~4mm。
- e. 中心部も縁部も厚さが同一で、断面が薄い(4mm)長方形をなす(II層出土)。

以上6タイプのうち、遺構出土の鉄製輪a~dはいずれも中心部が厚く縁部に向け徐々に薄くなるが、土製は断面台形を呈している。

大きさからみると径が4.5cm及び5.5cmを境に大、中、小の3種に分れる。大型8点と中型5点はいずれも平安期の遺構出土であるが、小型3点のうち平安期の遺構出土は1点のみで他はI、II層の出土である。

大型 径5.6~6.1cm、重量19~35g、軸孔5mm前後。

中型 径4.7cm前後2点、5.1cm3点(土製を含む)。重量、鉄製14~20g、土製90g。軸孔鉄製3.5~5mm、土製7mm。

小型 平安遺構出土一径4.3cm、重量9.2g、軸孔3.1mm。

I層出土一径4.4cm、重量9.3g、軸孔5mm。

II層出土一径4mm、重量24.1g、軸孔5mm。

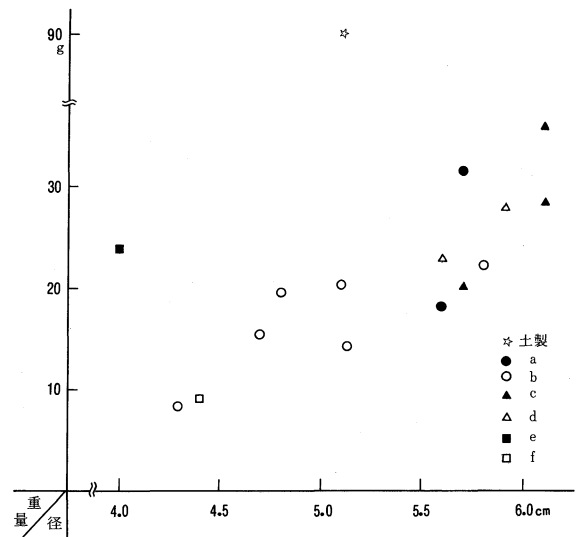
軸の断面はすべて円形で、径は8mmを測るSB86・26の1点を除くと、ほとんどは5mm以下である。糸繰部は残存している2点(SB101、SB159)でみるかぎり、いずれも時計方向に半周螺線を描きながら鈎針状をなす。長さは完形品がなく明確でないが、比較的残存状態の良いものから類推すると30cmを越える長いものと20cm前後から20数cmになる短めものがあり、輪部と同様に較差がみられる。

これらの大きさや形状の差と時期との相関関係は特に認められない。SB71では3点の紡輪を一括出土しているが、その径がそれぞれ6.3cm、5.7cm、5.0cmと異なり、またSB86から一括した紡軸は1本が30cmをこえ、他の2本は20数cmほどが推定されむしろ大きさの異なったものと併用していたらしい。このことは何を意味するだろうか。古代東国では石製と鉄製は並存し重い石製は麻糸に、軽い鉄製は絹糸に使い分け

出土地点		部位	輪、軸一体	輪のみ	軸のみ	計
平安時代	SB		5	11	15	31 (22)
	SK			1	2	3 (3)
	II層		1		4	5
	I層			1	10	11
計			6	13	31	50 (25)

※土製1点を含む。()内は出土遺構数

第117表 紡錘車出土状況



第343図 紡錘車輪部の径と重量の分布

られたという滝沢 亮の指摘がある(註3)。しかし本遺跡では土製1点を除くとすべて鉄製で、これは信濃におけるこの期の一般的な様相である。古代信濃では庸、調として大量な布(麻布)を納めることが「延喜式」に見られるが絹の規定はない。絹糸調進の記録も一、二見られ(註4)、絹糸用紡錘車の存在を否定しきれないが、一般化されたとは考えにくく、本遺跡の紡錘車も麻糸紡績具として使用されたと考えたい。近隣の内田原遺跡1号住で紡錘車5個とともに、素材が青麻と推定される糸が発見されており、貴重な例証といえる(註5)。また10世紀末から11世紀初頭にかけて信濃布の都での活発な動きが見られ(註6)、都への大量流入を窺わせる。たまたま、本遺跡の紡錘車出土の急増が認められる時期に当たり、これらの社会動向と無関係ではなかろう。ところで、先の内田原遺跡の5個の紡錘車は明確に大(輪径6cm-2体)、小(輪径4cm-3体)が認められる。本遺跡にも認められる規格の差異は、工程の違いや紡ぎの質に係るものではないだろうか。

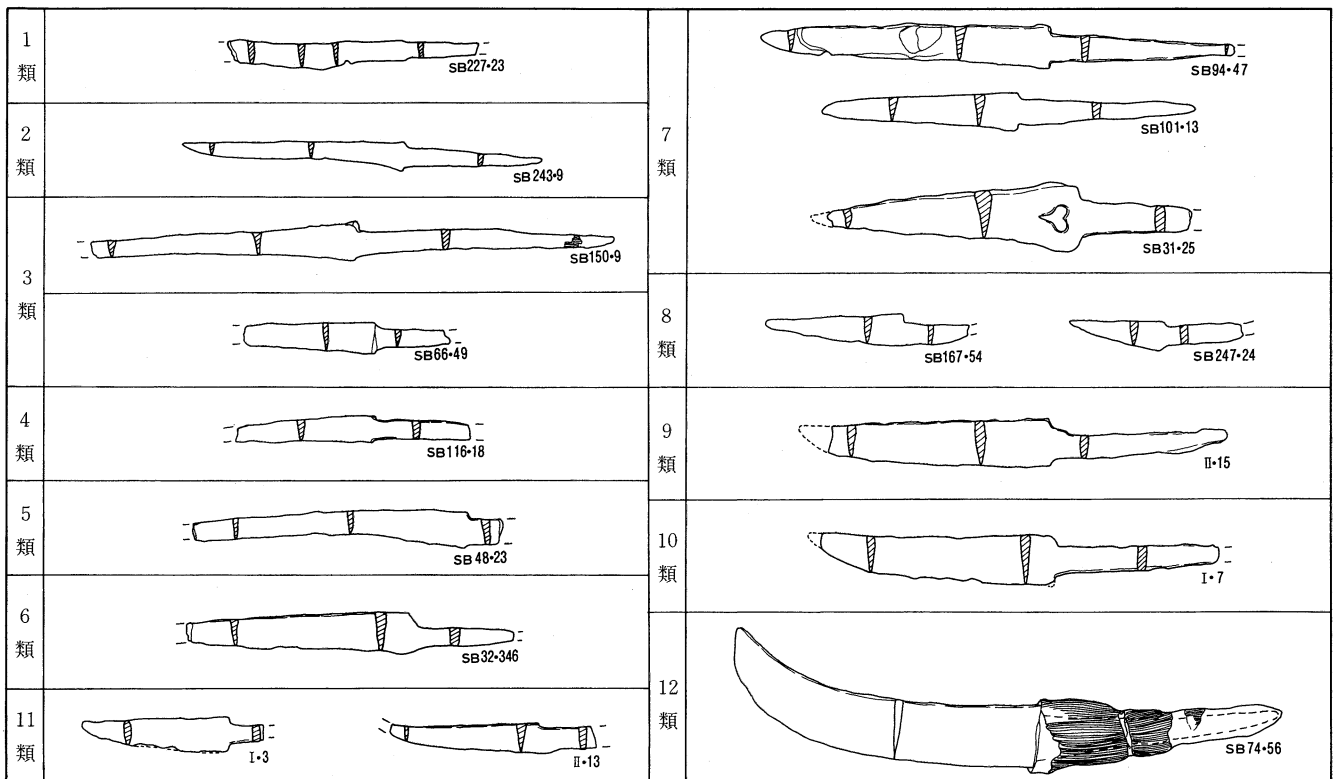
(5) 刀子類 (第334~346図)

刀子類は総計113点出土した。そのうち古代の遺構から68点、中近世の遺構から8点、II層から12点、I層から25である。古代遺構出土の鉏1点を除けばすべて刀身であるが、完存は数点で完形に近いものも含めても20点を越えない。以下これらの残存率の比較的良好な資料に基づいて分類を試みながらその特色に触れてみたい。

刀子は鎌などと同様使用減り、研ぎ減りが著しく元来の姿をとどめにくい。また、刀身の反りなどにみられる微妙な形態の違いも、本来意図されたものなのか、技術上の制約からくるバラエティーなのかを見極めることはかなり難しい。しかし、刀身形状からあえて以下のように分類を試みた(334図)。

1類 棟側は無関か、逆関で身部の方が落ち込む。刃側は緩傾斜の不明瞭な関がつく。身幅は狭い(SB118・23、SB227・23)。

2類 身部は鉏元から小刀関をもって急激に、その後は反りをもちながら緩やかに減幅する。刃側は緩



第344図 刀子分類図(1:3)

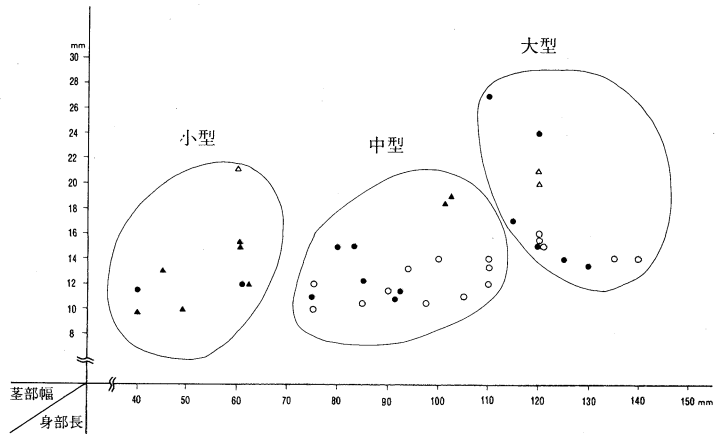
やかなS字状を呈す。いずれも細身で長い。両関（SB66・50、SB139・18、SB150・9、SB163・7、SB243・9、SB249・12）と棟関（SB101・14）がある。大きさは大、小が認められる。

- 3類 2類に近い細長身だが、基部から先端に向け徐々に両側より直線的に減幅する。先端側は1類と同様わずかな反りをもつと推定される。両関（SB15・36、SB29・31、SB32・348、SB66・49）と、棟関（SB15・35、SB94・46）がある。大きさに大小認められる。
- 4類 3類に近いが、身部も茎部も関部からそれぞれの端部へ向けて、主として棟側から減幅し、棟側は関部を中心に「へ」の字を呈するのに対し、刃側は直線に近い。関はいずれも小さく、両関（SB52・27・28、SB116・18）と棟関（SB48・24）がある。大きさは大小認められる。
- 5類 身部は、棟側にふくらむ逆反りとなる。細長身。（SB48・23）
- 6類 身部は関部から直線的に減幅し、先端が尖がる。茎部は身部に対し短い。不明瞭な斜に切り込まれた両関をもつ。（SB03・10、SB32・346）
- 7類 身部は両側とも関部から急に、その後は徐々に減幅し先端が鋭く尖がる。身基部幅に比して身長はやや短かめであるが、身基部幅が比較的狭いもの（SB32・345、SB94・47、SB101・13）と幅広で厚さもあり、しっかりしたもの（SB31・25）がある。大きさは大小ある。
- 8類 身部はいずれも6cmを越えない小型。棟は直線的で刃側のみ減幅していく。身部に対して茎部が反り上がるのが特色で、関部を中心に逆「へ」の字状を呈する。両関（SB72・16、SB74・49、SB247・24）と棟関（SB167・54）がある。
- 9類 身部の棟側は反りをもち、刃側は中央部に膨みをもちながら減幅する。身部の幅が広くなり大型が多い。両関のもの（SB203・10、II・15、I・5）と関不明瞭で浅いもの（NR01・4）がみられる。大きさは大小ある。
- 10類 幅広の身基部はほとんど減幅しないまま刃部を形成し、先端付近で急減し切先となる。食事用ナイフに近い形状となる。（I・7）
- 11類 9・10類の小型で身部が6cmを超えないものを一括する。8類に近いが身部と茎部は直線的に成形される。両関（II・13、I・3）と棟関（I・2）がみられる。
- 12類 切先が大きく湾曲した大型。（SB74・56）

以上12分類の外に逆反りの小型（近・22）、関をもたず、木質の柄をつけなかったと推定されるもの（I・8）などがある。なお、刀子の外に剃刀と推定されるものが2点（I・10・11）ある。

以上の分類に当って留意した若干の点につき付記したい。1類は破損が大きく不明な点が多い。形状は特異だが、同型のものは平塚市真土六の城遺跡にもみられる。2類は一番数が多い。いずれも細身であるが、研ぎべりの磨耗が相当進んでいることは間違いない。しかし、鉤元から内湾するように深く研ぎ込まれるこの形状は、本来それに近く成形されていたのか、単なる研磨減りかは不明である。3類は完形がなく推定部分が多い。4類の棟関のみのSB48・24は刃部と茎部を逆転させて使用するために変形させた形跡があり、本来の形状とは異っている可能性が強い。5類の逆反り形は刀子としては異様だが、発掘例は意外に多い。ただ、刃付け前はいずれの刀子も本来逆反りに成形されており、刃部を成形する過程の刃側の鍛き延しによって、直線あるいは反り形に成形されるものと想定されるため、本来意図されたものか否かは不明である。これは4類でもいえる。6類のSB32・346は関が不正形で刃付けが甘く未整品の可能性がある。7類のSB31・25は身の基部が幅広で、肥厚しているだけでなく、棟部がかまぼこ状である。また、身の基部にハート型の透しが施されており、特殊な用途をもった刀子であろう。8類中SB72・16やSB74・49は小さな身部に対し茎が長い、身部が欠損や研ぎ減りで短くなった可能性もある。しかし、同型のものには近隣の吉田向井遺跡をはじめいくつかみられ、特に前田遺跡32号住の272は柄の木質部を残存してお

り、その状況からは研ぎ減りによる変形とは考えにくい。身部に対して反り上った茎部から推測すると、細かなものを刻んだ特殊な工具とも考えられる。12類は切先が大きく湾曲しており、逆手に持って切先を中心に使ったものかもしれない。一般の刀子の範疇にはおさめにくい。以上の分類にみたように、刀子の形状は非常に微妙で、従って機能上の分類はいっそう困難である。古代においては、どの時期にもみられる2類などを基本にして、先端を尖がらした7類、小型な8類、あるいは特殊型の12類等は機能分化された可能性はある。また、大きさからみるとかなりのバラつきがあり、大(身部長11.5cm以上、茎部長9cm以上)、中(7~11cm、5~8.5cm)、小(6.5cm以下、4.5cm以下)程度には分けられそうで(第345図)、さらに細分される可能性がある。



第345図 刀子身部長と茎部幅の相関

本遺跡の古代遺構の刀子は、ほぼ全時期に安定した比率をもって出土している。それだけ使用範囲が広く使用価値の高いものであったろうし、それに見合った機能分化は当然予測される。

時期分類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	層位
1		●							●						II
2				●	●	●		●				●	●		I
3									●			●	●		
4								●		●					
5										●					
6				●								●			
7									●			●	●		
8					●							●	●	●	
9													●		
10															
11															
12												●			

第346図 刀子の時期別・分類別出土状況

8・9期頃より種類が増加し、13期以降はSB31・25やSB74・56のような特異な形状の刀子や、小型の刀子などが目立ってくる。しかし、7期以前の分化が少なかったとはいえない。7期以前にこの問題に言及する資料の絶対数が不足しており、他遺跡にも広げた検討が必要である。なお、形状について付記すると、本遺跡の刀子も他遺跡出土と同様、平造り以外の製法であると断定できるものはない。しかし棟部の成形については明らかに丸棟であるSB31・25やSB74・56は除外しても、SB72・16、SB74・49、SB78・20、SB81・40、SB140・21、SB163・8、SB167・54、SB170・12、SB249・12などは丸棟の可能性が強い。この外にも判断の困難なものが何点もあり、今後の問題として残したい。最後に古代遺構以外の刀子について若干触れておきたい。I、II層の刀子は古代遺構の刀子と比べて①幅広なものが多い②小型品が多い③刃側からのみ減幅し、減幅は刃中央部に膨みを残しながら行われるものが多いなどの点で、明らかに異った様相を示す。このうち①と③については、古代のものは研ぎべりが激しいことを示しているが、それだけでなく関の大きさからみて、本来古代の刀子は細身が多かったようである。

(6) 燧鉄

燧鉄は13点出土した。古代遺構より1点、近世遺構より5点、II層より3点、I層より4点で古代遺構の少ないのが特色である。これらの13点は平面形状から5タイプに分けられる。①山形の基部の両裾を突出させ内湾気味に立ち上がらせたもの(SB184・22)、②高い山形の基部の裾を小さく突出させわずかに立ち上がらせるタイプで底部が内湾するもの(II・32)と、底部中央部があまり凹まないもの(II・31、I・15)。③低い山形で、突出させた両裾をほぼ垂直に立ち上がらせたもの(I・12、13、近世17~20)。これには大きさまざま

ある。II・33は突出部が破損しているがこの部類であろう。④台形状の基部の両裾を長く突出させ、基部上方まで巻き上げたもの(近・16)、⑤両裾を突起させず頂部付近に穿孔をもつ小型品(I・14)。これらの燧鉄は敲打と被熱のためかいずれも亀裂、剝離が著しい。

(7) 工具

工具として使用されたと思われるものが平安遺構から17点、II層から9点、I層から16点、計42点出土した。種類は錐(状)、針(状)、鏹鉋(状)、鋏(状)、鑿(状)、楔(状)、鑿、篋状及びその他の工具がある。錐(状)は断面方形で細く先端の尖ったものを一括した。II層(20・21)、I層(23・24)出土のものはいずれも8cm前後であるが、古代遺構出土の4点(SB89・3、SB16・13、SB129・21、SB14・44)は大小さまざまで、長いものは19cm(SB89・3)、短かいもの(SB16・13)は7cmを越えない。いずれも穿孔を目的としたものだろうが、使用方法や対象が異なるものと思われる。なお、SB89・3、SB16・13は基部側に木質部を残している。針(状)は針孔を持つものと針状に細く鍛き延したものを一括した。SB15・34は端部近くに径1mmほどの針孔を持つが、基部断面が3.5mmほどあり縫針には太すぎる。SB32・352は断面1~2mmで細い針状を呈するが、両端部欠損していて針か否かは不明。I・26は端部付近に針孔を持つ。基部は太く(径5mm)長いので、特殊な用途に限定されたものと思われる。鏹鉋(状)では、いわゆる鏹鉋はII・19の1点で、あとは彫刻刀の先端ほどの小型品である。小型品のうちSB66・53、SB04・24、II・18は同タイプで、刃部の断面が底部の広い三角形を呈し、底面は平坦、上部は中央に鑄をもち、先端は尖っている。II・17は刃部が彫刻刀の平刀に似たもので、前3者とは形態は異なるが同じように細工用として使われたものだろう。鋏(状)6点(SB14・45、SB04・25、SB13・19、II・22~24)のうち明確に鋏としていいものはSB14・45とII・22の2点である。あとは片面が平面で片面に膨らみをもつが未製品の可能性もあり断定は避けたい。鑿(状)ととらえたものは、棒状端部が片側又は両側から鍛いて刃付けされたSB32・354、SB10・18、I・20に可能性がある。他にII・45・46は刃を欠くが身部の鍛え方や頭部の敲打痕から鑿の可能性もある。楔(状)は6点(SB05・59、SK186・1、I16・18・19)あるが、そのうちSB05・59とI・16は厚手で先端が尖がるのに対し、他は薄く短冊状をなす。いずれも頭部が敲き潰されており鑿として機能させたものだろう。鑿(SB98・9、I・31)は基部側が筒状をなし木質部を挿入して柄にしたもの。SB98・9は直線的であるのに対し、I・31は先端部近くで湾曲している。篋状としたものは全体形状が裁縫用の篋に似たもので下端に刃が付く。刃渡りは3cm近い大型(I・29)から彫刻刀の切出しほどの小型(I・27)、その中間的なもの(SB31・24、I・28)まで大きさはさまざまで、器形も一定しない。柄は差し込んで使ったものと思われるが、それぞれが何に使われたものか不明である。その他ではI・30は端部が釘抜き状に成形されているが、切り込みが浅い。I・25は半円形の鉄板の弦側の両端に折り返しの耳が付いたもので、近世遺構(11)、辰野町堂ヶ入遺跡、千葉市谷津遺跡等にも類似品が見られる。谷津遺跡例は半円部に刃が認められており、耳部に柄をさし込み、削器として使ったものだろうか。工具と推定されるものの用途が全く不明なものにSB207・17とII・25がある。前者は両端が水平に切られており、あるいは何かの未製品の可能性も強い。

(8) 毛抜き型鉄器

総計25点出土した。いずれも欠損品であるが頭部を残すものが8点あり、その形態には2つのタイプがある。①逆「U」字形の単純な形態で、SB42・9、SB81・41、SD07・5、II・27、II・30、I・36、I・37がこれである。このうちSB81・41とI・36は脚部先端が残存するが、いずれも先端を薄くし、内側へ曲げ鉤としている。②2つ折りにして扁平な頭部を作り出すもので、肩部は外へ緩やかに張り出すが、脚部にかけていったんは内湾気味に狭めている。SB120・25がこれに当り1点のみである。脚部先端に鉤を持ってい

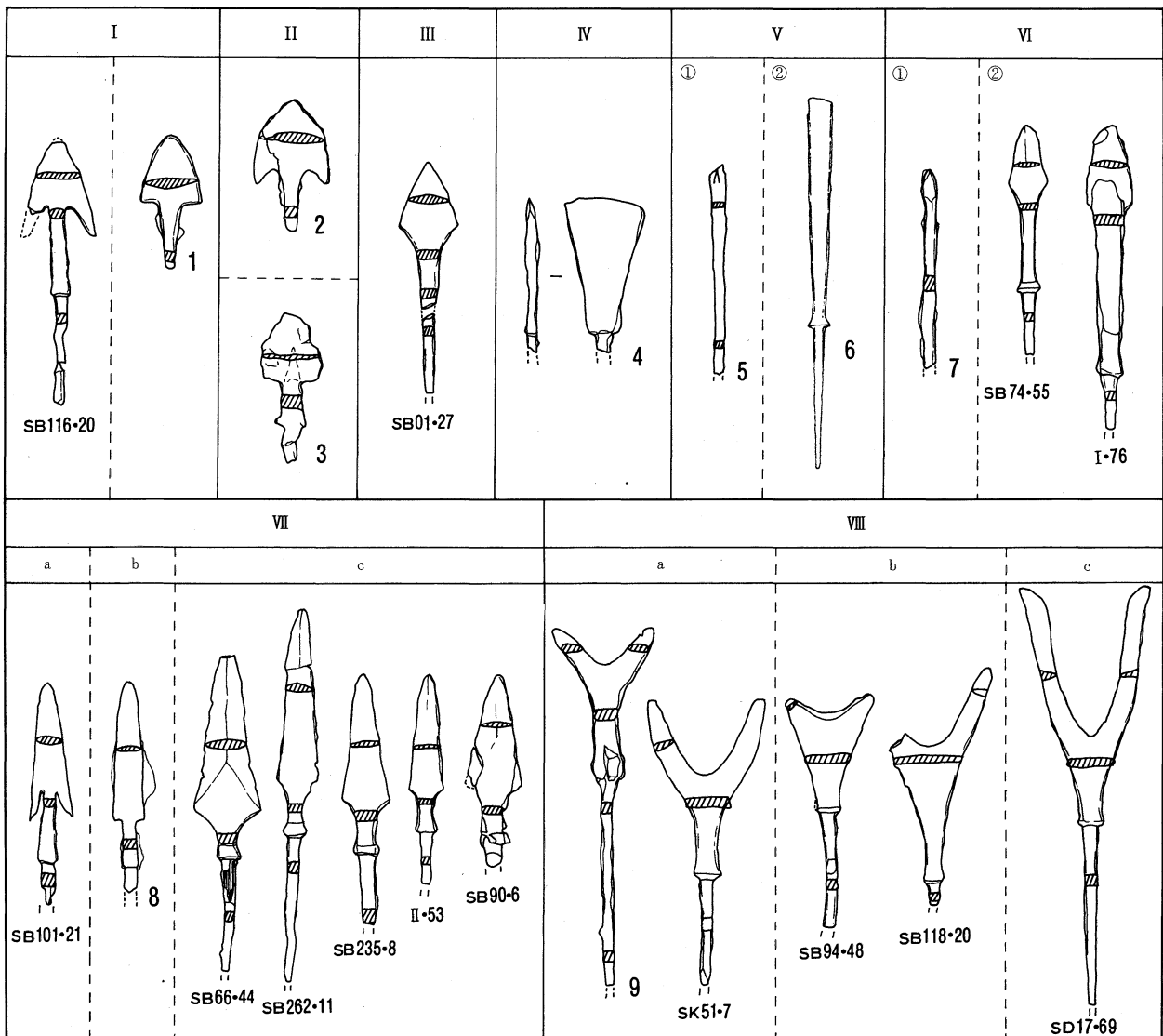
ない。このタイプは①に先行するもので11期まで下ることは珍しい。次に脚部の断面をみると幅が4.5mmから7mm、厚さ1.5mmから3mmとバラエティーに豊み、断面形も内側が平担で外側に膨みをもつカマボコ形、扁平な長方形、角をまるめた長円形等が認められる。脚の長さはほぼ完形に近いものでみると、SB81・41が10.8cm、SD07・5が10.5cm、I・36が9cmである。

(9) 鉄鏃 (第347・348図)

総計72点が出土した。そのうち古代遺構から47点(住居址42、土坑2、溝3)、II層及びI層からそれぞれ14点である。この72点の形態及び時期上の位置づけのため、中南信地方出土の鏃も一括して分類した。(第347図) 時期は奈良及び平安時代を中心としたが、I、II層出土の鏃との関連で一部中世の鏃も対象とした。

I類 身部平面が正三角形かそれに近い形。断面は両丸か鑄造り。篋被部(頸部)は長目。身部関の形状から2分する。(I a-逆刺、I b-角状)。

II類 身部平面が五角形かそれに近い形。断面は両丸造り。身部関の形状から2分する。(II a-逆刺、II b-角状)。



第347図 鉄鏃分類図 (1 : 3)

- 1 十二ノ后遺跡84号住
- 2 高部遺跡29号住
- 3 田川端遺跡23号住
- 4 山本代遺跡1号住
- 5 本城遺跡29号住
- 6 北土井遺跡
- 7 十二ノ后遺跡87号住
- 8 吉田向井遺跡61号住
- 9 山本代遺跡1号住

- III類 身部平面が圭頭状。身部と篋被部との境不明瞭。断面鑄造り。
- IV類 身部平面は細型の扇形か変形した扇形で先端部に刃がつく。「斧箭広根式」(註7)と「異形斧箭式」がこれに当る。断面は薄い方形。
- V類 身部平面は細長い方形。先端部に刃がつく。断面は薄い方形。「斧箭長根式」がこれに当る。大小がある。
- VI類 身部平面が蓄ないし蛇頭状。断面は両丸か片丸あるいは片平造り。篋被部は長い。いわゆる「鑿箭式」はこの中に属する。大きさにより2分する(VI①-小、VI②-大)
- VII類 身部平面が長三角形かわずかに柳葉状を呈した長三角形。断面は両丸か鑄造り。身部関の形状から3分する(VII a-逆刺、VII b-角状、VII c-撥状)
- VIII類 雁股鏃。基部形状から3分し、刃部の長短からさらに細分する。
- a、細長い方形の篋被部を基部とし、刃部の長さよりさらに2分する(VIII a①-短、VIII a②-長)
 - b、篋被部が関から刃にかけて逆三角形状に広がり、幅広な基部となる。大きさは各種あるが、刃の長さにより2分する(VIII b①-短、VIII b②-長)
 - c、基部の広さはa、bの中間で、刃部は長く大型が多い。関から刃先にかけて側縁は内外湾を繰り返しながら流れるような曲線をつくる。成形が丁寧(VIII c)。

以上のI~VIIIまでに属さないものが本遺跡で3点、いずれもI、II層から出土している。

次に各類型ごとに、本遺構出土の個々について特徴をあげる。

I a類では逆刺が深く横広に翼を張った「飛燕式」(SB53・7)と、やや縦長の三角形を呈するもの(SB116・20、SB125・10)がある。篋被部関は台状。I b類は本遺跡では見つかっていない。

II類はaが1点(II・56)あるが逆刺は小さく装飾的。また平面形は正五角形に近く、将棋駒の形に近い他遺跡と形状を異にする。篋被部の形状(破損で不明)によっては一括できないかもしれない。

III類は1点(SB 1・27)のみ。刃部は鋭いが、身部関部に「圭頭式」の名残がある。破損のため関の形状不明だが頸が長い可能性もある。

IV類は1点(II・63)のみ。扇形身部の茎側が括れて篋被部となる「異形斧箭式」。篋被部関は小さな台状となる。

V類は本遺跡では見つかっていない。

VI類は②のみで8点ある(SB74・55、SB32・358、II・54、I・76・77・78・80・82)。いずれも篋被部ががっしりして長く、遺構出土で断面が7×4mm前後、長さは4cm近く、I層出土は断面9×5mm前後長さ6cm前後となり①よりかなり大きくなる。なお、II・54は身部、I・82は篋被部のみであるが残部形状から当類に属するだろう。篋被部関は台状。

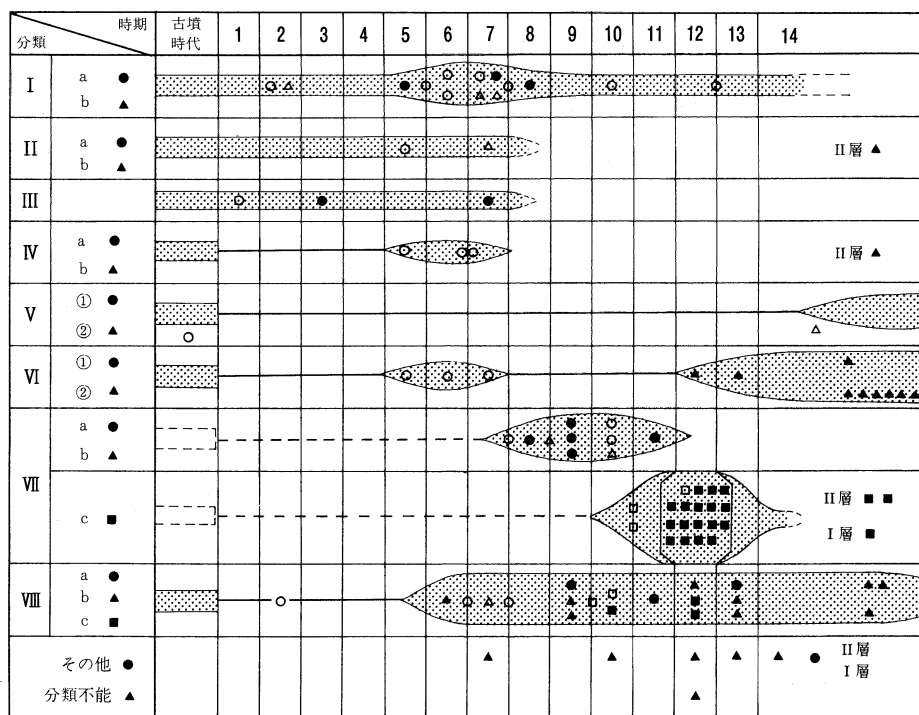
VII類はaが4点、cが22点出土した。VII aは逆刺をもつため篋被部はやや長目になり、関部形状は身部側から関に向けて徐々に把大するため明確な台状となっていない。身部は長三角形をなすもの(SB96・20、SB101・20)と狭峰の柳葉形に近いもの(SB101・21、SB81・39)がある。いずれも薄手で逆刺も重扶(SB101・21)となるなど全体的に造りが精緻である。一方、VII cは身部関が撥状をなすため、篋被部が短か目となり、関はVII aと異なり明確な台状を造る。平面形状はいずれもわずかに柳葉状となる長三角形で、柳葉状化の程度で若干の違いはあるが、全体的に非常に似通っている。しかしこのcは、22点出土し当遺跡の中心をなすもので、大きさ(身部最大幅、身部・篋被部長)を中心に以下のように細分した。①身幅が広く丈の長い大型(幅2.9cm、長さ9.7cm)でSB66・44の1点がある。②身幅は広くないが丈の長い型(幅1.8cm、長さ9.6cm)でSB262・11、SB32・356がこれに当る。③最も数の多い中間型(幅1.7cm前後、長さ8cm前後)でSB32・357、SB43・39、SB66・41~45・46・47・48、SB142・29、SB156・9、SB235・8、SB256・16がこれに属する。④身幅が

狭く、丈も短い小型（幅1.3cm、長さ5cm前後）でⅡ・52・53、Ⅰ・83が当る。⑤広い幅に比して丈が短い特殊型（幅2.4cm、長さ推定7cm）で、SB90・6の1点である。これは篋被部が身部より関節まで徐々に細くなっており、関節から再び肥大する①～④とやや異なる。⑤についてはⅢ類との関係でとらえるべきかもしれないが、これについては後述する。なお、篋被部と身部との関係では、身部の大きい①、②では篋被部は短かく、身部の小さい④では長目である。大きな身部を支えるには長い篋被部では堪えきれないという事情によるものだろう。

Ⅷ類の雁股鍔は15点出土した。Ⅷa 3点のうちSB118・22、SB141・33は刃部の立ち上がり状況は不明だが、SK51・7は内湾気味である。なお、SB118・22は片刃に環がはめ込まれている。Ⅷb 8点（SB94・48、SB118・20、SB74・53・54、Ⅱ・60・61、Ⅰ・85、SD25・20）のうち、刃部形状がわかるものはSB94・48とSB118・20の2点であるが、前者は刃部が短かく後者はやや長い。他のものは刃部形状が欠損のため明確ではないが、残存部形状からみてあまり長くはならない。また、Ⅰ・85、Ⅱ・61、SD25にみられるように小型品が多いことも特色である。cは3点（SB04・28、SB32・359、SD17・69）あるが、刃は長く流麗な成形である。

以上のⅠ～Ⅷ類に入らないその他の鍔（Ⅱ・50、Ⅱ・62、Ⅰ・75）のうち、Ⅱ・50は身部形状はⅢbに近いが篋被部が短い。Ⅱ・62は舟形の身部と鋭く括れた短かい篋被部をもち他に例をみない、Ⅰ・75は身部関ともに丸味を帯びた長三角鍔で篋被部が長い。なお、破損のため分類不能な14点のうち、残存部形状からSB04・27はⅥaに、SB111・99はⅧbに属する可能性はある。また、SK149・1、SB69・46、Ⅱ・57、Ⅰ・81はいずれも篋被部が長く、ⅤかⅥ類の系統だろう。

次に以上の分類を時間軸上に位置づけ、変遷をみたのが第348図である。これによると次の4期に区分できそうである。①1～4期は5点と出土数が僅少である。その内訳はⅠ類とⅢ類が2点ずつⅧ類が1点である。篋被部の長い長頸鍔は認められない。②5～7期はⅠ類からⅥ類までを中心に20数点認められ、絶対量の増加とともに長頸鍔を含んでいることが特色である。いずれも古墳時代に祖型をもち、そのまま引き継がれてきたタイプ（長頸鍔のⅣ～Ⅵ類は奈良時代に中断がある）で、8期以降ではⅠa類を除いて一斉に姿を消している。なお、Ⅶ類の雁股鍔がこの期の後半より増加し始めている。③8～12期はⅠ～Ⅵ類に代ってⅦ類の長三角鍔が主流を占める。しかし、8期から11期まではⅦa、b類が、また、11期（あるいは10期まで上るか）からⅦc類が姿を見せ始め、12期にピークを迎える。Ⅶc類のその後の継続は明確ではないがあまり長期間ではなさそうである。なおこの間はⅧ類の雁股鍔が多出し（10点）、特に刃が長く容姿の整ったⅧc類は10期より12期にみられる。④13期以降登場し、中世武器用鍔の中核になると推定されるのがⅤ②とⅥ②



第348図 鉄鍔の時期別・分類別出土状況
（白ぬきは中南信地方、他遺跡出土）

類である。V②類の方が若干遅れるかもしれない。この両者とも長頸鏃であるが、その祖型と推定されるV①やVI①類よりはるかに大型で重くなる。雁股鏃も並存するが、小型化の傾向がみられる。

以上本遺跡も含め中南信地方の鏃の動向の概略をみたが、もとより鏃の出土は多くなく、管見したものはさらに限られ、推測の域を出ない部分もある。資料の増加とともに見直すべき点も少なくなかろう。しかし、前述のI～IV期を一応の目安に置きながら本遺跡出土の鉄鏃を遺構に則して検討し、その性格を想定してみたい。

本遺跡では古墳期に祖型をもち継続されるタイプは6点しかない。そのうち4点は遺構出土でI a類も含め8期までの出土である。これに対し、長三角鏃であるVII類は26点(うち遺構出土21点)もあり本遺跡の鏃を特徴づけている。そのうちVII a類は8期1点、9期2点、11期1点あり、このタイプの可能性をもつSB04・27(10期)を加えれば、少数ではあるが8期～11期まで継続しての出土である。ところでこの鏃は造りが精緻で細部まで意匠を凝らしていることは既に述べた。そのことは狩猟用としてはもちろん、実戦用の武器として多用されるべきものとも考えにくい。ところで、この時期は新しい富豪層のもとに集落の再編成と秩序づくりが進み、その一つの極としてSK128のあり方が想定されている(第5章第3節)。鏃もまたその過程で実戦用武器というより、むしろステータス・シンボルとして存在していたのではないだろうか。本遺跡以外でV a類を伴出している茅野市判ノ木西遺跡14号住、原村居沢尾根遺跡32号住、塩尻市内田原遺跡1号住のいずれも集落の中心となる住居址ないし、八稜鏡を伴出する特殊な住居址であることは象徴的である。

次に、長三角鏃のもう一つのタイプであるVII c類は遺構から17点出土しているが、すべて12期に限られ、その出方はかなり特異である。県内では遅くとも11期には確実に存在し12期にかけて主流をなしたものと推定される。本遺跡もその潮流の中に位置づけられる。しかし、12期のみ大量の集中はSB32に代表された新たな権力に直接にかかわったもので、SB32権力下に製作され、所持された実戦用武器を推測させる。12期のSB66から8本の鏃が、炭化物や焼土とともにほぼ一括投棄されていた。これらはそれぞれ形状には違いがあるが、刃が薄く鋭く、刃縁部が内湾する共通の技術的特色をもっている。本址には鉄滓や工作台らしき石の投棄もあり、おそらくこうした集落内の鍛冶によって供給されたものではなかろうか。その場合、SB32権力の統制下にあったらしいことは、SB32消滅後の13期遺構から1点の出土もないことが暗示する。ただ、VII c類はII層に4点、I層に1点出土しており、どのように継続されてきたか不明であるが、薄く小型化するのが特色である。

ところで、これらのVII aやVII cの系譜は明確ではない。古墳期の広峰の長三角形や柳葉形鏃に祖形を求めることもできそうだが、その後の系譜や両者の関係は不明である。VII c類⑤に分類したSB90・6は形状がやや特異でIII類的要素があることは前述した。SB90は7期に属しており、VII c類はあるいはIII類上の系譜で考慮しなければならないかもしれない。

V②類とVI②類のうち、VI②類は遺構では12期のSB32に1点(SB32・358)続いて13期に1点(SB74・55)出土している。14期のSB69・46もこの仲間であろう。またII層では1点(II・54)、I層では4点(I・76～78・80)出土するが、前者は遺構内に比べ、さらにながしりした大型となる。弓や甲冑の発達と無関係ではなかろう。なお、V②類はI、II層出土の頸の長い鏃の中にはこれに当たるものがあると思われるが欠損のためはっきりしない。県内でも豊野町北土井遺跡で出土しているが時期は特定できない。しかし、法住寺殿1010土壇(平安時代末期)にみられるように、この種の鏃は「いわゆる征矢」としてVI②類とともに中世鏃の中心となしていたものと思われ、本遺跡でも実戦用として使用されたものだろう。

最後にVIII類の雁股鏃に触れたい。本遺跡では、雁股鏃は15点ありそのうち12点は遺構出土である。遺構出土は6期に1点(SB111・99)あるが、身部がほとんど欠損のため確定はできない。他は9～13期に集中す

る。形状は種々であるが、最も意匠を凝らしたVIII c (SB32・359, SB04・28, SD17・69)は10期、12期にみられる。VIII b類は9期では断面が薄い板状であるが、12期以降では篋被部に近いほど肥厚する。遺構外では3点(II・60, I・85)あり14期以降引き続き使用されたと思われるが、いずれも小型のVIII b類である。なお、これらの雁股鏃は武器として他の武器用鏃と併用されたものと推定され、6期以降に多く認められるのもそのため、当遺跡の性格の一面を窺える。

以上中农信地方出土の鏃も含めて、その形態の変遷を中心に検討してきた。それによると、古墳時代に祖型をもついくつかの形態は、7期まで認められる。しかし、4期(9世紀前後)までは絶対数が少ないだけでなく、古墳時代に征矢として中核をなしていたと思われる長頸鏃は、5～7期までとは対称的に1点も認められない。このことは律令統制下と、その崩壊期の武器所有の在り方の違いを示唆しているとも考えられる。これらの古墳時代の伝統を引く鏃も8期(10世紀前半)以降は、一部を残し姿を消してしまい、新たに長三角鏃が主流を占めるようになる。これらは雁股鏃の隆盛とともに、征矢としての使用が考えられる。このことは5～6期の律令制古代村落の崩壊の中から、武装化した有力者の胎頭が示唆される。当遺跡では、これに当るものとして10世紀中頃のSK128の被葬者、11世紀代のSB32を中心に館を構えた「領主」をあげることができる。前者の時期には身部関に精巧な腸袂をもつステータスシンボリックな長三角鏃(VII a類)が、後者の時期には撥状のやや長大化したより実戦的な長三角鏃(VII c類)が多出する。しかしこれらの長三角鏃も、13期(11世紀末)以降は、中世の征矢の中核となる長大な長頸鏃に位置を譲る。

このように今回得られた資料は、古代から中世への過渡的な様相を示しているといえるであろう。

(10) 建築金具

建築の上屋に係る資料は一般に僅少であるが、本遺跡では戸締まり用と推定される金具と、比較的まとまった釘を出土している。

① 締まり金具

締まり金具は、掛け金具及肘金具と推定されるものである。掛金具はSB32・365があり、SB31・33、SB163・11もこれに属するかもしれない。SB32・365は割りピン状の根壺に長円形の環がはめ込まれた、いわゆる竿掛金具。環は断面がほぼ円形の径7mmに近いがっしりしたもので、円径長軸が3.2cm、短軸が1.1cmである。根壺の脚は欠損しているが少なくとも5cmを超える。脚部の残存部では折り曲げた痕跡は認められない。環は中央部がわずかに「く」の字状に屈曲し開き戸での使用状況を示している。対になる受壺は出土していない。SB31・33は受壺の可能性がある。脚部先端は欠損しているが、脚部残存部は3.3cmで屈曲はない。頭部環の内径は5.2×6.0mm。SB163・11は竿掛金具の環の可能性があるが、内径が3.3×0.8mmでやや狭すぎるきらいはある。肘金具は住居址(SB78・19)とI層(I・33)から1点ずつ出土した。SB78・19は割りピン状の頭部ががっしりした鉤をはめ込んだもので、鉤断面の基部は1辺7mmの角丸方形、先端部は円形をなしている。根壺の脚は頭部から2.7cm付近で左右に開くが、その長さは設置する框の厚さを示していると考えられる。I・33も同形であるがフック部断面が長方形で細い。いずれも対になる受壺は出土していない。これらの金具は県内では荒神山遺跡や御頭屋敷遺跡の掛金具等、わずかな出土例が見られるだけで形態も明確でない。ただ、近世末といわれる御頭屋敷出土例は別にしても本遺跡では12期以降の遺跡に限られ、荒神山遺跡の例も大差ない。これは単に鉄製品の普及によるものか、家屋構造そのものの変化に起因するかは不明である。なお、これらの締り金具は猿繫ぎや吊金具等として使用された可能性も否定できない。

② 釘(第349～351図 第118表)

総計249点出土した。そのうち古代遺構から82点(住居址69、土坑1、溝3)、中世土坑から3点、近世遺構か

分 類		模 式 図	備 考	古	II	I	近	計	
I	頭部端面と平坦にし方頭形にしたもの	a	端面中心部に膨みをもつもの			1	1	2	4
		b	上方わずか斜めから叩かれた痕跡をもつもの			(2)	2	1	5
II	基部上端を斜め上方から叩いて先端を尖らせたもの	a	片面から叩いたもの			1	2	0	3
		b	両面から叩いたもの				5	2	7
III	基部を単に曲げ頭部にしたものの	a	基部上位を折り曲げたもの			1	3		4
		b	基部中位を折り曲げたもの				1	1	2
IV	基部上端を叩き延し、その後単に曲げたもの	a	基部断面が方形又は方形に近い長方形を呈するもの		17	3	3	1 (大形)	26
		b	基部断面の辺の比が、2:1あるいはそれに近いもの		3		1		4
V	基部上端を鑿を入れて叩き伸ばし、その後折り曲げたもの	a	先端部が薄く広く叩き伸ばされ、直線的に曲げられたもの		4	2	5	0	11
		b	先端部は丸く曲げられたもの		6	0	3		9
VI	基部上端を鑿を入れて叩き延し延伸部を折り返して頭造りをしたもの	a	延伸部は折り返されているがその後、折り曲げられず「コ」形を呈するもの				5	18	23
		b	折り返され頭づくりされた後、折り曲げられたもの						
VII	基部上面に皿を載せたもの	a	円形の皿を載せたもの		2				
		b	菱形の皿を載せたもの			1		2	3
		c	隅入長方形の皿を載せたもの						
VIII	その他								

第118表 頭部形状からみた釘の分類

ら58点(整地土53、土坑1、墓址3)、II層から26点、I層から82点となっている。そのうち頭部が残存するものが141点あり、その形態から8類に分類した(第118表)。また各類の出土率を層別に示したのが第349図であり、長さとの関係を示したのが第350・351図である。これによると以下の特色が指摘できる。

a IV類は古代遺構では70.2%を占め、II層でも中心をなしているが、I層、近世遺構では激減する。

それに対してVI類はI層及び近世遺構に見られ、特に後者ではその66.7%を占めIV類とは対照的である。これはIV類が平安時代の、VI類が近世の中核をなすタイプであることを示している。

b V類は平安時代の遺構に既に認められるが、II層、I層と増加する。これはIV類と置き代わって中世の中核をなしていったと推定される。しかし、V a類については、頭部整形が丁寧で飾り釘的な性格もあり、IV類とは異った働きをもって古代から共存していた面も窺える。なお、VII類もわずかながら各時期に存在するが、やはり飾り釘的な性格をもつものだろう。

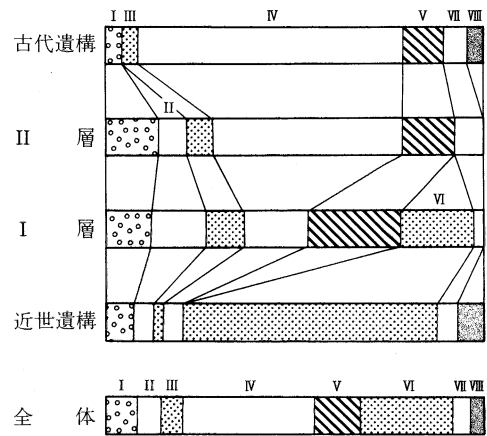
c 長さにおいて、古代遺構出土では2寸前後を中心に、1寸2分から4寸近くまで広がりを見せているが、長短に関係なくそのほとんどがIV類である。一方、近世遺構は1寸及び2寸前後の2箇所を中心に7分から5寸まで幅広い。また、VI類は3寸以上は認められず、長さによって頭部構造に分化がみられる。

次にこれらの釘の使用目的について若干ふれたい。古代遺構の場合25点を出土した特殊なSB32を除けば、出土数は1点(30軒)か2点(7軒)で、刀子等の出土状況と大差ない。これは釘が骨組の緊結や壁材板の固定のような、建築一般に使われたものでないことを示すのであろう。近世遺構のような大型の釘や、1寸前後の短い釘がないこともこれを示唆する。しかし、具体的にどこに使われたかは想像の域を出ない。なお、SB32の場合は25点中長さの推定できるものは3寸前後の長い釘が3点、2寸前後が9点、1寸5分前後が5点あり、これらの釘が緊結用として多用されていた可能性もある。平城京や平安京跡等(註8)で出土した円頭釘に劣らない装飾性の強いSB32・372や、掛金具の存在などの上屋構造に特殊性が感じられ、多量の釘もそれに伴ったものかもしれない。

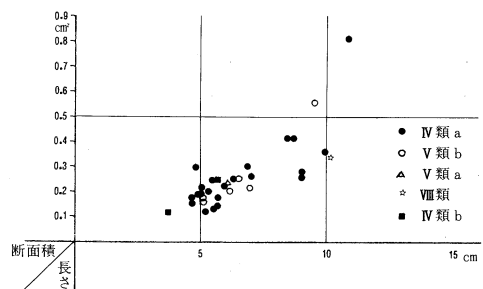
(II) 馬具 (第352図)

馬具と推定されるものが7点出土した。そのうち鐙に関するものが4点、兵庫鎖が2点、鉸具の刺金と推定されるものが1点、鞍が1点である。

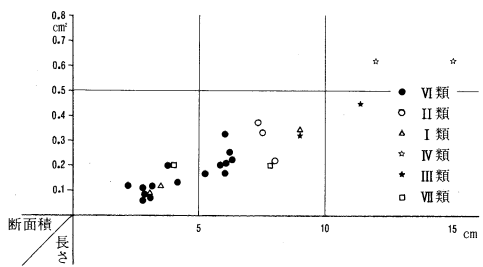
鐙のうち3点は平安時代の遺構(SB48・66、SK203)から出土し、いずれも木鐙用の逆U字状金具でSB48・22はその上にさらに鎖1個を固定している。他の1点(I・34)は鐙鞆鎖の端部であろう。兵庫鎖はSB10から2個体(SB10・19)出土した。この手の小型品は鏡板の立間に着装し、面懸に連結させるなどに使用された可能性があり、この2個体は対をなしていたものではないだろうか。鉸具の刺金(I・35)は大きさからみ



第349図 釘の分類別出土比率



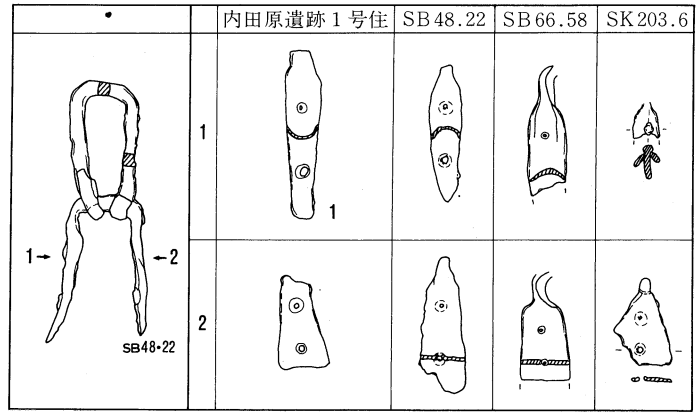
第350図 古代遺構出土釘の分類の大きさ



第351図 近世遺構出土釘の分類別大きさ

て馬具用であろう。鞍(SX21・55)は不安時代の土器集中個所出土の緒通し用銅製管である(巻頭図版4)。以下鐙の逆U字状金具と鞍について若干検討を加えたい。

逆U字状金具の形状及び機能のさせ方は「集古十種」に見ることができる。それは法隆寺蔵と記す木製舌長鐙の上端を、内外から挟んで固定し鐙^{みずお}に連繫する金具で、その形態は本遺跡のものと基本的にまったく同じである。形態上の特色は第352図(資料は参考のため



第352図 鐙の逆U字状金具の比較(1:4)

近隣の内田原遺跡1号住の例も揚げた。なお、内田原遺跡

1号住は7期、SB48は10期、SB66は12期、SK203は13期に当る)のように、鳩胸外側に固定される金具は、欠損のため不明なSK203・6を除けばいずれも笹の葉状である。葉状部の長さは内田原1号が8.0cm、SB48・22が6.8cm、端部欠損のSB66・58はその形状や2つの目釘孔を想定すれば、前2者の中間程に位置しよう。また、最大幅はいずれも1.7cmから1.9cm(径で測定)内であり、形状、大きさともに大差はない。内側金具はSK203・6が三角形である以外は羽子板状である。羽子板状金具は内田原1号が5cm(推定)、SB48・22が6cm、SB66・58が4.5cm(推定)で若干の相違はあるが、最大幅はいずれもほぼ2.5cmである。SK203・6の三角形状のものは4.1cm(長さ)×3.3cm(下辺)となっている。目釘孔は前後ともすべて2本である。なお、前金具と後金具との間隔、即ち木製頭部の厚さはSB48・22では3.5cmである。以上の形態は平安期の集落出土の鐙では全国的にみても大差ない。ただ、9世紀出土とされる青森県浅瀬石遺跡34号住、千葉県村上込の内遺跡156号住、東京都下宿内山遺跡H21号住、神奈川県鷺尾遺跡149号住、埼玉県伴六遺跡5号住出土の逆U字金具より大きく、11~12世紀とされる青森県古館遺跡のものよりは小型である(註9)。大型化の傾向をもつとすればその過程を示す例証となろうが、それにはさらに資料の集積が必要である。

鞍の緒通し管はSX21で12期の大量の土師器に混って単独で出土した。厚さ1mm程の銅板をまるめて筒状にし、背面で縦に接合している。現長は3cm、内径0.8cm中央部にわずかに膨みをもつ。一端は欠損しているが原寸に近いものだろう。表面は漆黒色で剝離部分は塩基性炭酸銅で緑化しているが、一部ブロンズ病で淡緑色化する。剝離のない黒色面は全面に小さなほぼ円形化した魚子の地紋が施され、その他に毛彫りが認められるが残存部が少なく、いかなる紋様か不明。魚子紋や毛彫りの凹みには乳白色の光沢のあるガラス質状のものが溶け込んでいる。これは象嵌でなく化学変化によるものだろうか(巻頭図版4)。

以上馬具を一通りみてきたが、これらの出土の意義について簡単に触れておきたい。本来集落からの鉄製馬具の出土は非常に少ない。大谷猛の集成によると飾金具や鉸具を除いた馬具は、東北、関東を中心に22点しかない。長野県では中道遺跡20号住から素環鏡板が1対と銜の一部が出土しているのみである。もちろん出土馬具のすべてが網羅されているとは考えにくいし、その後の資料の増加もあろう。しかし、古墳に比して絶対量が極端に少ないことには変わりなく、その中で本遺跡がI層の2点は別にしても、古代遺構から4点出土しているのは注目される。大谷猛によれば住居址出土の馬具の分布は、牧との関連、律令体制弛緩の中での一部有力者の台頭、蝦夷征伐とこれに続く統治、律令体制化に組織された浮因集団との関係(東北の場合)を考慮すべきことをあげているが(大谷 1984)、前二者は本遺跡においても今後検討されねばならない視点といえる。なお、有力者との関係では、全面に魚子紋を施した鞍が、SB32号住を含む溝に囲まれた特異な地割の内から出土していることを指摘しておきたい。

(12) 鉄鐸

総計で6点出土した。住居址より3点(SB58・23、SB86・32、SB207・18)、中世の土壌より1点(SK1226・1)、遺構外より2点(II・30、I・38)である。いずれも厚さ1mm前後の1枚の鉄板を筒状に丸めたものだが、上下の口径に差がありわずかに台錐状となる。合せ目が重複するもの(SK1226・1)、裾側が開いてしまうもの(SB53・23、II・30)、などがあり、成形は粗雑である。長さは5.7cm(II・30)、6cm(SB207・18)、7.2cm(SB86・32)、8cm(SB58・23)、8.7cm(SK1226・1)とバラエティーに富み、それに応じて口径も上端部で0.8~1.6cm、下端部では1.6~2.1cm間でさまざまな値をとる。いずれも舌はなく、舌を固定する門や穿孔も認められない。ただ舌については、その可能性をもつものが他遺構から2点(SB21・21、SB32・355)出土している。両者とも棒状の片側を徐々に細くしてその先端を丸く折り返し吊環としたものと考えられるが、吊環の接合線は観察できない。吊環径は2mm程である。棒状部はSB21・21では長方形(5.5×4mm—先端部)、SB32・355では円形(径5mm—先端部)で長さは前者が5.9cm(欠損あり?)、後者が7.2cmである。鐸は県内では茅野市御狩野遺跡土壌1と松本市くまのかわ遺跡6号住からまとまって出土している。前者は鐸に穿孔をもつが後者はない。前述で2点の舌状製品はくまのかわ遺跡のそれに似ており、舌としての推定が正しければ同遺跡と同様な構造をもっていたものだろう。

次に、これらの鐸の出土遺構及び出土状態をみると、SB58は3.3×4.9m、SB86は4.8×3.6m(推定)で、ともに長方形住居址の前者は床面から、後者は埋土中より出土した。前述のくまのかわ6号住も含め長方形住居址からの出土であるが、施設に特別なものがなく偶然の可能性が強い。遺物については、SB86では3種類の砥石、鉄滓(1個)、工作台らしき石など鍛冶との関係を示唆する遺物があり、舌状製品を出土したSB21では鉄滓(1個)、SB32でも鉄滓(多数)や羽口を伴出している。しかし、いずれも鉄滓は単独出土であり、伴出遺物も投棄された可能性が強く、両者の関係を単純に結べない。また、SK1226・1は100×190cm程の楕円形土坑の埋土中に発見されたが、他に遺物はなく御狩野遺跡のような墓壙とは考えにくい。いずれにしても、今回の発掘調査では鉄鐸の性格に言及する資料は得られていない。ただ、時期的には本遺跡のものは10期(SB58・23)、13期(SB86・32)、14期(SB207・18)と10世紀末以降に限る。舌状製品についても同様である。また御狩野遺跡土壌1は10期、くまのかわ遺跡6号は不明だが13期と推定される土器も含んでおり、平安時代も後半になって多用されたい。

(13) 鑄造製煮炊具

鑄鉄は22点出土している。古代遺構から7点、II層から6点、I層から7点、近世遺構から2点である。これらはいずれも厚さ2~4mmほどの板状の細片で原型をとどめていないが、煮炊具と推定されるものが3点ある。そのうち1点(SB163・10)は推定径が22cm程の明らかに容器を想定させるもので、胴部断面がJ型に屈曲している。他の2点(II・81・83)は鏝釜と推定され鏝の痕跡らしい膨みをもつ。そのうちII・81は口縁部を残し、推定径24cmを測る。ところで、SB163・10は鑄造品であることから煮炊具と考えたいがその性格が明確でない。県内では古代の鑄鉄製煮炊具は1点しか出土していない。これは更埴市馬口遺跡の溝で発見された底部中央に突出部をもつ鏝つき釜で、供伴する土器から9世紀末から10世紀代と推定される。鉄製内耳鍋は県内では4点出土しているが、それらはいずれも中世まで下るとされ(註10)、SB163・10は鍋である可能性は非常に少ない。ただ、断面形状からは鉄鍋が推定され、甑による強飯から鍋による姫飯への変化が平安末期にあった(篠田 統 1977)としたら、鍋の可能性も完全には否定しきれないが、全体形状はもとより天地も断定できない程の細片であるので、これ以上の深入りは避けたい。なお、古代遺構の板状鑄鉄7片はいずれも8期以降であり、平安時代も後半には鑄鉄製品が徐々に普及しはじめたらしいことを窺わせる。

(14) 不明品・未製品

不明品には細片等で器形そのものが不明な場合と、何に使われたか分からない性格不明の場合がある。前者は総計108点、後者は47点あるが、そのほとんどはI、II層出土である。これらの不明品には環状、板状、断面方形の棒状などが大部分だが、これらの不明品には鍛冶工程での未製品や半端品も相当数含まれていると思われる。以下筒状の不明品のみをとりあげる。筒状不明品は3点(SB04・26、SB32・366、SB66・54)出土しているが、いずれも片側は閉じ一方のみに開口している。外部形状は台錐形ないしは円筒形だが、内部はともに円筒状。大きさはさまざまで内径に大差がない。いずれも亀製が激しく、鑄造の可能性がある。なお、これらを出土した遺構には鍛冶を示唆する多様な鉄器、未製品、破損品、鉄滓などが投棄されているのが特色である。これが未製品か製品の一部かの判断はむずかしい。

(15) 銭貨

銭貨は総計126点出土した。平安時代の住居址2点、中世遺構22点(建物址2、土坑20)、近世遺構12点(近世遺構6、墓6)、近現代溝2点、II層12点、I層70点、その他6点である。平安時代住居址出土の2点のうち、SB159出土の1点(銭・1)は「富壽神寶」で、住居址の北東寄りの床面近くの埋土より出土した。字体は「富」の第1画が省略され、「壽」の第2画が第4画に接する。「富」の「田」第4画、神の「申」の第3画の横線がいずれも「冂」構えに接しない「不接培」となっている。もう1点(銭・12)はSB30の埋土から出土した「咸平通寶」である。中世建物址出土の2点のうち1点(銭・36)はSK1148(竪穴状建物址)の埋土、もう1点(銭・10)はST01(堀立柱建物址)内の土間状土坑から出土した。中世土坑出土12点のうち、銭・75と78は土壙墓と想定されるSK1030、1138から出土した。その他の土坑出土銭40・71(SK1051)、50・51・58・70・74・76(SK1130)、52(SK1136)、41(SK1193)の性格は不明だが、SK1130では6枚出土しており埋納銭の可能性もある。SX1245出土の8枚(銭2・14・16・23・24・53・72・108)は一括出土したが遺構の性格がつかめていない。近世遺構出土6点は整地土より2点(銭87・88)、竪穴状遺構より2点(銭83・84)、池状遺構より2点(銭・86)出土した。なお、鑄造期別にみると皇朝十二銭1枚、唐銭8枚、北宋銭101枚、南宋銭1枚、金銭1枚、明銭5枚、不明8枚となっている。

(16) 銅・鉛製品(巻頭図版4)

銅製品は銭貨を除くと総計37点である。その内訳は、古代遺構より8点(佐波理鏡3、筭1、鈴1、刀装具1、不明品1)、中世土坑より佐波理鏡1点、近世整地土より21点(取手1、煙管17、不明品3)、II層より7点(佐波理鏡2、鉸具1、鉈尾1、不明品3)である。佐波理鏡6点はいずれも細片で形状、法量とも不明な点が多いが、体部はいずれも1mm以下に薄くロクロ挽きされ、口縁部を肥厚させている。形状、法量から、①口径が18cmと大きい浅いタイプ(SB71・11、II・88) ②口径が13~14cmでやや深めのタイプ(SK1203・1、II・89)、③口径が9cm余りで小さい深いタイプ(SB125・12)に分類される。また、①では口縁端部より3~4mm内側に比較的明瞭な沈線が、②では9mm内側に浅い形式的な沈線がそれぞれ1条ずつ入るが③はない。なお、SB32・394は紙のように薄い体部細片で、両面にロクロ挽き痕が明瞭に見られる。これらの鏡を伴う遺構はSB32を除いて特記されるものはなく、このことは漆塗りの筭(SB199・21)、鍍金製鈴(SB191・23)、鑄造製刀装具(SB4・29)を出土した遺構についても同様である。II層からは鉸具と鉈尾の帯金具が出土しているが、出土地点も大きく離れ同一帯のものではない。鉸具は黒漆が残存しており、いわゆる烏油腰帯の可能性もあるが、II層出土のため時期が特定できず性格も不明である。

鉛製品は8点出土しているが、うち5点は溝及びI、II層出土の弾丸、1点は近世遺構出土の沈子である。古代遺構からの2点(SB32・393、SB178・10)はいずれも棒状部からなる不明品であるが、裏面は平らで

周縁部や中心部にバリ(?)を残し、表面棒状部はカマボコ状をなしている。両者とも同じ機能をもっていたものと思われる。

(17) 中・近世遺構出土の金属器

中世遺構から出土した金属器は銭貨を除くと、佐波理鏡(SK1023・1)、鐸(SK1226・1)、楔状不明品(ST03・1)及び、いずれも土坑から出土した釘の破片2点等で、合せても数点である。他に16世紀代の屋敷地を囲む溝より、鋤、鍬先、(SD02・4)と刀子(SD02・3)が出土している。

近世では銭貨も含め総数で126点出土したが、そのうち118点は屋敷跡である整地土及びそれに付属する堅穴(SX2020・2021・2023)及び池状遺構からで、他は土坑より2点、火葬関係遺構より3点、溝より1点である。その主なものは鉄製品では刀子(6点)、燧鉄(5点)、釘(81点)、環(3点)、鎌(2点)等で、銅製品では銭貨の外は煙管(17点)が目立っている。そのうち刀子類(21~25)はいずれも欠損品で形状は明確でないが、バラエティーに富みそうである。25は目釘孔をもつ。燧鉄は16の1点を除くと近世ではもっとも一般的なタイプ。釘はIV類(30~32)は3点のみで、ほとんどはVI類(33~57)であるが、大釘(58~63)の形状はバラエティーに富む、なお、13~15は折れ釘と推定されるものだが、打込み断面はいずれも長方形で、屈曲した頭部は方形(14)と円形(13)がある。環(5・6・26)の用途は不明。鎌のうち4は近世鎌であるが、近世土坑出土の3は折り返し部をもつ平安期のものが混入したものであろう。その他の製品に錠前(12)、鑄造鉄皿(2)、工具?(11)と不明品がある。そのうち鉄皿は形状は灯明皿を推測させるが、外面に熱を受けたと思われる剝離がみられ、1の棒状製品を一括出土しておりセットになっていた可能性もある。工具と推定される11はI・25の小型品である。

図示した煙管(68~81)では、雁首について見れば、①、火皿下の脂返しが直角近く湾曲し、ラオにとりつく部分に肩をもち、火皿と首部の接合に補強帯をもつタイプ(68)、②、肩付け、補強帯をもつが、脂返しやや緩やかになるタイプ(69)、③補強帯をもつが肩付けが消失し、脂返しの湾曲が緩やかなタイプ(71)、④補強帯も消失し、脂返しさらに緩やかになるタイプ(72)、⑤脂返しの湾曲がほとんどないタイプがあり、吸口部でも、①ラオ折入部より段差をもつ細くなるタイプ(74)、②ラオ挿入部より急激に細くなって端部に続くタイプ(75・76)③端部に向け直線的に細くなるタイプ(77・78)などがあり、時期差がみられそうである。煙管以外の銅製品に戸の引手と思われるもの(65)があるが、64・67は用途不明である。

(18) 砥石

合計22点出土した。そのうち平安時代は11遺構から13点、近世遺構及びSD17から各1点、その他の7点はI層出土である。これらは形状、石質、使用痕等から以下のように分類される。

I類：自然面をそのまま利用するか、簡単な加工がみられる程度の手近な自然石を利用した置き砥石。いずれも硬砂岩か硬質な砂岩で、均一性に欠けるものが多い。使用面には線条痕(SB4・30、SD17・74、I・118)や帯状擦痕(SB31・35、SB63・52)をもち、錐状の尖ったもの、あるいはそれに近い幅の狭い工具等の匡正や研ぎ出しに使用されたものだろう。

II類：各面が丁寧に面取りされた、幅広(47mm~70mm)の非常に薄い(現長12mm~8mm)直方体の置き砥石。使用面は全面が平滑で、刀子や包丁などに使用されたものだろう。石質は砂岩(SB117・4)、凝灰岩(SB191・24)、緑色片岩(SB135・9)があり荒砥ぎ用と中仕上砥ぎ用がある。

III類：形状は直方体であるが、II類より断面が正方形に近い手持ちの砥石。4面とも使用されることが多いが、小口は自然面をそのまま残す。使用ベリ状況から次の2種類に分けられる。

a：中央部付近が内湾するもので、鎌用砥石に多くみられる。細粒砂岩(SB27・8、SB111・100)と凝灰岩

(SB70・6、SB86・33、SB172・13、近世・30)がある。

b：aと逆で中央部が膨らみ両端部が使用ベリして刃状に尖ったもの。長さは短い。使用範囲は狭く大きく巡回したり押し引きは不可。いずれも凝灰岩（I・113、I・114、I・115）。

IV類：小型のものを一括した。すべて手持ち用。これにはIII類と同様二種類ある。

a：中央部付近が内湾するもの。砂岩（I・112）と凝灰岩（SB86・34・35、I116）がある。

b：端部が使用ベリして刃状に尖ったもの。凝灰岩（I・117）

これらの小型品は、形状に大きな乱れのないことから本来小型品であったものと、使用ベリで小型化したものと双方考えられるが、少なくとも廃棄直前まで小物品の研磨に使用されたものであろう。近世遺構出土の砥石には、制作技法を反映して縦線の成形痕が残る。なおSB86は3個（33、34、35）の凝灰岩の砥石を出土しているが、いずれも小型品の砥ぎ出しに使用された痕跡をもつ。SB86は焼土や炭化物とともに工作台らしい石、鉄滓の投棄があり鍛冶との関係を示唆する。

(19) 鍛冶関係遺物（第353図）

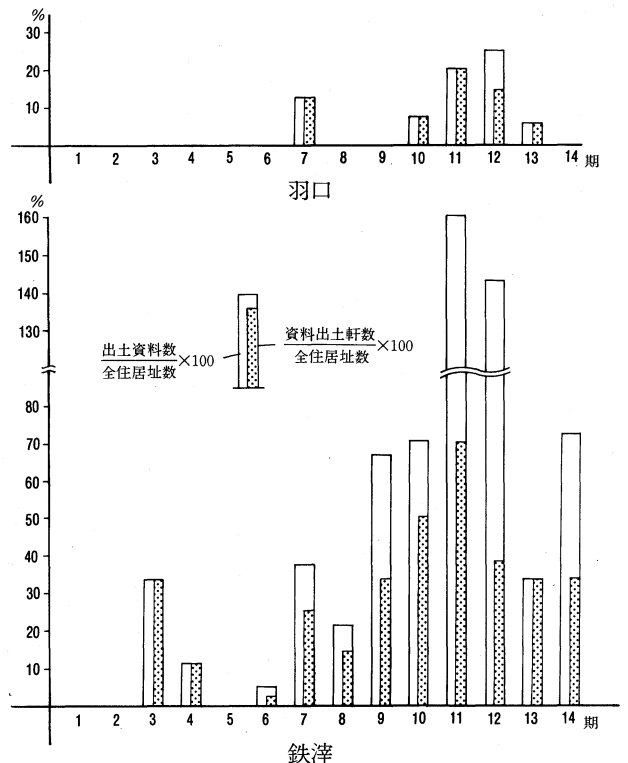
鍛冶関係遺物については、羽口、鉄滓がある。

① 羽口

羽口は14遺構から25点出土した。内訳は住居址10軒から15点、土坑4基から7点、溝2条から2点である。炉側先端部の残存が多く、そのほとんどが熔融し、ガラス質の付着がある。胎土は10～20mmほどのスサを混入させる場合が多い。通風孔の擦痕から髓抜が認められるが、SB47の場合は髓抜棒に板状に延ばした粘土を二重に巻き込んで成形していることがわかる。形状は鞆側より炉側がやや細くなるタイプ(SB129、SK73)が多いが、較差の認められないもの(SK158)もある。通風孔は炉側も鞆側も差はないが、個体により大きさにばらつきがある。測定がほぼ可能な16点のうち径19mmは1点、20mmが6点、22mmが4点、23mmが1点、24mmが4点となっている。ところで炉側先端部付近の外径は細いものは60mm、太いものは100mmと較差が大きい、通風孔径が19、20mmと細いもの及び、24mmの太いものはいずれも外側径が60～80mmと比較的細く、通風孔径が22、23mmの中間的なものは80～100mmと太くなっている。しかし、もともと個体数が少なく、単なる偶然の所産である可能性も強い。これら通風孔径に比して外径の大きい個体があることが特色であるが、これが金属学的調査で指摘されている(本節2)「鋼精練」の存在と係わりをもつものであるかは不明である。また出土状況は、鉄滓、焼土、灰、半端(?)鉄製品等を共伴することが多く、あきらかに鍛冶との関係を示しているが、明確な鍛冶施設を伴うものがなく、破壊され投棄された状況を示しているため、これらの使用状況に立ち入ることが出来なかった。

② 鉄滓

古代遺構出土の鉄滓は70遺構から216点出土したが、その内訳は、住居址57軒から143点、土坑9基から66点、溝4条から7点である。形状は多出した特



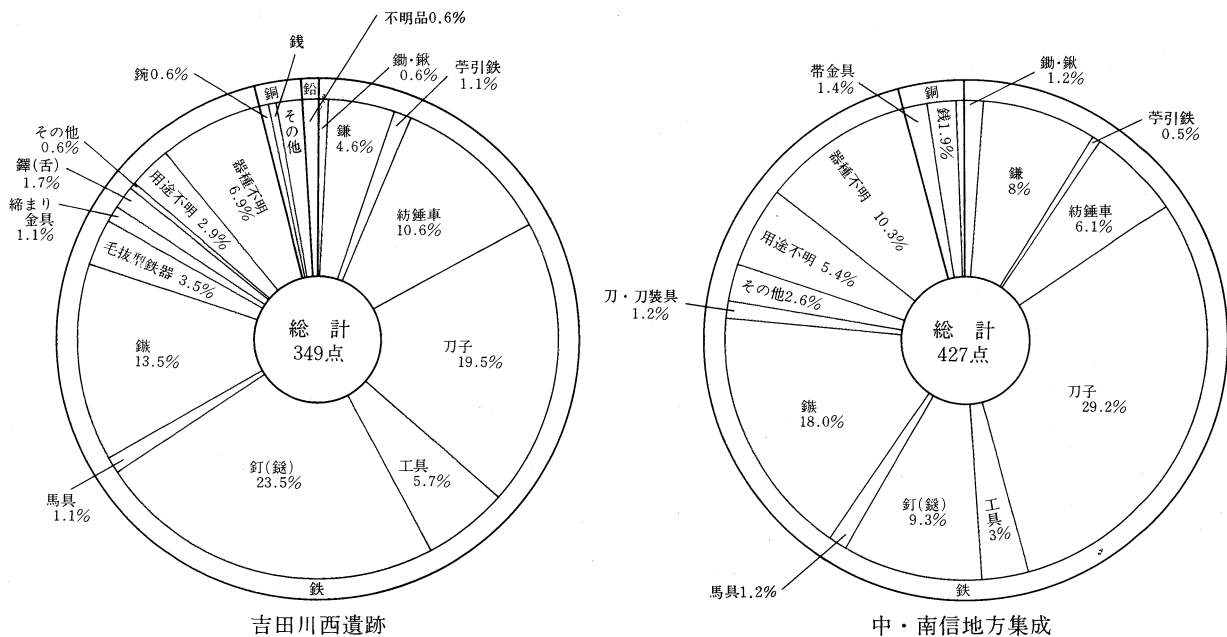
第353図 鍛冶関係資料出土状況

殊な遺構を除外すると、不定形ながら塊状を呈するものが5割強を占め、残りは不定形で扁平なものと椀形滓が2分する。大きさは塊状では親指頭大からゴルフボール大が7割強を占め、卵大からテニスボール大が3割弱となるが、扁平なものではほぼ等分される。椀形滓の多くは楕円形を呈し、多くは半割されているが、それでも長径7~10mm、短径6~8cmほど測り大型なものが多い。塊状鉄滓の中には気泡が多く、比重の比較的軽いものの外に、鉄錆による亀裂が進み、緻密で比重の高いもの、磁性を帯びたもの等が混入しており、これらは鉄塊としてとらえるべきものかもしれない。また前者でも中近世土坑から出土した鉄滓に比しては、一般に比重が高い。出土状況は32点を出土したSB32、12点のSB31、7点のSB124、54点(ほとんど指頭大の小さなもの)のSK73などを除くと、その多くが1点(36遺構)か2点(16遺構)で、両者のみで8割を占める。これらのほとんどは埋土中に浮いて出土したもので、投棄されたものと考えたい。比較的多出する遺構においては、SB32が羽口と半端製品(?)を含む多様、多量な鉄器を、SB31が半端製品(?)を含む多様な鉄器を、SB124とSK73が羽口を伴出し、鍛冶との関係を示唆している。しかし、これらの出土状況からはやはり投棄が規定され、また火床等の鍛冶施設や打鍛滓等が認められず、鍛冶遺構と確定できるものはなかった。時期的にみると9期以降多出し、11期ではその峰をつくる(第353図)。この11期は逆に鉄器の出土量が激しく落ち込んでいるが、その原因については想像の域を出ない。なお、9期以前は扁平な鉄滓が、13期以降は扁平及び椀形滓がほとんど認められていないが、それが何んらかの意味をもつものなのかも不明である。

(20) まとめ(第354~356図)

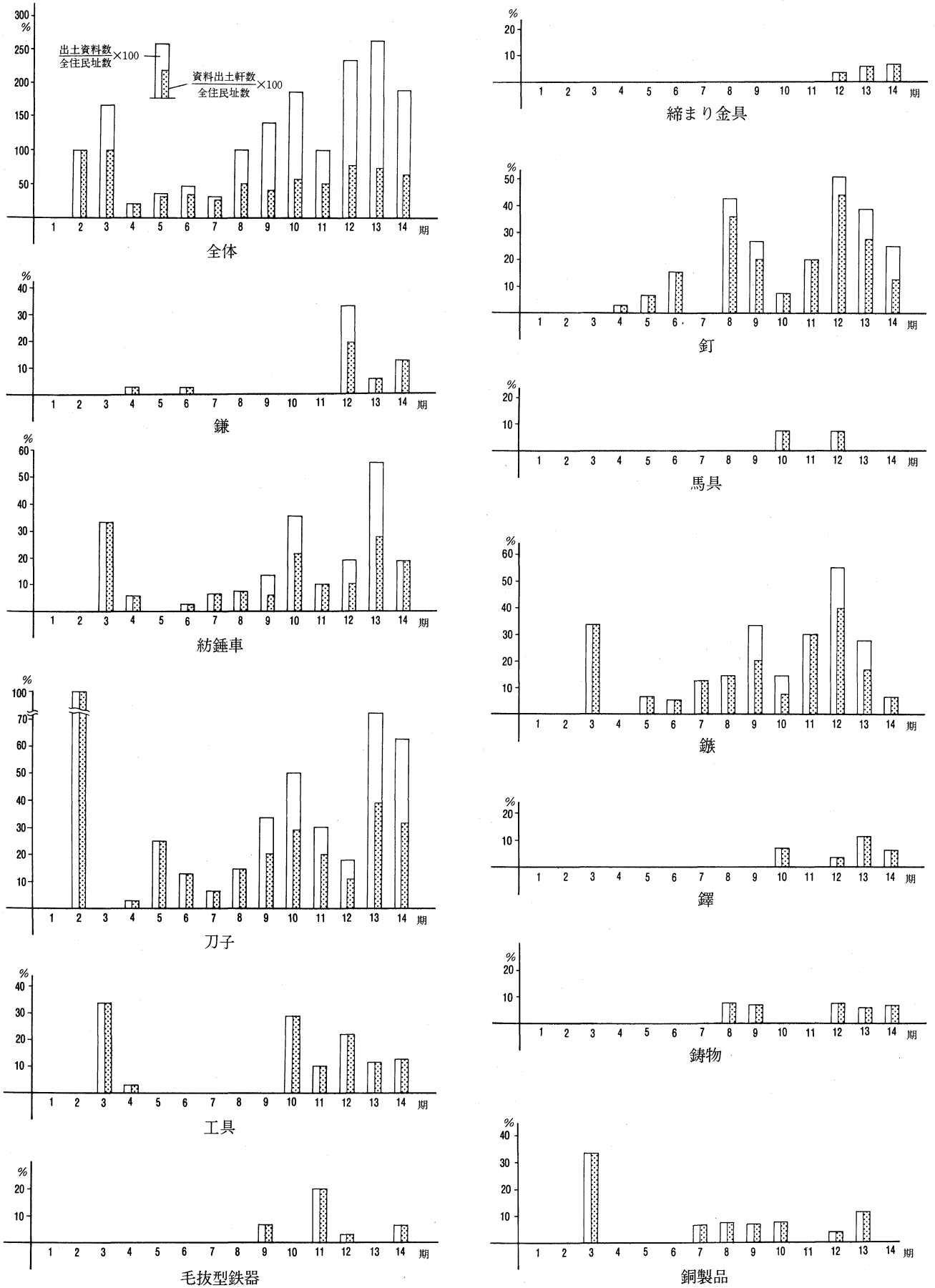
最後に古代の金属器その生産についてとりあげ、その特色をまとめておきたい。

古代遺構出土の金属器はその絶対量の多さ、出土率の高さ、出土器種の豊富さにおいて著しい特色を示している。出土点数349点(住居址309、土坑19、溝18)は1遺跡出土としては県内最大で、主な出土品である刀子(68点)、鎌(16点)、紡錘車(37点)、工具(20点)、毛抜型鉄器(11点)、鍬(47点)、釘・鏝(82点)、苧引鉄(4点)等も他遺跡では例をみない数である。また1住居址当りの出土率(出土金属製品総数/住居址総数)1.12は群を抜いており、出土住居址率(金属器出土住居址数/住居址総数)0.39も高い(第354図)。さらに数は少ないが馬具、鐙、締まり金具、佐波理鉢、渡金鈴、銅製竿、鋳物製煮炊具、鉛製品等、一般集落で出土の稀な製品もあり、

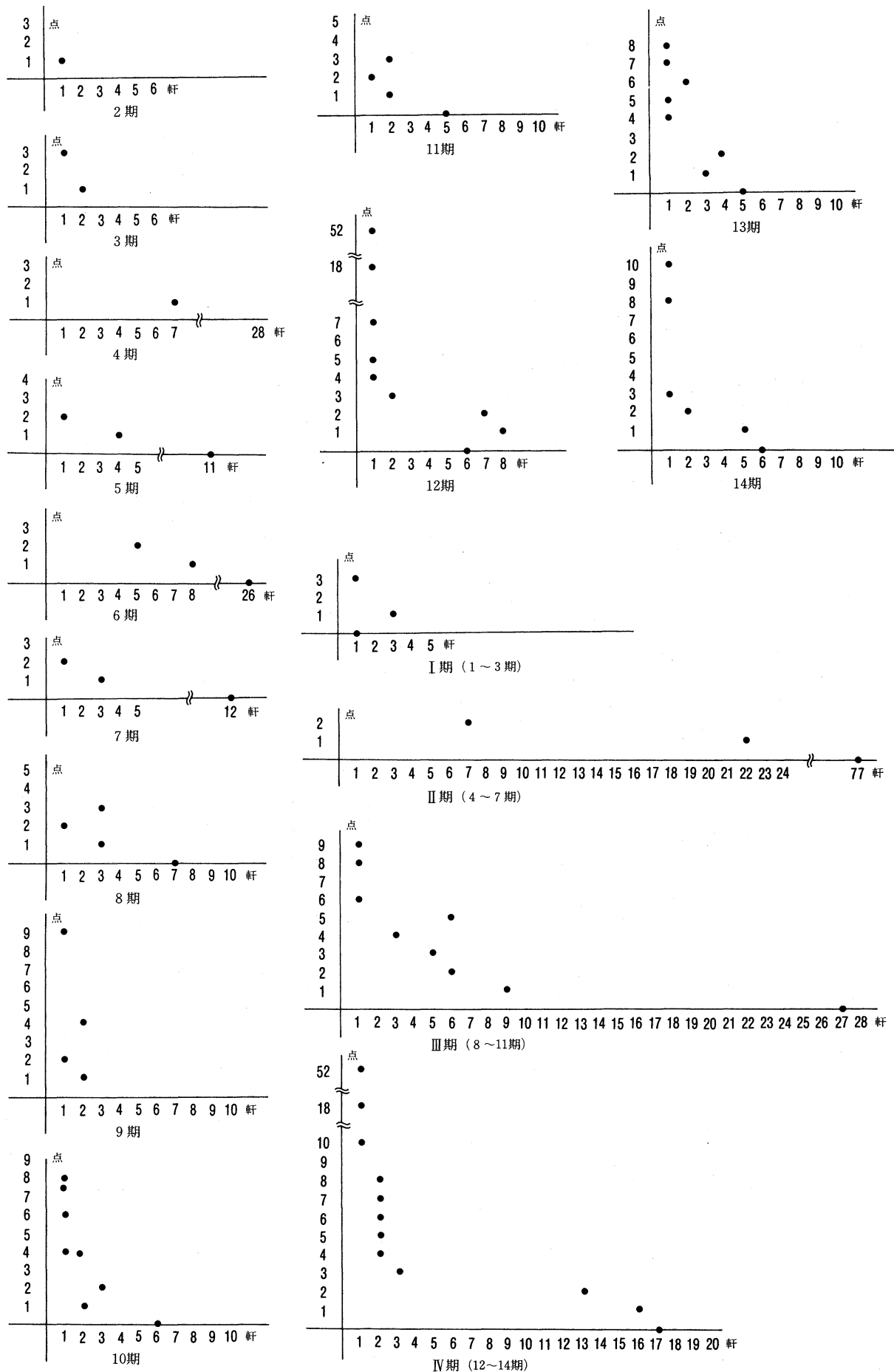


第354図 金属製品の出土比率

第7章 成果と課題



第355図 金属器の器種別・時期別出土状況



第356図 時期別金属製品出土軒数

当遺跡の特異性を示している。

次に各器種の占有率からみた特色を先の中南信のそれと比較してみると(第354図)、全体的な傾向では大差はみられないが、鋤・鍬、鎌の農具の比重が低いのに比べて、苧引鉄や紡錘車は高い。苧引鉄、紡錘車については、隣接した吉田向井遺跡や近隣の内田原遺跡にも複数出土し、特に後者は青麻と推定される糸も伴出して注目されたが、この近隣一帯の麻生産の一端を示すものだろう。さらに釘の占有率の高さが目を引くが、刀子の出土率と大差がなく、一般の補強材として多用されたとは考えにくい。なお工具の占有率の高さは、工具状を呈するものも一括「工具」として分類し扱ったので、数字に表われたほどの格差はない。

次に各器種の消長を時期別にみると、ほぼ全期を通じて出土しているものは刀子、紡錘車、鍬、釘がある。刀子が比較的安定した出土率を示すのに対し、紡錘車は10期と13期に、鍬は12期に突出する。釘は平安期に入って増加を始め、8期と12、13期を中心に2つの山をつくっている(第355図)。これに対し工具や鎌は出土時期に片寄りがみられ、工具は10期以降に、鎌は12期以降に集中する傾向が認められる。さらに、後半になって初めて出土する毛抜き型鉄器(9期以降)、馬具(10期以降)、鐸(10期以降)、締めり金具(12期以降)、鋳物(8期以降)などもあり、器種によって異った様相をみせている。しかし総体的には、わずかではあるが金属器が認められる3期までの後、一旦は4～7期に出土率が最も落ち込むが、8期より急増を始め、12期以降にピークを迎え、その後13、14期とやや落ちつく。この傾向は金属器出土数と住居址数の相関図(第356図)にも明瞭に認められ、奈良時代(1～3期)には平均1点ほどの出土がみられるのに対し、4～7期は皆無の住居址がほとんどで、出土しても1、2点である。ところが8期にはやや異った様相をみせ始め、9期以降は全体的には出土量の増加をみながらも、ほとんど出土しない住居址と数点以上出土する住居址の2群が認められ、12期には1住居址18点あるいは52点という集中度の高い住居址も出現している。以上の1～3期、4～7期、8～14期はそれぞれ、律令制下の奈良時代、律令制崩壊による律令古代村落崩壊期、較差拡大による富豪層の出現と中世的村落への再編成期にも推定され、金属器の出土状況は以上の社会状況を反映しているのだろうか。ただ、貴重品である金属品は、持ち去る可能性が強いうえに破損品も鍛直しによる再利用が多いこと、埋土中に浮いている出土することが多く出土遺構が本来の所属遺構であるとわかに認めがたいこと、住居址の重複による破壊が激しく、各遺構を同一レベルで比較検討しにくいなどの制約があり、金属器の出土状況のみから所有形態まで立ち入って言及することは危険である。しかし、既に検討してきたように、鍬や鎌等に認められる形態、土器の変遷も、これらの社会様相の展開とほぼ期を一つにしており、前述の金属器出土状況からの社会動向の推測もあるいは当を得ているかもしれない。

一方鍛冶関係からみた場合、鉾石を原料とし、脱炭材として砂鉄を使った鋼精練が行われていたことが解析によって明らかになった。また、これらの精練された鋼によっての一般消費材の鍛造ということは、解析によって確認されていないが、その可能性の大きいことも指摘されている。発掘によっては明らかに鍛造が存在した状況を示しながら、確かな遺構をとらえることができず、前述の解析を解認するに至っていない。しかし、鉄塊や大きな椀形滓の存在は一つの裏付けとなろう。さらに鍛練鍛冶についても、半端あるいは未製品と思われる不明品が、その存在を示唆している。ところでこれらの事実は何を意味するだろうか。

金属解析が指摘しているように、鉾石を原料としているということは、鉄原材や鉄器のあるものは当遺跡の精練過程を経ないで製造されていたことになる。即ち遠隔地との流通や存在しなければならない。一方、当遺跡の鋼精練の存在は、当遺跡のみならず、他地域の鍛造鍛冶への鋼材の供給も安定しきれない。さらに、鋼製鍛冶をも兼ね、時には木炭供給者まで系列下において、一定のスケールを誇る職能集団の

可能性もある。これら広域流通と鋼製錬及び鍛造鍛冶集団の存在は、それを司さどるに相当な有力者の存在が想定される。その有力者は、緑釉陶器を伴出したSK128の被葬者であり、SB32に係わる領主層であろう。特に後者は、溝に囲まれた屋敷内に鍛冶場をもち、大量の鉄器を支配した可能性が強い。吉田川西遺跡の有力者の進展は、鍛冶及び鉄器の支配とも深く関わっていたであろう。

- (註1) 県内では未報告ながら茅野市棚畑遺跡で、V字型鋤・鍬が出土している。(昭和61年調査)
- (註2) 鋤と鍬の区別については、山口直樹がその形状から主として論及した都出比呂志や土井義夫を批判し、その機能を決定する条件は大きさであるとしている。そしてその境界を横幅10~11cmとして、それより小型品を鍬、大型品を鋤とした(山口直樹1978)。これに対し、松井和幸は形状、大きさともに区別の条件にならないとしながらも、刃幅10cm以下の狭いものに対してのみ鍬先の可能性があることは否定していない(松井和幸1987)。
- (註3) この中で集成された117点の紡錘車の輪部径は2.1cmから7.2cmまでバラエティーに富むが、本遺跡で中型とした範囲にその多くが入り、5.5cmを超えるものはわずかで大型に中心をもつ本遺跡と異なる。(滝沢 亮 1985)
- (註4) 延喜7年、信濃鹿糸が他10国とともに調進されている(「延喜式二十四司計上」)、また、長徳4年信濃守は藤原實資に桑糸20足を送っている(「小右記」)。いずれも「信濃史料」(第二巻)。
- (註5) 1号址は紡錘車のほかに苧引鉄、手織の布も出土している。なお紡錘車5体中4体や苧引鉄は発掘時に出土したものでなく、偶然に見えられたものであるが、発見場所は1号住と同所で同址の所属と考えられている。
- (註6) 「本朝世紀十四」(長徳元年)、「権記」(長徳四年、長保三年、同四年)、「御堂関白記」(寛弘4年)の頃に、信濃布が饗料や諷誦料として多量に扱われている。
- (註7) 後藤守一の分類による。(後藤 1939)
- (註8) 平城京東堀河左京九条三坊、平安京跡(右京一条三坊九十町)、長岡京跡(左京南一条三坊三町)で出土している。
- (註9) 大谷猛の集成による(大谷 1984)。
- (註10) 鈴木恵治は内耳鉄鍋の出土例及び伝世品を全国で44点(うち長野県4点)をとりあげ、その使用された時代に言及し、「明確でない」としたうえで、その上限については「室町時代と考えられる」としている(鈴木 1981)。その後鎌倉市千葉地東遺跡で多数の鉄鍋が報告されており、時期については鎌倉時代まで上ると思われるが、古代での出土例はない。

引用文献

- 大谷 猛 1984 「住居址出土の馬具」『学術研究紀要』第1集 東京都教委
- 木下 忠 1966 「III弥生時代の生活と社会 1 労働用具—農具」『日本の考古学III』河出書房新社
- 後藤守一 1939 「上古時代鉄鍬の年代研究」『人類学雑誌』第54巻 第4号
- 篠田 統 1977 『増訂米の文化史』
- 鈴木恵治 1981 「内耳鉄鍋」『釜ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書I』(鈿岩手県埋蔵文化財センター)
- 滝沢 亮 1985 「古代東国における鉄製紡錘車の研究」『物質文化』第40号
- 立平 進 1986 「五島の穂摘具」『日本民俗文化大系14 技術と民俗(下)』小学館
- 松井和幸 1987 「日本古代の鉄製鍬先、鋤先について」『考古学雑誌』第72巻3号
- 山口直樹 1978 「関東地方出土 土師時代後・晩I・晩II期における農具について」『駿台史学』第45号

出土資料の引用文献(県内)

- 堂地(大原)遺跡 箕輪町 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡箕輪町—』
- 中道遺跡 // 同上
- 十二ノ后遺跡 諏訪市 長野県教委 1975 『昭和49年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その3—』
- 船霊社遺跡 岡谷市 長野県教委 1980 『昭和52・53年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市その4—』
- 南栗・北栗遺跡 松本市 松本市教委 1985 『松本市島立南栗・北栗遺跡 高綱中学校遺跡・条里的遺構』
- 足場遺跡 富士見町 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—富士見町内その1—』
- 田川端遺跡 塩尻市 塩尻市教委 1987 『田川端・宗張』
- 菖蒲沢遺跡 伊那市 長野県教委 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市西春近—』
- お玉の森遺跡 日義村 日義村教委 1977 『長野県木曾郡お玉の森遺跡』
- 伊那福島遺跡 伊那市 伊那市教委 1968 『伊那・福島遺跡』
- 沢入口遺跡 辰野町 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—辰野町その2—』
- 南高根遺跡 南箕輪村 長野県教委 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—南箕輪村その1、その2—』
- 花上寺遺跡 岡谷市 岡谷市教委 1987 『花上寺遺跡』
- 大芝東遺跡 南箕輪村 長野県教委 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—南箕輪村その1、その2—』
- 判ノ木山西遺跡 原村 長野県教委 1981 『昭和51・52年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その3—』
- 前田遺跡 大町市 大町市教委 1981 『借馬遺跡III 追分遺跡 前田遺跡 南原遺跡』

第7章 成果と課題

- 平出遺跡 塩尻市 平出遺跡調査会 1955 『平出』
高部遺跡 茅野市 茅野市教委 1983 『高部遺跡』
山本田代遺跡 伊那市 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—伊那市その2—』
本城遺跡 諏訪市 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市内その1、その2—』
内田原遺跡 塩尻市 原嘉藤・山田瑞穂 1969 「長野県塩尻市内田原遺跡調査概報」『信濃』21—6
北原遺跡 飯山市 飯山市教委 1985 『北原遺跡IV』
田中沖遺跡 長野市 長野市教委 1980 『田中沖遺跡』
天伯B遺跡 飯田市 長野県教委 1975 『昭和49年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡鼎町その2—』
居沢尾根遺跡 原村 長野県教委 1981 『昭和51・52年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その4—』
北土井遺跡 豊科町 豊野町教委 1984 『北土井』
荒神山遺跡 諏訪市 長野県教委 1985 『昭和49年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その3—』
御頭屋敷遺跡 岡谷市 長野県教委 1975 『昭和49年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市その1・その2—』
堂ヶ入遺跡 辰野町 長野県教委 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—辰野町その2—』
御狩野遺跡 茅野市 長野県教委 1976 『昭和50年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その1、富士見町その2』
くまのかわ遺跡 松本市 松本市教委 1982 『松本市笹賀くまのかわ遺跡』
馬口遺跡 更埴市 岡田正彦 1971 「更埴市屋代馬口遺跡と鉄製釜」『長野県考古学会誌』第10号
吉田向井遺跡 塩尻市 長野県埋文センター 1988 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1—』

出土資料の引用文献（県外）

- 法住寺殿跡 京都市 勸古代学協会 1984 『法住寺殿跡』
平城京東堀河（左京九条三坊） 奈良市 奈良国立文化財研究所 1983 『平城京東堀河』
平安京跡（右京一条三坊九・十町） 京都市 京都府教委 1981 『埋蔵文化財発掘調査概報 1981 第1分冊』
長岡京跡（左京南一条三坊三町） 京都府向日市 向日市教委 1984 『向日市埋蔵文化財調査報告書 第13集』
谷津遺跡 千葉市教委 『谷津遺跡』
真土六の城遺跡 神奈川県平塚市 平塚市教委 『真土六の城遺跡II』

2 鉄滓と鉄器の金属学的解析

伊藤 薫

(新日本製鐵株式会社 中央研究本部)
第一技術研究所素材第一研究センター研究員

(1) いきさつ

長野県塩尻市の「吉田川西遺跡」は、古代・中世・近代と断続的に続いた集落で、この遺跡の中心は古代平安時代で同時代の住居跡から鉄滓・鉄器が多数発掘された。この集落は、緑釉陶器等の特殊遺物が多いこと、金属製品が多いことなどで注目されている遺跡である。そこで、今回発掘した鉄滓と鉄器のなかから代表的なものを選び、化学組成とマイクロ組織の調査を行なった。

(2) 調査試料および方法

第119表に、調査試料の明細を示す。

通常、発掘試料は土砂の固着などにより、異物混入の恐れがあり化学組成だけでは、発掘試料が何であるか判断することがむずかしく、マクロ及びマイクロ組織の調査を併用する必要がある。こうした理由から、発掘された試料は異物の付着、混入の恐れが無いような箇所を選んで切断し、化学分析用と組織観察用に分け以後の調査試料に供した。

種類	発掘場所	年代
鉄素材(鑄鉄) ③ ⑥	S B 32	11 C 前
	S K 42	11 C 前
鉄器(釘)⑩ (刀子)② (刀子)⑬	S B 32	11 C 中
	S B 87	9 C 中
	S B 31	
鉄滓 ① ④ ⑤	S B 32	11 C 中
	S B 31	12 C 前
	S K 73	

第119表 調査試料の概要

(3) 調査結果並びに考察

ア 鉄素材および鉄器の化学組成とマイクロ組織(第120表)

③試料の組織をPL130・1に示す。鑄化がかなり進んでいるが、一部に金属鉄が残存し、鑄鉄の組織の特徴をよく残している。すなわち、いろいろな方向に走っているひも状の暗灰色物質がみられるが、これは、鑄鉄に特有な黒鉛(結晶質炭素)である。このものは、炭素量(2.6%)から考えて精錬に使用される原料(銑:ずく)の可能性が高い。

⑥(試料)のマイクロ組織をPL130・2に示す。試料の中心部には金属鉄が存在し、その周囲が鑄化の進んだ鑄層となっている。さらに、この鑄層に残存するセメントタイト(Fe₃C)の網目組織から炭素含有率は約0.7~0.8%と推定される。一方、この試料中に存在するスラグ部分をX線マイクロアナライザーで同定した結果をPL130・3に示す。CaO-SiO₂-Al₂O₃系の介在物で、チタンを含む化合物は見当たらない。明らかに、鉍石を使用したものと考えられる。この試料は、外観上鉄滓と判別されたが、上述の理由から鉄塊(鋼素材)と判定される。

試料番号	C	P	S	Cu	Mn	Si	Ti
③ 鑄鉄	2.57	0.278	0.061	0.006	<0.01	0.23	0.006
⑥ 鋼素材	—	0.201	0.052	0.012	<0.01	0.01	0.005
② 刀子	0.95	0.078	0.072	0.019	<0.01	0.27	0.017
⑩ 釘	0.50	0.288	0.044	0.006	<0.01	0.60	0.036
⑬ 刀子	1.34	0.246	0.088	0.58	<0.01	0.32	0.018

第120表 鉄素材および鉄器の化学組成(%)

PL131・1に、②試料(刀子)の断面組織を示した。金属鉄はほとんどみられないが、わずかに試料中心部に網目状にセメントイトが残存している。第120表の炭素量(0.95%)さらみると高炭素量の鋼素材が使われていることがわかる。

また、PL131・2は、黒錆層にある介在物をX線マイクロアナライザーで分析した結果である。介在物は、CaO-SiO₂-Al₂O₃系スラグでチタン分はごくわずかである。このことから、②試料は鉍石を原料として製造されたものと考えられる。

⑩試料(釘)の炭素量は0.5%程度と比較的軟らかい鋼が使われている。この試料の断面組織をPL131・3に示す。金属鉄はほとんど残っていないが、黒錆層に存在する介在物は非常に小さく量もわずかで、比較的清浄な地金が使用されたと思われる。PL132・1は、同試料中に存在する介在物をX線マイクロアナライザーで分析した結果である。CaO-SiO₂-Al₂O₃系スラグであり、チタン分はほとんどない。②試料と同様なものと思われる。

⑬試料(刀子)のマイクロ組織をPL132・2に示す。中心部には、金属鉄が残っており介在物が細長く伸びている。この介在物の元素分布をPL133・1に示す。CaO-SiO₂-Al₂O₃系でチタン化合物は無い。この試料の特徴は、銅の含有量が高いことである。原料として、含銅磁鉄鉍を使用した可能性が高い。おそらく、当遺跡活動からみて異質なものと考えられる。鍛造鉄器(製品)として、この地に運ばれて来たものと思われる。

イ 鉄滓の化学組成とマイクロ組織

第121表は、鉄滓3試料の化学分析結果を示した。

⑤試料のTiO₂は、3.71%と高い値を示している。一方、PL133・2に同試料の断面組織を示した。未反応の砂鉄粒子の存在が確認できる(a)。また、マイクロ組織(b)をみると、角状灰色の結晶はウルボスピネル(理論組成: 2FeO・TiO₂)で、もとの砂鉄粒子中にあったチタン分を固溶した酸化鉄が鉄浴中の炭素で環元され生成したものである。さらに、やや灰色の結晶はファヤライト(2FeO・SiO₂)でFeO(酸化鉄)と造滓材(ならびに炉壁材)中のSiO₂分が反応して生成したものと考えられる。

PL134・1は、X線マイクロアナライザーによる元素分布を示したものである。Ti分とFe分が同一組織内で一致し、ウルボスピネルの存在が明らかである。したがって、⑤鉄滓は砂鉄粒子を脱炭材として使用した精錬滓と判定することができる。

①鉄滓のTiO₂は、⑤鉄滓の3.71%に対し、0.16%と少ない。このマイクロ組織をPL134・2に示す。

暗灰色の結晶は、ファヤライトで明灰色の球状結晶のウスタイトおよびガラス質珪酸塩から成る。しか

	T・Fe	Fe ₂ O ₃	FeO	CaO	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	TiO ₂
①	58.17	28.86	48.20	1.63	0.63	2.56	12.61	0.16
④	52.88	22.40	47.60	0.55	0.44	4.21	19.96	0.24
⑤	54.75	10.01	61.08	1.21	1.32	3.97	15.96	3.71
	MnO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	C/S	C/A	分類	
①	0.04	0.22	0.59	0.238	0.13	0.64	精錬滓(再酸化物)	
④	0.02	0.20	0.66	0.385	0.03	0.13	精錬滓(未反応物)	
⑤	0.18	0.14	0.36	0.780	0.08	0.30	精 錬 滓	

*C/S: CaO/SiO₂ C/A: CaO/Al₂O₃

第121表 鉄滓の化学組成(%)と分類

も、鉄滓の全体にわたって密にウスタイトが存在する。したがって、鉄滓の大きさ・形状等も合わせ考えると、精錬途中において鉄浴表面層の再酸化物と炉壁との反応生成物とみるのが妥当であろう。

一方、④鉄滓は①鉄滓に比べ T・Fe は若干低く、C/S と C/A が炉壁材組成に近い。④鉄滓のマクロ組織は、PL134・3 に示した。a は、鉄滓に鉄錆が付着している様子を示したものである。さらに、B は未反応の砂鉄粒子および炉壁材の存在が確認出来る。したがって、この組織は、鉄浴表面に存在した熔融酸化鉄層に精錬滓および炉壁材が入り込み、急速に冷却されたものと考えられる。

古代の鋼精錬における精錬滓の生成過程について佐々木氏は、銑(ずく)または鈿(けら)のような炭素含有量の高い製錬産物(製鉄炉で砂鉄なり鉄鉱石を還元して得られるもの)を再溶解して炭素を低減し、鋼とするのに固体の脱炭材として、砂鉄もしくは鉄鉱石粉を使用、その固体の脱炭材は、精錬操作のある段階では石灰質の、また、別の段階では非石灰質の造滓材と混合して鉄浴に添加され排出した精錬滓には、石灰分の多いものと少ないものが見出されると述べている。

また、精錬した鋼の鍛造工程(小鍛冶)では、鍛打と加熱をくり返して鉄製品が造られるので、鍛打のときは酸化した鉄が剥離し、そして加熱時には、酸化を防ぐと同時に、保温のため塗布される粘土や炉壁材と、酸化した鉄が反応して、鉄分に富む熔融滓(鍛錬滓)が生成する。さらに、精錬時の鉄浴表面に生成する再酸化物は、生成した酸化鉄と粘土質の炉壁と反応したり脱炭材(砂鉄なり鉄鉱石)と反応したりする。

この様な観点から、上記3種の鉄滓を調べてみると、脱炭材として砂鉄を使った鋼精錬が、この地域で行なわれていたことが確実にいえる。

(4) まとめ

以上、鉄器・鉄滓の金属学的調査から、砂鉄を脱炭材として鋼精錬が行なわれていたことが明らかとなった。しかし、調査した鉄器および鉄素材からは砂鉄精錬の証拠となるべきチタン化合物が発見できず、いずれも鉱石を原料として製造されていることが確認された。このことは、調査した鉄器・鉄素材は当遺跡の精錬過程を経ないで製造されたと考えざるをえない。

それでは、当遺跡で精錬された鋼を使って製作された鉄製品はあるのだろうか。おそらく、今回調査対象から除いた鎌・鉄鏃・紡錘車等、一般消費材は当遺跡で製作された可能性が非常に高いと思われる。製品により、造り分け(使い分け)が行なわれていた可能性があると考えられる。

すなわち、鉄の半製品(鉄素材)や製品を運び、かつ鋼製錬と鍛造の技術を持った集団の活動がうかがえる。また、物的証拠が十分と言えず、今後は、鉄の流通を含めた、鉄滓・鉄器(一般消耗品として考えられるものを中心として)の調査を積み重ねることが当遺跡の性格を解明するうえで必要かと考える。

第4節 墨書土器

1 吉田川西遺跡の墨書土器の検討

(1) はじめに

第5章第2節に示したように、吉田川西遺跡では合計253点の墨書土器が出土している。その内訳は、竪穴住居址（SB）73軒内189点、土坑（SK）9基内17点、溝（SD）5本12点、遺構外35点である。竪穴住居址から出土したものは全墨書土器中74.7%に達し、圧倒的な数を占める。また、全竪穴住居址中墨書土器を出土したものの割合は25.2%である。

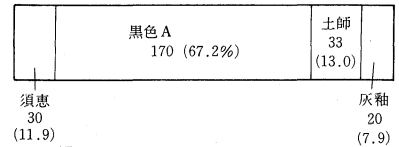
本遺跡の墨書土器全体を、土器の種類別、器形別、墨書される部位と文字の向き別にまとめたものが第357～360図である。土器の種類では黒色土器Aが7割近くを占め、墨書土器が盛行した時期を示唆している。器形では杯A II、碗A、皿Bでそのほとんどを占め、中でも杯A IIの占める割合が大きい。部位では体部外面に記されるのが一般的であるが、文字の向きまでみると体部外面に正位で記されるもの(A)、逆位で記されるもの(B)、底部外面に記されるもの(E)がほぼ三分し、横位のもの(C、D)や内面に記されるものはわずかである(註1)。これらは、かつて岡田正彦が指摘した県内墨書土器の一般的傾向(岡田正彦1978)と同様の傾向を示している。しかし、これは時間的推移を捨象した統計であり、大きな傾向は窺えるものの、時間的に幅がある中で必ずしも墨書土器のあり方の実態を示すものではない。墨書土器の歴史的性格に迫るためには、その出現から消滅に至る過程を段階を追って検討することが必要であろう。本遺跡ではそれを概観できる資料に恵まれており、墨書土器の時期的な変遷を追う事が可能である。第7章第2節の土器の年代観に基づいて、各時期の様相を検討してみたい。

(2) 量的な推移

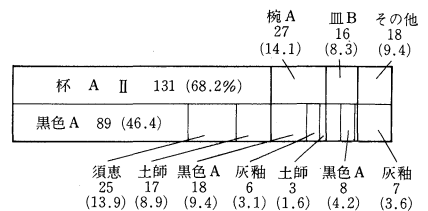
第361図に墨書土器の時期別分布を、第362図に墨書土器を出土した遺構の時期別分布を示した。また、第122表には検出された住居址の内、墨書土器を出土した住居址の割合(出土率)と、各時期の全住居址数に対する墨書土器の数を示した。後者の数値は計算上の1軒当たりの出土数であるが、各時期における使用量を比較するには最も有効な資料である。仮にこれを墨書土器の「保有指数」と呼んでおきたい。これらにより、まず量的な面から検討してみたい。

吉田川西遺跡における墨書土器の初現は3期であり、5期までがその普及する時期とすることができる。1軒1～2点の出土であり、出土率は20～30%台、保有指数は1未満である。この時期に墨書土器を保有したのは、限られた少数の住居であったと思われるが、5期にはかなり普及が進んでいる様子が窺える。

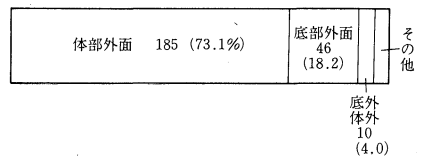
6・7期には個体数、出土遺構数ともに飛躍的に増加し、出土率も70%前後に達する。また、複数の墨書土器を出土する住居址が増加し、SB144(6期)の10点、SB102(7期)の9点、SB111(7期)の35点など、



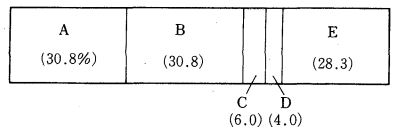
第357図 墨書が施される焼物の種類



第358図 墨書が施される器種



第359図 墨書が施される部位



第360図 墨書の向き

時期	住居数	墨書出土住	出土率	保有指数 ※1
3	3	1	33.3%	0.33
4	35	8	22.9	0.31
5	16	6	37.5	0.94
6	39	28	71.8	2.10
7	16	11	68.8	6.63
8	14	4	28.6	1.43
9	15	3	20.0	0.33
10	13	1	7.7	0.08
11	10	0	0	0.00
12	28	3	10.7	0.25
13	18	2	11.1	0.11
14	16	0	0	0.00

※1 $\frac{\text{墨書土器数}}{\text{住居址数}}$

第122表 墨書土器の出土数・保有指数

多くの墨書土器を出土する住居址が出現する。いずれも規模の大きな住居址であり、該期にムラの指導的立場にあったものと推定される(註2)。しかし、出土率や保有指数からみると、ほとんどの住居が墨書土器を保有した可能性もある。特に、7期は個体数が最も多く、保有指数も6.63と他の時期と比較してずば抜けた数値を示しており、墨書土器が最も盛行した時期といえよう。また、土坑や溝からの出土も多いが、これは6・7期にのみ見られる現象である。

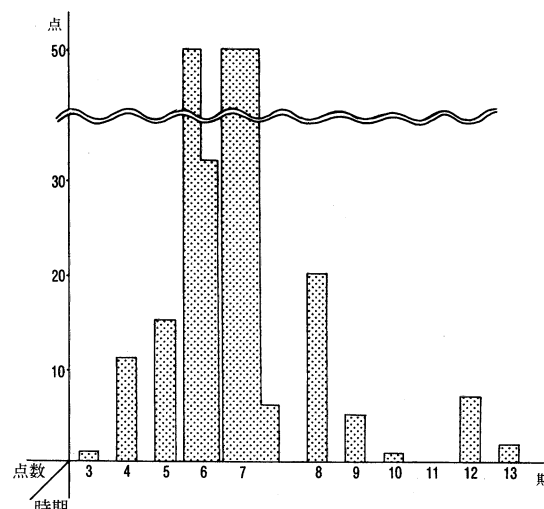
8・9期には個体数、出土遺構数ともに激減し、出土率、保有指数も大きく減少する。土器に墨書を施す風習が急速に廃れていくことが窺える。さらに、10期の1点は筆先を整えた際の墨痕と思われるので、10・11期には意識的に文字を記した墨書土器は見られなくなってしまう。これを一定の役割を担った墨書土器の消滅と考えてよいかどうか即断はできないが、いずれにせよ、この時期がひとつの画期にはなりそうである。

一旦姿を消した墨書土器は、12・13期に再び見られるようになり、出土率も10%程度を示す。これが先行の墨書土器の継続であるのか、別の性格のものであるのかについては、検討を必要としよう。いずれにしても、これ以後は完全に姿を消し、この時期が吉田川西遺跡における墨書土器の終末期である。

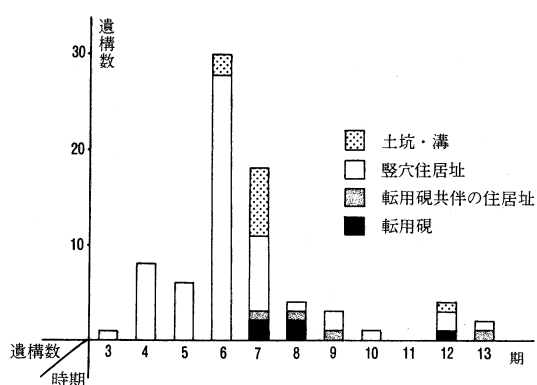
以上のように、吉田川西遺跡の墨書土器は、8世紀末に出現し、9世紀後半に盛行した後、10世紀以降急速に廃れていくことをみることができた。これは、県内はもとより、東日本の集落遺跡に一般的にみられる傾向であって、本遺跡の場合もそれを追認することとなった。

(3) 墨書される土器類について

墨書はどのような土器に施されているのだろうか。時期別に土器の種類と器形の比率を示したのが第363図である。時期により土器類の比率に変化がみられるが、これを食膳具における土器類の比率と比較してみると、3期から9期に関しては両者はほぼ完全に一致する。また、器形の面で見ると、墨書土器の主体を占める杯A IIはもっとも一般的な食膳具であり、椀A、皿Bについても同様のことがいえる。即ち、墨



第361図 墨書土器の時期別出土数の変化



第362図 墨書土器転用硯出土遺構数

書はそれぞれの時期にもっとも普遍的な、日常的な容器に施されたことを示しているのである。

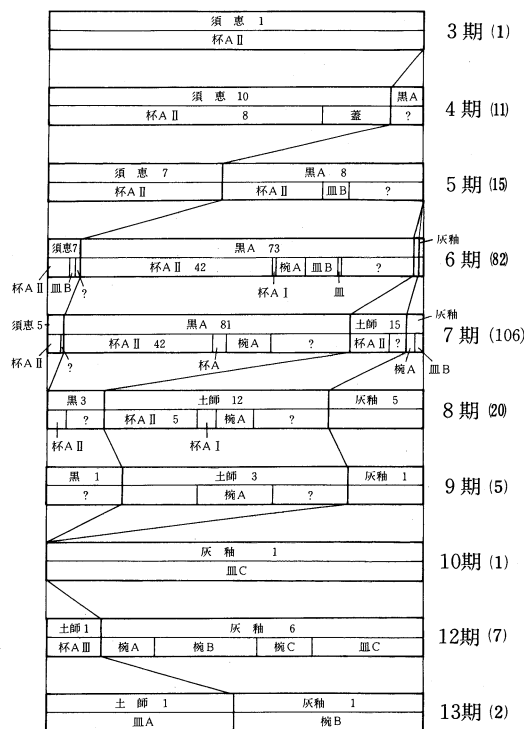
一方、10期以降は食膳具の主体が土師器であるのにも関わらず、単字句の墨書はすべて灰釉陶器に記される。この時期の灰釉陶器は、日常容器として一定程度普及していたが、土師器にとってかわることはなかった(原明芳1987)。墨書を施す土器類容器が特に選択された可能性も考えられよう。また、12・13期にみられる土師器の墨書土器は、後述するように性格の異なるものと考えられる。その意味では、この時期の墨書土器は前時期と様相を異にしている。土器類の面でも、9期以前と10期以後とは様相が異なることが確認でき、この時期にひとつの画期を認めることができるのである。

(4) 墨書土器と転用硯

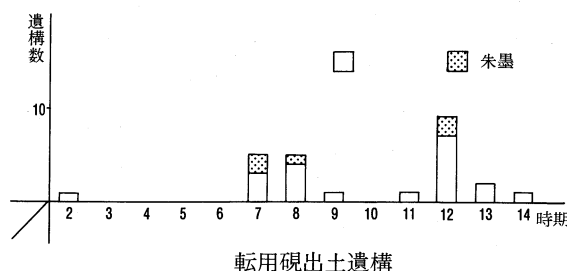
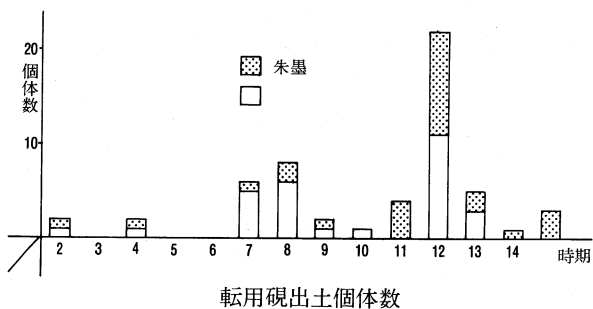
墨書が、生産・流通・消費のどの段階で為されたのかという問題を考える際、集落内の筆記用具の有無がひとつの目安とされる。前述のように、本遺跡では筆の穂先、陶硯のほか、56点にのぼる転用硯が出土しており、集落内で多くの文字が書かれていたことを物語っている。従って、墨書土器についても集落内で記されたものと考えられるが、本遺跡のように数多くの筆記用具を出土する遺跡の場合、両者の間には何らかの相関関係を見ることが可能ではないかと思われる。ここでは数多く出土した転用硯のあり方を通して、墨書土器との関係を検討してみたい。

吉田川西遺跡における転用硯の特徴は、朱墨を使用したものが多いことと、それが開発の当初から見られることである(第364図)。朱墨は、検注帳や勧農帳などの文書チェックに用いられるものであり(註3)、それを使用する階層としては官人層が想定される。このことは、本遺跡の性格を考える上で極めて示唆的であるが、その検討については別項に譲りたい(第8章)。

さて、転用硯は2期、4期にみることができ、集落の開発が始められた当初から識字層の存在が認められる。しかし、墨書土器の普及が進む5期、6期にはその出土が見られず、識字層が非常に限定された存在であったことを示している。墨書土器の盛行する7期には転用硯の出土も増加し、ほぼ3軒に1点の割合で存在している。識字層の増加もしくは文字を筆写する層の拡大、あるいは、文書作成事務に係わる階層の出現という背景が予想できよう。転用硯はむしろ墨書土器の盛行期以後に普及するものであり、これ以後、時期により多少の差はあるものの、おおよそどの時期にも見ることができる。あわせて朱墨の転用



第363図 墨書が施される焼物と器形の推移



転用硯出土個体数

転用硯出土遺構

第364図 転用硯

硯の出土も見られることから、7期以後には官人的性格をもった人物の存在を予想することができる。この点からは、7期の前後に何らかの画期を見ることができよう。

なお、12期は量的にも突出しており、それが溝で区画された大型住居(SB32)の周辺に集中するという点で特殊なあり方を示している。この時期の性格については、別途検討が必要であろう。

(5) 墨書される字句と墨書土器の分布について

本遺跡出土の墨書土器に記される字句は、読み取り可能のものだけでも54種類に達する。読み取れないものを含めるとさらに多くの種類の字句が記されており、極めて多様である。しかし、「万」のように一住居址から多量に出土するものもあり、時期により墨書内容に違いのあることが推察される。

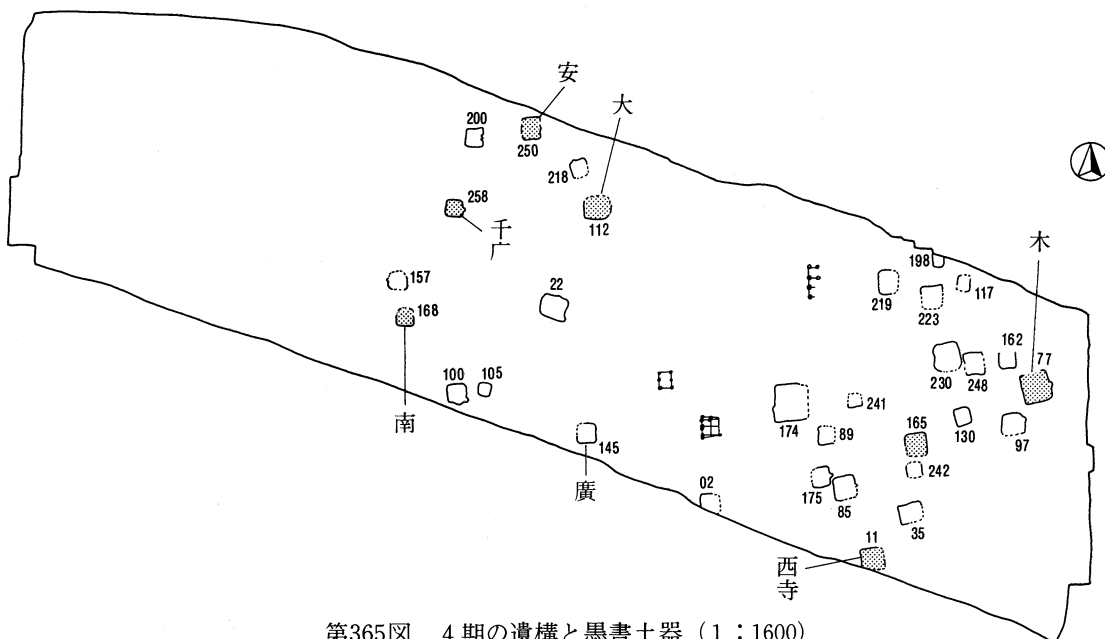
一方、墨書土器の出土状況を見ると、住居址から出土したものは、そのほとんどすべてが埋土中で、床面から浮いた状態で検出されており、それぞれの住居址の生活時に直接伴うものとはいえない。これは溝や土坑についても同様である。しかし、埋土の堆積状況や遺物の出土状況の観察から、埋土内の遺物は住居の廃絶時にごく近い時期の所産と考えられることから(註4)、墨書土器の使用とその廃棄との間に、一定の対応関係を認めることは許されるであろう。

ここでは、以上を前提として、各時期の遺構の分布と墨書土器の分布を比較しながら、あわせて、記された字句についても可能な限りの検討を加えてみたい。

3期はSB199出土の1点のみであり、「上」と判断したが欠損のため断定はできない。SB199はこの時期最大の住居址であり、「田中」と記された篋書土器を出土している。

4期には、住居址の分布が大きく東西の二群に分れる傾向を示すが、このうち東群で墨書土器を出土する住居址はすべてその東隅に集まっており、墨書土器出土住居址の分布は、より明確に二群に分けられる。従って分布の上からは、集落内に墨書土器を有する二つの集団を想定することができる。しかし、記される字句がすべて異なっているため、字句内容からそれを判別するのは困難である。出土率は新たに展開する西群が高く、ほぼ2軒に1軒の割合で出土している。また、それが環状に配置された住居群の一軒おきに見られること、その中心にあるSB22には祭祀的性格が予想されることなども興味深い(第365図)。

東群のSB11から出土した「西寺」は、それに該当する遺構は検出されていないが、集落内に「西寺」と通称された寺の存在を窺わせている。県内では類例がないが、千葉県や群馬県では仏堂建物と思われる遺

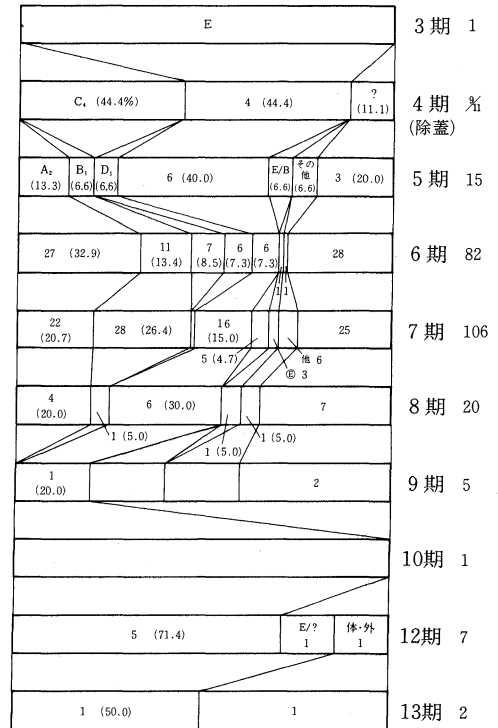


第365図 4期の遺構と墨書土器 (1:1600)

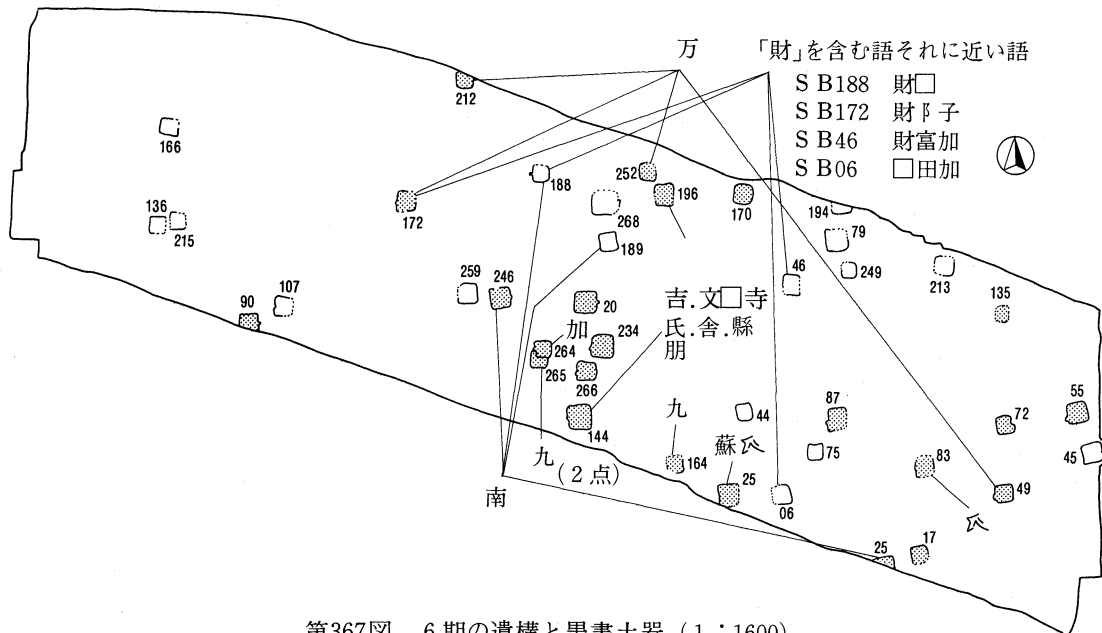
構を伴う集落遺跡から、寺や仏教信仰に係わる墨書土器が出土している例がいくつか報告されている(須田 勉1985、松田 猛1986)。これらの建物址は基壇をもったり、四面廂をもつなど、本格的な仏堂であったと思われ、須田は、それを律令国家解体過程の中で、豪族層によって営まれた村落内寺院と位置づけている。本遺跡の場合はそうした確証は認められないが、6期にも「文□寺」があり、7期には佐波理鏡の出土がみられることから、そうした寺院的施設が存在した可能性は十分に考えられる。そうした見方で見ると、西群出土の「安」、「廣」、「大」、「南」、「浄」なども仏教信仰もしくはその影響下にある呪的祭祀との関連でとらえることができよう。この時期の筆跡をみると書き慣れた感じのものが多く、少数複数の識字層によって書かれたものであることがその裏付けとなるかもしれない。

5期の分布状況も4期のそれを踏襲し、東西の二群に分ける事ができ、且つ西群が出土率、保有指数ともに高い。4・5期を通じて墨書土器は西群を中心に展開したものと見えよう。字句の上からは、「九」が5点あること、即ち、同一の文字が複数の個体に記されることが新たな特徴としてあげられる。筆跡がそれぞれ異なることから、それが複数の人物によって記され数軒の住居が分有していたと考える事が妥当である。「九」を紐帯とする何らかの結合があったのだろう。また、墨書される部位と向きをみると、Eを主体としながらも新たにA、B、Dが出現し、バリエーションが豊富になる(第366図)。しかし、同じ「九」の中にもA、B、Eがあり、字句とその向きとの間に対応関係は認められない。従って、字句の向きと墨書土器の用途とは直接には係わりのないものと考えてよさそうである。

6期には住居址がほぼ全面に展開し、東西両群の区別が不明確となる。墨書土器の分布も同様である。複数の個体にみられる字句の種類が増加し、「九」7個体、「南」、「万」がそれぞれ4個体、「厩」3個体、「休」2個体などがある。その分布を第367図に示した。必ずしもはっきりとしたまとまりを持っていると



第366図 字句の部位と向き



第367図 6期の遺構と墨書土器 (1:1600)

は言えないが、これらの字句が重複して出土している住居址がないこと、同一字句のものでもそれぞれ筆跡が異なることなどから、ある字句を墨書し、それを分有する数戸のグループがいくつか存在していたことを想定することができよう。なお、「万」については、集落の西隅にあたるSK155より人名と思われる「万子」が出土しており、この省略形である可能性も考えられる。また、「万」が集落の西側を中心に分布することは、次の7期にも続く事象として注目される。

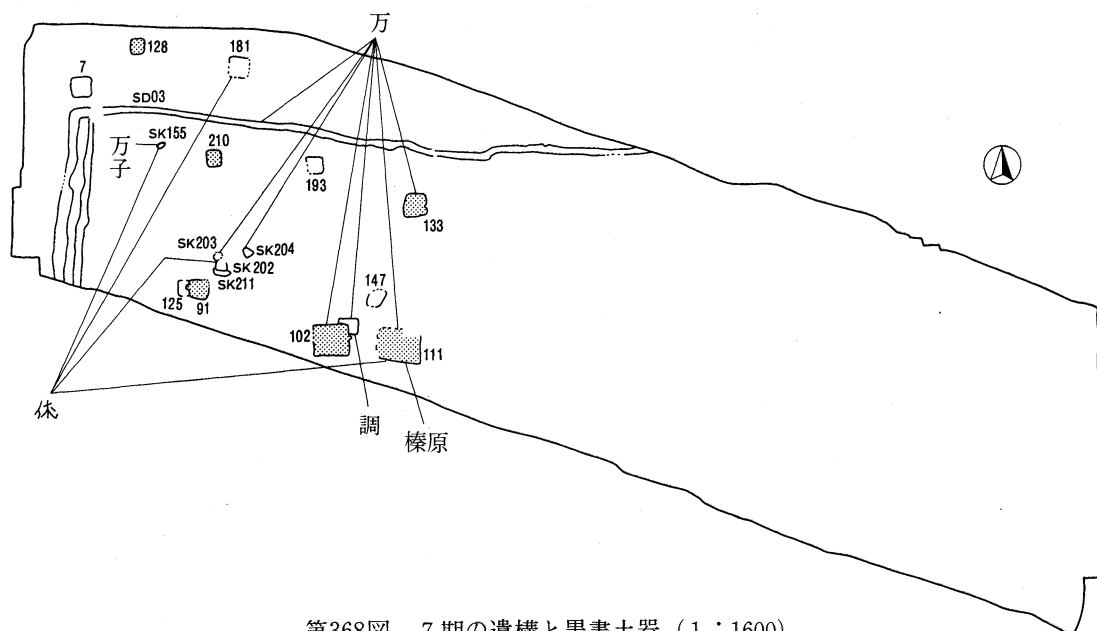
上記のように複数現れる字句があるものの、全体を見渡すと多様な字句を見ることができる。墨書の部位と向きはAの割合が増えるが、B、C、D、Eなど様々なバリエーションが見られる。また、SB06・1のように縁どりをしたものなど、文字がその本来の意味を持たず、記号化していると思われるものも出現してくる。

また、SB46・1にみられる「財富加」は、「財」と「富」とを「加える」ことを願う呪儀に係わるものと考えられる。「□田加」(SB06・7)、「財β子」(SB172・8)、「財□」(SB188・9)なども同種のものであろう。この当時、在地における仏教信仰は、『日本霊異記』の説話にも見られるように、現世利益を求める傾向が非常に強いものであり、これらの墨書にも土着した仏教信仰の一端が表れていると考えられよう。

SB144は、この時期最も多くの墨書土器を出土しているが、すべて別字句であり、その部位、向きも様々である。ここには「文□寺」があり、「吉」、「朋」なども仏教信仰に関係するものと考えられる。「舎」もこの中に含めて良いかもしれない。「□田・下之□」は地名であろうか。「縣」は、地名もしくは人名(氏の名)と考えるのが妥当であろう。この住居址はこの時期最大の規模をもち、集落の中心的位置にいたものと思われる。

この時期の墨書内容を見ると、数戸の住居で分有したと思われるものと、仏教信仰と関係があると思われる内容を含む多様な字句を記したものの、大きく二種類のものが存在しているように思える。両者の間に性格の違いがあるとすれば、5・6期はそれらが混在している時期と行うことができるだろう。住居址分布の上にも見られるように、墨書内容の上からもこの時期に、集落内に何らかの変動が起こっていたことが予想できるのである。

7期には集落が調査区の西側に移り、墨書土器もほとんどがこの地区に集中する(第368図)。複字句はSB111・98の「榛原」1点のみであり、他はすべて単字句と見做されるものである。「榛原」は「はいはら」と読むことができ(註5)、「埴原牧」との関係が考えられるが、傍証資料に乏しく、ここではその可能性を



第368図 7期の遺構と墨書土器 (1:1600)

指摘しておくにとどめたい。

この時期を特徴づけるのは「万」の隆盛である。「万」は、106点出土したこの時期の墨書土器の内49点(46.2%)を占め(註6)、しかも一個体に複数記されるものも多くみられる。その分布をみると、SB111では出土した35点中30点、SB102では9点中6点、SB133では2点中2点が「万」であり、これらを中心として集落の中央部に集中する傾向がみられる。筆跡について詳しい検討はできなかったが、先述したように様々な書き方をしており、少なくとも10名は下らない数の書き手が想定される。また、これらの中には重ね書きしたもの、縁どりをして中を塗りつぶしたようなもの、非常に稚拙な感じのものがあり、書き手のすべてが識字層ではなかったことが窺える。こうしたことから、「万」は特定の住居で特定の人物によってまとめて記されたものではなく、むしろ各住居で同一字句を墨書し、分有していたものを廃棄したと考える方が自然である。その場合、「書く」という行為そのものに意味があったと考えるべきであろう。このことは墨書される部位と字句の向きからも指摘することが可能である。字句とその向きには対応関係が認められないことはすでに述べた。単字句の場合、文字の向きはA、B、Eのものがほとんどであるが、7期には底部内面に記されるものも一定数見られるようになる。この場合内容物があれば字句は見えなくなる。また、墨痕のはっきりしているものが多く、明らかな使用痕が見られないことから、頻繁な使用は考えられない。Aの場合には器を正位に置いた時、字句も正位となることから、使用時に字句が正しく読みとれることを意識したものと解釈されることがある(註7)。しかし、容器の体部外面に書かれた字句を読む(見る)ためには、少なくともそれを目線の高さまで上げるか、さもなければ容器を傾けなければならない。通常の使用状態で目線以上の高さに食膳具を置くことがあるだろうか。B、Eの場合には言うまでもなく容器を伏せた状態でないと字句を読むことはできない。しかも同一字句にA、B、Eが混在しているのである。こうしてみると、土器への墨書は、少なくとも通常の使用状態で字句を正しく読めることを前提としてはいないと言うことができよう。換言すれば、字句内容は容器使用時に意味をもつものではなかったということになる。また、先述のようにそれらが日常的に使用されるものではなかったとすれば、集団の構成員が同一字句を筆写し、それを分有するということに一義的な意味があったと考えるべきであろう。文字の選択には、当然識字層である村の有力者の意思が働いたものと考えられる。「万」が「万子」の省略形であるとすれば、その「万子」こそムラの核的存在であったのである(註8)。

前述のように、6期には集落の中にこうした小グループがいくつか存在していたが、7期にはそれらが「万」に集約される。この間にムラの再編成が行われた可能性が考えられ、ムラの核となる家父長的権力が成立したのではないかと推定される。この頃から多量の緑釉陶器が持ちこまれるようになることも示唆的である。

すでに見たように、8期、9期には墨書土器の出土量は激減する。しかも、欠損のため判読できないものが多く、その傾向をとらえることはほとんどできない。それでも8期には一定量が残り、5～7期に見られる同一字句を分有するというあり方も、「大」にその名残りらしきものととどめているが、9期には全く認められなくなる。集落が再び東側に展開を始める10・11期には、字句を記した墨書土器そのものが姿を消すのである。これは、墨書土器の従来までの機能の消滅を意味するものと考えたい。

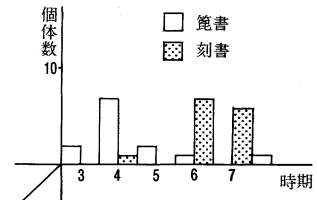
12・13期には、SB32を中心に集落が展開する。この時期に再び見られる墨書土器は、灰釉陶器の底部外面に「加」と記されたものに代表され、その半数は転用硯として利用されている。転用硯の出土状況から見て、この区域では多量の文書が作られ、そのチェックが行われていたことが予想される。また、鉄製品のあり方、土器類のあり方などから、SB32は極めて特殊な様相を示しており、この時期の墨書土器は、こうした特殊性の中でとらえられるものではないかと思われる。

土師器に記された2例については、多数ある同器形のものの中にそれぞれ1点ずつしか認められておら

ず、その性格については不明とせざるを得ない。しかし、SB98・5は明らかに傷物であり、出荷、流通段階における目印ではなかったかとも考えられる。いずれにせよ、字句を記した墨書土器とは異質のものであろう。

(6) 篋書土器・刻書土器との関係

吉田川西遺跡では、墨書土器の他に篋書土器、刻書土器についても一定量の資料を得ている(註9)。これらは記入用具や記入時期に違いがあるが、土器に文字や記号を記すという点では類似したあり方を示す。これら相互の間どのような関係があるのか検討が必要となるだろう。



第369図 篋書・刻書土器 時期別出土数

まず、第369図に篋書土器、刻書土器それぞれの時期別分布を示した。これによると、篋書土器は6期に1点残るものの基本的には3～5期にみられるものであり、刻書土器は6・7期の所産であることが知られる。即ち、前者は墨書土器の出現前後から、それが普及し始める時期にみられるものであり、後者は墨書土器の盛行期と重なるものであるとすることができる。

次に、土器類とそこに記された文字や記号の内容およびその分布について見てみたい。篋書は、基本的に須恵器の底部内外面および蓋の外面に記され、「×」と「田中」で構成される。「×」は各地の遺跡にみられ、窯印として把握されている。須恵器生産に係わる何らかの目印であると考えて大過ないものであろう。「田中」には、おそらく発注者の意図が込められているものと思われる。人名もしくは地名ではないかと考えられるが、傍証資料がなく断定できない。いずれにせよ、この容器の帰属を表現したものであろう。「田中」は6点出土し、3期ないし4期の所産と考えられる。同じ器形の須恵器に同じ筆跡で記されており、同時に作られ、同時に記されたものである。特に、4期はこの地域の本格的な開発が始められる時期にあたり、そこに何らかの関係を求めることも可能であろう。

県内他遺跡出土のものを見ると、篋書と刻書の区別がつかないものが多くははっきりしたことは言えないが、「専司」(長野市塩崎遺跡群塩崎小学校地点)、「足立女」(長野市屋地遺跡)、「松井」(長野市四ッ屋遺跡)、「大井」(松本市北方遺跡)など、官職名、人名、地名に関すると思われるものが多く、特定の個人もしくは集団への帰属を示したものと考えられる。この種の篋書は、発注者の依頼により窯元で記されるものであり、その背景には一定の財力ないし権力の存在が考えられる。その意味では極めて限定された存在とすることができよう。

一方、刻書は須恵器、黒色土器Aの底部内面への記入を原則とする。篋書と比較するとバラエティーに富んだ内容を持つが、墨書に多い「万」がやはり多くみられる。刻書の「万」は墨書の「万」を多数出土したSB111に集中し、中には同一個体に両者を合せ持つものも見られる。同一住居址から同一字句の墨書土器と刻書土器を出土する例は、諏訪郡富士見町足場遺跡8号住の「八十」、佐久市周防畑遺跡H—2号住の「中」などに見ることができる。これらの例は、墨書と同一の意識のもとに記されたものと考えて良いであろう。他の記号様のものについては、その意味を窺い知ることはできないが、意味不明の記号様のものは墨書土器にも見られるものである。

以上から、篋書土器は、ひとつには生産段階での目印であり、ひとつには限定された意味を持つ特注品であって、墨書土器との間には積極的に直接的な関係を認めることはできない。6期以降ほとんど見られなくなるのは、須恵器生産の衰退によるものであろうか。一方、刻書土器については、基本的には同時期の墨書土器と同じ性格をもつものと把握することが可能である。ただ、同一字句に墨書と刻書があること、および多くの墨書の中に少数の刻書が入ることの意味、即ち、両者が書き分けられたものなのかどうかについては問題が残るが、現段階では適当な答を見出だすことができない。今後の課題としたい。

(7) 墨書土器の性格をめぐって

これまで、吉田川西遺跡出土の文字関係資料について、墨書土器を中心にいくつかの観点から検討してきた。すでに述べた所と重複する部分もあるが、墨書土器の性格についてここで改めて整理しておきたい。

吉田川西遺跡に墨書土器の普及が見られるのは、4期(8世紀末)のことである。この時期の墨書土器は、限られた少数の識字層によって、仏教信仰との係りが推測される字句を含む多様な字句が記される。この時期の住居址の配置をみると、西群のSB22を中心にムラの祭祀が行われたと想定され(註10)、墨書土器はそれを取囲むように出土していることから、その祭祀に関係する場で使用されたものと考えられる。墨書の部位と向きがCとEに限定されているのも、単に書き易さだけのことではなく、何らかの規制が存在した可能性も考えられよう。字句そのものにも用途に応じた意味があったものと思われる。この種の墨書土器は7期まで継続してみられる。

この前段階には「田中」と記された篋書土器が入るが、それはこの地の開発の主体者による特注品と考えられる。こうした階層を通じて文字がムラの中に伝えられるのであろう。

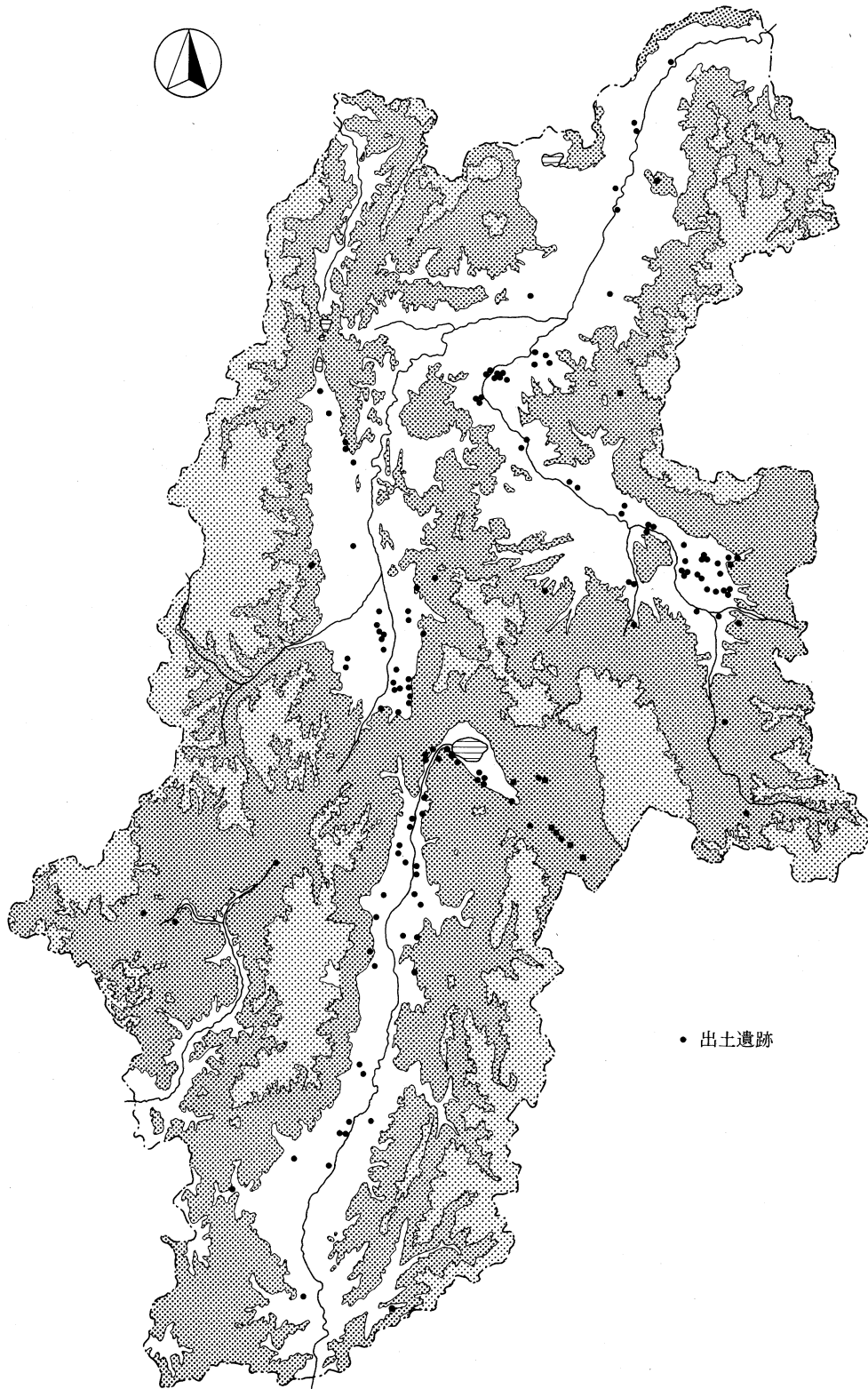
5期には「九」が数軒の住居址から出土する。これは、墨書土器の分有を通して、字句の意味よりも、同一字句を共有するという行為の表われと解釈できる。こうした行為は6期、7期に発展的に継続するが、いずれの場合も複数の筆跡が確認される。特に7期には非識字層まで墨書行為に加わっていたと思われ、字句の意味よりも同一字句を「書く」という行為自体に意味があったのではないかと考えられる。こうした行為の背景には、元来文字は一部の階層の独占物であり、また、それが集落内の祭祀に用いられるということから、文字自体に呪的効果を期待したということが考えられよう。集落内の集団ごとに特定の文字が選択され、それが集団の紐帯となったのである。これらの墨書はいずれも日常容器になされているが、それが必ずしも日常的に使用されたものではないことも前述の通りであり、こうした日常容器の非日常性といったあり方も、墨書土器の性格に由来するものと考えられる。

前述したように、6期には複数認められるこのような字句のまとまりが、7期に「万」に集約されるという現象は、この間にムラの再編成が進み、ムラの核となる家父長的権力が成立したことの表われと考えられる。それは集落を大きく囲むSD03が作られること、緑釉陶器の多量の持込みが始まること、7期の集落の展開を継承する9期のSK128、およびその前後に位置づけられるSM01のように、特別な埋葬儀礼を示す墓が現れることなどは、そうした動きの反映であろう。中でも、SK128は県内でも最高クラスの墓であり、その被葬者は相当の権力もしくは財力を持った人物であったことが想像される(第5章第3節)。

このようにみると、7期は8期以降につながる新しい秩序の形成された時期ととらえることが可能である。7期をピークとして、こうした性格をもつ墨書土器は急激に姿を消していくが、その背景には集落内の変化、とりわけ、ムラの首長の共同体からの昇華といった、社会的な動きがあったものと考えられる。

以上から、本遺跡の墨書土器については、大きく二つに性格を考えることができる。ひとつは、ムラもしくは集団の祭祀に用いられるものであり、もうひとつは、そこから派生したものではあるが、集団の結束の確認の意味で、同一字句を分有することを通じた意識の表明の具体物としての性格である。8期以降、前者の性格はおそらく緑釉陶器に受継がれたものと思われ、後者の性格は新しい秩序の形成によってその役割を終えたものと考えたい。墨書土器の盛行する9世紀は、古代村落の解体する時期である。墨書土器は、こうした社会の変動期において、新たな秩序形成の過程に現れた営みのひとつであったと考える。

吉田川西遺跡の出土資料から、墨書土器の性格について検討してきた。しかし、一遺跡のみの現象でそれを一般化することはできない。以下、長野県内の墨書土器を集成し、再度検証してみることとしたい。



第370図 長野県内墨書土器出土遺跡分布

2 長野県内出土の墨書・刻書・篋書土器集成

長野県内出土の墨書・刻書・篋書土器については、かつて岡田正彦によってその集成と分析が行われている（岡田正彦1973・1978）。その後、中央自動車道長野線や関越自動車道等の幹線交通網の整備、あるいは圃場整備事業等に伴う大規模な発掘調査によって、その資料も著しく増加している。特に今回調査した吉田

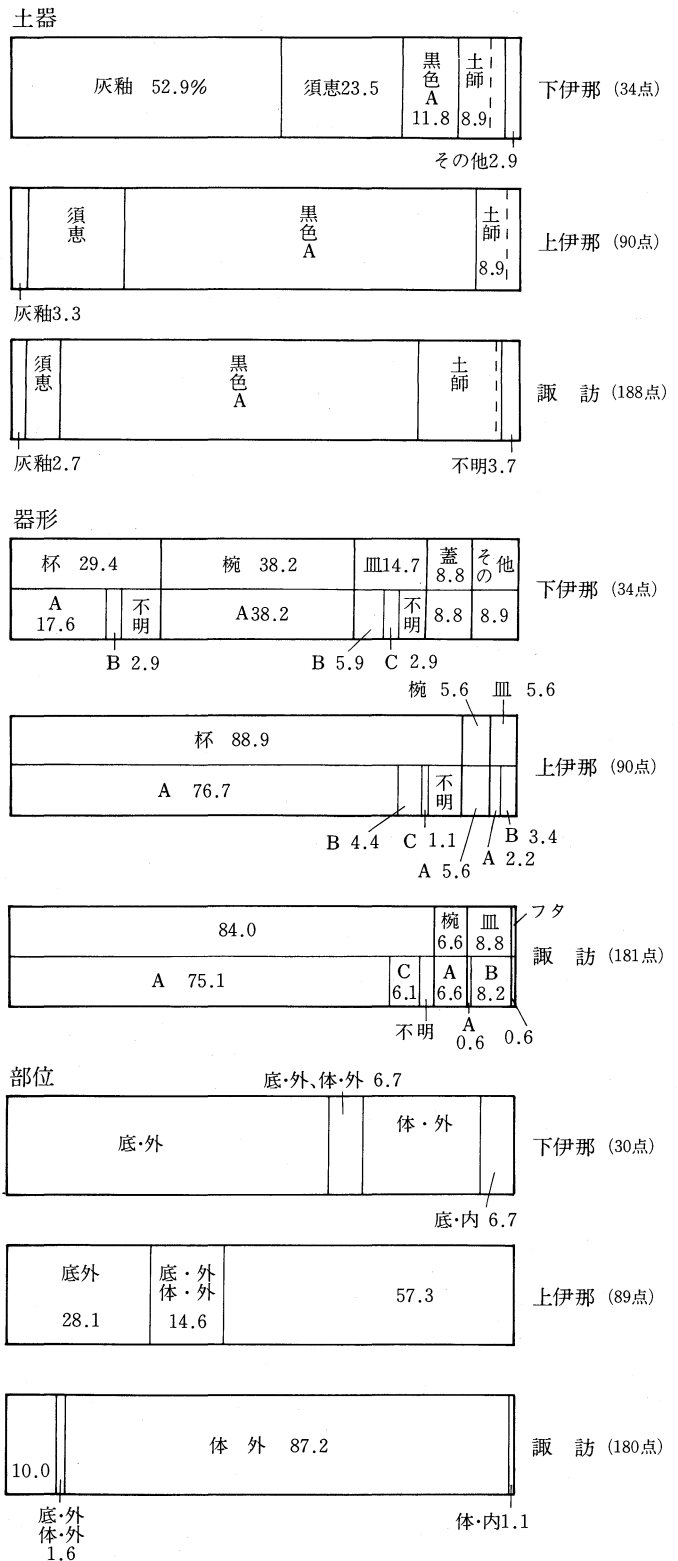
川西遺跡では、小片も含めて253点の墨書土器が出土しており、その出土量は、現在までのところ県下随一のものである。今度その分析にあたって、改めて県下の墨書・刻書・篋書土器を集成してみたのが第123表と第124表である。集成にあたっては、岡田の集成表(岡田1978)を基本とし一部修正を加え、それにその後の資料(昭和62年7月1日現在)を追加した。なお、昭和60~61年に本センターで調査した松本市域の遺跡出土のものについては、すでにその一部を『長野県埋蔵文化財センター年報』および、『長野県埋蔵文化財ニュース』等に公表してきているが、総数750個体を越すと予想されるその大部分が現在整理中であるため、今回の集成には加えていない。また、多くの遺漏や誤認のあることを恐れるが、今後補充、訂正を加えていきたい。

さて、今回集成できたのは、墨書土器987点、刻書・篋書土器が123点である。刻書土器と篋書土器については、報告書等の記述によっては区別できないものが多く、両者を一括してまとめざるを得なかった。また、土器類の器形区分及び名称については〔原1987〕に従って統一したが(註11)、杯と碗の呼称については、報告者によって必ずしも統一されていないので、一部実測図や写真等で確認できなかったものについては、両者の間に異動のある可能性のあることを付記しておきたい。

さて、刻書・篋書土器については、いまだ資料も少なく、上記のような不備があるものの、墨書土器については、各地域で検討に耐え得る一定の資料が整ったと言えよう。本稿では墨書土器を中心に現時点における県内の傾向を概観してみたい。その性格や意味についての検討は不十分であることを予めおことわりしておき、今後の課題としたい。

(1) 県内の墨書土器の分布

まず、長野県内の墨書土器出土遺跡の分布を第370図に示した。山間地が多く、平野部が非常に限られているという地形的条件を考慮すれば、ほぼ県内全域に渡って分布していると言える。かつて長谷川厚は、関東地方の墨書土器出土集落遺跡の分布について、①国府地域、国分寺を中心にして一定の集中がみられること、②古道ルートに沿っての分布がみられること、③出土集落が点在することが少なく集中を示し、



第371図 南信地方の墨書土器

その集落間で同義性を看取しうる墨書内容をもった例がしばしば見られること、の3点を特徴としてあげている(長谷川厚1981)。長野県の場合、特に②については、上記の地形的条件に規制され、集落の立地が古道ルートに沿った地域と一致することが多いため、墨書土器特有の特徴として把握することはできない。また、①との関連では、諏訪盆地、松本盆地、長野盆地南部、佐久盆地等に集中する地域が見られるが、これらの地域は古くから集落の発達した所でもあり、直ちに墨書土器の傾向として言及することはできない。むしろ、王滝村、南信濃村等の山間部にも墨書土器の波及が見られることからみれば、岡田の指摘するように、ある時期において墨書土器はかなり普遍的な存在であったことを示しているといえよう(岡田1973)。

(2) 地域別の検討

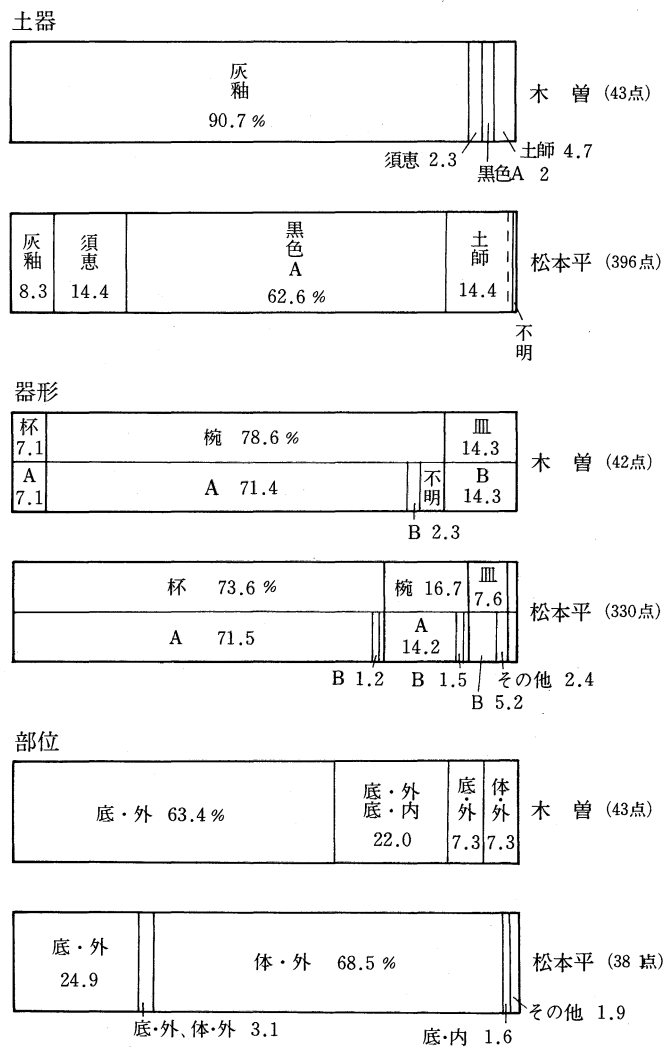
第371~374図は、長野県内各地域における墨書土器のあり方を、土器の種類別、器形別、部位別にまとめたものである。

地域別集成の結果は、それぞれの地域の発掘頻度により資料数に多少があり、また、今後の発掘調査の進展によって変動するものであって、確実なものとは言えない。しかし、各地域の大まかな傾向はとらえることができ、全県にまとめてしまってはとらえることのできない地域の特性を、多少なりともみることができると思われる。ここでは、現段階で窺うことのできる地域ごとの傾向を一応整理しておきたい。

ア 南信

南信地方は、現在の諏訪郡、上・下伊那郡に含まれる地域であり、それぞれの地域によって墨書土器の様相が異なる。土器類の面では、下伊那では、墨書土器の半数以上を灰釉陶器が占めるのに対して、上伊那、諏訪では黒色土器Aが主体を占め、灰釉陶器の占める割合は極めて少なくなる。概観すれば、北上するに従って、灰釉陶器、須恵器の割合が減少し、黒色土器A、土師器の割合が増加するのである。この傾向は、食膳具一般の構成に見られるものであって、それが墨書土器の土器構成にそのまま反映していると言えよう。土器類の違いは器形や墨書部位にも違いを生じ、灰釉陶器の多い下伊那では、碗A、皿Bの底部外面に、黒色土器A、土師器の多い上伊那、諏訪では、杯Aの体部外面に記される傾向がはっきりと現れている。

下伊那で墨書土器の出土が多いのは、阿智村杉ノ木平遺跡と飯田市小垣外遺跡、恒川遺跡である。恒川遺跡については、正式な報告がなされていないため詳細は不明であるが、伝えられる遺跡の性格からすれば、さらに資料が増加するものと思われる。前二者は灰釉陶器を多く出土しているが、杉ノ木平遺跡は神坂峠を越えた最初の集落である園原にあり、小垣外遺跡は育



第372図 中信地方の墨書土器

良駅との関連が考えられる。東山道の道筋に位置し、灰釉陶器の流通に深く係わる条件を持っていたと言うことができよう。

時期的には、箕輪町堂地遺跡、同中道遺跡、茅野市阿弥陀堂遺跡などに8世紀末に位置づけられるものがあり、この頃が初現である。その後、9世紀代には各地に広まるが、盛行するのは黒色土器Aや灰釉陶器の普及する9世紀後半である。ちなみに、「八十」を多量に出土した富士見町足場遺跡をはじめ、同一字句を複数出土している遺跡の墨書土器は、いずれも本報告書という6～7期に位置づくものである。

イ 中信

中信地方は、木曾郡、東筑摩郡、南・北安曇郡に含まれる地域である。木曾郡は一般に木曾谷と通称され、古代においては美濃国に属していたが、この地域と松本盆地に含まれる他の地域とでは大きく様相が異なる。即ち、木曾谷では墨書土器の9割を灰釉陶器が占め、松本盆地では黒色土器Aが主体となる。木曾谷は、例えば、日義村お玉の森遺跡で住居址出土の土器類のうち、70～90%が灰釉陶器であることにみられるように、食膳具の大部分が灰釉陶器で占められ、生産地である東濃地方の集落と同じようなあり方を示しており、土師器、須恵器は県内で最も少ない地域である。一方、同じ時期の松本平では黒色土器Aが食膳具の主体を占めている(原1987)。このことは、墨書土器が最も普遍的な日常容器に施されたものであることを示している。

山形村殿村古墳出土の「錦服卩」の墨書土器は、8世紀前半に位置づけられ、現在までのところ県内最古のものである。しかし、一般的には松本盆地ではほとんどが9世紀代のものであり、集落の展開が遅れる木曾谷では10世紀いっぱい盛行するようである。

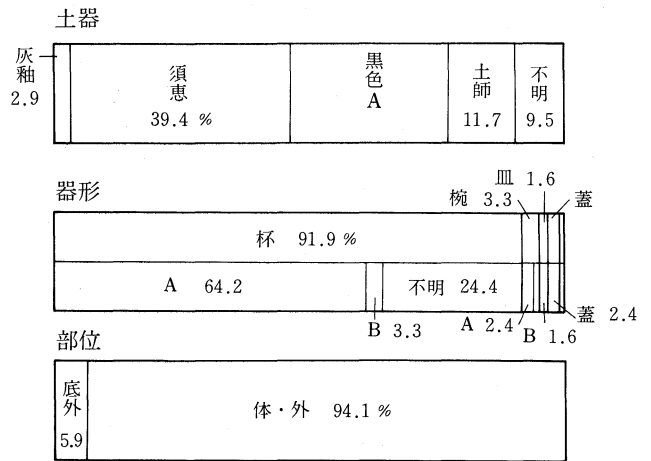
なお、先述したように、松本盆地では近年膨大な量の墨書土器が出土しており、その整理が進めば、さらに、詳細な分析が可能となるものと思われる。今後の整理の進展に期待したい。

ウ 北信

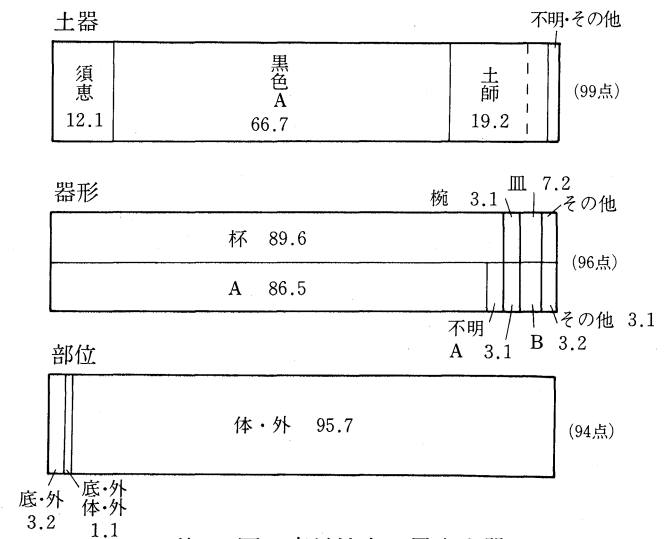
北信地方は、上・下水内郡、上・下高井郡、更級郡、埴科郡にまたがる地域である。この地域は須恵器が多く、黒色土器Aと土師器をあわせた土師器系の土器とともに、墨書土器を二分する形をとる。灰釉陶器の占める割合は極めて少ない。器形の面では杯が90%以上を占め、中でも主体は杯A IIである。

時期的には、吉田川西の編年による5～6期に位置づくものが多く、墨書土器の普及が他の地域より僅かに早い傾向を示す。

なお、更埴市五輪堂遺跡では、書体のすべて異なる「豊□□」の墨書土器が7枚重ねられた状態で一括出土している。遺構は検出されていないが、埋納されたものである可能性も考えられる。同じものは2号火



第373図 北信地方の墨書土器



第374図 東信地方の墨書土器

葬墓からも出土しており、それが葬送の際に用いられたものであることを示唆している。墨書土器の性格を考えるうえで注目すべき資料である。

エ 東信

東信地方は、小県郡、南・北佐久郡に含まれる地域である。主体を占めるのは黒色土器Aであり、灰釉陶器は全く見られず、土師器の比率が高くなる。分布を見ると特に佐久盆地に集中するが、この地域の墨書土器については、すでに小山岳夫の分析がある(小山岳夫1987)。それによると、佐久地方の墨書土器は、8世紀代に出現し、黒色土器Aの盛行する9世紀に多くみられること、9世紀代の集落址においてはごく当り前に発見されるものである可能性が高いこと、10世紀以降衰退すること等が指摘されており、吉田川西遺跡を通して検討した松本盆地のあり方と同様の傾向を示す。

(3) まとめにかえて

以上、長野県内出土の墨書土器について概観してみた。その結果、墨書土器は8世紀後半より始まり、9世紀の特に後半代に盛行し、10世紀には衰退、11世紀には消滅すること、盛行する時期には同一字句が複数出土する例が多いこと、墨書はそれぞれの地域で該期にもっとも普遍的な土器に記されることなどが確認できた。時期的な点では、東日本における墨書土器の一般的傾向を追認する形となった。以上から、特に盛行期の墨書土器について、きわめて雑駁ではあるが、改めて整理してみたい。

先述のように、現在までのところ県内で最も古い墨書土器は、山形村殿村古墳出土の「錦服卩」である。これは明らかに姓名であり、この容器を用いた人物の出自を示すものである(桐原 健1987)。県内各地の墨書土器の内、8世紀乃至9世紀前葉の墨書土器の初期の段階のものをみると、例えば、箕輪町中道遺跡の「三合」、「□半」、「□五」、堂地遺跡の「豊足」、茅野市阿弥陀堂遺跡の「小田」、松本市南栗遺跡の「井」、塩尻市吉田川西遺跡の「西寺」、「千□□」他、御代田町野火付遺跡の「大工」、更埴市社宮寺遺跡の「大」、「友主」、「□□」等、施設名、地名、人名と思われるものが多いことが注意される。「三合」などは、あるいは容量を示す実用的な意味をもっていたのかもしれない。いずれにせよ、この時期の墨書土器の字句内容は限られた識字層の中でのみ意味を持つものであったと言えよう。

一方、9世紀中葉以降多量に現れる墨書土器は、上記のものも含まれるものの、圧倒的に多いのは漢字一字のものであり、同一遺構もしくは同一遺跡で同一字句を複数持つ例も数多く見られる。この中には、いくつかの遺跡にみられる「寺」の文字や、更埴市灰塚遺跡の「卩」に代表されるように、仏教信仰に係わる字句が多く認められ、墨書土器がムラの仏教的祭祀の場で用いられたことを示唆している。特に、更埴市五輪堂遺跡の例は、火葬による葬送儀礼に係わるものであった可能性が高く、同時に個体数だけの書き手が想定できることは、墨書土器が葬送をも含む祭祀の場を通じて、集団の紐帯としての機能を持つに至ったことを示しているものと考えられる。すなわち、同一字句を墨書するという行為は、そこに一定の呪力を求めながら、同一の集団の構成員であることを確認することであったのである。同一遺跡に複数現れるものの多くが、吉祥的な意味を有するものそのためであろう。字句の選択には、当然集団の核となった有力者が主導的役割を果たしたものであると思われるが、字句内容よりもそれを共有することにより意味があったと考えられることは先述の通りである。同一字句の共有の方法には、吉田川西遺跡や五輪堂遺跡のように集団の構成員がそれぞれに書写するという場合もあり、足場遺跡のように特定の人物によってまとめて記されたものを分有する(岡田1978)という場合もあったのだろう。この他、伊那市山本田代遺跡の「兀・兀」、諏訪市本城遺跡の「高」、王滝村崩越遺跡の「一万」、長野市四ッ屋遺跡の「家□」等々にも同様の性格を与えることができる。

10世紀以降こうした墨書土器が消滅していく背景には、すでにふれたように、村落秩序の変質という状

況が考えられる。9～10世紀は古代(律令制)村落の解体期にあたり、村落の荒廃が進むとともに、新たな開発の行われる時期でもある。この頃の集落遺跡のあり方をみてもこの間に成立し、また、消えていくものが多くみられ、この時期が非常に不安定であったことを示している。また、富豪層とよばれる在地の有力農民が成長してくるのもこの時期である。墨書土器は、古代(律令制)的秩序の崩壊が進み、富豪層を中心とする新たな村落秩序の形成過程に、いわばその胎動として盛行したのであり、その成立とともに姿を消すことになるのである。

- (註1) 墨書土器の部位と向き分類については、第102表を参照されたい。
- (註2) SB111については、カマドが明確でなく、一般の住居とは異なる性格のものである可能性がある(第5章第1節)。
- (註3) 井原今朝男氏の御教示による。
- (註4) 遺構内遺物のとらえかたの詳細については、第5章第1節を参照されたい。
- (註5) 『和名抄』に遠江国葵原郡葵原郷があり、「波以八良」と読まれている。『古事記』や『日本霊異記』では「榛原」と記されている。
- (註6) 判読可能のものの中に占める割合は70%に達する。ほとんどが「万」に集約されると言って過言ではあるまい。
- (註7) このように解釈しているものは少なくない。しかし、いずれも実際の使用状態までは言及していない。(斎藤 忠1980 吉沢幹夫1984)
- (註8) この場合、必ずしも実名であるとは限らない。吉祥的な意味を人名に仮託するということも考えられよう。
- (註9) 第5章第2節参照。
- (註10) この祭祀がムラ全体に係わるものであるか、ムラ内部の集団のものであるかについては、検討の余地がある。
- (註11) 従って、報告書の記載とは異なる名称を用いたものがある。

引用・参考文献

- 大川 清 1970 「墨書土器」『新版考古学講座』有史文化(下)、雄山閣
- 岡田正彦 1973 「墨書・刻書土器小考」『信濃』25-4、信濃史学会
- 1978 「信濃の墨書・刻書土器」『中部高地の考古学』、長野県考古学会
- 鬼頭清明 1986 「東国官衙の成立と民衆」『文化財を守るために』28、文化財保存全国協議会
- 桐原 健 1979 「神饌を盛る土器・家神を祀る土器」『信濃』31-9、信濃史学会
- 桐原 健 1987 「古代松本平の東西問題」『信濃』39-8、信濃史学会
- 小島弘義 1986 「古代相模国出土の墨書土器」『國學院大学考古学資料館紀要』第2輯、國學院大学考古学資料館
- 小山岳夫 1987 「墨書土器について」『高師町・西大久保』、佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財調査センター
- 斎藤 忠 1980 「各地出土の墨書土器より見たる伊場墨書土器」『伊場遺跡遺物編』2、浜松市教育委員会
- 鈴木仲秋 1975 「房総における墨書土器の一考察」『史館』第5号
- 須田 勉 1985 「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』II、早稲田大学出版部
- 高橋 学 1986 「秋田県内出土の墨書土器集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号、秋田県埋蔵文化財センター
- 仲山英樹 1987 「栃木県出土の墨書土器と遺跡」『唐沢考古』7、唐沢考古会
- 長谷川厚 1981 「古代における文字資料研究の一試論」『史観』104
- 浜名徳永 1977 「出土墨書の集成と考察」『山田水呑遺跡』第2分冊、日本道路公団・山田水呑遺跡調査会
- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食膳具」『信濃』39-4、信濃史学会
- 松田 猛 1986 「群馬県における文字瓦と墨書土器——前橋市上西原遺跡の文字資料——」『信濃』38-11、信濃史学会
- 宮瀧交二 1985 「古代村落と墨書土器」『史苑』44-2、立教大学史学会
- 吉岡康暢 1983 「墨書土器」『東大寺横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学会
- 吉沢幹夫 1984 「宮城県出土の墨書土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第10巻、東北歴史資料館

第123表 長野県内出土の墨書土器

凡例

1. 本表は、(岡田正彦1978)所収の「信濃の墨書土器集成一覧表」及び「信濃の刻書土器集成一覧表」を元に、1987年7月1日現在で、埋文センター所蔵の報告書類で確認できたものおよび管見にふれたものをまとめたものである。
2. 文字の判読については、基本的には報告者の見解に従ったが、一部読み直したものもある。
3. 各項の記述は第102表に準じたが、土器の項は次のように明記した。「須恵」……須恵器、「黒A」……黒色土器A、「土師」……土師器、「灰釉」……灰釉陶器。なお、「土師?」は、土師器で黒色処理の有無が不明のものである。
4. 器種の項は、実測図、写真等でわかる範囲の記述とした。

北信

No.	文字	土器	器種	部位	遺跡	遺構名	所在地	No.	文字	土器	器種	部位	遺跡	遺構名	所在地
1	出	須恵	杯A II	体・外	荒井		更埴市	33	ㄅ	〃	〃	〃	〃	H-13号住	〃
2	巾	黒A	〃	〃	城ノ内		〃	34	田	〃	杯A II	〃	〃	〃	〃
3	?	〃	〃	〃	〃		〃	35	ㄅ	〃	杯	底・外	〃	〃	〃
4	五	須恵	〃	〃	〃		〃	36	ㄅ	〃	〃	体・外	〃	H-14号住	〃
5	豊□□	黒A	〃	〃	五輪堂	2号火葬墓	〃	37	ノ	須恵	杯	体・外	灰塚	H-14号住	更埴市
6	月	灰釉	碗A	底・外	〃	〃	〃	38	ㄅ	〃	〃	〃	〃	H-15号住	〃
7	玉	黒A	杯A II	体・外	馬口K	包含層	〃	39	卍	〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	?	〃	〃	〃	馬口	1号住	〃	40	ㄅ	〃	〃	〃	〃	H-16号住	〃
9	百	〃	〃	〃	池尻	製炭址2号	〃	41	卍	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	真	須恵	〃	底・外	青木	包含層	〃	42	大	〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	カ	黒A	〃	体・外	籠田		〃	43	卍	土師	杯A I	〃	〃	〃	〃
12	千	〃	鉢B	〃	〃		〃	44	十?	〃	杯A	〃	〃	〃	〃
13	通	須恵	杯A II	〃	社宮寺	1号溝	〃	45	卍	〃	〃	〃	〃	H-17号住	〃
14	□・□	〃	〃	〃	〃	〃	〃	46	卍	〃	〃	〃	〃	〃	〃
15	⊕	〃	〃	〃	〃	〃	〃	47	直?	須恵	杯A II	〃	〃	〃	〃
16	大	〃	杯蓋	外面	〃	〃	〃	48	?・?	〃	杯	〃	〃	〃	〃
17	友主	〃	〃	外面	〃	〃	〃	49	廿	黒A	杯A I	〃	〃	H-19号住	〃
18	本	黒A	杯A I	体・外	生仁	H-9号住	〃	50	?	須恵	杯	〃	〃	〃	〃
19	本	〃	杯A II	〃	〃	H-12号住	〃	51	米	〃	杯B III	〃	〃	3号土壌	〃
20	市・市	須恵	〃	〃	〃	H-15号住	〃	52	ㄅ?	〃	杯	〃	〃	4号	〃
21	大	〃	〃	〃	〃	(二次)H-4号住	〃	53	子?	〃	〃	〃	〃	包含層	〃
22	角	黒A	〃	〃	〃	H-26号住	〃	54	ㄅ	〃	杯A	〃	〃	〃	〃
23	ㄅ?	須恵	杯	〃	灰塚	H-5号住	〃	55	ㄅ	〃	杯	〃	〃	〃	〃
24	戈?	〃	杯蓋	〃	〃	H-6号住	〃	56	ㄅ	〃	杯B I	〃	〃	〃	〃
25	采?	〃	杯	体・外	〃	〃	〃	57	ㄅ?	〃	杯A II	〃	〃	〃	〃
26	卍	黒A	杯A II	〃	〃	〃	〃	58	平?	〃	杯	〃	〃	〃	〃
27	卍	〃	〃	〃	〃	H-10号住	〃	59	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
28	卍	〃	杯A	〃	〃	〃	〃	60	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
29	卍	須恵	杯A II	〃	〃	〃	〃	61	ㄅ	〃	杯B II	〃	〃	〃	〃
30	メ?	〃	杯	〃	〃	H-12号住	〃	62	ㄅ	〃	杯B	〃	〃	〃	〃
31	ㄅ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	63	丿	土師?	碗A	〃	〃	〃	〃
32	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	64	イ	〃	杯	〃	〃	〃	〃

65	フ	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	101	?	—	—	—	〃	〃
66	卍	黒A	杯A I	〃 〃	〃 〃	〃	102	十	—	—	—	〃	〃
67	卍	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃	103	上	—	—	—	〃	〃
68	?	土師?	杯	〃 〃	〃 〃	〃	104	?	—	—	—	〃	〃
69	フ	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	105	爪	黒A	杯A II	体・外	塩崎小学校地点 66号住	〃
70	?	須恵	〃	底・外	〃 〃	〃	106	?	〃	〃	〃 〃	石川条里的遺構 28号畦畔	〃
71	?	〃	〃	体・外	〃 〃	〃	107	?	須恵	〃	〃 〃	市道松節小田井 神社地点 3号住	〃
72	日?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	108	十	黒A	〃	〃 〃	〃 173号住	〃
73	百?	須恵	杯	体・外	灰塚 包含層	更埴市	109	?	土師?	杯A	—	〃 〃 〃	〃
74	?	灰釉	皿B	底・外	大室古墳群 425号墳	長野市	110	刀	須恵	杯A II	体・外	須坂園芸高校	須坂市
75	?	〃	〃	〃 〃	田中沖 28号住	〃	111	金	黒A	杯A I	〃 〃	宮反	中野市
76	?	黒A	杯A II	体・外	四ッ屋 清野小 校舎地点 7号住	〃	112	天	土師?	杯A	—	岩舟	〃
77	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃 15号住	〃	113	元・尨	〃	—	—	下高井	〃
78	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	114	七年□	土師	杯A II	体・外	川久保	下水内
79	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃 包含層	〃	115	大	黒A	〃	〃 〃	—	上水内
80	十	須恵	〃	〃 〃	〃 清野小 2号堅穴状遺構	〃	116	大	灰釉	椀	底・外	有尾	飯山市
81	家□	黒A	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	117	大田	黒A	杯A II	体・外	北原 2号井戸址	〃
82	家□	〃	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	118	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
83	家□	〃	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	119	田	〃	〃	〃 〃	〃 7号土壙	〃
84	家□	〃	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	120	大	須恵	〃	〃 〃	〃 43号土壙	〃
85	主	〃	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	121	士	黒A	〃	〃 〃	長者清水	〃
86	宮	〃	〃	〃 〃	〃 〃 土壙41	〃	122	?	〃	〃	〃 〃	島 2号住	埴科郡
87	家□	須恵	〃	〃 〃	〃 〃 D-3、4グリット	〃	123	神	〃	〃	〃 〃	屋地 2号住	長野市
88	家□	土師	〃	〃 〃	〃 〃 区域外	〃	124	宮	土師	椀A	〃 〃	〃 〃	〃
89	家□	須恵	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	125	申高	〃	杯A I	〃 〃	〃 包含層	〃
90	家□	〃	〃	〃 〃	〃 〃 〃	〃	126	内	須恵	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃
91	家□□	黒A	〃	〃 〃	〃 清野保育園 地点 溝址17	〃	127	豊□□	黒A	〃	〃 〃	五輪堂 調査2区一括	更埴市
92	家□	—	—	—	〃 清野小 プール地点	〃	128	豊□□	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
93	家□	—	—	—	〃	〃	129	豊□□	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
94	家	—	—	—	〃	〃	130	豊□□	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
95	家	—	—	—	〃	〃	131	豊□□	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
96	?	—	—	—	〃	〃	132	豊□□	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
97	家□	—	—	—	〃	〃	133	豊□□	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
98	家□	—	—	—	〃	〃	134	?	〃	〃	〃 〃	〃 包含層	〃
99	?	—	—	—	〃	〃	135	氏	〃	〃	〃 〃	馬口 2号土壙	〃
100	?	—	—	—	〃	〃	136	義	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
							137	寺	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃

東信

1	仙	黒A	杯A	体・外	堂西 1号住	上田市	40	日?	黒A	杯A	〃 〃	久保田 H-2号住	〃
2	舟	〃	〃	〃 〃	〃 5号住	〃	41	正	土師	〃	〃 〃	松井	〃
3	八千	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	42	吉	黒A	杯A II	〃 〃	上桜井北 H-1号住	佐久市
4	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	43	中?	〃	〃	〃 〃	〃 H-6号住	〃
5	寶	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃	44	月	須恵	〃	〃 〃	〃 〃	〃
6	講院	〃	杯A	〃 〃	〃 7号住	〃	45	中	黒A	杯A I	〃 〃	周防畑 H-2号住	〃
7	仲	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	46	中	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
8	人	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃	47	史	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃
9	子	〃	杯A	〃 〃	〃 〃	〃	48	長	〃	〃	〃 〃	〃 H-3号住	〃
10	子	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃	49	足	土師	〃	〃 〃	〃 〃	〃
11	子	〃	杯A	〃 〃	〃 〃	〃	50	大・大	黒A	〃	〃 〃	若宮 H-6号住	〃
12	子	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	51	長	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
13	子	〃	皿B	〃 〃	〃 〃	〃	52	久	土師	盤B	〃 〃	一本柳古墳 第一棺床	〃
14	□日	須恵	杯	〃 〃	中井 3号堅穴状遺構	〃	53	久	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃
15	工	〃	耳皿	底・外	山本畑 2号住	小県郡	54	田	黒A	〃	〃 〃	〃 〃	〃
16	土	土師	杯A II	体・外	桜井戸	〃	55	東	〃	皿B	〃 〃	上の城	〃
17	乙丸	土師?	杯A	〃 〃	中屋敷	〃	56	?	〃	杯A II	〃 〃	芝間 2号住	〃
18	長	黒A	〃	〃 〃	二子塚古墳	〃	57	七	〃	〃	〃 〃	〃 3号住	〃
19	是?	〃	杯A II	〃 〃	〃	〃	58	上品	〃	杯A I	〃 〃	〃 4号住	〃
20	之	〃	杯A I	〃 〃	陣場 3号住	〃	59	?	須恵	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃
21	寿	〃	杯A II	体~底・外	上の原 3号溝	〃	60	下	黒A	〃	〃 〃	戸坂 K-1号住	〃
22	力	土師?	杯A	底・外	余里	〃	61	下	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
23	真	〃	〃	—	平原	小諸市	62	甲	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
24	衣具	黒A	皿B	体・外	御影新田	〃	63	泓	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
25	王	〃	杯A II	〃 〃	曾根城 3号住	〃	64	卒	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
26	左	須恵	〃	〃 〃	〃 5号住	〃	65	卒	〃	碗A	〃 〃	〃 〃	〃
27	?	土師	—	—	〃 12号住	〃	66	才/才	〃	皿B	底外/体外	〃 〃	〃
28	?	黒A	杯A II	体・外	〃 13号住	〃	67	大	土師	杯A II	体・外	〃	〃
29	?	〃	〃	〃 〃	宮ノ反 1号住	〃	68	?	黒A	〃	〃 〃	蛇塚B H-4号住	〃
30	在?	土師?	—	—	唐松 包含層	〃	69	井	〃	〃	〃 〃	高師町 1号特殊遺構	〃
31	之	黒A	杯A II	体・外	関口B 6号住	〃	70	七	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
32	魚	〃	碗A	〃 〃	五ヶ城 3号住	〃	71	?	〃	碗A	〃 〃	〃 〃	〃
33	?	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃	72	?	〃	杯A II	〃 〃	〃 2号特殊遺構	〃
34	?	〃	杯A	〃 〃	〃 〃	〃	73	?	黒B	杯A II	体・外	高師町 2号特殊遺構	佐久市
35	正	〃	杯A II	〃 〃	〃 9号住	〃	74	平	須恵	〃	底・外	鑄師屋 H-1号住	〃
36	正	〃	〃	〃 〃	〃 11号住	〃	75	長・長	—	—	—	南鷲の宮	〃
37	?	土師	杯A II	体・外	五ヶ城 2号堅穴状遺構	小諸市	76	八科□	土師	杯A II	体・外	野火付 H-10号住	北佐久
38	?	黒A	杯A	〃 〃	〃 3号溝状遺構	〃	77	大工	須恵	杯蓋	外 面	〃 H-13号住	〃
39	人	須恵	杯A II	〃 〃	宮ノ北 9号住	〃	78	大田	黒A	杯A II	体・外	〃 H-14号住	〃

79	?	〃	〃	〃	〃	〃 T-1号 特殊堅穴状遺構	〃
80	上?	須恵	〃	〃	〃	前田 H-1号住	〃
81	倉	〃	〃	〃	〃	〃 H-7号住	〃
82	平	〃	〃	〃	〃	犬飼 4号住	〃
83	右	黒A	〃	〃	〃	竹之城原 4号住	〃
84	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
85	口分	〃	〃	〃	〃	岩清水 3号住	〃
86	千?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
87	?	〃	杯A	〃	〃	〃	〃
88	?	〃	杯A II	〃	〃	〃 8号住	〃
89	分	黒A	杯A II	〃	〃	岩清水 9号住	〃

90	土(王)	土師	杯	〃	〃	〃	〃
91	?	黒A	杯A II	〃	〃	〃 18号住	〃
92	又	〃	〃	〃	〃	〃 19号住	〃
93	?	〃	〃	〃	〃	七久保 表採	南佐久
94	ミミミ	須恵	〃	〃	〃	雨提・H-1号住	〃
95	庚	土師	杯?	〃	〃	〃	〃
96	雷	〃	杯A	〃	〃	〃	〃
97	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
98	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃
99	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃

中信

1	徳寺/徳寺?	灰釉	椀A	底外/底内	里宮 2号住	木曾郡
2	徳寺	〃	皿B	底・外	〃	〃
3	一万	〃	椀A	〃	崩越 9号住	〃
4	一万	〃	〃	〃	〃	〃
5	一万	〃	〃	〃	〃	〃
6	一万	〃	皿B	〃	〃	〃
7	平/平	〃	椀B	底外/底内	〃	〃
8	一万	〃	椀A	底・外	〃 10号住	〃
9	一万	〃	〃	〃	〃	〃
10	一万	〃	〃	〃	〃	〃
11	一万	〃	皿B	〃	〃	〃
12	卒	〃	椀A	〃	お玉の森 1号住	〃
13	?	〃	椀	〃	〃 2号住	〃
14	平	〃	椀A	〃	〃 3号住	〃
15	し	〃	〃	〃	〃	〃
16	?	土師	〃	底・内	〃 5号住	〃
17	土?	灰釉	椀	—	〃 8号住	〃
18	?	黒A	杯A	体・外	〃	〃
19	万	灰釉	椀A	底・外	〃 9号住	〃
20	万?	〃	〃	〃	〃	〃
21	?/?	〃	〃	底外/底内	〃	〃
22	?/?	〃	〃	底外/底内	〃	〃
23	?	〃	〃	底・外	〃	〃
24	?	〃	〃	〃	〃	〃
25	?/?	〃	〃	底外/底内	〃	〃
26	?	〃	〃	底・内	〃	〃
27	?	〃	皿B	底・外	〃	〃

28	?	〃	—	—	〃	〃
29	?/五万	〃	椀A	底外/底内	〃 10号住	〃
30	?	〃	〃	底・内	〃	〃
31	?/?	〃	皿B	底外/底内	〃	〃
32	?/?	〃	椀A	〃	〃 11号住	〃
33	之/之	〃	〃	〃	〃	〃
34	千	土師	杯A II	体・外	〃 12号住	〃
35	主/主	灰釉	椀A	底外/底内	〃 13号住	〃
36	し	〃	〃	底・外	〃 16号住	〃
37	上	土師	椀A	底・外	お玉の森 包含層	木曾郡
38	し	灰釉	〃	〃	〃	〃
39	仁	〃	〃	体・外	〃	〃
40	出	須恵	杯A II	底・外	〃 19号住	〃
41	上	灰釉	皿B	〃	〃 22号住	〃
42	明	〃	椀A	〃	〃 24号住	〃
43	明	〃	〃	〃	〃	〃
44	冬	土師	杯A II	体・外	平出 5号住	塩尻市
45	?	〃	杯A III	底・外	〃	〃
46	偈	黒A	杯A II	体・外	内田原 1号住	〃
47	七	〃	〃	〃	〃 2号住	〃
48	斉	須恵	〃	底・外	〃 3号住	〃
49	千	黒A	椀A	体・外	〃 5号住	〃
50	十・十	〃	〃	〃	丘中学校 5号住	〃
51	良	〃	杯A II	〃	〃 6号住	〃
52	月	〃	〃	〃	〃 包含層	〃
53	□□寺	〃	〃	〃	〃 3号住	〃
54	?	〃	〃	〃	〃	〃

55	□色寺	〃	〃	〃 〃	〃	4号住	〃	96	中	〃	〃	底・外	〃	〃	〃
56	五	〃	〃	底・外	〃	5号住	〃	97	工	〃	〃	体・外	〃	33号住	〃
57	生	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	98	?	〃	〃	〃 〃	〃	35号住	〃
58	?	土師?	皿	—	丘中学校南	5号住	〃	99	?	〃	皿B	〃 〃	〃	37号住	〃
59	井	黒A	杯A II	体・外	舅屋敷	10号住	〃	100	小□□寺/?	〃	杯A II	底外/体外	〃	〃	〃
60	?	〃	〃	〃 〃	君石	〃	〃	101	仁	〃	〃	体・外	〃	54号住	〃
61	目	〃	杯A I	〃 〃	俎原	4号住	〃	102	仁	〃	〃	〃 〃	〃	包含層	〃
62	木	〃	杯A	〃 〃	〃	12号住	〃	103	?	〃	杯A	〃 〃	〃	〃	〃
63	木	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	104	?	灰釉	椀A	底・外	県ヶ丘 住居址	松本市	〃
64	木	〃	〃	〃 〃	〃	16号住	〃	105	寺	黒A	杯A II	体・外	七本松 3号住	〃	〃
65	木	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	106	□来堂	土師?	杯A	〃 〃	大村麿寺	〃	〃
66	舟・舟	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	107	大侏	灰釉	椀A	底・外	〃	〃	〃
67	木	〃	〃	〃 〃	〃	26号住	〃	108	大侏	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
68	吉	灰釉	椀A	底・外	福沢	2号住	〃	109	十	須恵	杯B I	底・外	下神 SKMT4号住	松本市	〃
69	?,?	土師?	杯A II	体・外	吉田向井	〃	〃	110	?	〃	杯A II	〃 〃	〃	〃	〃
70	山	黒A	〃	〃 〃	〃	18号住	〃	111	中	〃	〃	〃 〃	〃 SKMT 8号住	〃	〃
71	?	〃	〃	〃 〃	〃	19号住	〃	112	?	〃	杯B	底・外	〃 SKMT 9号住	〃	〃
72	?	〃	椀A	〃 〃	〃	〃	〃	113	大	黒A	杯A I	〃 〃	〃 SKMT11号住	〃	〃
73	大	須恵	杯A II	体・外	吉田向井	21号住	塩尻市	114	匳	〃	杯A II	〃 〃	〃 SKS 9号住	〃	〃
74	?	黒A	椀A	〃 〃	〃	37号住	〃	115	財	須恵	〃	〃 〃	〃 SKKS10号住	〃	〃
75	巾	〃	杯A III	〃 〃	〃	44号住	〃	116	?	〃	杯蓋	内面	〃 SKKS14号住	〃	〃
76	?	〃	杯A II	〃 〃	〃	53号住	〃	117	匳	黒A	椀A	体・外	〃 SKKS25号住	〃	〃
77	長	〃	〃	〃 〃	〃	54号住	〃	118	匳	〃	〃	底・外	〃	〃	〃
78	粃	〃	〃	〃 〃	〃	55号住	〃	119	匳	〃	杯A II	〃 〃	〃	〃	〃
79	子	土師	〃	〃 〃	〃	67号住	〃	120	?	〃	皿B	—	〃	〃	〃
80	?	〃	〃	〃 〃	〃	12号住	〃	121	十万	〃	杯A II	体・外	くまのかわ 1号住	〃	〃
81	?	〃	杯A III	体・内	〃	45号住	〃	122	中	〃	杯A I	〃 〃	〃	6号住	〃
82	?	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	123	?	須恵	杯A II	底・外	〃	〃	〃
83	岑	黒A	杯A II	体・外	田川端	9号住	〃	124	□次	黒A	椀	体・外	南栗・北栗 4号住	〃	〃
84	特	〃	〃	〃 〃	〃	14号住	〃	125	?	〃	皿B	—	〃	〃	〃
85	特	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	126	三	〃	杯A II	体・外	〃	〃	〃
86	特	〃	杯A	〃 〃	〃	〃	〃	127	大	須恵	〃	〃 〃	〃	〃	〃
87	?	黒A	椀A	〃 〃	〃	21号住	〃	128	?	黒A	椀A	底・外	〃	47号住	〃
88	臣	〃	杯A II	〃 〃	〃	23号住	〃	129	新	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃
89	岑	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	130	新	〃	杯A I	〃 〃	〃	〃	〃
90	岑	〃	椀A	〃 〃	〃	〃	〃	131	人	須恵	杯A II	〃 〃	〃	61号住	〃
91	?	土師	杯A II	〃 〃	〃	〃	〃	132	?	黒A	杯A I	〃 〃	〃	〃	〃
92	㊦	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	133	元	須恵	杯B	〃 〃	島立条里的遺構 7T	〃	〃
93	?	黒A	杯A	〃 〃	〃	〃	〃	134	弓	黒A	杯A II	体・外	南栗	〃	〃
94	寺?	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	135	今	〃	杯A I	〃 〃	〃	6号住	〃
95	∴	〃	杯A II	〃 〃	〃	32号住	〃	136	今	土師	杯A II	〃 〃	〃	〃	〃

137	?	黒A	〃	〃 〃	〃 7号住	〃	162	?	灰釉	長首壺	—	〃	〃
138	?	〃	〃	〃 〃	〃 9号住	〃	163	東一	須恵	杯	底・外	岩田天神南 H-2号住	南安曇
139	井	須恵	杯蓋	内 面	〃 17号住	〃	164	東一	〃	〃	〃 〃	〃	〃
140	?	〃	杯A II	底・外	〃 18号住	〃	165	東	土師?	杯A	〃 〃	〃	〃
141	分	灰釉	椀A	〃 〃	北栗 23号住	〃	166	神造	須恵	杯A II	体・外	馬場街道 15号住	〃
142	?	黒A	杯A II	体・外	〃 24号住	〃	167	参理	土師	〃	底・外	〃 河川址	〃
143	又	土師	〃	〃 〃	〃 29号住	〃	168	?	—	—	—	五輪堂 1号住	〃
144	?	灰釉	皿B	底・外	〃 34号住	〃	169	?	土師?	—	底・外	殿屋敷	北安曇
145	元	灰釉	椀B	底・外	北栗 溝	松本市	170	母北	黒A	杯A II	体・外	五十畑 墓壇	大町市
146	田	須恵	—	底	北栗 巾上	〃	171	東	土師	〃	底・外	〃	〃
147	?	灰釉	椀A	底・外	北方 2号住	〃	172	早	黒A	〃	〃 〃	〃 ビット内	〃
148	刀?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	173	早	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
149	?	〃	〃	〃 〃	〃 5号住	〃	174	□主	〃	杯A	〃 〃	〃 住居址	〃
150	?	須恵	杯A II	体・外	推定信濃国府 3号住	〃	175	□頁?	須恵	杯	体・外	〃 ビット内	〃
151	?	〃	〃	底・外	〃 〃 〃	〃	176	井?	黒A	杯A	底・外	〃 住居址	〃
152	?	土師	〃	〃 〃	〃 表彩	〃	177	?	〃	椀A	〃 〃	〃	〃
153	聖良印	〃	杯A	—	〃	〃	178	□長	須恵	杯A II	〃 〃	前田 26号住	〃
154	米?	〃	〃	—	〃	〃	179	?	土師	—	〃 〃	大笹 (三日町)	〃
155	寿?	〃	〃	—	〃	〃	180	爪	黒A	杯A II	体・外	来見原	〃
156	?	灰釉	長首壺	—	〃	〃	181	?	灰釉	椀	〃 〃	来見原	〃
157	錦服β	須恵	杯B II	体・外	殿村古墳	東筑摩	182	東	須恵	杯A II	底・外	借馬 66号住	〃
158	?/?	黒A	杯A II	底外/体外	殿村 9号住	〃	183	二	〃	小形壺	底・内	〃 P223	〃
159	田・林	〃	〃	体・外	〃 34号住	〃	184	盞	黒A	杯A II	体・外	〃 84号住	〃
160	?	〃	〃	底・外	〃 35号住	〃	185	?	須恵	〃	〃 〃	〃 〃	〃
160	?	土師	杯A	—	〃	〃	186	?	〃	〃	底・外	〃 小堅穴	〃

南信

1	?	灰釉	椀A	体・外	尾の島館 包含層	下伊那	14	寺か?	灰釉	皿C	底・外	滝沢井尻 4号住	〃
2	木	〃	〃	底・外	浜井場 1号住	〃	15	蓋	〃	椀A	〃 〃	小垣外 12号住	〃
3	長	〃	〃	〃 〃	杉の木平 1号住	〃	16	蓋	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
4	長	〃	皿B	〃 〃	〃 柱穴群No1	〃	17	大	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
5	有・有/?	〃	椀A	底外/体外	〃 〃 No.2	〃	18	克	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
6	?	〃	〃	体・外	〃 炭層No4の1	〃	19	?	黒A	杯A II	体・外	〃 〃	〃
7	?	〃	耳皿	底・内	〃 〃	〃	20	?	土師	甕	〃 〃	池田 2号住	〃
8	?	須恵	杯	体・外	〃 炭層No.5	〃	21	福	黒A	杯A II	〃 〃	〃 15号住	〃
9	諷?	灰釉	椀A	底・外	〃 包含層	〃	22	信	須恵	杯B III	底・外	恒川	〃
10	大	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	23	人	土師	椀A	底・内	〃	〃
11	万か?	〃	〃	〃 〃	杉の木平(B)1号テラス	〃	24	嵐	黒A	杯A	底・外	〃	〃
12	田	須恵	杯	〃 〃	毛賀	飯田市	25	△	須恵	杯蓋	外 面	〃	〃
13	島神	〃	杯蓋	内 面	〃	〃	26	大田	土師?	杯	体・外	〃	〃

27	卒か?	須恵	杯A II	底・外	猿小場 13号住	〃	68	?	黒A	〃	〃	〃	〃	〃	〃					
28	大口	〃	杯A	〃	〃 43号住	〃	69	?	須恵	杯B	〃	〃	〃	C-9号住	〃					
29	十門 or 南	灰釉	皿	〃	早稲田 A地区	下伊那	70	?	黒A	皿B	体・外	〃	〃	C-10号住	〃					
30	十門 or 南	〃	皿	〃	〃	〃	71	□	須恵	杯A II	〃	〃	〃	D-11号住	〃					
31	子/子	黒A	杯A II	体外/底外	〃 中世竪穴	〃	72	□女	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃					
32	金	灰釉	皿B	底・外	新井原	〃	73	□/□	須恵	杯A II	底外/体外	福島	D-11号住	伊那市	〃					
33	灶	須恵	杯蓋	外 面	の場 19号住	〃	74	?	〃	〃	底・外	〃	〃	〃	〃					
34	仲	常滑	甕	体・外	丈源田IV 溝	〃	75	?/?	黒A	〃	底外/体外	〃	〃	〃	〃					
35	方	黒A	杯	〃	岡部 H-1号住	上伊那	76	?	〃	〃	体・外	〃	〃	〃	〃					
36	内	〃	〃	—	〃	〃	77	?	〃	〃	〃	〃	D-13号住	〃	〃					
37	十	黒A	杯A II	体・外	和手 3号住	伊那市	78	田	〃	〃	〃	〃	D-14号住	〃	〃					
38	十	〃	〃	〃	〃	〃	79	大	〃	〃	底・外	芝王B	13号住	〃	〃					
39	内	〃	〃	〃	山本田代 1号住	〃	80	?	〃	〃	体・外	〃	〃	〃	〃					
40	分/□	〃	〃	底外/体外	〃	〃	81	□	〃	〃	〃	〃	11号住	〃	〃					
41	秀/兀	〃	〃	〃	〃	〃	82	?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃					
42	兀/兀	〃	〃	〃	〃	〃	83	子	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃					
43	兀/兀	〃	〃	〃	〃	〃	84	?	〃	杯A I	〃	〃	〃	12号住	〃					
44	兀/兀	〃	〃	〃	〃	〃	85	?	〃	杯A II	〃	〃	〃	〃	〃					
45	兀	〃	〃	底・外	〃	〃	86	又	〃	〃	〃	〃	〃	14号住	〃					
46	弁?/兀	〃	〃	底外/体外	〃	〃	87	六	〃	〃	〃	〃	砂場B	2号住	〃					
47	?	〃	〃	体・外	〃	〃	88	↑	〃	〃	〃	〃	上原	2号住	〃					
48	?	〃	杯A	〃	〃	〃	89	東(東)	灰釉	皿B	底・外	青木城II	2号住	駒ヶ根	〃					
49	?	〃	〃	底・外	〃	〃	90	白	〃	椀A	体・外	大芝東	1号住	上伊那	〃					
50	□/?	〃	杯A II	底外/体外	〃	〃	91	果	須恵	杯	底・外	馬場南	〃	〃	〃					
51	太	灰釉	椀A	底・外	〃	〃	92	糺男	土師?	〃	体・外	松島王墓周辺	〃	〃	〃					
52	卍	黒A	杯A II	〃	福島 A-2号住	〃	93	豊足	土師	杯C	底・外	堂地 大原	2号住	〃	〃					
53	壬	須恵	〃	〃	〃 A-5号住	〃	94	?	黒A	皿A	体・外	中道	10号住	〃	〃					
54	倍/倍・倍	黒A	〃	底外/体外	〃	〃	95	?	〃	杯A II	体・外	〃	〃	12号住	〃					
55	□	〃	〃	底・外	〃 B地区柱穴	〃	96	石	〃	〃	〃	〃	〃	13号住	〃					
56	?	〃	〃	〃	〃 B-16号住	〃	97	石	〃	椀A	〃	〃	〃	〃	〃					
57	?	〃	椀A	〃	〃	〃	98	?	須恵	杯A II	〃	〃	〃	〃	15号住	〃				
58	直	〃	杯A II	体・外	〃 B-17号住	〃	99	宮/宮見	黒A	〃	底外/体外	〃	〃	〃	18号住	〃				
59	土	〃	〃	〃	〃	〃	100	宮見	〃	〃	底・外	〃	〃	〃	〃	〃				
60	?	土師	杯	〃	〃 C-7号住	〃	101	三合	須恵	杯B III	〃	〃	〃	〃	20号住	〃				
61	圭	黒A	杯A II	〃	〃	〃	102	□半	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃				
62	?	〃	〃	〃	〃	〃	103	己	黒A	杯A II	体・外	〃	〃	〃	〃	22号住	〃			
63	西	〃	椀A	底・外	〃	〃	104	?	須恵	杯B III	〃	〃	〃	〃	〃	23号住	〃			
64	□	須恵	杯A II	〃	〃	〃	105	?	〃	杯A	〃	〃	〃	〃	〃	〃	24号住	〃		
65	□	〃	〃	〃	〃	〃	106	□五	土師	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
66	□	〃	〃	〃	〃	〃	107	?/?	黒A	杯A II	底外/体外	〃	〃	〃	〃	〃	〃	25号住	〃	
67	?	土師	杯A	〃	〃 C-8号住	〃	108	石	〃	〃	体・外	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	36号住	〃

109	見	黒A	杯A II	体・外	中道 36号住	上伊那	150	高	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃 38号住	〃
110	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	151	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
111	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	152	?	〃	杯A	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
112	見/見	〃	〃	底外/体外	〃 38号住	〃	153	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
113	宮	土師	〃	体・外	〃 40号住	〃	154	?	土師	杯A II	体・内	〃 〃	〃 〃	〃
114	玉	須恵	〃	底・外	〃 47号住	〃	155	?	〃	杯	体・外	〃 〃	〃 〃	〃
115	?	黒A	〃	体・外	〃 52号住	〃	156	上	〃	杯C	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
116	?	土師	〃	〃 〃	〃 68号住	〃	157	?	〃	杯	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
117	万	須恵	〃	底・外	箕輪 大清水地区	〃	158	?	〃	杯A II	底・外	〃 〃	〃 〃	〃
118	寺?	黒A	〃	体・外	北城 24号住	〃	159	高	須恵	〃	体・外	〃 〃	〃 〃	〃
119	寺?	〃	皿A	〃 〃	〃 〃	〃	160	高	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
120	人	〃	皿B	〃 〃	若宮 2号住	〃	161	美/□	〃	〃	底外/体外	〃 〃	〃 〃	〃
121	小廣	〃	杯A II	〃 〃	樋口内城館址 36号住	〃	162	?	〃	杯	体・外	〃 〃	〃 〃	〃
122	?	土師?	杯	〃 〃	〃 包含層	〃	163	?	〃	杯A	底・外	〃 〃	〃 〃	〃
123	?	黒A	杯A II	〃 〃	神送 包含層	〃	164	?/?	〃	〃	底外/体外	〃 〃	〃 〃	〃
124	守	〃	〃	〃 〃	沢入口 1号住	〃	165	?	土師	〃	底・外	〃 48号住	〃 〃	〃
125	冬	〃	〃	〃 〃	海戸 25号住	岡谷市	166	?	黒A	杯A II	体・外	〃 溝1号	〃 〃	〃
126	六	土師	〃	〃 〃	〃 〃	〃	167	土	土師	〃	底・外	御屋敷	〃 〃	〃
127	大	黒A	杯A	〃 〃	長塚 1号住	〃	168	?	〃	〃	体・外	〃 〃	〃 〃	〃
128	祢	〃	杯A II	底・外	〃 〃	〃	169	因	須恵	〃	〃 〃	千鹿頭社 5号住	〃 〃	〃
129	変	土師?	杯	体・外	妙王池	〃	170	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
130	仁	黒A	杯A II	〃 〃	洩矢 1号住	〃	171	?	土師	〃	〃 〃	十二ノ后 2号住	〃 〃	〃
131	可	〃	〃	〃 〃	橋原 26号住	〃	172	神	黒A	〃	〃 〃	〃 41号住	〃 〃	〃
132	?	〃	〃	〃 〃	新井北 1号住	〃	173	山	〃	〃	〃 〃	〃 53号住	〃 〃	〃
133	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	174	山	〃	皿B	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
134	有有□□□□	〃	〃	〃 〃	〃 3号住	〃	175	山	〃	〃	底・外	〃 〃	〃 〃	〃
135	?	〃	〃	〃 〃	〃 ビット群1	〃	176	山	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
136	?	土師	杯C	底・外	船霊社 3号住	〃	177	?	須恵	杯A II	体・外	〃 63号住	〃 〃	〃
137	?	〃	〃	体・外	〃 12号住	〃	178	万	黒A	〃	〃 〃	〃 71号住	〃 〃	〃
138	圪	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	179	万	土師	〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
139	瓜	灰釉	椀A	底・外	城山 包含層	諏訪市	180	人?	黒A	皿B	〃 〃	〃 76号住	〃 〃	〃
140	瓜	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	181	中	土師	杯C	体・外	十二ノ后 76号住	諏訪市	〃
141	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	182	?	黒A	杯A II	〃 〃	〃 103号住	〃 〃	〃
142	梵字	土師	皿A	体内/底内	〃 2号建築址	〃	183	居	須恵	〃	底・外	〃 115号住	〃 〃	〃
143	?	〃	杯A II	体・外	大熊道上 2号住	〃	184	施・施	黒A	皿B	体・外	〃 〃	〃 〃	〃
144	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	185	長	土師	杯A II	〃 〃	〃 120号住	〃 〃	〃
145	北	黒A	皿B	体・外	荒神山 91号住	諏訪市	186	?	灰釉	椀A	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃
146	?	〃	杯A II	〃 〃	〃 包含層	〃	187	仮	黒A	皿B	〃 〃	〃 124号住	〃 〃	〃
147	高	須恵	〃	〃 〃	本城 25号住	〃	188	?	須恵	杯A II	〃 〃	〃 フンド1	〃 〃	〃
148	?	土師	杯	底・外	〃 30号住	〃	189	?	土師	杯C	底・外	〃 〃	〃 〃	〃
149	?	黒A	杯A II	体・外	〃 34号住	〃	190	嶋	〃	〃	〃 〃	〃 フンド2	〃 〃	〃

273	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	293	八十	黒A	杯A	〃 〃	〃 〃	〃
274	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	294	十	〃	〃	〃 〃	〃 14号住	〃
275	八	〃	杯A	〃 〃	〃 〃	〃	295	八十・八十	〃	皿B	〃 〃	〃 堅穴状遺構	〃
276	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	296	八	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃
277	八	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃	297	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
278	八	〃	杯A	〃 〃	〃 〃	〃	298	八	〃	皿B	〃 〃	〃 包含層	〃
279	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	299	十	〃	杯A II	〃 〃	〃 〃	〃
280	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	300	八十	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
281	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	301	八	〃	杯A	〃 〃	〃 〃	〃
282	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	302	十	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
283	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	303	八十	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
284	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	304	十	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
285	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	305	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
286	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	306	十	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
287	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	307	?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
288	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	308	卍?	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
289	八	黒A	杯A	体・外	足場 8号住	諏訪郡	309	仁	土師	杯A II	底・外	大石 9号住	〃
290	八	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	310	千/千	〃	〃	底外/体外	居沢尾根 29号住	〃
291	八十	土師	杯C	〃 〃	〃 12号住	〃	311	?	黒A	椀A	体・外	阿久 2号住	〃
292	八十	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	312	西?・Ⅱ	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃

第124表 長野県内出土の刻書・篋書土器

北信

1	キ	土師?	皿B	体・外	反町	更埴市	12	至	黒A	皿B	体内	〃 包含層	〃
2	木	黒A	〃	〃 〃	馬口 4号住	〃	13	工人	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
3	木	〃	〃	底・外	〃 溝	〃	14	専	須恵	杯	底・外	塩崎小学校地点	〃
4	木	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃	15	専司	〃	杯B	〃 〃	〃	〃
5	ソ	灰釉	椀A	体・外	馬口K 包含層	〃	16	仲	黒A	杯A	体・外	県町 14号住	〃
6	楽	土師?	〃	底・外	町田Ⅱ H-1号住	〃	17	文	須恵	杯	底・外	〃	〃
7	生弑月	黒A	杯A II	体・外	上ノ田 4号住	〃	18	井	土師	甕	頸部	草間窯業茶臼峯 5号住	中野市
8	?*1	土師	罌釜	口縁部	生仁 H-12号住	〃	19	土	須恵	杯B III	体・外	〃 窯址	〃
9	本	須恵	小型壺	底・外	雨宮廃寺	〃	20	ヲ	〃	杯蓋		前高山窯業北 2号址	上水内
10	松井	〃	杯	体・外	四ツ屋	長野市	21	十	土師	杯A II	底・外	北原 14号土壙	飯山市
11	足立女	〃	杯A II	体・外	屋地 2号住	〃	22	∪	須恵	〃	〃 〃	〃 2号井戸址	〃

東信

1	王	土師?	杯	体・外	大屋河原	上田市	4	根	黒A	〃	〃 〃	〃 B地点	〃
2	西□*2	〃	皿	〃 〃	殿田	〃	5	圴	須恵	壺	体・外	二子塚古墳	小県郡
3	梶	土師	杯A II	底・外	堰口ノ一 C地点	〃	6	大井	〃	盤A	底・内	渋右衛門	佐久市

7	中	〃	杯A II	体・外	周防畑 H-2号住	〃
8	田	土師?	碗A	〃 〃	蛇塚	〃
9	止	須恵	杯A II	〃 〃	舞台場 H-10号住	〃
10	ホ	〃	甕	〃 〃	十二	北佐久
11	井	〃	杯A II	底・外	前田 H-41号住	〃
12	佐	〃	杯B	〃 〃	犬飼 包含層	〃

13	丨	〃	杯A	〃 〃	野火付 H-14号住	〃
14	×	〃	杯A II	〃 〃	前田 H-48号住	〃
15	×	〃	〃	〃 〃	〃 H-52号住	〃
16	×	〃	〃	〃 〃	〃 H-53号住	〃
17	十	〃	〃	〃 〃	市の町	小県郡

中信

1	大	土師	甕	体・内	俎原 13号住	塩尻市
2	又	黒A	杯A II	底・外	吉田向井 4号住	〃
3	?	〃	〃	〃 〃	〃 11号住	〃
4	└	須恵	〃	底部	下神 SKKS10号住	松本市
5	?	黒A	〃	(体・内)	〃 〃	〃
6	一	須恵	杯蓋	内面	〃 SKKS14号住	〃
7	?	黒A	碗A	(体・内)	〃 SKS 9号住	〃
8	二	灰釉	碗B	底・外	南栗・北栗 3号住	〃
9	川	須恵	壺	〃 〃	〃 6号住	〃
10	卍	〃	杯B III	体・外	〃 59号住	〃
11	┌	〃	〃	底・外	〃 75住	〃
12	帝	黒A	杯A I	体・外	南栗 9号住	〃
13	木	〃	杯A	底・外	北栗 1号住	〃
14	九	〃	杯蓋	内面	〃 41号住	〃

15	塚	〃	杯A II	体・外	〃 42号住	〃
16	大井	灰釉			北方	〃
17	田長中???	黒A	碗A	底・内	馬場街道 5号住	南安曇
18	大フ				五輪畑 1号住	〃
19	主	土師	杯A III	底・内	来見原	大町市
20	十	須恵	杯B	〃 外	借馬 75号住	〃
21	丨	〃	〃	〃 〃	〃 83号住	〃
22	×	〃	一	〃 〃	南栗・北栗 4号住	松本市
23	?	〃	短頸壺	一一	〃 〃	〃
24	?	〃	杯A II	底・外	南栗 4号住	〃
25	?	〃	〃	〃 〃	〃 14号住	〃
26	十	〃	壺	〃 〃	〃 検出面	〃
27	?	〃	杯蓋	内面	北栗 11号住	〃
28	×	〃	鉢C	体・外	〃 2地区検出面	〃

南信

1	?	土師	甕	体・外	清水 41号住	飯田市
2	芳	〃	碗A	底・内	毛賀	〃
3	ヲ	須恵	杯	底・外	古瀬平	〃
4	上	〃	杯B	〃 〃	恒川	〃
5	本	土師	杯A	底・内	新井原	下伊那
6	?	黒A	杯A II	体・外	菖蒲沢 7号住	伊那市
7	木	〃	〃	〃 〃	山の根 4号住	〃
8	十/十	〃	〃	底内/体外	〃 〃	〃
9	十	土師	〃	体・外	〃 〃	〃
10	今	灰釉	壺	〃 〃	山本田代 3号住	〃
11	キ	黒A	杯A II	体・内	〃 6号住	〃
12	十	〃	〃	底・外	福島 A-4号住	〃
13	十	灰釉	壺	〃 〃	〃 C-10号住	〃
14	本	黒A	杯A II	体・外	〃 D-12号住	〃
15	└	須恵	甕	〃 〃	中道 25号住	上伊那

16	迫	〃	〃	頸部	〃 47号住	〃
17	大	〃	杯A II	底・内	天伯古墳 羨道	〃
18	神	〃	杯B	〃 〃	大安寺	諏訪市
19	本	黒A	杯A II	体・外	十二ノ后 41号住	〃
20	大	〃	〃	底・外	本城 48号住	〃
21	?	〃	〃	体・外	山寺 3号住	茅野市
22	?	灰釉	耳皿	底・外	阿弥陀堂	〃
23	八十	土師	皿B	体・外	足場 8号住	諏訪郡
24	十	黒A	杯A	〃 〃	〃 〃	〃
25	八十	〃	〃	〃 〃	〃 〃	〃
26	X	〃	杯	底・外	〃 12号住	〃
27	×	須恵	杯A II	〃 〃	〃 包含層	〃
28	X	〃	杯A II	〃 〃	海戸 7トレンヂ	岡谷市
29	X	〃	杯蓋	内面	堂地大原 2号住	上伊那

第5節 平安時代末期から鎌倉時代の土器皿

——SX08出土の土器皿をめぐって——

1 はじめに

本遺跡の大きな特徴は、ほとんど断絶がなく8世紀から19世紀まで連続して人間活動の痕跡が認められることである。ここで取り上げる平安時代末期から鎌倉時代も例外ではない。従来このような例は県内では珍しかったが、今後調査が進む中で増加する可能性が高い。

該期の焼物類の様相については、良好な資料が少なかったり、単独の資料のため時間的な位置づけが困難であったりして、従来明らかではなかった。今回の資料は、量的には少ないが連続しており、該期の焼物の様相を考えるうえで良好なものである。ここではSX08出土の土器皿を中心に12世紀から13世紀にかけての土器皿と、それから派生する問題について考えてみたい。

2 SX08出土の土器皿について (図版213)

SX08は、S地区で発見され、大部分が調査範囲外にかかる遺構である。そのため図示できる資料は、土器皿4点、白磁碗1点と少ない。

土器皿は、いずれも非ロクロ成形で、粘土の円盤を作りその周囲を折り曲げたと思われる。胎土には不純物を含まず、赤褐色で軟質である。法量より大小二種に分けることができる。大法量(1)は1点のみであるが口径13.8cm、器高3cm前後を測る。底部の大部分は欠損しているが、体部脇の状況から、底部から折れて体部が直線的に立ち上がる器形と思われる。口縁部のナデは一回のみで、端部は面取りが明瞭になされる。小法量(2~4)は3点あり、口径9.3~10.4cm、器高1.7~1.9cmを測る。形態は全体に丸味を帯びており、口縁部が広くナデられ、体部のナデは底部にまで及ぶ。

これらの土器皿の年代について考えてみたい。伴出した白磁碗(5)はV類に分類でき、本章第2節で述べられているように、SB31段階の土器群に多く伴っており、年代的には12世紀に多くみられる。しかし破片のため混入の可能性もあり、良好な傍証資料とはいえず、これをもって年代を決定することはできない。

従来より県内でもこのような非ロクロ成形の土器皿の存在は知られていた。古くは金井典美による諏訪市旧御射山遺跡の報告の中で、非ロクロ成形とロクロ調整の二者の存在と、法量が口径10cm以上、8~10cm、5~7cmの三つに分けられることが指摘されている(金井1965)。その後茅野市御社宮司遺跡の報告がされ、小林秀夫は県内ではじめて本格的に中世の土器皿の分析を行った。内容的には法量の分析やその成形方法の観察には問題を残すが、このような調整・成形の異なる土器皿が混在する状況に15世紀という年代を与えた(小林1982)。当初、諏訪地方のみであった非ロクロ成形の土器皿の出土例も、近年県内各地で増加してきた。それらの中で様々な分析が行われてきている。特に茅野市磯並遺跡の出土資料を分析した守矢昌文や、佐久市光明寺遺跡の出土資料を分析した小山岳夫によって、小林秀夫の年代観に疑問が提示され、非ロクロ成形の土器皿は時代的には遡る可能性があると考えられた(守矢1987、小山1986・1987)。特に守矢は、調整・成形が異なる二者の土器皿それぞれに、大小二法量が認められることを指摘した上で、鎌倉の出土資料との対比の上で13世紀という年代を与えた。また、ロクロ調整と非ロクロ成形では前者が先行するという指摘もしている。これらの研究を踏まえた上で、鋤柄俊夫が古代末期から中世の土器群の変化をまとめている(鋤柄1988)。そのなかで土器皿については、12世紀末~13世紀にかけて回転台成形から手づくねへという大きな変化があるとし、その背景としては土器皿に非日常的な色彩が加わり、京都の非ロクロの土器皿の模倣が指向されたためとした。

このように県内の研究では、SX08にみられるような非ロクロの土器皿には、13世紀代という年代が与えられ、その成立の背景は、当時の中心地である京都や鎌倉などの土器皿の変化に対する連動に求められている。また中世の土器皿が、13世紀に非ロクロ成形がみられはじめ、ロクロ調整を量的にもしのぐが、14世紀代遅くとも15世紀代にはロクロ調整が再びほとんどになるというように、大きな傾向も明らかになってきている。

それでは具体的にSX08出土の土器皿を、京都の土器皿と比較してみたい。宇野隆夫や横田洋二の編年と比較すると、全体の形態、とくに口縁部の面取りの技法などから、13世紀初頭の土器皿と共通性を多く持つ(註1)。また、このような非ロクロ成形土器皿が、11世紀までロクロ調整の技法が主流だった東日本各地で、最近になりその存在が確認され始めている。出現時期は早いところで12世紀後半、遅いところでも13世紀初頭という年代が与えられている。このように京都系の非ロクロ土器皿の出現は、東日本全体におこった大きな変化としてとらえられつつある。

現時点では、京都の土器皿をどの程度まで忠実に模倣したかという問題点は抱えているが、このSX08の土器皿の年代を13世紀初頭に置くことにする。

3 平安時代末期の土器様相との関連

ここではSX08の土器皿の年代を13世紀初頭とした。そこで、平安時代末期、12世紀代の土器皿についてもその成立との関連でみてみたい。本章第2節でふれられており、11世紀末から12世紀中頃にかけてSB74段階とSB31段階が設定されている。比較的豊富な資料を持っており、その内容も安定したものである。従来この時期も資料が少なく、不明な点が多かったが、その内容を明らかにするためには良好である。その設定及び内容については本章第2節を参照されたい。

SB74・31段階には、SX08出土土器皿との関連が考えられるものとして、土師器杯Aがある。杯Aには二つの段階ともに大小二法量を持ち、いずれもロクロ調整で底部裏面に糸切り痕が残されている。また、胎土は砂や小礫を多く含み、軟質の焼成で褐色である。これらの調整・成形・焼成に関する点はSX08出土土器皿と大きく異なる。法量をみるとSB74段階では小型の杯A IIIは口径9～10cm、器高2～2.5cm、大型の杯A IIは口径13～14cm、器高3～4cmを測る。一つ前のSB32段階と比較して、杯A IIIの器高に減少がみられる。SB31段階では法量の減少傾向が続き、小型の杯A IIIは口径8.5～10cm、器高1.5～2.0cmとなる。大型の杯A IIは量的に不安定であり、はっきりとした法量の傾向はつかめない。杯A IIと杯A IIIの出土量を比べると後者が圧倒的に多い。また、土師器には、杯Aの他に豊富な器種がみられる。

従来この時期の土器群は、資料の少なさからくる制約のため、様相がはっきりしなかった。そのような状況の中で、岡田正彦や笹沢浩により奈良・平安時代の土器編年が作成された際に、これらの土器群は一番新しい時期に位置づけられた。そしてこの段階で小型化したロクロ調整の(皿)が、中世の「かわらけ」へ連続するという、見通しが示された(岡田1977・1981、笹沢1976)。また茅野市高部遺跡の出土資料を分析した鶴飼幸雄はこの考え方を受け継ぎ、岡田編年平安時代V期を細分し、大小二法量のロクロ調整の土師器杯(皿)の存在を認め、底部裏面の糸切り痕上に残る板状圧痕が、中世土器皿への移行を示すとしている(鶴飼1983)。このように、ロクロ調整の小型化した杯(皿)が、中世の「かわらけ」へ移行するという考えが、古代の土器研究から示されてきた。しかし前述した鋤柄・守矢の指摘のように、その間に非ロクロ成形の土器皿を介在させる考え方も示され、現在の課題となっている。

本報告では、8世紀から12世紀までの土器群の様相が連続してとらえられ、特に、SB84段階以降は大小二法量の杯Aの存在をはじめとしたいくつかの要素から、その性格を「プレ中世的」としている。12世紀中頃に置かれるSB31段階は、より一層中世的な色彩を強くした段階と性格づけられる。

4 まとめ

SX08の土器皿とSB31段階の土器群とは、時間的にわずかな断絶を持っており、12世紀後半が今のところ空白となっている。しかし、ここでは古代末期とした土器群とSX08出土土器皿とを対比し、問題点を指摘してまとめをしたい。

第一に法量の比較をしてみたい。前述したようにともに大小二法量をもつ点は共通している。またその法量も極めて近い数値を示している。このことからSX08の土器皿とSB31段階の杯Aが、盛る機能としては同じであった可能性がある。

第二に、単純に出土量の対比を試みることにする。古代末期では堅穴住居址を中心に多数の土師器杯Aが出土している。それに対してSX08にみられるような非ロクロ成形土器皿は、遺構外出土を含めても30点に満たず、比較にならないほど少ない。遺跡の性格の可能性もあるが、土器皿の急激な減少と表現できる。県内を見ても、諏訪地方の諏訪神社関係の遺跡からの非ロクロ成形の土器皿の出土は多いが、他の一般集落と考えられる遺跡からの出土例は少なく、量的にまとまった例も少ない。このことから、使用される場面が限定され、日常の食器としての用途を失ってしまった可能性が考えられる(註2)。

第三には、生産に関わる問題である。技法的にみると、SX08出土資料が少ないため断定はできないが、ロクロの使用から非ロクロ成形へという大きな転換がみられる。これは単に技法のみの転換では片付けられない、生産体制に関わる問題の可能性もある。その他土器皿の具体的な変化として、従来の杯Aの形態を放棄して京都の土器皿を模倣対象とする点、生産量を著しく減少させる点、胎土や焼成方法にも変化が見られる点をあげることができる。また、土師器生産が、従来のように豊富な器種を生産しなくなる点もあげなければならない。このような変化をみると、従来の土器生産体制は根底から崩れてしまった可能性が考えられる。それについて詳しく言及する資料は持ち合わせないが、新たな生産体制は、一般集落への供給を目的にしていたとは考えられず、特定の供給対象(神社等)での使用を前提としていた可能性が強い。

以上のように、SX08出土の土器皿から派生する問題について考えてきた。従来言われているほど、12世紀から13世紀への土器群の変化を単純な図式で描くことはできそうにない。今後食器全体の様相の変化をとらえていく必要がある。

(註1) 宇野隆夫、横田洋三の研究を参考とした(宇野1977・1981、横田1981)。また宇野隆夫、伊野近富氏より、実際に遺物を観察していただき、御教示をうけた。

(註2) 本章第2節の古代の食器の分析では、土師器の非日常化の傾向が、11世紀には認められるとしている。

引用文献

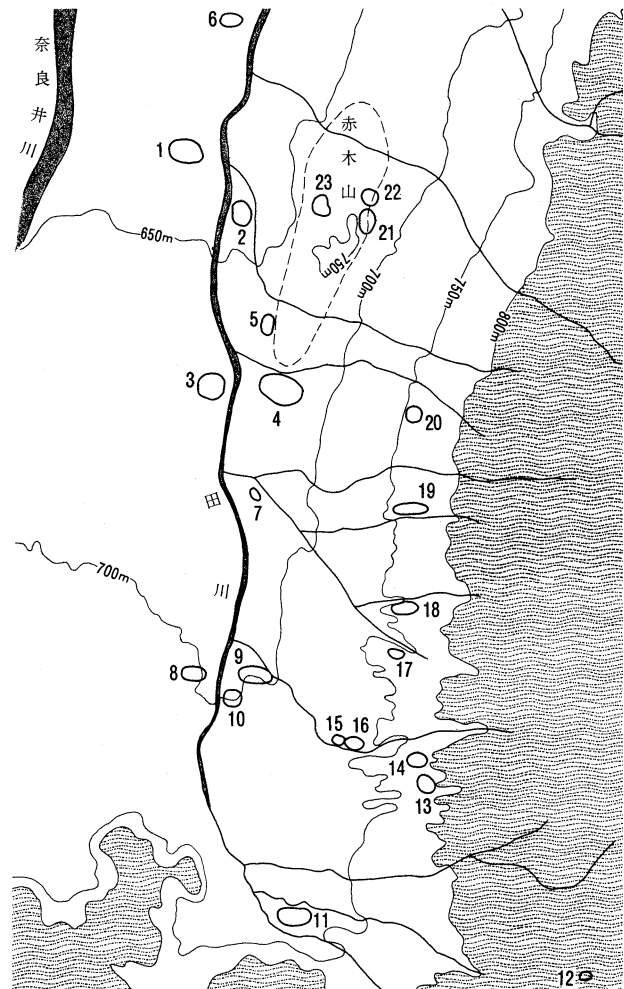
- 鵜飼幸雄 1983 「高部遺跡出土の平安時代後期の土器様」『高部遺跡』茅野市教育委員会
 宇野隆夫 1977 「京大病院遺跡出土の土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年』
 1981 「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告II—白河北殿北辺の調査—』
 岡田正彦 1977 「平安時代土師器等の編年試案」『信濃』29—2
 1981 「橋原遺跡における古代以後の様相」『橋原遺跡』岡谷市教育委員会
 金井典美 1965 「長野県霧ヶ峰旧御射山祭祀遺跡調査概報」『考古学雑誌』46—1
 小林秀夫 1982 「中世以後の遺物」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5』
 小山岳夫 1986 「中世の遺物」『大井城跡』佐久市教育委員会
 1987 「下川原・光明寺遺跡のまとめ」『宿上屋敷・下川原・光明寺』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター
 笹沢 浩 1976 「奈良・平安時代の土器編年」『長野県中央道用地埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4』
 鋤柄俊夫 1988 「信濃における平安時代後期以後の土器様相」『東国土器研究』第1号 東国土器研究会
 守矢昌文 1987 「磯並遺跡出土のかわらけについて」『磯並遺跡』茅野市教育委員会
 横田洋三 1981 「付編 出土土師器皿編年試案」『平安京左京五条三坊十五町』古代学協会

第8章 吉田川西遺跡の歴史的特質

今回の調査で、古代から近世までの遺構と遺物が発見された。このことはこの場所で人々が絶え間なく活動していたこと示している。前章までの事実報告と考察の中では、それらの個々の要素について内容を明らかにし評価を与えてきた。ここではその成果を総合するかたちで、吉田川西遺跡の歴史的特質について、時代をおって考えてみたい。

今回調査された台地上が本格的に居住域として利用されるのは、1期(700年前後)になってからである。それ以前は、遺物は少量発見されたが遺構は認められなかった。時期的には、縄文時代中期初頭、中期末葉、弥生時代中期中頃、古墳時代前期初頭などで、いずれも移動が激しく小規模な生活の痕跡を残す時期である。遺物は土器片の他に石器なども見つかっており、短期間の生活の場や生産の場として利用された可能性がある。近隣の吉田向井遺跡では縄文時代中期の集落が確認されており、大規模な集落が700年以前にこの台地上に存在しないとは断言できない。

700年前後より本格的に居住域として利用され始める。1期では1軒の住居がつくられるが集落としての広がり是不明である。次の2期(8世紀前半)になると、1軒の大きな竪穴住居(SB227)が造られる。それは一辺10mの方形プランで、この時期としては松本平で最大級である。そのほかカマドの構造や、小礫を壁際に並べるなど特異な構造をもっている。また出土遺物の中に朱墨パレットがあるのが注目される。朱墨の用途については第7章第4節で述べているように、役所における公的な職務との関連が考えられる。これらのことから居住者は、政治的にもある程度の地位を持った有力者ということになる。そしてこの有力者は労働力を集めるだけの財力と権力を持ち、この段階より始まる開発の主体者であった可能性が強い。その出自は、遺跡内部ではなく当然外部に求める



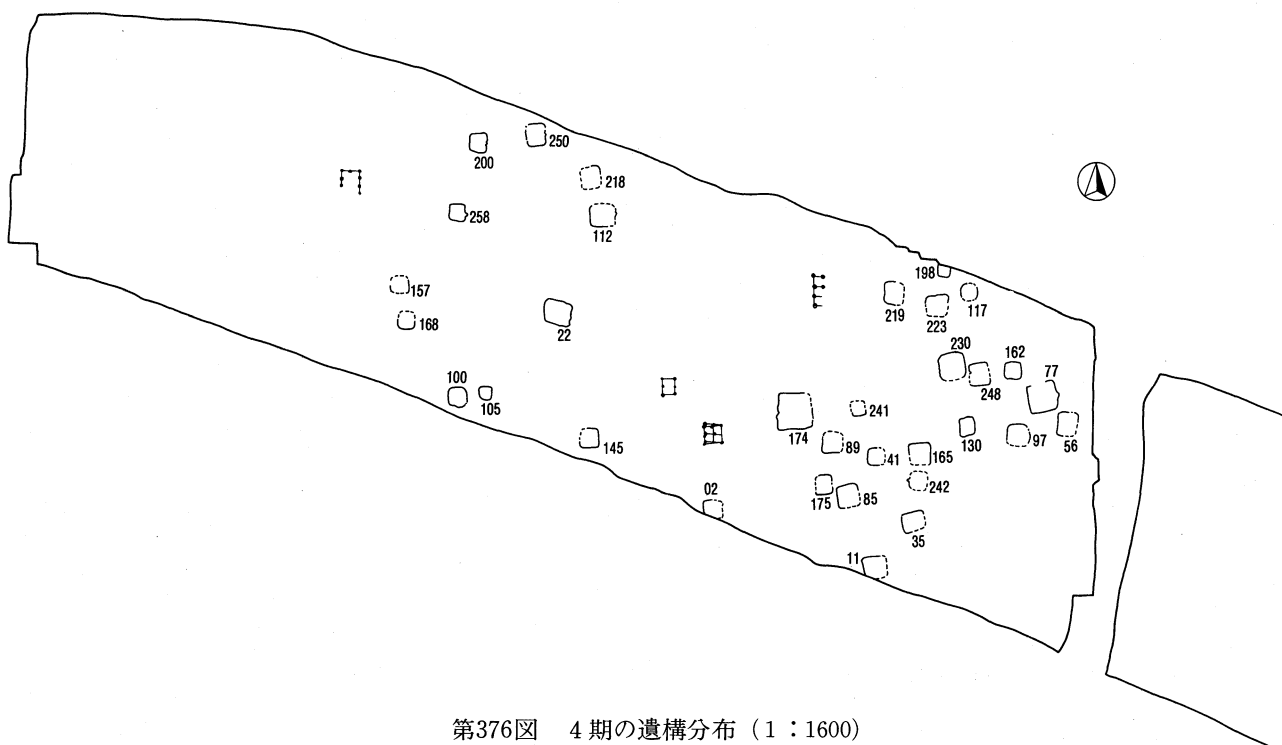
番号	遺跡名	800年	900年	1000年	1100年
1	吉田川西	■	■	■	■
2	吉田向井	■	■	■	■
3	丘中学校	■	■	■	■
4	君石・高田	■	■	■	■
5	前田・木下	■	■	■	■
6	高畑	■	■	■	■
7	上木戸	■	■	■	■
8	和手	■	■	■	■
9	中挾	■	■	■	■
10	中島	■	■	■	■
11	田川端	■	■	■	■
12	八窪	■	■	■	■
13	栗木沢	■	■	■	■
14	樋口	■	■	■	■
15	福沢	■	■	■	■
16	堂の前	■	■	■	■
17	竜神平	■	■	■	■
18	狙原	■	■	■	■
19	舅屋敷	■	■	■	■
20	内田原	■	■	■	■
21	原度前	■	■	■	■
22	横山城	■	■	■	■
22	石行	■	■	■	■

第375図 古代の遺跡分布と遺跡の継続

わけであるが、東山一帯には6・7世紀の古墳がみられないことや、その時期の集落も発見されていないことから、現時点では新たに他地域から入ってきたと考えたい。当時信濃においては、渡来系の氏族が多数開発にたずさわっていたことが知られており、『続日本紀』にみられる「田河造」も、田川流域一帯の開発に関係があると考えられることから、その可能性も否定できない。近隣をみると、吉田向井遺跡、高畑遺跡、丘中学校遺跡、君石遺跡などもほぼ同じ頃に居住域として利用され始めており、田川流域一帯の開発の開始もこのころと考えられる(第375図)。このように、広大な地域に開発が一斉に始まる背景としては、三世一身法(723年)や墾田永世私財法(743年)に代表されるような、当時の班田制の行き詰まりからくる、開発を奨励する国家的政策があったと思われる。また、この他に国府の筑摩郡への移設、吉蘇路の開通なども、大きな要因としてあげることができる。ここで強調しておきたいのは、本遺跡では集落が連綿と維持され続けることや、その後良田郷一帯が公領として続くことから、私的な開発ではあるが官衙の強力な指導による、かなり政治的な意図のものと開発の可能性があることである。

調査区内では3期(8世紀後半)まで調査区東側部分が居住域として利用される。住居址の数は2期と比較して確実に増加しているが、大型住居址はみえなくなる。このことから有力者が集落外に移動したと考えられるが、調査区域外に存在する可能性もある。この後、集落は確実に大きくなっていくが、それを支える生産の場は今回の調査では発見することができなかった。当時の生産の場としては当然水田を考えなければならない。しかし対岸には吉田向井遺跡、南側には丘中学校遺跡があり、必然的にその場所は限定されてくる。そこで想定したいのは、田川の西岸で調査地点の北側(若宮)と、南側の現在の水田地帯(その南限は野村の集落との中間地点と思われ、明治のはじめごろまで林であったところがある)である。なお、調査区の西側一帯は、近年まで開発は行われておらず、当時もほとんど人の手は加わらなかったものと思われる。

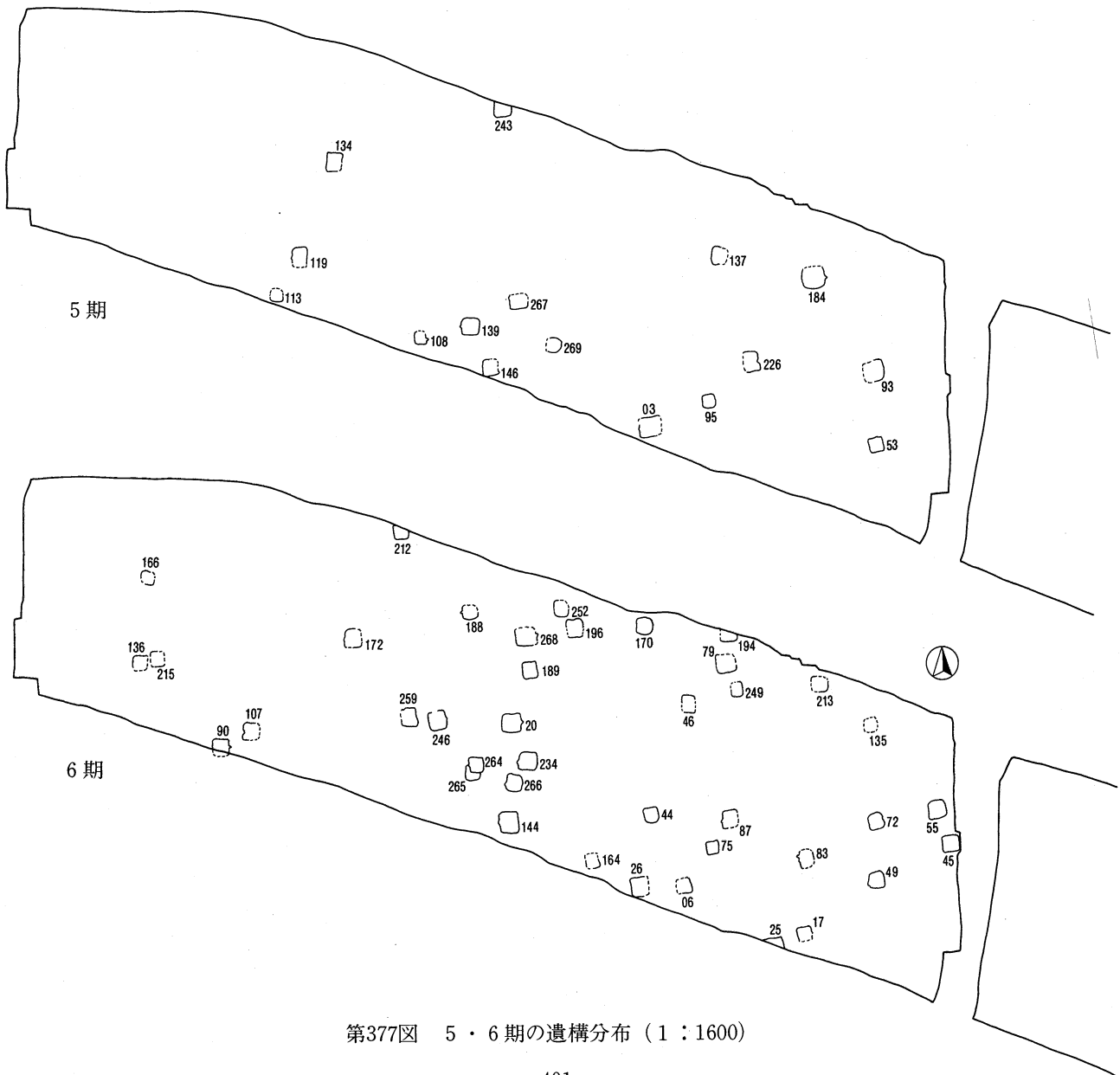
4期(8世紀末から9世紀初頭)になると、住居址の数が増加し、居住域として従来の東側ばかりでなく、中央部も利用され始める(第376図)。この背景としては労働力としての人口の増加があり、開発が大きく進展したことを物語っている。『続日本紀』延暦8年(789)の「田河造」の記事は、田川流域の開発がある程度進んだ事を示していると思われ、年代的にもほぼ一致する。集落の内部をみると、掘立柱建物が付属した2ないし3群に堅穴住居をグルーピングすることができる。従来からの東側は、大型住居址(SB173)を中心と



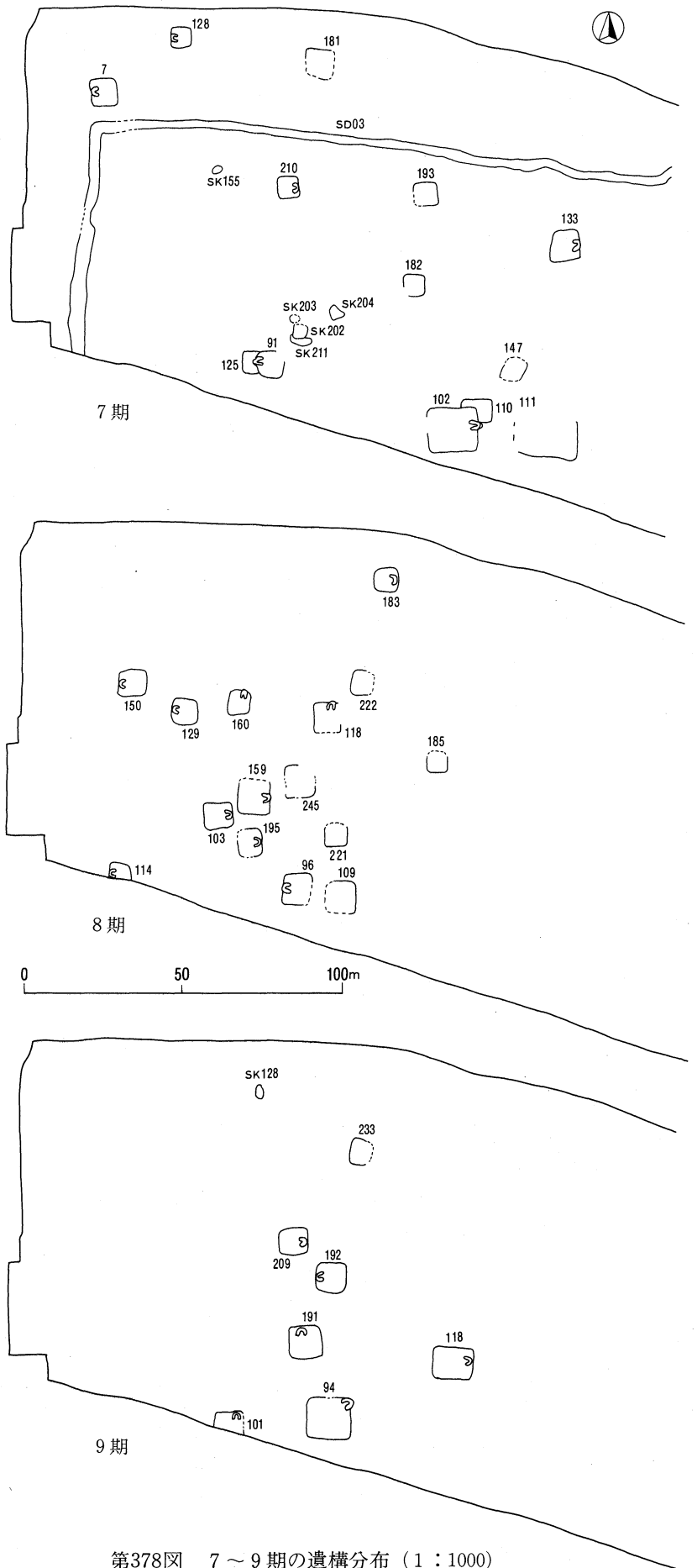
第376図 4期の遺構分布(1:1600)

した大きなまとまりと考えることができ、さらにその中を、南北の二つのまとまりとすることができそうである。西側の一群は、大きく環状に配置されており、その中央部に祭祀遺物を持った堅穴(SB22)がある。このまとまりは、次の5期まではっきりつかめることから、一つの「単位」ととらえることができそうである。東群も2つのまとまりとした場合、南北にそれぞれ環状の堅穴住居の配置がみられる。次に、ここでみられる西への居住域の展開は、新たに別のグループが外から入ってきて群を形成したとも考えられるが、東西の両群に共通する墨書がいくつかあることから、SB01段階から継続した集団が、徐々に労働力として人を集め、集団内に組み込むことによって大きくなり分裂した可能性が強い。この東西2～3群に分かれている傾向は、6期(9世期中頃)まで続く。

6期(9世紀中頃)になるとさらに西側に居住域を広げる(第377図)。5期までは、大型住居が存在し掘立柱建物が付属した2ないし3の堅穴住居群にグルーピングができた。6期段階では住居の規模も同じになりグルーピングがむずかしくなり、この時期の掘立柱建物址は認められない。しかし、西群と東側の南北2群というグルーピングはできそうである。但しそれまで特徴的であった堅穴住居の環状の配置は失われてしまう。このように、前段階の集落は内部に変化を起こしながら継続している。また、この段階ではいろいろな文字が土器に書かれるようになり、その保有率も高くなってくる。



次の7期(9世紀後半)にかけて、集落内に大きな変動がおきる。時期は少なくとも7期以前であるが、集落内を大きく区画するようにSD03がつくられる。この溝をつくる行為は、それまでとは異なった所有の意識、すなわち、土地を他と区別して私有するという意識が生まれ始めた可能性を示している。このことは、律令体制の根本である公民意識が失われ始めたことを意味しており、集落内での旧来の秩序が崩壊しはじめ、新たな秩序が生まれ始めたと考えられる。この傾向は7期になりはっきりしてくる。居住域は西側に収縮しながら移動し、東側部分は居住域として利用されなくなる(第378図)。その中で大型の住居(SB102、SB111)と小型の住居の差が明瞭に現れるようになる。このことは、村落内の構成員に格差が生まれてきたことを示している。また、墨書土器はそれまで多くの種類の文字が書かれたのに対して、この段階では「万」が何人もの書き手によって多量に書かれるようになる。このことは私的な結束があった証拠とも思われる。もう一つ特徴は、多量の緑釉陶器を持ち込み始めることである。その内容も一般の集落でよくみられる椀・皿のみでなく、双耳壺、三足盤、花文皿・椀などがあり特殊な様相を示している(第379図)。これらのことから7期になり、6期において動揺し始めた集落内が再編成され、その中から「富豪」が生まれ成長し、集落内に新たな秩序が生まれた可能性が大きい。その「富豪」は緑釉陶器など多量の動産を所有するとともに、朱墨のパレットを持つことから、公的職務につき官人としての性格を持ち、官衙との強い結び付きを持っていた可能性を指摘できる。こ



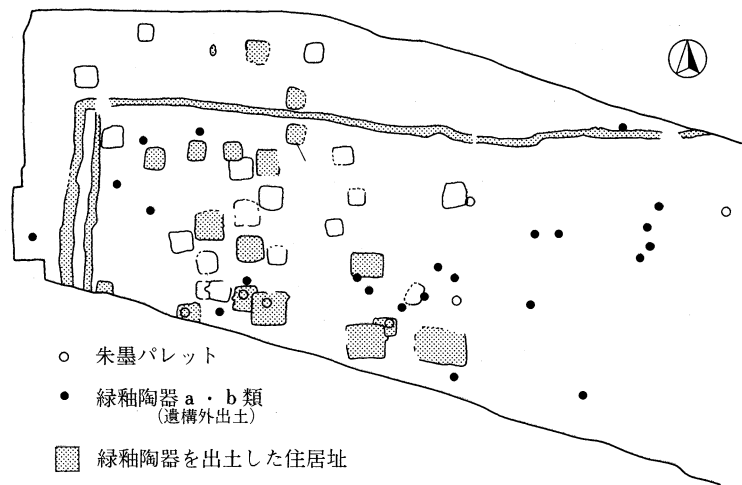
第378図 7～9期の遺構分布(1:1000)

の他「榛原(はいばら)」の墨書があり、地名と考えれば埴原に通じ、「埴原牧」との関連が考えられそうである。この他、牧との関連が考えられそうな資料は「蘇」の墨書があるが、他に積極的に牧との関連を考える資料はない。

周辺地域の動向をみると、やはり7期(9世紀後半)に大きな変化が起こっている。その一つは、それまで居住域として利用されなかった場所に集落が形成されることである(第395図)。例えば、俎原遺跡、内田原遺跡など高ボッチ山麓地帯へ集落がつくり始められるのもこの頃である。

これらの集落は、比較的規模の大きな集落である。このことは、周辺の開発が始められたことの現われと考えられるが、高ボッチ山麓には水田を大規模に経営する場所もなく、水田以外を開発を考える必要がある。また、これと正反対に、和手・中挾遺跡や高田遺跡、田川端遺跡などが居住域として利用されなくなるのもこの時期である。このように、9世紀後半から10世紀にかけての時期はこれまで開発の及ばなかった場所の新たな開発の段階であり、また開発の行き詰まりの段階といえる。次に、緑釉陶器の出土量と質から遺跡間の相違を比較してみると、その内容に大きな差がある。新しく成立した集落をはじめとして、旧くから続く集落(吉田向井遺跡・丘中学校遺跡)の中でも力関係に差が生まれ、それまでの古代的な秩序が田川流域一帯で崩れ始めたことを示している。このように新しい秩序の成立は、吉田川西遺跡だけの変化ではなく、周辺一帯の変化と連動の中で生み出された可能性が強い。また、集落の変化以外にも9世紀から10世紀は窯業生産体制、陶器などにみられる流通体制、墨書土器の消滅など様々な変化が起きる大きな変動の時期である。一方文献からみると9世紀後半の信濃では、仁和の大洪水(887年)に代表される自然災害が多発し、農村も荒廃し農民の逃亡が日常化する。その様な状況の中で、逃亡した農民を集めて開発を行う富豪層が新たに生まれてくると考えられている。吉田川西遺跡の「富豪」もその範疇に入るものと思われる。この「富豪」が影響を及ぼした範囲は、緑釉陶器の出土量を比較すると、田川流域といった広域にわたっていた可能性がある。このあたり一帯は『和名抄』に「良田郷」と記されている。従来この吉田一帯がその中心地ではないかとされてきた。今回その点が傍証されたわけであるが、これ以降も郷の中心としての地位は継続される。

7期で西側に居住域が収縮し集中したが、その傾向は8期(10世紀前半)、9期(10世紀中ごろ)と続く(第378図)。住居間の格差は、8期では大型住居が調査区外に移動した可能性が考えられ、次の9期では大型住居址(SB94)が存在し、大型住居を中心にその周りに小型の住居が分布する状況が続いている。このことは、7期でつくりだされた集落構造が維持され続けていることを示している。その中心となる「富豪」も勢力を維持・成長しており、その結果として、信濃において、現在まで調査された中では最有力者の墓と考えられるSK128がつくられたり、越州窯系の青磁や白磁が持ち込まれたりする。そのほか緑釉陶器が多量に持ち込まれたり、朱墨のパレットが使われたりする傾向も7~9期まで変わりが無い(第379図)。これらのことは、官衙などとの結び付きが引き続き強かったことを示している。また、このころより鉄器及び鍛冶関係の遺物の出土数が多くなり始める。このことは鉄器の保有量の増大と鍛冶が盛んに行われたことを示しており、「富豪」の成長を示すものと思われる。また、鉄製品にみられる器種(鎌、鉄鏃など)の変化は、集落



第379図 7~9期の遺構と朱墨パレット・緑釉陶器
輸入陶磁器の分布(1:1600)

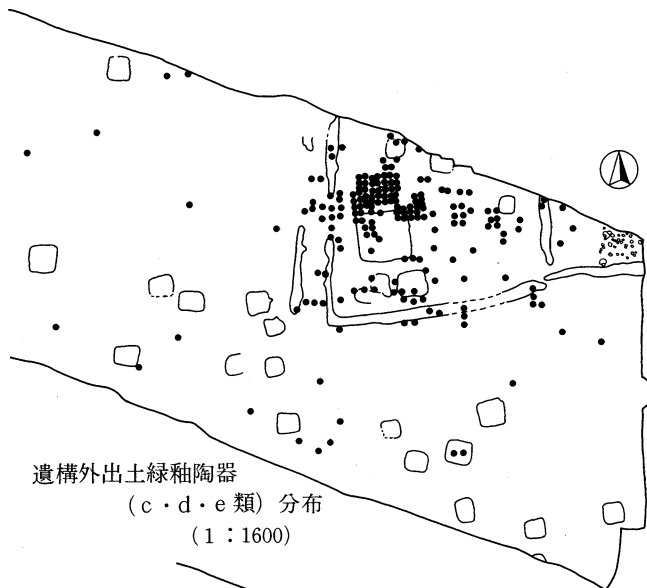
だけの問題ではなく、9世紀後半から10世紀の大きな社会的変動の一つの現れである。

10期(10世紀末)、11期(11世紀はじめ)になると居住域は再び東側に拡大し、東西2群に分かれるような構成になる。しかし、それまでであったような核になる部分は調査区内から消えてしまう。このことは、7期以来の「富豪」の存在自体を左右させるような変化が起こり、その影響で集落内部に動揺が起こったと思われる。しかし、緑釉陶器は持ち込み続けられており、有力な集落であったことには変わりがない。

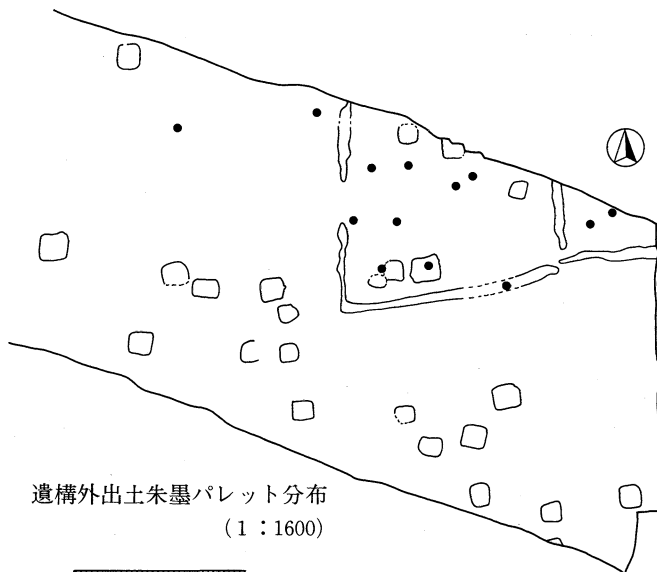
周辺地域をみると、9世紀後半から始まった山麓地帯の居住域としての利用は、9期ないし10期を最後に行われなくなる。これはそれらの開発の行き詰まりを示し、その生産基盤が弱く、経営に困難を伴っていたことを物語っている。このような状況の中で、田川流域では吉田川西遺跡の他は、8世紀以来続いている吉田向井遺跡、丘中学校遺跡のみとなってしまう、他に若干小規模な集落が残るのみになる。このように1000年前後は開発が行き詰まり、集落に変動が起こる時期と考えたい。

12期(11世紀中ごろ)になると、集落内部に再び大きな変化が起きる(第380図)。但し、この後に掲げる特徴のうち、いくつかはすでに11期にみられるものであり、変化はすでに前段階に起こった可能性がある。特徴としては、遺構の面では、二つの区画(一つは一辺45m)の存在、区画の中の住居の存在、西側区画のなかの大型住居(SB32)や食器捨て場(SX21、SB99)、鍛冶に関係した遺構(SK73)の存在、東側の区画の柱穴群の集中などをあげることができる。また、遺物の面からみると多量の緑釉陶器、多量の土器、多量の朱墨パレット、鉄鏃、馬具(その内の一点は魚子文の施された鞍で、平安京法住寺出土品に類例がある)の存在などをあげることができる。また、その出土状況は、緑釉陶器、朱墨パレットや土師器の食器が区画の中に集中していることが特徴的である。これらの事から次のように考えることができる。溝に囲まれた区画は調査区外に広がり方形になり、西側の溝の切れている部分はその区画内への出入口になると考えたい。さらに、方形区画の内部は溝(SD18)によりさらに二つの区画に分けられる。西側の区画をみると大型住居が存在し、その性格については第5章で示したように宴会場、あるいは祭祀場と考えられる。その南には鍛冶場(SK73付近)もあり、宴会で使用した食器を始末する捨て場(SX21)があったと想定できる(第380図)。東側の区画については調査部分が狭いが、柱穴群から大型の建物が存在していたと考えられる。また、方形区画の西側の、平行する溝に挟まれる部分は、南北にはしる道と考えたい。その道の西側には道に沿うように竪穴住居が配置されている。遺物の面からみると、方形区画の中と外ではその性格が大きく異なる。区画内はその出土状況から、緑釉陶器や多量の土器を使用、消費する場であり、朱墨のパレットを使用する空間と考えられる。このことから、この区画は公的な行事を行う空間と私宅を兼ねた「館」地割と考えられ、溝は防御的性格を持った「濠」と、考えることができる。このような大規模な「館」を構えることができたのは、かなり有力な「領主」と推定される。この館内の「領主」と竪穴住居の住人とは、その位置関係から二つのつながりを考えることができる。一つは区画内の住人であり、もう一つは区画外の住人である。前者の方が区画内に取り込まれていることから「領主」との結び付きが密接と思われ、後者の方がゆるやかと考えられる。しかし、大きくみれば、両者とも、当時の「下人」あるいは「家人」と呼ばれる人々であった可能性がある。

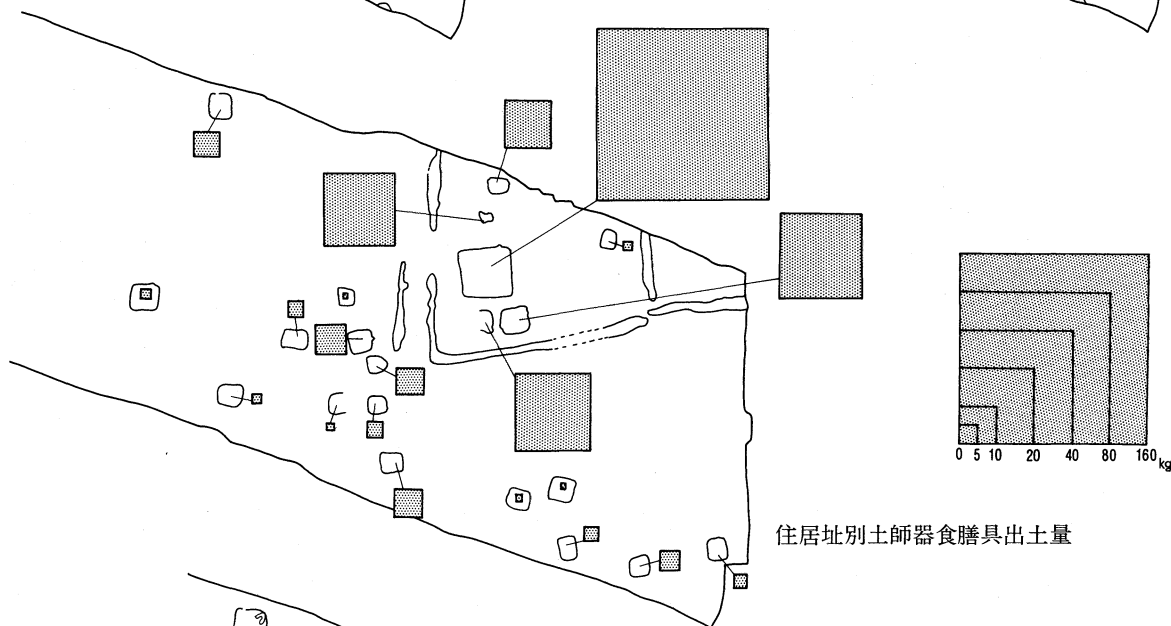
この「領主」の性格については、朱墨のパレットの存在から、官人である可能性も考えられる。また、多量の土器の消費、多量の使用についてであるが、日常生活で使用されたにしては多すぎ、儀式や宴会などで使われた可能性が強い。当時の儀式・宴会は、支配関係を確認する場として重要な意味を持っており、多量の土器の出土は、何回となくその儀式・宴会が行われた可能性を示している。その対象は吉田川西遺跡の内部だけではなく、ある程度の広範な地域に存在する集落を対象にしていたとも考えられる。また、緑釉陶器もその儀式の中で重要な位置を占めていたと思われ、その量の多さは「領主」の力の強さを示すとともに、「領主」がこのような儀式・宴会を主催する立場であったと思われる。この他、鉄鏃や馬具の存



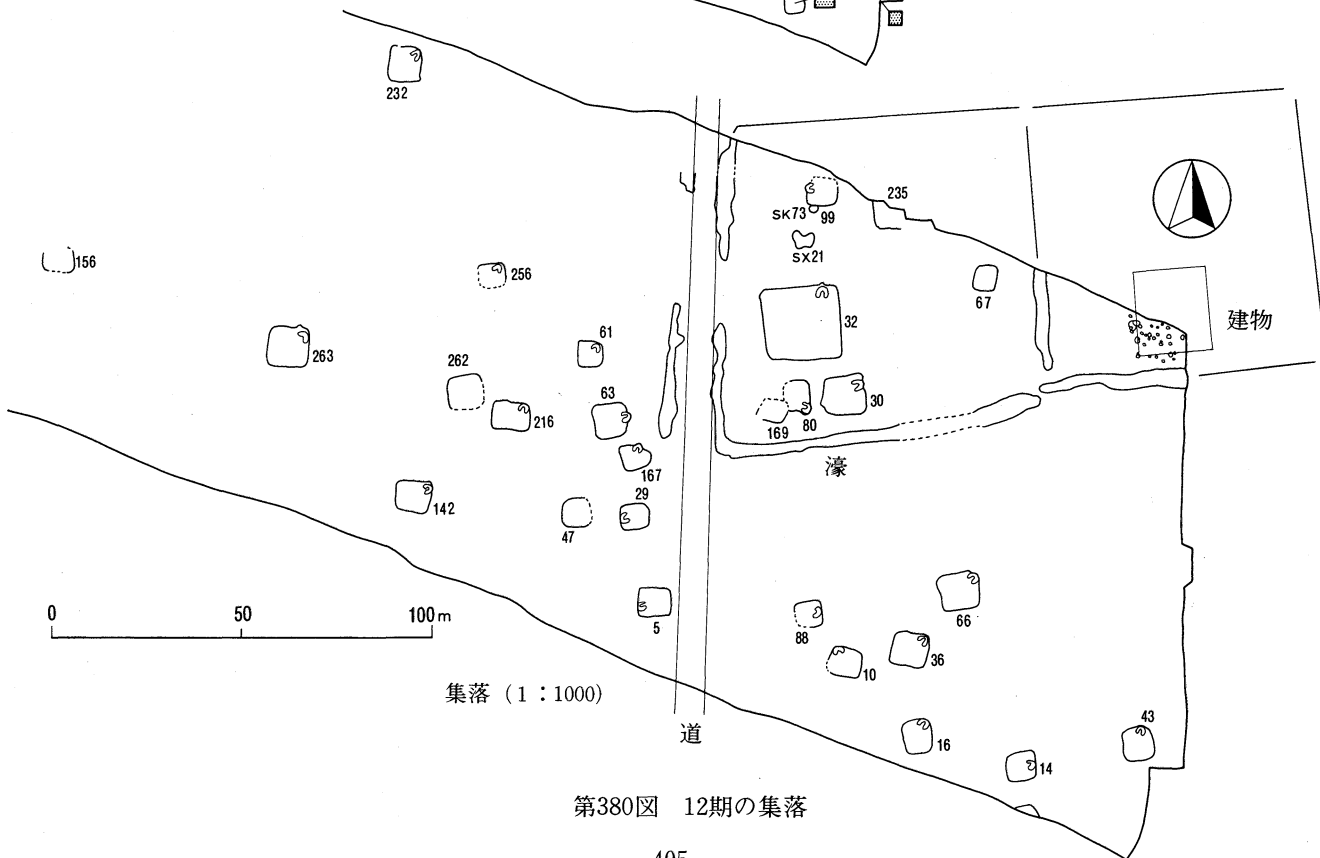
遺構外出土緑釉陶器
(c・d・e類)分布
(1:1600)



遺構外出土朱墨パレット分布
(1:1600)



住居址別土師器食膳具出土量



集落 (1:1000)

第380図 12期の集落

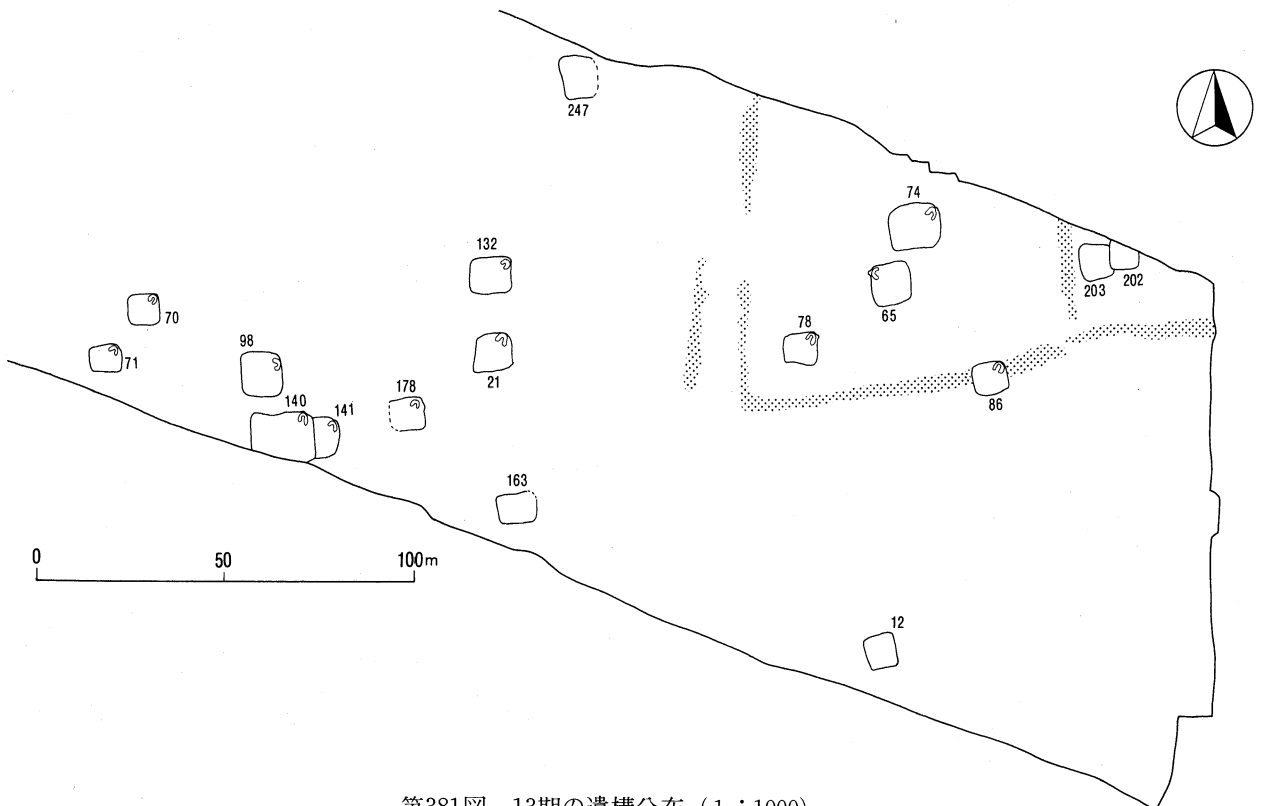
在は、「領主」が武装していたことを示している。鉄器の出土量もピークに達しており、鉄器も多数保有し、館内では「領主」の管理下に盛んに鍛冶が行われている。このようにみえてみると「領主」は、「公的な官人としての側面」と「私的な武士としての側面」の両面を持っていたことがわかる。また、多量の緑釉陶器や魚子文で飾った鞍などの所有事情から、直接的あるいは官衙を通して、中央の権門貴族との強い結びつきを予想させる。

7期の「富豪」とその性格を比較してみると、緑釉陶器や朱墨のパレットを持っている点では共通している。しかし、「濠」によって明確に集落内を区画し、他の竪穴住居と区別している点、武装をしている点などが異なる。このことから、両者の性格は「私的な側面」で性格が大きく違うと思われる。しかし両者の系譜がつながるかどうかはっきりしない。

周辺地域との関連について、比較できる遺跡は少ない。近隣の吉田向井遺跡と比べれば、特徴としてあげたいいくつかの点で質量ともに吉田川西遺跡は群を抜いて優勢である。このことは、吉田川西遺跡が、田川流域、すなわち「良田郷」の範囲内では最も力を持った集落で、「領主」はその頂点に立っていたことを示している。このことから、吉田向井遺跡などの周辺の集落は、独自の生産基盤を持ちながら、「領主」と関係を持っていたと考えられる。

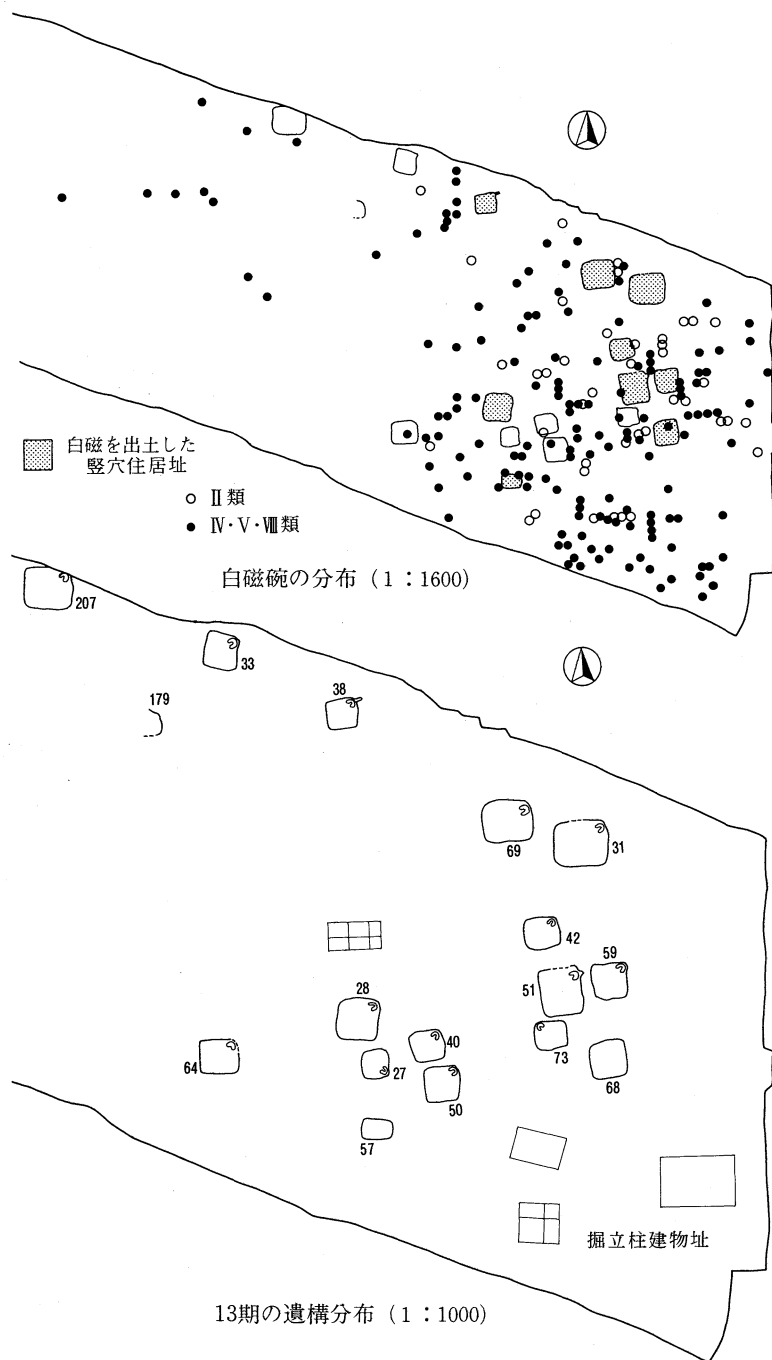
13期(11世紀後半)になると、前段階にあった溝により地割された部分がなくなってしまい、それを無視するかのように竪穴住居がつくられる(第381図)。この段階で、緑釉陶器の量や土器の量、鉄器の量も前段階と比べて極端に少なくなる。このことから、「領主」は移動してしまったか没落したとしか、現時点では考えることができない。居住域は東に徐々にかたまってきており、住居の配置は前段階にあった道をはさんで二群に分かれるようであるがはっきりしない。遺物の面ではこれとって特徴がみられない。

14期(12世紀前半)になると、再び変化が起きる。顕著なのは遺物の面である。それは大量の白磁(II、IV、V類の碗)の搬入である。この量は、近年資料が増えてきたとはいえ、信濃においてもまた東国においても群を抜いており、これらを搬入消費することのできる有力者が再び集落内に存在したことを示している。遺



第381図 13期の遺構分布(1:1000)

構の面からみると竪穴住居と柱穴群があり、それを掘立柱建物と考えると二種類の建物が集落内に存在する(第382図)。その配置は竪穴住居が南側に集中し、その東側に掘立柱建物が配置されるというかたちになる。ここでは、掘立柱建물에居住する有力者を「領主」、竪穴住居の居住者を「下人」と想定しておきたい。12期の「領主」と比較してみると、前者が緑釉陶器を持ち込むのに対して後者は白磁を持ち込んでおり、共に当時としては高級品を多量に持ち込むという点は、共通する。しかし、前者が溝によって区画された「館」を持つのに対し、後者は明確に区画された屋敷地を持っておらず、前者の方が有力であったと考えられる。また、前者が多量の土器の消費を行うような儀式・宴会を主催していたのに対して、後者にはそのような行為がみられないことなどから、その儀式・宴会の形式が変わったとすれば別であるが、その影響が及ぶ地域なども前者と比較すれば狭いと考えられる。またその出自であるが、12期の「領主」の屋敷地は一度途絶えており、直接的に系譜はつながらない可能性が強い。



第382図 白磁碗の分布と14期の遺構分布

周辺地域との比較が必要であるが、松本平においては同時期の資料が少ないため、吉田川西遺跡の資料がどの様に評価できるか判断できない。しかし、12世紀前半に竪穴住居を主体とする集落がなくなるのは、松本平で普遍的であることは明らかである。このことは家屋構造の大きな変化の時期であることを示している(註1)。さらに土器生産・流通体制、その消費構造などにも変化が起こっており、一つの歴史的画期と考えられる。

14期の後、12世紀後半に調査区中央に南北に大きな河川(NR01)が流れるようになる。流れが長時間にわたったものか、短時間であったかはわからないが、ここで環境の変化が起きる。これ以降地下水の動きが変わったらしく、II層の上面に酸化鉄の集積層が形成される。

13世紀前半は、遺物はあるが遺構がはっきりしない状況となる。遺物の内容からすると、多量の青磁を中心とした輸入陶磁器が出土しており、かなりの有力者がいた可能性がある。それら遺物の分布は14期に掘立柱建物の存在した部分から南に集中しており、前段階の有力者の系譜が残っていた可能性が強い。た

だし、その中心部は調査区の南側に移動したと考えられる。

13世紀後半から14世紀前半になると、前段階までの分布範囲に遺物はみられなくなり、西側に移る。遺構ははっきりしないが、遺物の特徴は日常生活具が多量に存在する点である。居住域はさらに南側に考えられ、この部分はゴミ捨場と考えられる。遺物の内容をみる限り、多量の輸入陶磁器が認められ、これを所有した有力者の存在の可能性はある。

14世紀後半から15世紀前半にかけては、遺物についても遺構についてもはっきりせず、今回の調査部分は居住域として利用されなくなる。

15世紀後半になると、再び遺構が認められるようになる。それは土坑群と建物址の一部と考えられる遺構で、再び居住域として利用され始めたことも考えられる。ここで注意しなければならないことは、この段階で近世まで続く地割が形成されたことである。これは新たな秩序の成立と考えられる。

16世紀から17世紀にかけて、溝に囲まれた屋敷地が形成されるが、この段階に再び始まる開発の主体者であった可能性が強い。その性格は、この地に拠点をもつ地侍クラスと考えたい。

17世紀後半になると溝は失われるが、この部分は屋敷地として維持されたと考えられる。おそらく、前代の地侍が16世紀末の兵農分離の段階で武士化せず、農民となって在地に残ったものにとらえておきたい。しかし、農民化したとしても本百姓以上であったと思われる。また、居住域はやや北側に移った可能性がある。建物構造や配置などについては不明ながら、遺物の面に村役人クラスの特徴をみることができる。それは主に陶磁器の面で、一般に瀬戸・美濃系陶器が主体を占める地域であるのに、当地方では珍しい肥前系陶磁器を持っている点がまずあげられる。次に器種構成で、鉢や大皿を持っている点が特徴としてあげられ、それらは大規模な接客のために必要な道具であり、そのような必要があるのは庄屋・村役人クラスしか考えられない。その屋敷地も、遺物の分布と接合関係から、広がったものと推定される。

18世紀にも引続き庄屋クラスの百姓の屋敷地は維持され続け、調査区内を整地し建物が建てられる。礎石をもつ母屋と、その周囲に蔵あるいは作業小屋的な建物が配置される。さらに井戸が造られる。遺物の点からは対比する他の遺跡の資料がないため評価は難しい。

19世紀の中頃になり、この部分の屋敷はなくなり、今回調査した西側に移動してしまい、その場所は畑地として利用されはじめる。現在でも家は西側に残っており、旧屋敷跡の土地も所有していた。しかし、移動した理由は明らかでない。

以上今回調査した成果をもとに、吉田川西遺跡の歴史を考えてきた。断っておかなければならないが、これまでふれなかった問題がある。古代に関しては、一つは「覚志駅」の問題であり、二つめは牧との関連である。この二つの点については当然考慮すべきではあったが、直接結びつくような資料を調査の中で得ることができなかつたので、ほとんどふれなかつた。なお、近世文献資料と考古学的成果の総合的検討はなされていない。極めて興味深い問題であるが、今後の研究に期待したい面でもある。

(註1) 今回、14期にみられる竪穴住居址と掘立柱建物址の混在する状況を階層差とした。しかし、それを時間差としてとらえ、竪穴住居から掘立柱建物へという家屋構造の変化とみることも可能であろう。

第9章 結語

今回の調査で得られた成果は、第7・8章で述べたとおりであるが、あえて特記すべき点をあげるとすれば、現在その解明の遅れている古代から中世、特にこれの転換期に当たる9～12世紀にかけての状況が、集落構成や土器類、金属製品を中心とした遺物のあり方を通し、わずかではあるが明らかにできたことは、大きな成果であると判断している。今後、この時期に該当する松本市内関係遺跡報告書が刊行されるなかで、松本平の歴史が考古学を通して明らかにされる部分も少なくないものと期待している。

さきに発刊した「(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書1」の中に、調査に対するいくつかの課題が掲げられている。それらについて、今回の調査がどの程度の応えになったのかは、大方の評価を待つとしても、関係者の立場から2、3の点についてふれておきたい。

第一の地域史の再構成について、第8章がある程度その役割を果たしているつもりである。しかしながら、遺構や遺物類が想像を越えた質量とはいえ、一遺跡の語りかける情報量には限界があり、今後の地域史研究に期待したい。

第二の、調査の成果がどの程度まで社会一般に還元できたかという点については、現地説明会や遺物展示会の機会をとらえて行う中で、一般の方々への地域史資料公開を計ってきた。また、膨大な資料を整理して本書を編むに当たり、簡略と平易化に努めた積りではあるが、内容自体はともすると研究者向けという性格の強い点を反省する必要がある。

第三は、報告書に用いた遺物類や記録図面類など基本資料の保管、公開についてである。遺物類については、注記から復元作業に至るまで、今後の扱いを念頭において整理をすすめたものの、事後に予想される多様な照会等、活用への対応が課題となる。

おわりに、本遺跡のような集落遺跡の調査が今後も予想されるが、今回の反省を踏まえて課題を提示しておきたい。まず第一に、限られた期間と予算制約の中で調査を行うためには、「集落の解明」といった、明確かつ具体的な課題を持ち続ける必要がある。そのための調査計画を早目に立案し、課題を絞ることである。これによって課題解明に要する記録の見落としが少なくなるという利点が期待できる。この点、今回の調査では、必要とする情報が少なかったり、計画立案の際の課題設定と調査方法の検討が不備であったことを痛感している。第二に、調査課題の一つとして、この遺跡を拓きここを本拠とした人々が、この土地といかに係わってきたのかを、大きく、また、広くとらえるような視点を明確に設定する必要がある。そういった中で遺跡全体、あるいは遺跡の中の特定な空間が、ここを生活舞台として選んだ当時の人々の諸活動の中で、どんな意味を持った場所であったのかを復元され、ひいては、必然的に地域史の再構成に結び付いていくものと思われる。

本書刊行をもって、吉田川西遺跡の記録保存は完了する。ここで扱った資料提示が、これから評価を受けるために出発したと思うとき、身が引きしめる思いである。これまでに御協力、御支援いただいた関係各位、諸団体に深い感謝の意を表わし、さらに本書が地域の歴史を再構成する上で有意義に活用されることを念願して結語としたい。

執筆分担

市川隆之 第3章、第6章、第7章第5節、
金原 正 第2章第2節、第3節、第5章第1節2-2)、第2節2-4)、第3節3-ア、第7章第4節
小松 望 第5章第2節2-2)、3) 第7章第2節1
寺内隆夫 第4章、第5章第1節2-1)一ア、第3節1、4、第7章第1節
原 明芳 第1章、第2章第1節、第5章第1節1、2-1)一イ、一3)、一4)、第2節1、2-1)、
一5)、一6)、第3節2、3一イ、第7章第1節、第8章、第9章、
伊藤 董(依頼執筆) 第7章第2節2

その他

遺物写真撮影 岡沢秀紀、西山克己
石質鑑定 小松宏昭、小口 徹
金属器保存処理 小松 望、小林 至
編集 原 明芳

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3

中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 3

— 塩尻市内その2 —

吉田川西遺跡

本文編

発行 平成元年3月31日発行
発行者 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター
印刷 電算印刷株式会社

